
Dragon's Journey < ドラゴズ・ジャーニー >

ハモニカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dragon's Journey <ドラゴンズ・ジャーニー>

【Nコード】

N4815U

【作者名】

ハモニカ

【あらすじ】

そこは、龍が生態系の頂点に在る世界。ヒトと龍が共存こそしているが、共生はしていない世界。龍は決してヒトの世界に足を踏み入れず、ヒトは龍を恐れて近寄らない、そんな世界。

龍だった『少女』は自らを元の姿に戻すためにヒトの世界へと足を踏み入れ、青年と出会う。

「はえ！？ あたしの身体どうなってるの？」「すべては神のみぞ

知るのです」「だ、誰ですかあなた!？」

主人公最強を目指しますです(ここ大事)。成長型最強キャラになればいいかなあと思っております。

複雑怪奇にならないよう頑張ります

7月6日 タイトルを英語化いたしました

注意：最近(一応)主人公格の男が機能してませんww

追記：11月現在、最近主人公が最強系ではないのではないかと
思い始めております

プロローグ(前書き)

始まるぞう！

プロローグ

長いこと、眠っていたような気がする。

昨日の夜、眠りにつき、今日の朝、目覚めただけなのに、なぜか『彼女』はそう感じた。

視界は狭く、あれだけ狭く感じていた我が家の天井が物凄く高く感じられる。

大きく体を伸ばそうとして身体の異変に気が付く。

『彼女』の身体は真っ白だった。

透き通るほど白く、細い手が視界に映る。

だが、それは『彼女』の見知った自分の身体ではなかった。

『彼女』の身体は黒かったはずだ。そう、漆黒という言葉が似合う、どこまでも深い黒だったはずだ。腕はたくましく、こんなか弱い、華奢な体つきではなかった。

そして何より、こんなに小さくなかったはずだ。

訳が分からない、混沌とした考えが『彼女』の意識を支配する。自らの身体に触れて、その柔らかい触感に愕然とする。

これではまるで……、

いつも食べる餌のよう……………。

近くにある水飲み場に向かおうと立ち上がり、その視界の低さに驚かされる。『彼女』は我が家であるこの洞窟が狭く感じるほどの高さがあった。いつも首をもたげてなければ、この寝床には入らなかつた。別段外で寝ていても構わなかつたのだが、父がそれを許さなかつた。

それはともかく、立って自らの足を見る。細く、透き通るような白い足がすらりと伸びている。だが、今の『彼女』には絶望しか与えない。

自分の身体なのに、自分の見知った身体じゃない。それがどれだけ『彼女』の心を引き裂いたかは、想像に難くない。

慣れない自らの身体でヨタヨタと歩き出すと、洞窟の出口に近い水飲み場に駆け寄る。山の頂上付近にあるこの洞窟にどうして水が湧いているのか考えたことはなかつたが、さらさらと流れる水が今は『彼女』の唯一の頼みの綱だつた。

どうか、悪い夢であつてくれ……………。

『彼女』は心の中で叫びながら、水飲み場の水を覗き込み、それが夢などではないことに気づく。

水に映つたのは、鋭い牙でも、固い鱗に覆われた顔でもなく、黒く長い髪を伸ばして、真っ白な肌を持った、少女だつた。

それを見て、『彼女』はその場にうずくまつた。

ありえない、ありえないあり得ない有り得ないアリ
エナイ……………。

だが、現実は何一つ変わらない。

『彼女』は『ヒト』になったのだ。

森の中を、細い道が通っている。

その部分だけきれいに木々が切り倒され、大きな馬車が通るのに差
支えが無い程度の道が整備されている。

その中を、1台の馬車がゆっくりと進んでいる。

荷台は白い布で覆われており、2頭の馬がその馬車を曳ひいている。その馬車の前を数人の人影が歩いている。

茶色いマントをかぶり、その顔を窺い知ることはできないが、マントの上からでも、先頭に行く人影が巨大な武器をマントの下に背負っていることは一目瞭然であった。持ち手がマントを持ち上げて、前が少しはだけている為、その恰好はかろうじて見ることが出来る。

ガチャガチャと、金属の擦れる音が響き、彼らが鎧を着込んでいることが分かる。

そして、その鎧が赤を基調とする装飾を施されていることが、先頭に行く男から知ることが出来た。

「暑い……」

先頭に行く人影、声から男だと分かったが、まだ若い声がして、背後の人影がため息をついた。

「へばるんじゃねえぞ？ まだここはエオリアブルグの領内だぞ」

年季の入った、中年の男がマントの中から言うと、先頭に行く青年が背中を丸めて足を止めた。

「行きは馬車だったのに、どうして帰りは歩かにならないんだよ……」

「仕方なかるうに。ここ最近、旅人が襲われる事件が相次いでいるからな、相手が相手だ、俺たちが休むわけにはいかんだろうが」

「それはそうなんだが……、このマントどうにかならないのか？」

釈然としない青年は自らが羽織るマントを指差して忌々しそうに言った。

中年の男が呆れた様子で腕を組むと、ため息混じりに口を開く。

「俺たちの格好じゃあ、目立ってしょうがないだろうが。行きは馬車に乗っていたから気にしないですんだが、森の中で真つ赤な鎧じやあ、山賊に金持ちだつて宣伝しているようなもんだぞ？」

「この森に山賊がいたのか……。食われるんじゃないか？」

「例え話だよ。とにかく、森にいる『あいつら』に気づかれないためには、目立たないようにするしかねえ。見つかったら戦うしかないよにな」

『あいつら』と言う時、中年の声のトーンが一瞬下がった。

背中を情けなく曲げていた青年も一瞬纏う空気が張り詰め、自然と姿勢が正されていく。

「はあ、分かったよ……。さつさと城に帰って上手い飯が食いたいもんだ……」

青年は我が家を愛しんで空を見上げる。

森の木々の合間から見える空は雲一つなく澄み渡っていた。

プロローグ（後書き）

プロローグでこんなことを言うのもなんですが、

終わる気がしないZE！

え？ そついうもん？

良かった……。

ファンタジー物は1度書いてみたかったのですが、周りのみなさんとの文才の差から手を出そうとはしていなかったのですが、この度、無謀にも手を出してしまいました。

いつ終わるかも、続けることが出来るのかも、お先真っ暗な作者であります、生暖かく見守っていただけると幸いです。

第1話 出会いはいつも突然！（前書き）

サブタイトルはほとんど関係ありません。

ですが、こう言うほかありません、だってそうなんだもん！

第1話 出会いはいつも突然！

「ここまでで良いよ」

道無き道、森の生き物だけが分かるであろう深い森の中で少女はそう言った。言葉は片言で、どこか言い慣れていないような感覚があるが、その言葉には強い決意の念が滲んでいた。

<本当に、良いのだな？>

背後で木が軋む音がする。

少女が振り返ると、彼女のように白い肌、いや白い鱗を持つ巨大な影が少女を見つめていた。巨大な翼を器用に折りたたんで、少女を優しく見つめる目が2つ、影の中で蠢いている。

「これ以上、父上も外に出るわけにはいかないでしょう？ 私は大丈夫だから」

少女がそう言うと、影は少し戸惑ったようにその巨体を動かし、そつと顔を近寄らせる。

<おお、我が娘イ　　イア。我はいつか、いつかお前が元の姿となり、我々の所に帰ってくる時を待っているぞ。その身の呪いを解き、あの優雅なお前と再び空を飛べる日を、我は待っているぞ>

少女の使う言葉ではない、常人には聞きにしか聞こえないような言葉で影が言う。

少女は影の顔をそつと手で撫で、その巨大な首に抱き着いてその感触を身体に覚え込ませようとするかのように身体を押し付ける。

「私も、また空を飛びたい……。父上や、皆と、あの空を……」
<今のお前は、我が仲間の中には置いておけん事が残念でならぬ。皆、お前を慕っておるし、その姿であつてもお前であることには違いないのだ。なのに、どうして旅立つ？>

影も、少女を愛おしそうに折りたたんでいた翼でその身体を覆う。

「『ヒト』がいてはいけない場所なのよ、私たちの住む場所は。たとえ、私があの場合にいても、戻れる保証もない。なら、私は自分で元に戻る方法を探す」
<寂しくなるな……>

影が翼を広げ、少女はその手を首から離し、後ずさつて距離を取る。

「私もよ、父上。だけど、これは一時的なものよ、きっと。たとえ10年、100年経とうとも、私は皆の元に帰る。だから、今は『行ってきます』とだけ、言っておく」
<では、私も『さらば』とは言うまい。いつか再び会い見える時まで、……ヒトはこういつ時なんと言つのだろつな>
「ただ、『行ってらっしゃい』、と」
<ならば『行ってらっしゃい』とだけ。我が娘よ、龍の守りがあらんことを>

影が思い切り翼を広げる。突風で木々がしなり、白い影は空高く飛び上がった。そして少女はその姿が木々の間に消え、見えなくなるまでその姿を見送った。

「きつと、戻ります、父上」

少女は目を落として、辺りを見渡す。

いつもなら、空を飛んで簡単に行けるはずの場所も、今の少女の身体ではあまりにも遠く、ここまで来るのにも3日かかった。本来なら数時間で行けるはずの場所なのだが、今ほど元の身体を懐かしく思うことはないだろう。

「さて、と。とりあえず、『友』の場所へ行かないと……、って今の姿じゃ分からないかな？」

倒木の乗り越え、時折、背後から近寄ってくる猛獣に視線を向けては追い返し、木々の隙間から見える太陽だけを頼りに進んでいく。飛び跳ねる度に、美しい黒髪が風になびいて後ろへと流れていく。

ふと、クゥツという可愛い音が少女のお腹から聞こえ、少女は腹に手をやった。

「そういえば、この身体になってから何も食べてなかったか……」

キョロキョロと辺りを見渡し、手近な木によじ登って赤い木の実をむしってその場で口に放り込んでみる。前の身体ならば、まず食べないだろう物、栄養価も低く、涎も垂れない小さな木の実だったはずが、今は不思議と当たり前前のように食べることができた。完全に、元の身体とは作りが変わり、食べ物好みまで変わってしまったようだ。

「……甘い、ってというのは、こういうのを言うのかな」

『友』がよく、少女にくれた木の実や、果物といった食べ物。彼女にしてみれば、そんな物よりも大型の草食動物とか、いつそのこと『友』の身体でもいいのだが、そっちの方が好みにあっていた。

だが、今ではそんなものを食べる余裕も、動物を捕まえることもできない。

今の少女の小さな身体では、むしろこの森では狩られる側になってしまう。そこいらの猛獣は少女と目が合った時点で彼女が何者なのか理解して逃げ去るが、いちいちそんなことをやるのもいい加減疲れてきた。

「父上の姿を見られるわけにはいかなかったけれど、もう少しついで来てもらえばよかった……」

木から飛び降り、両足で着地すると、木の実を口に頬張りながら先に進んでいく。

「……………迷った」

少女は森の中で頭を抱えていた。

上から眺めていた景色と、実際にその中を歩いてみるのでは、あまりにも勝手が違いすぎたようだ。まっすぐ進んでいるつもりでも、いつの間にか同じ場所に戻ってきてしまっていたり、思った通りに

進むことができなかった。

『友』がここに立ち入らない理由が少女には今、ようやく分かったような気がした。

「これじゃあ、日のあるうちにたどり着けないかも……」

そう自分で言うと、大きなため息をついた。

なにしろ、いくら木の実で空腹は凌げても、眠気には勝てる気がしない。前の身体の時とは、寝ていても周りの気配は手に取る様に分かった。だが、今の身体でもそうとは限らない。しかも、夜は猛獣の動きが活発になるため、危険だ。暗いが為に少女が何者であるか気が付く間もなく襲いかかってくるに違いない。そうなれば、無防備な彼女はどうしようもない。

「鱗が欲しい……」

欲したのは、自らが身に纏っていた、いかなる牙も、爪も、通さない鱗。

無類の硬さを誇り、彼女を彼女たらしめていた黒い鎧。

それを願った瞬間、何かが擦れる音が腕から響いた。

「えっ……?」

見れば、腕が黒く変色していた。

細かい鱗がびっしりと腕を覆い、関節を動かすたびに鱗が擦れて軋む音が聞こえる。少女はその腕をしげしげと見つめると、腕を振り、近くにあった木に目掛けてその手を思い切り突き出した。

「はあっ！！」

ドゴンツ、というくぐもった音が聞こえ、腕が木にめり込んだ。勢いだけで突き出した腕が肘の辺りまで木にめり込んでいた。だが、手は自由に動く。身体だけ木を回り込んで反対側を見ると、腕が木を貫通して木から生えていた。

木から腕を引き抜き、元に戻る様に念じてみると、腕が先ほどまでの細い、白い腕に戻った。

「これなら、なんとかなる、かな？」

手を開いたり閉じたりしてみる。

どうやら、この身体にも少女のかつての姿が反映されるようで、強く念じれば彼女のかつての鎧を作り出すことが出来るようだ。

それを確認すると、とりあえず先ほどから石や枝を踏んで痛かった足元を黒い鱗で覆ってみる。痛みがすうっと引いて強く地面に押し付けても痛みを伴わなくなったのを見て、少女は少し笑みを浮かべた。

「少し、重いけど」

足が少し重くなったが、まったく問題にならない程度だ。

「それじゃあ、腹ごしらえしないとね……」

日が傾き始めた頃、少女は無防備な姿をしながら森を歩き、彼女に襲ってくるであろう猛獣を求めて歩き出した。

「ん？」

「どうした、ジーン」

不意に振り返った青年は、中年の男に呼ばれるが、それを手で制して何かに聞き耳を立てる。そして鼻を利かすと立ち上がった。茶色く、短く切りそろえられた前髪は、目にかかるかからないかのところで止まっており、青い目がキョロキョロと周囲を見渡す。

「おいおい、飯の時間になんだったんだ」

「血の臭いがした」

「なにい？」

ジーンと呼ばれた青年は、手に持っていた火の通った肉を置くと、近くの木に立てかけておいた剣を手に取り、背中に背負って手甲を付けて森へと歩き出した。

「ジャック、火を消してくれ。フィア、起きてくれ」

馬車の中を覗き、中で寝ていた女性に声をかけると、中から眠たそうなうめき声が聞こえて、もぞもぞと女性、フィアが起き上がった。

「なに、怪我でもしたの？」

「近くで血が流れている。様子を見に行く」

「はいはい〜」

「ジャック、行こう」

「へいへい」

ジャックと呼ばれた中年の男が、食い損ねた肉を残念そうに見つめながら、松明に火を移してから焚火の火を足でもみ消す。そして横に置いていた剣を背負うとジーンの元にやって来た。

馬車の中でファイアがもぞもぞと動く音が聞こえ、ファイアが着替えて馬車から降りてきた。エメラルドグリーンの髪が月の光を反射して妖しく光り輝いているようで幻想的な女性は、鎧を身に着けずに2人の前に立った。

逆に、ジーンとジャックは鎧を着ている。どこを見ても共通点はせいぜい赤い装飾だけだが、唯一全員が同じ紋章を肩につけていた。

龍を剣で突き刺す様子を描いた紋章が月明かりの中でも確認することができ、ジーンは2人を確認して森の中に分け入った。

「血の匂いを嗅ぎ分けるため、相変わらず驚異的な鼻だな」

「鼻だけ利いたって意味ないさ。だけど、嫌な臭いだ……、これは猛獣の血の臭いだ」

「猛獣？ 共食いでもしてるんじゃないかしら」

ファイアが「そんなことのために起こしたの？」と、不満げにジーンを見つめるが、ジーンは小さく首を振って倒木を飛び越える。

「共食いなら俺だって動かないさ。だが、これは違う。物凄い量の血が流れている」

「誰かが、狩りでもしてんのか？」

「あるいは、『何かがある』」

「っ！ そいつはまさか……」

ジャックが驚愕して言葉を詰まらせる。

「ここは公道に近い。下手をすると旅人にも被害が出る可能性がある」

「危険の芽は早いうちに摘んでおかないと、ってわけね」

「くっそ、せつかくいい気分でお国に帰れると思ってたのによっ！」

ジャックが天を仰ぐが、ジーンも気持ちは同じだった。だが、それ以上に彼らの使命が、3人を突き動かした。

「うっ、あたしも分かるわ。すごい臭い」

ファイアが血の臭いに顔をしかめ、口元を手で覆う。

「近いぞ」

「おう、ってうわっ!？」

ジャックが返事をしようとして何かに足を取られてずっこけた。慌ててジーンとファイアが足を止めてジャックに駆け寄り、その足元にあった物を見て目を見開いた。

「いてて、ってなんじゃこりゃあ!？」

ジャックが足を取られたのは巨大な腕だった。大型の猛獣の腕”だけ”がその場に落ちていた。それを拾い上げてジーンはその切り口を観察する。

「刃物じゃない。引きちぎったんだ」

「おいおい、マジでやばいんじゃないか？ その腕からして、奴さやつんは3メートルはあるぞ」

「夜中に戦う相手じゃないけど、今やらないと今度は何時来るか分からないわ」

腕は強引に引きちぎられたような傷跡がくつきりと残されていた。ジーンは腕を茂みに投げ込んで背中剣を抜いて臨戦態勢に入った。ジャックも剣を抜き、辺りを見渡しながらゆっくりと歩を進める。

「ジャック、明かりを」

ジーンはジャックから松明を受け取り、目の前の暗闇を照らし、足元を見て歩を止めた。松明を地面に近づけると、そこには大量の血が飛び散り、地面に染み込んで赤黒く地面を変色させていた。

「ファイア、戦いになったら掩護を頼むぞ」

「任せて。3人で戦える相手だといいいけど」

その時、強烈な血の臭いが3人の鼻を襲った。木々がなぎ倒され、その折れた部分には血肉がこびり付いている。

「さすがの俺でも、分かる。なんて臭いだ……」

3人の視界が広がる。

木々がなぎ倒された場所を辿っていくと、開けた窪地に出た。広くて先が見通せないくらいの闇に覆われているが、その窪地から血の臭いが発せられていることは嫌と言っただけで分かる。

「ファイア、明かりを」
「ええ」

ファイアが何事か小さく呟くと、ジーンの持っていた松明がその炎の勢いを増した。ジーンはそれを暗闇目掛けて投げ込み、松明が地面を転がる。

「焰ほむいよ」

松明が火の勢いを増し、松明から飛び火して炎が窪地全体を照らし出す。

「これは……」

照らし出された光景を見て、3人は絶句した。

死体、死体に折り重なるように更なる死体が積み重ねられ、屍の山を築いていた。腕を千切られ、首をもぎ取られ、内臓を引き出され、累々と築かれた屍の下には血の海が広がり、わずかに月明かりを反射させている。

「酷い、いくら猛獣だからって……」

「相手が猛獣以上だったら、これくらい当たり前だろうが……」

ジーンの後ろの2人も言葉を失っている。

屍のほとんどは大型の夜行性肉食動物で、夜中に群れで獲物を追う習性のある奴らだ。歴戦の戦士でも1人では絶対に戦いたくない、と口を揃えて言う獰猛な猛獣が無残な姿でそこに横たわっていたのだ。

「すつ……」
「ん？」

ジーンが何かを聞いて、そちらに振り向いた。屍の山を回り込むと、近くの木に寄りかかる影があった。ジーンが目を凝らしてその姿を見極めようとした瞬間、後頭部に強烈な痛みが走って地面に叩き付けられた。

「痛ッ！ な、なにすんだ、ファイア！！」

「うるさい！ 男2人は後ろ向いてなさい！！」

「はあ！？」

訳が分からないと、ファイアの顔を見上げると、もう1発食らった。ジャックが悶絶するジーンを抱き起して、先ほどの影とは逆の方向を向かせると、小声で言ってきた。

「見たら殺されるぞ」

「なんで」

「いいから」

ファイアが背後で何かを呟いているのが聞こえてくる。どうやら、治癒魔法が何かを使っているようだ。その後、布が擦れる音が聞こえて、2人に背後から静かに近寄ってきた。2人には死神の足音にか聞こえなかったのは、また別のお話。

「もう良いわよ」

「まったく、いったいなに、が……？」

振り向いてファイアを見ると、ファイアが何かを抱えている。ファイアが羽織っていた布に巻かれていて、ファイアがゆっくりと布を捲ると、

そこにはジーンと同じか、少し若い程度の少女が収まっていた。見れば布から白い足がはみ出している。

「な、なんでこんなところに……って血だらけじゃないか！」

顔を見て驚いた。

暗闇の中、ファイアの灯した炎が少女の顔を浮かび上がらせる。穏やかな寝息を立てている少女は、その顔を血で染めていた。ジーンは慌ててファイアに治療を頼もうとするが、すでに治したと言われて安堵のため息をついた。

「だけど、この子自身の怪我はほとんどなかったのよ。ほとんどが、こいつらの血よ」

そう言っつてファイアは屍の山を指差した。

「それじゃあ、この子がこれをやったのか？」

ジャックがずっと身を乗り出してくる。

確かに、この大量の死骸をこの少女が積み上げたのなら、いろんな意味で彼女には聞かねばならないことが増える。

「とにかく、私たちの馬車に戻りましょう。この子が起きたら詳しい事情を聞きましょう？」

「そうだな、もし彼女じゃなかったら、俺たちもあまり街道から離れるのは危険だ」

「ええ、これだけの事をやれる生物など、限られているしね」

ファイアが真剣な表情で言うと、抱える少女をしっかりと持ち上げて今まで通ってきた道を戻っていった。

「ジーン、俺たちも帰ろう」

ジャックがその後を追おうとし、振り返ってジーンに呼びかける。

ジーンは死骸の山の横、おそらく少女が倒れていたであろう辺りにしやがみ込んで地面に出来た無数の抉られた後をしげしげと見つめていた。

「5本足……、相当鋭いな……」

ジーンはポツリと咳くと立ち上がり、ジャックのいる所まで戻るとファイアの後を追って少し早歩きで歩き出した。

「5本だ、『奴ら』じゃない……」

歩きながらジーンはあまり響かないように声を小さくしてジャックに話しかけた。

ただでさえ夜は音が響きやすい。

おまけに『奴ら』の主食が近くに積み上げられているのだから、危険な事は明らかだ。

「『奴ら』じゃなければ、いったい……」

「それも含めて、あの子に話を聞かないとな」

第1話 出会いはいつも突然！（後書き）

怖い……

周りの反応が怖い……

はっ！

チキンになったまま帰ってこれなくなるかと思いました……

え、そんなわけで始まりました。

ゆっくり、ゆっくりとやりたいと思います。

誤字脱字報告や、ご意見、感想など頂けると感謝の極みなのです。

メンタルがE-^{マイナス}の作者ですが、どうぞよろしくなのです。

補足ですが、よくある設定として龍の言葉の中には人間が発音できない、聞き取れない物があります。　はそういっ感じですので

……

あと、人間以外の台詞は< . . . >を使います。

主人公は「今」人間なので普通のカッコを使います。

第2話 ジェネレーションギャップなのでしょうか……

「……ん、こっちは……?」

「目が覚めた?」

少女が目を覚ますと、目の前にエメラルドグリーン髪の毛が現れ、心配そうに少女を覗き込む。

「えと、誰?」

「私はフィア、あなたは?」

「私はイ……あれ?」

自分の名前を言おうとして、口が上手く動かないことに気が付いた。普通の言葉は出てくるのに、なぜか自分の名前が出てこない。脳内では発音されているのに、実際には口に出せないのだ。自分の名前をどう発音して良いのか分からず、少女は言葉に詰まってしまふ。

(そういえば、ヒトは私たちの名前を発音できないんだっけ)

『友』もそうだったような気が少女はした。彼女たちが名前で呼んで、と頼んでも彼らは発音できずに彼らの間だけの名前を付けていたような気がする。

たしか……、

「エリ、力……」

「エリカ? それがあなたの名前?」

少女は小さく頷く。

嘘を言ったような気がしていい気分はしないが、ある意味では名前であることに違いはない。ただ、それが『友』の間で決められた名前なだけである。それに、少女もこの名前を決して気に入っていないわけではない。少女の父親はあまり良い感情を持っていなかったようだが、彼もヒトが自分たちの名前を話すことができないことは知っているし、仕方のないことだと考えている。

「それで、エリカちゃん。あなた、何をしていたの？」

「なにを……？ ええと、何のことですか？」

突然、目の前の女性が詰め寄ってくると、真剣な眼差しでエリカを見つめてきた。その目はエリカの表情から情報を引き出そうとしているようで、エリカの目の動き、口元などを観察している。

「知らない、とは言わせないわよ？ あのゲオラ種の死骸の山はなんだったの？」

「ゲオラ種……？」

聞き覚えのない単語がフィアから聞かされる。記憶を引っ張り出して心当たりのありそうな物を探し出そうとして、昨夜の記憶がフラッシュバックした。

「っ！！」

エリカは『それ』を思い出して口元を押さえた。猛烈な吐き気が胃からこみ上げ、戻しそうになってしまう。

フィアがエリカの様子を見て慌ててその背中を優しく撫でてくる。幸い吐き出すものなど無く、胃液だけが口の中に広がって不快感に

涙が出る。

「ごめんなさい、嫌な事を思い出させちゃったみたい」

「い、いえ、大丈夫で、す」

実際、昨夜に比べればまったく言っていないほどである。

昨夜、腹を満たそうとエリカは森の中をブラブラと歩きながら、襲い掛かってくる猛獣を片端から素手で殺していた。ある程度数がたまったなら食べようと思って死骸をまとめて置いておいたら、群れで行動する猛獣が血の臭いに誘われて大挙して押し寄せてきたのだ。エリカも夕飯がかかっていたので本気で応戦、その猛獣すら食事の列に加えることになったのだ。

ところが、いつものように死骸にかぶりついた途端、強烈な吐き気と不快感に襲われ、千切った生肉を吐き出してしまった。

前々から感づいてはいた。木の实がおいしく感じられた時点で味覚すらどうにかなくなってしまっていたのには気づいていたが、主食が吐くほど不味く感じられるとは、エリカは思いもしなかったのだ。それに気が付いた時には、大量の血の臭いに気圧されて食べる気は失せ、結局近くの木に腰かけて眠りにつくことにしたのだ。

今思えば、ヒトにとってみれば、その状況は尋常じゃない、異常な光景だったのかもしれない。

迂闊にも、寝ているところをヒトに見つかるとは、とエリカは心の中で己の不覚を責めた。

「落ち着いた？」

「すみません、みつともないないところを見せてしまいました……」

「良いのよ。それで、何があったのか、話してもらえる？」

エリカはそれを聞いて悩んでしまった。

まさか、本当のことを、エリカが食事のために皆殺しにしました、とは言えない。だが、丁度良い言い訳が思いつかない。

(さて、どうしたものか……、いつそのこと記憶がない、ということにしてしまおうか?)

そうと決まればエリカの対応は早かった。

「すみません、どうも記憶が曖昧で、思い出せないんです」

「そう……、とにかく、大きな怪我也なくてよかったわ」

フィアもそれ以上は聞かず、エリカの頭を撫でながら優しい笑みを浮かべた。

(怪我……、まあ、少し油断してかすり傷を貰ったような……)

ゲオラ種といったか、彼らとの戦闘ではほぼ常にエリカは自らの鱗を発現させていた。全方位から襲い掛かれてさすがに重みに耐えきれずに地面に押し付けられて噛まれまくった時は、被捕食者の気持が痛いほど分かった。

その時、草の茂みを分けて男が2人現れた。

1人は茶髪を短く切りそろえた青年、もう1人は赤い髪をした中年の男性、目ざといエリカはその口元の小じわにまで気づいてしまう。

「んお、気づいたようだな、嬢ちゃん」

「フィア、様子はどうなんだ」

中年の男が人懐っこい笑顔を見せてエリカの横になっている所に寄ってくる。どうも何か運動をしていたようで、汗をかいている。青年はフィアに話しかけて、エリカの状態を尋ねているのだが、どう見ても中年の男と青年は役割を間違っているような気がしてならなかった。

「俺はジャックだ。よろしくな、そんであいつはジーン。俺たちのリーダーだ」

「ジャックさんに、ジーンさん、ですね」

物凄く暑苦しそうな雰囲気醸し出しているジャックが手を差し出してくる。

「呼び捨てで構わないぜ？ どうも敬語を使われるのは苦手なんだな」

「はあ……、初対面のヒトにそういうのはちょっと……」

ニカッと笑うジャックにエリカも手を差し伸べ、握手をする。

隣にいたフィアが「ん？」と首を傾げたが、すぐに表情を元に戻す。

おそらく、この場の会話を文字化していたら、彼女の疑念は解消されていただろう。

エリカが「人」ではなく「ヒト」と言ったことに気が付いただろうが、残念ながらフィアの疑念が解き明かされることはなかった。

エリカは記憶を掘り返してヒトの挨拶を仕方などを発掘して、粗相がないように対応しようと試みる。

この場合は、素直にジャックの手を握り返すことにした。がっしりとした、温かみのある手にエリカの細い手が覆われ、ジャックは笑

顔でその手をブンブンと振った。

「細っこいな。そんなんじゃあ簡単に折れちゃうぞ?」

「心配ご無用です」

ジャックがエリカの腕の細さに驚いているので、エリカはそう言い返した。

折れることはありえない、というよりは、よっぽどのドジをしない限り怪我すらしない。そういう身体づくりになっているのだから。

「エリカと言います。この度は拾っていただきありがとうございます」

「んあ? ああ、昨夜の事か。それで、あれは嬢ちゃんがやったのか?」

「ジャック、エリカちゃんは起きたばかりなのよ。それにそれに関しては何も覚えていないそうよ」

ファイアが言いよどむエリカにフォローを入れると、ジャックが残念そうに引き下がった。「本当だったら是非手合せしてえなあ」などと小声で言っているようだが、エリカは聞かなかったことにする。なぜか、そうしなければならぬ気がしてならない。

そこへファイアと話していた青年、ジーンがやってきて、握手を求めた。

「ジーンだ。よろしくな」

「よろしくです、ジーンさん」

「敬語抜きでいいぞ。この歳で敬語を言われると妙な気分だ」

握手に応じて、手を差し出すと、優しく握られる。近くの木に立ってかけられている大剣からして、おそらく剣士なのだろうが、そうと

は思えないほど優しい雰囲気的青年だ。正直ジャックの方がよっぽどたくましいという印象を受ける。

「さてと、エリカ、お前はどこの出身だ？」

「はえ？」

全くもって予想していなかった質問に、エリカは間抜けな声を出してしまう。

だが、よくよく考えれば、見ず知らずの、おまけに血の海の中で寝ていたエリカを親切にも助けてくれたこと自体、珍しい事なのかもしれない。そんな異常な状況下にいたエリカをそう簡単に信用するはずもないのだろう。

「その髪、この辺じゃ見かけない黒髪だ。おまけにその目。エリカ、お前はどこの人間だ？」

言われて改めて自分の髪を手で掴んで目の前に持ってくる。

(そういえば、『友』にも黒髪はいなかったな……、私の本質のせいか、目も紅いのは多分そうなんだろうし)

エリカは、以前の身体は黒かった。というより黒い鱗に覆われていた。そして紅い眼が2つ、その中で浮かび上がっているような感じだと、『友』は話してくれていた。自分の姿を見つめるようなことはしたことが無かったから、ほとんど意識していなかったのだが、どうやらヒトにとってこの髪と眼は珍しいようだ。

それはともかくとして、名前以上に困ったことになってしまった。まさか本当のことを言えるはずもない。いや、それ以前に言ったところで信じてもらえるとは思えない。

何しろ、

(龍だもんな)

まるで他人事のように、エリカは心の中で小さくため息をついた。

「言えないのか？」

ジーンは黙り込んでいるエリカに小さく訪ねてきた。決して、こちらに不快感を抱いているわけではなく、フィアに言われたように、記憶の有無を気にしているようだ。こちらの顔を覗き込むように見るその顔には、心配の色が見える。

「たはは、そうみたいです……」

そう、言うしかなかった。

相手の同情に乗っかるようで気が乗らないが、仕方がない。

「そうか……、それでエリカ、行くあてはあるのか？」

「一応、『友』の場所に行こうかなあ、と考えているのですが……」
「『友』？」

3人が揃って首をかしげる。

エリカはどうか説明しようと頭の中から言葉を引っ張り出そうとするのだが、どうしても彼らをどう呼んで良いのか分からない。

「こう、動物と仲良くしよう、みたいな人たちなんですけど」

「アバウトすぎるわよ……」

ファイアが呆れる。

おそらく、内心ではそんなどこの馬の骨とも分からない者を『友』と呼ぶない方が良いとか考えているのだろう。

「ここからどれくらい場所にいるんだ」

「ええと、森の南にいたはずなんですが……」

「森の？ この森の中に住んでいるのか!？」

いきなり、ジーンがエリカに詰め寄ってきた。その目は明らかに驚きと怒りを湛えている。

「そいつらは、まさか竜人族じゃないか？」

後ろでジャックが呟いた言葉にエリカは人差し指を立てた。

「そ、そうです。確かそんな感じの人たちだった気がします」

そう言った瞬間、ジャックが「マジか」という表情をして、ファイアは「あちゃあ」という風のため息をついて、目の前のジーンは口をわなわなと震わせながらエリカの両肩に手を置いた。

「あ、あの、ジーンさ、ん？」

「ファイア、確かお前の部屋、2人部屋だったな」

エリカの問いを無視して、ジーンはファイアに尋ねる。

「え、ええ。だけど、まさかあなた、その子を連れて行く気？」

「当たり前だ。あんな連中、危なすぎるだろうが。それにエリカはそこしか行くあてがないと今言っていたしな」

「そりゃまあ、俺たちからしてみればあいつらは危ない部類に入る

だろうが……」

どうも、エリカの知らない場所でどンドン話が進んでいく。

だが、分かることは、どうも彼らは竜人族にあまり良い感情を抱いていないことだ。エリカにしてみれば、他種族の数少ない話し相手だったので、そのような反応をされると少し残念なのだが、彼らとエリカは別種、彼らの道理はエリカたちの道理という訳にはいかないのだ。

だから、エリカは黙って3人の会話を見ていることにした。

どちらにしろ、人里で拾ってもらおうと考えていたのだ、それが彼らに変わっただけのことだ。それに彼らの方が社交的なような気がエリカはした。

「そんなわけでエリカ、俺たちと一緒に国に来ないか？」

「国？　ここの近くだとヴィルヘルム王国ですか？」

エリカが唯一知っている国の名前を呟くと、ジーンが苦笑しながら首を振った。

「何年前の国の話をしてるんだ。俺たちはアールドールン王国に仕えてるんだ」

「あーるどーるん？　聞き慣れないですね」

そう言うと、再び心底驚いたような表情をされる。どうもエリカの常識は彼ら3人とはかなり遅れているようだ。彼女のヒトの知識は竜人族からのみ入手しているのだが、彼ら自身が他のヒトたちと交流を持っていないため、必然的に彼らの情報も遅れてしまうのだ。

「相当隔絶された所に住んでいたのね。この辺の森はアールドールの領内よ?」

「え、龍樹林じゃないんですか」

「……今時そう呼ぶ奴がいるとは驚きだな、ジーン」

「……ああ」

どうも、情報が符合しない。

これ以上はエリカも墓穴を掘りかねないので、黙ることにした。さすがにこれほど、というより龍樹林が通用しないとすると、自分の知識を疑わなければならぬ。

「なんかすいません」

「い、いや、エリカちゃんが悪いわけじゃないんだけどね」

ファイアが慌てて取り持ってくるが、さすがにショックが大きくてその声もエリカの耳には遠すぎて届かない。

「と、ともかく、私たちと一緒に来ない? あなたぐらいの子なら、

ジーンと近いから皆喜ぶわ」

「ジーンさんと? ジーンさん、何歳ですか?」

「18歳だが」

返答に困る返事だ。

エリカは冗談ではなく3桁の人生を歩んでいる。もとより龍種は長命で有名であり、その血には傷を癒す力があるそうで、エリカも何度か竜人族の友を助けるために血を分けた記憶がある。物理的な傷ならば大概のものは治せるらしいが、エリカ自身はその恩恵を預かっていないのでどれほどのものかは分からない。

(この身体は、ヒトだとそれくらいなのかな)

自分の身体をしげしげと見つめ、あることに気が付く。
そして、それを理解してなんと今さらな事だろう、と泣きたくなっ
てしまった。

「……ファイアさん」

「なに？」

「私、いつからこの恰好でした？」

今、エリカはファイアにかけられたのであろう布を纏っている、のだ
が、少なくともエリカは3人のように服を着ていた記憶がない。

とどのつまり……

答えはすでにエリカの脳内にはある。だが、聞かずにはいられな
かった。

もとより前のエリカにはその概念が無かった。だから、この姿にな
っても普通に気にすらしなかった。だが、今になって気が付いた、
気が付いてしまった。

エリカが言っていることを理解したファイアが、同情の眼差しを送り、
それをジーンが訳が分からないという顔で見ている。ジャックは分
かっているのだろうが、言えば首が飛ぶのが分かっているようで何
も言わないでいる。

「あなたを拾った時からよ」

「……………orz」

男2人に見られる前にファイアが2人に強烈な一撃を入れて見られな
いようにしてくれた、と聞いたエリカはそれ以降ファイアに絶対の信
頼を寄せたそうな……。

第2話 ジェネレーションギャップなのでしょうか……（後書き）

どうも、作者のハモニカです。

手探り状態で恐る恐る書いていますが、やはり難しいですね……。

表現などに関しては、「こうした方が良い！」と思っただ方はお教えください。

なるべく柔らかい物腰ですと、メンタル最弱の私でも読む勇気が出るというかなんというか……。

誤字脱字、ご意見、ご感想、お待ちしております m) (m

第3話 王都へ向けて

「なるほど、ここは『竜の森』と呼ばれているんですか……」

エリカは感心したように目を丸くすると、フィアから分けてもらった羊皮紙にたった今聞かされた情報を書き綴っていく。もちろん、龍の言葉で書くことは絶対にせず、竜人族から学んだヒトの文字を使う。だが、どことなく龍の言葉に似通ってしまつのは致し方のないことだ。何しろエリカ自身がそうなのだから。

「そういうことだ。『龍樹林』は俺たちの2つか3つ上の世代で何とか通じるだろうな」

「まさかそこまでは……」

自分で言っておいてなんだが、エリカは自らの使った言葉がほぼ死語になっていることに驚いていた。

ヒトの2世代ほどは、正直龍の寿命の中ではあまり長くはないのだが、やはりヒトの言葉はどんどん変わっていくようだ。

龍の言葉がほとんど変わらずに残っているのは、正反対だ。

「しっかし、そんな単語は知っているのに、方角がさっぱりだとはな」

「うう、言わないでください……」

ジーンは呆れるようなため息をつく。それを聞いてエリカは恥ずかしくなって顔が熱くなるのに気が付いた。

エリカは、『友』である竜人族の小さな村落を目指すために、森を南下しているつもりだった。

ところが、実際は真東に真っ直ぐ行っていたらしい。森の東端で大きく張り出して2つの国の間にスッポリはまる様になっている森を正確に通って、2つの国を結ぶ唯一の道の近くまで来ていたのだ。エリカは、ジーンたちと共にその道を通って南下、彼らの故郷であるアールドールン王国の首都を目指している。

「そ、それで、ジーンさんたちはどうして他国へ行っていたのですか？」

気を取り直し、話題を変えようととっさに思いついた質問を隣を歩くジーンに投げかける。ジーンは一瞬返事に困ったような表情をしたが、すぐに苦笑のような笑みを浮かべて口を開いた。

「俺たちは、見ての通り騎士だ。この街道を北に行ったエオリアブルグ王国の騎士たちと……、まあ視察をしに行っていたんだ。近々大きな大会があるからな」
「大会、ですか」

ジーンはふと思い出したように振り返ると、馬車の中で仮眠を取っているファイアに声をかけた。

「ファイア、あの紙今出せるか？」

「ふあ？ ああ、大会の？ ちょっと待って……」

寝ぼけたような声が馬車の中から聞こえてくる。

そして馬車の中でファイアが何かを呟くような声が聞こえると、馬車の荷台の隙間からすると小さな紙が空中に舞いあがり、弱い風に乗ってジーンの手元に丁度飛んできた。

ジーンがその紙を掴むと、内容を1度確認してからエリカに手渡した。エリカはそれを上から下までゆっくりと読んでいく。

「騎士大会？」

「ああ、年に数回、アールドールンを含む3つの国が選りすぐりの騎士を一樣に集めてどこが1番優秀か競い合うんだ。俺たちはその視察で今回の会場となるエオリアブルグ王国首都に行っていたんだ。その帰りにエリカを拾ったんだ」

「なるほど」と頷きながら紙に書かれた文字を読み進めていくエリカは、1番最後の項で目の動きを止めた。

「この、最優秀騎士団の試練ってなんなんですか？」

ジーンに紙を渡すと、ジーンがその要項を見てため息をついた。

「これは大会で勝った騎士団が物凄く強い人間か猛獣かと戦うものらしい。相手はその時になるまで分からない、ぶつつけ本番の戦いだ。前回は確か……、人食い獣の群れだったか？ エオリアブルグの騎士が2人ほど喰われたらしいぞ」

「……勝って喰われるなんて……」

理解できない、という表情を見ると、ジーンが「そりゃま、そうだろうな」と実に軽く反応した。

エリカはそんなジーンを不思議そうに見つめるのであった。

どうしてそんな無意味な事に命を張れるのか？ エリカは喉までこみ上げていた質問を飲みこもつとする。ヒトという者をよく知らないエリカにとって、同族と命を賭けてまで競い合う意味が理解でき

ない。

（そりゃあ、あたしたちもじゃれ合ったりはするけど、殺しあうなんて……）

よっぽど気に食わないか、龍同士の戦争でも起きない限りはありえない話だ。

現在、龍はエリカの父親が統べている為、龍同士の争いなど皆無だから、外から持ち込まれない限りは平和な世界で生きてきたエリカは不思議だった。

「ま、負けなければいい話なんだがな。人間同士の戦いなら死人とまではいかないから、程よく負けるっていうのも生き延びるための手段かもな」

「ジーン、それをお偉い方の前で言うんじゃないぞ？」

馬車の前、御者が座るべき場所で手綱を握っていたジャックが感心しない、という表情で言ってきた。

確かに、国同士が競い合う大会で手を抜くなど、とんでもないことだ。それくらいはエリカでも分かった。

だが、生き残らなければ守りたい者すら守れない。国の体面と、個人の意思が引き起こすジレンマと言っても良いだろう。

「あ、そういえば、あたしってどういう扱いになるんですか？ さすがに見ず知らずのあたしにこれ以上良くしてるとジーンさんたちのご迷惑になるんじゃない……」

手当てをしてもらった上に、自分たちの場所に引き取ると言っているのだ。さすがにエリカとしても良心が痛む。なし崩しにジーンた

ちについて来てしまっているが、エリカの存在が彼らの迷惑になるのなら、エリカはすぐにも彼らの前から消えようと思っていた。

エリカの目的は元の姿に戻ることだ。

ヒトの世界で情報を集めて回ろうと思っていたため、1カ所留まるつもりは最初からなかったからエリカはそれほど困らない。

エリカがジーンたちの事を考えておずおずと聞くと、ジーンは二カツと笑ってみせた。

「迷惑なわけないさ。こっちは善意でやってるんだ。エリカが気に病む必要はないんだ」

「それにこっちにも若干の下心はあるしな……ほげっ!？」

「へ……?」

ジーンの言葉を紡ぐようにジャックがニヤニヤしながら声を上げるが、馬車の荷台から出てきた細い腕が思い切りジャックの脳天に振り下ろされてジャックが情けない声を上げる。

ジーンも苦笑いするしかなかったのだが、気まずそうに頭を掻くとエリカに顔を向けた。

「えと、どういう意味、ですか……?」

エリカが不安そうに、小さな声で呟くと、ジーンは慌てたように両手を体の前でブンブンと振り、必死に何かを否定しようとする。

「い、いや、別に大したことじゃないんだ! ジャックが、もし君がゲオラ種の『あれ』をやった張本人なら、俺たちの騎士団にスカウトしようとか言いだしたもんで……。決していやらしい意味じゃ

ないんだ!」

「イヤラシイ?」

顔を真っ赤に染めて恥ずかしそうに否定し続けるジーンと裏腹に、エリカは聞き慣れない言葉を聞いて首を傾げていた。

だが、ジーンのアマリの狼狽ぶりから突っ込んで聞くべきじゃないと思いをそこから逸らす。

「スカウト、ですか……」

「俺としても、強い仲間が増えることに越したことはないが、強制するつもりはない。それに君はあの夜の事を覚えていないだろう?」

俺たちは騎士団の宿舎で暮らしているからもし良かったら、という感じだ。あの森で1人だったんだからある程度の技量はあるだろう?」

「まあ、多分……」

技量とは、戦い方を学んだ者が使う言葉だ。

エリカは、生きるために自然と身に付いた戦い方をする。今の身体ではかなり考えながら戦う必要があるが、根底にある基本的なスタイルは一切変わっていない。変える必要がなかったのも、自らの身体に鱗を纏う事が出来るからだ。

しかし、ジーンたちの目の前で鱗を発現させるわけにはいかない。それこそ、最悪ヒトに追われる身になってしまう。彼らが龍をどう思っているかは分からないが、少なくともエリカの知るヒトは龍と仲が良いとは決して言えない。エリカ自身、何度も襲ってきたヒトを喰らった記憶がある。

今後ヒトの世界で元の姿に戻る方法を探すためには、ヒトの戦い方を学ぶ必要がある。鱗を発現させるのではなく、武器を使って戦う

方法を知らなければならぬ。

ともなれば、ジーンたちの申し出は願ってもない物なのかもしれない。さすがに即答するわけにはいかないで、首都に着くまで返事は待ってほしいと言い、その話は切り上げることにした。

しばらく道なりに進んでいくと、森の出口のような場所に突き当たった。

すでに日はだいぶ傾き、空は紅に染まりつつあった。

森の切れた先には、巨大な門が行く手を遮り、槍を持った兵士がその門の前でこちらを見ている。

髭を生やした兵士が槍を手に馬車の前に出ると、片手で馬車を制する。ジャックは丁寧に速度を落とすと兵士の前でピタリ止まる。ジャックは何を考えたのか兵士ギリギリに止めようとしたようで、馬の鼻息がかかるほどに兵士の顔に近寄っていた。

兵士は馬の顔を避けるとジャックの横に回り込んだ。

「貴官の所属と、目的を言え」

あくまで事務的に仕事をしようとしているが、高圧的な雰囲気はその顔から滲み出している。

ジャックは大人しく通行証を取り出すと、それを兵士に手渡した。

「アクイラ騎士団の者だ。大会会場査察から戻ってきた」

ジャックがそう言うと、兵士は目を見開いて通行証にかじりつく様に目を通す。そして姿勢を正すとジャックに敬礼して道を開けた。

「し、失礼しました！ 任務ご苦労様です！ おい、門を開ける！」

「す、すごいですね……。ジンさんたち、物凄く偉いんですか？」

馬車の中でジャックと兵士のやり取りを聞いていたエリカは、兵士の態度の変容ぶりに驚いていた。

ジンたちの騎士団の名前は初めて聞いたが、どうやら国内ではかなり有名な様だ。今の兵士の狼狽ぶりからして、相当力があると見て間違いないだろう。

ジンとフィアは外に聞き耳を立てるエリカに苦笑する。

「まあ、有名ではあるが、俺たちじゃなくて、俺たちの騎士団が有名なんだ。同じ種類の騎士団は王国に俺たちだけだからな。だからこそ大会なんてのが出来るわけなんだが」

「おーい、後ろの方々、確認のために出てきてくれださ」

ジャックが荷台の隙間から覗き込んできたので、ジーンがまず馬車から飛び降りるとフィアがエリカの背中を押してエリカが次に降りる。そしてフィアが優雅に降りると、大きく伸びをして天を仰ぐ。

「ん〜、座りっぱなしだと疲れるわね」

「ええと、おや、1人多いようですが……」

先ほどの兵士が手元の通行証と人数を確認して首を傾げる。それにジーンが素早く反応してエリカの前に立った。

「森の中で彼女を保護してな。身元が分からないんで1度首都まで連れて行くこうと思っているんだ。さすがにほったらかしにするわけにはいかんだろう?」

ジーンがそう言うと、兵士は納得したようでジーンに「ご苦労様です」と言って敬礼すると通行を許可した。ジーンは兵士に礼を言つて馬車に乗り込み、フィアとエリカを荷台に引っ張り上げる。

「首都まではそうかからない。明日の朝には着く。着いたら忙しいから今のうちに仮眠を取っておくといいぞ」

「分かりました」

荷台の隅から毛布を取り出すと、ジーンはエリカにそれを手渡した。エリカは素直にそれを受け取って自らに羽織らせると馬車の荷台に横になり、ゆっくりと瞼を閉じて仮眠を取ることにした。

そこは、どこか暗闇に支配された場所。

巨大な魔法陣のようなものが床に描かれ、その中心に少女が座っている。

周囲には黒いマントを纏った何十人という影が少女を中心に円を作り、片時も彼女から目を離さないように見守っている。

建物は屋根がない。

天井の代わりにどこまでも続く深淵の闇、無数の星が煌めく夜空が彼女たちの真上に横たわっている。

「っ！ ヴァルト様、いらっしやいますか？」

少女は瞑想していたかのように閉じていた目を突如開くと、周囲にいたマントの集団に呼びかける。するとマントの影が1つ魔法陣の中に歩み寄ると、少女の前に跪いてマントを取った。

マントの主は、髭をたっぷりと蓄えた老人ともいえる男だった。暗

闇の中でその顔は炎に照らされて赤く浮かび上がっている。

「御傍に」

小さく顔を下げると、男は少女の言葉に耳を傾ける。それが彼の仕事であり、彼女の仕事である。

「北の森より巨大な黒い影がやってまいります。慈悲と災厄が1つになって。父にお伝えください、対応を間違えれば、我が国は滅び、間違えなければ、繁栄すると」

「御意」

男は頷くと、マントをかぶってその場から立ち去っていく。

途中自分と同じような姿のマントの影に近寄ると、小声で少女を休ませるよう伝え、建物の外へ出る。男はそこでようやくマントを脱ぎ、それを建物の脇にある部屋に投げ込むと馬小屋へ向かう。

「よしよし、待たせてすまなかったな。急いで知らせる事が出来た。久々に全速で走ってくれよ」

馬小屋の中には灰色の馬が1頭だけ繋がれていた。

その馬の背を優しく撫でると、男は繋がれていた綱を解くと馬小屋の外に連れ出して、馬の背に跨った。

「慈悲と災厄が1つになって、か。いったいどういうことだ……」

男は小さく呟くと、眉間に深い皺を寄せながら顎を撫でた。

「一刻も速く王に知らせなければ。明日にはエオリアブルグへ行っていたジーンたちも帰ってくる。彼らが無事ならばいいが……」

手綱を振ると、馬は勢いよく走りだし、夜の闇の中へと消えていった。

第3話 王都へ向けて（後書き）

どうも、ハモニカであります。

いかがでしょうか、作者には出来の良し悪しがよく分からないので非常に不安なのですが、感想など頂けるとありがたいです。

第4話 アクイラ騎士団

ガタンという振動と共に、馬車が止まるのを感じてエリカは目を覚ました。馬車を覆う布の隙間から眩しい光が差し込んでエリカはその眩しさに目を細める。

顔を上げると、ジーンが馬車の荷物を外に下ろそうとしている最中だった。ジャックがジーンから受け取った荷物を馬車の下に置き、フィアはその様子を馬車の中からぼんやりと眺めていた。

「あら、起きた？」

起き上がるとフィアが笑顔で挨拶をしてきた。

「おはようございます。あの、フィアさんは手伝わないんですか？」

男2人が汗だくになりながら重い荷物を運んでいる姿を見て、エリカは気の毒になって聞いた。だが、フィアは「男は力仕事をするのが役目。私たちはそれを監視するのが役目」と笑顔で言われてしま

う。

「……お手伝いします」

「良いのよ？ むしろあなたみたいなきを働かせるのは忍びないのだけど？」

フィアの怠惰な誘惑に打ち勝ってエリカは馬車から降りるとジーンに近づいた。仕事に集中していたのか、エリカが目の前に来るまでジーンもジャックもエリカの存在に全く気付かなかった。

「ジーンさん」

「うわ!?!」

「きゃあ!?!」

話しかけた途端、ジーンが大声を上げて飛び上がらばかりに驚いたので、エリカもつられて驚いてしまう。

ジーンは腕に抱えていた木箱を落としそうになって慌てて木箱を地面に下ろした。そしてジト目でエリカに振り返る。

「いきなりは止めてくれ……」

「す、すみません……」

どうやら、よっぽど大事な物が入っていたらしく、木箱の周りをグルグル回りながら損傷がないかを調べるジーンは、それを一通り済ませると箱をジャックに渡してエリカに向き直った。

エリカが寝ている間に相当動いていたらしく、その額から首筋にかけて大粒の汗が滴っている。顔もいつになく赤くなっており、息も少し荒い。

「で、何か用か?」

「あ、あの、あたしにも手伝えることはないかと思って……。何もかもされっ放しは嫌なので、少しでも役に立とうと思ったんですが」

エリカがそう言うと、ジーンは嬉しそうに笑顔を見せると、巨大な荷物を指差して言った。

「あの荷物は俺1人じゃ運べないんだ。手伝ってくれるか?」

「お安い御用です」

腕まくりをしてフィアに貸してもらった服が汚れないように注意しながら木箱の横に立ち、下の方にある取っ手を両手で握る。反対側にはジーンが回り、ジーンが「123で上げるぞ」と言って姿勢を低くする。

しかし、エリカはそこであることに気が付いた。

「あれ……、ジーンさん、ちょっと」

「ん？　どうかしたか？」

顔を上げたジーンに少し下がってもらおうよう頼み、ジーンがある程度木箱から離れたところでエリカは腕を木箱の下、地面と木箱の隙間に勢いよく滑り込ませると、腕の力だけでエリカの胸元まであるろう大きさの木箱を両手で持ち上げてしまった。

「案外、軽いです」

これにはジーンも絶句するしかなかった。

ジーンよりも小柄な、細さで言ったらフィアよりも細い腕のエリカが、男2人で運ぶような荷物を軽々と抱えているのだから、驚くなという方が無理である。

遠くで見ていたジャックの目が何故か光ったような気がエリカはしたが、気づかなかったことにする。何故か碌なことにならない気がしてならない。

「どこまで運べば？」

「え、あ、ああ、ジャックがいる所まで頼む」

「分かりました」

茫然としているジーンにエリカが尋ねると、我に返ったジーンはジャックを指差した。

エリカがゆつくりと木箱を落とさないようにしながらジャックのいる場所まで木箱を運ぶと、ジャックがニヤニヤしながらエリカに木箱を置く場所を指示した。

「やっぱり、嬢ちゃんは只者じゃあねえな？ いったいその細っこい身体のどこにその力があるんだ？」

「え……」

エリカはそこで迂闊にも自分がやったことの重大さに気が付いた。よく考える必要もなく、これほどの大きさの木箱を軽々と運べる少女がどこにいるだろうか？ これでは自分から「私は普通じゃないよ」と言いふらしているようなものだ。

慌ててジーンの方に振り返ると、ジーンは真剣な表情でエリカを見つめていた。十中八九エリカを騎士団に入れようと考えているのだろう。馬車から顔だけ出しているフィアも口元が震えており、笑いを堪えているのは明らかだ。

「やややつ、べ、別にた、大したことじゃないですよ！？ こ、これくらいは一人旅していれば当たり前です！」

無駄に大きな声、無駄に大きな身振りで慌てて言い訳を言うが、すでに彼ら3人には届かない。

「武器は何かいい？ その怪力があれば大剣も振れるだろう？」

「いえ、ここは普通のサーベルの方が彼女の身軽さを生かせるわ」
「槍という手もあるぞ?」

3人が勝手に自らの人生設計のような事を行っていることに気が付いたエリカは半泣き状態で声を張り上げた。

「あたしを放って何言ってるんですかあああっ!!!!!!!!!!」

全ての荷物を所定の場所に移しきると、ジーンとジャックはようやく仕事から解放されたにも関わらず、休む間もなく歩き出した。

馬車を止めたのは都市の一番端にある駅と呼ばれる場所だ。遠出に使用される馬車は全てここで管理されており、ここからは歩いて都市の中心を目指すことになる。

男2人に前を歩かせ、フィアは拳動不審なエリカが迷子にならないようにその手をしっかりと掴んで歩いている様子は、家族で歩いて

いるようにも見える。だが、男2人の担ぐ大剣と、身に付ける赤い装飾を施された鎧が、彼らを彼らたらしめている。

「エリカちゃん、さすがに怪しく見えるからあまりキョロキョロしないですね」

「すごい、これが町ですか……」

フィアの忠告は、完全にエリカの耳には届いていなかった。1度入って反対から出ていくのではなく、辺りの喧騒に聞こえなかったのでもなく、純粋にエリカの注意が余所に100パーセント向かっていたがために、フィアの声は一切エリカの耳に入らなかった。

「はあ、よっぽど珍しいのね……」

ため息をつきつつも、目を輝かせて町の様子を観察するエリカに、ついフィアも笑みが零れてしまう。ここまで純粋な子供も珍しい、と思っっているのだろう。

「フィアさん、あれなんですか!？」

不意に、エリカが遠くを指差して声を張り上げる。指差す先にあるのは、巨大な城。城壁で周囲を囲まれ、城下町よりもやや高い場所にあるため、エリカたちがいる場所からはその威容を存分に味わうことが出来る。

「ふふ、あれが私たちの家がある場所よ。あそこに住んでいる訳じゃないけど、あそこの中に私たちの宿舎があるの」

「あ、あれが家なんですか……、あれ?」

巨大な城を見て呆けていると、ふとあることに気が付いた。

前に行くジーンとジャック、そしてエリカの隣のファイアに、町の人々の視線が集まっている。もちろん、誰一人あからさまに見ようとはしていないが、視界に入れば1度は視線を向けている。

昨日の兵士といい、この町の様子といい、ジーンたち、さらに言えば彼らの所属するアクイラ騎士団の知名度が改めて窺える。

「なんか、あたし邪魔な気がするのですが……」
「気にしない気にしない。皆良い人たちだから」

町の中はとても活気に溢れていた。ここはまだ外縁だと言うのだが、エリカの驚きもうなぎ上りだ。中心に近づくほどその活気はさらに熱気を帯びていき、通りの人通りもかなりのものになっていく。

エリカはあまりのヒトの数に恐怖した。

エリカはヒトではなかった時、幾度となくヒトと戦ってきた。決して憎んでいたわけでもない。ただ、彼らがエリカを殺そうとしてきたから、戦った。3桁もの年月を生きていれば、その数もかなりのものになる。

だから、エリカは今の自らの身体と周りのヒトを比較して恐怖したのだ。

彼らは、エリカたちをこのように見ていたのだろうか？ 今のエリカは傍から見ればか弱い少女だ。いくら彼女の鱗、黒鱗は地上のほぼ全ての武器、魔法に対して無類の防御力を持っていたとしても、数で圧倒されればいつかは押し負けるものである。

巨大な肉体だった頃は考えもしなかった、恐怖というものを感じてエリカは身震いした。そしてついファイアを握る手にも力が入ってし

まう。

それをフィアがどう理解したかは定かではない。だが、フィアも無言でその手を握ってくれた。握り返された手は優しく、温かくエリカの手を包み込んだ。それはエリカには何とも心地よく、安心できるものであった。

「さて、着いたぞ」

前を歩いていたジーンが立ち止まると、エリカはようやく自分が先ほど眺めていた巨大な城の城壁の目の前にいることに気が付いた。

巨大な木製の門が相応の大きさの金具で縁取られ、森の終わりで見えた兵士と同じ格好をした兵士がその前に立っていた。ジーンたちを視認した兵士は短く敬礼し、両開きの門の片方を丁度大人一人入れる程度に開いてジーンたちを中に招き入れる。

「お疲れ様です、ジーン殿、ジャック殿、フィア殿」

一礼すると兵士は門から外に出ていった。

城壁の中は、美しい庭園だった。門からひたすら石が敷かれた道がまっすぐ伸びていき、城の中へと消えていつている。庭園には噴水や花壇があり、見える範囲だけでもかなりの広さだ。

ジーンはその庭園の中を通らず、城壁沿いに作られた道を移動していく。

先ほどまで耳に響いていた町の喧騒も、城壁一枚で完全に防音されているようで、まったく言うほど聞こえてこない。

「城の中にあるわけではないのですか」

「ええ、城の裏側辺りにあるのよ。こっちから行く方が近いのよ」

城は円状に城を囲む城壁の真ん中に位置している。

道なりに進んでいくと、城の方から掛け声のようなものが聞こえてくるようになった。

「やってるな」

ジャックが笑顔で顔を向けた方向にエリカも視線を向けると、庭園のような芝生ではない、土が露出した場所で数十人の男女が剣を片手に動き回っていた。

「おゝい！ 皆元気だったか〜！」

ジーンが大声を上げると、動き回っていた男女、見ればジーンたちと同じ紋章の鎧を着ている騎士たちが一斉にジーンの方に視線を向けた。

そして、突然エリカはフィアとジャックに両側を押さえつけられてジーンから距離を取り始めた。その顔はまるで猛禽類から必死に逃げる獲物のようであった。

「あ、あの、いったい何が……」

動揺しつつも、振り払うことが出来ず後ろを向いたまま引きずられるように連れ去られるエリカはそこでジーンに目を戻した。

声をかけられた騎士たちは、ジーンに視線を向けたまま固まっていた。

その様子にジーン自身も気が付いたようで、キョトンとしたまま辺りをキョロキョロと見回している。

「あれ、ど、どうしたんだ、皆。俺だ、ジーンだ。1か月ほど空けたけど、俺は帰って来たぞ！」

「こ……………」

誰かが何かを言おうとしている。

それに気が付いたフィアとジャックは自らの耳を塞ぎ、エリカにも耳を塞ぐよう合図してくる。しかし、あいにくエリカは2人に両脇を固められて腕が動かせない。到底耳を守ることはできなかった。

「……………こんの卑怯者があああああああああああああ！！！！！！」

そのため、数十人の騎士の怒号を離れていたにも関わらずエリカの耳は数十分物音を感じできなくなってしまった。

「なっはっはっはっ、いや、何も言わずに旅に出て悪かったな！」

ジーンは包帯でグルグル巻きになった顔で反省した様子もなく笑っていた。

理由は簡単だ。

ジーンはエオリアブルグ王国への旅を騎士団の仲間黙っていたのだ。

「なぜ貴様だけ良い思いをしたんだ！　なぜ我々には声すらかからなかったんだ！？」

「旅団長に聞いてくれな」

逃走を試みたジャックとフィア、それになぜかそこにいたという事になっているエリカも騎士団の騎士たちに宿舎の食堂に連れ込まれて尋問を受けていた。

正直、エリカは話題にすらついていけないので、ただ大人しく座っているだけで、先ほどから調子のおかしい耳を時々気にしている。

「我々が汗水流している間に、涼しいエオリアブルグ王国で査察だと……？　おまけに隠し子までこさえやがって、どういう事だ！

返答次第じゃ、斬る！」

一番前でジーンを尋問していた騎士は突如エリカを指差してジーンに詰め寄った。

「んな！？ エリカはそんなんじゃないやねえ！ ていうか歳を考えると俺は18だぞ、どう考えても生後1か月には見えないだろぅが！」
「分からんぞ？ 貴様が子持ちに手を出して子供を託されたとも考えられる」

「そこまで飢えてない！！」

ジーンの必死の抵抗も効果はいまいちだ。

相当騎士団の騎士たちは今回の事に対して怒り浸透らしい。男性騎士はジーンとジャックを厳しく責め立て、女性陣はフィアとエリカの周りに集まって談笑している。

最初こそはフィアの子供疑惑、その他諸々のある事ない事言いたい放題されたが、波が落ち着くと話題はエリカの事になり、いつしか普通の会話に変わってしまった。

「エリカっていうんだ。可愛い名前ね」

「あ、ありがとうございます……」

若い女性騎士がフィア越しに笑顔を見せる。

現在のエリカの状況を説明しなくてはならない。

右にフィア、左に別の女性、背後に3人ほどの女性と、前を除いて囲まれている。後ろの3人はエリカの黒い髪を撫でまわしている。

「ちょ、エリカちゃんの髪、ツヤツヤしすぎじゃない？ 綺麗だし、羨ましいわ〜」

「ど、どうも……」

エリカはどう対応して良いものか迷いに迷っている。褒められること自体に慣れていないこともあるが、それ以前に、女性という生き物の勢いに恐怖させられていた。

幼い頃に、巨大な猛獣相手に戦った時とははるかに違つが、それ以上の恐怖を味合わされているのだ。

（こ、これが、女性というものなのですか……）

よっぽど、怒鳴り散らされた方がましだと思つたエリカであった。

第4話 アクイラ騎士団（後書き）

アクイラとは、鷲ですね。星座から取った、と思われた方、それは間違いであります。（星座って知らない人が大多数だと思いますが）私がリスペクトしているゲームに出てくる、とある黄色な飛行機が編隊作って飛ぶあの人たちの正式名称です。

か、カッコいい！

やっぱり、組織の名前はカッコいいものに限ります。アクイラがカッコ良くないという方は別ですが……。

それはそうと、

ここでちょこっと補足をば……

作中では

竜

龍

ドラゴンを、

また

ヒト〓人と言う種族

人Ⅱ人間

と言う風に地味な、そしてややこしい分別が行われています。

気にしなくても全然、全つ然問題ないんですが、一応誤字脱字ではないので……、

ご報告させていただきました。

感想など、お待ちしております！

第5話 龍殺し……（前書き）

8月22日 誤字修正

第5話 龍殺し……

「……やらかしました……」

フィアに案内された部屋のベッドに突っ伏し、エリカは後悔の念を隠そうともせずにごくりと肩を落とした。

それには訳がある。

時は数時間前に遡る。

「そういえば、騎士団というと、この王様を守っているんですよね？ お仕事は何なんですか？」

何気ない一言だった。

エリカも別に深い考えがあつて聞いたわけではなかった。だが、その台詞がエリカを凍らせる羽目になってしまった。

「俺らの仕事か？ 強いて言えば、ドラゴンスレイヤーだな」

「……え」

エリカは自分の耳がどうにかなってしまっただのかと思っただけで聞き返した。

「うん？ 聞き慣れないか？ 分かりやすく言えば、龍殺しだ」

聞き間違いではなかった。ジーンたちは至って普通に答えるが、答えられたエリカの表情は凍りついたまま、目を見開いて不意に周りの騎士を見渡した。

「これが、龍殺しの証だ」

ジーンは自分の鎧を持ってきてエリカに見せた。ジーンが指差すその鎧には赤い紋章の中で剣に貫かれた龍の姿が描きこまれていた。

「俺たちは、アールドールン王国の領内で龍が出現する度に、龍の討伐を任せられるんだ。と言っても、今じゃ龍が人里に下りてくることなんて滅多にないからな、おかげで大会なんてものが開催されてしまっただが」

「そ、そんな……、じゃあ、ジーンさん、も？」

エリカが出来る限り平静を装って、それでも声がかすれてしまったことを隠し通すことはできなかったが、声の震えを極力抑えてゆつくりと聞く。

エリカはよりにもよって、龍殺しを生業なりわいとする者たちに拾われてしまったのだ。龍としては、自ら火に飛び込んでしまったようなものだ。

エリカの問いに、ジーンは小さく首を横に振った。

「いや、今も言ったが最近じゃドラゴンが目撃されることすら珍しいんだ。俺は入団して1年だが、未だにドラゴンが現れたという話は聞かないから、訓練に明け暮れる毎日さ」

それを聞いてエリカは小さく安堵のため息をついた。

最悪の事態だけは避けられた。さすがに命の恩人のようなジーンたちまで龍殺しをしていたとなると、ここにはいられない。

「そう、ですか……」

そうとしか、エリカは言えなかった。

周りには、少し話しただけでも分かる、心優しい人々しかいない。

だが、その全てが言わばエリカの天敵とも言える者たちだったのだ。エリカのシヨックは計り知れなかった。

その後、少し疲れたので休みたいとフィアに言うと、フィアの部屋まで案内された。フィアはまだやる事が残っていると行ってまた騎士団の人たちの所へ戻っていったので、部屋で1人にされたエリカは、近くにあったベッドに倒れるように横になると、大きなため息をついた。

そして時間は最初に戻る。

「よりもよって、とんでもないヒトたちについて来てしまったようです、父上」

いくら自らの不注意を嘆いても、時間は元には戻らない。

よくよく考えてみれば、騎士団の話題が出た時にどうして彼らの仕事内容について聞かなかったのだろうか、と自責の念で死にたくなるが、やりきれない気持ちはベッドでゴロゴロと回転することでは発散することはできなかった。

一通り自責の念を自らに叩き込んだエリカは、ようやく落ち着いた頭で今後の事を考えることにした。

エリカにはいくつかの選択肢が用意されている。

1つは、今まで通り、自らの正体を隠したまま、ジーンたちの厄介になること。正体が知られるという可能性はあるが、彼らからも情報を得ることが出来る。さらに、今後必要になるであろう武術を学べるというメリットが存在する。

2つ目は、今すぐにもこの町を、さらに言えばこの国から出ていくことだ。1つ目の選択肢のメリットは得ることができないが、少なくとも正体が早々に知られることはない。だが、これにはヒトが

使う通貨を手に入れ、なおかつ長期滞在できる場所を見つける必要がある。また、情報を得ることも難しい。どこの世界でも外から入ってきた者は警戒され、誰も近寄ろうとはしないものだ。むしろ、アクイラ騎士団の空気が異様なだろう。

あの、垣根のない空間は、エリカにとって有り難くもあり、近寄り
がたいものでもあった。

「どうしよっか……」

ただ、その言葉しか口から漏れなかった。

その時、部屋の扉が開き、エメラルドグリーンの髪がゆったりと入ってきた。

「ただいま、ってエリカちゃん、具合悪いの？」

「……いえ」

エリカがベッドで突っ伏しているのを見て、心配そうにファイアはベッドに腰掛けてきた。それを感じて起き上がろうとすると、それをファイアに手で制され、そのままその手をエリカの額に持っていった。反対側の手を自らの額に当てると、うぐんと唸りながら何かを調べようとする。

「熱があるってわけじゃないわね？ 慣れない旅で疲れたかしら？」

「そういうんじゃないんですけど……」

言えるわけがない。

自分はファイアたちの倒すべき相手で、ファイアたちにとって敵以外の

何者でもないなどと、言えるわけがない。

けれど、やはり聞きたいことは聞いておかなければならない。
ファイアたちにとって、龍とはどのような存在なのか、ファイアは龍と
いう存在をどう思っているのか、言い出せばきりがないだろう。

だから、額に当てられていた手を優しく払うと、ファイアに真っ直ぐ
向き合う。

「ファイアさん、ファイアさんにとって龍とはどんな存在なんですか？」
いきなり話題を振られてファイアが困惑の表情を浮かべる。
考え込むようになしぐさをしてしばらく物思いに耽ると、結論が出た
のがエリカに向かって口を開いた。

「そうね、恐ろしい存在、とでも言おうかしら？　けれど、憎んで
はいないわ。彼らと私たちは決して相容れない存在かもしれない。
戦えばどちらかが死ぬまで戦うことになるでしょう、けれど、でき
れば戦うことなく、分かり合いたいものよ……。これはアクイラ騎
士団、そしてこの王国の総意でもあるわ。あなたが知っているかは
分からないけど、この国の前身はヴィルヘルム王国、大昔には龍と
話し合うこともできたと聞くわ。今では竜人族ですら龍と会話出来
る者は少ないと聞くけど」

「ファイアさん……」

エリカは恐れていた。

もし、ファイアが龍を憎んでいたら、敵として見ていたら、エリカは
ここを出て行こうと思っていた。龍を恨むヒトの元にいられるわけ
はない。それこそ、正体を知られれば逃げ場もない。

「でも、どうしてそんなことを？」

そこでフィアは質問の意図が気になって聞いてきた。

もちろん、本当の事をいう訳にもいかない。だが、エリカの選択は決まった。

それに、ヴィルヘルム王国にはいろいろ思うところがエリカにはある。

「あたしも、騎士団に入らせてもらえませんか？」

エリカは彼女たちと共に過ごすことを選択した。

結果がどうなるうとしても、エリカは決して後悔しない選択をしようと考えたのだ。正体を知られた時のリスクを考えても、騎士団の持つ情報と技術は、他所ではそう簡単に手に入るものではないだろうと判断した。

そして何より、騎士団の雰囲気を目の当たりにして、彼らならば得體も知れないエリカでも信頼関係を築けるのでは、と考えたのだ。正直、女性騎士たちの間ではエリカと相部屋になろうとちよつとした争奪戦のようなものが行われていた気がする。

エリカが絞り出すように、おずおずと入団を申し出ると、最初フィアは意外そうに目を見開いた。そしてすぐに嬉しそうな満面の笑みを浮かべると、フィアはエリカに抱き付いてきた。

「ちよ、フィ、フィアさん！？」

「やっぱり私たちの見立ては間違ってたのね！ それじゃあ、これからは仲間同士ってことね！」

心底嬉しそうにはしゃいでいるのだが、それとは逆にそんな簡単に入団が決まっただけはいいはずのものではないだろうと考えていたエリカは、訳も分からず抱き付かれ、左右に振られて首がカクカクと動いて視界が滅茶苦茶になり混乱する。

「そ、そんな簡単に決まっただけいいものなんですか、っていうか離してください！ 首が、首がもげちゃいますって！」

「え？ あら、ごめんなさい。嬉しくてつい……。それはともかく、もちろん入団には試験みたいなものがあるわよ？ 筆記はエリカちゃん文字が読めるか微妙なところだから免除になるだろうけれど、実技はどう？ 戦闘試験は結構騎士団うちは厳しいのだけれど……」

「何とかして見せます。ただ、少しばかり教えていただきたい事があるんですけど」

「なんでも聞いて頂戴？ 多分騎士団の連中なら皆親切だから教えてくれるわよ。それと、もうすぐ夕飯だから食堂に行きましょう？ あなたを呼びに来たの」

ベッドから立ち上がると、フィアはエリカに手を差し伸べてきた。エリカはその手を握ると起き上がり、ベッドから降りてフィアの横に立つ。

「そうとは知らずに長話させてしまって、すいません」

「良いのよ。さ、ジーンたちを待たせてるから行きましょう？」

そう言うと、2人は部屋を後にして先ほどの食堂へ向かっていった。

「おっ、ようやく来たか。飯が冷めちまうからさっさと食おうぜい」
食堂に入ると、ジーンとジャックが机に向かって座っていた。こちらに気が付くとジャックが待ってたと言わんばかりに手を振り上げ、フィアとエリカを招きよせる。

「遅かったな。寝ていたのか？」

ジーンは露骨にこそ言わないが、代わりにその腹が正直に不満を打ち明けている。くぐもった音が近づくと聞こえ、エリカは申し訳ない気持ちになってしまった。

「すみません、フィアさんとお話をしていました」

「まあ、しょうがないだろうな。ここに来てまだ数時間だ。分からないことも多いだろうからな。何かあったら気軽に俺たちに話しかけてくれて構わない。さすがに部屋まで来られては困るが」

「安心なさい、エリカを猛獣の巣には行かせないから」

「なっ、フィア、てめえそりゃあどっという意味だ!？」

食いついたのはジャックだ。

心外だと言わんばかりに勢いよく立ち上がると、フィアの面前に立

ってファイアの顔を睨み付ける。だがファイアは臆することもなく鼻を鳴らす。

「さっき聞いたわよ？ 私たちがいない間に、随分とあつたみたいよ？ 女湯に覗きが3回、王直属の騎士団も随分と風紀が乱れてるわね」

そう言つてファイアが食堂を見渡すと、近くにいた騎士がビクツと肩を震わせる。

「な、なんだとう？ それは聞き捨てならないな、あとで男勢で話あわにやならんな……、とそんな話をするためにここにいるんじゃないんだ。さつさと食おう」

「そうよ、エリカ、そつちに座りなさいな」

ファイアに席を勧められ、ジーンの隣に座ると、反対側にファイアが座った。

騎士団の食堂の料理は日替わりで決まっているらしく、見渡す限りでは全員が同じ料理を食べている。しばらくすると女性がやって来て器用に2人前の食事を机に音も立てずに滑り置く。

置かれた皿には、肉を揚げたものが3つほど野菜の上に盛られており、その横には得体のしれない四角い物体が添えられている。

「……………」

「お、おいエリカ、まさか、パンを知らないのか？」

その物体とにらめっこをしていると、さすがにおかしいと気が付い

たのかジーンが話しかけてきた。

「肉を焼いてあるのは理解できます。ですが、この物体はいつたい……」
「あゝもう、まだるっこしいな。嬢ちゃん、それはガブツと行けばいいんだよ」

そう言うと、ジャックは自らの前に置かれている皿のパンを一切れ掴むと、豪快にかぶり付く。その様子を見て、エリカも見よう見まねでパンを手に取り、それを口に頬張る。

肉と多少の草しか食べたことがなかったその口には、あまりにも新鮮な味だった。表面に何か塗られているのか、香ばしい匂いの中に甘い香りが漂っている。

「んむ、美味しい、もぐ、ですね」

始めて味わう未知の感覚に、手がさらにもう一枚のパンに伸びる。そしてそれを頬張って揚げられた肉に手を伸ばそうとして、それをフィアに制された。エリカの手を制した手には金属の棒が握られており、その棒は先端が3つに枝分かれしている。

「これを使いなさい。手が汚れるわよ」

「はあ……」

手が汚れることなど、気にしたこともないエリカなのだが、周りの騎士も、目の前のジャックですら、その棒を使っているので、渋々その棒を貰うと隣のジーンの持ち方を真似て肉に突き刺す。

肉に棒を突き刺した瞬間、刺した場所から肉汁があふれ出して何と

も言えない香りがエリカの鼻をくすぐる。

と同時にあの夜の事が思い起こされて、食べたいのに食べたくないというジレンマにも陥ってしまった。

「ぬぐぐ、食べたいのに、ええいままよ！」

食べなければ飢え死にしかねない。

エリカは決心して肉を口に頬張り、噛み千切って下で肉片を転がす。一気に旨味が口一杯に広がってエリカの頬が緩む。

「気に入ってもらえたみたいね」

「おいひいでふ」

口に肉を入れた状態で緩んだ頬を引き締めもせずにフィアに返事をする。

生肉程度しか食べたことがないエリカはとてもじゃないが旨い物など食べたことはない。だから、食べることに以上に、味も追及された料理はエリカにとってその味以上に感動を与えるものだった。

生肉とは違う、噛む度に肉汁が口の中に溢れ出して、それこそ身体が浮き上がってしまうような心地よさにエリカはとっぷりと浸かってしまう。

「……エリカ、物凄い笑顔ね」

「というより、笑ったの初めてじゃないか？ 気が付いたが」

「というか、随分と寂しい食生活だったみたいだな」

エリカの幸せそうな顔を眺めながら、3人も食事を続けることにした。食事中の一切の会話がエリカの耳に届かなかったことは、当たり前といえは当たり前だろうか。

城の門、昼間にエリカたちが通ってきた門の前で、若干夢うつつ状態だった兵士の前に、1人の女性が歩み寄ってきた。

「申し訳ありません、城に用ならば明日出直してもらえないか？」

兵士は夜中に来た来訪者にも関わらず、兵士は極力丁寧な物腰で応対した。もちろん、夜中の方がいろいろな危険があるわけだが、この首都のど真ん中、城の門を守る彼にはそういう危機感は薄かった。

だから、月明かりと近くのかがり火だけで目の前の女性の顔をしっかりと確認しようとしなかった。

女性は何も言わず、ため息をついた。

黒いマントの中で何かもぞもぞと動くと、マントの中から大きな獣が顔を出してきた。それを見て、兵士はようやく目の前の女性の正体に気が付いて目を見開いた。

「まったく、注意力散漫よ？ まあ、半年も家を空ければ忘れられるかしら……。それに私は夜の方が動けることだって城の人間なら知っているでしょう、ねえ、アレックス？」

マントから顔を出した大きな獣の頭を撫でながら、女性は心底悲しそうな表情をする。

その顔を見て兵士は慌てて姿勢を正して敬礼した。

「も、申し訳ありません！ どうぞ、お入りください！」

門が開けられ、女性は静々と門の中へと消えていった。

第5話 龍殺し……（後書き）

ぬお、誰か出てきましたね。

何となく会話から何者が分かっていただけとありがたいかな

とまあ、そんな感じで、エリカ、美味しい物に出会う、の回でした。

人の美德の1つは、美味しい物を作り出せる、ということなのではないでしょうか？

生肉しか食わない龍が食べば、そりゃあもう、ほっぺたが落ちるくらいでしょうね。カルチャーショック並みですよ、きつと。

そんなわけで、まだ5話しか書いていないのに評価を下さった方、お気に入り登録してくださっている方に感謝の意を表し、結びたいと思います。

亀更新を恐れつつも毎日頑張っている作者は何なんだと自問自答している今日この頃ですが、土日ですからね。

感想などお待ちしております！

第6話 血気より眠気！（前書き）

タイトル？

気にしない気にしない、一休み一休み

第6話 血気より眠気！

「ふ〜、美味しかった……」

蕩けきつた顔を隠そうともせずにエリカは椅子の背もたれに寄りかかって大きく息を吐く。

目の前には、まるで洗ったばかりのように、汚れ1つない皿が机の上に鎮座している。目の前のフィアもその皿を見て固まっている。

「スプーンだけでここまで食べるとはね……、エリカちゃん、あなた味わって食べた？」

フィアを含め、周囲3人のさらにはまだ半分ほどの料理が残っている。エリカよりも早く食べ始め、かなりがつついて食べていたジャックすら、まだ食べきってはいない。

「もちろんです。ここまで美味しい物は初めて食べました。食堂で暮らしたい……」

「ちゃんと部屋で寝なさい」

調理場のある方を真剣に見つめて呟いたエリカにすかさずフィアが突っ込みを入れる。

「あ、それはそうとジーン、ジャック、エリカちゃんが騎士団に入りたいって言うてくれたんだけど、今からだどれくらい手続きに時間かかるかしら」

思い出したようにファイアが人差し指を立てて嬉しそうに言うと、ジーンとジャックの顔がそれぞれ驚きと満面の笑顔に包まれた。

あえて、どちらがどっちかは言わないでおこう。分かるはずだ。

「意外だな、だが今日はもう夜も遅いし無理だろう。明日団長の所に行つて申請書を貰いに行こう。エリカ、字は書けるか？」

考えながら言葉を紡ぐジーンは隣でまったりと飲み物を飲んでいたエリカに顔を向けてきた。

「自分の名前くらいなら多分……、でもあまり期待しないでください」

「名前が書ければ大丈夫だ。契約は直筆で行うからな。筆記は俺たちで免除してもらおうよう頼むから、問題は戦闘試験だな。エリカ、お前武器は何を使う？」

さて、そこで問題にぶち当たった。

エリカは武器など使ったこともなければ持ったこともない。必要なかったからだ。ジーンたちに会う直前も、食料を取る時は黒鱗を現させて素手に近い状態で戦っていた。

だが、それが許されない今、エリカも武器の使い方を知り、それを扱えるようにならなければならない。そしてエリカの認識では、アキラ騎士団はかなりの腕利きが集まっているように感じられる。つまり、生半可な技術では入団すら難しいだろう。

戦闘試験の内容は分からないが、どんな状況でも切り抜けられるだけの技術を身に着ける必要がある。今のエリカにはその場の状況で即座に考えて動くような事しかできない。敵の戦略を読み、逆にそ

の戦略の裏をかくような高等な真似はできない。

だから、今できる事を全てやらなければならない。まずは自らに最もしつくり来る武器を探さなければならない。

「何も使わないのか？ うーん、じゃあ明日修練場にいろいろ武器を持ってきて片っ端から使ってみよう。何かしつくり来るものがあるかもしれない」

難しい顔をして考え込んでいたのだろう。ジーンはその表情からエリカの心情を察し、気を使ってそう言った。

「ありがとうございます……ん？」

お礼を言ったところで、食堂の外が騒がしくなっていることに気が付いた。まだ騎士団の者たちは起きている時間だが、決して夜が更けていないわけではない。

それを不審に思ったのだろう、ジーンは立ち上がると声のする方へ歩いていき、近くにいた騎士に話しかけて何事か聞いている。

その間に、ジャックは料理を口の中に押し込むと、強引に水でそれを喉の奥に流し込んだ。その様子をファイアが隣で呆れた様子で見ている。

「ジャック、ファイア、バーバラが帰って来たらしいぞ」

「何（ですって）！？」

2人が勢いよく立ち上がったせいで、エリカが飲もうとしていた飲み物のコップが振動で倒れそうになる。慌ててエリカはコップを死

守するために腕をコップに伸ばして倒れる前にコップを回収する。

「あの人、今までどこをほつつき回っていたのかしら」

「きつと明日は団長にこっぴどく叱られるぞ……」

立ち上がった2人は先ほどジーンが向かっていた方向に歩き出した。

どうしたものか、と考えているとジーンがエリカに手招きしてきたので、ジーンの近くによる。

「バーバラ、さんですか。騎士団のヒトなんですか？」

2人の後を追いながらエリカはジーンに聞いた。

おそらく、話の流れからそうなのだろうが、エリカは何も知らないため確認を取るのが妥当だと考えたのだ。

「ああ、騎士団でも屈指の凄腕ドラゴンスレイヤーだ。あ、騎士団に所属する騎士は全員ドラゴンスレイヤーと呼ばれているんだ。経験があるうとなかるうとな。それで、バーバラは、まあ、強いんだが……」

何故かそこで言いよどむジーン。

どうしたんだろうと顔を覗き込むと、ひどく言いづらそうな表情をしていた。

「バーバラさん！ 半年もどこにいたんですか！」

食堂を出てしばらく通路を進んでいた2人の耳に、ファイアの甲高い声飛び込んできた。

エリカとジーンは少し歩くペースを上げると、通路を曲がった先で

人だかりにぶつかつた。ファイアの声はその先から聞こえてくる。

「その、放浪癖があつてな……」

「……みたいですね」

人だかりをかき分けてその先に進んでいくと、ファイアが女性と言ひ合いをしている光景が飛び込んできた。ジャックは人だかりの一部となつてその様子を面白そうに眺めている。

「だから、私の性格は知っているでしょう？ 1カ所に長居するなんて、つまらないのよ」

ファイアと言ひ合いをしている女性は面倒臭そうに頭を掻きながらため息をつく。

(あれ、この声……)

どこかで聞いたことがあるような、透き通る声を聞いて、エリカは目を細める。

背はファイアよりも高く、長い金髪は背中の中あたりまで伸ばしている。出るところは出て、締まるところはしっかり締まった、その女性、バーバラは他人事のように返事をしている。

「いつもの事ですけど、もう少し騎士団の一員としての自覚を持つてくださいよ！」

そう言うと、バーバラは一对の金色の目を鋭く煌めかせるとファイアに向き合つて突如真顔になつた。

「じゃあ、私がない間にドラゴンの襲撃でもあった？ お隣の王国が攻め込みでもしたの？ 辺境の村で山賊でも蜂起した？」

「え、いや、それは……」

いきなりの質問攻めにフィアは気圧されてしまう。

バーバラはさらに攻め立てていく。

「王様が危篤なつて後継争いでも勃発した？ 大飢饉で餓死者が大勢出たりした？ ないでしょう？ これでも旅をしている間もこの国の情勢にはいつも意識を回していたのよ？ 何かあつたらすぐに駆けつけられるようにと思つて早馬で旅をしていたのよ。まったく昼は万全でもないのに休みなしで帰ってきたから疲れているのよ。もう休ませてくれないかしら」

「休みなしで？ どういうことですか？」

気になる単語を聞いて、フィアが首を傾げる。

だが、バーバラは手をヒラヒラと振りながら人垣に向かって歩き出す。

そこで、ジーンとエリカの真正面に立つ形になり、ジーンと目を合わせる。バーバラはニヤリと笑みを浮かべた。

「半年ぶりね、ジーン。少しは大人になつた？」

「半年で変わるものなんてたかが知れてるさ。ていうか、そっちは1年経つてもまかつたかと言うほど変わらないんだな」

ジーンが羨ましいよ、と息を吐きながら言うと、バーバラはクスツと笑つてジーンの肩を叩き、エリカの存在に気が付いてエリカに視線を向け、表情が一瞬凍った。

「……あなたは」

「ああ、こいつはエリカ、説明するには複雑で面倒なんだが、今度からここで厄介なることになった。ジーン、俺の剣の師匠でもあるバーバラだ」

「よ、よろしくです」

ペコリと頭を下げるエリカだったが、それを見つめるバーバラの眼差しは鋭い物だった。エリカも、最初に目を合わせた瞬間のバーバラの表情を見て、怖気が走ったような気がした。

彼女から、ヒトのものとは思えない気配を感じ取ったのだ。

「エリカ、ね。よろしく。それじゃあ、私はもう寝るわね。明日団長の所へ行かないといけないから」

そう言うとバーバラは人垣を分けながら通路の先へと消えていった。バーバラが去ると、それまでそこに集まっていた騎士も徐々に食堂や自室へ戻る様に去っていき、最後にはジーンたち4人だけが残されることになった。

「あ、あの、バーバラさんって、何者ですか？」

「お、気が付いたのか、勘が鋭いね、嬢ちゃんは。彼女は吸血鬼の一族なんだよ」

「吸血鬼い？」

エリカは声が上がってしまった。それほどに驚いてしまった。

吸血鬼とは、ヒトが作り出した想像の産物だと昔は思っていた。竜人族の間でも、何回か話題に出たことはあるが、正直本気にはしていなかった。血を吸って生きるのとはかくとして、昼は歩けない、

鏡には映らない、一部の野菜で死んでしまうなどと言われて、素直に信じられるほどエリカは馬鹿ではなかった。

まあ、彼女も吸血鬼に会うのは初めてではないし、龍だった頃は人里から追い出された吸血鬼に出会ったことも何度かある。

何故驚いたのかと言うと、吸血鬼がヒトと共存しているからだ。もとより恐怖の対象のような扱いを受けていたことは、過去に出会った吸血鬼から聞いていた。だから、騎士団の人たちがことごとくバーバラの存在を受け入れていることに驚いてしまったのだ。

そして何より、彼女の雰囲気には既視感がある気がしてならないのは、どうということなのだろうか、とエリカは心の中で目まぐるしく思考を回転させる。

「詳しくは知らないが、吸血鬼なのは確かだ。まあ、この騎士団はほとんど人間だからバーバラは居づらいのかもしれないが」

ジーンがポツツと呟く。

「本当にいるんですね、吸血鬼って」

「それは私も思ったわ。最初聞いた時は何かの冗談かと思ったけれど、実際に見せられたら、ね」

あまり、いい思い出ではないようで、フィアの表情が曇る。

おそらくは、吸血行為を見せられたのだろう。血を吸う光景など、とてもじゃないが心地の良いものではないだろう。血も滴る生肉が主食だったエリカは大したことはないと思うが、ヒトではキツイものがある。

それはともかくとして、不味いことになってしまった。

(よりにもよって吸血鬼、ですか。血の臭いでばれないかな)

吸血鬼は、血の臭いに敏感だ。

血を飲むのだから、それも当たり前なのかもしれないが、臭いだけで種族を推測することも不可能ではないだろう。

それに、バーバラが最初にエリカに目を向けた時、彼女の顔が一瞬強張ったのをエリカは見逃してはいなかった。何かしらの違和感を感じたのは間違いないだろう。そうなると、彼女にエリカの正体が知られてしまう危険性が高まる。

「まあ、放浪癖を除けば面倒見のいい人だから、エリカちゃんも何かあったら相談するのも良いかもしれないわよ。あの人世界中を旅しているから、その土地の歴史とかにすごく詳しいの。エリカちゃんの知識を今のご時世に修正する手助けになると思うわ」

「はあ……」

出来れば、なるべくお付き合いしたくないなあ、と心の中では思いながらもなんとか返事をする。

ジーンは食堂に用があると行ってきた道を帰っていき、ジャックは大きな欠伸をしながら自室へと向かっていった。

エリカはフィアと共に自室に戻ることにした。

部屋に戻るとエリカはベッドに倒れ込んで身体を弛緩させる。すると強烈な睡魔が襲ってきてエリカを夢の世界に誘おうとしてきた。

(今日は、いろいろありすぎました……。明日ゆっくり考えること

にしましよ(う)

頭の中で自己完結させると、エリカはすぐに意識を手放した。

「エリカちゃん、着替えてから寝なさい……っってもう寝ちゃったの？」

ファイアが2人分の着替えを持ってきたが、その時にはすでにエリカは規則正しい寝息を立てていた。

ファイアは小さくため息をつくとき、着替えをベッドの横に置くと布団を持ち上げてエリカにかけてやった。そして自分ももう1つのベッドに横たわると、部屋のランプを消して就寝することにした。

「ふふ、おやすみなさい」

「あの子、何者かしら」

自分も同じことを言われているとも知らずに、バーバラは久々に帰ってきた自分の部屋のベランダから外を眺めていた。

< 気になるのか？ >

「まあね〜」

部屋の中から大型の狼が出てくると、バーバルの横に来るとバーバラの足に身体を押し付けてくる。バーバラは狼の頭を愛おしそうに撫でながらぼんやりと眼を泳がす。

「あなたから見て、あの子はどんな感じかしら」

< 十中八九、ヒトではないな。だが、ご主人のようなヒトから変容した者でもない。『私たち』と同じ気配がした >

「あらあら、間違っていたら大変ねえ。言っちゃだめよ、アレックス？」

< もとより私の声はご主人ぐらいにしか理解できんだろう？ >

「分からないわよ？ 私の予想通りなら、おそらくあのエリカって子もあなたの言葉を理解できるわ >

そう言うと、顔を押し付けていた狼、アレックスが驚いたように顔を上げてバーバラの顔を見上げる。

「気のせいかもしれないけれど、あの子、どこかで会った事がある気がするのよね。だけど、あんな綺麗な子に会ったら忘れないだろうし……」

< ふむ、私と会う前ならどうにもならんな >

「仕方ないわね〜。明日もう1度話をしに行こうかしら。その時はアレックス、あなたも一緒に来てね。あの子がどんな反応するか見てみたいわ」

< 分かった。私もその子を間近で見たいしな >

そう言うとアレックスは大きな欠伸をして、部屋の中にあるベッドの隣で腰を下ろすと丸くなった。

「明日が楽しみね」

バーバラは楽しみを目の前にした子供のような笑みを浮かべると、部屋の中へと戻っていった。

第6話 血気より眠気！（後書き）

吸血鬼……

ファンタジーでは引つ張りだこな種族な気がするのはいきつと私だけではないでしょう。

そして吸血鬼でしかも女性となると、妖艶なイメージが付き物なのは絶対気のせいじゃないですよ〜

んまあ、私の作品のも、御多分に漏れないと言おうかなんと言おうか……

しかし、主人公最強（予定）とか書いてありますけど、その気配が全くないですねえ、いやね、種族的にはすでに地上最強クラスなんですけど。

そのうち戦闘シーンになったら彼女の強すぎるが上に弱い一面を書けたらいいなあなんて考えている今日この頃……、次回を書いている頃には忘れてる可能性があります……

無双、良い響きですね。

いつかそんな風になってくれないかなあ〜

感想など受け付けております！

第7話 朝に弱いのは少女の務め（前書き）

エリカの得物決定！

そしてエリカが少女かどうかはノーコメント！

ok？

第7話 朝に弱いのは少女の務め

「エリカちゃん、朝よ〜」

「…………ふみゆ」

翌日、フィアはいつもの時間に起きた。

いつもの、と言ってもそれは騎士団の中でのいつもの、という事であり、まだ日が姿を現して間もない時間帯だ。太陽の反対側にはまだ闇の残り香がかなり残っており、目を凝らせば地平線近くに星を見ることも出来るほどだ。

その時間に起きて、手早く着替えを済ませるとフィアは未だにベッドで丸まって寝ているエリカの身体を揺さぶって起こそうとするが、なかなか起きない。

「エ〜リ〜カ〜ちゃん」

「……………あ、フィアさん」

かなり強く揺らすと、エリカの口から声が漏れ、フィアも起きたかと思つて揺するのを止めてエリカの顔を覗き込もうとする。

「それ、残すならあたしに…………むにゃむにゃ」

「寝言だったの!？」

あまりにタイミングの良すぎる寝言に、フィアはずっこけかける。再び揺すり始めるが、今度は寝言すら漏らさないほどに反応しないというこれこそベッド職人冥利に尽きる熟睡っぷりで、エリカを起こすのにはさらに数分を要する結果となった。

「……酷いです、ファイアさん」
「あなたの寝起きの悪さは天下無双ね。これからは気を付けることにするわ」

頭の頂上を刺激しないように優しく撫でながら、涙目で隣のファイアを見つめるエリカであったが、帰ってきたのは無情な勧告。

結局、身体を揺する、耳元で叫ぶ、と言った起こし方ではエリカに對して無力であることを思い知ったファイアは最終的にベッドを傾けてエリカを床に叩き落とすという荒業に打って出た。

ところが、それでも寝心地が悪そうに寝返りを打つだけに止ま^{とど}つたため、業を煮やしたファイアはなんとエリカに魔法で発現させた冷水をぶっつけたのだ。エリカは水をかけられた瞬間に目覚めたのだが、ファイアは今度は水を乾かすため、と言って炎でエリカを囲み、灼熱地獄よろしく、とでも言おう修羅場を作り出したのだ。

エリカは何が起こったのかも分からないまま蒸し焼きにされる1歩か半歩手前まで行き、そこでようやくファイアは炎を消してエリカの

前に立つと強烈な一撃をエリカの脳天に見舞った。

それは女性のくり出したとは到底思えない重さを引き連れてエリカを襲い、そして今に至ることになる。痛みは未だに頭蓋の周囲をグルグルと回ってエリカを苦しめているのだが、フィアは悪びれる様子もなく、無然として歩いている。

「ど、どうしてこんなに早く起きたんですか？」

痛みを耐えながらエリカが口を開くと、フィアは窓の外を指差した。窓の外には、昨日見た修練場が広がっている。すでに何人かの騎士が己の武器を手に鍛錬を始めている。その中には、昨日会った騎士たちの姿もある。

「昨日、ジーンがあなたの武器選びをしたいって言っていたでしょう？ この時間なら、訓練用の模擬剣とかを持ち出す手間も省けるのよ。他の人が出してくれているからね」

「そういう事ですか。しかし、皆さん個性があるというか、すごいですね」

窓から見える範囲でも、武器の種類はかなり多く見える。オーソドックスな剣や、女性は細身のレイピア、身体の大きい騎士は長い槍と言った具合に、自らに合った武器を使っているようだ。剣が最も多いように見えるが、同じ剣でもそのタイプは様々な物が窺い知ることができる。

エリカの様子を見て、フィアは軽く騎士団の中身について説明を始めた。

アクイラ騎士団はジーンが言っていたようにこの王国、アールドールンにおいて唯一のドラゴンスレイヤーが集った組織だ。

唯一である理由は、現代において龍が人里を襲うという事がゼロに近いという事がある。『竜の森』が近い国ではドラゴンスレイヤーの育成と組織化が行われているが、遠方の王国ではやはりその分の労力を別に回していることも少なくない。危機意識の違いから来るのだろうか、やはり実用性が低いという事も原因の1つなのだろう。

アクイラ騎士団は、巨大な武器を使う騎士が多い。巨大な龍を相手に戦うのだから、当たり前だろう。細い武器では龍の鱗で折られてしまう。斬るといふよりは、叩き壊すことを主眼に置いた武器が多いのもその影響だろうか。

基本的に、男性騎士が大きな武器を持ち近接戦闘を行う。大きく固い武器を持っている騎士が圧倒的多数を占めているのは、窓から見える騎士たちを見ても一目で分かる。

女性騎士も近接をやる騎士は決して少なくない。だが、やはり体力面や力でどうしても男性に劣るため、補助的な役割に回ることが多い。逆に、ファイアのように完全後方支援型として仲間を支援する女性騎士が多い。魔法には人それぞれ得意不得意があるが、女性は男性よりもアドバンテージがあるため、こちらに回る。ファイアは攻撃魔法としては炎や、水、風を操るが、例えば炎を仲間の剣に纏わせることで剣と炎で同時に攻撃をすることが出来る。

風を纏う事で自らの周りに隔離された空間を作り出し、水中で呼吸を可能にすることも出来る。

剣では届かない高空を飛ぶ龍は魔法によって地上に叩き落とすなど、いわゆる魔法騎士の重要性は高い。魔法を主体に戦う騎士は魔法騎

士、剣などを使う騎士は単に騎士と呼称される。

「まあ、バーバラさんは女性だけど騎士なんだけどね」

「すごいですね」

「吸血鬼つてのは、すごく打たれ強いんですつて。ちょっとやそつとじゃ死なないんじゃないですか死ねないですつて」

会話しながら歩いていると、突き当りに外へ出る扉が姿を現した。ファイアがその扉を開くと、2人は修練場へ出る。

修練場には10人程度の騎士がいた。体力だけではどうにもならない魔法騎士の姿はあまりなく、もっぱら男性の騎士が素振りや仲間との模擬戦を行っている。

その様子を離れた場所で眺めているジーンとジャックを見つけ、2人の元へと歩み寄ると、ジーンが手を振ってきた。

「すまん、まだ慣れてないのにこんなに早い時間から」

「いえ、素晴らしい魔法の無駄使いをしてくださったおかげで眠気は飛び去っていますので」

「……………ファイア？」

冷水をぶっかけられ、炎で蒸され、これ以上になく意識は覚醒している。それを伝えると、ジーンは冷めた目でファイアを見つめ、ジャックは頬を引きつらせている。

「ちょ、あなたたちはエリカちゃんの寝起きの悪さを知らないから言えるのよ！ 現場を見たらきつとキツイやり方するに決まっているわー！」

「嬢ちゃん、うちの者がすまないな」

珍しくジャックが頭を下げてくるので、エリカは慌てて首を振ってジャックの顔を揚げさせる。

「い、いえ、起きなかったあたしにも非はあるので……。それよりも、何をするんですか、ここで」

引っ張られるのも嫌だったので、話題を変える。
するとジーンが前に出てきた。

「朝食を取ったら、団長の所に入団志願を申し出る。その時に、使用する武器を申請する必要があるんだ。その申請した武器で戦闘試験を行うから、朝のうちにしっくり来る武器を見つけてくれるとありがたい」

ジーンはそう言うと倉庫から模擬戦用の武器が山のように積み重ねられた箱をジャックと2人がかりで持ち出してきた。置いた衝撃で上の方に積み重ねていた模擬剣が崩れ落ちて地面に落ちる。

ジーンはそれを拾うとエリカに手渡した。

「これは騎士団で男女共にオーソドックスな剣だ。女が使っても威力が出るが、決して弱いわけでもないから男も使う剣だ」

エリカはその剣を受け取ると軽く振ってみる。

風を切る音がして縦に、横に流れるように振ってみるが、いまいちしっくりこない。というより、やはり若干軽すぎるようで力を持て余してしまう感じがする。

「軽いですね……。もうちょっと大きくても良いのですが……」

「ふむ、軽いか……。そういえば、エリカは魔法は使わないのか？」
「魔法ですか……」

言われて考え込むエリカ。

龍というのは、自らの親などに影響を受けて様々な能力を得ることが多い。火龍から生まれれば大体が火を操る事が出来る。水龍から生まれれば水を操れるように、龍も一族によって得意不得意がある。

そこでエリカの一族の事に話が及ぶのだが、エリカの父親は白龍で、母親は水龍だ。では水を操れるかと言うと、そうでもない。白龍の血を継承していたのか色はともかくとして無類の硬さを誇る鱗を持っているが、むしろそれを駆使するばかりで魔法など使ったこともしなければ考えを及ばせたこともなかった。

よくよく考えてみると、龍は魔法をあまり使いたがらない傾向にあるように思える。使う以前にケリがついてしまうという事もあるのだが、やはりヒトと違って別次元にある龍の魔法は規模が違う。

以前、エリカは父親が魔法を使ったところを1度だけ見たことがある。

相手が何だったのかは教えてもらえなかったが、黒龍の鱗以上の硬度を持つ白龍の鱗を貫通し剥がしたと聞かされ、相当高位の敵と戦ったのだろうと見当をつけていた。その時に、エリカは天変地異が起こったのではないかと思ったほどの大魔法の発現を目の当たりにした。

水を操る、炎を操るなどと言う小ぢんまりとしたレベルの話ではなかった。

水ならば水を含む雲ごと操り、水だけではなく、空から雹降らせ、大雨に雷を伝導させて森に火を振り撒き、その炎を風で拡散させる。と敵がいる場所をグルリと囲む炎の包囲網を作り上げ、包囲網の中心へと風を吹かせて敵を殺そうとした。

戦いの後、戦場となった森の一角は一本の例外すら許さず焼野原となり、森の真ん中に丸い広場のようなのが作り上げられていた。そこは今でも生き物が住まない荒れ果てた荒野のようになっている。

それはともかくとして、要はエリカは自分が魔法を使えるかどうかも分からないのだ。

何しろ使ったこともないのだから仕方のない事なのだが、ジーンに問われて使えるかどうか真剣に考えることにした。

「使えるのなら、別に俺たちみたいに剣を担いで戦わなくとも、フィアと共に後方に回れるんだが」

「使えるかはわかりませんから。使ったことが無いので……。フィアさん、今度魔法の使い方を教えてください」

「良いわよ」

フィアが快諾したのに礼を言うと、エリカは先ほどの剣をジーンに返して今度は自分で他に使えるような武器を積み上げられた武器の中から探し始めた。

「嬢ちゃん、こいつはどうだ？」

「あたしをどう戦わせたいのですか、ジャックさん」

取り出されたのは巨大な槌のついた武器。ジャックですら両手で抱えているのだから相当重い物だろう。そんなものを振り回せば目立って目立ってしょうがない。

振ることが出来ない、とは言わないエリカである。

「俺たちみたいに大剣を使うか？」

「あたしの身長を考えてください。背中に担いだら地面に刺さります……」

その凶を想像したのかジャックが腹を抱えて笑い出したので、ジョンとフィアにアイコンタクトで許可を求めるとすぐに許可が下りた。

そして今持っていた槍のような武器を思い切り振りかぶると、腹を抱えているその腹目掛けて振り、ジャックの腹に振られた槍がめり込んでそのままエリカが振り切るとジャックは情けない悲鳴を上げながら少しだけ宙に浮き、地面に叩き付けられて15メートルほど地面を転がっていった。

すぐに起き上がって何か喚んでいるが、エリカはそれを無視して武器選びを続ける。

「ん、これは丁度いいですね」

山を切り崩して下の方をあさっていると、剣よりは細いが、そこそこの重厚感ある武器が姿を現した。刃に反りが入っているのか、剣を収める鞘は若干の弧を描いている。

「ああ、それは刀って奴だな。叩き斬ったりできないから、あまり龍相手に使うには不利だが」

「こついつのは力で斬るんじゃないんですよ。引いて斬る感じですから」

見覚えのある武器だった。

どこで見たかなどさっぱりなのだが、竜人族の誰かが使っていたよ
うな気がする。

エリカは刀を振ってみると、違和感に襲われて首を傾げる。

「あれ、これって模擬剣じゃあ……」

「ああ、刀は使う奴が少ない、と言うよりいらないから模擬剣を作ら
なかったんだ。おそらく騎士団の武器庫にも刀はその1本だけだろ
うな。どうして模擬剣の山に埋もれていたのかは知らんが」

鞘から細い紐が伸びており、それは鏝に固く結びつけられている。

その紐を解き、鞘から刀を抜くと、長い間使われていなかったにも
関わらず曇りのない刀身が姿を現し、朝日を反射させて美しく輝く。

「綺麗……」

「大剣ほどじゃないけど長いわね。エリカちゃん、どうする？」

刀身はジーンやジャックが持っている大剣とは違い、光を反射させ
るだけでは飽き足らず、エリカの顔を認識できるほどに綺麗に磨か
れている。

長さはエリカの腰より少し高い程度。若干長い気もするが、気にな
らない程度だ。

「これにします。慣れない武器より少しでも知っている物にしたい
です」

「ようし、そうと決まれば……、ジャック、武器庫の爺さんにこれ
を持っていくって伝えておいてくれ」

「おう、っと嬢ちゃん、さっきの借りはそのうち返させてもらうからな。痛くて……」

腹を押さえながらジャックは城の方へと向かっていった。

エリカは刀を胸に抱いて「やりすぎました？」と2人に聞くが、2人は首を横に振ってエリカを弁護してくれた。

「それじゃ、エリカちゃん。自分が使う武器は相棒みたいなものよ？ だから、寝る時と体を洗う時以外は常に身に着けるようにする
といいわよ」

「分かりました」

「うん？ もう飯の時間だな。食堂でジャックと合流しようか」

「はい」

「へえ、刀を使うんだ」

騎士団の宿舎の2階、ベランダから修練場の様子を眺めていたバー

バラは面白そうに口元を歪めていた。

<話をしに行くのではなかったのか？>

「ダメ、ジーンとかフィアちゃんとかいるし。多分私の予感が正しければあの子たちに聞かれるわけにはいかないだろうしね。今夜にでも会いに行くわ。」

<……吸うのか？>

アレックスはバーバラの隣で大人しく座っている。

だが、その目はバーバラと同じように修練場で刀を振ってみせるエリカに注がれている。

「場合によってはね。逃げるようなら」

<それが人に物を聞く態度か？>

「ふふ、肉体言語は大切よ？」

バーバラは笑みを浮かべる。

金髪が風になびいて美しく揺れる。

<はあ、もう少し穏便に事を収めようとする気はないのか？>

「カラッキシ。そうしたいのならアレックス、あなたがやりなさいな。それなら私も協力してあげる」

<声が聞こえなければどうにもならんだろうが……>

「だから、可能性はあるわ。やってみる価値はあるわよ、きっと」
<ふふ、ならば楽しみだ>

アレックスは狼ながら笑みを浮かべると部屋の中へと戻っていった。それを目で追って部屋の中へ消えていくと、修練場に目を戻した。エリカたちはどうやら食堂へ向かうらしく移動を開始した。宿舎の中にその姿が消えるまで目で追うと、バーバラも部屋の中へと戻っ

て
い
っ
た。

第7話 朝に弱いのは少女の務め（後書き）

え、ハモニカは驚いております。

7話しか書いていないにも関わらず、感想を頂きました。

嬉しくて涙がちよちよぎれる思いであります。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

それはともかくとして、作者は恐ろしい力によって拘束されてしまっていたようです。

女性主人公 得物は刀系

あれ？

よくあるパターンじゃないですか、これ？

馬鹿な！

ネタ武器でハンマーでも振り回させようとか考えていたのに！

ジャックが出したせいで拒否られてしまいました！

こゝ、これが世界の修正力ですか！（違います）

くっ、そんな力には負けま……、負けてましたね……

しかし、何故よりもよって刀を選んできましたのか。

栄える、からでしょうか。

まあ、とりあえず当分エリカは刀をブンブン振って戦う予定です。

ドラゴン相手に刀が利くのか、という意見があるかと思いますが、今は流してください。

では、今日はこの辺で

感想などお待ちしております！

第8話 乙女には秘密が多い（前書き）

業務連絡：

タイトルの区切りが分かりづらいというご意見を頂き、

タイトル名を変更いたしました。

第8話 乙女には秘密が多い

「じいよ」

朝食を軽く済ましたエリカたちは、宿舎の最上階にある宿舎で唯一両開きの部屋の前で止まった。

他の部屋のように質素というわけではないが、別段豪華というほどでもない扉にジーンが近づくと、2回ほどノックをして「ジーンです」と言うと、中から声がしてジーンは扉を開けた。

「失礼します」

ジーンが入ったのを見て、フィアがエリカの背中を押して中に入っていた。

部屋の中は、本で埋め尽くされたような光景だった。巨大な本棚が部屋の左右にあり、無数の本が並べられている。

部屋の中心には大きな執務机は置かれており、エリカたちから見て机の反対側に男が座っていた。仕事だったようで書類に何か書き込みをしているようで手が忙しなく動いている。

「どうした、ジーン。査察の報告書なら問題はなかったが」

男はジーンに目を向けずに口を開いた。

髭をたっぷり蓄えた男は歳の割に老けて見えたが、声はしっかりと聞いて40歳から50歳にかけてだろうとエリカは見当をつけた。

「いえ、そのことではなく、入団志望のこと……」

ジーンがそう言うと男の手が止まって、そこでようやく顔を上げてエリカたちの方を見た。鋭い眼光がジーン、フィア、そしてエリカの順に動いていき、エリカのところまで止まる。

「その少女か？ 年齢制限がないからと言って、いくらなんでも無理があるんじゃないか？ お前も17歳で入ったとはいえ、それはお前が男で、こう言っちゃなんだがコネがあったからだぞ」

男が眉を寄せて言うと、ジーンが苦い顔をする。

「まあ、それは自覚してますが。それは置いておいて、エリカ、この人はオルテア・ヴァルト騎士団長。騎士団長、エリカです。俺とジャック、フィアが紹介人という事で」

騎士団に入るには、2つの方法があるという。

1つは年1回の一般試験によって入団する方法。

もう1つは騎士団の騎士による紹介、もしくは推薦だ。今回エリカはジーンたち3人の推薦という事で、本来ならば来年まで待たねばならない入団を今申し出ることが出来たのだ。

ジーンの言葉を聞くと、ヴァルトは意外そうな顔をする。

「ほお、3人もの推薦を受けた奴など初めてだな。ということは相應の能力があるのだろうな？」

「少なくとも、俺とジャックを足して2で割ったくらいの力がありますよ。剣術はカラツキシだそうですが」

そう言うと、ヴァルトは苦笑してします。

それもそうだろう。どこの誰が、剣術のできない人間を、エリカは人間ではないが、騎士団のような、いわばエリート集団に招き入れるだろうか。今のヴァルトの表情はそれを如実に現していた。

「くく、力だけあっても駄目なことは分かっているだろう。だが、お前たち3人の紹介とあれば、試験くらいは受けさせても良いだろう。申請書は書いたのか？」

エリカは先ほどジーンに手渡された書類をヴァルトの机に置く。書類と言っても、エリカが書いたのは自分の名前だけで、残りの部分はほぼジーンとフィアによって書かれた。出生などは2人で絶対に分らないだろう地名を書いたり、かなり手の込んだものになっている。

ヴァルトは申請書に目を通すと、おもむろに引き出しからペンのような物を取り出すと、申請書に自分の名前を書き込んでいった。

「これで、この申請書は君と私との間だけで有効な物になった。…それが君の得物かい？」

ヴァルトはエリカが腰に帯びていた刀に気が付いて目を細めた。

「はい、ジーンさんたちと一緒に選んでいただきました」

「くく、本当に初心者なんだな。言っておくが、戦闘試験は本業の騎士が相手だ。生半可な覚悟でも、力でも勝てんからな？」

「覚悟の上です」

エリカがまっすぐな目でヴァルトに言うと、面白そうにヴァルトがくぐもった笑い声を上げる。

「楽しみだ。では、書類の通り筆記は免除、戦闘試験にて入団の是非を審査する。時刻は、そうだな、今日の午後3時だ。戦闘相手は私が見繕っておく。せいぜい頑張るがいい」

ヴァルトはそう言つと、退室を促し、エリカたち4人は一礼して団長室を後にした。

あとに残されたヴァルトは、先ほど引き出しにしまったエリカの申請書を取り出した。

エリカの名前、年齢（フィアによる詐称）、出生（ジーンとジャックによる詐称）、志願動機（フィアによる詐称）などが書かれた申請書を手にとると、ペンを取り出しおもむろに書類に向かって何かを呟き、ペンを走らせる。

「ふふ、ほとんど詐称じゃないか。さて、本当の彼女は何者なのかな」

ヴァルトはドラゴンスレイヤーとして歴戦の騎士である。相手の裏をかき、相手の欺瞞を見抜けるくらいの実力が無くては騎士団長など務まるものではない。

彼が編み出したのは、トラップブレイカーと呼ばれる罫を見破る補助魔法を真偽の判断に応用した物である。書かれたもの、相手が言った言葉、その全てに応用が利く便利な魔法だが、かなりの技術と経験を要するものだ。

エリカの書類の主要な項目ほぼ全てがその魔法により「嘘」と判断されて、順番にヴァルトは詐称された記載にチェックを付けていく。

「年齢もか……。さすがに私の目でも16程度に見えたのだが……。不都合の塊だな、この書類は」

本来ならば、この時点で試験など受けることもなく失格になるところだ。

だが、そんな人物を何故、騎士が3人も推薦するのか、ヴァルトは興味を湧いた。

「真実を語ってもらうのは後にして、今は彼女の实力を見せてもらうとするか……」

そう言うとヴァルトは立ち上がり、部屋のバルコニーに出る。バルコニーの下は修練場になっており、朝食を終えて数多くの騎士がそこで訓練をしている。

「誰をやるうか……。勝手に入ってくるとは無粋だな、バーバラ？」

不意に言葉がとげとげしくなり、背後を見ることなく部屋に音もなく入ってきたバーバラに厳しい言葉を投げかける。振り返ると案の定、アレックスを連れだしたバーバラが扉の傍に立っていた。

「お久しぶりです、団長。元気そうで何より」

「能書きなどいい。半年も団を空けた理由を聞こうか」

「退屈だったもので」

あまりに良い笑顔で言われてしまい、ヴァルトはため息をついてしまった。彼女に対して、叱責は罰にはならないようだ。

「まあいい、召集に応じて帰ってきてくれただけでもありがたいも

のだ」

「どういたしまして」

「褒めてない！」

どうしても自分のペースに出来ないヴァルトはつい声を荒げてしま
う。

「はあ、それはともかくとして、陛下にはお伝えしたのだが、実は
姫様の予言が気になってな」

声を低くしてヴァルトが言うと、軽い雰囲気を纏っていたバーバラ
の表情が瞬時に切り替わる。傍にあるソファに腰かけると、ヴァル
トの話の聞こえと耳を傾ける。

「姫様の予言、ね。何かあったの？」

「ああ」

白紙の紙を取り出すと、ヴァルトはそこに字を書き始めた。そして
それをバーバラの元に持っていくと、反対側のソファに座ってバー
バラの反応を窺う。

「『北の森より黒い影がやって来る。慈悲と災厄が1つになって』
？ どういう事かしら」

「北の森、おそらく『龍の森』を現しているのだろう。そこからの
黒い影、龍だろうな。問題はそれが慈悲と災厄が1つになって、と
いうことだ。これに関しては博士たちも意見が割れておっとな」

うん、と考え込むバーバラ。

「慈悲というのは、その存在そのものの性格を表していて、その存

在が王国に現れることで外から災厄がやって来る、という事かしら」

「もしくは逆だな」

「ええ……」

災厄が来て、それに対して周囲の国が協力して対抗する、とも取ることが出来る。

予言は、基本一人称がアールドルン王国という国家を現している。そのために国のどこから、と言った具体的な事を知ることはいかなり困難だ。

その点、今回の予言は北の森、という具体的な地域が出ている為、北から、つまりここ首都のアルドリアからそう離れていないところで何かが起こり、その原因が龍に起因するのではないかと推測することが出来たのだ。

「とにかく、龍が出た場合には我々が出動することになる。幸いといおうか大会に向けて皆訓練に励んでいる。危機に対する備えも兼ねてしまっていることが、救いだな」

「国難規模の龍の出現……。最悪ね」

「お前にも当分はここに居てもらうからな。今の騎士団にはお前のような突出した騎士が少ない。大会でも優勝したのは私たちが最後なのだからな」

「そういえば、そうね、あの頃はあいつもいたし、私たち3人がいれば無敵だったわねえ」

懐かしそうに宙を見つめるバーバラ。

逆にヴァルトは小さくため息をつく。バーバラを見つめる。

「お前は変わらないな」

「あなたは変わったわね……、あら？」

バーバラはヴァルトの執務机に置かれた書類に気が付いて立ち上がると、書類を手に取りそれを読みながらソファに戻ってくる。

「エリカ……、あの女の子ね。嘘だらけじゃない、これ」

呆れたように言うバーバラにヴァルトは頷きを返す。

「まあな。今日の3時から戦闘試験を行う。暇なら見に来ると良い。どうせ暇なのだろう？」

「まあね、丁度私もこの子が気になっていたところだし、見に行くわ」

そう言うと、バーバラは立ち上がりソファの隣で丸くなっていたアレックスを連れて扉を開ける。そこで立ち止まると振り返り、ヴァルトに向かって笑みを浮かべた。

「もし、私の予想通りなら、この騎士団は大物を釣り上げたことになるわよ」

ヴァルトが「どういう意味だ」と聞く前にバーバラは部屋を出ていき、あとにはヴァルトだけが残された。

「大物、か。さてさて、誰を当てるのが妥当か……」

「いいか、戦闘試験のルールは簡単だ。教官となる相手が降参するか、戦闘不能になったらエリカの勝ち、晴れてエリカは俺たちアクイラ騎士団の一員だ」

試験の前に、修練場で身体を動かしていたエリカに、ジーンは声をかけてきた。

正直勝てるかは分からない。だが、少なくとも負ける気はしない。

なぜならエリカには黒鱗という鎧がある。自分の力を過信する気はさらさらないのだが、並みの剣でダメージを貰うつもりはさらさらない。

戦闘試験には2つ種類があり、騎士が行う近接戦闘試験と、魔法騎士が行う魔法戦闘試験がある。エリカが行うのは前者の方で、戦うに当たっては鎧を装着することが義務付けられている。本当の戦闘では鎧が無ければ即死クラスの攻撃に耐えられないため、ある程度重量のある鎧を身に着けなければならないのだ。

ところが、エリカのような小柄な騎士が少ない、というよりいないためにエリカは鎧を身に着けていない。入団が決まれば特注で作る

ことにしているのだが、戦闘試験ではエリカは胴などの鎧がない。手甲と足甲は最も小さいサイズの物を使って何とかしているが、やはり胴がないという不利は否めない。

「きつと相手は胴を狙ってくるわ。腕とかは致命傷判定が出ないからとにかく顔から上半身にかけては注意してなさい」

「分かりました」

相手の教官を務める騎士はまだ姿を現していない。身体を温めながら、エリカはどのように戦うべきか考えていた。

相手は全ての防具を付けているだろう。力技はエリカの得物では不向き、狙うは自ずと絞られていく。

問題の胴に関しても、対策はしつかりと考えてある。露出していない部分は全て黒鱗で覆うのだ。致命傷判定を貰えば関係ないが、牽制程度や打撃でのダメージはほぼ無効化して戦うことが出来る。

若干反則のような気がするが、個人技能は戦闘では相手に対するアドバンテージとして不可欠なものだ。それにアクイラ騎士団が敵にするのは龍、どんなに汚い手を使ってでも勝たなければ死ぬのだ。正攻法だけが戦い方ではない。

もちろん、知られるわけにはいかないもので、よっぽどのことがなければ使わないようにしたいところだが、相手がそれを許してくれるとは限らない。

「そろそろ時間だな……。まったく、ジャックも用事を入れるなんて一番戦いたがっていたくせに」

ジャックは、急用は入ったと言って午後から姿を見ていない。

「すまん、待たせてしまったかな」

そこにヴァルトが現れた。意外な事に何故か背後にジャックを伴っている。

「団長、それにジャック、なんでここに？」

「私は審判を買って出た。そして、エリカ、君の相手はこのジャックだ」

「へ？」

一瞬、頭の実感が追いつかずに間抜けな声を出してしまったエリカに、ジャックは背中に担ぐ大剣を抜くとその切っ先を向けた。

「朝の借りは、早々に返させてもらっぜ、嬢ちゃん！」

「ええー！ー！ー！？」

まさかの相手にエリカは奇声を上げてしまう。

第8話 乙女には秘密が多い（後書き）

エリカ初の人間の身体での戦闘です！

どうなることやら……主人公最強の一端を見せられれば幸いですか

……

感想などお待ちしております！

第9話 入団テスト（前書き）

戦闘シーン来たあ

満足良くものが書けるか未知数ですが、張り切っていきましようか

第9話 入団テスト

ジーンは、不安になっていた。

エリカの対戦相手を務めるのがジャックと分かったからだ。

いつもは軽口を飛ばしているし、ジーンとどっちが大人びているか分からないジャックであるが、実力は年相応のものだ。ジーンのように身体が細いわけでもなければ、これと言った欠点がない、典型的な騎士であるジャックは、巨大な剣を両手で握ると切っ先をエリカに向けた。

「朝の借りは早々に返させてもらうぜ、嬢ちゃん！」

借りをその日のうちに返せるようなら、それは借りとは言わないのではないか？

そんなことを考えながらも、ジーンはエリカの反応を窺う。エリカはジャックが相手と知ってかなり驚いているようだが、後ずさったり、気圧されたりする様子はない。

この時点で、ジーンはある種の驚きを感じていた。

ジャックは、戦闘となるとかなりのプレッシャーを発する。その体格も相まって並みの騎士ならばそれだけで戦意を失いかねないほどののだが、エリカは全く動じていない。むしろ、感じていないとも取れる反応だ。

(鈍感なのか、はたまた……)

戦闘試験は真剣を使う。

模擬剣では実際の戦場のプレッシャーを感じることはできない。お互い寸止めを心掛けるよう指示されているし、ジャックも素人の剣が、エリカは刀だが、抑えられないほど腕が無いわけではない。万が一の際には審判であるヴァルトが飛び込むことにもなっているから、よっぽどの事がなければ大怪我を負うことはない。

「試験は5分間だ。それで決着が付かなければ私が勝敗を判断する」

ヴァルトが2人を交互に見ながらそう言うと、2人からある程度離れていく。

「勝てると思う?」

隣にいたファイアが不安そうに聞いてくる。

ファイアもまた、ジーンと同じくジャックをよく知っている。彼の戦い方も、癖も、2人にとっては自分の事のように分かる。1年も共にしていれば、そのくらいは分かるのだが、分かるからこそ、エリカの身を案じた。

「正直、厳しいだろうな。ジャックはごり押しの中に繊細な攻撃を絡めてくる。大振りだと甘く見ると、痛い目に合うな」

「あなたがそうだったようにね」
「ああ……」

ジーンは、入団した際にジャックと戦っている。その際、大振りと甘く見て懐に入ろうとしてそこを狙われた。ジャックの武器は大剣だけではない。その屈強な肉体も、対人に限って言えば強力な武器

となる。

「ドラゴン相手にどこまで役に立つかは分からんがな……」

「剣の腕もかなりのものだし……、はあ、ジャックの悪い癖が出たかしら」

ジャックは強い相手と見ると戦いたくなる癖がある。俗にいう戦闘^{バトル}狂^{ミテ}と言う奴だ。見ず知らずの相手に喧嘩を仕掛けてはメツタメタに痛めつける為、彼をよく知っている者は決して実力や力の話題を口にはしない。言つて興味を持たれでもしたら、目も当てられない結果が待っているからだ。

だが、その事を知らないエリカは、先日もジャックの目の前で軽々と重い箱を持ち上げてしまった。逆れば、ジーンたちが初めてエリカに会った時の状況からも、ジャックはエリカにそういう意味で興味を持っていたのかもしれない。アルドリアに来る馬車で言っていた「下心」とは、ジャックにとって1度戦つてみたい、ということだったのだろうか。

「ジャックの武器は一撃が重い。エリカの刀じゃ1発で折れてしまふかもしれないな……」

「そうなつたら、入団もおじゃんね……、エリカ！ 負けるんじゃないわよ、そんな筋肉ダルマ、伸^のしてやりなさい！」

「ファイア！ てんめえ、筋肉ダルマはねえだろ！ 俺はそこまでムキムキじゃねえ……」

「あんたに言つてないわよ！」

ファイアが一喝するとジャックが悔しそうに歯ぎしりする。エリカはどのように反応すれば良いのか迷っているようで、ジーンたちとジャックを交互に見て助けを求めている。

頑張れ、とジーンは目で伝える。

それが伝わったかは分からないが、エリカは困惑していた表情を消して顔を引き締めると、刀を抜いて構えた。

「嬢ちゃん、全力で来い。嬢ちゃんの本気じゃねえと、俺には効かねえぞ」

「言われるまでもなく、最初から全力で行かせてもらいます」

「ほっ、楽しみだぜ。団長、合図頼んます！」

ジャックは目だけをヴァルトに向けて大声を上げる。

ヴァルトが無言で頷くと、右手をゆっくりと振り上げる。

ジャックとエリカの距離は5メートルほど。飛び込めばエリカの刀でも届く距離だ。

だが、それはもちろんジャックも織り込み済みだろう。

「では、両者構えて……」

ジャックは大剣を体の前でわずかに斜めにずらして構える。それに対してエリカは刀の切っ先がジャックの喉元の高さになる位置で構えている。

そして、ヴァルトの手が勢いよく振り下ろされた。

「はじめー！」

エリカは戸惑っていた。

曲がりなりにも命の恩人、これが赤の他人なら心置きなくボッコボコにしても入団しようと思っていたエリカであったが、相手がジャックではそれも出来そうにない。

朝に棒で殴り飛ばしておいて言うのもなんだと思うが、朝は加減していた上に峰打ちだったからジャックにも大きな怪我はなかった。

だが、今エリカが持っているのは刀。ジャックは鎧を着ているが、顔は守られていない。下手をすれば大怪我に繋がってしまう。ジャックの武器もまた、一撃喰らえば確実にノックダウンさせられるのは目に見えている。

ジーンが感じたジャックのプレッシャーは、もちろんエリカは感じ取っている。だが、それはエリカにとって取るに足らない物だった。ジャックには申し訳ないのだが、エリカは500年間で数多くの猛獣やヒトと戦ってきた。正直、ジャックのプレッシャーはそれに比べればまだ「生ぬるい」のだ。

確かに、ジャックは歴戦の騎士だ。だが、エリカはもつと脅威となる、極論すれば自らの父親を目の前で見てきたのだ。たとえ殺意が自分に向けられていなくても、首筋に剣を当てられているかのような錯覚を受けるほどの殺気を何度も感じていたために、そういう感覚がマヒしてしまったのかもしれない。

「嬢ちゃん、本気で来い。嬢ちゃんの本気じゃねえと、俺には効かねえぞ」

ジャックがニヤリと笑っている。

それは、心底戦うことを喜んで目だった。殺し合いが好きと言う訳ではない。純粹に戦うことが好きなのだ、ジャックは。

だから、エリカも覚悟を決めた。

これからも、ジーン、ファイア、そして目の前のジャックたちと共に在るためには、ジャックに勝たなければならない。

寸止めと取り決められている。

エリカの刀は比較的重量があるが、決して扱いにくいわけではない。寸止めもエリカの腕力があれば問題ないだろう。

「言われるまでもなく、最初から全力で行かせてもらいます」

刀を構え、エリカはジャックを見据える。

ジャックの大剣はとにかく龍を相手に戦うために作られている。一撃こそ重いが、一振りの動作が大きい。一気に距離を詰めて喉元に刀を当てれば、そこで試験終了になるとエリカは考えた。

エリカの言葉にジャックは一瞬目を見開くと、すぐに物凄い笑顔になってエリカを見返してきた。その笑顔も、屈託のない、子供のよ

うな笑顔だった。エリカもつい毒気を抜かれてしまふような気がしてしまふ。

ジャックはヴァルトの方に向くと合図を出してくれと声をかけた。ヴァルトはそれに小さく頷くと手を振り上げる。

「はじめ！」

「はあ！」

そして振り下げると同時にヴァルトの大声がエリカの耳に届き、それとほぼ同時に地面を蹴ってジャックに急接近する。

ジャックはエリカに剣を向けて構えていた。それはつまり、飛び込んできたエリカに対して剣を振る態勢に入っていなかったことを意味する。エリカも当然それを狙って飛び込んだのだ。体格差がある以上、いかに力があってもエリカに分が悪いのは明白だ。最初の一撃で勝負を決めようと考えたのだ。

「うおっ、いきなりかよ！」

ジャックは飛び込んできたエリカに驚きつつも、後ずさってエリカと距離を取ろうとする。だが、小柄なエリカはその身体に似合わない龍のパワーを持っている。そのため、ジャックがどんなに素早く後ずさろうともその距離はすぐさま縮まり、気づけばジャックの目の前でエリカは刀を突きだそうとしていた。

ジャックは剣で防御しようとして大剣を自分の前で盾のように腹をエリカに向けて刀をガードしようとする。エリカはそれを見ると素早く刀をどけて姿勢を低くする。今の状態ではジャックからエリカの姿が見えない。ジャック自ら構えた大剣の影にエリカが隠れてしまっ

ただ。

（行ける！）

エリカは大剣の横から飛び出すとその首を狙って刀を思い切り、もちろん寸止めするつもりだが、振るおうとした。

「ふっ」

だが、ジャックはそれを許さなかった。

エリカが刀を振るう直前、ジャックは盾代わりにしていた大剣を横から蹴り上げた。反動で剣がエリカ目掛けて振られ、エリカはそれを手甲で受けるとその重さに驚愕した。

エリカは剣を受けた勢いで宙に浮いて五メートルほど横に飛ばされる。両足で着地すると刀を構えなおしてジャックに向き直る。

（蹴り上げただけで、この威力ですか……）

腕を支点に刀の切っ先近くを作用点にして回転した大剣は、手で振られたかのような威力を含んでいた。

「どうした、嬢ちゃん。本気で来るんじゃないのか？ 来ないならこっちから行くぜ！」

距離を取り、ジャックはすでに構えなおしていた。今度こそ、エリカを攻撃できる態勢になった。

そして大剣を思い切り振りかぶると勢いよく走り込んできた。

「そおら！ー！」

「くっ」

動作が大きいなどともなかつた。持ち合わせた筋肉で瞬発的に思い切り地面を蹴ったジャックは大剣を横から薙いで来た。

エリカはそれを刀で受け流そうと大剣を受け止め、受け流すことなど困難な事を感じ取った。一瞬のつばぜり合いの後、エリカの刀がジャックの大剣に押されて徐々に身体に近づいてくる。

「ぐっ、ジャックさん、寸止めなんてする気ないですね？」

「このくらいで死ぬとは思ってないがな！」

大剣を押し込む片方の手を放すと、ジャックは拳を引いてエリカの腹に強烈な正拳突きを繰り出してきた。刀で大剣を防ぐので精一杯だったエリカはその強烈な一発を貰って先ほどとは比較にならないほど遠くまで飛ばされる。

鎧を身に着けていないエリカは鳩尾にめり込むほどの強烈な一撃に苦悶の表情をするが、攻撃自体は黒鱗によって完全に防がれている。苦悶の表情の中には、相手を侮った自責の念と、ジャックの強さに対する認識を誤った後悔の念が滲みだしていたのだ。

飛ばされながらも姿勢を立て直して着地すると、距離を取って鋭い目つきでジャックを睨み付ける。

（対ドラゴン専用なんてとんでもない。ヒト相手に戦えるからこそ、ドラゴン相手に戦えるんだ……）

大剣を上手く使い、相手の武器を封じると、素手の攻撃を繰り出す。明らかに人間同士が戦う為に作られた技だ。ジャックは大振りの攻

撃の中からヒト相手には有効な急所への攻撃を織り交せてくる。エリカは黒鱗で守られてはいるが、これではいつまで経ってもジャックに一撃を食らわせるなど無理だ。

「どうした嬢ちゃん、まさか俺が鈍重な牛だとも思ってたのか？」
「正直、思っていました。けれど、牛は牛でも猛牛ですね、あなたは」
「へへ、どうも」

素直にジャックが嬉しそうな顔を見ると、エリカもつい今ジャックが倒すべき敵であることを忘れてしまいそうになる。

「だけど嬢ちゃん、なんかズルしてるだろ？俺の一撃を貰って悶絶しないで立っていられるのは相当厳しいと思うんだが」
「やっぱり寸止めする気ないんですね……」

苦笑いしつつも、内心では賞賛と同時に、驚嘆する。

ジャックはただの1発でエリカの黒鱗に気が付いたようだ。さすがにやりすぎたか、とエリカは身構えるが、ジャックは笑顔を崩さずに剣を構える。

「ま、そのくらいないと俺には勝てないけどな。ズルだってれっきとした戦術だ。さあ、仕切り直しと行こうぜ」
「はい、ジャックさん！」

「あら、もう始まつちやつてるわね」

「バ、バーバラさん!？」

突如、背後からかけられた声にジーンとフィアが驚いて振り返ると、そこにはアレックスを連れたバーバラが立っていた。日差しが降り注いでいるにも関わらず、日傘1本、かなりの薄着で現れたバーバラは2人に手を振ると近寄ってきた。

「珍しいですね、バーバラさんが昼間から出歩くなんて」

「私は太陽が天敵な訳じゃないわ、ただ嫌いなだけよ」

ならばなぜ、ほぼ全身黒づくめなのか、とジーンとフィアは心の中で呟いた。熱を吸収して相当熱いだろうが、バーバラは汗一つかいていない。

「アレックスも元気そうだな」

ジーンがアレックスの前に立って頭を撫でようとすると、アレックスはプイツと顔をそむける。

ジーンが複雑な表情を見ると、それをフィアとバーバラが苦笑しながらその様子を見ていた。

「ふふ、アレックスはジーンが相変わらず気に食わないようね」
「そりゃあ、初めて出会った時に尻尾踏まれれば嫌いにもなるわよね」

「そろそろ忘れるよ、アレックス……」

ジーンはアレックスが理解しているかは別として小さく呟く。アレックスはそれに反応するかのようにジーンに顔を向けると、鋭い牙をむき出しにしてジーンに唸りを上げた。

「ダメな様ね」

がつくりと頂垂れるジーンは、ファイアの隣へ戻ると、今度はバーバラに話しかけることにした。

「で、エリカの様子を見に来たのか？」

「まあね、期待の新人ってところなのかしら。ちょっと興味が湧いたのよ」

クスツと笑うと、バーバラはジャックと戦うエリカに目を向ける。

「速いわね」

「ええ、とてもじゃないけど初めて、いえ、子供とも思えない反応速度です」

「普通の人間だったらあの正拳突きで倒れるところだと思うが……」
「ジャックの正拳突きを喰らったの？」

バーバラが冗談ではなく驚いたような表情をする。それに2人が小さく頷いた。

「驚いた、頑丈なんて言葉じゃ説明つかないんじゃない？」

「しかも、死角からの攻撃に反応しました」

最初、ジャックは大剣を盾にエリカの攻撃を防ごうとした。エリカはそれを逆に利用して大剣の左側から飛び出したエリカはジャックの首を狙って刀を振ろうとした。

ジャックはそれを刀を蹴り上げて下から斬り上げるような形で防いだのだが、エリカは右手で刀を振っていた。それはつまり、丁度肩から肘にかけての影から大剣が斬り上げてくる形になったのだ。本来ならば自分の影になって死角になるはずの位置からの攻撃に、まったくタイムラグなくエリカは反応した。

エリカもジャックも気が付いていないようだが、外野から見ていたジーンとファイア、そしておそらくヴァルトもその様子をしっかりと目撃していた。

「いろいろ聞きたいことが山積みねえ」

「ああ、でも今は、エリカが勝つことを応援しよう」

「そうね、エリカ、負けるんじゃないわよ!!」

ファイアの大声に、一瞬エリカの動きが止まると、ジーンたちのように振り向いて小さく頷いた。対戦相手のジャックもその様子をニヤニヤと見ながら大剣を身体の前でぶらつかせている。

そしてエリカは、再びジャックに向き合い、刀を構えて地面を蹴った。

「ふふ、あとでゆっくり聞きたいわね……」

バーバラの呟きは、隣にいるファイアにすら聞こえることはなかった。

唯一反応したのは、アレックスの耳だけだった。

第9話 入団テスト（後書き）

難しい……

な、なんだこれは？

銃とミサイルとロケットだけよりよっぽど書きやすいはずなのに、
どうしてアイデアが浮かんでこない？

戦闘描写が難しいのは得物が変わっても変わらないという事でした
か……迂闊でした。

さてさて、エリカ、人間になってから初の対人戦闘です。

あれですよ、レベルマックスにして最初からやり直したから武器だ
け初期化された感じですよ。HPはマックスで。

エリカの場合は、HPじゃなくて防具が最強という事になるのです
が……。

エリカは果たして見事ジャックを下して入団することが出来るので
しょうか!？

そこ、結果は見えていると言わない! 思っても口に出さない!!

強靱、無敵、最強!! にはまだほど遠いですが、徐々に強くなっ
ていくことを切に願います。え? 作者なのに、って?

分かってませんね、どうなるかは、本当に！ ガチで！ 真剣に！
神のみぞ知るのでしょ！！ あらすじに書いたじゃありませんか
！！

てなわけで今日はこの辺で……

感想等お待ちしております！！

第10話 目を付けられて口を海にさせられた… (前書き)

第10話 目を付けられて口を滑らせれば、ね…

ジャックはエリカがファイアたちからの応援を受けている間、その様子を見つめていた。傍目には面白そうなものを見ているようには見えなかった。だが、内心ジャックはエリカの戦闘能力に舌を巻き、どのように倒すべきか目まぐるしく思考を回転させていた。

(さてと、いったい腹に何を仕込んでいるのやら……)

殴った感触で、すぐにそれが少女の柔肌などではないことは分かった。

だが、鎖帷子くさりかたびらでもなければ、分厚い鉄板を入れているわけでもない。殴った感触も、今までジャックが感じたことのないものだった。

(魔法、か?)

だが、エリカは自分で「使ったことがない」と言っていたし、朝の段階の話だからおそらく嘘ではないだろう。ファイアに教えてもらおうとしていたところからも、十中八九エリカは魔法を使っていない。それにジャックも魔法が発する違和感を感じ取ってはいない。

(まあ、ダメージが通っていないわけじゃあ、ないんだろうが……)

「……やってみれば分かるか」

ジャックは呟いて大剣を持つ手に力を入れた。

(ジャックさん、次はどう来るかな……)

エリカはフィアの声援に頷いてジャックに向き直ると、ジャックの目を見ながら考えた。

すでにジャックはエリカに対して素手の攻撃程度では効かないと気づいているだろう。戦う直前までであった身体の「遊び」が今のジャックからは微塵も感じられない。おそらく、本気の本気、と言ったところだろうか。寸止めをする気などとうに消え失せているだろう。

「嬢ちゃん、来いよ。時間がねえ」

「え？ あ、そうか……」

エリカは5分間の時間制限があったことをすっかり忘れていた。チラリとヴァルトを見ると、小さく頷いて腕を胸の高さに持つてくると指を3本立てた。

「なら、お互い全力で」

「やっぱり本気だしてなかったのか。甘く見られたもんだなあ、俺も」
そう言うジャックの顔は心底嬉しそうだ。

エリカはこのヒトの身体で戦うのは初めてだが、良い相手に出会えたことに感謝した。なまじ中途半端な相手に戦うのとは違い、自らの限界を知ることが出来る。

少なくとも、今のエリカは以前の身体よりもはるかに反応速度は速い。身体が縮んで情報伝達が速くなったのかもしれない。

先ほど目に見えていない、死角からの攻撃を感じ取って反応してしまった。おそらく外野から見ていればかなり不自然な動きに見えていただろう。あとで質問攻めにされなければいいのだが。

(……考えるのは、あと！)

今は戦うことに集中する。

意識がジャックに集まったことにジャックも気が付いたのか、大剣を握る手に力が入ったのが分かった。

しばらくの間、お互い見つめ合うだけの時間が流れる。

10秒もなかったのだろうが、1分にも10分にも感じられる数秒であった。その数秒が過ぎた時、エリカは最初と同じように地面を蹴ってジャックに接近しようとする。

だが、その速度は最初の比ではない。

「は、速い！」

ジーンの驚愕の音が耳に届くのと、ジャックの目の前に着いたのと、どちらが先だったかは分からない。少なくともエリカは刀を振り始めたときに声を聞いたような気がした。

刀を振り抜こうとしてジャックが大剣で振り下ろされた刀を受け流し、受け流すために傾けた大剣を片手で軽々と振るうとがら空きのエリカの脇腹めがけて振ってきた。

しかし、それはわざとエリカが作った隙だった。そこに大剣が振られると、エリカは身を翻して大剣の軌跡をスルリと回避し、1回転するように反転すると反転する勢いで刀を横薙ぎに振るう。

「ひょうっ！」

軽い口調とは裏腹に鋭い動きで1歩後ずさり、最小限の動きで刀を回避すると大剣を持ち上げて勢いよく振り下ろした。

反転して着地を狙われたエリカはバランスを取れずにいた。そこを狙ってジャックは大剣を振り下ろしてきたため、エリカは体勢もままならず刀の背に手を当て、正面から大剣を受ける。

ガギッ！！

金属が擦れ、軋む嫌な音が響いて、エリカの足が地面を擦りながら少し後退する。受けた衝撃で腕の関節が壊れるかと思っただが、腕全体を黒鱗で覆うことで腕を強化し、握った刀を落とされないようにするが、振り下ろす側とそれを受け止める側、どちらが有利かは明

白だ。

「ぐっ」

「どうした、こんなもんじゃないだろう？」

「も、もちろんで、すよ！」

口を開けると腹に入れた力が抜けそうになり、言葉も絶え絶えになっってしまう。エリカがそう言った瞬間、大剣に込められた力が一気に増し、さしものエリカも耐え切れなくなって刀の背に当てていた手の力を一瞬緩める。直角に拮抗していた力が刀を傾けたことで崩れて刀はエリカの左に流れていく。

そして大剣がエリカの足元を穿つよりも速く飛び退くと、大剣がさつきまでエリカのいた場所に突き刺さり、修練場の地面に大剣が思い切り突き刺さり、爆発のような音と共に地面が爆ぜた。砕け散った土が宙を舞い、土煙となってエリカとジャックの視界を封じる。

（な、なんて力……、殺すつもりですか！）

内心であまりに後先を考えないジャックの馬鹿力に悪態つきながらも、土煙の中でエリカはジャックの姿を探す。

「どうした、背中ががら空きだぞ？」

「なっ!？」

突如、背後から声が聞こえ、反射的に姿勢を低くして前に飛び込むように移動すると、土煙の中から巨大な剣が姿を現してエリカがいた場所で空を斬った。

「何時の間に……っ！」

地面を転がりながら距離を取り、立ち上がって背後に振り返ると、追撃を仕掛けてくるジャックの姿が視界一杯に広がっていた。

「遅い、遅いぞー!」

しゃがんだ状態のエリカには振り下ろされた大剣を刀で防ぐことはできない。

(し、仕方ない!)

何も持っていない手を振り上げて、振り下ろされる大剣を手甲で受け止める。

「んな!」

予想外の行動に大剣を振ったジャックの方が驚いた。

手甲の強度などが知れている。それで大剣を防ごうとしたのだ、到底手甲が耐えられるはずもない。手甲が砕ける音がして大剣は手甲が守っていたはずのエリカの腕を切断、

できなかった。

……ミシリ……

金属ではない、何かとても固い物が擦れる音。

エリカは腕に黒鱗を纏い、ジャックの渾身の一撃を左手だけで受け止めたのだ。あまりの驚きにジャックの動きも止まってしまう。

「嬢ちゃん、あんたいったい……」

「はあ！」

固まった瞬間を逃す手はなかった。

エリカは右手に握る刀を思い切り突き出すとジャックの肩口を抉る様に突き抜いた。肩のアーマーが接合部分を残して剥がされ、エリカの刀はジャックの肩すれすれを通過、エリカはそのまま刀の向きを変えるとジャックの首に刀を突き付けた。

「あたしの、勝ちです」

土煙が晴れ始めた頃、ジャックは大剣をエリカの横の地面に下ろし、エリカはジャックの首に刀を突き付けていた。エリカが少しでも力を入れて刀を引けば、ジャックの首は血の噴水を吹いて切断されるだろう。

「……俺の認識が甘かったな。嬢ちゃん、あんたはきつと人間相手ならほぼ確実に勝てるだろうな」

ジャックは負けた悔しさよりも、自分よりも強い相手と戦えたことに対する感動が勝っているようだ。悔しがるそぶりも見せずにただただ笑みを浮かべていた。

「……ありがとうございます」

「それと、最後のズル、ありゃあいつたいなんだったんだ？」

ジャックは気になる事をそのままエリカにぶつけていった。刀を下して鞘に納めると、エリカは人差し指を口元に当てて小さく呟いた。

「秘密ってやつです」

ジャックはきよとんとした表情を一瞬見せたが、すぐに諦めたようにため息をつく、大剣を背中に戻してエリカと共に歩き出した。

「どうやら、決着はついたようだな」

ヴァルトは口元に笑みを湛えながら、2人に近づいてきた。そこにジーンとフィアが走り込んできて、フィアはそのままエリカに抱き付いた。

「さっすがエリカちゃん！　こんな筋肉ダルマに負けるわけないわよねー！」

「むぎゅっ、フィアさ、あわわわっ」

突如抱き付かれて無防備な恰好をさらけ出していたエリカは勢いに押されて地面に押し倒された。押し倒したフィアはエリカの上で満面の笑みを浮かべている。

「ジャック、手加減は……、してないよな」

「あつたりめえよ。純粹に嬢ちゃんは強いぜ？」

「ということば……」

男2人の話を聞いていたエリカは、そこで隣にいたヴァルトを見上げ、ヴァルトはエリカを見下ろしながら小さく頷いた。

「エリカ、君は合格だ。晴れて我らアクイラ騎士団の仲間となった」

ヴァルトの言葉に、エリカは少し頬をほころばせ、頷いた。

「おめでとう、エリカ」

ファイアがエリカの上で拳を上げ、本人以上に喜び、ジーンとジャックが笑いながらその様子を見てみると、やや離れた場所にいたバーバラがアレックスを連れて近づいてきた。ファイアが気づいてそそくさとエリカの上から退くとエリカの手を握って引き起こした。

「この間はおめんなさいね、長旅で疲れてろくな挨拶も出来なくて」「い、いえ」

柔らかい笑顔とは裏腹に、バーバラの目つきは笑っていない。

「改めて自己紹介させてもらっわ。私はバーバラ・ファタル、この子は相棒のアレックスよ」

バーバラは寄り添うように足元で直立不動だったアレックスに視線を送る。それに沿ってエリカもアレックスに目を向けると、ぱっちり目が合った。

アレックスは何故か睨むようにこちらを見ているが、エリカの興味はその目つきよりもアレックスの身体に向かった。

そして……

モフッ

アレックスの頭を撫でると、何とも言えない撫で心地がエリカの手を包んだ。

固すぎることもなく、柔らかすぎることもないほど良い毛並が最高の触り心地を演出している。

モフモフ……

「エ、エリカちゃん？」

ファイアが恍惚な笑みを浮かべるエリカに恐る恐る聞いてくるが、エリカは返事もせずアレックスの首に手を持っていく。

「ふふ、エリカはアレックスが気に入ったみたいね」

バーバラが妙に嬉しそうな笑い声を上げたのにアレックスが反応して、アレックスはエリカから離れようとする。

だが、エリカは首に手を回してアレックスの逃亡を妨害する。

<や、やめんか！>

「あ、やっぱり喋れたんですね」

我慢できなくなったアレックスが傍から見ればただ鳴いているだけの声で叫んだのに対して、エリカはアレックスの耳元で小さく、誰にも聞こえないほど小さい声でポツリと口を開いた。

エリカが自分の言葉を理解していることに驚いたのかアレックスの身体が一瞬硬直した。

<そなた、何者だ？>

当然のような質問がアレックスから聞こえてくるが、あいにくエリ

力に答える気はなかった。今はそれよりも大事な事があるのだから。

「うりゃ」

モフモフモフモフモフモフモフモフモフモフモフモフモフモフモフモフモフッ！

何とも子供っぽい声を上げると、エリカは大きなアレックスの身体に抱き付いて頬をスリスリし始める。

「くななっ！？ くっ、やめろと言っているだろう！>

「聞こえませ〜ん」

あまりの触り心地の良さに、完全にエリカは我を忘れてしまった。

黒鱗に覆われていたエリカの身体は柔らかさを微塵にも感じたことなど無かったし、今の身体になってこんなに肌触りの良い物に出会ったのは初めてだった。

「エリカ、アレックスが嫌がっているのだけれど……」

バーバラが苦笑しながら近寄ってきたので、ようやくそこでエリカはアレックスを解放した。解放されたアレックスは心底疲れたのかぐったりとしてバーバラのマントの中に逃げ込んでしまった。

「バーバラさん、アレックス、また貸してもらってもよろしいですか？」

未だに自分の世界から抜け出さないエリカは手をワキワキさせ、妖しい目でマントの中のアレックスを見つめる。その視線に何かを感じ

じたのかアレックスは一瞬飛び跳ねるような動作をした後、バーバラの反応を気にして顔を見上げた。

「使い潰さないでね？」

おそらく、アレックスは必死に止めてくれ、と懇願していただろう。だが、彼の思いはバーバラの無情な了承で見事に打ち砕かれた。

返事を貰ったエリカは嬉しそうに頬を綻ばせて大きくお辞儀をする。と、礼を言い、なんとその場でバーバラのマントの中に飛び込もうとしたので、さすがにやりすぎだという事でフィアの強烈な一撃を頭に受ける結果となった。

その夜、エリカは部屋のベランダから夜空を眺めていた。

戦闘試験の後、その後の事務処理を行うと言ってヴァルトは宿舎に戻り、バーバラはさすがにアレックスを心配したのかいつの間にか

アレックスを連れてどこかに行ってしまった。

エリカはジーンたちと共に食堂で入団記念の宴に付き合った。

先日初めて会った騎士団の人々も、エリカの突然の入団に始めこそ驚いた表情を見せたが、すぐにそれは拍手に変わり、その時食堂にいた全ての騎士がエリカの入団を心の底から喜んでくれた。

「ヒトとは、不思議なものです」

フィアはすでに床に就いている。どうやら騒ぎすぎたのと酒を飲みすぎたのが原因で食堂で夢の世界に旅立ってしまった。エリカともう1人の女性騎士と共にこの部屋まで運び、ベッドに投げ込むとすぐに丸まって静かな寝息を立て始めた。

「あたしたちなら、1年経ってもよそ者など信用しないのに……」

龍は警戒心が強い。それはエリカとて例外ではない。

だが、騎士団の人々はすぐにエリカを受け入れてくれた。竜人族の者でも、初めてエリカやエリカの父親と顔を合わせた時はエリカたちに武器を向けた。恰好が問題だったのかもしれないが。

同族であれば、警戒心は緩いのだろうか？

エリカは内心で首を傾げる。

だが、ヒト同士でも国が違えば、かなりの警戒心を持つという。ならば素性も知れぬエリカがすぐに信用された理由が分からない。

エリカとして見れば、これ以上にありがたいことはないし、感謝もしている。

しかし、どうしても話が上手すぎる気がしてならないのだ。500年も生きていると、相手を疑ってかかる癖が付いてしまう。簡単に相手を信用できない自分にエリカはため息をついた。

「やはり、このヒトが特別なのでしょうが……」

誰に聞くでもなく、ただ呟く。

夜空は雲一つなく晴れ渡っており、端の欠けた月が辺りを照らしている。

「ここで特別なのは、あなたじゃない？」

「っ!？」

期待していなかった返事が返ってきて、振り返ると室内にバーバラがいた。もちろん、その隣にはアレックスがちょこんと座っている。

「こんばんは、エリカ」

「……部屋のドアには鍵がかかっていたと思うのですが？」

昼とは明らかに違う空気を纏うバーバラに、エリカは警戒心むき出しで言う。あいにく、寝る直前だったので刀はベッドの傍だ。今のエリカは丸腰、相手は腰に剣を帯びている上に、アレックスを勘定に入れると2人だ。分が悪い。

殺気を遠慮なくバーバラにブチかましているのだが、バーバラは怯む様子もなく、むしろそれを感じ取って笑みを深めている。それがエリカには理解できない。

(戦いに来たわけではない……?)

最初の気配は間違いなく戦う時のそれかと思えた。だが、いざエリカが戦闘態勢になるとバーバラはその気配を霧散させてしまった。アレックスも大人しく座っているだけだ。

するとバーバラは頭に指を当てて考え込む仕草をし始めた。

「その殺気、やはり身に覚えがあるわ。でも、あなたみたいな少女から受けたものじゃない……。まるで、ドラゴンのよう……」
「っ！」

ドラゴンという単語に反応してつい身構えてしまった。すると、それを待っていたかのようにバーバラはエリカに向き直ると口を開いた。

「覚えてない？ もうだいぶ前の事だから私だって忘れかけていたけれど……」

「え……」

バーバラは穏やかな表情で笑みを浮かべている。その顔をエリカは目を細めて見つめていると、記憶の中のとある1人の輪郭とそれが一致した気がした。

「……パファイオベディルム、殿？」

無意識のうちに呟くと、バーバラが満面の笑みを浮かべた。エリカがすでに遅すぎるのだが自分の口を押えて後ずさりする。

<パファイオ……、なんだそれは？>

今まで黙っていたアレックスがバーバラを見上げると、バーバラは

エリカから目を逸らさずにそれにこたえる。

「私の古い名前よ。300年くらい前の」
<なんと！ ではやはりそなたは……>

「エリカ……」

「……………」

駄目だ。言わないで。それを言われたら自分はここに居られなくなってしまう。

「私はあなたに会ったことがある、300年前に」

いけない。それ以上は。

だが、バーバラは1歩前に出るとエリカに決定的な打撃を与える言葉の口にした。

「あなた、ドラゴンね？」

刹那、エリカの意識は真っ白になってしまった。

第10話 目を付けられて口を滑らせれば、ね…（後書き）

ばれちゃいましたね

さてさて、どうなっちゃうんでしょうか!?

そしてバーバラの正体とは……近々公開予定！ です

一応言っておきますが、バーバラは良い人ですから。

感想などお待ちしております!!

第11話 親友（前書き）

心の友と書いて、心友！

古いわっ！

第11話 親友

真っ白になった頭の中は、完全に全ての情報が抜け落ちてしまっているにも関わらず、煩雑この上なかった。膨大な量の情報が出たり入ったりを繰り返して、その度に頭の中が初期化される。

「……、それを知って、どうしようと、いうんですか？」

何を今さら、と言われてもしょうがない。

だが、エリカにはどうしようもなかった。バーバラは答えにわずか数日でたどり着いてしまった。古き友人に出会えたことよりも、この場に居られなくなることの恐怖がそれを押し潰そうとしている。

自分でも言葉が掠れているのが分かるほど、エリカは動揺していた。

「どうもしないわよ。ただ、懐かしい人、ドラゴンのあなたに言うのもおかしな話だけれど、友人に会って声もかけないのは、どうかと思ったのよ」

そう言うと、バーバラはベランダに出てエリカの前に立つ。

その笑みは、決して意地汚いものではなかった。ただ、友人に出会ったことを嬉しく思う気持ちだけだった。

「……たとえそうだとしても、あなたがいることはあたしがここに、この騎士団にいるためには障害になる、それは分かってもらえますよね？」

「……ええ、痛いほど、分かるわ。あなたが何故、ここに居るのか、

どうして、そんな姿に『成り下がっている』のか、私にはさっぱりよ。だけど、ジャックの言葉を借りれば、借りを返したいのよ、古い借りを」

「借り……?」

「覚えてない?」と言ってバーバラはエリカの隣に来てベランダの柵に身体を寄りかからせた。その前でアレックスが器用に口でベランダの両開きの戸を閉めると、フィアに声が聞こえないようにした。

「覚えてないならそれでもいいわ。でも、もしあなたが今困っているのなら、少しでも手助けが出来ないかな、と思って」

「……………はあ」

エリカは警戒心をむき出しにしていた自分が馬鹿らしくなった。

バーバラは、エリカの正体を騎士団の仲間に言う気など毛頭なかったのだ。自分の興味本位でも言おうか、そういうものの元にバーバラは動いている。

「変わりませんね、そういうとこ」

「ふふ、認めたわね」

これからどうしようなどと真剣に考えていた自分を頭の中から追い出して、ため息をついて口を開くと、バーバラがしてやったりという表情を浮かべた。

「呆れた、確証もなかったんですか?」

「そりゃあ、ドラゴンがヒトになってるなんて、誰が考えるのよ? あなたが昼間のジャックとの戦いで黒鱗を発現してなければ可能性で終わってたわよ」

「……………よく、見えましたね」

あの時は、ジャックが作り上げた土煙で視界は最悪だったはずだ。その中で手甲からわずかに覗いた黒鱗を目視するなど、並大抵のことではない。

「吸血鬼の視力を舐めるんじゃないわよ？」

「でしたね」

<すまん、話に全くついていけないのだが……>

居心地の悪そうな声が聞こえて2人が目を下すと2人の間で困った表情を器用に作り上げているアレックスの姿が目に入ってきた。バーバラが思い出したようにアレックスの頭を撫でると、アレックスを足元に引っ張ってエリカの正面に座らせた。

「アレックス、この子はエリカ、本名は違うけどね。ドラゴンよ、それも黒龍」

<なっ！ 冗談だろう！？>

信じられないものを見るような目でアレックスがエリカを見つめると、エリカは小さく頷いた。

「証拠が見たいなら、これでどうでしょうか」

腕を捲ってアレックスに見えるように腕を彼の前に持っていくと、黒鱗が発現して腕が鱗に覆われる。指の先まで鱗に覆われ、少し動かすたびに擦れる音が響き渡る。

<ご主人、あなたの交友関係には驚かされます……>

「ありがとう」

<して龍の姫が何故この^{なにゆえ}ような場所に、いえ、それ以前にその姿は

「いたい……」>

「それは、話せば長くなるんですが……」

「夜は長いわ。話して、親友？」

バーバラが笑みを浮かべると、何かの蟠りわたかまが溶けてしまったかのよう
に心から抜け落ちた気がして、少しだけ気分が良くなった。

そしてエリカはゆっくりとこれまでの経緯を話し始めた。

「……………ふうん」

エリカが事の次第を全て話している間、バーバラは一言も発さず、
ただただエリカの言葉に耳を傾けていた。アレックスもバーバラの
傍で耳をエリカの方に向けながら座っていた。

「理由は、分からないんです。ヒトの世界なら何か分かるかな、と
思っって森を出ました」

「ドラゴンは書物なんて書かないからね、あなたのお父様なら何か知っているんじゃないか？」

バーバラの質問にエリカはため息をつくだけだった。

「真つ先に聞きましたよ。だけど、父上でも元の姿に戻れる方法はもとより、原因も知らないみたいでした。知っていたらここにはいないですよ」

そう言うと、「それもそうね」とバーバラはベランダの柵から離れて部屋の中を覗いた。フィアは起きる気配もなく寝返りを打って布団を身体に巻き付けながら寝ている。

「事情は分かったわ。あなたが元の姿に戻る方法を私も書物室で探してみるわ」

「あたしも行っていいですか？」

もとより、ヒトが蓄えた龍関連の書物を目当てに来たのだ。出来れば自分で調べたい。

だが、バーバラは残念そうに首を横に振った。

「書物室には閲覧禁止の書物が幾つかあるわ。正直言うと、騎士団の団員程度で見られる書物には限界があるわ」

「……バーバラさんも騎士団員じゃないんですか？」

「私は吸血鬼よ？」

随分と思わせぶりな笑みを浮かべるとバーバラはエリカの前に立った。

「……盗むんですね」

「人聞きが悪いわ。拝借するのよ、ちゃんと返すし」

別段悪びれる様子もバーバラにはなかった。

これ以上言っても無駄だとエリカは判断して、ふと気になったことを聞くことにした。

「そういえば、どうしてバーバラ・ファタルと？ パファイオベディルムの名はどうしたのですか？」

エリカがそう聞くと、バーバラはどこか悲しげな表情をした。月明かりがその顔をほのかに浮かび上がらせる。

「パファイオベディルム家はもうないわ。私のせいでもあるし、私もあの時きつと1度死んだのよ。死んだ名前をいつまでも背負う気はないわ」

「そんなっ！ 曲がりなりに王家ではないですか！」

「だからこそよ。一族から吸血鬼など出した王家が、叩かれないとも思う？ あなたでも分かるでしょう？ 一族から異端が出れば、ヒトはその一族ごと異端を葬るのよ。それに、私にその踏ん切りをつかせたのはあなたでもあるのよ？」

それを言われると反論できない、とエリカは返答に詰まった。

バーバラの目は一切の希望を持ち合わせていなかった。

「それが、ヒトという生き物なのよ」

「でも、あなたはまだ生きている……」

「……良い親友と仲間に出会えたからね」

バーバラは思い出したように帯びていた剣をエリカに当たらないように抜くと、その刃を月明かりに当ててエリカに見える位置に持つ

ていった。

「分かる？ あなたが別れ際にくれたモノは私の宝物になっているのよ？」

「……300年も使っていてくれたんですか？」

バーバラの刃は、月明かりでも分かるほど変色している。いや、変色させているのだ。本来の色を隠すために、わざと金属粉か何かを塗り付けているようだ。

「あなたのおかげで、今の私はあるようなものよ。だから、あなたのために私も出来る限りのことをするわ」

「本当ですか？ ならさっそくお願いがあるのですが……」

エリカはバーバラの言葉を聞いて若干息を弾ませながらバーバラに詰め寄った。

「アレックスをいつでもモフモフさせてください！」

アレックスの時間が止まったのは言うまでもない。

「それじゃ、私はこれで失礼するわ。さすがに自室を深夜に空けると怒られるから」

バーバラは足音も立てずに部屋の扉に近寄ると、振り返ってエリカに手を振った。

バーバラの足元にはぐったりと、夜目でも分かるほどにやつれたアレックスがいる。あの後、承諾を貰ったエリカは10分ほどアレックスをモフモフするという、至高の時を過ごし、どこかしら肌もテクテカとしている気がする。

「あ、バーバラさん。今夜は窓を開けて寝てくださいね」

「? どういう意味?」

「久々に歌いたい気分ですので」

エリカが満面の笑みを浮かべる。

それは、ジーンにも、フィアにも見せたことのない笑顔だった。食事をするたびに出す笑顔の安売りなどとは違い、心の底からの笑み。バーバラは意外そうな顔を見ると、すぐに小さく頷いて部屋を出て行った。

「……………うん」

扉を閉めた時の音で、フィアが寝苦しそうに寝返りを打った。エリカはベッドから落ちた布団を抱きかかえるとそれをフィアの上にフワリと優しくかけた。

「起きないでくださいね？」

小さく呟くとエリカは再びベランダに出る。

どこからともなく心地よい風が吹き付け、エリカの黒髪が風に揺れる。

（歌えるところまで、になりそうですね）

エリカは息を整えて胸を張ると、口を開いてある歌を歌いだした。

龍は翔ぶ

遙かな蒼空を見上げて　さらにその先を目指して

決して折れぬ翼と　決して穿てぬ鱗を持って　誰よりも高く
誰よりも速く

いつか来る終わりの日まで　共に　翔ぼう

澄んだ歌声は夜の風に乗って広く伝わっていく。
どこまでも高く、鮮明に歌が夜の世界へと響き渡っていく。

たとえその翼が焼かれようとも　穿たれようとも

君と共にあろう 君のためにあろう 君だけの翼であらう 君
だけの鱗であらう

それがわたしの願いだから それがあなたの望みだから

幾万年が経とうとも 幾星霜いくせいそうの時が経とうとも 想いは朽ちない

時を越え 死が2人を分かつ時ことがあるうとも わたしはあ
なたを探しにいこう

だからあなたもわたしを探そう

それが わたしとあなたの 唯一の繋がりだから

「……相変わらず、悲しいのか、恋しいのか……」

ベッドに寝転がり、開け放した窓から見える月は、どことなく歌を
代弁しているかのように淡い光を放っている。

「あの声で聴けないのが、唯一残念ね」

バーバラは窓を開けたままゆっくりと目を閉じて、風に乗る歌を聞
きながら眠りに付くことにした。

とはいえ、少なくとも歌が終わるまでは寝る気はなかった。

翔ぼう

どこまでも

誰の手も届かないところまで

王の丘に日が昇り 誰もがわたしたちを見上げている

目的地の無い旅

出発地もない旅

共に蒼空そらを駆けるだけの旅を いつまでも続けよう

それがわたしの幸せだから あなたのそばで翔べるだけでいい

「……ん、夜中に誰か歌っているのか……？」

寝ていると心地の良い歌が聞こえてきた。

起き上がって窓から外を見渡すが、声の主を視認するには至らない。

「眠りたくなるほど心地よいのに、眠りたくなるな……」

ジーンは窓から見える月を見上げながら声に耳を澄ませていた。

ただ1度の

夢のような 幻のような 蒼空そらを翔ひらぼう

光と闇に覆われた 蒼空にその身が溶け込むまで どこまでも
広がる蒼い海そらを

共に往いこう

「……綺麗な歌」

少女は寝台から起き上がると、眠気眼を擦りながらも夜空を見上げる。
る。

風に乗った歌はどこからともなく聞こえてくる。

少女は窓から外を見渡しながら、星を視る。

「慈悲が闇夜を覆っている……。これが、慈悲……？」
「姫様？ 起きられていますか？」

背後の扉の向こうから、耳障りにならない、小さな、だがはっきり
と聞こえる声が少女の鼓膜を振るわせる。

「聞こえている？ この歌」

「歌、ですか？ ……ああ、聞こえます。どこの言葉でしょうか…

…」

「ふふ、ヒトの言葉じゃなさそうですね。それでいて、ヒトのよう
な情緒に溢れている……」

歌を作ったのはヒトだ。

エリカがまだ龍の姿だった頃、1人の吟遊詩人が『友』の元を訪れた。

そこでエリカは彼に出会った。

あの頃は、ヒトの言葉など話せなかった。だから、感覚と吟遊詩人の纏う空気から歌詞を読み取った。どこか儚げで、それでいて誇らしい、龍を題材にした詩^{うた}。

エリカが広め、今では龍の間では子守唄のように歌われている。

この歌詞を理解できているかは分からない。ヒトの身で龍の言葉を話すのには限度がある。使えない単語もたくさんある。

だが、ヒトが作った詩だ。エリカも詠いながら気が付いたが、エリカは淀みなく歌うことが出来ている。

龍の言葉を使っているにも関わらず、喉に詰まらず滑らかな歌声と
なつて空に広がっていく。

第11話 親友（後書き）

は、いい、補足タイム！

なぜエリカが人の身でありながら龍の歌を詠えたのか、なんですがあれは極論すれば龍の言葉ではありません。

ヒトの言葉を可能な限り龍の言葉に近づけたものです。

基本固有名詞以外、龍の言葉はヒトが「猛烈に頑張れば何とか話せる」レベルの言葉です。逆は至極簡単なのですがね。

次回からエリカとバーバラの過去話が続きます。何とかまとまると良いんですが……

ご感想などお待ちしております！

第12話 Long time ago ? (前書き)

顎は時に長い

違っから！

第12話 Long time ago ?

「はあっ、はあっ」

息を上げながらも、女性は森の中を全力で走る。

追手が来ているかなど確認する余裕もない。ただただ前へ、少しでも遠くへ逃げようと走り続ける。

「こ、ここまで来れば……」

森に入って3日が経つ。

すでに逃げ出す前に詰め込んだ食料は底をつき、最後の水も数時間前に飲み干してしまった。その水でさえ、すでにこの森の高い湿度で半分腐りかけた水だ。それでも飲まないよりはマシだったのが唯一の慰めだろうか。

女性は手近な倒木に寄りかかると、体中に巻かれた包帯を見つめる。腕、足、腹、首、身体のほとんどの部位に真っ赤に染まった包帯が巻かれている。元は白かったのだが、激しく動いたせいで傷が開いてしまったようで、血が止め処なくあふれ出ようとしている。

「もう、ダメかしら……」

傷を受けたのは2日前だ。食料を詰め込んだ際に一緒に入れた薬など最初の1週間程度で使い切り、残っていたのは包帯だけだった。

まともな処置もせず、ただ血を止めるだけに包帯を巻いていただけ、限界はすぐにきてしまったようだ。

地が包帯の許容量を超え、わずかに覗く肌を伝って地面に滴り落ちる。

女性は力なく腕を下す。

すでに立ち上がるだけの体力も残されていない。ただただ息をするのみ。血を止めようとする気力も出ない。

「こんなことなら、もっと人生楽しみたかったなあ」

今さら、失った時は戻らない。

自分は今もうヒトではなく、ヒトの仇敵となってしまうた。家族は女性が逃げ出すのを手助けして追手に捕まった。どうなったかは知らないが、このご時世、吸血鬼を出した一族がどうなるかは火を見るよりも明らか、根絶やしだ。

両親、子供はもちろんのこと、祖父母、従妹、いとこ叔母叔父まで、すべて根絶やしにされる。

それを思うと、女性の頬を血ではない液体が零れ落ちていく。

自分をここまで育ててくれた家族も、親しかった親類も、もうこの世にはいないだろう。自分が吸血鬼になってしまったばかりに、数多くの人々が殺されただろうし、これからも殺されるだろう。女性の一族は近隣の国にも数多く嫁いでいる。その全てが根絶やしの対象となるのだ。嫁いだ先で生んだ子供が根絶やしの対象になってしまふと思うと、女性はあまりの自責の念に押しつぶされそうになっ

てしまう。

「どうして、神は私をこんな身体にしたのかしら……？」

本来ならすでに死んでいてもおかしくないだけの血を流している。だが、彼女は死なない。いや、死ねないのだ。

吸血鬼が持つ、超人的な自己再生力は、大概の傷を治してしまう。肩から入って腰に抜けた裂傷は腕を切断してもおかしくないほど深く身体を抉っている。人に生まれて、死ぬほどの痛みを味わったのはこれが初めてだ。死ぬほどの痛みに耐えなければならぬ自分の身体が恨めしく思える。

だが、いかに吸血鬼が不老不死と言われようとも、生ある者いつか死ぬ。

吸血鬼の場合は、それが「物凄く死にくい」だけなのだ。無数に斬られ、焼かれ、貫かれた身体はすでに吸血鬼としての再生能力すら超えるだけの損傷を受けている。

その証拠に2日前の傷は治るところか、普通の人のように鈍痛を伴って神経をこれでもかというほど犯している。

「かはっ、……もうダメ、かな？」

不意に嘔吐するような感覚に襲われ、何かが喉を逆流してくると、彼女は鮮血を口から地面にぶちまけた。鮮血の中に妙な固体が混じっていて、その部分だけ血の海が少し盛り上がっている。胃壁が喉の一部だろう。再生能力が追いつかない部分が壊死を始めたのかも。しれない。

自分の死期が刻々と近づいているのを感じながら彼女は倒木のそばに横たわる。世界が90度回転して、視界が急激に遠のいていく。

「死にたくない、よ。死にたくなんか……」

頭にあつた血がすうっと抜けていくような感じがする。それと同時に自分の意識が身体から抜け落ちていくような感覚が彼女を襲い、彼女は意識を手放した。

何かを叩く音がする。

何か、金属を叩く音だ。以前、鍛冶屋を見た時に、こんな音を聞いたことがあるような気がする。

「……ん」

「お、起きたかいの？」

目を開けると、目の前に老人の顔があつた。たつぷりと髭を生やし、口は髭に埋まって見えない。柔和な笑顔が視界に入り、彼女は自分が生きていることを自覚した。

「い、生きてる、の？」

「おお、生きとるぞ。見つけた時は死んでるかと思つとつたが、まだ息があつたのでな。儂らの村まで担いで来たんじゃ」

起き上がるうとして、身体に激痛が走つて苦悶の表情を浮かべる。

老人が慌てて彼女を横にした。

彼女は自分の身体が全くと云つていいほど動かないことに驚いていた。動かそうとすると激痛が全身を襲ってくる。

「そなたの身体は切り刻まれて神経までズタズタなのじゃ。正直意識が戻つただけでもめっけもんだと思う事じゃな。時にそなた、名前は何と言つ？」

「え……」

そう言われて、彼女は黙り込んでしまった。本当の名前を言えば、たとえ目の前の老人が善良でも、きつと自分を見放すだろう。おそらく大陸全土に彼女の一族の名前は広まっているはずだ。

「言えんのか？ 安心せい、ここは森の外の連中とは隔絶されておる。外の情報が入らん分、ここの情報は外には出ん」

老人は立ち上がると近くにあつた壺から水を汲み、彼女の口にゆつくりと流し込んだ。久々に飲んだ綺麗な水は、乾ききっていた彼女の喉に潤いを与えてくれる。

「……カトレヤ、カトレヤ・パフィオベディルムよ」

「カトレヤじゃの？ ではカトレヤ殿、そなたの今の状況を教えておくとしようかの。取り乱すでないぞ？」

「取り乱したくても、動いたら死にそうになるわよ」

「ほほっ、それもそうじゃった。では言うが、そなたは今意識がある事自体信じられんことなのじゃ。全体の3分の2以上の血液を失った上に、体中に裂傷、火炎魔法による火傷を負い、正直生きている事すら不思議なくらいじゃ。それもそなたの持った力のおかげじゃの」

最後の言葉にカトレヤは目を見開いて老人を見つめる。

老人は表情を変えずにただ小さく頷くだけであった。

「そなたがヒトではない事はすぐに分かった。だが、そんな事は儂らにはどうでもよいのじゃ。今、目の前で死にかけておる別嬪さんがおれば、助けるのが筋というものじゃ」

「どうでもいい、ことなの？ 分かってるようなら言うけど、私は吸血鬼なのよ？ 怖くないの？」

そう言うと、老人は豪快に笑い出した。なぜか馬鹿にされたような気がしてカトレヤは面白くなさそうにその様子を見つめる。

しばらくしてようやく笑いを抑え込むことが出来た老人は、顔を近づけてカトレヤに言った。

「吸血鬼など、世にごまんといるわい。それに儂らは吸血鬼よりもヒトが恐れる者たちと付き合っておる。安心せい、ここにそなたを拒む者はおらん」

「吸血鬼より、も……？」

「そこでそなたの話の戻るんじゃ。いかにそなたが優れた再生能力を持つとも、その身体はすでに限界を超えている。儂らも出来る限りの事はしたんじゃが、これ以上の回復は望めん。そなたにはすまんが、儂らがしたことは数日程度の延命にすぎんのじゃ……。そこじゃ……」

老人はカトレヤの顔の前で人差し指を立てた。

「そなたの選択肢は2つじゃ。1つ、このまま処理をせず、死ぬこと」

中指を立てる。

「2つ、儂らについて来るか、じゃ。断然こちらをおすすめる」
「……選択肢ないじゃないですか」

「ほほっ、じゃが苦しいぞ？死ぬほどの苦しみが伴うかもしれん。何しろ、ヒトの間では究極的な事をするからの。そなたの再生能力が追いつかなければ、死んでしまうかもしれん」

「それでも、生きられるなら……！」

念を押してきた老人の腕を、激痛に耐えながら握る。驚いて老人が腕を下させようとするが、カトレヤは悲鳴を上げる腕に叱咤して腕を放さない。

「私を連れて行ってください！何があっても耐えて、生きてみせます！」

そう言うと、老人はニコリと笑い、部屋の扉から外に顔を出すと外に向けて何かを呼びかける。
しばらくすると若い男が数人入ってきて、カトレヤの横たわっている担架の四隅を持つと持ち上げ、部屋から運び出す。

外へ出る時、老人が薄い布を男たちに渡し、それを4人が空いている手でカトレヤの上にかざした。

「分かってらっしゃるんですね……」

視界に入る男に向かって言うと、男は少しだけ笑みを浮かべて頷いた。

外は、小さな集落の中心部だった。中心に何かのモニュメントのようなものがあり、それを囲むように小屋が立てられている。森の中ではあるが、そこだけ木が切り倒されて日陰が無かったのだ。カトレヤは吸血鬼、直射日光はあまり気分の良い物ではない。

書物に聞く様に、日光を浴びて灰になることも、流水を渡れないこともなかったが、日光が極端に不愉快に感じられるようになったのは確かだ。

男たちはカトレヤの身を案じて日陰を作り出してくれたのだ。

横を見ると、子供の姿が目に入った。

何か玩具のようなもので遊びながら、親であろう女性の周りをグルグル回りながら遊んでいる。

(のどかだな……)

城の中では絶対に見ることが出来なかったであろう、人々の営みが、こんな形で見られるとは思えなかった。

集落の端へ行くと、石段で作られた祭壇のような場所にたどり着いた。祭壇と言っても、それほど豪華なものではなく、石造りの構造物があるだけだ。

「少々待っておれ。今日は何時頃来るか聞いておらんな」

老人はカトレヤの隣を歩きながら、祭壇を指差した。

「誰が、来るんですか……？」

「ドラゴンじゃ」

カトレヤも、書物で読んだり、おとぎ話で聞いたことがある。

龍の血液には傷を癒す力があると、聞いていたことがある。だが、それはあくまでおとぎ話の中の話、実際にそのような力があるかなど確かめた事がある者などいない。

血液を採取しようものなら、食い殺されるのが目に見えているからだ。

「外の連中は知らんじやろうが、儂らは長い間ドラゴンと交流を持つておる。外の連中は儂らを竜人族と呼んでおる」

「竜人、族……。本当にいたんですか……」

「それが正しい反応じゃ。儂らは外との交流は持たん。儂らの社会を破壊されてはたまらんからの。たまに旅の詩人が迷い込むくらい

「じゃ」

祭壇の一番上にたどり着き、カトレヤを乗せた担架が静かに下ろされる。男は担架よりも後ろに下がり、老人は祭壇の中央まで進むと空を見上げる。カトレヤは、仰向けに寝かされているので必然的に空を見上げることになる。

「今日は天気が良いからの、遊覧飛行でもしておるかの？」
「た、食べられないでしょうか……？」

随分と呑気な事を言う老人にカトレヤは心配になって聞いた。どうにも信じられないのだ。ヒトが龍と過ごしていることなど。

多くの書物が、ドラゴンは人間の敵だと書いている。村を焼き、老若男女構わず人間を貪り、土地に死を振りまくとされるドラゴンと、共に生きることなど可能なのか？ それとも、彼らは何か別の生き物をドラゴンと誤解しているのだろうか？ だが、空を飛び、それほど巨大な生き物は、カトレヤの記憶の中にもドラゴンしかないような気がする。

「お、来おったか」

不意に森の上の空に目を向けた老人に釣られて、カトレヤも痛みに耐えながら首を回す。

森の上の空に、黒い点が浮かんでいる。

それが徐々に大きくなり、やがて羽ばたく翼が視認できるほどまで巨大になり、祭壇の上を猛烈な勢いで飛び越えていった。

「う、嘘、本当に、ドラゴンなの!？」

その姿を追いながら、カトレヤは信じられないものを見る目でドラゴンを追う。

ドラゴンは漆黒の鱗を纏い、その中で不気味に輝く紅の目が特徴的だった。ドラゴンはぐるりと周囲を一周すると祭壇の真上に飛んできて、ゆっくりと羽ばたきながら祭壇に降り立ち、翼を豊んで鋭い鉤爪を持つ手で石段に太い傷をつけながらカトレヤたちの場所までやって来た。

太い首をしならせて老人に顔を近づけると、カトレヤからもその顔が見えるようになった。人間の胸ほどもある巨大な牙が口からはみ出しており、その眼はしつかりとカトレヤを睨み付けていた。唸り声にもどこか怒りがこもっているような気がする。

「エリカじゃ、カトレヤ殿。ドラゴンの名前は発音できんのでな、儂らはそう呼んでおる。エリカ殿、すまんが助けて欲しいのじゃ、この娘を」

エリカと呼ばれた、あまりに名前と姿が不釣り合いなドラゴンは私たちの前で身動きが取れない状態で仰向けに寝ているカトレヤの真上に顔を持ってくると、カトレヤの顔をしげしげと覗き込んできた。

「ひっ……」

恐怖に少しだけ声が漏れてしまった。

<怖がらないで?>

そこに、聞き慣れない言葉が飛び込んできた。女性の声なのだが、この場に女性の姿はない。

「あ、あなたなの？」

<初めてでこの声が聞こえるという事は、あなたもヒトではないのね？>

「っ……！」

ドラゴンの目は、優しくかった。鋭さの中にどこか慈悲が籠っているかのように感じられる。

<名前は？ どこから来たの？ どうしてそんな怪我をしたの？>

ドラゴンが立て続けに質問を連ねてきた。返答に困っていると老人がドラゴンの首を撫でながら聞き慣れない言葉を呟いていく。

「彼女の素性は助けてからにしてもらってもいいかの？ あまり長い間持ちそうにもないんじゃない？」

あえて言えば、ヒトの言葉を出来る限り龍の言葉に近づけたようなそんな感じの言葉だ。思えば、ドラゴンの言葉はヒトの言葉に出来る限り近づけたようなものなのだろう。

<……安売りはしたくないのだけれど。あなたたちの頼みなら良いわ>

ドラゴンはそう言うと折り畳んでいた翼を少しだけ広げ、鱗の無い皮膚を老人の前に晒す。老人はドラゴンに礼を言うと懐からナイフを取り出してそこを少しだけ切った。するとドラゴンの血が滴り、老人はそれを瓶で掬うとそれをカトレヤのところに持ってきた。

「失礼するぞ、カトレヤ殿」

老人はカトレヤの着ていた服を捲ると、ドラゴンの血が入った瓶を傾け、腕の傷に血を滴らせた。すでに壊死が進行してかなり黒ずんできている部分が、血の色に染まって白い煙を上げる。

「あっつ」

燃えるような熱さを一瞬受けると、腕から痛みがすくっと引き始めた。驚いて腕を見ると、血の合間から白い肌が見える。本来ならば、壊死して黒ずんでいるはずの部分が、完全に治癒している。

「し、信じられない……」

「ほれ、背中を向けさせるぞ」

その腕を持ってカトレヤをうつ伏せにすると、老人は服を捲って背中を晒す。肩からの裂傷に背後の男たちも唸り声を上げる。

老人が再び血を滴らせると、先ほどとは比べ物にならないほどの熱さに襲われる。だが、それは一瞬で、背中感覚が戻ってくるのがすぐに感じられた。

足、首と老人は傷を癒していくと、カトレヤはあっつという間に身体を起こせるようにまでなっていた。そこに至って老人は瓶をカトレヤに渡した。

「あ、あの……？」

「さすがに、男の前で胸を晒すわけにはいかんじゃろう？ 儂らは先に戻っているから、ここで治していきなさい。カトレヤ殿が立て

るようになるまではエリカ殿が守って下さる」

「あ、ありがとうございます」

老人は気さくな笑みを浮かべると男衆を連れて祭壇を後にした。男衆が後ろを向こうとするたびに老人の強烈な蹴りが彼らの腰を襲ったのが見え、つい笑みが零れてしまった。

第12話 Long time ago ? (後書き)

どうも、ハモニカです。

というわけで過去編というか、過去話というか、……分かってらっしゃるとは思いますが、

カトレヤ・パフィオベディルム〃バーバラ・ファタル

ですからね？

まあ、カトレヤの名前はほぼ過去話でしか出てきませんが。

龍だった頃のエリカと、カトレヤ（バーバラ）が主体ですが、主にカトレヤ目線になります。

過去編もほどほどに現代に戻れるよう頑張ります

では、ご感想などお待ちしております！

第13話 Long time ago ? (前書き)

ひっそりその1日3話投稿、間に合った!?

ではレッツラゴーッ

第13話 Long time ago ?

「うそっ、もう立てる……」

傷が治った、なんてレベルではない。むしろ怪我をする前以上に身体の調子が良い気がする。

それに、老人が言っていたような激痛が伴うわけでもなく、傷1つなく全快した。

<効いたようで良かったわ、吸血鬼さん>

自分の身体をしげしげと見つめていると、背後のドラゴンが話しかけてきた。カトレヤは振り返ると笑みを浮かべてドラゴンの顔に近づく。

「ありがとうございます、なのかしら。て言うか、ドラゴンってあなたみたいに皆フランクなの？」

目の前のドラゴンは、カトレヤが考えていたイメージとだいぶ誤差がある。カトレヤのイメージとしてはもっと近寄りがたい、荘厳なイメージがあったのだが、目の前のドラゴンは人間っぽい感じがこれでもかというほどに滲み出している。

<竜^{かたれり}人族とは長いこと付き合い合ってるからかな？ あのヒトたちの言葉の使い方がうつつたみたいね>

「……そんなに簡単につつまるもんなの？」

<100年も付き合い合っただけね>

「納得したわ」

ドラゴンは笑ったのだろうか、息を吐くと首を上げる。

<それで、あなたの名前は？ 吸血鬼さん>

「その吸血鬼さんって、止めてくれない？ 私の名前はカトレヤ・パフィオベディルムよ」

<パフィオベディルム……、随分と遠くのお国のヒトね。ここまで来るのは大変だったでしょう？>

「知ってるんだ……、あの人たちよりも知識があるみたいね」

クスツと笑うと、ドラゴンも笑ったような気がした。

不思議と、他の誰よりも親しみを持てるような気がして、ついドラゴンの傍に近寄ってしまう。それにドラゴンは鋭く反応して翼を広げるとその場で飛ばたく動作をして猛烈な突風を発生させ、カトレヤを自分から引き離れた。

<ごめんなさいね？ まだあたしはあなたを完全に信用している訳じゃないの。これからもっと仲良くなりましょうね？>

「突っぱねられた気がしてならないのは気のせいかしら」

<あのヒトたちに聞いてごらんさい？ 龍は100年くらいしいないと相手を信用しないのよ。でも皆100年もせずに死んでしまう……。長命なのも世知辛いわね>

何故か、目の前のドラゴンが寂しそうな表情をしている気がした。

思えば、ドラゴンと交流を持つ人間などそういないだろう。いかに長く生きようと、人間は100年生きれば大往生だ。ドラゴンと親睦を深められる人間などそういないだろう。

だが、カトレヤは違う。

カトレヤは吸血鬼だ。吸血鬼は不老不死と詠われるほどに長命、強靱である。もちろん、首を刎ねられれば即死だが、それ以外ならばそう簡単に死なない、はずだ。

吸血鬼についての情報など、文献しかない。自らの身に降りかかってもその実態はまだ理解できない。

それでも、人間よりも長命であることは分かる。

「なら、私があなたの最初のお友達になれるかしら？」

新しい人生を歩むのなら、ここから始めるのも悪くない、カトレヤはそう思った。

カトレヤの言葉にドラゴンは意外そうな顔をしたのだろう。一瞬カトレヤに視線を向けて固まったように見えた。

そして口を豪快に開けると喉を鳴らしながら笑い出した。

「なるほど、吸血鬼ならではの考え方ね。ふふっ、ならまた会いましょうね。ここに長くいると父上がうるさいから」

そう言うと広げたままだった翼を力強く振るとドラゴンの巨体がフワリと空に浮き、祭壇の上で徐々に高度を上げていく。

「父親？ ドラゴンの世界も父親が強いからね」

「あたしの父上は特別よ？ なんせ王様だから」

「え……」

カトレヤが何が言おうとした時には、ドラゴンは空高く舞い上がっていた。そして優雅に反転すると森のさらに奥へと飛んで行ってしまった。

「王様、ってことはあのドラゴンはお姫様あ!?!」

竜人族の集落でカトレヤが世話になる様になって1か月が経った。最初はやはり何かしらの溝があり、どこか他人行儀な会話が多かったカトレヤだったが、今ではもう竜人族の一員として溶け込んでいた。

この1か月でカトレヤは自分の身体について、そして龍について数多くの事を知ることになった。

まず、自分の身体については、人間だった頃よりも遥かに力が増していた。これは竜人族の男と共に獲物を狩りに行ったときに分かったことだ。というよりは逃げている最中から身体が疲れにくいとか、視力が妙に良くなったとか、その変化の一端は分かっていた。

森には木が生い茂っているためにカトレヤもあまり日光を気にせず行動することが出来る。それがカトレヤには幸いした。いつでも気兼ねなく行動できる自由をカトレヤは噛みしめることが出来た。

<へえ、じゃあカトレヤもお姫様だったんだ>

カトレヤは暇な時は祭壇で時間を潰している。祭壇は森を見渡すには最高の場所で、同時にドラゴンのエリカと話すことの出来る貴重な場所としてカトレヤは重宝している。

「お姫様なんて大それたものじゃないわ。従妹よ、私は。でも、もう私の一族はこの世にいないでしょうね」

これは、カトレヤのために動いてくれた竜人族の人がもたらしてくれた情報だ。

カトレヤがいた王国は、カトレヤを除いて一族を根絶やしにした。他国の親類までは分からなかったが、少なくともカトレヤに帰る国がなくなったことは明らかになった。

その時はさすがのカトレヤも大粒の涙を流して一晩中泣き明かした。

<……「ごめん」>

「気にしなくていいのよ。もう私はどこにでも居られるし、どこにでも行ける。それだけは確実」

どこか達観したような顔をしたカトレヤは、寂しい笑みを浮かべた。

<カトレヤって、まだ21でしょう？ 何だつてこんなことに？>
「……私さ、いつの間にか吸血鬼になってたんだ。夜寝て、朝起き

たらさ。それで理由も分からず右往左往してたら近衛の兵士に見つかって、吸血鬼だって言われて、気づいたら国中から追われる身になって、遠路はるばるここまで逃げてきたってわけ。だけど、森の手前で見つかって、武器もないから手で剣を振り払ったりしているうちにたくさん怪我して、森に入ったらあいつらも追ってこなくなつたのよ」

人間はこの森を恐れている。

この森は『龍樹林』と呼ばれており、ドラゴンの世界とヒトの世界を隔てる唯一の壁のような役割を果たしている。ヒトには険しすぎて近寄れず、ドラゴンはよっぽどの理由がなければ森からは出てこない。

ドラゴンの神話が独り歩きし、内実を伴わずに噂だけが広まった結果、入った者は生きて帰れないという話が信じられるようになり、追手も命惜しさに追ってこなかったのかもしれない。

<……ヒトつていつの時代も愚かね。吸血鬼だつてもとをただせばヒトでしように。父上がヒトをあまり好きにならないのも少し分かるかな>

「……あなた何歳よ？」

<そろそろ200歳くらいかしら……>

うーむ、返答に困る、とカトレヤは難しい顔をする。

「それって子供なの、大人なの？」

<中間くらいよ。それにしても、あなたの話を聞いてるとあなたの国のヒトは腐ってるわね……、イラツと来たわ>

その時のエリカの横顔は本当に怒りを湛えていた。

<あなたに出会えたことには感謝するけれど、できればあなたはあなたの世界を生きるべきだった。竜とヒトは相容れない存在、決して共に歩むことはできないとも言われているわ。あなたがどう思うかは分からないけれど、あたしは共存は難しいと思うしね。ヒトはあたしたちを必要以上に恐れているし、それが武器を取る結果になるのも仕方のない事だと思っているわ>

「……エリカ？」

ふとエリカが自分に向かって言っていないような気がしてドラゴンの顔を見上げる。エリカはどこか遠くを見つめているようで、こちらに目を向けていない。その目はどこか不気味な、怖気を感じさせるほどに細められている。

<……パフィオベディルム殿、明日は会えそうにないわ。明後日また会いましょう?>

「ちょ、まだその名で呼んで……きゃあ!？」

風によるけそうになって壁に手をつき、見上げるとすでにエリカの姿はなかった。

まるで、霞に消えたかのように消えて、後には風だけが残された。

エリカは、怒りを覚えていた。

昨日までの家族を、隣人を、友人を、簡単に殺せてしまうヒトに怒りを覚えていた。

だから、許す気にはなれなかった。

たとえ帰ってからカトレヤに怒られようと、なじられようと、エリカは止まる気はなかった。

自分に出れることなど限られているが、やれるだけの事をしようとしてエリカは心に決めた。たとえそれが後々間違った事だと言われようと、エリカは成し遂げるつもりだ。

エリカはその夜、密かに飛び立ち森を出た。

天が味方したのか、周囲の空には分厚い暗雲が立ち込めており、雲の上を飛んでいると地上からエリカの姿を確認することはできない。

< 姫様、お供いたしますよ >

< っ！ 將軍、どうしてここに？ >

エリカが一人で飛んでいると、暗雲を突き抜けて灰色の龍が現れ、エリカの隣に並んだ。エリカが驚いてその龍に話しかけると、灰色の龍はその蒼い眼をエリカに向けてきた。

< あなたの御父上の御意向ですよ。この暗雲はあなたのために御父

上が作られたものです>

<……父上には全部御見通しというわけね。でもどうしてあなたが来たの？>

<姫様だけでは、ヒトの王国を落とすのは無茶ですよ。私が微力ながら助太刀させてもらいます>

灰色の籠、將軍は口を開けると少しだけ火を吹いた。すぐに炎は背後に流れていき燃やすものを失って宙に霧散していく。

<ありがとう、將軍。あたしの友達に酷い事をしたヒトに、誰を敵に回すことになったのか思い知らせてやるから、手伝って>

<御意>

高度を下げ、暗雲を突き抜ける。

すると眼下に無数の明かりが地上を埋め尽くすかのように視界一杯に広がってきた。

<これ全部ね……。將軍、町を焼き払いなさい。あたしは城を襲う>
<お気をつけて。私もすぐに向かいます>

將軍は高度をさらに下げると、城下町に着地して盛大に炎をまき散らし始めた。その瞬間に周囲がさらに明るくなって、オレンジ色の炎の中に將軍の巨大な姿が不気味に浮かび上がった。

どこからか非常事態を知らせる鐘の音が聞こえてきて、周囲の明かりが騒がしくなっていく。

エリカはその様子をしり目に巨大な城を目指す。特定の目標があるわけではない。エリカにとって、この国の存在自体が怒りの対象な

のだ。

エリカは暗闇から城の外壁に鉤爪を突き立て、外壁を剥がした。すると中にはこの城の兵士であろう男が数十人剣を構え、背後では何か呪文を唱えようとしている女性が並んでいるが、どの顔も恐怖に蒼白としている。

突如エリカの顔の前で光が爆ぜ、魔法で火球をエリカの目の前で爆発させられたことを自覚する。

だが、あまりにも弱い。

エリカの黒鱗を抜ける攻撃は、父親である白龍の爪か、それこそ国1つ滅んでも良いくらいの大規模魔法程度だ。人1人が作り上げた火球など、ヒトにしてみれば蚊に刺された程度以下だろう。

発生した煙からエリカがヌツと顔を覗かせると、兵士が半狂乱ながらも顔を城に突っ込ませようとしているエリカに剣を振りかぶり、鱗に斬りかかった。だが、ただ弾かれるだけで、一向にダメージが通る気配はない。

エリカはそんな男を首を振って城の外へと放り出す。エリカにはそんなに高い場所でもないが、ヒトにしてみれば即死級の高さだろう。無様な悲鳴を上げながら男の影が闇に沈んでいく。だが、そんなものを見る趣味などエリカにはない。放り出したら次の獲物を求めて城の中へと顔を突っ込んだ。

天井と床を挟りながらエリカはその場にいた兵士を3人ほど丸呑みし、ちまちまとした魔法を唱えようとしていた女の腕にかぶりつく。と首を振って女の腕を引きちぎる。女の聞くに堪えない悲鳴が聞こえるが、エリカは女の腕を咀嚼していたため聞こえなかった。骨が

邪魔な気もするが、決して食えない味ではない。

女は恐怖にへたり込んでいた。腕を抑え、身体から様々な液体を垂れ流している。仲間がその女を置いて城の奥へと逃げていくのをしり目に、エリカは身動きの取れない女に頭からかぶり付き、噛み殺した。新鮮な血の味が口一杯に広がる。本来ならばおいしく感じるのだが、今日に限っては不味い物を食べている気しかない。

ある程度口の中で女だった肉塊を転がすと、エリカはそれを吐き出す。女だった肉塊が床に転がり、グチャツとばらける。四肢を切断され、首ももげかかっている女の死体を無視してエリカは更なる獲物を求めて城の上部へと向かう。

<不味すぎる。腐ってる……>

城の上部には一面ガラスの部屋があった。中を覗くと数人の兵士に囲まれた、随分と肥えた男と半裸の女がいた。全員がエリカに気が付くと恐怖に顔を歪ませる。肥えた男が兵士に向かって何か喚いているが、ガラス越しでエリカには聞こえない。聞く気は毛頭ないが、獲物を得るためにエリカはガラスを突き破って顔を部屋に入れる。そして手近な兵士に頭からかぶり付くと、下半身は口から出ている状態で1度だけ強く顎に力を入れると、骨の砕かれたくぐもった音が聞こえて、激しく抵抗していた男の動きが止まり、ブランと口からはみ出た下半身が力なく垂れ下がる。

エリカが兵士を吐き出すと、その光景に女は耐え切れなくなったのか床に倒れ伏してしまった。

兵士が2人がかりでその女を抱き起そうとするが、肥えた男がそれを許さなかった。男は自分だけは守れと命令しているようで、兵士

も仕方なくその周りで剣を構えるが、到底敵う相手ではないことぐらいは自覚しているようだ。

その潔さに免じて、エリカは男の周囲の兵士は一思いに殺してやることにした。エリカは器用に兵士の首に牙をむき、首を擦じって引きちぎる。首を失った兵士の身体が男に倒れ掛かり、男は情けない悲鳴を上げながら失禁してしまったようだ。

見るからに不味そうなおそらくこの国の指導者に成り上がったのだらう男は、後ずさりしながら逃げようとする。エリカは喰いたくない気持ちで前面に出てきていたが、意を決して口を開けようとして、背後から声をかけられた。

< 姫様、あなたのような方が口にしてよい物ではありませんまい？ >

< 將軍、速かつたわね >

< 存外この国の兵士は無能なようで。無^む辜^この民を置いて我先にと逃げ出しました >

振り返れば、城下の町は火に包まれていた。

至る所から悲鳴や建物が崩れる轟音が響き渡っている。

< よろしければ、私が城ごと焼き払いますが？ >

< 頼みます。私は城下町を掃討します >

城に突き刺していた鉤爪を外すと、ひらりと身を翻して城下町へとエリカは飛んだ。背後で城が爆発するような音が響き渡り、見れば城が炎に包まれていた。

これでこの王国も終わり……。

エリカが火の海と化した城下町を見ていると、炎の中に人影を見つけた。周囲を炎に囲まれ、逃げ場を失った数人のヒトがエリカに気が付いて猛烈な熱気の中で顔面蒼白となった。エリカはその炎の中に飛び込むと、5人程度の男と2人の女、そしてまだ幼い子供に目をやる。

男たちは震えながらも自らが持つ武器を構えている。女は子供だけは守ろうとしているのか子供を強く抱きしめている。

<違う……>

エリカが殺さなければならぬのは、このような者たちではない。エリカは大きく広げた翼で猛烈な風を起こすと、彼らの背後に一瞬だけ炎のない、回廊のようなものを作り出した。男がそれに気が付いてその回廊とエリカを交互に見る。

エリカは自分の言葉が届いているかは分からないが、あえて一番前にいた男に話しかけた。

<お前たちはあたしの敵ではない。今すぐにこの国を離れ、静かに暮らすがいい>

理解できているかは分からない。エリカは期待もしていない。だが、攻撃してこないことを悟ったのか、男は女子供を連れて回廊へと進み、彼らが回廊を進んでエリカの視界から消えると、ようやくエリカは空へと飛び立った。

上空にはすでに役割を終えた灰色の龍が周囲を回転しながら飛んでおり、エリカの姿を視認すると円を描くのを止めて暗雲へと突っ込

んでいった。エリカもその後を追い、暗雲を突き抜けると綺麗な月と星がエリカたちを出迎えてくれた。

<これでよかったですよね？>

將軍はどこか釈然としない、と言葉に匂わせながら口を開いた。

<これはあたしの自己満足よ。あの人を傷つけ、殺そうとした愚かなヒト共を滅ぼしたかっただけ……。我が儘に付きあわせてごめんなさいね？>

<いえ、これも役目ですよ、姫様。それに、久々にあれだけの炎を吐けました。日頃の鬱憤が晴れたようです>

その日、1つの国が滅んだ。

吸血鬼を出した王家を滅ぼし、自らが王になった男は消し炭になるまで焼かれ、彼の配下の王国は一夜にして廃墟と化した。

後に、この事件は『パフィオベイルムの悲劇』と呼ばれるようになる。

生き残った者たちは、黒龍を災厄とも、慈悲とも呼び、後世に言い
伝えられることになったのは、また別のお話……。

第13話 Long time ago ? (後書き)

ドラゴン無双しましたです。

喰って吐いて喰って吐いてで、気分を害したら申し訳ありません。ですが、どうしてもエリカの存在として必要不可欠なので。

次回で早々に過去を切り上げて現代に戻れるよう頑張ります。

ではおやすみなさい。

私もう眠いんです(23:58)

感想などお待ちしております!!

第14話 Long time ago ? (前書き)

過去編、終つ了うゝ

第14話 Long time ago ?

速いものだ。

カトレヤが竜人族で暮らす様になってもうすぐ3桁の年月が経つ。

すでに世代は交代し、カトレヤが来た時幼子だった者たちの息子、娘が集落の主要な地位についている。カトレヤを救い出した老人は、カトレヤが来てから5年ほどして天に召された。95歳、大往生した。

カトレヤは、竜人族にとって自らの後見人のような地位にあった。吸血鬼という存在に対して彼らは一切の恐怖を抱いてはいない。

書物に書かれるような吸血衝動もそれほど起こってはいない。時折、食べるために殺した家畜の血を貰って飲んでいる程度で、とてもじゃないが人を襲おうなどとは考える必要はなかった。

竜人族にとって、カトレヤは先代の教えをこと細やかに教えてくれる大切な家族なのだ。100年も経てば廃れてしまうかもしれない技術も、伝統も、全てカトレヤが後世に伝えているのだ。カトレヤもまた、それが自分に出来る唯一の事だとして、積極的に竜人族の文化を学んでいた。

<100年、もうそんなになるんだ……>

カトレヤは、竜人族で親しくしていた人々の葬儀に全て参列した。

自分よりも年下だった子供が、大人になり、老人になり、死んでいくのを数えきれないほど見てきた。

その中で、唯一共に在れたのは隣で翼を器用に首を回して舐めていくエリカだけであった。彼女はドラゴン、長命な彼女はカトレヤが唯一知識を、話題を、存在を共有することが出来る親友であった。

そのエリカも、100年も経てばその身体はさらに精悍となっている。より力強く、威厳に溢れた存在になっている。だが、中身はほとんど変わっていない。100年経とうともカトレヤに対する接し方が変わるわけでもない。

<パファイオベディルム殿、あなたはこの地で生き続けるの？>

この呼び方も変わらない。

ドラゴンの間では、親しい仲間内でも「殿」を付けるのが慣わしらしい。名前を呼ばれるたびに自分の国の事が脳裏を掠めていくのだが、もうあの国にも思う事はない。100年も経てばそんな昔の事は忘れてしまっし、なにより憂いはエリカが粉微塵にしまった。

あの日、エリカがカトレヤに会わなかった日の翌日、エリカはカトレヤに本当の事を伝えた。

誇る気も、謝る気もなかったエリカは、ありのままの事実をカトレヤに伝えるとじつとカトレヤの反応を待っていた。それが怒りであろうと、感謝であろうと、その全てを受け止めるつもりだったのだ。

けれど、カトレヤはただ、涙を流すだけだった。

それが悲しい涙だったのか、嬉し涙だったのかは、カトレヤ自身にも100年経った今でも分からない。ただ、その場に立ち尽くして泣いただけだった。

エリカは泣いていたカトレヤを翼で包むと、優しく抱いてくれた。龍の力強い翼は優しい温もりを持っていて、カトレヤは不覚にも泣きつかれてその状態で眠ってしまった。エリカが集落まで運んでくれたそうなのだが、それを聞いてカトレヤが赤面してしまったのは言うまでもない。

「どこか、旅に出ようと思っているわ。当てのない、旅へ」
「……そう、寂しくなるわね」

エリカは残念そうな声を出した。100年も共に生きてきたヒトはカトレヤが初めてだし、きっと最後になるだろうとも考えていた。親友と離ればなれになるのは辛いことだ。

「そうだ、覚えてる？ 会って少しした時の約束」
「約束？」

さすがに記憶が霞んで思い出せない。

「竜は相手と100年はしないと信用しない、もう良いんじゃない？」

「ああ……、つてじゃあこの100年私は信用されてなかったの？」
「そんなわけないじゃない、形式的な話よ。父上もうるさいし。そんなわけで、あたしからあなたにとっておきの贈り物あげることができます！」

「お、贈り物？」

おそらく、エリカがヒトだったら片手を突き上げて胸を張っていただろう。そんな光景が想像できてしまうくらい、エリカは分かりやすかった。

エリカはカトレヤの言葉に頷くと、首をしならせてカトレヤに背中を見せた。

<乗って。ちょっと遠いから>

「ちょ、どこに乗れって言うのよ……」

<ああもう、まだるっこしい！>

翼をカトレヤの下に滑り込ませ、バランスを崩して倒れたカトレヤはエリカの翼の上に横たわった。エリカは翼を縦にしてカトレヤを自らの背中に転がり込ませると、姿勢を正して翼を羽ばたかせ始めた。

<揺れるから、掴まってなさいね！>

「だからどこに掴まれて言うのよお！」

だが、その声は風が流れる音でエリカの耳には届かなかったようだ。次の瞬間にはエリカは祭壇を離れて空高くに舞い上がっていた。カトレヤは必死になった鱗に足をかけ、手近な出っ張りに必死にしがみつく。前から流れる風に目を細めながら、カトレヤはエリカがどこへ向かっているのか見ていた。

眼下に、竜人族の集落が少しだけ見えた。向こうはこちらに気が付いたのか、こちらに手を振っているが、あいにくカトレヤは手を振れるほど余裕がない。

<高度上げるわよ>

「え、ちょ、ええっ!?!」

急に真つ直ぐ上に飛び始めたエリカは楽しそうに喉を鳴らしている。逆にカトレヤは振り落されないように必死にしがみ付いているのだが、一瞬足が浮いた気がして生きた心地がしなかった。

そのままエリカは雲に突っ込み、カトレヤの視界は真つ白になってしまう。だが、雲はすぐに通り過ぎて目の前に青い空が広がる。そしてエリカが水平になって雲の上を飛ぶと、そこにはどこまでも続く白い雲と、青い空が作り出す絶妙な光景が広がっていた。

「雲の平原……」

<ふふ、来たわね……>

その光景に啞然としている、エリカが横を見て言った。それに気づいて横を見ると、少し離れたところを黒い点が幾つか浮かんでいる。

それはエリカたちと並行するように飛んでおり、徐々にその距離を近づけてきた。そしてそれがドラゴンだと気が付くと、カトレヤはその荘厳さに言葉も出なくなってしまった。

灰色の龍、茶色の龍、淡い肌色の龍と、それぞれ異なる色の龍が、エリカの右に一列に並び、見事な編隊を組んで空の平原の上を飛ぶ。

「す、すっごい……わっふ」

<口を開けると風で閉まらなくなるよ?>

3頭の龍はエリカの少し後ろを飛び、1番エリカ寄りだった灰色の龍とカトレヤは一瞬目が合った。

「あ、あれ？ あのドラゴン、確かエリカが言っていた……」
<ええ、100年前にあなたの国をあたしと共に滅ぼした將軍よ。
頼んだのはあたしの父上らしいけど>

「……將軍で……、お姫様ね。私的に軍を動かすなんて」

皮肉めいた笑みを浮かべ、エリカの首を撫でる。

もちろん、龍の社会に軍隊が存在するかは定かではないが、將軍と呼ばれるからにはその手の筋のトップなのだろうとカトレヤは見当をつけた。

<……落とすよ？>

「冗談、冗談だって！」

本気で身体を揺さぶってカトレヤを振り落そうとしたので、必死になって謝罪するカトレヤ。その様子を3頭の龍は内心笑いながら見ていた。

しばらくすると、エリカは高度を落とし始めた。すでに雲の平原は終わり、森が眼下一面に広がっている。その森の中に、1カ所だけ木の生えていない丘が姿を現し、エリカはそこを指して降りていく。

フワリと、背中のカトレヤが衝撃を感じないほどに滑らかに着陸すると、エリカは身体を傾けてカトレヤが降りやすいようにする。カトレヤが背中から飛び降りると、背後に3頭の龍が降りてくることになるのだ。

「……」

<……>

エリカは丘の反対側に顔を向けると、カトレヤは丘を登って反対側が見える場所まで行き、息を呑んだ。

丘の反対側は森が大きくへこんだような場所になっていた。四方を崖に囲まれ、断崖絶壁が他者の侵入を拒んでいる。その窪地にも木々が生い茂り、そして何より、無数のドラゴンが暮らしていたのだ。

「あたしたちの楽園よ。龍以外にこの場所を教えるのは、あなたが初めて」

「き、綺麗……」

真ん中を川が流れている。崖の滝から窪地の中央を流れており、川辺には数多くのドラゴンが翼を休めている。

「でも、どうしてここを私に？」

不思議だった。いくらカトレヤが100年を経てエリカと信頼関係を築いていたとしても、そう易々と見せて良いものではないはずだ。森の奥深くとはいえ、場所が知ればヒトが来ないとも限らない。

「旅に出るといふあなたに、あたしたちの家を教えるおこうと思つて。もし、この世界のどこかで、ドラゴンに出会う事があるのなら、もしあなたがあたしたちに会いたくなったら、その時はこの地の名前をドラゴンに言いなさい。この地の名は……」

エリカは一呼吸置いて口を開いた。

下
ドラゴニック・シャングリラ
龍の国

エリカがカトレヤをドラゴニック・シャンクリラ龍の国に連れて行った翌日。

朝早い時間帯にカトレヤは旅支度をして祭壇に来ていた。すでに竜人族の皆には別れはすませてある。森の奥深くであるここでは、朝早く出ないとその日のうちに森を出ることが出来ない。この危険な森で一夜を過ごすのはそれこそ自殺行為だと忠告されたのだ。

<行くのね？>

「ええ、長い事、ありがとうね」

カトレヤは祭壇には上らない。上れば、何か、未練に後ろ髪を引かれそうだったからだ。エリカもそれが分かっているのか、祭壇から降りようとはしていない。

<もう、会うこともなくなるわね……>

昨日はああ言ったが、やはりこの世界、森の外でドラゴンに会える機会など滅多にあるものではない。森を出れば、いかに不老の吸血

鬼とさえどドラゴンと会うことはないだろう。

事実上の離別ということになる。

「また、いつか戻って来るわよ。あなたたちの所に。だから、今はお別れは言わないわ」

そう信じたい。信じていたい。

<ふふ、じゃああなたにお守りを……>

「お守り……？」

エリカはおもむろに顔を翼の付け根に持っていくと、自らの鱗を引きちぎった。一瞬何をやっているのか、とカトレヤが驚愕の表情を浮かべる。

エリカは引きちぎった鱗を放ると、鱗がカトレヤの目の前に落着いた。カトレヤの腕よりもやや長い、幅が無く、薄い木の板のような状態の黒い鱗をカトレヤは拾うと、それとエリカを見比べる。

<自分で言うのもなんだけど、あたしの鱗は固いのよ？ あなたが生きる上で、役に立ててくれるとありがたいな>

「エリカ……、うん、大切にに使わせてもらおうわ」

カトレヤは黒鱗をしっかりと握ると、エリカに向き合った。

「じゃあ、行ってくるわ」

<ならあたしは、『行ってらっしゃい』と>

カトレヤは笑みを浮かべると、祭壇に背を向けて森へと歩き出した。

もう帰る場所など無い。

ならば、どこへでも行ってやろう。

カトレヤ・パフィオベディルムという名すらも捨て、本当の意味で自由になってやろう。

カトレヤは決意を胸に第2の人生を歩み出していったのだった。

< 龍の加護があらんことを…… >

エリカの声がカトレヤの背中を見送った。

< そんなことがあったのか…… >
「あの時は、私も若かったし」

バーバラは、独り言のような回想をアレックスに話していた。夜も更け、いつの間にかエリカの歌声も消えてしまっていたが、バーバラは珍しく夜だと言うのに寝付けなかった。

基本的に夜型のバーバラであるが、今日は、いやもう0時を過ぎたから昨日か、エリカの入団試験を見に行つたために睡眠が足りなかった。だから、エリカに挨拶に行つたら寝ようと思つていた。

だが、あの歌声を聴き、アレックスに昔の思い出話をしているうちに眠気もどこかに失せてしまったようで、他に何か話す事はないだろうかと思いを巡らせる。

「それで、私は今から200年くらい前に旅を始めたの。それから出来る限り50年は同じ場所に居つてこないように世界を渡り歩いて、20年くらい前にアールドールン王国にたどり着いたのよ。そして、あなたや、ヴァルトたちに出会つた……」

「ただの軍狼だった私は、ご主人のおかげで世界を知ることが出来た。感謝してもしきれん」

アールドールン王国には軍狼と呼ばれる、軍事的に使用される狼が存在する。野生の狼を捕えて躡けたり、その狼が生んだ子供を教育したりと、この国では当然のように行われていた行為だ。

バーバラと名を変えた頃、アレックスに出会つたのは偶然の出来事だった。

城へと狼を乗せた馬車が進んでいた時、馬車の車輪が壊れて横転したのだ。アレックスもその馬車に載せられていた。バーバラはアレックスを見た瞬間、御者に話を付けてアレックスを引き取つた。

アレックスがいくらその理由を聞こうとも、バーバラは「気分よ」と曖昧な答えしか返さなかった。

「あなたを引き取ったのは、……言いづらけれどエリカと同じ理由だったのよ、最初は」

<……冗談だろう?>

狼が頬を引きつらせると言うのは面白い光景だ、とバーバラは心の中で思う。言ったらへそを曲げられるのが目に見えているので口には出さない。

「本当よ? あなたの毛並み、最高なもの。それに私が吸血鬼だと知って近づいてくる生き物は、エリカかあなたぐらいしかいなかったもの」

<……確かにな>

今は違う。

アクイラ騎士団という『帰る家』を手に入れたバーバラは正直、神に感謝した。捨てられるばかりだった自分を、正体を知っても親しくしてくれる人間がいると知った時は、徐々に涙が零れそうになったのを今でも覚えている。

アレックスは、最初こそ自らを引き取ったバーバラが吸血鬼だと知って驚いたが、共に旅をして、彼女の内面を知るに至ってバーバラに対しての考えを改めていった。

全ての不幸を味わったものは、他者に幸福を振り撒こうとする、とは誰の言葉であったか。バーバラは確かに全ての苦しみを味わっただろう。死ぬ苦しみ、捨てられる苦しみ、裏切られる苦しみ、拳げ始めたらきりがないほどの苦しみを味わった。だからこそ今のバー

バラがあるのだ。

「さて、今日はもう寝ましよう？ 明日はエリカの入団式を見に行かなくちゃ」

<私を目覚まし代わりに使うなよ？>

「ありがたく使わせてもらいます」

<まったく……>

こんな主人ではあるが、アレックスは出会えたことを感謝している。

だからこそ、どこまでもついて行くことと決めたのだ。

第14話 Long time ago ? (後書き)

はい、カトレヤ（バーバラ）及びエリカ（ドラゴンver.）の話は一応ここで終わります。そのうちまた回想で時代を遡る可能性はありますが、覚えていたら、です。

100年経つの早っ！ という苦情は受け付けませんよう？

だって書くことないんで……、いや、本当に。

うづむ、ネーミングに困りますね、固有名詞は。

龍の国とか、もう少しまともな名前に出来なかったのか、と未だにうだうだしているハモニカです。

それはそうと、次回から通常の現代に戻ります。

そしていよいよエリカが騎士団に入団！ みたいに話を展開できれば上々というところで。

感想などお待ちしております！！

第15話 堅苦しいのは苦手ですが？（前書き）

いやいやいやいや、堅苦しいのが苦手な者は敬語で喋り続けませんよ？

もう少しフランクですよ、きつと！

なんて自分で書いたタイトルに腕をブンブン振って突っ込みを入れてました

第15話 堅苦しいのは苦手ですが？

「ファイアさん、朝ですよ」

「……ふあ、つてしまった！ エリカちゃんの寝顔を拝見するつもりだったのに！」

爆睡していたファイアを揺すって起こすと、ファイアは悶えるように悔しがり始めた。さすがにエリカも2度も3度も灼熱地獄と凍結地獄を味わう気はない。しっかりと時間通りに起きられるように心がけているのだ。

それに、昨日は歌を詠って寝たのだが、妙に寝つきが良かったし、どこかしら疲れも抜けている。

エリカはすでに着替えを終え、相棒である刀を手にベッドに腰掛けられている。

今日はエリカの入団式なのだ。1人のためとはいえ、仲間が増えるのでヴァルトは正式な形でエリカを迎え入れると言ってきたのだ。エリカは騎士としてこの国の王に忠誠を誓い、王のために、民のために剣を、エリカの場合刀を、振る事を誓うのだ。

本来なら複数人を同時に行うのだが、時期も時期でエリカ以外の入団者はいないため、エリカのみで行うことになっているのだ。

昨日の今日で随分と準備が良いなあ、とエリカは内心で思いながら今日の流れを頭の中で反芻させる。

ヒトの礼儀をほとんど知らないエリカは、昨日試験の後にジーンの

元に行つて一通りの流れを頭に叩き込んできた。部屋の中で中で礼をしたり、歩き方の練習のしている姿は、遠足前日の子供のような雰囲気を持っている。

「そうだった、今日はエリカちゃんの入団式だったわね。うう、昨日飲みすぎるんじゃないかな……」

頭が痛いのか、フィアは頭を押さえながらフラフラと立ち上がると着替えを取り出し始めた。式は正装のため、戦闘用の団服ではなく、儀礼用の団服に着替えると、フィアはエリカと共に部屋を出た。

「エリカちゃん、今日あなたと主従の契約を結ぶ相手は国王陛下よ。粗相が無いようにね？」

「分かつてます。……名前なんでしたっけ？」

ガクツとフィアがずっこけかけたのはご愛嬌だ。頭を押さえる手をエリカの頭に振り下ろそうとしたが、二日酔いで狙いが鈍るフィアの一撃は容易くエリカに受け止められる。

「アーサー・アールドールン陛下よ。頼むから本番でやらかさないでよね？」

「……善処します」

「その間はなんなの!？」

保護者のような立ち位置のフィアはエリカが目を背けると本気で心配そうな表情をした。

「なんだか、大変そうだな……」

「あ、ジーンさん。おはようございます」

食堂へ向かう途中の通路でジーンに出会い、エリカはお辞儀をして挨拶する。どうやらジーンは先ほどまで会話を少し聞いていたらしく、フィアを慰めるように肩を叩くが、「泣きたくなるわ……」とフィアは肩を落として頂垂れた。

「入団式は9時からだ。遅刻するなよ？」

「分かってます。ってジーンさん、その目の下の隈どうしたんですか？」

見ればジーンは目の下が不健康なほどに黒ずんでいた。どう見ても昨日の夜寝られなかったことが分かる。ジーンは恥ずかしそうに頭を掻くと苦笑してフィアの隣を歩き始めた。

「いやな、昨晚聞き慣れない歌を聞いてから眠れなくなってしまったな」

「いっつー!？」

エリカが妙な声を上げた。

(う、迂闊でした……。他にも起きている人はたくさんいたでしょうに。しかも夜! 響いて遠くまで聞こえてたんじゃ……!)

「エリカも聞いたか? 綺麗な歌だったんだが」

「え、いや、どうだったかなあ、フィアさんをベッドに寝かせてからあたしも眠りましたし、あはは!」

誤魔化しきれていない自分が憎い。

だが、ジーンはそれで騙されたのか、それ以上の追及もなく「あの歌は綺麗だったなあ」とブツブツ呟きながら歩き、フィアは話題についていけずに2人を交互に見ていた。

「何の話？」

「昨晚、城内で誰かが綺麗な歌を歌ってたんだ。城内じゃ結構その話で持ちきりだぞ？」

（あたしの馬鹿っ！）

2人の横で昨晚の自分の迂闊さに腹を立てた。

カトレヤ、今はバーバラか、彼女に出会い、自分の身の上を隠さず話せたことで気を良くしすぎて、他にも聞いている人がいるかもしれないという可能性を考えもせず、龍の言葉で歌ってしまった。聞き慣れない言葉に誰もが不思議に思っているだろう。

「ふうん、そんなに綺麗だったんだ。私も聞きたかったなあ」

「そのうちまた聞けるかもしれないぞ？ 城内で聞こえたという事は宮仕えの誰かだからな」

「実はエリカちゃんだったたりして？」

「ぶへっ！？ な、なんでそうなるんですか！」

可笑しな声を上げた後、慌てて反論しようとする姿は、どう見ても自分の容疑を確たるものにしてしようとしているようにしか見えない。だが、エリカのかなりの剣幕に冗談のつもりで言ったフィアも、その隣のジーンも少しだけ引いてしまった。

「じよ、冗談だって。まあ、エリカちゃんだったら少し嬉しいけどね」

「あの歌をいつでも聞けるからな」

反応に困る事を言ってくれる。

エリカとしてもこの歌を綺麗と言ってもらい、聞きたいと言ってく

れるのは嬉しい事だ。だが、正体がばれる可能性が限りなく上がり、尚且つ城内で注目を集めるような行為は極力控えたい。ただでさえ宮仕えになりそう言う意味で拘束される時間が多くなるのだから、目立って呼び出してもくらくらうようなことは避けた。エリカはこの国に元の姿に戻る方法を探しに来たのだから。

（誰にも見つからないような場所で、こっそり歌いますか……）

たまに歌うと、心がすつきりして心地よい気分になれる。

だから、自分だけの場所を見つけることも、今後の最優先課題に決めたエリカであった。

「騎士エリカ、前へ！」

司会のような役割を務めている頭の禿げた中年が声を張り上げると、エリカは赤い絨毯が敷かれた大広間をゆっくりと進んでいく。

儀礼用の、赤い紋様の描かれた団服、コートのように長い上着の背中には、エリカにとってかなり不本意ながらアクイラ騎士団の部章であるドラゴンを剣で突き刺したような紋章が編み込まれている。

下はどうもファイアが手を回したらしく、ほどほどの長さのスカートだ。もちろん、戦闘時に穿ける代物ではない。腰の部分にベルトのようなものが斜めに垂れ下がっているが、使用方法の分からないオブションにエリカはどう扱うべきか未だに悩んでいるのだが、ファイア曰く「気にしたら負け」らしい。

エリカは赤い絨毯を進んでいくと、数十人という人が左右に並んでいた。そしてエリカの真正面は階段状になっており、頂上には3つの椅子が設置されている。左右の席は空席で、真ん中の席の前に銀髪銀眼の男がその身体相応の剣を帯びて立っていた。

階段の手前まで行くと、再びエリカは立ち止まり、立膝について頭を下げる。

「騎士エリカ、貴殿はアールドールン国王アーサー王に忠誠を誓い、いつ何時も陛下のために剣を振るう事を誓うか」

刀だけどね、と心の中で呟く。

表情に出すわけもなく、ただ剥げた男の質問に「イエス」とだけ答えていく。事ここに至って否定する理由が見つからないだけに、エリカはこの儀式の存在意義が理解できない。

「では騎士エリカ、陛下に主従の誓いを立てよ」

階段をゆっくりと国王が降りてくる。そしてエリカの前に立つと剣を抜き、その剣の腹をエリカの肩にそつと置いた。

エリカは刀を抜いてその刀を身体の前で床に突き立て、顔を上げずに誓いの言葉を口に出す。

「我、騎士エリカは、この命果てる時まで、陛下と、陛下を信ずる民を守るためにこの刀を振るう事を誓う」

「よろしい、騎士エリカ。そなたに我が身と民を守ることを許可する。顔を上げよ」

国王に言われて顔を上げると、顔に深い情緒を湛えた男性の顔が飛び込んできた。目つきは鋭いが、どこか頼もしい雰囲気醸し出し、剣を持つその手は太くがっしりとしている。

「昨晚の歌、見事であった」

国王はエリカにしか聞こえないほど小さな声で呟いた。

その言葉にエリカの心臓が早鐘を打つように脈動し始めたが、エリカは必死に動揺を顔に出すまいと冷静さを装う。

やはり、エリカの歌声は城の至る所まで聞こえてしまっていたようだ。

「な、なんのことでしょうか……」

「ふっ、身に覚えがないと申すか。構わん、私の独り言だ、忘れよ」

咎めているような口調ではない。それを感じ取ってエリカは安堵のため息を小さくつく。もちろん、目の前の国王にも分からないほど小さいものだ。

国王は剣をエリカの肩から退けると、剣を収めた。エリカは立ち上

がって立位の最高礼を行い、国王への忠誠を誓った。

（このような、形式的な事に時間と費用をかけるヒトが理解できませんね）

退出する際、思っていたことを心の中で散々にぶちまけながら赤い絨毯を歩いていった。何しろエリカにしてみれば、実力が全てだ。力が無ければ約束を守れることも、家族を守る事も出来ない。形式的な忠誠よりも、よっぽど実際の行動が重視される社会で生きてきただけに、エリカの不満は後を絶たなかった。

（だけど、あの王様は良い人っぽかったな）

儀式において目上の人をまじまじと見ることはあまり褒められる行為ではない。だからエリカもあまり国王の顔をじっくり見ていたわけではない。

だが、それでも国王の纏う雰囲気といおうか、近くにおいて安心できる空気を彼は纏っていた。相手をすぐには信用しないドラゴンでも、どこか頼もしく思えてしまうほどの男であった。

ただ、鋭いところはさすが一国を統べる王と言っべきだろう。言葉では諦めていたようだが、あの目は確信を持っているように思えた。下手をすると正体を見破られるのではないかとエリカは随分と肝を冷やした。

「お疲れ様、エリカ」

大広間を出て、やっと一息つくこうとしていると、ジーンとフィア、ジャックが現れた。

大広間ではお偉い方の背後に隠れていたようで、ファイアはエリカの晴れ姿が少ししか見られなかったと悔し泣きしていた。

「これで晴れて俺たちは仲間だな。これからよろしくな、嬢ちゃん」
ジャックがにこやかに手を差し出してきたので、エリカも手を差し伸べ、ジャックの手を握った。

「さてと、エリカ、実は入団早々で悪いんだが伝えなければならぬいことがあるんだ」

ジーンはそう言うのと一枚の紙を取り出し、エリカに手渡した。そこには以前ジーンが査察に行ってきた帰りに見せてくれたドラゴンスレイヤーによる大会の案内が書かれていた。

「1か月後の大会に向けて、俺たちアクイラ騎士団から最優秀の5人を選抜する試合が来週から始まる。それにはエリカも出なければならぬんだ」

「来週……、って今週はあと2日しかないし、明々後日からですかあ!?!」

我ながら間抜けな声を上げたような気がする。

とはいえ、わずか2日でそのような団内の試合に出ることになるとは、エリカも予想していなかったために、その驚きは小さいものはなかった。

「で、でも、あたしまだ剣術もさっぱりだし、何もかもこれからなんですよ!?!」

「安心しろい、嬢ちゃん。嬢ちゃんの実力は俺が保証する。十分選抜される實力を持っているぜ? あゝ、明々後日からの試合が楽し

みだ」

小声で「今度こそズルはナシな？」と言われれば、もはや何も言う事は出来なかった。

「その試合には、何人出られるんですか？」

選抜と言うからには、ある程度人数が初めから絞られていないと、時間がかかって大変だろう。そこにエリカが3日前に飛び入りするのだから、迷惑をかけると思っただけでジーンを介して詫びを入れた。

ジーンは全く気にしてない様子で、笑いながら試合に出る人数を指を折りながら途中まで数え、両手でも足りないに分かると1人ずつ口に出しながら数えだした。

「……俺、ジャック、ファイア、そしてエリカ。ざっと30人はいるな」

「あれ、バーバラさんとか、ヴァルト団長は出ないんですか？」

バーバラは、ジーンが団屈指の実力を持っていると言っていたはずだ。彼女が出ないのはおかしい話ではないか、と思っただけでエリカは聞いた。ヴァルトに関しては、団長が出ないのは騎士団としてどうなのだろうかという疑問があったからだ。

「バーバラは、ほら吸血鬼だろう？　うちは問題なくとも他国は偏見を持っていたりもする。あの人自身が出たがらないんだ。団長は、もう最前線から引退していて、今はデスクワークに専念しているらしい」

「そうなんですか……」

確かに、ヴァルトはかなり老けて見えていたが、すでに実戦から退いていたとは思わなかった。ヴァルトの目つきは確かに戦人のそれだった。引退したとはいえ、それ相応の実力はまだ健在だろう。

バーバラに関しては、怒りがこみ上げてくるのを必死にこらえていた。

(ヒトはやはり1度滅ぼされたぐらいでは学習しないのでしょうか……)

もちろん、あの時の生存者がドラゴンが来た理由が吸血鬼の仇討ちだとは思ってないだろう。エリカ自身、あれでヒトが更生してくれるとは思っていなかった。だが、やはりこうしてその実態に触れるとやりきれない気持ちになってしまう。

「と言う訳で、今のところ最有力は……ジャック、あと別に2人で、エリカだ」

「はあ、……ええ!？」

何気なく聞いていて、最後に付け加えられた自分の名前にエリカが意味が分からないという表情を露骨に表面化させた。

「な、なんで今日入団したばかりのあたしが候補に挙がってるんですか!」

「い、いや、昨日の戦闘試験は大勢見ていたし、口伝で団内ではかなり広がってるんだ。ジャックは一応この騎士団の中でも5本指に入る実力の持ち主だ。そのジャックに戦闘試験とはいえ勝って、候補に入らないわけないだろう?」

ごもつともな説明が返ってきてエリカはググツと反論に詰まった。

「じゃ、ジャックさんてそんなに強かったんですか……」

「対人はな。対ドラゴンがどれだけ行けるは自分でも分からんがな」

のほほんと答えるジャック。

それを見てエリカは、負けるべきだったか、と今さらながら後悔してしまった。

「お呼びと聞きましたが、姫様？」

「ああ、ヴァルト様、わざわざすみません」

「いえ。して如何されました？」

ヴァルトは城の一室に呼び出され、そこで1人の少女と面会していた。少女は美しい金髪を腰まで伸ばし、凜々しい銀眼でヴァルトを見つめている。

「昨日の歌、聞きましたか？」

「歌？ ああ、騎士団の者たちも噂していたあの件ですか。私自身は寝ていたので聞きませんでした。かなり大事になっているようですよ？」

「あれは慈悲です。星が教えてくれました。すでに慈悲と災厄を伴う『何か』が城に入っています」

その言葉に、ハツとなってヴァルトは目を少女に向けた。

少女の顔は穏やかだったが、やはり緊張しているようにも見える。

「確か、今日新たな騎士が騎士団に入られたと聞きましたが」

「え、ええ。エリカと言う騎士です。16歳ほどの少女なのですが、騎士団屈指のジャックを破り入団しました」

「どのような方ですか？」

少女の問いにヴァルトはしばし考えをまとめるために頭を回転させた。そしてしばらくすると顔を上げて少女に向かって話し始めた。

「性格は、至極真面目、という印象を受けましたね。しっかりしているようでしたが、ものも書けぬとの事、この大陸では珍しい黒髪と紅眼で、得物はここに来てから見つけたようです」

「黒髪……」

「もしか、彼女が『それ』だと言っているのですか？」

ヴァルトがハツとなって少女を見る。

思えば、あの入団志願書の偽り、そういう事なら理屈が通る。だが、巨大な問題が残る。

「予言はドラゴンだったはず……」

「私もまさかドラゴンがヒトになってやって来たなんて考えてません。ですが、多少関係があると見てよろしいかと思えます。あの歌の主も少なからず予言に関係していると見て間違いないのですから」
「では、騎士エリカの身边を洗いますか？」

そうヴァルトが聞くと、少女は小さく首を横に振った。

「先ほども言いましたが、歌は『慈悲』を現していました。仮にその騎士が歌の主だとしても、『災厄』ではありません。それに、アキラ騎士団は1か月後のドラゴンスレイヤーの大会へ向けて選考試合があるのでしょう？今はそちらに集中いたしましょう。大丈夫です、まだ切迫した危機ではありません」
「……分かりました」

ヴァルトはそう言うと、部屋を後にして自らの執務室へ戻るために長い螺旋階段を下り始めた。

戻る途中で、ヴァルトは考えを巡らせていた。

仮にエリカが予言に関係があるとなると、正直騎士団としては大会どころではない。迫りくる危機に対応しなければならぬ。だが、まだ可能性の域を出ない。

（彼女は何が目的で来た？）

そう言えば、彼女は入団理由を明かしていない。大抵の者は、ドラゴン殺しという栄誉を求めたり、国のため、家族のために、といった明確な理由がある。内容の良し悪しはともかくとして、ドラゴンスレイヤーになる者は理由を持っている。

だが、エリカの理由はなんだ？

龍殺し？

少なくともここ20年間で人里に龍が降りてきたことはない。1度こちらから出向いたことはあるが、それだけだ。

では家族を守るため？

志願書の偽りの出身地が万が一、ヴァルトのミスで本当の事だとしても、この城に仕えるには遠すぎる。

国を守るため？

16歳でその意識があるとしたら立派なことだが、まずありえないだろう。

ではなんだ？

エリカには明確な理由がないのだ。にも関わらず、エリカは国に仕える軍隊でも有事の際は最も危険なアクイラ騎士団に入団を志願してきた。

(目的は別にあるのか？)

例えば、この国の情報。

今は戦争のない平和な大陸ではあるが、戦争で最も重要視される情報収集はされこそ平時に行われるものだ。もし、エリカが間者^{スパイ}であり、この国の戦力を見極めに来たのなら、ゆゆしき事態だが、アク

イラ騎士団に入る理由にはならない。情報が目的なら城に常駐する近衛部隊や、メイドとして潜入した方が、よっぽど危険も少ない。

では、いったい何が目的か？

ヴァルトにはエリカの真意を計りかねていた。

「直に聞いてみるのが良いか……。ジーンにでも聞いてみるか……」

最近をよくあの3人組と共にいると聞く。

「そういえば、あの3人もエリカとどこで会ったか言っていないかったな」

あの3人はエオリアブルグとアールドールンを往復しただけだ。エリカの志願書に書かれていた出身地は王国の南に位置するはずだ。随分と辺境の村で、調べなければ名前も確認できないような村だ。そこの出だとしたら、大きな矛盾が生じる。

「彼女はどこから来た……？」

そして何の目的で。

ヴァルトは堂々巡りしつつも考えを目まぐるしく回転させながら、自分は螺旋階段を下り続けていった。

第15話 堅苦しいのは苦手ですが？（後書き）

入団からのいきなり団内試合へ！

そして何やらヴァルトが動き出しましたね。バレちゃっ？
ソバラしちゃっ？ はっはっはっ、しませんよ。 いっ

忙しいながらに7000字超書いてました。

今後ともよろしくであります。

ご感想などお待ちしております！

第16話 特訓とは肉体言語を伴うもの（前書き）

ボディランゲージ
肉体言語が黒鱗を持つエリカに効くかどうかはまた別のお話……

第16話 特訓とは肉体言語を伴うもの

翌日、食堂へと通ずる通路の途中にある談話室のような空間の壁に、1枚の紙が張り出された。

タイトルは『騎士団内選抜試合対戦表』。

トーナメント形式になっており、全32名から始まる試合は上位4名が選考されることになる。

「あれ、残りの1人は……?」

本来なら決勝までのシードという形でその時点で騎士団最強の騎士がトーナメント表にも組み込まれているはずなのだが、今回はそれが無い。

それに気が付いたファイアが怪訝な顔をする。

「……下の方に名前が書いてありますよ?」

人だかりの中、エリカは欄外に書かれた名前を見つけ出すが、大男が多い騎士がその視界を塞がってしまったため、背の高いジーンやジャックに後を託した。

「うん? ああ、書いてあるな……、ええと、……バーバラ!？」

「……はあっ!？」

「あら、エリカにジーン、何を驚いているの？」

バーバラの名前をジーンが叫んだ瞬間、その場にいた全ての騎士が固まった。今まで一切公の立ち位置で国外に出なかつたバーバラがその名を書いているという事は、大会への出場を承諾したという事だ。

「で、出ても良いのか？」

さすがのジャックも驚きを隠せないのか、声が少し震えている。だが、バーバラは別段何とも思っていないらしく、表を眺めてからエリカたちに視線を戻した。

「ふふ、今回は出てみたい気分なのよ。止めても無駄よ？」

「いや、止めはしないが、なんせバーバラが出たら大将戦は貰ったようなものだしな」

「あら、誰が大将務めると言ってる？」

「……はあっ!?!?」「」「」

再び同じ台詞を吹き出してしまった。

バーバラは吸血鬼だ。正直並みの人間では勝てる相手ではない。もちろん相手の大将と戦うと思っていた面々はさらに驚かされることになった。

「私は全ての指示をヴァルトから任せられているわ。つまり、来週の試合の結果を見て、上位4人の誰を大将、副将と決めるかは、私に一任されているの。つまり、頑張れば大将になれるかもしれないわよ?」

大将、つまりは騎士団、引いては国を背負う騎士として出ることが出来るのだ。その榮譽は並み一通りのものではない。それを聞いた背後の騎士たちは歓声を上げ、さっそく試合に向けての特訓に向かったようだ。ジャックもまた腕をグルグル回しながらその波と共に修練場へと消えていった。

「でも、どうして急に出ることに決めたんですか？」

フィアは騎士の波に吞まれる前にそこから逃げ出して近くにあったソファに座った。談話室だけあって複数のソファが向かい合って設置されているので、それぞれにジーン、バーバラ、エリカが座っていく。

「理由なんて特にないわ。本当に気分よ？ 強いて言えば、エリカかしら」

言われたエリカは「へ、あたし？」と自分の顔を指差しながら首を傾げた。

<ご主人は、そなたの戦いぶりをもっと見たいようだ>

フィアの疑問に答えたのはアレックスだった。だが、アレックスの言葉はバーバラとエリカにしか聞こえない。つまりはそういう事だ。

「強い新人と、弟子の成長を間近で見たいのよ」

「そういうことが……」

アレックスの答えと、バーバラの答えはもちろん若干の誤差がある。エリカという『新人』ではなく、エリカという『ドラゴン』、また

は『親友』の戦いが見たいのだ。それを理解したエリカはアレックスに小さく頷くと、その頭をモフモフと撫でる。

アレックスも諦めたのか、なされるがままに撫でられることにしたようだ。

「あれ、アレックス嫌がらないの？」

それを見ていたファイアが面白そうに身を乗り出してきた。

「アレックスのいつでもモフモフ権を得たのです」

「……なんだそれは」

何の事だかさっぱりではあるが、少なくともアレックスにとって不幸なのは明白だ。四六時中エリカにモフモフされる可能性に脅かされているのだから。

「それで、エリカとジーン、ついでにジャックはいつ試合なの？」

「ジャックはついでなの……」

ファイアが何かかわいそうなものを見るような目で修練場で大剣をブンブン振って相手を吹き飛ばそうとしているジャックに視線を向ける。

バーバラの問いにジーンが立ち上がり、壁に貼られていたトーナメント表を剥がすとそれを持ってきた。机に置かれるとバーバラはもとよりエリカやファイアもその紙を覗き込む。

「エリカちゃんは……、1試合目え！？」

「嘘っ！？」

16試合あってその1番目に当たるとは、エリカもなかなかの運の持ち主のようだ、とジーンは内心で思った。

（1試合目……、あたしの目立たないための努力計画が水の泡に……）

1試合目など、1番目立つに決まっている。ただでさえ飛び入りの新人なのに、これ以上注目を集めてどうするというのだ。

「相手は……、ああ、ゲイリーか。安心しろエリカ、ジャックほどふざけた奴じゃない」

「ジーンは……、11試合目ね。初日じゃなさそうよ」

昼頃から始められる予定のトーナメントは1日では到底終わらない人数が出場する。よって選抜試合は3日から4日かけて行われる。初日と2日目で1回戦を終わらせ、3日目で準決勝までを行う。そして最終日に決勝戦という流れのようだ。

「ジャックは最終組か。勝つのも目に見えてるし見に行かなくてもいいか」

「行ってあげようよ……」

フィアがさすがにジャックがかわいそうになったのかそんなことを口にするが、ジーンとバーバラは手を顔の前で横にブンブンと振りながらそれを拒否する。

「2日しかないのね……。ジーン、屋内修煉場って今空いてる？」

バーバラが考え込むとジーンに目を向けた。

「屋内？ 今の時間ならまだ空いてるんじゃないか？」

「分かったわ。さてエリカ、あなた剣術は素人なんでしょう？ 少し手合せしてあげるわ」

「バーバラさん！？」

突然の事に事態が呑み込めないエリカだったが、その腕を掴まれると強引に引つ張られてバーバラの後に必然的についていくことになってしまった。助けを求めようとジーンに振り返るが、ソファの2人は「諦める」という表情と「生きて帰れ」という思いを全力で表現していた。

（な、なにをされるんですかあ！？）

心の中で叫んだエリカはそのまま談話室を連れ出された。

「さあ、刀を構えなさい、エリカに教えられることは少ないだろう

から、ちゃちゃつとやるわよ」

「はあ……」

訳も分からずバーバラに連れ出されたエリカは、騎士団宿舎の地下にある修練場にやって来ていた。壁には松明たいまつがかかっているのだが、そのただっ広さもあって少し淋しく感じられる。

その広さにも関わらず、バーバラとエリカしかおらず、若干ジメツとした空気がその感覚に拍車をかけている。ジメツとした空気は、どうやら風の魔法が何かで地上と常に循環しているようなのだが、少し不快に思えてしまうのは仕方ないのだろう。

2人しか今は地下修練場にはいないが、エリカがバーバラに引きずられてここにやって来た時は、10人程度の騎士がここで剣術の訓練をしていた。ところがバーバラを見た途端、慌ただしく挨拶をする。と剣をしまつて修練場を出て行ってしまった。エリカは最初、この騎士団にもバーバラを嫌っている人がいるのか、と思って若干失望していたのだが、最後に出て行こうとした男性の騎士がエリカとすれ違う時に小さな声で「死ぬなよ」と言ったのが聞こえ、その考えは瞬時に霧散した。

その一言で、彼らは十中八九、バーバラに巻き込まれないために逃げ出したのだという事をエリカは理解させられてしまった。

「で、でもバーバラさん、あたし、ジャックさんとも何とか戦えましたが、刀の使い方を使い続ければ自然と身体が馴染んでいくと思うんですが」

エリカがそう言うとバーバラは「やっぱり」と呟いてため息をついた。

ちなみに、1度エリカはバーバラを「パフィオベディルム殿」とあの夜以降に呼んだのだが、言った瞬間脳天い強烈なチョップが来たのでそれ以降普通にバーバラと呼んでいる。昔の癖でそう呼んでしまったのだが、バーバラは「今はもう、バーバラなの」と黒い笑顔で言ってきたのでそう呼ばなくてはならなくなってしまったのだ。

エリカとしては、昔のように呼びたかったのだが、よくよく思えば「カトレヤ殿」とか「パフィオベディルム殿」と呼ぶと随分と嫌そうな顔をしていたような気がしたので、少し悪い事をしてしまったかと思つて謝罪した。バーバラ自身は200年も前の事はもう覚えていないと快く許してくれたが、それでも、もうこれからはその名で呼ばないでね、と念を押されてしまった。

「ドラゴンが後先考えずその場しのぎの戦いをするのはドラゴンの短所ね。ヒトとの戦いでは、戦略を練り、戦略を実行し、戦略を妨害することで初めて勝利できるの」

「うっ……」

そう言われると反論できない。

龍はその巨体、頑強さを生かして物量、質量で敵を倒そうとする。火を吹ける者は火力任せに燃やし、水を操れる者は巨大な津波ですべてを飲みこもうとするので、戦略など必要なかったのだ。それで倒せてしまったのだから。

だが、今のエリカはヒトの身体だ。背後に回り込んだ敵を尾で吹き飛ばすことも、距離があるのなら首を伸ばして頭からかぶり付くこともできない。そして何より、大っぴらに黒鱗を発現させることもできない。これからは戦略を考える必要があるのだ。

思えば、それを学ぶことも、騎士団に近づいた理由ではなかったか？
今さら思い出してしまったエリカは自分の迂闊さに舌打ちした。

「でも、2日くらいで流派を教えられるとは私も考えてないわ。私が教えられるのは簡単なカウンターくらいよ」

「かうんたー、ですか」

「……絶対理解できてないわね。カウンターは敵の攻撃を防いで瞬時に攻撃に移る事よ。言うのは簡単だけど実践するのは大変よ」

「まあ、あなたの戦い方はカウンターに近いけど」と付け加えるとバーバラは腰の剣を抜いた。それを見たエリカは驚いたように目を見開いた。

「隠さなくていいんですか？」

剣は、真っ黒に変色して見えた。いや、本来の色に戻っているのだ。

「あなた相手に何を隠すのよ。鉄粉って1日もすれば落ちちゃうから塗るの大変なのよ。今日はあなたしかいないし必要ないでしょ？」

バーバラの剣の刃はエリカがカトレヤとして別れた時に餞別代わりにと渡したエリカ自身の黒鱗で作られていた。加工が相当大変だった、とバーバラは苦笑している。

黒い刃は松明のオレンジ色を反射して幻想的に光り輝いている。

「さあ、どこからでも斬りかかってきなさい。私がカウンターを教えてあげるから」

「は、はあ……。でも、寸止めできるかどうか……」

ジャックとの戦いでエリカは1つ自分の身体で気が付いたことがある。

物凄く寸止めが下手なのだ。思い切り振るってギリギリで止めることが出来なかつたので、ジャックに剣を突きつける時は突きから派生して刀を横に向けるという形を取った。そうすれば正確に真っ直ぐジャックの首の横をつけばいいだけなので寸止めは関係ない。

だが、斬りかかれ、と言うからには上段からの斬り下ろしにする斬り上げにしる、振り抜かなければならない。寸止めが下手なエリカでは下手をするとバーバラを斬ってしまう可能性があった。

それを不安に思っただけでエリカが刀を抜くのを渋っていると、強烈な殺気がエリカを襲ってきた。

「っ！？」

驚いて顔を上げると、押しつぶされそうになるプレッシャーを放つバーバラの姿が目の前にあった。

「……そんな心配無用よ。素人のあなたが私に一太刀でも届くとは思ってないから」

眼の色が金色から少し赤みがかつた色に変わっている。吸血鬼としての力の発現をそれは現している。そしてそれはバーバラが本気になることを示している。

「久々にあったと思っただけなら随分と腑抜けてるじゃない。なに、ヒトの姿になってヒトの情緒が伝染った？」

「む、そういう言い方ないじゃないですか」

何となく、バーバラが自分を怒らせて刀を振らせようとしていることは分かった。

だったら、その言葉に乗ってやろうと思った。それに吸血鬼としての力を発現しているのなら、確かにエリカとしても素人の刃が通る可能性は低い。バーバラはエリカの戦いやすい状況を作ったとも考えられるのだ。

「分かりました。行きますよ、バーバラさん？」

「ふふ、それで良いのよ」

殺気は変わらない。

だが、それでもそれが刺々しいものではなくなっていた。

「では……」

刀を抜く。

銀色の刃が煌めき、2つの刃が相對する。

「まずは右から斬り下ろして。それに対する対処法を教えるわ」

「分かりました」

一気に地面を蹴るとバーバラに向かって走り出す。そしてバーバラの目の前で大きく、だが隙を作らないように素早く刀を振りかぶるとバーバラの左肩から首にかけてを狙って振り下ろす。

「温ぬるいっ！」

バーバラはエリカでも認知できるかできないかという速度で振りかぶられた刀を剣の腹で受け止めると、受け止めていた両手のうち右手を放した。両手で振り下ろされた刀と片手で構えられた剣、勝つ方は明白で、一瞬のうちに剣が押し負けて下を向く。だが、それよりも速くバーバラはエリカの懐に入り込んでいた。そして下を向こうとしていた剣を手の中で一回転させるとそのままエリカの脇腹横、腕と腹の間に剣を差し込んだ。

あまりの速さにエリカは反応すらできなかつたが、本来であれば一回死んだことになる。

「隙だらけじゃない」

「しょ、正直バーバラさんしかできないんじゃないんですか？」

「あなたなら出来るわよ」

「そりゃあ、頑張れば出来るでしょうけど……」

出来ないとは言わないエリカ。どうも今の身体になってから負けず嫌いになったような気がエリカはした。

「とにかく、カウンター技は剣術、あなたの場合は刀術とでもいうのかしら、それも出来ないあなたには必要不可欠よ。もちろん、あなたから攻めた時の対カウンター技も焼き付き刃で教えるわ。今の場合、あなたは刀を受けられて片手を私が放した時点でカウンターが来ると察知して飛び退くなり何なりするべきよ」

「案外、適当じゃないですか？」

熱心に聞いていて、肝心のところが適当に流されていることに気が付いて呆れた表情をした。

「な、なによ。私は教えるのが苦手なのは知ってるでしょう？ ていうか龍にどうやって教えるというのよ……」

「いや、今のあたしヒトですし」

「あゝっ、もう、うるさい！ お黙れ！ 習うより慣れるよ！ あなたの攻撃片っ端から受けてあげるからどっいつ時にどっいつカウンターが良いのかその身を以て知りなさい！」

「んな無茶な！！」

こうして、その日の午後はまるまるバーバラによる一方的なカウンター攻撃を体中に受ける羽目になり、無駄に黒鱗を使ったような気がしてならないエリカであった。

ちなみに、後半からはより実戦的に対戦方式を取ったためか、エリカの無茶苦茶な動きに翻弄されてバーバラが何度か痛い目に合うという光景が繰り返されたのはまた別のお話。

「おや、エリカは一緒じゃないのか」

「あ、団長、おはようございます」

時は少し遡る。

エリカがバーバラに誘拐まがいに連れ去られた直後、談話室でトーナメントについて話していたジーンとフィアの元に騎士団長のヴァルトがやって来た。

「エリカに何か用だったんですか？」

「うん？ まあ、そうだが、別に今日じゃなくても良いんだ。またお前たちといる時に話をしよう。因みに今はどこにいるんだ。昼間はお前たちと良くいると聞いたんだが」

それをヴァルトが聞くと、何とも言いづらそうな表情を2人がしてお互いの顔を見合わせた。

「……… なんとかいうか、誘拐されたというか、なんとかいうか」

「誘拐？ どういう意味だ」

「バーバラさんが風のように攫っていったんです」

「……… 相変わらずだな、あいつは。という事は地下修練場か」

そう言うと2人が同意したので、ヴァルトは地下へ向かおうと宿舎の階段へと向かうことにした。バーバラが一緒ということは何かしらの訓練をしているということだろう。その風景を見てみようと思つてヴァルトは地下へと通ずる階段をのんびりと降りていった。

そしてその途中で地下から猛烈な殺気を受けてつい剣に手をかけてしまった。

「な、なんと、バーバラの奴、本気を出しておるのか!？」

久々にバーバラが本気を出していると本能的に察知したヴァルトは、つい駆け足になって地下修練場の入り口脇に隠れるとそこから中の様子を窺った。

バーバラが本気を出して周囲が滅茶苦茶にならない方がおかしいので、ついいろいろな事が心配になったのだ。

「……………しかできないんじゃないですか？」

中からエリカの声が聞こえた。どうやら、何かの練習をしているようだ。

（なぜ私は隠れているんだ）

自分でも理由が分からない。別段隠れるような立場でもないし、いつそ堂々と入場しても良いのだが、何故かそれを身体が許さなかった。

「あなたなら出来るわよ」

今度はバーバラだ。

（うん？）

バーバラの台詞に妙な違和感をヴァルトは感じた。

（妙に親しくはないか……………？）

バーバラが普段から相手を信用するのに結構な時間をかける。吸血

鬼ゆえなのだろう、相手が信用に足るかどうかが慎重に見極める癖がある。

だが、会ってまだ2日か3日のはずのエリカに随分と親しみを感じさせる台詞を投げかけている。投げかけられているエリカもまた、普通に話している。

ヴァルト自身、エリカとは数回しか話していないが、敬語という形となってエリカが周りと一線を画しているのは気づいている。ジョンやフィアが気が付いているかどうかは分からないが、何か絶対に越えられない線が引かれているような気が、その言葉の節々から感じられるのだ。

それが、バーバラにはない。そしてバーバラにも、それがない。

(以前からの知り合いか?)

「そりゃあ、頑張れば出来るでしょうけど……」

やはり、とヴァルトは心の中で頷く。

エリカにはバーバラに対して言葉の遠慮が少ない。それは態度にも現れている。明らかに呆れた表情を浮かべたりしている。

バーバラはエリカに何かをつらつらと述べている。どうやら技か何かの説明をしているようだ。その説明をエリカは熱心に聞いているのだが、徐々にその顔が「あれ?」という顔に変わっていく。

「案外、適当じゃないですか?」

「あゝっ、もう、うるさい! お黙れ! 習うより慣れるよ! あ

あなたの攻撃片っ端から受けてあげるからどっいつ時にどっいつカウ
ンターが良いのかその身を以て知りなさい！」

「んな無茶な！」

ヴァルトは確信した。

彼女たちは知り合いだ。それもバーバラがあそこまで言うのだから、少なくともヴァルトと同等かそれ以上の交流を持っているに違いない。

(エリカ、お前は何者なんだ)

もう、何度目になるか分からない。同じ質問を心の中で呟くと、ヴァルトは来た通路を戻って階段を上っていった。

第16話 特訓とは肉体言語を伴うもの（後書き）

なんかエリカって自分の秘密隠す気あるんですかね、と考えてしまいます。

ヴァルトにもう「あたし怪しいので見張ってね」って言ってるようなもんじゃないですか。

さてさてどうなる事やら……

テストが来週に迫るため更新が少し不定期になっています。頑張ってます。頑張ってますけど。

ご感想などお待ちしております！

第17話 まさかと思いますが、これフラグですか？（前書き）

久々にアクセス解析を覗いてびっくり。

いつの間にもやら10000PV達成しておりました。

2週間経たずこれほどたくさんの方に読んでもらって作者は驚き半分、感謝半分です。グダグダと、モタモタと、よく分からない文をおっぴろげていないか心配しつつも、今後このままいきます。

それと、後書きにて少しお知らせがあります。

第17話 まさかと思いますが、これフラグですか？

「だあゝ、疲れた……」

そう言うとエリカは食堂のテーブルに自らの額をぶつけて突っ伏した。

バーバラの特訓から解放されたのは、日もだいぶ傾いた頃だった。

地下修練場では時間の経過が分からないため、エリカたちは夕食の時間を知らせる鐘の音が鳴ったのを聞いてようやく練習を終えた。

「バーバラ、いったいどんな特訓をしたんだ……？」

「あら、軽く戦っただけよ？」

「軽く半日ですか？ バーバラさんの軽くは私たちの滅茶苦茶キツイ、だってこと自覚してます？」

ジーンとフィアがジト目で見つめているが、バーバラは全く堪えていないようで、コップの中のコーヒーを音もなくすする。汗だくで息も上がっているエリカとは真逆に、バーバラは汗1つ、どころではなく団服に皺すら入っていないような気がする。

（そりゃあ、ほとんどあたしが攻撃してそれをカウンターしてただけだもんなあ）

「まあ、エリカなら大丈夫だと思ってたしね」

「エリカなら……？」

ジャックが聞き捨てならないと言わんばかりに眉を吊り上げる。それに気が付いたエリカはテーブルの下で思いつきりバーバラの脛を蹴ろうとして何か柔らかい物にそれを妨害された。

<エリカ殿、あなたであろうとご主人に危害を加えさせるわけにはいきません>

「アレックス、空気を読んでください。あとであたしの部屋にお持ち帰りしますよ?」

小声でテーブルの下にいるアレックスにボソリと言うと、足を押し付けられているアレックスの身体がビクツと跳ね、渋々そこを退いた。どうやら、何か大切なモノを失うとも思っただけの保身のために主人を売ったようだ。

これ幸いと、エリカはアレックスが退いた瞬間再びバーバラの脛を蹴り上げ、その瞬間テーブルにバーバラの膝が直撃してテーブルがガタンと揺れる。

「~~~~~っ!」

バーバラが声にならない悲鳴を上げようとしているようだが、顔を歪ませるだけでそれを声には出さない。

「バ、バーバラさん、どうしたんですか?」

エリカとバーバラ、アレックス以外から見れば、突然バーバラの前辺りのテーブル下から物凄い音がしてその瞬間バーバラが悶絶し始めたようにしか見えない。

「さあ、アレックスに足でも噛まれたんじゃないですか？」

しれっと言うエリカに、バーバラは涙目になりながらも憎たらしげな目を向けるが、バーバラの不注意でもあるので、という言葉の顔に露骨に出していたエリカに対して何も言えない。

「アレックス、どうして守ってくれなかったの？」

「<すまん、私の貞操がかかっていたのでな……>

「……まさしく飼犬に噛まれたような物ね……」

小さくため息をつく、と、バーバラはテーブルの下で脛を摩りながら足でアレックスの腹を小突いた。

「ところでジーンさん、明日稽古をつけてもらえませんか？」

そんなバーバラを放ってエリカはジーンに話しかけた。話しかけられたジーンは意外そうな顔をしてバーバラを指差した。

「俺なのか？ 俺の剣の師匠であるバーバラに教えてもらったんだろ？ なら俺じゃなくてもいいんじゃないか？」

「たくさんの騎士の人たちと戦って少しでも経験を積みたいので……」

そういうと、なるほど、と腕を組んで納得したようなジーン。

これはエリカ自身の願いでもあるが、それを後押ししたのはバーバラだ。昼間の特訓の時、バーバラはエリカにはとにかく場数が足りないと言った。竜だった頃のを含まずに考えると、エリカの戦闘経験は試験でのジャックとの一戦のみ。これではあまりにお粗末だ。そこでバーバラはせめてジーンとは戦っておいた方が良い、と言ってきたのだ。

ジャックとジーンは同じ大剣使いでもまったくスタイルが違う。ト
ーナメントに出場するほとんどの騎士が男性、おまけに対ドラゴン
を重視して大剣や槍と言った大型の武器を使うため、それらの戦
闘経験が最重要であるとバーバラは考えたのだ。バーバラが使うよ
うな片手で振れる剣は、対人戦では小回りが利いて有利であるが、
対ドラゴン戦では若干心もとない。

他国でも同様なようで、バーバラ曰く「大剣が一番オーソドックス」
らしい。取り回しの悪さがある程度は力で補い、機動性を犠牲に1
発の破壊力を重視している。これはカウンターも使いやすい。

「……分かった。明日朝食を終えたら修練場で模擬戦をしよう。他
の皆に混ざってやるからあまり邪魔にならない程度で頼むぞ」

「分かりました」

「多少の怪我なら私が治すし、全力で行っていいわよ？」

ファイアが宙を指でなぞる様に円を描くと、その指に水色の光が灯っ
てほのかな明かりがエリカの目の前で起こった。

「そういえば、ファイアさんはなんでも使えますよね、魔法^{それ}」

ふと、その水色の光を目で追いながらエリカは頭をテーブルにぶつ
けたまま顔を向けた。

エリカの言葉にファイアは少し照れくさそうな笑顔を浮かべると、今
度は反対側の手の平で小さな火の玉を作り出した。

「いろいろ使えるのも案外不便なのよ？ 私の魔法は数がある代わ
りに1つずつの威力が高くないの。牽制にはなっても、とてもじゃ
ないけどドラゴン相手に十分とは言えないわ」

そう言うとファイアは炎を少しだけ大きくして見せる。

「私はジーンやジャックの剣に火や電撃を纏わせることはできても、個々の威力は出ない。1人じゃ戦えないのよ。唯一の取柄は魔力量が影響する回復魔法くらいかしら」

回復魔法は得意不得意があまりないと言われている。誰でも使える代わりに、個々の魔法を内包する量で効果が違くとされているのだ。ファイアの場合、魔力容量が大きく、炎としての出口、水としての出口、風としての出口と、数多くの出し方が出来るのだがそれぞれの穴が小さいのだ。だが、出口の大きさに影響を受けず、純粹に魔力容量だけでその力の大きさが左右される回復魔法は、ファイアの十八番となるのだ。

「そのおかげで、俺たちは後先考えずに戦えるがな」

ジャックがニカツと笑う。

「だからジャック、いつも言っているでしょう？ 傷は治せても体内に入った毒は取り除けないし、強固な呪いのかかった傷は治すのに限度があるって。だから無茶ばかりしないでよ」

「しかし俺たちの仕事は生きるか死ぬかの狭間だぜ？ 無茶するなっつて方が無茶なんじゃないか？」

「うわ、ジャックが考えてモノ言ってる」

ジーンが驚いたような顔をしてジャックを見つめている。

エリカ自身、ジャックがすっかり物事の筋道を考えて発現するとは思っていなかっただけに、ジャックに感心した視線を向ける。

それに気が付いたのか、ジャックが憤慨した。

「お前ら、俺の事をどう思ってるんだ……」

「……脳筋」「……」

「グハツ!!」

その場にいた全員が口をそろえてそう言うと、ジャックがあまりの椅子からずり落ちそうになってしまった。だが、その様子を4人は同情ではなく、面白そうな目で見ていた。

「エリカ、ジーン、試合で当たったら覚えてるよ……」

「ちょ、あたしはもう1度戦っているんですから嫌ですよ!」

「エリカ、お前全部俺に押し付ける気か!？」

いや、そんなつもりはない、と思いたいが、あいにくその気はかない、ある。ジャックの戦い方はどうもエリカには合わない。合わないという事は戦いづらいという事だ。もちろん、今日半日のバーバラとの特訓である程度カウンター技は身に着けたし、ヒトの戦い方を知ることが出来た。大剣持ちはその肉体すらも武器であることはジャックとの戦いで身を以て知った。

その上で、ジャックと戦うと自分の秘密がばれそうで怖いのだ。

とてもじゃないが、ジャックやジーン、ファイアにはばれたくない。

明日のジーンとの模擬戦は、より経験を積むこともあるが、今後ジーンと戦う機会は増えるだろうことが想定されるため、どれだけ隙を突かれずに戦えるようになるかを学ぶためでもある。バーバラ曰く、「見る人が見れば隙だらけ」状態の今のエリカにとって、身近な騎士は最も正体を気づかれやすい存在だ。

決して、ジーンたちを信頼していないわけではない。だが、知らなくていい事は出来れば知られたくない、と言うのが本音だ。

ゴンッ！

「っ~~~~~!!!?!?」

そんなことを考えていたエリカの脛に強烈な痛みが襲ってきた。自分が知覚していない時では、黒鱗を発現させることはできない。骨にまで響いた痛みテーブルにつけていた頭を飛び上がらせると、悲鳴こそ上げないが悶絶する。

<顔に出過ぎ、だそうだぞ、エリカ殿>

テーブル下からアレックスの声が聞こえ、目の前のバーバラに目を向けるとニヤニヤ半分、真面目半分という器用な表情を浮かべたバーバラが立膝をして手に顎を乗せていた。

<そんなに難しい顔をしていては、聞いてくれと言っているようなものだぞ>

どうやら、テーブル下のアレックスがバーバラの言葉を代弁しているようだ。涙目になりながらもバーバラに小さく頷くと、バーバラの顔が笑顔に変わって小さく首を傾げる。

「はあ、前途多難です……」

エリカのため息はテーブル下のアレックスにしか聞こえなかった。

<エリカ殿>

食事を終えた後、部屋に戻ろうとしていたエリカにアレックスがバーバラから離れて近づいてきた。エリカは自分たちの周り、会話を聞かれる距離に誰もいないことを確認してからアレックスの前で腰を曲げてアレックスに顔を近づけた。

「どうかしました？」

<1人になれる場所を探しているそうだな>

「……どこから、ってバーバラさんですか」

<いや、私個人だ。宿舎の近くの城壁には古い裏口がある。そこから城の裏の森に抜けられる。町からも距離があるから声を出しても聞こえんだらう。猛獣の類もいないから安心してくれ>

それだけ言うと、アレックスは食堂を戻っていった。

その様子をエリカはアレックスの姿が見えなくなるまで見つめ、見えなくなると宿舎の外へ通じるドアをくぐって宿舎の裏に出た。

すでに日もとつぷりと沈んで、城壁と宿舎の壁の間から星の海が覗いている。月明かりと宿舎から漏れる明かりを頼りに城壁の横を進んでいくと、1力所だけ城壁がへこんでいる所に突き当たった。

「ここですか……」

城壁のへこんだ場所には、鉄製の扉があった。おそらく今は使われていないようで、鉄の扉には鍵穴が付いていて鍵がかけられている。エリカが辺りを見渡すと、扉の近くの地面に小さな錆びれた鍵が落ちていた。

「アレックスは用意周到ですね。今度会った時は優しくモフモフしてあげましょう」

鍵を拾うと鍵穴に鍵を滑り込ませて何度か回すと錠が外れる音が響いた。扉を押すと重苦しい音と共に扉が開いて城の裏にある暗い森が姿を現した。暗いと言っても、異常な暗さではなく、月明かりと星明りは木々の間から差し込んでいて、足元はある程度見える。

エリカはその中へ分け入っていく。もともとは道があったようで、扉から真っ直ぐ進む場所にはあまり背の高い草木は生えておらず、地面にも人為的に撒かれたような砂利が敷かれている。その砂利道を進んでいくと、しばらくして森の中に広場のような場所が現れた。そこだけ周りの木々が切り倒されていて、草木こそ生えているが明らかに人の手が入っている場所であった。

「静かです……」

夜の虫が鳴く声すら、ほとんどしない。まるで世界から切り取られたような空間がそこには存在していた。城の城壁によって城内の騒

音は聞こえてこないうえに、城下町から遠いために、自然が作り出す風の音や、虫の音しか聞こえてこない。

「おや……」

近くの木の枝でフクロウが羽を休めているのにエリカは気が付いた。フクロウもエリカに気が付いているのか、大きな目をエリカに向けたまじつと見つめている。

エリカがフクロウに向かって何気なく手を振ると、フクロウは大きな翼を広げて飛び去ってしまった。フクロウの姿はすぐに闇の中に溶け込んで見えなくなり、再びエリカは森の広場に1人だけになってしまった。

「むう、聞いてくれる方が誰もいないのはそれはそれで残念ですね」
歌は聞いて貰ってなんぼ、と言われたことがあるような気がする。だが、さすがに城の人間に聞かれるわけにはいかないのです、と思っ
てここへ来たのだが、観客がいないのでは歌う気も失せてしまう。

「今日は場所の確認だけで良いですか……」

小さくため息をつくときエリカは来た道を帰り、開けっ放しにしていた鉄の扉をくぐって城の中に戻る。まだ宿舎には明かりが灯っており、食堂からは話し声が聞こえてきている。

「……アレックスでも見つけに行きますか……」

モフモフしてぐっすり眠ろうか、などと考えていると、目の前の暗闇から何かが走り込んできた。そしてその黒い影は素早くエリカの

近くの草むらに飛び込むと顔だけ出してエリカに向かって口を開いた。

「何も見なかったことにして！」

声こそ小さいが、はっきりと聞こえた声は、今のエリカよりも幼い声に思えた。事態が呑み込めなくて首を傾げていると、再び今度は松明を持った城内の警備を行っている近衛兵が5人ほど駆けてきてエリカを見つけると荒い息を整えながら歩み寄ってきた。

「騎士団の方ですか？」

「そうですか……」

隊長なのだろう男が聞いてきたので、エリカは小さく首を縦に振る。

「たった今、この辺りでこのくらいの少女を見かけませんでしたか？」

男はそう言つと自分の胸元辺りに手を持ってきて探している少女の身長をエリカに教えてくる。あの黒い影と同じくらいだろうか？

「ああ、さっきあたしとすれ違って城の方へ向かいましたよ」

気まぐれ、とても言おうか。

別に今エリカの隣の草むらに隠れているだろう少女には恩義も何もない。だが、何となく、いたずら心でもくすぐられたのが、エリカはあえて間違つた事を近衛兵に教えた。すると近衛兵はエリカに一礼すると慌ただしくエリカが指し示した方向へと走り去っていた。

「……行きましたよ」
「……みたいですね」

近衛兵の持つ松明が宿舎の陰に隠れたのを見計らってエリカは草むらに声をかけた。するとガサガサと草むらから先ほどの少女が出てきた。

月明かりではつきりしないが、バーバラと同じような金髪を腰まで伸ばしている少女は、頭についた木の葉を払うとエリカの顔をまっすぐ見てきた。

「ありがとうございます、恩に切ります」

ペコリとお辞儀をすると、少女はニコリと笑った。そしてエリカの装束を上から下まで見るとどこか目を輝かせてエリカに詰め寄ってきた。

「アクイラ騎士団の方ですか？」

「え？ ああ、まあ、昨日から、ですけど」

「昨日、というと期待の新人さんと言ったところですか？」

「期待の新人かどうかは知りませんが、多分そうです」

そう言うとそれまでの笑顔がスツと消えて、エリカを観察するかのような顔に変わる。と言っても、それが警戒心からなのか好奇心からなのか、月明かりだけでは読み取ることはできなかった。

「……不思議、初めて見る気配です」
「っ！？」

いきなりそう言われてエリカは身じろぎしてしまった。

「ふふ、あまり警戒なさらないでください。私は相手の特性を見抜いてしまうだけですから。お名前は？」

「……エリカです」

「エリカ、殿ですね。では騎士エリカ、またお会いしましょう。私の名前はティティ・アールドールンと申します」

「はあ……、はあ?!」

何気なく返事をしたが、すぐに少女の下の名前の意味を理解して驚きの声を上げたが、すでに少女は暗闇に駆け出していた。エリカはただただそれを茫然と見送るしかなかった。

「おゝい、エリカ、そんな所で何やってんだ？」

「あ、ジーンさん」

宿舎の裏口から身を乗り出したジーンの影響がエリカに声をかけてきた。

エリカはジーンに近づくとつかぬ事を聞いてみることにした。

「ジーンさん、王様ってお子さんいるんですか？」

「突然だな、いるぞ。ティティ様というお姫様だ。それがどうしたのか？」

「……そこで会いました」

「へえ……、はあ!？」

(あ、なんかこれデジャヴ……)

先ほどのエリカと同じような反応をしたジーンはしばらく考え込んだような表情をするため息をついた。

「姫様はどうもたまに自室を抜け出しては城の中を散策する癖があるからな。近衛兵たちも大変だろうな」

「確かに……」

先ほど会った近衛兵たちも随分と走りまわされていたのだろう。かなり息が上がっていた。

「まあ、城の外じゃないだけマシンなんだが。陛下も姫様には甘いからなあ」

「そう言うものなんですか？」

「そういうものなんだ」

そう言うとジーンは自室のある上の階へ行くために階段を上がり始め、エリカは再びアレックスでも探そうと宿舎内を搜索することにしました。

しかし、アレックスはすでにバーバラの部屋に逃げ込んでいたように、結局その夜アレックスをモフモフすることは叶わなかったエリカであった。

第17話 まさかと思いますが、これフラグですか？（後書き）

フラグ臭がプンプンしますね〜。

え、しない？ してるの作者だけ？ じゃあ、ないことにしましょーか。

って、そんなことをしている場合ではなかったのです。

前書きにも書きましたが、

この度10000PVを達成させていただきました。私ハモニカ、1日に1000以上のアクセスを頂くという感動を味わわせてもらい、感謝この上ないです。

それで、よく他のしゃくしゃしゃん、じゃなかった作者さんが記念で何か番外編をやっていたりするのを読んだりするんですが、どうしようか悩んでおります。

やるならストーリーぶった切ってネタにでも走ろうかと思っているんですが……ネタ？ まあ、書いたらのお楽しみで。

あまり本編では笑いの要素が少ないかなあ、なんて思って笑いを届けられれば、とか、せっかくですし普段書かないような書体でやるうか、などと考えをめぐらせております。

という訳で、番外編でも書こうかと思っているので、そのうち投稿

出来たら、とお知らせしておきます。

では、今後ともよろしく願いします。そして感想などお待ちしております。

番外編 1万PV突破記念 初めてのお風呂！（前書き）

そういうのを期待した諸君！

私の作者情報を読んでもらいたい！

私はそういうのがカラッキシだという事がよく分かると思う！

それを踏まえた上で、読んでくれるとありがたい！

『サー、イエッサー！』

それと、本編には絶対に今後も絡まない話である！

読み飛ばしてもらっても全然かまわない！

『サー、イエッサー！』

あ、やっぱり読んで。

それはそれで淋しい。

『……………』

番外編 1万PV突破記念 初めてののお風呂！

「エリカちゃん、お風呂入りましょう」

「おふる、ですか？」

その会話が、エリカの不幸の始まりを告げる鐘となった。

エリカが城に着いたその日の随分と夜も更けた頃、ファイアがエリカにそんなことを言った。眠っていたエリカをファイアが揺すって起すとエリカは眠気眼を擦りながらベッドから起き上がる。

「あなた今日疲れて寝ちゃったけれど、身体も洗ってないでしょう？ 丁度いいからお風呂に……エリカちゃん、お風呂って知ってるわよ、ね……？」

「な、なにかわいそうな物を見るような目であたしを見るんですか

……？」

「知らないのね」

「うっ……、すみません、知りません」

「はあ……」

さも、残念だと言わんばかりのため息をエリカがつくと、フィアはおもむろに何枚かのタオルと替えの服を手に持つとエリカを引っ張って部屋を出た。

エリカはフィアの服を借りている。実は、こちらに来て初っ端に食堂で大勢の女性騎士に囲まれた時に服の話題に話が飛んだのだが、エリカほど小柄な騎士が団内にいなかったため、仕方なくフィアがあまり着ていない服を貸している。フィアは決して大柄ではないが、それでもエリカよりは大きく、今エリカが着ている服もかなりぶかぶかで、気を付けないと首元から胸が見えてしまうとフィアにも念を押された。

ズボンに関しては、裾を5回ほど折ってなんとかエリカの足の長さに合う様になっているのだが、動いていると徐々に折り目が元に戻ってしまい、たまに足を引っかけて転びそうになってしまう。腰にベルトを巻いてズボンがずり落ちないように気を付けていないといけないという難点もある。

「いくら人跡未踏の地に生きていても水浴びぐらいはした事あるでしょう?」

「ああ、それはもう、暇なときは川辺で寝そべっていましたから」

「……野性的ね」

「滝に打たれたり、川に身体を入れたりはしてましたけど……、おふるもそういものなんですか?」

「まあね、熱いけど」

部屋を出ると、2人は食堂とは真逆の方向へ続く通路を進んだ。すでに就寝しているのか、通路には人の気配は一切なかった。ここまで静かだと逆にわずかな音でも大きく感じてしまう。

「でも、どうしてこんな時間に入るんですか？」

「混雑を避けるっていうのもあるんだけど、まだ一応エリカは騎士じゃないからね。あまり堂々と入るわけにもいかないでしょう？」

それに、この時間だとお風呂のお湯が1回入れ替えられるから、気持ち良いわよ」

「気持ち良い、ですか」

エリカにとって水浴びとは身体に付いた汚れなどを落とすためにすることだ。滝に打たれば気持ち良さよりもむしろ固体のような衝撃を受けるためにリラックスなど少しも出来ない。川で水浴びする際も、流されないように結構気を使うし、滝だと滝つぼに飲みこまれないように気を付けなければならない。エリカはドラゴンの中では決して大きい方ではなかったが、それでも身体の隅々まで水浴びできるような大きな滝は少ない。滝の大きさに比例して大きく、流れも急な滝つぼには注意していないとドラゴンでも飲みこまれかねない。

「身体から疲れがふわあって抜けていく感じって言えばいいのかな？ ああ、ここよ」

ファイアが通路の突き当りを指差し、その先に視線をエリカが向けると、2つの入り口が姿を現した。片方には「女性」、もう片方には「男性」と書かれていて、入り口から暖かい空気が流れだしている。

「じゃあ、私たちはこっちだから」

ファイアが迷うことなく「女性」と書かれた方の入り口に入っていくので、エリカもその後が続いていく。

中に入ると、棚が壁一杯にあり、鏡が据え付けられた台のようなものが隅に並んでいる。フィアは棚の方へ行くと、持ってきたタオルや着替えを棚の中に入れて服を脱ぎ始めた。フィアの白い肌が姿の覗かせる。

「ささ、エリカちゃんも脱ぎなさい」

「はあ……」

フィアは自分の身体に白いタオルを巻き付け、何枚か小さいタオルを手に持つと湯気でガラスの曇った扉の近くでエリカを待つことにした。その間にエリカもフィアの見よう見真似でタオルを身体に巻き付けると、フィアの元へと裸足で駆け寄る。

フィアがエリカの到着を待つて扉を開けると、視界一杯に湯気が広がって一瞬視界が真っ白になる。その後すぐに湯気が晴れて巨大な空間が姿を現した。

「広いですね……」

「城でも屈指の大浴場よ。これに勝るのは王家が入る浴場ぐらいよ。見たことはないけどね」

「あ、あの水に浸かるんですね」

「ちよ、待った!」

大きな湯船に引き付けられるように歩き出したエリカの両肩をしっかりと掴むと、フィアは近くの壁際に連れて行き、桶のような椅子に座らせた。

「お風呂に入る前に身体を綺麗にしましょうね。エリカちゃんたださえ血だらけの泥だらけだったんだから」

「す、すみません……」

昼間、服を貸してもらおう前に身体を拭いて貰ったのだが、やはりまだ少し汚れは残っている。エリカの常識ではそんな汚れも全部滝や川で流してしまふのだが、ここではどうもタオルで汚れを擦り落とすよつだ。

「ふふ、こういう時水の魔法が使えると便利なよね」

エリカを椅子に座らせると、フィアはタオルを自分の水で濡らして軽く絞る。そして浴場に備え付けられている石鹸をタオルに載せて少し擦るとタオルがすぐに泡を作り出す。

「それじゃ、ちょっと大人しくしていてね」

「は、はい」

何をされるのかさっぱりなエリカはどこか緊張した面持ちだ。フィアはそんなエリカにクスツと笑うとエリカの纏っているタオルを解いて背中に泡立ったタオルを当てて軽く擦りつける。エリカはタオルが落ちないように胸の前でタオルをがっちりと掴んでいる。

「痛くない？」

「い、いえ、まったく。むしろ気持ちいいです」

「ふふ、でしょ？」

エリカの背中を擦っていると、フィアはある事に気が付いてふとタオルを擦りつける手を止めた。怪訝に思ったエリカが振り返ってくると、フィアは満面の笑みを浮かべつつも、どこか悔しそう、というどうやったらそうなるのか分からない器用な表情を作り上げていた。

「エリカちゃんって、初めて見た時も思ったけど肌綺麗よね。髪もツヤツヤで枝毛なんてないし、羨ましいわあ」

「そ、そうですね？」

「しかも……、これは……美、かしら」

「……どこを見て、なにについて、どういう意味で言っているんですか？」

何か随分と邪な事を考えているような気がしてエリカがジトツとした目で見つめると、フィアは慌ててタオルを動かす手を動かし始めた。フィアはタオルから泡を取るとそれをエリカの頭に落としてエリカの長い髪を丁寧に洗い始めた。

「目に入らないように目を閉じていてね」

「はい」

頭を解きほぐされるような感覚に困惑しつつも、どこか身体から緊張が抜けていくような気がして意識がほんわかとしていくエリカ。そんな様子に気が付いたのか、後ろで髪を洗っていたフィアがニヤリと笑みを浮かべる。そしてエリカの髪を洗っていた両手のうち、右手をこっそりと下ろしていくと……。

「隙あり！」

「ひゃあっ!? ちょ、フィアさ、何やって……ひゃう！」

「やっぱり美ね……でも結構着痩せする方みたいね……」

「ちょ、どこ触っ、あ、目に何か入っ、痛い、目が痛いです！ 目が、目があああ……！」

「ネタ!? ああもっ、ゆっくり堪能も出来ないのね。ほら、動かないで」

手の平で水を作り出すとそれをエリカの頭から優しく流していく。

水が目に入って、瞼の裏で大暴れしていた石鹼の成分を洗い流していく。

「ファイアさん、これは疲れを取るためにやっているですよ？ 何かの試練とか、ファイアさんの自己満足とかじゃないですよ？」

「ちょ、石鹼でそんなにダメージ来たの!？」

石鹼の痛みに耐え、涙目で振り返られたファイアは慌ててエリカの顔を心配そうに覗き込む。

「だって、ファイアさん変な事するし、痛いし……」

「あゝ、分かったから。ごめんなさい。ちょっとした冗談よ。ほら身体の石鹼流したら終わりだから」

軽く水でエリカの身体に付いた石鹼を洗い流すと今度は隣にファイアが座った。そして自分の背中を指差した。

「やり方、何となく分かるでしょう？ やってごらんなさい」

そう言うとファイアは泡立ったタオルをエリカに手渡した。エリカは先ほどのファイアのやっていた事を思い出してファイアの背中にタオルを当てると、力強く擦りつけた。遠くでも聞こえるゴシゴシという音が浴場に響き渡る。

「ちょ、エリカちゃん！ 強すぎ！ 痛いって!」

「さっきの仕返しです」

「きゃあつ!？ あ、謝ったじゃない！ あ、ちょ、もう止め……」
「因果応報です」

タオルでこれでもかというほど背中を擦ってやると、案の定ファイア

が悶える。ある程度その状態が続くので、ここからは音声でお送りしたい。

「ファイアさん、あたしにした事、分かっていますよね？」

「ちょ、エリカちゃん、なにする気……?」

「やり返すだけです」

「その笑顔が怖いんですけど!？」

「えいや」

ガバツ!

「ひあつ!？」

「うわ……、ファイアさん柔らかいですね……」

「ん、エリカ、ちゃ、止め……」

「あたしが受けた仕打ち、理解しました？」

「り、理解したからあ、もう、ね?」

「分かりました。あ、流しますからちょっと待っていてください」

「え、自分で流せるけど……ってお風呂のお湯は止めて! 熱いか
ら」

「ふふふ、石鹸を目には入れられませんでしたが、それはここで晴らさせてもらいます」

「ちょ、エリカちゃ……………」

バツシャー……………ンツ……………!!

「きゃああああああっ……………!!」

「あゝ、久々の我が家のお風呂は生き返る……………、ってエリカちゃん、入らないの?」

熱湯をかけられるも生きながらえ、浴場の大きな湯船に胸まで浸かったフィアは湯船の前で難しい顔をしているエリカに首を傾げた。

「こんなに熱い水に、入れるのですか……………? やはりこれは試練なのですか!?!」

「違うから。気持ち良いから騙されたと思って入りなさいな」

「むむむ……………」

脳内で何かしらの葛藤をしているようで、エリカは自分の身体に巻かれたタオルの端を握りしめながら最後の一步を踏み出すべきか考え込んでいる。

「ええい、死なば諸共！」

「そこまでの決断なの！？」

フィアの突っ込みを待たずにエリカは湯船に一気に肩まで浸かった。そして、何かに耐えるかのように目をギュッと閉じ、広い湯船のフィアの隣で小さく縮こまった。

「……………あれ」

「慣れたでしょう？　すぐに熱さは気にならなくなったでしょう？」

「は、はい……………気持ち良い、ですね」

「ふふ、ここでも何にも考えずに、ボーっとすると身も心もすっきりするのよ」

湯船の淵に後頭部を乗せると、フィアは真上を見上げながら湯船の中で身体を弛緩させる。エリカもそれを見て頭を淵に乗せようとタオルを1枚後頭部に当てて淵に頭を置く。するとフィアとは違って身体の軽いエリカは浮力で身体が浮き上がってしまった。バランスを崩しかけて水面を激しく叩いてしまう。

「もう、ゆっくり入りなさいな」

「バ、バランスが取れません」

目を閉じていたフィアが目を開くと、頭を淵に乗せて悪戦苦闘しているエリカに視線を向ける。

「……………ちょっと小さいからよ」

「話す時は相手の目を見てください！ どこ見てるんですか！」

「……いや、まだ望みはあるかしら……」

「それ以前の問題でした。フィアさん、あなた何に話しかけてるんですか！」

「もう、そんなに熱くなる^{のほ}と上せるわよ？ リラックスリラックス」

「だ、誰のせいだと……ふにやつ!？」

何か文句を言おうとしたエリカの顔にタオルがかけられ、その反論を封じた。濡れていたら呼吸が止まりかねないが、幸い乾いているタオルでフワツとかけられたタオルの隙間から心地の良い風が入ってくる。

(……ぼんやり、してきますね……ていうか、ヒトに背中を流されたのは初めてです。少しばかり不甲斐なかつたでしょうか)

何をされるかも分からなかったが為に、迂闊にも無防備な背中を晒してしまった。感情任せに黒鱗を発現させなかったことを感謝しつつ、湯船のお湯に身を任せる。時々起る波で身体が揺られる度に、身体からスーッと力が抜けて、力と一緒に疲れも抜けていくような感覚を感じる。

(なんだか、思考が上手く働かないです……)

「……あら、急に静かになつたわね」

隣から動く気配が消えたことに気が付いてフィアがふと目を開いて隣を見ると、器用に頭だけでバランスを取り、湯船に身体を浮かべているエリカが目に入った。

「エリカちゃん？ 寝るなら上がるっ？」

「ふあい……」

「……駄目ね、まったく、世話が焼ける子になりそうね」

男湯と女湯は天井近くで繋がっている。これは換気の問題からそうしているのだが、それはつまり相互の音が聞こえてしまう事を意味している。

そして、雑多な音を嫌って風呂に入っていたヴァルトは、隣の女湯から聞こえてくる女性の声に安息の場所を奪われていた。

「ちょ、どこ触っ、あ、目に、目に何か入っ、痛い、目が痛いです！ 目が、目がああああ！！」

隣から女性同士の悪ふざけの声が聞こえてくるたびに、ヴァルトは湯船の中でゆっくり浸かることも出来ずため息をついた。

「まったく、こんな夜更けなら誰も入らんとって来たのだが、今

日は厄日だな……」

だが、ヴァルトはこの後も女湯から聞こえてくる声に悩まされることをまだこの時は知らなかった。

「ふあっ?」

「あら、起きちゃった?」

エリカが身体が揺れていることに気が付いて目を開けると、目の前にフィアの横顔があった。視界は宿舎の廊下、エリカ自身は歩いていないのに、視界が進んでいくので自分の状態に目を落として、フィアにおんぶされていることに気が付いた。

「す、すみません。寝ちゃってました?」

「ぐっすりね。お風呂で寝ちゃいけないから、悪いけど勝手に上がらせてもらったわ」

エリカはフィアに負担だろうと自分で歩こうと床に足を付けるが、視界が歪んで身体をまっすぐに保てない。

「あ、れ？」

「やっぱり少し上せちゃったかな？ ほら、もうそこが部屋だからおぶってあげる」

「すみません」

そのまま部屋に担ぎ込まれるとフィアはエリカをベッドに寝かせて自分もベッドに横たわる。

（あれ、そういえばいつ髪乾かしたっけ）

自分の髪が濡れていないことに気が付いて黒い髪を撫でていると、その様子に気が付いたのかフィアがエリカに顔を向けて手を軽く振った。その瞬間、柔らかい風がエリカの頬を撫でた。

「寝てたから少し大変だったけど、ちゃんと乾かしたから痛んでないはずよ」

「重ね重ねすみません」

「ふふ、いいのよ。それじゃ、明日も早いしもう寝ましょ。中途半端な時間に起こしちゃったから寝坊したら起こしてあげるわ」

そう言うとフィアは布団を被って眠りについた。

エリカもまた、上せているせいもあるのか頭がボンヤリしていて、身体からも力が抜けて瞼が重い。

（今度からは、1人でも入れるようにならなければ……）

そんなことを考えながら、エリカもまた眠りについたのであった。

番外編 1万PV突破記念 初めてのお風呂！（後書き）

本編だとエリカが城に来てから翌日までですから、まあその辺にあった話、という事でお願います。この話は後から考えたので、結構「あれ？」と思われる点が多いかもしれませんが、その辺は突っ込まないでくださるとありがたいです。

うーん、こういう描写は苦手なんですよね。とにかく知識も少ないので……。

ほら、逆に知識だけあっても墓穴掘りそうで、ね……

はっ、こういう事も墓穴掘ってる！？

まあ、今後もこういう描写は滅茶苦茶中身が薄い上に皆様の注目を引けないと覚悟はしておりますから。だってカラッキシですもん。

少しは他の小説でも読んで勉強するべきでしょうか？

ではでは、今後ともよろしくでございます！

感想などお待ちしております！

第18話 彼女に私の顔を求めてはいけない(前書き)

寝起きばかりはワンサイドゲームです。

ずっと俺のターン ……!!!

てやつですね。

第18話 彼女に仏の顔を求めてはいけない

今日は休日だ。

休日とあってエリカもフィアも朝はいつもより少し遅くまで寝ていた。先に起きたフィアもさすがに休日までエリカをたたき起こすのとはばかられた様で、自分のベッドで仰向けになって読書をしていった。

とその時、ドアがノックされる音が聞こえてフィアが身体を起こすと、エリカを起こさないようにあまり足音を立てずにドアへと向かう。

(正直、起きないでしょうけどね)

エリカの寝起きはかなり悪い。寝ぼけることなど日常茶飯事になりかかっている。まだ数日しか共にしていないにも関わらず、フィアはエリカの寝起きの悪さにどうしたものかと悩んでいる。

「どなた？」

「その声はフィアか、ジーンだ」

「ああ、ちょっと待ってて」

声でジーンだと知ると、フィアはドアの鍵を解除してドアを開ける。

ドアの前にはジーンが休日にも関わらず朝から訓練でもしていたのか少し息が上がった状態で立っていた。よく見ればその後ろでジャックが壁に寄りかかりながら大あくびをしている。

「エリカに模擬戦を頼まれたんだが、一向に現れないので来てみたんだが、エリカはいるか？」

「あゝ、そういうこと……」

そういえば、昨夜そんなことをエリカが言いだしていたような気がする。

だが、当の本人は未だに起きる気配を見せていない。

（まったく、人に頼み事しておいてすっぱかすなんて……）

フィアは事の次第を理解して小さくため息をついた。

そしてフィアは2人を部屋に招き入れた。口で言うより見てもらった方が速いだろうと考えたからだ。

「……理解した」

「嬢ちゃん……」

ベッドで静かな寝息を立てているエリカを見た途端、男2人は呆れたような表情をして肩をすくめた。

「エリカゝ、起きなさい。今日はジーンと練習するんじゃない？」

この際、2人にもエリカの寝起きの悪さを知っておいてもらおうとフィアは思っ、2人を招き入れたのだ。そしてその目の前でエリカの身体を揺するが、案の定少し寝苦しそうに顔をしかめるだけで目を開ける気配は一向に見られない。

「エゝリゝカゝ」

「ふあ……、フィアさん、あと2時間……むにゅ……」

「まったく、起きる気配もないわね」

「え、起きてないのか？」

今の台詞は、まだ寝たい子供が駄々をこねているかとジーンは思ったが、フィアは諦めたような表情で首を横に振る。

「今のは寝言よ。都合の良い夢を見るわねえ……」

「嘘だろう……」

ジーンとジャックは信じられない、という顔で寝ているエリカを覗き込むが、どうやらフィアの言は真実らしく、なにやら咳きながらもエリカは眠っている。

「むにゅ……」

(な、なんだこの可愛い生き物は!?)

「さて、と。2人は部屋の隅に避難して頂戴。エリカを起こすから」

「起こせるのか？」

「……前は上手く行ったわ」

とてもじゃないがまともな方法ではなさそうだと直感で感じ取ったジーンとジャックは素早くベランダに避難すると、ガラス越しに中の様子を観察することにした。

そして、地獄が始まった。

「さあ、起床の時間よ、エリカ」

ファイアの右手に炎が灯る。そしてその炎はゆっくりと大きくなると蛇のように伸びてエリカの身体の周り、あと少してエリカに接触するかという距離をグルグルと回り始める。熱気でエリカが寝返りを打つが、まだ起きそうにはない。

すると、ファイアは火力を緩めて反対の左手で水を作り出す。水を風力で空中に押しとどめると、少しずつ水球を大きくしていく。１度に大きな水球は作り出せないが、少しずつであれば大きくすることはできる。そして丁度エリカの身長と同じくらいの水球を作り出すとそれを慎重にエリカの真上に持っていく。

「や、やるのか……」

これから起こるであろう惨劇を想像して、ベランダのジーンとジャックは唾を飲んだ。

そして、ファイアが手を振ると水球が一気に重力に従って真下に落下し、ベッドのエリカを直撃し、その瞬間エリカの眠気は一気に吹き飛んだ。

「ひあっ!?!? ファイアさ、ひゃあああっ!?!?」

目が覚めた直後、その顔面にさらに冷水をぶっかけられる。

だが、それだけでは終わらない。

「ふふふ、今さら起きても遅いわよ、エリカ。呪うなら自分の寝起きの悪さを呪いなさい!」

緩めていた炎が一気にエリカにまとわりつく。

「あ、熱いですフィアさん！ 起きましたから！ もう寝過ぎじゃ
せんからあー！！」

「あっはっはっはっ！ 信用できるかあああああー！！」

物凄い笑顔でフィアは炎の中から水をエリカの顔面にさらに命中さ
せる。エリカは何もできずにフィアのなされるがままに炎熱地獄と
冷水地獄を同時に味わっている。

その様子をベランダから見ているジーンとジャックであったが、ガ
ラス越しでも分かる室内の熱気についてベランダの柵まで引いてしま
う。

「な、なあジーン……」

「みなまで言うな」

フィアを怒らせない方が良く、2人の脳内で一致した見解を出し
たジーンとジャックであった。

「この間、2度目はないわよ、って言ったわよね、エリカ？」

「ひ、は、はい！ 言われましたあー！」

「だったらどうなっても覚悟はできてるわよねえー！」

「す、すいませんでしたあああああー！」

エリカの目の前で大きな水球を1つ作るとそれを両手で持ち上げる
ように頭の上に持っていくと、それを勢いよくエリカにぶつけた。
水量でエリカが壁まで押されて壁に叩き付けられる。

「ぎゅっ……」

目を回してしまったのか、ずるずると再びベッドに横たわってしまったエリカに、フィアは額の汗を拭いながら近づくと、その両手首を持って床を引きずりながら隣の部屋に連れ込んだ。

「に、2回目でこれなのか……」

それが、ジーンには一番理解できない点であった。

「まことに申し訳ありませんでした」

時刻はもうすぐ昼に差し掛かるうかという頃合いだ。

炎熱地獄と冷水地獄から何とか生き残り、エリカは今修練場にいる。そして膝を付き、手を地面に付き、頭をその手に付けるくらい下げ、謝っていた。

謝っている相手はジーンだ。

約束事をしたにも関わらず、完全にそれを失念し、昼近くまで熟睡するという醜態をさらしたのだ。エリカ自身穴があるのなら入って隠れたいくらい恥ずかしい思いをした。

「いや、休日だという事を忘れて約束してしまっただけ。時間指定しなかった俺も悪かったし。それに、ここで土下座されると周りの目が痛いんだが……」

「？ どういう意味ですか？」

言われて顔を上げ、辺りを見渡すと、修練場にいたほぼ全ての騎士がこちらを興味深げに眺めている。

ジーンはそれを見渡すとどうしたものかと困った表情をしながら頬をかいている。

「騎士たる者、簡単に土下座するもんじゃないと思うんだが……」

ジーンがそう言うと、何とも理解できない、という表情をエリカは作った。

「非があたしにあるのは明確ですし、謝らなければあたしが納得できません」

「！ 頭を下げることに抵抗はないのか？」

「不思議な事を聞きますね、ジーンさん。非があるのに謝らない方がよっぽど無礼だと思いますが」

至極当たり前な事を言っているつもりなのだが、何故か目の前のジーンはもとより、ジャックやフィアまで感心したような表情を浮かべている。

(あれ、あたし変なこと言ったでしょうか?)

少しおたおたと辺りを見てみると、ジーンがエリカに近づいて耳元で小さく呟いた。

「騎士が謝るつてのは、自分を貶めると思ってる奴が多いんだ。それはここも、他も一緒だ。自分の地位に誇りを持つてるからな。だから、エリカみたいな事を言える奴は珍しいんだ」

「なんと、礼儀を知らないのですか」

「そうじゃない。俺たちは王の名誉を背負っている。だから、俺たちが頭を下げるような事はあつてはならないんだ。それは内外を問わない」

なるほど、とエリカは内心で相槌を打った。

礼儀を知らないわけではなかったようで安堵のため息も一緒についた。

騎士は騎士団の存在だけを背負っているわけではないのだ。背負うのは国であり、王であり、民衆でもある。騎士とは規範にならないければならない存在である。だから、過ちは許されないのだ。仮に過ちを犯しても、決して騎士として謝ってはならないという暗黙の了解まである。

「騎士として謝ってはならない、という事ですね。ではエリカとして謝らせてもらいます。すみませんでした」

「ああ、そういう事なら、俺も素直に受けるよ」

笑顔になったジーンは何の気なしにエリカの頭を撫でた。

「っ!」

「うおっ!?!」

その瞬間、エリカの身体が鉄のように硬直して飛び跳ねんばかりに一瞬痙攣した。

「す、すみません、突然だったので驚いてしまいました……」

「そ、そうか……（ちよつとかわいかったなんて言ったら殺されるだろうか）」

ジーンがそんな事を考えているとは知りもせず、エリカは今された事に理解が追いつかなくて心臓がバクバクと早鐘のように振動している。

（な、なんですか。3日かそこらの相手にあんな笑顔で撫でますか!?! いや、そもそもなぜあたしが撫でられなければ……、違う違う、論点がずれています……、なぜあたしはここまで緊張してるんですか!?!）

全く理解できない。

どうも、撫でられるという行為に慣れていないばかりに過度の反応をしてしまったようだ。顔も少しばかり熱い気がする。

「どうした、顔が赤いぞ?」

「恥ずかしかっただけです! さあ、今日しか練習できる間もないので、さっさと始めましょう!」

照れ隠しに大声を上げた、としか受け取ってはもらえないだろう。事実そうなのだから。

ジーンはそれでも理解はしていないようで、エリカの大声に気圧されたのか少し引きつつも、頷くと背負う剣を両手に構えてエリカと少し距離を取った。

「軽くて良いんだよな？ 自分で言うのもなんだが、それなりに力には自身がある方なんだが」

「本気で構いませんよ？ 明日からの相手だつて本気でしようし」

「なるほど、では怪我をしない程度にやろうか」

「はい、お願いします」

ジーンが大剣の切っ先をエリカの顔の前の高さで構える。エリカも刀を抜くとそれを右手で持ち、だらりと持つ。

「うん？ 構えないのか？」

「構えたところで流派も何もありませんから。それに、こっちの方は戦いやすいです」

「そういうものなのか」

「そういうものなのです」

昨晚と同じやり取りをすると、2人ともつい笑いがこみ上げてきてしまった。それを喉の奥に押し込むと笑みを消して張り詰めた空気を漂わせ合う。

「はあっ！」

最初に動いたのはジーンだ。

大剣を腰の位置に構えて地面を蹴ると、エリカの寸前で大きく横に大剣を振るう。エリカは腰に帯びていた鞘を引き抜くと振られた大剣をそれで受け流すと大剣と鞘が接触して火花を散らす。

「くっ、やっぱり重いですね」

「鞘で弾くとは思ってなかったがなあ!!」

受け流されても、それでジーンの攻撃は終わらない。払われた大剣を翻すと畳み掛けるように連続した剣撃をくり出す。

(反撃する隙が、ないです!)

本気と言ってしまった事を少し後悔してしまった。

ジーンはジャックと違って力づくではない。エリカとしては力づくの方が厄介という認識があったのだが、それは大間違いだという事を今になって理解した。

ジーンの戦い方は流派に沿ったものなのだろう。型どおりでも言おうか、力でなんでも押し通そうとするようなジャックとは一線を画している。ジーンの攻撃はエリカの動きを見て、考えてくり出されている。エリカがカウンターを狙っていることを瞬時に理解したジーンは大きな一撃ではなく、威力はあまり無くても隙の小さい、連続した攻撃を主眼に置いた戦い方をしているのだ。

「くっ、反撃でき、ない!」

「ジャック相手にあそこまでやったエリカに油断はできないからな。悪いがワンサイドゲームにさせてもらう!」

刀と鞘を上手く使ってジーンの攻撃を受け流すが、どうしても反撃の糸口がつかめない。それどころか、徐々に押されてしまう。ジーンの攻撃はエリカに致命傷を与えるような一撃を含んでいない。正直言つとエリカの刀の扱いは素人同然だ。本来ならもっと適切な、カウンターも可能な防御方法もあるのだろうが、あいにくエリカに

その知識はない。あるのは昨日1日で得たバーバラのカウンター技術のみだ。そのカウンター技も、相手がそのカウンター技に繋がる攻撃をしてくれないことには威力を發揮できない。

結局、エリカはジーンの攻撃をただ防ぐだけになってしまう。

「こ、このっ！」

「おっと」

連撃の一瞬の間をについて刀をジーン目掛けて突き出すが、溜めもない攻撃は簡単に大剣で弾かれてしまう。

（連撃に入られたら反撃できない。ここで隙を見せるわけには……
そうだ！）

「振りが甘い……うおっ!？」

刀がジーンの前で弾かれ、ジーンが反撃に転じようとした時、不意に迫る影をジーンは捉えた。即座に振ろうとしていた大剣でそれを弾くが、その時にはすでに弾いたはずの刀が次の攻撃となってジーンに迫っていた。

ジーンはつい驚いてエリカから距離を取った。

「……鞘か」

「案外固いです」

エリカは自分の持つ鞘が随分と強度がある事に目を付けた。ダメージこそ刀に比べれば圧倒的に足りない上に、当たっても精々けん制にしかならない。だが、攻撃の手を休めずに連撃を繰り返せるとい

う点では、大剣よりも分がある。

「二刀流なんて、器用な真似を」

「元が何もないんでなんでもやりますよ、勝つためなら」

「くっ、確かに。エリカは全ての武術で素人だもんな」

「む、笑うことないじゃないですか。さあ、続き行きますよ」

「ああ、来い！」

刀とその鞘を使った二刀流。エリカが連撃をするために即席で考え出した戦い方だ。隙も大きいだろうが、とにかく小さくしようと心掛ける。カウンター技を知ることが、逆にカウンターを受ける場合を知ることが出来る。その隙を作らないように心がければ、自然と無駄のない戦い方が出来るのではないかとエリカは考えた。

「はっ！」

「くっっ！？」

刀での攻撃を防いだジーンに間髪入れずに鞘での第二撃をその脇腹にお見舞いすると、一瞬ジーンの表情が苦悶に歪み、身体が少しだけぶれた。

そこを見逃さず、エリカは一気に刀で畳み掛ける。ジーンの大剣で刀を受けられると、受け流される前に刀の腹と大剣の腹を合わせてそのままジーンの腕へと刀を滑らせる。もちろん、鐔で腕への攻撃は防がれるが、それがエリカの狙いだった。

鞘をジーンの大剣の腹、エリカが刀を鐔に当てている方とは逆の面に当てると、刀と鞘で大剣を挟み込むようにする。

だが、鞘は切っ先近くにある。軽い力でも太く重い大剣を押しこ

が出来る位置だ。鐔に接している刀を下に、鞘を上横になつてい
る大剣をエリカが力で縦にしようとすると、ジーンが驚いたような
表情をして大剣を引き抜き、距離を取ろうとする。

「その一瞬が欲しかったです！」

「な、なにいつ!？」

大剣を引くその一瞬、ジーンからエリカへの攻撃という考えは霧散
する。その一瞬は絶対にジーンはエリカに攻撃できない。その一瞬
を、エリカは狙っていたのだ。

ジーンの腕に引かれて刀と鞘の間から引き抜かれようとした時、エ
リカは素早く刀を大剣の鐔から退けると鞘で思い切り大剣を跳ね除
ける。すると、十分に溜めを作つて腰だめに構えた刀を勢いよく突
き出すと、飛び退こうとして地面を蹴つたばかりのジーンは回避す
ることも、防御することも出来ずに刀の強烈な突きを鎧の胸に受け
て、吹き飛ばされた。

「うおおおおおおっ!???」

「えっ……」

かなり力を込めて突き出した突きは、鎧を貫通こそしなかったが、
衝撃でジーンを5メートルほど吹き飛ばして地面に叩き付けてしま
った。

これに慌てたファイアが地面を転がるジーンに駆け寄ると慌ただしく
回復魔法をかけ始める。

「ちょ、エリカちゃん、加減!」

「す、すみません、やりすぎました!」

エリカもやりすぎたと思って刀を収めると自分が吹き飛ばしたゾーンに駆け寄ってその顔を覗き込む。

「つつつ、腹に穴が開くかと思った……」

「実際、ちよつと骨にヒビいってたわよ?」

「おいおい、嬢ちゃん、貫通もしてない突きでそこまでやるか、普通」

ファイアに治療される様子をただ見ているしかなかったエリカにジャックが呆れたような顔をしながら言うてくる。

「模擬戦を殺すつもりでやる人だけに言われたくありません」

エリカの言葉にジャックが反論の余地を失ったのは言うまでもない。

第18話 彼女に仏の顔を求めてはいけない（後書き）

二刀流とは何ぞや？

刀2本だったなら二刀流？

じゃあ片方鞘でも何とかなるんじゃないかな？ などと楽観的にエリカの戦闘スタイルを決めてしまいました。さすがに大剣とかを相手に刀1本ではキツイでしょうから。かといって今から2本目出すのもなんだったので、戦闘中腰で邪魔になるであろう鞘を使う事にしました。

普通の刀と小太刀で二刀流なんて描写不可能ですから、私には。

エリカ2連勝！ な回になりました。

そろそろエリカの強さが辺りに広まり始めますね。突きで鎧の上から骨にヒビいさせるんですから、エリカの腕力は相当なものですね。さてさてこれからどうなる事やら……。

ご感想などお待ちしております！

第19話 開幕、騎士団内選抜試合！（前書き）

新キャラがいろいろ登場します。

あまり本筋には絡みませんが。

第19話 開幕、騎士団内選抜試合！

「レディイス、エン、ジェントルメエエン！ いよいよ待ちに待った騎士団内選抜試合が始まりますよお！」

「……誰ですか、あれ」

修練場は、コロシアムのようなものに模様替えされていた。特設のステージと観客席が備え付けられその真ん中のステージ上で騎士団の女性が拡声器のような物を手に持ち観客席の民衆に向かって声を張り上げた。

どうも、この騎士団内選抜試合というものは、騎士の実力を内外にアピールする目的もあるらしく、特別に城下町の人々が城の中に入ってくるものが許可されている。普段あまり見られない、こういう言い方はよくないのだろうが、見世物を見るために大勢の人が観客席に詰めかけている。

そしてその女性の声に呼応するように一際大きな歓声コロシアムと化した修練場に響き渡った。

「あいつは騎士団の広報とかを担当しているんだ。ドラゴンスレイヤーはあまり普通の人たちには馴染み深くないからな。少しでも知ってもらおう、とか言っているんだ」

「へえ、騎士の方にもいろいろいるんですね」

その様子を、エリカはジーン、ジャックと共にコロシアムの通路出

口から眺めていた。

朝の時点で、フィアにたたき起こされて完全に目覚める前にこの場所に引つ張り出されたエリカは、何時自分が着替えたのかも記憶がない。すでにエリカは騎士団の戦闘用の服に着替え、刀を腰に差している。

この戦闘用の服は、入団式以来練習の時はいつも来ていたのだが、激しく動いても鞘が腰から落ちず、また露出している場所が少ないので黒鱗の発現をあまり気にすることなく行えるという利点があった。礼装と違つてがっちりとしていて、ある程度の衝撃は黒鱗無しでも耐えられそうなのだ。

『今日から4日間、私たちアクイラ騎士団最強と謳われる4人の騎士は誰になるのかを決める白熱した騎士の戦いを、実況私、テルミ・アーニイが皆さんにお送りしたいと思います！今日はトーナメント第1試合全16試合を執り行います！制限時間は1試合10分！これを過ぎた場合は今回騎士団内選抜試合の審査員を務めてもらっている、ヴァルト団長と、選抜騎士代表の騎士バーバラが判定を下します！皆さん、最後までお楽しみください！』

「煽りすぎだろう、あんの馬鹿……」

ジャックが面白くなさそうにテルミの演説(?)を聞いているが、その手は戦いたくなくてうずうずしているようだ。戦いを信奉しているジャックにとって、戦いを見世物にしてもらいたくはないようだ。だが、自分の戦いっぷりを見せたいという二項対立がジャックの脳内では行われているようだ。

「あの人も、戦うんですか？」

「いや、テルミは非戦闘騎士だ」

「非、戦闘騎士……？」

非戦闘騎士とは、言葉の通り戦場に出ない騎士の事だ。

戦場に出る騎士だけが、騎士団を構成しているわけではない。食堂で毎日山のように食事を作る料理人も、馬の世話をする者も、皆等しく騎士を名乗っている。これは、格差を作らないこともあるが、各々が自らの仕事に誇りを持ってもらいたいというヴァルトの思いがあるそうだ。料理人が騎士を名乗って良いのかどうか、議論が巻き起こっているそうだが、少なくともヴァルトに変える気はないようだ。

テルミ・アーニイという騎士は、ジーンが言っていたように広報を担当している。彼女は騎士団の専属広報担当で、他国の同業者との繋がりも深いという。

その明るい性格から城の内外問わず人気者らしく、現に今も彼女の声に逐一返事を観客をしている。根っからのムードメーカーのようだ。

「騎士団と言っても、戦うだけが仕事じゃないんですね」

「そうだと。戦うだけしか能のない兵隊とは違う。確かに俺には宣伝活動なんぞ無理だが、皆思い思いにより良い騎士団を作ろうとしているんだ。俺たちの相手は同族じゃないから他国との交流も普通の兵隊と違って多いしな」

戦争になりや戦うがな、と豪快に笑うジャックに、エリカは改めて自分の今いる場所の存在意義を再確認させられた。

『ではでは！ さつそくですが、今回出場する騎士を紹介したいと思います！ まずはアクイラ騎士団入隊2年目、今回初めてこの試合に出場する悲願をかなえた、ゲイリー・ショー!!!』

エリカたちがいる通路の反対側、中央のステージを挟んで反対側の通路の出口から人影が現れ、ステージへ向かって歩いてきた。

まだそれほど老けてはいないが、決して若いわけではない男が、背中に長い槍を持っている装飾はそれほど多くないが、ところどころに赤い装飾が施されており、騎士団の服と相まって精悍な雰囲気醸し出している。

ゲイリーと呼ばれたその男は、若干強面の顔の頬を少しだけ緩ませると、観客に向かって片手を振り上げた。するとそれに呼応して歓声が大きくなる。

『続いて、今回の試合のダークホース！ 3日前に入団したにも関わらず、入団試験で騎士団5強の1人、ジャックを破るという大金星をやり遂げた16歳の少女、エリカ!』

「ほづら、行ってこいや」

「どうせ後でステージで会うしな、精々笑顔を振りまけ」
「無理だと、思います……」

ゾーンに背中を押されて出口から外に出ると、その瞬間視界が一気に広がった。観客の声援が一瞬消え、コロシウムが静まり返る。

「え、えと……」

どうしていいのか分からず通路のゾーンに表情で助けを求めると、手を振り上げるような仕草をジャックと2人でしている。どうやら、

そうするよう促しているようだ。

ジーンたちに促されるままに右手を突き上げると、声援が爆発した。

「うあっ!?!」

『おお〜! その可憐な美貌も相まって観客席は興奮の渦にあるようです! ささ、騎士エリカ、ステージへ! 続いては騎士団の中でも実力に定評のある……』

テルミが次々と出場する騎士の名前を読み上げていくと、通路から続々と騎士が現れていく。エリカはそれを見ながらすでにゲイリーが昇っているステージに足をかけて軽やかに飛び移る。ステージは戦闘をするためにあるのではないようで、木製だが場所によっては軋むほど作りが荒い。上に布がかけられているため分らないだろうが、かなりの年代物か、突貫で作ったもののようなのだ。

ステージでどうするべきかキョロキョロしていると、テルミの近くで立っていたゲイリーが手招きしてきた。エリカはそれに小さく頷くとゲイリーの隣に並んだ。どうやら、出場する騎士はテルミを中心に横一列に並ばされるようだ。

「嬢ちゃん、俺を覚えているか?」

不意にゲイリーが小声で言ってきたので顔を見上げると、そこにはどこか既視感のある顔があった。先ほどは分からなかったが、どこかで見た顔だ。

「あ、ジーンさんに怒鳴ってた……」

「覚えていてくれたか、まさかあの時の君が騎士になるとはな。悪いが遠慮なしで行かせてもらおう」

エリカが騎士団の宿舎に始めて来た時、ジーン諸共エリカたちを捕まえ、食堂でジーンを尋問していた男だった。あの時は女性騎士に取り囲まれて周りに気を払う余裕もなかったのだが、こうやって近くで見るとジャックと同じような笑みの持ち主だ。

「俺もこの試合に出るのは初めてだからな。1回戦で負けたくないんだ。ま、ジャックに勝った君が相手じゃちょっと分が悪そうだ」
「お、さっそくお近づきになっているな、ゲイリー」

ゲイリーの隣に立った若い騎士がエリカに笑顔で手を振ってきた。ジーンよりは年齢は上のようなだが、爽やかな顔が年齢以上に若く騎士を見せている。

「俺はダニエル・オジュ。1回戦でジーンと当たるモンだ。よろしくな、ダニーと呼んでくれ」
「は、はあ、よろしくです」

にこやかにダニエルが手を差し出してくるが、それを横からゲイリーに払いのけられる。

「今は俺が話しているんだ！ 順番を守れ！」
「んなもん関係ねえだろう？ ところでエリカ、今度食事でも……ホゲツ?!」
「は、悪いが嬢ちゃんは俺たちの連れだ。手え出すなら他の奴にしな」

ダニエルの脳天に太い拳が直撃してダニエルが頭を押さえながら悶絶する。大衆の前で晒して良い恰好ではないような気がするが、誰も気にしていないようなのであえて何も言わないことにしておく。

「ジャックさん……」

「ジャックく、てめえ覚えてるよ、ジーン負かしてお前と戦ってる！」

呆れた顔をしたジャックがそこにいた。

「ダニー、その女癖だけは直した方が良いぞ？ 俺たちがいない間に女湯覗いた騒ぎの扇動者はお前だろう？」

「なっ！？ 違う！ あれは皆に押し付けられたんだ！ 濡れ衣だ！」

「はあ、俺たちがいなかった間の事だし、団長も留守だったからお咎めもそんなに無かつたろうが、今度やったらミツチリやってやるからな？」

ジャックがそう言うと、ダニエルが震えあがって首をこれでもかというほど縦に振る。

それを見てジャックは納得したようでエリカの隣に並んだ。

「悪いな、根は良い奴らなんだ」

「見れば分かりますよ。ここまでフレンドリーだとむしろ困りますけど……」

「そいつぁ言えてるぜ」

笑いを堪えきれしていないジャックが腹を押さえてくぐもった笑いを漏らす。

「なんだ、さっそく声をかけられたのか」

名前を呼ばれた後、剣を豪快に振り上げながらジーンがやって来る

と、ステージに飛び上がってジャックの隣に並ぶ。

「ジーン、お前だけは負かす！」

「な、なんだよ、ダニー、いきなり」

ジャックにかみつく様に顔を近づけたダニエルは、ジャックに頭を押さえられて列に強制的に戻された。

そうこうしているうちに出場する全32人が全員揃った。圧倒的に男性騎士の割合が多いが、エリカを含めて数人の女性騎士も並んでいる。バーバラ同様、前衛の女性騎士も少なからずいるようだ。エリカのような刀を持っている女性は1人もおらず、大剣ほどの長さがありながら男性が使っているその半分ほどの太さの剣を担いでいる。

ジーンやジャックが使っている大剣は、切れ味もあるがどちらかというと叩き潰す、というのがメインの武器だが、女性騎士のそれは男性騎士のそれよりもはるかに切れ味が良さそうで、丁寧に手入れされて太陽の光を美しく反射させている。

(当たって注意すべきは女性の方かもしれませんね……)

男性騎士は自分であまり魔法を使わない。使っても自分が振るう武器ほどの威力が期待できないからだそうだが、やはり、女性騎士がやった方が効率が良いのだろう。補助にしても、威力にしても、女性の方が強いと定評がある。

逆に、力という点で男性に大きなアドバンテージを取られている女性騎士は形振り構っていたら戦えない。近接戦闘と遠距離での魔法攻撃、武器への魔法付与といったいわば女性だからこそできる戦闘

を繰り広げるだろう。エリカは魔法を使ったこともなければ、使えるのかも分からない。遠距離で一方向的に戦われたらエリカに勝ち目はあまりないように思える。

『さうて！ これで出場する全員がステージに上がりました。この中で代表の座に進めるのは4人！ 果たして誰がその栄冠に輝くのか！ 皆様ごうご期待！』

地鳴りのような歓声が沸き起こる。

円を描く観客席の中心にあるせいか、ステージ上で聞く歓声はまさしく轟音のようになってエリカたちの耳を揺るがす。

『それでは、開催の挨拶をヴァルト団長にお願いいたしたいと思えます。団長、お願いします！』

その声が聞こえると、バーバラと共に観客席の最前列、一番よく見える場所に座っていたヴァルトが立ち上がると声を張り上げた。

「騎士諸君、これは王国の榮譽を背負う騎士を決める戦いだ。油断せず、全力で、自らの持てる全ての技術を以て戦ってくれ！ 余談だが、決勝戦では陛下もご覧になられる。そのつもりでいてくれ！」

付け加えられた台詞に、騎士だけでなく周りの観客からも声が漏れる。だが、すぐにそれは大歓声に変わってコロシウムを呑みこんだ。

「陛下が？ こりゃあ、気を抜けねえな……」

ジャックがニヤリと笑うと首を曲げて骨を鳴らす。

どうでもいいが、ジャックの試合は今日じゃなかった気がするのだが。

『陛下も見られると!? では、決勝戦は御前試合となるのですか！ これは楽しみです！ 皆さん、頑張ってください！ これより、騎士団内選抜試合を開催します!』』

歓声がテルミの声に覆いかぶさって試合の開始を告げた。

「……………陛下が、ねえ。何をしたのかしら？」

ヴァルトが自分の役目を終えて席に着くと、隣で足を組んでいたバ―バラが微笑を湛えながら顔を向けてきた。

「なあに、今回もいつも通り試合を行う旨をご報告に上がったら姫様が興味を持たれてな。陛下と共にご覧になりたいそうだ」

「姫様が？ あのやんちゃっ子に言われたら陛下も逆らえないもの

ねえ」

「それに、姫様にも何やら興味のある騎士がいるそうさ。報告の際に聞かれたよ」

「……エリカ？」

「ご名答」

ヴァルトがしたり顔で人差し指を立てた。

「姫様として、ではなく、星の巫女として興味を持たれたそうさ。そこでバーバラ、最近彼女と良く話すそうだな？」

鋭い目でヴァルトがバーバラの反応を窺う。ここまで言ってヴァルトが言わんとすることに気が付かないほどバーバラも馬鹿ではない。1度大きく息を吐くと腕組みをしてステージ上から1度退場していく騎士の中からエリカを見つけるとそれを目で追う。

「……何が聞きたいの？」

「全てだ。彼女の志願書が全くなのでうち上げであった事はお前も知っているはずだ。まあ、お前はその理由も知っているようだが」

ヴァルトがそう言うと、バーバラが驚いて目を見開いた。そして信じられない、という表情でヴァルトに目を移す。

「やはり、か」

「という事は、あの時地下修練場で感じた視線はあなた自身だったのね。迂闊だったわ」

「それで、話してもらえるか？」

決して、上から口調ではない。長年の友として、仲間として、無理強いはしたくないというヴァルトの思いが言葉の節々に滲み出して

いる。

「……今は、無理よ。知れば皆が不幸になる。ただ、私と彼女が長い付き合いだという事だけは言えるわ」

「……災厄か？」

「いいえ、私はそうは思わない。だけど、私から言えることは何もないわ。言えば彼女との約束を破ることになる」

「……そうか。だが陛下のご命令でもか？」

「……ええ」

それだけ言うと、バーバラは席を立って気分転換してくるわ、と言って観客席を後にした。ヴァルトもそれ以上の事は聞かずにバーバラを目で追うだけに留めた。

「陛下のご命令すら凌ぐか……」

バーバラは多くの事は語らなかった。

だが、分かった事もあった。いや、わざとバーバラが分かる様に喋ったのかもしれない。

バーバラは長い付き合いだと言った。これが人同士であれば小さい頃からの付き合いとも取れるだろう。だが、バーバラは吸血鬼だ。彼女にとっての長い付き合いとは10年程度では短すぎる。ともなれば、エリカの年齢への理解を改める必要性が出てくる。

そして何より、騎士が忠誠を誓った相手である、アーサー王の命令でも口を開かないと言った。これが示すところは……。

「王よりも強い者が絡んでいるのか？ もしくは……」

ヒトではない、ヒトより高位の存在が関わっているか、という事だ。そして、エリカに対して姫が興味を持っているという事も気になる。

アーサー王の娘、ティティ・アールドールンは王家の血なのか、星を視て未来を予言する力を持っている。もちろん、百発百中ではなく、大ざっぱな、予言になることが多い。だが、今回の件はより詳細な予言が出た。これが意味するのは「より身近な出来事」という事だ。国を揺るがす大事も、ティティ自身の身の回りで起こる事であればその予言は幅が広がる。逆に身近な事ならば、例えば身内の危機と言ったものにはかなり敏感に、より細やかに予言できるという。

「やはりエリカが絡んでいるのだな、バーバラ……」

決まった。

この試合で、エリカの様子を注視する必要がある。そして何より、本人に話を聞く必要がある。

城の外から大勢の人の声が混ざった声援が響いてくる。その声は、防音のための結界魔法が付与されている王家の部屋でも聞くことが出来た。

「始まったようだな……」

「お父様、お仕事は良いの？」

部屋の窓からコロシラムの様子を眺めていたティティの背後から声が聞こえ、振り返るとそこにはアールドールの国王アーサーが柔和な笑みを浮かべて立っていた。

「陛下、御用なら私たちが行きましたのに……」

「良い、エルノア。久々に家族として話がしたかったのだな」

かしこまってアーサーに頭を下げたのはティティの母親、エルノアだ。つまり、アーサーの妻、妃にあたる。長く滑らかな金髪は、娘であるティティにもしつかりと受け継がれている。美しい青い目がアーサーに向けられると、エルノアは硬い表情を消して優しい笑みを浮かべた。

「星巫女の予言はエルノアも知っておるだろう？」

「ええ、ティティが予言したあの事ですよね？」

「それに関係する人物が騎士団に入団したと聞いてな」

「ああ、それで突然騎士団の試合をご覧になると言い出したのですか」

頷くとアーサーは窓際にいるティティに近づくとその隣から窓の外

を見下ろした。昨日の夜に突貫で作り上げられたコロシアムの内部を見下ろすことのできるこの部屋からは、ステージ上で騎士の女性が何かを叫んでいる様子が手に取る様に分かる。

「私も楽しみです」

「ティティ、あまりはしゃがないでね？」

「保証できません」

「まったく、もう……」

笑顔でそう言われたエルノアは小さくため息をつくことしかできなかった。

「こらこらティティ、あまりエルノアを困らせるんじゃないぞ？」

「あなたからも言ってくださいよ。一昨日も勝手に抜け出したんですから……」

「好奇心があつて何よりじゃないか」

そう言いながら愛おしそうにティティの頭を撫でるアーサー。その様子にエルノアはさつきよりも大きなため息をつく羽目になった。

(この人の甘さも治らないかしらねえ……)

『では早速、第1回戦第1試合を始めたいと思います!』

「よし、エリカ、頑張ってこいよ!」

「は、はい!」

出場する騎士の控室はコロシアムの通路脇にある。すぐにでも場内に出られるような場所に作られている為、外の歓声も普通に聞こえてくる。呼び出し不要で便利であるのだが、やはりリラックスはあまり出来そうにない。

エリカは立ち上がるとジーン、ジャックと拳をぶつけ合った。このやり取りは先ほどジャックに教えてもらったものだ。気合を入れる意味合いもあるという。

ちなみに、控室には常時2名以上の治療担当の魔法騎士が待機している。試合中に大怪我をした場合などにすぐに対応できるようにするためだ。フィアはこの治療担当も任せられているのだが、あいにく反対側の控室の担当で、こちらにはおっとりとした女性の魔法騎士が待機している。

「槍使いは隙が小さい。瞬発性も高いから気を付けるよ」

「ありがとうございます、ジャックさん」

2人に礼を言うと、エリカは控室を出て1人でコロシアムの場内に向かい、少し薄暗い通路を明るい方へと進んでいった。

第19話 開幕、騎士団内選抜試合！（後書き）

いかん、ヴァルトが想像以上に鋭くなってしまった……

これでは早々に正体がばれてしまう……

ど、どうしてこうなった……？

これがキャラの一人歩きですか、作者の意図しないところでどんどん突き進んでしまっています！ これは今後修正していかなければ……、要は出番削ってヴァルトの調査が進まないようにすればいいんですがね

ではまた、次回お会いしましょう。

感想などお待ちしております！

追伸

私事ですが、活動報告で「なるう」様内の作者の皆様にご助言を求めています。詳しくは読んでもらえれば分かるのですが、よろしければハモニカをお助けください。

また、誤字脱字報告を受け、第18話で修正を行いました。今後とも誤字脱字がありましたら報告して頂けるとありがたいです。

第20話 無駄無駄無駄無駄ああああっ！（前書き）

深い意味はありません。

エリカがそういう訳でもありません。

ではどうぞ。

第20話 無駄無駄無駄無駄あああつ！

コロシアムの場内はすでにステージが撤去されて平坦な修練場がいつもの姿を取り戻していた。周りに観客席が無ければいつもの通りである。

反対側、若干離れた所にゲイリーが槍を構えて立っており、両者の間にテルミが拡声器を持って立っている。

「改めて見ると、やっぱり突貫とは思えません……」

見上げる観客席の大きさに呆気を取られる。高さこそそれほどないが、奥行きがある。優に1000人はいようかという観客を収容してもビクともしないものを一夜で作ったことに驚嘆した。

『さあ、第1回戦第1試合、騎士ゲイリー対騎士エリカ！ 槍使い対刀使いの戦いです！ では両者、武器を構えてください！』

上を見上げると、エリカとゲイリーの絵が垂れ幕に描かれて風になびいている。いつの間にか分らないが、かなりの技量で書かれていることが窺えて、エリカ、ゲイリー共に実際のそれと遜色ない仕上がりになっている。

テルミがコロシアムの端まで後ろ向きに後退しながら開始のために退避する。

ゲイリーは槍を腰ために構え、エリカに矛先を向ける。エリカもまた刀を抜くと、右手に刀、左手に鞘を持ってダラリと構える。案の

定、ゲイリーが不審に思つて眉を吊り上げるが、エリカは真剣な表情で姿勢を少しだけ低くしていつでも走り出せるような体勢を取る。ゲイリーはそれでエリカの構えがそれだという事を理解した。

「初撃で決めるぜ、エリカ」

「そうはいきませんよ、ゲイリーさん」

『では第1試合、始めえ!!!』

刹那、ゲイリーの姿が掻き消えるかのように観客の視界から外れる。瞬発的に足に力を集中させ、驚異的な跳躍力で宙に舞ったゲイリーはエリカの上空に移動していたのだ。だが、観客の鈍^{なま}らな目では追う事の出来なかつたゲイリーの動きも、エリカには気配を察知して把握できていた。目は追いつかなくとも、これだけはつきりとした殺気を放つていれば視線を向けるまでもない。

「喰らえええい!!!」

ゲイリーが重力に任せてエリカの真上から落下してきた。もちろん槍を真正面に構えている。直撃すれば致命傷を貰いかねない攻撃だ。その鋭い切っ先は正確にエリカに照準を合わせている。

「迎撃します」

地面まで到達される前にゲイリーの攻撃を妨害するためにエリカも跳躍して自らゲイリーへと近づく。すでに自由落下を開始しているゲイリーにエリカの攻撃を避ける術はない。そこを突いての攻撃をエリカはくり出すつもりだった。

エリカは鞘でゲイリーの槍を逸らして刀を振るおうとした。

「そうは問屋が卸さねえ！」

「なっ！」

ゲイリーの槍は持ち手の部分に近づくほど大きく広がっている。そして一番太くなっている部分には槍の円錐状の刺突部分を取り囲むように6つの穴が開いていた。エリカがゲイリーの槍を払おうとした瞬間、その穴が火を吹いたのだ。

突如現れた炎にエリカは身を翻して正面から炎を受けるのだけは防ぐが、炎に巻かれて視界が塞がってしまう。態勢を崩されてエリカは地上に何もせずに着地する羽目になり、気づけば目の前に槍を構えたゲイリーが突撃しようとしていた。

「まさか飛んでくるとは思わなかったが……、遅い！」

溜めも少なく、無駄な動きのないゲイリーの刺突がエリカの腹を襲う。エリカはその刺突を刀で払おうとするが、大きく重い槍を完全に逸らしきることはできなかった。脇腹を掠めてエリカの背後に槍が抜け、エリカは槍がゲイリーの元の構えに戻る前に刀でゲイリーに斬りかかるが、ゲイリーは槍を戻すのではなく、脇腹を通り越した槍でエリカを掬い上げるように持ち上げると横に押し投げた。

「刺突するだけが槍じゃないんでな！」

エリカが姿勢を立て直す前に追撃態勢に入ったゲイリーはまだ地面に着地していない状態のエリカに対して槍を突き出した。エリカはそれを足に履いている鉄製の足甲で蹴り弾くが、槍と擦れて足があり得ない方向に曲がりそうになって鈍痛が膝の関節に走った。

（受け流せ！　そして隙を、突く！）

身体を捻って槍の円錐状の刺突部を転がる様に回転すると、その勢いに任せてゲイリー目掛けて横から斬りつける。ゲイリーは素早く手甲でそれを受け流すと飛び退いてエリカと距離を取ると槍を構えなおして姿勢を低くした。

「ジャックに勝っただけはあるな。こりゃあ時間がかかりそうだ」

「いえ、時間はかけません」

「何……？」

槍使い相手に距離を取っては相手に助走の隙を与えることになる。刺突の威力が速度に比例する以上、今のようには10メートルも距離を取られるのは得策ではない。

エリカは一瞬で勝負を決めに行った。

刀と鞘を身体の前で交差させると、両足に渾身の力を込めて地面を蹴る。そして次の瞬間にはゲイリーの目の前にエリカはいた。ゲイリーのそれとは比較にならないほどの速度で接近したエリカに、ゲイリーは反応こそ遅れたが振り払おうと槍を横に振る。刺す事は出来ないが、振り払う事はそれでも十分すぎる威力を持っている。

だが、エリカには槍の軌跡が手に取る様に分かっていた。槍を最低限の動作で受け止めると手甲内で黒鱗を発現させて身体へのダメージを無くして勢いを衰えさせることなくゲイリーの首元に刀と鞘を押し付けると、そのままゲイリーを地面に叩き付ける。刀と鞘は地面に軽く突き刺さり、交差しているために出来た小さな隙間にゲイリーの首を器用に挟みこんでエリカはゲイリーの腹の上に押し掛か

ってその動きを封じる。

「は、速え……」

「槍相手に長期戦したくないので」

槍は1度の動作が小さい。もちろん、大技など仕掛けるのであればその限りではないが、少なくとも隙が少ないのと同時に疲れにくいという長所がある。小さい力でかなりの威力を出すため、長期戦でもなれば不利になるのはエリカの方だ。

だから、早々に勝負をつけにいった。

『お、おお！？ な、なにが起こったのでしょうか！ 濛々とした土煙が晴れば騎士エリカが騎士ゲイリーを押し倒しております！ 騎士エリカ、そういう事は人目のないところでお願いします！』

「なっ！？ どういう意味ですか、それ！！」

何か、壮絶な、根拠のない、今後のエリカの社会的地位を揺るがす、とんでもない誤解をされた気がして、慌ててテルミに声を張り上げるが、その声も観客の声にかき消されてしまう。

『し、しかし、よく見れば騎士ゲイリーの首元が刀と鞘で、あれは拘束されているのでしょうか？ 騎士エリカ、その年でそっちの気も?! 騎士エリカ、恐ろしい子!』

「だから、どういう意味ですか！？ そして絶対にその考えは間違っているのです！ ていうか、そんな事を公衆の面前で平然と言わないでください！ ゲイリーさんもなんとか言ってください！」

テルミ相手に1人では不利だと考えたエリカは、現在進行形で押し倒している、本人に自覚症状はないが、ゲイリーに助けを求めた。

ところが、ゲイリーはどこかご満悦な表情で槍を地面に置いてのんびりと寛いでいる。

「少女が俺の腹の上で……あ、やべっ」

「この人、ぶっ殺してやるです」

刀と鞘を持ち、一気に裁断機よろしくゲイリーの首を刎ねようとエリカがおもむろに動き出すが、それに気が付いて慌ててゲイリーが表情を凍りつかせた。

「ちょ、エリカ、冗談だつて！ や、止める、首に少し当たってるつて！」

「安心してください。苦しんで死ぬがいいのです」

「分かった！ 分かったから！ テルミイイ！ 誤解だ！ 俺たちは戦ってただけなんだ！！ だから余計な誤解を招くような事を言わないでくれ、俺の首が飛んじまう！！」

『へっ？ 違ったのですか！ これは失礼しました！ ということは勝負がついたようですね、騎士ゲイリーも槍を置いていますし……、つて騎士エリカ！ 無防備な相手になに拷問まがいの事をしてるんですか！？』

「洒落にならない冗談言つた罰です！」

『だ、駄目です！ 殺しちゃ駄目です！ そんな事したら失格ですよ……』

慌ててテルミが駆け寄ってきてエリカに刀を収めるよう説得して、ようやくそこでエリカは刀をゲイリーの首元から離してゲイリーを解放した。ホッと一息ついたゲイリーにまたもやイラツと来たエリカは無防備なその横腹に強烈な蹴りをお見舞いしてテルミの所へ向かった。

後に残されたのは悶絶するゲイリーのみであった。

『え、ええと、何やら修羅場があったようですが、第1回戦第1試合勝者は、騎士エリカ!』

大歓声のエリカを祝福するが、一部ゲイリーへの同情が混じっているような気がする。

ゲイリーは控室の救護班によって担架に乗せられて退場していった。よっぽど腹への一撃が効いていたのだろう。

「……………あれ、あれで決まって良かったですか」

随分呆気なく決まってしまった勝敗に肩を竦めるが、エリカの声は今回のダークホースの勝利に沸く歓声に紛れてしまって聞こえることはなかった。

「お疲れさん、嬢ちゃん」
「どうもです」

控室に戻ると、惜しみのない拍手がエリカを迎えた。敵味方以前に、全員が仲間なのだ。仲間の勝利を嬉しく思うのは古今東西同じな様だ。おそらく反対側では恐ろしい事態が巻き起こっているような気がしてならないのだが。

「俺に勝つんだからゲイリーに負ける事もないだろうと思っていたが、嬢ちゃん、案外好き者かい？」

「だから、どういう意味か説明してください！ 何なんですか、まったく……」

ニヤニヤと顔を近づけるジャックの額に刀の柄を押し付けながら笑顔を消してそう言うと、ジャックも冗談を言える空気ではないという事を理解して押し黙った。

「エリカ、最後のは何をしたんだ？」

「え？ 普通にこう、グアツと近づいてゲイリーさんの首に刀を当てただけですけど……」

そう言うと同時に控室の空気が少し緊張したように思えた。

訳が分からず周囲を見渡すと、シーンが代表して口を開いた。

「最後の動きは、俺たちでも追えないほどの速さだったぞ？ ゲイリーも目の前に来て初めて反応した。とてもじゃないがさっきのエリカの動きを追える者はいないんじゃないか？」

「……やつちやいましたか……」

あれでも力は絞った方だ。

にも関わらず、ヒトには速すぎて見えなかったようだ。これでは内外問わず注目されてしまう。それを理解した瞬間、頭を押さええて自分の迂闊さを呪ったエリカであった。

「っと、エリカはこの後どうする？ 今日はまだエリカの試合は無いだろうから宿舎に戻っても大丈夫だぞ」

「そうなんですか？ それじゃジーンさんの試合を見たら戻らせてもらいます。いつですか？」

「ええと、確か第11試合だったかな。午後の試合の3試合目だ。ダニーが相手だから速攻で終わらせてやる」

ジーンの後でジャックが「俺は？ 俺の試合は？」と自分を指差してアピールしているのだが、エリカの記憶ではジャックの試合は今日の最後のはず、どう考えても夕方になる。それすなわち夕飯が遅くなることを意味している。

「試合日程中限定のメニューがあるそうよ」とフィアに言われているエリカはそれを食べるために食堂が開くと同時に食堂へ行こうと考えていた。十中八九期間限定のメニューは注文が殺到されるのが予想されるので、ジャックの試合を見てはありつくことが出来ない。

宿舎の食堂は朝、昼、夜の食事時にしか開かない。清掃や料理の下

準備などをつつがなく行うために食堂へと通じる扉が閉じられてしまっているのだ。大抵、騎士たちは談話スペースで時間を潰すか、自室待機、訓練をして食堂が開く時間を待つのだが、今日は訓練はできない。談話スペースは試合に出ない騎士たちの観戦スペースになっている。どうやっているのかも分からないが、何故か談話スペースにコロシアムの映像がリアルタイムで送られているのだ。

ファイアに聞いたが「企業秘密」と笑顔で言われてしまって詳しい事は聞くことが出来なかったが、大勢が集まっていてゆっくりできない事は出来ないだろう。

「あ、そうだ。ジーンさん、書物が収められている所って城のどこですか？」

「書物？ それなら公文書室だな。城の地下だが誰でも入れるはずだ。行くのなら気をつけるよ。迷子になるぞ、あそこは」

「ほ、本当ですか……？」

「本当だぜ、嬢ちゃん、数年前にあそこで迷子になって1週間見つからなかった馬鹿がいるからな」

「……………」

「……………ジーンさん」

ジャックが無視された仕返しとばかりに「ざまあみる」と小声で言うど得意げに胸を張った。その視線は顔に暗い影を落としているジーンへ注がれている。それを見てエリカも事の次第を理解してしまい、同情の眼差しでジーンを見つめる。

「分かりました。気をつけますから、ジーンさんも試合頑張ってください。観客席から応援してますから」

「そ、そうか！」

エリカが慰めると暗い表情もどこへやら、表情が突然明るくなった。

「……単純だな」

後ろでジャックが何か言っているが、ジーンには聞こえていないようだ。

「おっしやあ、ジャック、地下修練場で特訓だ！」

「っておい、今からか！？ 数時間で出来る事なんてたかが知れて、腕を放せ！」

意気揚々と立ち上がったジーンに腕を掴まれたジャックが悲鳴を残して控室を後にしていった。それを見送るとエリカも公文書室へ行くこうと控室を出ていった。

風のように去っていった3人を茫然と見つめる騎士たちが控室に取り残されることになった。

「……ふっ、ゲイリー相手に速攻を決めるとは」

エリカの試合が終わった時、観客席の最前列でヴァルトは微笑を浮かべながらロシアムのエリカを見つめていた。

「あら、試合終わっちゃったの？」

「遅かったな。試合はエリカの勝ちで終わったぞ」

試合前に行き行ったきり戻ってこなかったバーバラがようやく戻ってきた。少し残念そうにロシアムを見つめている。だが、心の中ではあまり残念に思っていないようで、少しだけ口元が吊り上がっている。

「……勝つことを知っていたみたいだな」

「あら、そんなわけじゃない。少なくとも技術ではゲイリーがはるかに上よ？　ただ、相手が悪かったみたいだけれど」

「どっついう意味だ？」

ヴァルトの問いに、わざとらしく口元を手で隠すバーバラは、ただ笑みを浮かべるだけで何も言わない。

「エリカは技術以前の問題という事か。生まれてこの方戦場にでもいたというのか」

「遠からず近からず、ね。さて、残りの午前の試合はあまり興味ないから団長に全部お願いします」

「おいっ！」

ヴァルトの制止も聞かずにバーバラはたった今歩いてきた通路を戻ってしまった。

「……まったく、それでは公正にならないではないか……」

ヴァルトたちとは別に、コロシアムのエリカを観客とは違い鋭い目で見つめる影があった。

観客席の最上段で、人目につかないような場所で壁に寄りかかり、目深にフードを被った影は、エリカから1度も目を離す事なく、ただ口元を歪ませていた。

「……ようやく、見つけた」

「間違いないか？」

フードの中から太い男の声が響いた。その隣にいるフードの影が静かにそれに聞き返す。

「ああ、特徴が一致している。ドクターに報告を」

「承知した」

2人のフードの影はコロシウムから、誰の目にも止まることなく去っていった。

第20話 無駄無駄無駄無駄あああつ！（後書き）

おやあ？

想像以上に速攻で終わりました。

いや、1話全部を対ゲイリー戦にしても良かったんですが、そこまで食い込んだキャラでもないのほどほどに終わらせて他の描写に切り替えました。

槍で炎出すとか……器用な真似を！

自分で設定しておいて何を言っているんでしょう、私は。

そして何やら怪しげな2人組が……、オンとウ○ツカじゃないですよ？ 黒ずくめじゃないのです。そろそろ動き出しますよお、な
どと思っっているのですが、きっと当分動き出す気がしません……

そんなことはともかくとして、なんだかんだで龍旅も20話に到達しました。いやあ、20話、結構来ましたね。だけどまだ初投稿から20日経っていないという事実。

1日1話書いてりゃそうなりますわな……。

まあ、テストのおかげでペースが落ちてストックが厳しくなっていますが、頑張りますのでよろしく願います。

感想などお待ちしております！

第21話 笑顔が不気味な人にはご用心(前書き)

第21話 笑顔が不気味な人にはご用心

「……ここですか」

エリカは数十分をかけてようやく公文書室と書かれた扉の前にたどり着いた。エリカは公文書室の内部が複雑で迷子になるのかと思っていたが、たどり着くまでの経路も十分迷路になっていた。エリカは城の近衛兵に詳しい道のりを説明してもらっていたにも関わらず、2度ほど同じ場所に戻ってしまった。

それでも、なんとか地下の公文書室にたどり着くことが出来た。古めかしい木製の扉の脇には小さな松明が2つ取り付けられているだけで、どことなく不気味な雰囲気醸し出されている。

エリカが扉の取っ手に手をかけ、扉を開くと予想と反して心地の良い柔らかな風が頬に感じた。薄暗い通路とは裏腹に、公文書室は明るかった。地上と通じているのであろう通気口が幾つも天井にあり、地下修練場同様に空気の新鮮さを保っているようだ。

だが、地下修練場との広さは圧倒的にこちらの方が広いように感じる。無数の本棚は先が霞むほどの奥行きを持っている。

「さ、さすがにこれだけの数を探すのはかなり骨が折れますね……」

「お手伝いしましょうか」

「ぬおっ!？」

不意に背後から声をかけられ飛び上がったエリカは素早く背後に振

り返った。

「ちょ、そんなに驚くことですか……？」

振り向くと公文書室の扉の前に眼鏡をかけた男性が立っていた。驚かれたことに少なからずショックなのだろうか、頬をかきながらエリカに歩み寄ってきた。

「驚かせてしまって申し訳ありません。私はクライム・フェアリー、公文書室の司書をやっています」

「クライムさん、ですか。司書、という事はどこに何の本があるのか分かりますか？」

そう言うとクライムが笑みを浮かべて顔を近づけた。銀髪銀眼の整った顔が迫ってきてついエリカは後ずさりしてしまう。

「それは司書に対して愚問というものですよ、ええと……」

「あ、エリカです。アクイラ騎士団のエリカです」

「騎士エリカですか。そう言えば今日は地上で試合をやっているのか……」

「地上って……、ここに住んでるような口ぶりですね」

「住んでますが……」

さらっととんでもないことを目の前のクライムは言い放った。異常に肌が白いと思ったら日光に当たっていないという事のような。異常なほど、女性の肌以上に白い肌が明かりの光を反射している。

「さて、それはともかくとして、何かお探しの書があるのでしょうか？ 聞かせてもらえれば手伝いますが」

「本当ですか、それじゃあ、呪い関係の本ってありますか」

「ありますよ。ふふ、呪いたい相手でも？」
「そんなんじゃありません！」

龍関係で調べられるかと最初は思った。だがじっくり考えれば龍がヒトになつた事などエリカは聞いたこともないし、おそらくヒトもそうだろう。そんなことに関する文献があるとは思えなかつたのだ。ならば、呪いや、魔法の線から調べてみようと考えたのだ。そつちの方がよっぽど現実的だ。

「ではついて来てください。あまりに大ざっぱなので書物の量も膨大になりますから」

何故か、隣で聞いていると言葉の節々に嫌味が込められているような気がしてならない。初対面の相手にこういう感情を抱くのはあまり良い事ではないのだが、クライムの全く崩れる事を知らない笑みを見ていると、何故かそのような感覚がしてくる。

クライムの後についていくと、奥まった本棚の間に入り込んでその本棚の1段を指差してエリカに顔を向けた。

「ここが魔法、薬品などによる呪いに関するB・C級書物になります」

「B・C級……？」
「ああ、説明してませんでしたね」

書物にはランクが存在する。

重要度の低い順にC・B・A・S級と別れており、C・B級書物は一般書物に分類され、正式な手続きを取れば庶民でもこの公文書室から取り寄せて読むことが出来るものだ。すでにそう言った書物の多くは外部で写本が作られているので城外の人々が原本を読むこと

はあまりない。幅広く誰でも読めるという代わりに、クライムがぶつちやけるにはあまり大切な事は書かれていないという。

A・S級書物は王家に代々伝わる物や、一部の危険な魔法や薬品の作り方などが書かれている。あまり世間に広めてはならないような物がこれに当たり、持ちだすことはおろか、読むことも限られた者しかできない。

「騎士の場合ですと、騎士エリカのような一般騎士であればB級書物までの閲覧が許可されています。陛下や団長の許可があればA級も閲覧可能です。さてと……、どういった呪いをお探しで？」

それを言う前に、エリカは1つだけ騎士団に入ってから気になっていることを質問することにした。前々から気になっていたのだが、当たり前なのか誰も何も気にしていないようなのだ。

「その前に1ついいでしょうか？」

「はい？」

「どうしてこの城の皆さんはわざわざ名前の前に『騎士』とつけるのですか？」

「理由ですか、まあ、騎士としての自覚を他者からも維持させるといふ建前もあるのですが……」

「ですが？」

何故かそこで言葉を切ったクライムにエリカは不審に思って顔を覗き込む。心底深刻そうな顔をしているクライムを見て、重い理由があるのだろうかとエリカは息をのんだ。

「ぶつちやけカッコいいからです」

ズツシャアアアアアアアアアツ！！！！！！

猛烈な勢いでこけたエリカは悪くないだろう。

「おや、大丈夫ですか？」

「わ、わざと深刻な顔をしたんですか……」

「人をからかうのは楽しいですねえ、ふふふ」

物凄い笑顔だ。種類でいくと炎熱地獄と冷水地獄を執行する際のフイアの笑顔に近い。だが、こちらは腹黒な性格が惜しみもなく笑顔に出ている。

「性格悪いって言われませんか？」

「あいにく人づきあいが少ないので」

駄目だ。この人と関わりになったら（変な意味で）大変なことになりそうだ。

エリカはあまりにもこのクライムという男の性格が理解できず、なんとか本題に戻ろうとクライムが指差していた本棚に近づくと背表紙に書かれている書物のタイトルを目で追っていく。

「私は入り口の隣の司書室にいます。帰られる時は言ってくださいね」

「分かりました」

本棚の前には椅子と張り出した机が取り付けられている。本を取ったその場でゆっくりと読めるようになっていた。エリカは本棚の書物を端から数冊引き出すと、それを机に置いて一番上に置かれた本を手にとって開いた。

(何かしらの指針が必要ですね……、呪いなら……)

開いた書物は『呪への対抗』などと題されたものだ。エリカが何かしらの呪いによってヒトの姿にされたのなら、解決策が載っているかもしれない。

「……昔は罪人を獣に変えて肉体労働させていたようですが……」

随分昔、竜人族の集落で聞いた話だ。窃盗や破壊といった比較的軽い罪を犯した人間を一定期間別の生き物に変えて強制労働に服させるといふ。それに使われていた手段もある意味呪いと言えよう。

「ビンゴ」

案の定、ページを捲っていると人型が獣へと変化する図が掲載されたページが現れた。エリカはある程度のヒトの文字は読めるが、専門的すぎると読めない。図などが掲載されているとそこから内容を想像できるのでエリカとしては有り難いことこの上ない。

「……でも、ちょっと違いますね」

少し残念そうな表情をしつつ、そのページから目を離す。

そのページに書かれていたのは「人から人外」という設定で書かれており、「人外から人」という逆方向に使用できるようなものではなかった。そもそも、必要性に欠けるのだろう。

(呪いの中でも特殊……C・B級で読める気がしませんね)

読んでいた本を見ていくうちに、C・B級の書物がどれほど基本的な事しか書いていないかという事がよく分かった。呪いに関しては使用される事を防ぐためなのであるう、基本的な理屈、結果起こる現象などにしか書かれておらず、解除方法こそ載っていてもどうしてそうなるかは載っていない。しかも、その解除方法も特定の場合に限定されてしまうほど応用性に欠ける。原因も分かっていないエリカには使えそうなものは1つもなかった。

(A・S級、バーバラさんに頼みますか……。いや、いつその事あたしが忍び込んで……。場所も知らないじゃないですか……)

自己完結しようとしてそれが不可能であることに気が付いて頂垂れる。

(場所くらははクライムさんも教えてくれるかな?)

「教えませんか?」

「うひゃあっ!?!」

突然後ろから心の声に返事が返ってきて椅子からずり落ちそうになる。

「ク、クライムさん、何時からそこに!? ていうか、心読めるんですか!?!」

「つい先ほどから、そして、あなたの微妙な仕草から考えていることを読んだだけですよ」

「つまり心読んでるってことじゃないですか!」

「人の心って面白いですよねえ」

不気味すぎる。

エリカがこの奇怪な男から離れようとする、クライムが笑みを崩さず目だけを真面目にした。

いや、どうやってなどと聞かれても困るが、要は目だけ笑っていないのだ。

「残念ですが、いくら騎士団の方でも閲覧制限のある本棚の中身をお教えすることはできません。私の司書室隣りに閲覧制限の本棚があるのですが、あそこは許可が無ければ開かないように魔法がかけられております。私の許可と、閲覧資格のある方の許可が無ければなりません。もし、あなたがお読みになりたければ、まあ妥当なのはヴァルト団長ですね、彼に読みたい書物の種類と目的を説明してその旨書面にしていただき、私に提出していただく必要があります。そこまでの情報を求めているのですか？」

クライムに詰め寄られてエリカは返事に困ってしまった。

確かに、クライムが言うところの「そこまでの情報」を求めていると言っている。だが、それを言えるわけがない。つまり、現状エリカには閲覧制限のある書物を手取る事は不可能であるという事だ。

「まあ、特例はありますけど」

「な、なんですか？」

「私に至極個人的に誕生日プレゼントなどくだされば、少しばかりお礼でもしますが」

「……悪党ですね」

「よく言われます。ですが、私の興味を引くような物でなければ欲しくありませんし、条件はシビアなんですよ？ まあ、物に固執する気はありませんが」

そこでクライムがエリカの足元から頭の先までじっくり品定めするかのようには観察し始めた。気恥ずかしさを感じて思いっきり後ずさりしてしまい、後ろの椅子を倒してしまう。

「変な誤解をされてませんよね？ こう言ってはそれもまた誤解を招きそうですね、あなたのような幼子に興味はありませんので。そうですね……、今度食事でもどうですか？」

何故か、ついさっき同じような事を誰かに聞かれたような気がする。「食事」という響きに悪いものしか感じなかったエリカは持っていた本をクライムに叩き付けようかと思っただが、済んでの所で自分の衝動を押さえ込む。

「それで、読ませてもらえるんですか？」

「それはお約束いたしますよ？ 最近アクイラ騎士団の食堂で美味しい紅茶が淹れられるようになったと聞きましたし。あなたの奢りで一緒にいただだけでも結構です」

「……………」

悪くはない条件だ。物で求められるよりは紅茶を一杯奢るだけで済むのだから破格の条件だと考えても良いだろう。身の危険を感じればジーンなりジャックなりを呼び出せば済むことだ。

「分かりました。今度奢ります」

「ふふ、確かにお約束しましたよ。ですが、申し訳ありませんが今日はやるべき仕事を立て込んでいますね。後日、騎士団の試合が終わった頃合いでご連絡させていただきます。今は試合に集中してください。あなたが私というよりもこの国のためになるんじゃないですか？」

クライムが手帳を取り出すと、今日の日付が入った欄をエリカに見せてくれた。今は昼前頃なのだろうが、午後にかけて予定と思われる文字がびっしりと書かれている。よく見ると分刻みの所すらある。

「司書というのは忙しいのですか」

「今日が特別、なだけです。外からの来客がありましたので」

手帳を閉じると、クライムは笑みを崩さずにエリカを見据えた。

「どうします？ 閲覧禁止ひんじにご用なら今日はもうやめておきますか？」

「……そうですね、ここでは知りたい事は知ることが出来そうになるので。すみません、今日は早々に引き上げることになります」

「分かりました。あ、本はそのままです。私が片付けておきますので」

そう言うとクライムはエリカの横をすり抜けてエリカが引き出した本を元の位置に戻し始めた。

「それでは、試合頑張ってくださいね。地下から応援しております」

「変な言い方しないでください。不気味です」

「ふふ、よく言われます」

この空間から少しでも速く逃げようと決心したエリカは足早に出口に向かった。入った時には気が付かなかったが、確かに入り口の扉の横にもう1つ扉がある。どうやらそこが司書室のようだ。そしてそのさらに隣には、鉄格子で立ち入れないようにされた扉がもう1つあるのが目に入った。あれが閲覧制限された書物のある本棚がある場所だろう。

それを歩きながら確認すると、エリカは扉から外に出て地上へと戻ることにした。

「まだ昼ですか。さすがに今言っても売り切れているだろうなあ……」

夕食で期間限定を狙っていたのには昼前の注文の攻防に試合のため参加できないからだ。早々にやるのがなくなってしまったエリカは、どうするか考えつつ自室へ戻ることにした。

エリカが公文書室を後にしてしばらくして、部屋の扉が静かに開かれた。エリカの引っ張り出していた本を片付け終わって司書室に戻っていたクライムがのそのそと出てきて、入ってきた人物を見て少し驚いたような顔をした。

「今日はお客が多いですね」

「多いつて……。忙しいの？」

「全く」

「はあ、相変わらずね……」

入ってきたのはバーバラだった。クライムの様子に呆れてため息をつきながら、バーバラは胸元から一枚の書類を取り出してクライムに手渡した。

「おや、珍しいですね。……っ！」

「そこに書いてある本を借りに来たわ」

「珍しくいらつしゃったと思ったら、これはまた……」

「まあ、読書にする本じゃない事は自分でも自覚しているわ」

バーバラから手渡された本のリストに目を通したクライムは、エリカの時のような目だけ笑っていない表情を作ってバーバラに目を向けた。だが、先ほどとは違って冗談を言う気配はない。

「……星の巫女様が何か予言でも？」

「あなたが知るところじゃないわ。それよりも、あるの？」

クライムが好奇心からかバーバラの顔を覗き込むと、その額に手を当ててバーバラはクライムを押し返した。それ以上はクライムも食い入らず、素直に頭の中で本の居場所を思い出そうとしている。

「もちろん、ありますよ。こんな本借りる人の方が少ないですから。はてはて、どこにあったか……」

本の場所を思い出しつつクライムは司書室に戻ると1本の鍵を持って戻ってきた。そして鉄格子の扉に向かうと、鍵穴に鍵を指して右に回した。

鉄格子の扉が金属特有の不協和音を響かせながら開くと、随分と開けていなかったのだから端の方にクモの巣が出来た古めかしい扉が姿を現した。

「おや、クモの巣が……」

そのクモの巣に気が付いたクライムは、おもむろにクモの巣に指を向けて振る。するとクモの巣の主が宙に浮かんでクライムの顔の前に浮かんだ。そして手に浮かんでいるクモを乗せると……。

「来世ではここに来てはいけませんよ？」

握りつぶした。

だが、クライムが握りつぶしたその手を広げると、潰れているはずのクモの姿はなく、普段のように以上なほどに白い手の平があるだけだった。その様子を見ていたバーバラは先ほどくらい、とは言わないが大きなため息をついた。

クライムはクモを握りつぶしたはずのその手で近くにあった掃除用のモップを持つと柄の方でクモの巣を巻き取り始める。

「盛大な魔法の無駄使いだな」

「他に使い道がないんですよ。ここでは本の整理と読書と掃除が日課ですから」

「お前の能力なら他の場所でも大活躍できるだろうけれど」

「冗談じゃありませんよ。私は政治が大嫌いなのはご存じでしょうか？」

この話題をさつさと終わらせたい、という空気を口から惜しみなくクライムが吐き出し始める。笑顔と相まってそれ以上の追及は困難になってしまふ。バーバラもこれ以上突っ込むのも時間の無駄だと判断して小さくため息をつくとき口を閉じた。

「ええと、確かこの辺りに……」

扉を開くとクライムは中へ滑る様に入っけいき、中で本を乗せたりどけたりする音が響き渡る。

閲覧制限のある書物はあまり整理されていないのだろう。読む人が多い本、C・B級文書などはそれなりに探しやすいように整理されているのだが、読める人間が少なく、外に出る機会が少ない文書はきちんと整理整頓されていないのだ。

「おや、おかしいですね、ここにあったような……ああ、あったあった」

どうやらお目当ての本を見つけたクライムが数冊の本を抱えて部屋から出てくると、司書室前の棚に置いて1冊ずつ題名を確認し始める。

「これで良いですか？」

「ええ、ヴァルトに頼み込んだかいたわ」

「おや、あなた個人の調べものでしたか」

「……詮索屋は嫌われるわよ？」

「趣味ですから」

「……こんの銀ギツネ」

「騎士バーバラ、それは私にとって褒め言葉ですよ？」

満面の笑みを浮かべるクライムにこれ以上何を言っても無駄だと判断したバーバラは持つてきてもらった本を抱え込むとそそくさと公文書室を後にしようとする。そこでクライムが声をかけた。

「そういえば、先ほど来たお嬢さんも似たような話題を調べようとしていらっしやいましたね」

その言葉にピクリとバーバラが足を止める。

「……あまり見せびらかさないでくださいね？　うち1冊はS級書物、正直騎士団長レベルで閲覧できるものじゃないんですから」

「……なら、どうして出してくれたのかしら？」

「昔のよしみで」

「……借りにしておくわ」

そう言うとバーバラは部屋を後にした。

「……もちろん、貸しにしておきます」

クライムはそう呟くと司書室へと戻っていった。

第21話 笑顔が不気味な人にはご用心（後書き）

新キャラが最近どんどん出てきているような気がします、どうもハモニカです。

今回は司書、という事で新キャラが出てきました。まあ、性格はこの上なく悪い方です。よくいる奴ですよ、いっつも笑ってるのに腹黒いキャラです。

そう言う人に限って滅茶苦茶強いという事があるのですが、この人も予定ではそこから漏れないキャラになる予定です。

では、また次回も読んで下さるとありがたいです。

ご感想などお待ちしております。

第22話 男は応援されるとやる気がネズミ算（前書き）

何度も言つたようですが、特に意味はありません。

その場のノリでタイトルはつけています。

第22話 男は応援されるとやる気がネズミ算

「おや、そろそろですね……」

フィアと共に使っている部屋で、ベッドに寝転がりながら時間を潰していたエリカは、壁掛けの時計がジーンの試合が始まる頃合いを指したのを見ておもむろに身体を起こすとエリカは1回大きな伸びびをする。するとベッドから降りた。

宿舍のすぐ目の前にある特設コロシウムからは大きな歓声とテルミの半ば悲鳴になりつつある声が聞こえてくるので大体どの程度試合が進んでいるかは、寝ていない限り把握することが出来た。

エリカは立ち上がると壁に立てかけていた刀を手に持つと部屋を後にしてコロシウムへ向かう事にする。

「おお、ここにいたか」

「ジャックさん」

部屋を出て外へ出ようとすると、ジャックと鉢合わせした。どうやらジャックはエリカを探していたようだ。エリカを見つけると隣に並んで元来た道に戻り始めた。

「ジーンの試合がもうすぐだから探してたんだ」

「そうでしたか、勝つと良いですね」

「勝っても俺が負かすかな」

ジーンとジャックは午後のトーナメントだ。トーナメントはAブロックとBブロックに分かれており、エリカが戦った第1試合から第8試合までがAブロック、第9試合からジャックの戦う第16試合までがBブロックになる。ジーンは第11試合なので、Bブロックを勝ち上げれば準決勝でジャックと当たる事になる。そしてジーンにしるジャックにしる、エリカと戦うには決勝まで勝ち進む必要があるのだ。

「今度こそ嬢ちゃんに勝ちたいからな」

「……わざと負けた方が良さそうですね」

そう言うとジャックが「駄目だ！ 負けたら俺が戦えない！」と半ば涙目で迫ってくるのだからさらに性質たぶが悪い。

「と、とにかく、観客席へ行きましょうよ」

手を握られそうになってジャックの手を振り払うと、コロシアムへ足早に向かった。

出てきた時とは違って、控室に向かうわけではないのでコロシアムの外部に取り付けられた階段を上って観客席に向かう。途中ですれ違ったびにエリカは1回戦通過をお祝いされるのだが、目立ちたくなかったエリカは少し複雑な心境になってしまった。

「今は第10試合だな。もうすぐ終わる頃合いだが……」

観客席へ出ると、四方八方から大歓声がエリカとジャックの鼓膜を襲った。見れば激しい戦闘がコロシアムで行われており、土煙が舞い上がっている。

『は、激しいラッシュです！ 大剣対大剣、壮絶なバトルが繰り広げられています！』

テルミの声もより切れが増し、音量も大きくなっているような気がする。午後になってさらに白熱した実況を行っている。

コロシアムの様子に見入っていると後ろからジャックに肩を叩かれ、振り返るとある1カ所を指差した。その先に視線を向けると、観客席の最前列に周囲の観客席からは柵で仕切られた場所がある事に気が付いた。そしてそこには見たことのある男が腕を組んで座っていた。

「団長お！」

ジャックが歓声に負けないくらいの大声を出して呼びかける。だが、おかげで隣にいたエリカの耳は大ダメージを受けてしまった。

「……………ジャックと、っ！ エリカか」

ヴァルトがジャックの声に気が付いて振り返り、エリカたちを視認すると少し驚いたような表情をした。だがすぐにその表情を引っ込めて柵の一部を開けてくれた。ジャックが一礼して入っていったのを見てエリカもヴァルトに一礼すると、審査員席に収まった。椅子は2つしかなかったが、どこからともなくジャックがもう1つ持ってきて自分も座った。

「どんな具合ですか」

「皆頑張っているな。おかげで私は仕事がないのだが」

「はは、決着が着くのも考え物ですか」

ヴァルトが小さなため息をつくとき、ジャックが声を上げて笑った。

「エリカ、1回戦突破、おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

審査員席には右から順にエリカ、ジャック、ヴァルトと並んで座っている。ヴァルトはジャック越しにエリカを見ると、柔らかな笑みを浮かべてそう言った。

「最後の1撃は見事だったな。私でも何が起こったのか理解するのにしばらくかかった」

「さすが団長、見えてたんですか」

「そ、そんなに速かったんですか……」

ヴァルトがそう言うのだから、相当速かったのだろう。

「うむ、久々に目を凝らすという動作をした」

少し目を細めてエリカを見ると、エリカは何か探られているような気がして身を少しばかり引いてしまった。ジャックの図体の陰に隠れるように椅子にもたれかかり、試合を何気なく見つめるふりをする。

『決まったああ！ 勝者は騎士ロイン！ 同期対決は彼に軍配が上がりました！！』

テルミの声が響き渡り、一際大きな歓声上がる。見れば男性騎士、ロインと呼ばれた騎士が地面に倒れ伏した対戦相手の騎士に大剣の切っ先を突きつけている。

「決まったか、次はいよいよジーンだな」

ジャックが少し身を乗り出してコロシアムの様子を食い入るように見つめる。

勝敗が決すると勝者が敗者の手を取り立ち上がらせる。それを見た観客から惜しめない拍手が送られ、2人が一緒にコロシアムの出口へと消えていった。

『さあ次も大剣同士の戦いとなります！ 対戦するのはこちらの2人！』

エリカの時と同様に、コロシアムの高い場所から吊り下げられている幕がジーンとダニエル之物に切り替わり、絵の下に2人の名前が書かれているのがエリカの目でも確認できるようになった。

『騎士ジーン・ホーリネス対騎士ダニエル・オジェ！』

「ホーリ、ネス……？」

どこかで聞いたような名前が出てきてエリカの脳裏で何かが引っかかった。だが、一体なんだったのか思い出せない。

（おかしいですね、ヒトの名前などほとんど覚えていないはずなのに……）

せいぜい、バーバラの以前の名前や、竜人族の人々程度だ。にも関わらず、何故かジーンの名前にどこかで聞いたような気がしてならない。エリカは決して記憶力が良い方ではないが、それは龍の基準からであって、300年前の事でも覚えているエリカはヒトと比較

すれば非常に記憶力が良い方に分類される。

それでも思い出せないとなると、よっぽど印象に残っていないのだろうか。

エリカが考え事をしている間にもテルミの実況は続く。そして両サイドの出口から2人の騎士が姿を現し、ゆっくりとコロシウム中心へ向かっていく。

「お、来たな。ジーン！ 全力出せよ！ せっかく練習付き合っ
てやったんだしな！！！」

ジャックが大声を出すと、今度はエリカだけでなくヴァルトも驚いてジャックとは逆方向に身体を逸らした。

声に気が付いたのかジーンがエリカたちがいる場所に顔を向けたのが見え、エリカも応援しようと言口を開いた。

「ジーンさん！ 頑張ってくださいー！」

ジャックほどではないし、観客の歓声に飲みこまれたかもしれないが、エリカは出し得る最大音量でジーンに声援を送った。ジーンがそれに応えて大剣を振りかざしたのを見てエリカも安心して少し頬を緩ませた。

コロシアムに姿を現した時、一瞬観客席をグルリと見渡してエリカの姿を探したことは否定しない。応援してくれること自体は願ってもない事だし、フィアがいないのでジャックだけというのもどこかむさ苦しすぎた。

だから、ジャックの周辺の人々の鼓膜の事を考えない大声の後に、わずかだが聞こえたエリカの声を認識した時は無性に嬉しかった。負ける気がしない、とはこの事を言うのだろうか？

不思議と、ジャックとの特訓の時以上に身体が動くような気がしてならない。目の前で何か叫んでいるダニエルの姿が妙に微笑ましく思えるほどだった。

「……………い！ 聞いてんのか、ジーン！」

「うん？ ああすまん、聞いてなかった」

ダニエルがずっとこけそうになるが、さすがに民衆の前で醜態を晒す気は無いようで上半身のみガクツとなる。

「随分と余裕じゃないか……………」

「そういう訳じゃないんだがな。まあ、負ける気がしないのも確か

だが」

「なにおう！？」

うつすらと笑みを浮かべてダニエルに言い放つと、案の定突っかかってきた。人間怒ると短絡的行動に出やすい上に、行動が読みやすくなる。戦いは開始の合図の前から始まっているのだ。

「俺はお前を倒してジャックに一言物申さなけりゃならないんでない！　こんなところで負けられないんだよ！」

「……そう言う奴に限って一番最初に負ける気がするの俺だけか？」

遠目には分からないだろうが、今の一言でダニエルの顔は目に見えて真っ赤になった。すでに大剣を持つ手が少し怒りに震えている。これでは戦術など頭から吹き飛んでいることだろう。

ジーンもまた、大剣を構えるとダニエルに向き合う。

『両者、準備は良いですか？　それでは第11試合、開始！』

「うおらあああっ！」

テルミの掛け声とほぼ同時に、ダニエルは飛び出してジーンに向かって遠慮なしに大剣を振った。上から振り下ろされた大剣はジーンの大剣に受け流されるが、ダニエルは受け流された大剣を自分を中心に一回転させて続けざまに攻撃を繰り返してきた。

だが、憤然極まりないダニエルに対して、ジーンは至って冷静だ。現在のダニエルの状況を慎重に観察して、ダニエルの攻撃を防ぎながら攻撃の隙を見極める。

「もうひとおっ、っ!?!」

追い撃ちを仕掛けようとしたダニエルは自分が思っているよりも同じ動作、同じ攻撃を仕掛けていることに気が付いていなかった。同じことをやっていれば相手に次の手を読まれやすいし、何度も見れば初見の相手でもパターンを理解してカウンターを決められてしまう。今のダニエルはまさにその状況下にあった。

「はあっ!」

「ぬおっっ!?!」

受け流すのではなく、ダニエルの大剣を最小限の動作で回避すると、ジーンは大剣を突き出してダニエルの腹を打つ。ジーンに突っ込もうとしていた勢いをジーンの大剣で殺されると、慣性の法則でダニエルの身体がくの時に曲がる。ジーンは大剣を握る腕に力を入れてダニエルを押し返す。

「どわっ!」

押し返されてダニエルが地面に叩き落とされる。だが、その程度でノックアウトされるほど軟弱な騎士はアクイラ騎士団には存在しない。ダニエルは器用に大剣を使って素早く起き上がると少し腹を気にするそぶりをするも大剣を構えてジーンと一定の距離を維持しつつ立ち回る。

「……すまん、熱くなっていた」

「なつたままの方が御しやすかったけどな」

「はは、違いねえ」

どうやら、今の一撃でダニエルの頭に上った血は降りてしまったようだ。先ほどまでの怒気が嘘のように消え失せると、落ち着いた表情のダニエルが姿を現した。

「さて、ここからが本番だぜ」

「今度は俺から行かせてもらおう」

あまり気を取り直されるのもジーンにとっては不利益極まりないので、早々に会話を切り上げてジーンはダニエルに斬りかかった。

斜め上から斬り下ろすと、ダニエルは反対から大剣を振るってジーンの攻撃を弾く。刃同士が当たる度に一瞬火花が散っていく。素早い攻防を繰り返して、一進一退の様相を呈し始めると、ジーン、ダニエル双方が内心で焦燥の念を抱き始める。

5分が過ぎれば勝敗が決していなくても試合は終わってしまう。そして審査をするヴァルトとバーバラの判断によって勝者が決められるのだが、ジーンが確認する限り、本来バーバラがいるべき席にエリカとジャックがいるように思える。あの2人にその権利は無いので、実質ヴァルトの判断となる。自分たち以外の判断で勝敗が決められるのはあまり本人たちとしては納得の行くものではないことが多い。出来れば勝負をつけたいのは2人とも同じだった。

だが、双方大剣使いで、ただでさえ戦闘スタイルが似ているのに、ダニエルは冷静を取り戻してジーンはカウンターを狙いづらくなつた。お互い斬り込むが最後の一步が2人とも踏み出せない。

（剣の技術は互角、ならこれでどうだ！）

ジーンはダニエルの大剣を真正面から受け止めると、受け流すとほ

ほぼ同時に地面を蹴る。受け流す時に大剣がダニエルの力で地面に突き刺さり、ジーンの身体が一瞬間に浮く。そして大剣が地面に立ち、ジーンが地面に対して横になって宙に浮くと、ジーンは勢いのついた強烈な蹴りをダニエルの腹に立て続けに2発お見舞いする。

そしてそれにダニエルが怯んだ瞬間にはジーンは地面に足をつき、大剣を地面から引っこ抜くと低く構えてダニエルの足甲のついた足を払ってバランスを崩し、地面に倒す。

「ぐあつ!?!」

背中から地面に叩き付けられたダニエルが起き上がる前に、ジーンはその首筋に大剣を突きつける。それをダニエルが認識すると、起き上がる力を抜いたのか地面に大の字に寝転んだ。

「あゝあ、また負けちゃった」

「すまん、ジャックには俺から言っておこう」

「そうか？ それじゃよろしく頼むぜ」

『決まったあああ!! 騎士ジーン、大剣の腕だけでなく、腕っ節の強さも見せつけ騎士ダニエルを打ち負かしました!! 勝者は騎士ジーンです!』

「ふふ、ジーンも順調に勝ったようね」

バーバラは自室で机に向き合っていると、窓の外からテルミの声と大歓声が響いてきて、ジーンの勝利を知る事になった。

机の上には先ほど公文書室から借りてきた本が広げられており、手元の紙にその情報を写し取っている。本来ならば写本も禁止なのだが、バーバラはエリカのために動いている。原本を見せられないのではこのようにするしかない。正直、本に書かれている内容をエリカが読めるとは思えない。こちらで分かりやすく要約したものを使って説明する方が効率的だと判断したのだ。

<試合を見ていなくても良いのか？>

机の隣で座っているアレックスが耳をピクピクさせながら外の音に意識を向けている。

「良いのよ。ヴァルトがいるし、正直昼間はあまり外にいたくないし」

<屋根があれば行ったか？>

「うん……、行かないわ」

<……はあ>

アレックスが呆れたようなため息をつくとき、バーバラは本の内容を

書き写す手を止めて顔をアレックスに向けた。

「アレックス、試合とエリカ、私がどっちを重要視しているか分かってるわよね？」

「そりゃあ、そうだろうが。成すべき仕事をするのも役目ではないか？」

「はいはい、明日からはなるべくそうさせてもらおう」

あまりあてになりそうにない返事をする、再びバーバラは本に目を落とした。

「まったく、ただでさえ難解な上に、何も指標が無い状態でエリカの姿を元に戻す方法を探しているんだから、アレックスも手伝いなさいよ」

「ページを捲れん。口を使う訳にもいかんだろうが」

「使えないわねえ」

そう言いつつ次のページに進んでいく。

本は随分と年季の入った物だ。ページを捲る度につつすらと埃が舞うのが分かる。時折アレックスがくしゃみをしているので、そこは気にしつつ静かにページを捲っていく。

今読んでいるのは、魔法技術に関して書かれている本だ。エリカが公文書室で読んでいた本の上位文書に当たるものだ。より高度な、より危険度のある魔法の使い方、効果などがこと細やかに書かれている。

「……………あら？」

ふと、とあるページでバーバラの手が止まった。

そのページには人間を魔法でさらに高位の存在にするという、魔法実験について書かれていた。別段、バーバラが探し求めている内容ではないのだが、そこで止まったのは、何故か埃が出なかつたからだ。優しくそのページを手でなぞってみるが、やはり埃が指につかない。

<どうかしたのか？>

「クライムは、この本を読む人間など少ないと言っていた……」

アレックスの問いには答えず、頭の中で考えを巡らせる。

(なら、埃を被っているはず……)

バーバラは気になって本来なら読み飛ばすつもりだったそのページを最初から最後まで細かく読むことにした。

「人間をより高位の存在にする……、馬鹿な事を考える人もいるのねえ」

この世界の存在で、最も高位な存在は言うまでもなく龍だ。龍がこの世界で最も力があり、全ての生き物から畏怖される存在である。ヒトは龍からしてみれば矮小な存在だ。よりその存在に近づこうとする種類の人間がいてもおかしくはない。

だが、それは自然の摂理に逆らう事だ。さらに言えば、人の命を弄ぶ結果になる。ここにも、A・S文書が設定される原因がある。あまりにも残酷な魔法実験でも、今後そのような事を繰り返さないためにも全て記録されている。この実験では、何も知らない多くの人

々が実験体にされ、命を落としたことも書かれている。

「龍の強靱な肉体を得て、国を支配する……、考えることが下劣ね」
バーバラは龍の強さをその身を以て知っている。確かに、あの力があれば国を支配することも容易いだろう。それが完全な強権支配、自由なき恐怖支配であったとしてもだ。

だが、実験は失敗した。ヒトを他の生物に変える事は、そこまで難しい事ではない。問題なのは変化する先が最上位である龍であることだ。ヒトはあまりにも龍をいうものを知らない。知識もまともでない相手に変わろうとすれば、概念を構築できず、似たような、中途半端な結果に終わり、実験体の死で失敗したようだ。犬や猫のように普段から近くにいたる生き物になる事は出来る。

だが、それでも大きな危険を伴う。他の生き物に人が成り変わるといふのは意識は人間、身体は獣になるということだ。肉体が精神に拒絶反応を起こすことも少なくない。だから、長年の経験から最も拒絶反応の実例が少ない、そういう生き物に変わるように今はなっている。

といっても、この魔法はその規模に関わらず複雑な原理に基づいている。犯罪者を強制労働に強いる場合も、専用の施設で長年使っている魔法陣を展開することで使用されている。一般人がやろうとして出来るものではない。

だからこそ、国の直轄でそういう実験も行われてしまったのだが。

「この原理を使えば、龍をヒトに出来なくもない、かしら……」

どうも、きな臭い感じがしてきた。

だが、まだこれは机上の空論だ。この本ではそれに関する魔法陣の構成方法や、必要な薬品までは書かれていない。行きが出来るからと言って帰りも出来るわけではない、魔法とはそういうものだ。

「とはいえ、エリカに報告できることが1つで来たわね」

バーバラはアレックスに言うでもなく呟くと、椅子の背もたれに身体を任せて大きく背伸びをした。

第22話 男は応援されるとやる気がネズミ算（後書き）

どうもどうも、作者のハモニカです。おはようございます。こんにちは。こんばんは。

初投稿以来頑張ってるべく1日1話投稿を心がけていたのですが、テスト期間になり小説を書く時間が削られてきてしまいました。休載はしたくないので、ちょこちょこ更新し続けますのでどうぞよろしくお願いいたします。

こんな小説でも待つていてくれる人がいると信じて書き続けます。

テストですか？

とりあえず教科書ノート持ち込み可の講義はノーベンですが？

問いが分かってるのは前もって回答作りです。O型の癖に真面目だと思いますか？ 私はこれでもO型ですが？ 蚊に刺されて苦しむしがないO型です。

そんなわけで、土日も出来れば更新したいなあと願望を持っていますが、月曜からグアツと来ますのできついかもしれません。夏休み入ればやりたい放題書きたいと思ってるんですけどね。

高校生は良いですよねえ、もう夏休み始まってるのでしょうか？ 大学隣の持ちあがりの中高から人の気配が部活だけになって随分と羨望している作者でありました。

ではでは、今日はこの辺で。

ご感想などお待ちしております!!

第23話 まいっつとは言いません……（前書き）

まあ、そういうのが最初の方です。

第23話 まいづくとはいづまい……

「いただきます」

「そろそろジャックの試合だな」

「丁度シフト交代で合流できて良かったわ」

上から順に、エリカ、ジーン、ファイアだ。

夕方、夕飯のために食堂が開放されると同時にエリカは食堂に駆け込み、選抜試合期間限定と言われる「日替わりセット」なるものを注文した。内容は出てきてからのお楽しみらしく、注文を受けた食堂の人もエリカが内容を聞いても教えてはくれなかった。

そして、料理が出来あがって取りに行くと、エリカはそのポリウムに驚いてしまった。

「しっかし、エリカ、食べられるか？」

「もちろんです」

エリカの前には、フルコース並みの皿が並べられている。試合に出た騎士の空腹を満たすために、これでもかというほどのポリュームなのだ。肉を中心とするそのメニューにエリカは生唾を呑みつつフォークとナイフを持って皿に向き合った。

「では……」

「が、頑張れ」

ファイアが拳を作って何故か応援している。傍目から見れば華奢な身体のエリカが3人前はあるつかというこの全てを食べられるかはいささか以上に疑問を抱くだろう。だが、あいにくエリカはただの華奢な少女ではない。

龍だった頃の名残なのかは定かではないが、エリカは1度にかかなりの量を食べる。要は大食いなのだ。そのおかげで、エリカは食堂でもあつという間にその名が知れ渡った。よく食べる上に、かなり味にこだわるエリカの意見には、不思議と食堂の料理人たちも少なからず耳を傾けるようになっていた。入団して1週間経っていないエリカにこれほど耳を傾ける者は、ジーンたちを除けば料理人たちぐらいた。それも、かなり真剣に聞いているのだから驚きだ。

「はむ……うっ！？」

「エリカっ！？」

肉をナイフで切ることなく、口の中に頬張ると、エリカがうめき声を上げる。それを心配してジーンとファイアがエリカの顔を覗き込んでくる。エリカの肩が震えているのを見て、喉に詰まらせたのではないかと心配しているのだ。

「う……」

「うっ？」

「美〜味〜し〜！〜！」

スパアアアアアアンツ！

物凄く良い音が食堂に響き渡った。

見ればファイアがどこからともなく取り出したハリセンでエリカの頭を見事に一閃していた。

「い、痛いです！ モグ、何を、モグ、するんですか、モグモグ、ファイアさん！！」

「食べるか喋るかどっちかにしなさいって言ったたでしょう！ それと、どこの大道芸人みたいなリアクションしてるのよ！」

「ま、まあ、落ち着け、ファイア」

何故か、ファイアが怒り狂わんばかりにエリカにハリセンを食らわせようと飛び掛かろうとしてくる。ジーンがそれを必死に押しとどめようとしているのだが、エリカにはどうしてそういう状態になっているのかさっぱり分からない。

（はっ！ もしやクライムさんが乗り移った！？）

この反応、似たような事をエリカ自身がやっていたような気がして記憶を探っていると、公文書室での一連のやり取りが思い起こされた。

「はあ、はあ、はあ……、エリカちゃんがこんなボケ担当だったとは思わなかったわ」

「ボケ担当ってなんですか！？ なんかすごく不名誉な役職に就任してません！？」

「その通りよ」

「断固拒否します！」

「却下！」

「おい、そこ2人で掛け合いをしてるんじゃない。エリカ、飯が冷めるぞ」

2人でいがみ合っているとその間にジーンが割り込んできて2人を引き離れた。呆れたような表情でエリカとフィアを見ながら、椅子に座るよう促した。

フィアは渋々椅子に座ると、出した時とは逆にどこへともなくハリセンが姿を消した。疑問に思ったのは見たところエリカのみのようだ。そのエリカにしても、ジーンに指摘されたように量がある自分の目の前の皿に向かい合ってなるべく冷めないうちに食べきろうとフォークで肉を突き刺しては口に放り込んでいく。咀嚼する度に肉汁が口一杯に広がり、旨味が口の中で絶妙なハーモニーを奏でる。

「はふう、美味しいです。ですが、少し甘味があっても良いですね。塩が強すぎるような気がします」

「……ふむふむ、塩が少し多い、と」

「うお!? いつの間に!?!」

ジーンは自分たちの机の所についての間に座っていたコックの男に驚いて飛び上がった。見ればコックはメモ帳に今エリカが言った言葉をメモしているようだ。

「少し酒を加えてみたのですが、その点はどうですか?」

「ああ、少し舌に来る奴ですね。……いいんじゃないでしょうか?」

美味しいです」

「それは良かった。期間限定は毎日違いますから。今後のためにも参考になる意見があると助かるんです。明日以降もよろしく頼みます、騎士エリカ」

「ほいほい、はむ、うん、うみゃい……」

一礼して立ち去っていくコックに手を振りながら、さらに肉を一切

れ頬張り、頬をこれ以上になく緩ませる。

「昼間あれだけピリツとしていたエリカちゃんがここまでなるとは、うちの食堂もさすがね……」

「ギャップが大きすぎる……」

何故か、エリカの笑顔を見ていると気分が和む。ファイアもジーンも呆れたようなため息をついてはいるが、その顔は朗らかだ。そして自分たちも夕飯にありつくために料理を口に運んでいく。

「ところでエリカちゃん、明日の対戦相手は確認した？」

「んぐ、ん~~~~っ！ ぷはっ、はい？ なんですって？」

「……落ち着きなさい。だから、明日の対戦相手はもう見た？」

「あ、まだです」

そう言うとファイアが1枚の紙を取り出した。それは様々な場所に張り出されているトーナメントの表だが、1回戦の結果が手書きで記されており、エリカの名前から伸びる線が太くなぞられていて、その隣、第2試合の1人からも伸びてぶつかり合っている。

「ジャックの最終試合はまだ確認してないけど、まあジャックが勝つでしょうね。それで、エリカは明日、彼女と当たるわ」

「ええと、……シ……」

「シルヴィア・ユーゴ。手ごわいわよ」

ファイアの言葉と、名前のニュアンスからして女性なのは確かだろう。エリカが要注意しようと考えていた女性騎士とさっそく当たる事になったようだ。

「正直言うと、速度だけなら団内で1位を争うぐらいよ。因みに争

っているのはバーバラさん」

「バーバラさん級ですか……。手ごわそうです」

「あまり出場する騎士に相手の情報を上げるのはよくないんだけど、あなたの場合見ず知らずな人も多いでしょうから、多少説明はしておくわ……。と思ったら都合よく本人が来たわ。シルヴィア！」

顔を上げてフィアが手を振った。フィアの視線の先を見ようと身体を捻って後ろを見ると、視界にいる騎士たちの中で1人だけエリカたちの方に向かって手を振った女性がいた。

背の高い、凛とした女性だ。エリカと同じく長く伸ばした髪を頭の後ろで1本にまとめていて、紅の髪が歩くたびに跳ねるように動き回る。騎士の団服の赤い装飾と相まってさらに凛々しさが増しているように思われる。少し吊り上ったような切れ長の目は髪の色と同じように赤く、柔らかい笑顔を湛えているが、どこかに厳しさを感じられるような表情をしている。

シルヴィアと呼ばれたその女性は、エリカたちの所へ来るとフィアの隣に座り、エリカと向かい合ってニコリと笑った。

「エリカ、紹介するわ、シルヴィアよ。入団は私と同期なの」

「よろしく、エリカ。あなたの活躍は見てたわ」

差し出された手を握り返すと、柔らかな手に包まれる。

「ど、どうもです……」

「あら、本当に華奢なのね。その細い身体のどこにあれだけの力があるのかしら」

シルヴィアは意外そうな顔をしているが、その両サイドでフィアと

ジーンが大きく頷いているのが見える。

「シルヴィア、それは私たちが一番最初に思ったわ」

「でしようね……、不思議でならないわ」

フィアがどこか達観したような表情でシルヴィアの肩を叩いた。何故かシルヴィアはフィアに同情の眼差しを送っているが、エリカにはその真意は分からなかった。

「エリカは、確か刀を使っていたわね。私は大剣よ」

「え、でも女性騎士は大剣持ってたよな……」

最初、全員並んだ時に一通り騎士が持っている武器は観察した。少なくとも視界に入った女性騎士に大剣使いはいなかったように思える。

「ああ、男と女では大剣と言っても種類が違うのよ。ジーンたちが使うのは幅広の大剣、私たちが使うのは半分くらいの幅の剣、まあ長さは同じくらいだから同じ大剣に分類されるけれど」

腰に帯びる剣や刀よりはるかに長いが、ジーンたちが使う大剣とは違って細い、と簡単にシルヴィアは説明するが、エリカはその説明を食い入るように聞いていた。正直かなりの事が初めてなので、こういう時はしっかり話を聞いていないと損をすると分かっているのだ。

「あと、シルヴィアは水、正確には氷魔法を使うわ」

「そういえば、エリカは1回戦で魔法を一切使わなかったわね？使わないの？」

「使えるのかも分からない状況で……」

これは早々に対応策を考える必要があるようだ。どうやら女性騎士で魔法を使わないのは珍しいらしい。力勝負で男性騎士に勝つ女性
はあまり多くないだろうから、^{から}搦め手で行く騎士が多いのだろう。

「ファイアさん、本当に今度お願いします」

「分かってるわ」

ファイアに頭を下げて、おそらく2度目になるだろうが、魔法の訓練
をお願いした。

「へえ、驚いた、じゃあ本当に腕っ節だけであの人を^{ゲイリー}負かしたのね。
これは敵討ちも苦戦しそうね」

「敵討ち、ですか」

「ああ、言い忘れたけどシルヴィアはゲイリーと付き合ってるのよ」
「そろそろ1年になるかしら」

早く結婚したいわあ、とどこか遠くを見つめながらシルヴィアの姿
はいわゆる恋する乙女状態であった。厳しい表情はそのままなのだ
が、それはゲイリーを心配しての事なのだろうか。

「まあ、そういう訳だから明日は全力で行かせてもらおうわ。それじ
ゃ、私はこれで」

エリカに一言そう言うと、シルヴィアは立ち上がってファイアとジーン
に目を向けてからどこかへ立ち去っていった。

「ふあ……、そろそろ戻りますか……」

夕食を終えた後、ジーンとファイアと別れてエリカは城の裏の森にや
つて来ていた。

食事を終えた頃になって試合を終えたジャックが荒い息で食堂にや
つて来て勝利宣言をしたのだが、それを聞いていたのはエリカ、ジ
ーン、ファイアを除いた騎士たちだった。3人は普通に談笑しながら
ジャックが来たのを見計らったかのように食堂を後にしていった。

もちろんと言おうか、その後をジャックが走って追いかけてきたの
だが、エリカたちは笑いながら散開して宿舎内に散らばっていった。
幸いエリカはジャックの照準から外れて1人、森でのんびりと食休
みをしながら暗くなって空に見え始めた星を眺めていた。

ちなみにエリカの耳が正しければ狙われたのはジーンだったようだ。
別れた後にジーンの悲鳴が聞こえたように思える。

「少し、眠ってしまっていましたか」

星を眺めているうちに睡魔が襲って来たようで、少しばかり寝てしまった。見ればまだほんの少しだけ残っていた夕焼けも完全になくなり、星の海が森の木々の合間、そこだけポツカリと開いた穴から見えていた。

「……どここの空でも、星は綺麗です」

大きな切り株に寝転がったまま、ぼんやりと空を見上げる。不意に流れ星が視界を右から左に通過していき、どこか嬉しい気持ちになった。

と、その時、枝か何か折れるような音が聞こえてエリカは顔を横に向けた。城へと続く細く分かりにくい道に黒い影が立っている。その影はエリカに気が付いていないのか、周囲をキョロキョロと見回しているようだ。

エリカは自分に害意のある人間ではないと判断して、切り株に立つとその影に向けて声をかけた。

「どなた？」

「ひゃあっ!?!」

声をかけると影が夜目でも分かるほどに飛び上がった。そしてその悲鳴を聞いてエリカは目を見開いた。

「その声は、ティティ、様!?!」

「あ、もうばれちゃった?」

影の正体はこの国の王女、ティティ・アールドールンその人だった。見つかつて照れているのか、頬をかきながら木の影から姿を現し、

エリカに駆け寄ってきた。その姿は先日会った時と同じような服装をしている。地面を擦りそんなほど長いドレスを身に纏い、月明かりを受けて美しく輝いている。

「こんばんは、騎士エリカ」

「その呼び方、どうにかならないもんですかね……」

やはり、この「騎士」を頭につける呼称にはなかなか慣れない。それをポツリと呟くと、ティティが少し意外そうな顔をしてすぐに笑みを浮かべた。

「ふふ、あなたもそう思う？ でも驚いた、初めてよ？ 会って膝を付かれなかったの」

「あ……」

エリカは内心で自分の迂闊さに舌打ちした。どうも今の身体になってからうっかりが増えたような気がいつもする。

慌てて膝を付こうとしてそれをティティに制された。

「やらなくて良いですよ？ 一人ぐらい家族以外で親しめる人が欲しかったところですし」

「一応、あなた自身の御身分をお考えになられた方がよろしいのではないかと思いますが」

「あゝもう、堅い！ あなたもあたしも、今はオフ！ 王女と騎士じゃなくて、一人の人間として話し合いましょー」

頬を膨らませて顔を近づけるティティに、エリカはどうしたものの対応に困ってしまった。目上の者が自分をどう呼ぼうとそれはその人の自由だろう。だが、その逆は許されるものではない。必ず敬称

で呼ぶのは、龍の社会もヒトの社会も同じはずである。

だが、どう考えても今のティティの目から逃げ切れる自信が全く湧いてこない。

「そう、ですか？ では、エリカと呼んでください。あたしの喋り方はこれでも無意識ですから」

「分かりました ではエリカは、ここで会う時はあたしをティティと呼んでくださいね。2人だけの秘密です」

「は、はあ……」

妥協すると、ティティは満面の笑みを浮かべた。月明かりに浮かび上がったその笑顔はまさしく天使を想起させるものであった。

「はい、じゃあティティと呼んでください、エリカ」

最後にエリカと呼び、今度はエリカの番だと手を向ける。

「えと、ティティ、様？」

「うーん、本当は様もアウトにしたいんですけど、名前で呼んでくれる人も少ないですし、それで許します。敬語はなるべく取りましようね」

「うう、善処します」

何やら全てにおいて打ち負かされたような気がしてならない。とはいえ、これで目の前のティティの気が済んで解放されるのならそれでもいいかもしれない。それに、堅苦しい、狭い生活に嫌気がさして城から抜け出すようなティティの気持ちも分らないこともない。

エリカ自身、ずっと大人しくしていることなど出来ずに竜人族の集

落まで遊びに行っていたのだ。

そんな事を考えていると、ふとある事に気が付いた。

「ティティ様、どうしてここにいるんですか？」

「…………結構今さらなの…………」

聞いた瞬間、ティティの身体がズルツとこけそうになった。

「いつもは城壁の中を散策して回っているんだけど、今日は歩いていたらいつも閉まっている扉が開いていたの。それで道なりにここまで来たら、エリカがいたっていうことです」

そういえば、エリカに鉄の扉を閉めた記憶はない。あまり意識していなかったが、あまり開けっ放しにしておくのも防犯上決して良くはない。エリカは今後は気を付けることを心がけようと心の中で決めた。

そのエリカの心境を読んだか、読まずか、ティティがエリカの顔を覗き込んで少し面白くなさそうな顔をしている。

「今、今度から閉めておこうとか考えていたでしょう？」

「ギツクウツ!？」

「…………やっぱり」

露骨にため息をつかれてしまい、少しエリカとしても居心地が悪くなってしまった。

「まあ、城の警備上あまり良くない事はあたしも分かるし…………、そうね、じゃあ今度から会う時は扉の前で集合しましょう? 一緒に

出れば鍵をかけられるでしょう？ あなたがどうしてもこの鍵を持っていていいのかも、黙っておいてあげるから」

今さらながら、どうしてもアレックスがあの手を持ってたのだからと不思議に思う。とてもじゃないが、アレックスのような軍狼が一人で出来ることではないはずだ。やはり背後にバーバラがいたのだろうか？

「……分かりました。ですが、毎日とは止めてくださいよ？ あたしもゆっくりしたいですし」

「ふふ、あたしとしては気が休まらない？」

「そういうわけじゃなくて……」

口ではそう言うが、事実ではある。初めて会った時、気配で正体を探られた事をエリカは忘れてはいない。ティティがそういう類の技術、あるいは魔法を使えることは確実、エリカの中では今のところジャックに次いでお近づきになりたくないランキング第3位にランクインしている。因みに1位はクライムだ。

「あたしが出られる時は何かしらの方法で連絡するよ。あたしもいつも出られるわけじゃないから」

と言いながら扉の方をティティは気にするそぶりをした。どうやら追手の近衛兵の兵士が近くを通りかかっているようで、開け放された扉から本来ならば防音されているはずの城壁内の音が漏れてきている。「姫様あゝ、どこにいらっしやるのですかあゝ？」と、野太い声が泣きそうになりながら聞こえてくるのを聞くと、エリカとしても同情を禁じ得ない。

(将軍もこんな感じだったのでしょか……)

龍だった頃、エリカが父親に内緒で初めて竜人族の集落まで行った時、将軍が俗に言う半べそ状態で追いかけてきたのは今でも記憶に残っている。エリカの父親に探し出さなかったら喉笛を噛み千切るとまで言われ、必死に探していたらしい。将軍がエリカを見つけ、嬉しさのあまり抱き付いてきたのを尾で弾き返したのは、少しやりすぎただろうか。

「ここも危ないわね。それじゃエリカ、また会いましょう」

「はあ、あまり皆さんにご迷惑をおかけしないようにしてくださいね？」

近衛兵たちの心労を気遣ったの台詞だったが、ティティは笑顔で振り向くと白い歯を見せた。

「なんだか、お姉さんみたいです」

「そう、ですか？　ともかく、早くお戻りになってください」

「分かったわよ。それじゃ、おやすみなさい、エリカ」

「はい、おやすみなさい、ティティ様」

小さく手を振るとティティは城の方へと駆け出していった。その小さな影が木々の間に消えるまでエリカはその姿を見送り、小さく息を吐くと星空を見上げた。

「ゆっくり眠れそうです……」

第23話 まいづとは言うまい……（後書き）

はい、お姉ちゃんフラグ立てましたよ、うちの主人公。

これからどうしたもんだか……

それはともかく、次から次へと新キャラが……。まあ対戦相手を名無しのゴンベイにするわけにも行かないですし、モブキャラを瞬殺するのも面白くないですからね。今後もちよつとばかり出るかも……？

主人公のフラグなんぞブレイクしても良いんですが、あると面白いかなあと思いついカツとなつてやりました。反省はしてますが後悔はしてません。それほどの事でもないですけどね

それでは、また会いましょう。

感想などお待ちしております。

第24話 手加減できないのは仕様です(前書き)

いますよね、滅茶苦茶強い人に限って加減が出来ない人。

エリカはそういう人間……ドラゴンです。

第24話 手加減できないのは仕様です

『さあさあ！ 騎士団内選抜試合2日目を始めますよお！！』

昨日よりも元気を増した気がするテルミの声がコロシウムに響き渡った。観客席の観客は昨日と同等かそれ以上、この試合の注目度がよく分かる光景となっている。

また、昨日敗北した騎士たちの姿も最前列に確認でき、誰彼構わず「負けるおおお！」とか「ブツ飛ばせええええ！」などと連呼しては真剣に応援している他の観客に鎮圧されている。具体的には観客席に引きずり込まれて口を塞がれた状態で試合観戦をさせられている。

騎士たちも民衆に手を上げる気は無いらしく大人しくお縄についているが、喋れない代わりとばかりに手足をばたつかせながらフガフガと鼻から息をもらしながらもがいている。

『さて、第2回戦第1試合は、昨日初っ端からいろいろと魅せてくれた騎士エリカ対、女性騎士では抜群の安定感を誇る騎士シルヴィアの戦いです！ 今試合初めての女性騎士同士の戦い、果たしてどのような激戦を見せてくれるのでしょうか！？』

「ハードル上げてくれるわね、テルミ」

「……言って聞いてくれるような性格には思えません……」

テルミの煽りを聞きながら、お互い苦笑する。

エリカはすでに刀を抜いて右手に刀、左手に鞘を持って構えている。対するシルヴィアも細身の大剣の切っ先を地面に着けた状態でテルミの話が終わるのを待っていた。

『では、皆様ももう待ちきれないと思いますので、試合を開始したいと思います！ では、両者向かい合って』

エリカは片方の足を引いて身体を少しだけ相対するシルヴィアの方向からずらす。そしていつでも動き出せるように身体に力を循環させ始める。翻ってシルヴィアを見ると、相変わらず大剣を持ち上げるそぶりも見せずにエリカの動きをじっくりと見つめている。

『始め！！』

掛け声と同時に、エリカは飛び出した。ところが、対するシルヴィアは全く動こうとしない。エリカはそれを不審に思いつつもシルヴィアに一步で近づくとその直前で一度大きく踏み込むとシルヴィアを下から斬り上げようと刀を振った。

そこに至ってようやくシルヴィアは動いた。

大剣で斬り上げようとする刀を受け止めると、エリカの手に妙な違和感が走り、エリカは顔をしかめた。

「柔らかい………？」

「ふふ、分かる？」

気づけば自分の目の前にシルヴィアの鋭い目があった。口元は少しだけ笑みを浮かべており、ずいっとエリカに顔を寄せてきた。

「くっ」

驚いてシルヴィアと距離を取ろうとして右手が身体についてこなかった。その右腕に引きずられて飛び退こうとした身体がつんのめる様に止まる。何事かと刀に目をやると、丁度シルヴィアの大剣と接触している所が不自然な光の反射をしていた。そして刀と大剣がまるで溶接でもしたかのようにぴったりとくっ付いてしまっている。

刀の刃を一滴の水がつつと伝って柄までたどり着く。

「氷……」

「そういう事よ」

エリカの独り言にシルヴィアは小さく頷くとエリカの刀とくっ付いてしまっている大剣を勢いよく自らに引き寄せる。刀を手放すわけにはいかないエリカは必然的にその身体をシルヴィアに接近させてしまうことになり、シルヴィアの強烈な蹴りをカウンターののように腹に食らってしまう。

そこでシルヴィアが刀の凍結を解除し、エリカは後方に大きく飛ばされる。済んでのところで体勢を立て直して背中から地面に叩き付けられるような事は避けたが、開始早々に黒鱗を使うことになってしまい、エリカはシルヴィアに対する驚きを隠せなかった。

「これがあなたの戦いですか……」

「そうよ、力で勝てないなら正面から正々堂々戦うなんて、私たちにはできないわ。あなたは正面突破する性質みただけど」

「それしか能がないもので……」

シルヴィアが自分の大剣の腹を指で軽くなぞると、波紋が浮かび上がって大剣の腹が波打つ。大剣は灰色なのだが、それが波打つとどこか不気味に見える。

「水に何か混ぜているんですね」

「灰色の砂よ。固めれば一見普通の剣にしか見えないし、硬度も形も私の意志で変えられる。今は対人用に大剣だけど、対ドラゴンなら……こつちよ」

切っ先をグニツと曲げると、巨大な鎌のような武器に姿を変えた。一点に全ての威力を集中させる事でドラゴンの硬い鱗すらも切り裂くことが出来るようになっていたのだ。

だが、それを肩に担ぐシルヴィアの囃は、俗に言う死神にしか見えない。滴る水が赤かったら文句なしに死神決定な光景である。

「……そっちは遠慮しておきます」

「分かってるわよ、人相手にこれは使いづらいし」

そう言うとシルヴィアは大剣の姿に戻して今度は両手でしっかりと大剣を持ち、切っ先をエリカに向けてきた。

（触れたら動きを止められる……、遠くからは攻撃できない……、一撃必殺狙いで距離を詰められるでしょうか？）

距離を保ちつつ、エリカは頭の中でシルヴィアに勝つための方法を考える。とりあえずはあの大剣には触れない方法を考えようとするのだが、男性騎士のそれとは違うシルヴィアの大剣は比較的軽そうに見える。氷で構成されている刃がどれだけの重さがあるかは分からないが、少なくとも取り回しが通常の大剣よりは楽そうに見える。

つまり、防御への反応もかなり速いだろう。

エリカの持つ刀ほどの取り回しの速さは無くとも、防御するには十分だろう。軽い上に、ある程度以上の硬度を持ち、触れれば動きを止められる、厄介極まりない武器だ。

「どうしたの？ ぼんやりしていると、足元を掬われるわよ？」

「えっ……っ!？」

その場でシルヴィアに視線を向けていたから、安心しきっていた。見れば地面から氷の塊が突き出してエリカの右足を氷漬けにしていた。地中の水分を操って遠距離からエリカの動きを封じたシルヴィアはエリカが足の氷に動けないうちに飛び掛かってきた。

「はあっ!」

エリカは刀で応戦するが、片足を封じられまともに態勢も取れない状態で上から振り下ろされた大剣を条件反射で鞘で防ごうとした。そして、エリカが気が付いた時には鞘が氷に浸食され始めた。

「くっ、この……っ!」

エリカは足に黒鱗を纏った。外からは分からないが黒鱗が発現したためにエリカの足が若干太くなった。凍ってしまったて全く融通の利かない氷を黒鱗が強引に浮き上げると氷にヒビが入る。

「ま、まさかこの氷を!？」

シルヴィアがそれに気が付いて驚愕の声を上げる。確かに、通常の

氷よりもはるかに硬度が増している「シルヴィア印」の氷はエリカ自身が最も固い事に気が付いている。鋼鉄並みの硬さがあり、これが元々液体だとは想像もできないほどだ。だが、硬い物はそれ以上の力を加えられると存外脆い。わずかな圧力でも、硬さしかない物体は折れてしまう事がある。ある程度の「柔」は必要だ。

「くっ、させない！」

シルヴィアはエリカの足を覆っている氷のさらに外縁の地面から氷を生み出してエリカが抜け出せないようにより分厚い氷を作ろうとした。だが、地中から出て来た時、それはまだ水だ。一瞬速く氷の拘束を破壊したエリカはその水が凍る前にシルヴィアの懐にもぐり込むとシルヴィアを背負って自分の前に思いつきり投げつけた。砕けた氷の上にシルヴィアは投げられたが、素早く氷を解凍すると水球のクッションを作り出して地面に叩き付けられる衝撃を吸収させると水球のクッションを利用してワントempoも置かずに地面に足で立つ。

「やっぱりそう簡単に背中を見せてはくれませんか」

「まさかあの拘束を力で振り切るとは思わなかったわ。男でも時間かかるのに」

出来れば、間髪入れずに追撃を仕掛けたかったエリカであったが、シルヴィアはその隙を見せずに立ち上がるとエリカに顔を向けた。一つ一つの動作に無駄がなく、キレもある。

「それじゃあ、私も出し惜しみする場合じゃないわね」

そう言うとシルヴィアは腰を低くして足を引いた。

エリカがその動きを見極めようと刀を構えた瞬間、強烈な衝撃がエリカの腹を襲ってきた。訳も分からずエリカが後方に吹き飛ばされる。

「ぐっ……見えなかつ、なあっ!？」

「遅いわよ、エリカ」

吹き飛ばされて宙を舞っているにも関わらず、シルヴィアはさらに追撃を仕掛けてきた。エリカはかろうじて黒鱗で衝撃を防いでいたが、それでもかなりの衝撃がエリカの身体を打った。

「喰らいなさい」

見ればシルヴィアが振りかぶる大剣の先端が大きく膨らんでいる。それはまるでハンマーのような形になっており、シルヴィアがそれを宙にいるエリカの腹どころか上半身全体を同時に打つように振りおろし、エリカを地面にめり込むほどに叩き付ける。

「かはっ!？」

本気、相手を負かすための戦い方ではない。

相手を殺すための戦い方をシルヴィアはしている。それに気が付いたエリカは戦慄を覚えた。

「驚いた、意識があるなんて……」

黒鱗を可能な限り全力展開しても、頭は守りきれない。地面に頭を強く打って視界がグラグラと歪み、ハンマーで打たれた影響か肺が悲鳴を上げている。シルヴィアはエリカのその様子を半ば驚嘆しな

がら見つめていた。おそらく、今の一撃で昏倒させるつもりだったのだろう。

「まだまだ……、いけます、よ」

エリカが頭を鞘を持つ左手で押さえながらも立ち上がる。その瞬間、観客席から感嘆とも動揺とも取れるどよめきが生まれ、一部から拍手が生まれる。頭にやった手に目をやると、赤く滲んでいる。おそらくどこか負傷したのだろう。あまり長期戦にすると自滅する可能性が出てきた。

（なら、一撃でこちらでも決めるつもりで行かないと……）

そう考えるが、速さで攻撃してくる相手に速さで勝負できるか、エリカは混濁する頭を何とか振り絞って対抗策を考えだそうとする。ゲイリーの時のように正面から行けば確実に防がれてしまう。搦め手、戦略を考えなければならぬ、バーバラが言っていたように。

エリカはフラフラと動きつつも、地面からの奇襲を防ぐためにシルヴィアと一定の距離を保ちつつも動き続ける。

（刀じゃあの氷の剣を斬れない……、だけど他にどうすれば……、やるしかないか……）

チラツと自分の鞘に目をやり、可能かどうかを頭の中で瞬時に判断、これでいけなければ勝ち目はほとんどないと割り切って決心をする。

（うまくいきます様に）

誰に祈るわけでもなくエリカは心の中で祈り、そして少しだけ目を

瞑った。シルヴィアが攻撃してきたらおそらく防ぐ事は叶わなかっただろう。だが、シルヴィアはあえて攻撃をしては来なかった。

一瞬の沈黙の後、エリカは刀と鞘を構えてシルヴィアに向かって飛び込んだ。シルヴィアがどこからの攻撃にでも対応できるように自分の身体の前で大剣を構える。

そしてエリカはそこに真正面から突っ込み、上から振り下ろした刀を案の定シルヴィアに大剣で受け止められ、刀の刃が凍りつく音が耳に聞こえた。

「言い方は悪いけど、馬鹿の一つ覚えよ!？」

「それは、これを見ても言えますか?!」

鞘を大きく横に構えると思いきりシルヴィアの大剣に振り下ろした。

「鞘でどうにかできるとでも……」

シルヴィアはエリカの意図を計りかねつつも大剣の刃の氷を變形させて鞘をも防ごうとした。おそらく、ただの鞘であれば決して大剣を斬る事などできないだろう。

だが、エリカが鞘を振る直前、エリカは鞘に細工を施していた。誰にも気づかれぬよう、鞘の色を確認した上で、振るその一瞬だけのために施した細工を。

ガッ!!

本来ならば、あり得ない音が鞘と大剣が接触した時に響いた。だが、歓声に飲みこまれて気づいたのはシルヴィアと、振った本人である

エリカのみ。その音を聞いた瞬間、エリカは微笑を浮かべ、シルヴィアの表情は驚愕に染まった。

一瞬の拮抗の後、シルヴィアの大剣が鞘と接触したその点を境に真っ二つに切り裂かれた。宙に舞った大剣の上半分が瞬時に水に戻り、エリカの刀が解放される。そしてエリカは刀を瞬時に逆手に持つとシルヴィアを右から袈裟斬りにして地面に叩き伏した。

「がっ!?!」

地面に叩き付けられたシルヴィアが苦悶につめき声を上げ、すぐさま起き上がるうとするがその首筋に刀を突き付けられてその動きを封じられる。

「……負けたわ」

シルヴィアがこれ以上の戦闘継続は無理だと判断して力なく地面に横たわる。そしてゴロリと仰向けになると自分の纏う鎧を見て苦笑を漏らした。

「まさか峰打ちで碎かれるとは思わなかったわ……」

シルヴィアの鎧は肩のあたりが粉々に碎けて下に着ている服が露出してた。見れば周辺には碎かれた鎧の破片が散乱している。

「加減してたらシルヴィアさんには敵いそうになかったので、すみません」

「勝負の世界だし謝る必要はないわよ?」

『き、決まったあああ!! 騎士エリカ、速さでは騎士団屈指の騎

士シルヴィアを正面から倒しました！　で、ですが、騎士シルヴィア、最後の一撃は大丈夫だったのでしょうか、まったく起きる心配がありません！！　ていうか、本当に大丈夫！？」

エリカがシルヴィアの手を取り起き上がらせようとして、シルヴィアの顔が激痛に歪んだ。もう一度地面に倒れ込みそうになったのでエリカが慌ててシルヴィアを肩に担いで倒れないようにする。

「わ、悪いわね、ちょっとまともに歩けそうにないの」
「原因はあたしにあります。おぶって行きますよ」

エリカはそう言うと言った自分が出てきた出口とは逆の方に向かい、反対側の控室へ歩き出した。

その光景に観客席からは惜しみのない拍手が送られ、それは徐々に歓声へと変わっていった。

『倒れた敵をおぶって騎士エリカが歩きます！　これが戦場が作り出す友情というものなのでしょうか！？　ともかく、第2回戦第1試合、勝者は騎士エリカ！　これは入団1週間での選抜もあり得るやもしれません！』

「エリカ、ジーンの時も似たような事をして今後気を付けるって言うてなかった？」

「面目もありません」

シルヴィアを控室まで運ぶと、こちらの控室の救護係になっているフィアに開口一番そう言われ、反論する気もなくエリカは頭を下げた。

「フィア、私もエリカも本気でやって勝敗が決まったの。あまり責めないで？」

「はあ、シルヴィアも少しは加減しなさい？ あのハンマーは攻城用でしょう？」

エリカはその後を知る事になるのだが、エリカを襲ったあの巨大なハンマーはいわゆる破城槌と言われる類の武器をシルヴィアでも扱えるように小型化したもので、本来人に使うような代物ではないのだ。下手をすれば骨折どころでは済まされないほどの威力を持つそれで叩かれていたと知り、後にエリカは怖気が走ったそうだ。

「それに、シルヴィア、あなたそれでも肩の筋が断裂しかかっているのよ？ さすがに私でも全快にはできないからちゃんと医者に掛かってね？」

「鎧の上からでここまでやるなんて、本当にあなた何者？」

別に答えを期待していない顔で、呆れたようなため息をシルヴィア

はついた。シルヴィアは控室に担ぎ込まれると同時に担架に寝かされてフィアに治療を受けていた。

「……無駄に力だけある少女ですよ、シルヴィアさん」

「無駄に、なんてレベルじゃないわよ？ それに最後の鞘の一振り、まさか私の氷剣を斬られるとは思わなかったわ」

「自分で言うのもなんですが、あそこまで上手く行くとは思ってなかったです」

種明かしをする気はない。何しろジャックの時同様に黒鱗を使っているのだから。

エリカは身体のどこにでも、目や鼻、口は例外だが、黒鱗を発現させることが出来る。そして、その形も爪の部分から大きく張り出させて切り裂くのに使ったりと、あまり制限が無い。

そこでエリカは手甲のわずかな隙間から鞘を振る一瞬だけ黒鱗を発現させて、鞘の刃に当たる部分に沿って伸ばし、鞘を黒鱗の刃に一瞬だけ変えたのだ。金属では斬れなくとも、黒鱗の刃ならばその硬さも相まって斬れない物は無い刀を作り出せるのではないかと考えたのだ。

事実バーバラはエリカの黒鱗で作った剣を持っている。

だが確証があったわけではない。初めての試みだったし、上手く行くかは分からなかった。しかし、これでエリカの戦い方にさらに幅が出来たのは確かだ。鞘を防御だけでなく攻撃でも使えるようになったエリカは確かな手ごたえをつかんでいた。

「全く、規格外もいいところにおいてよ、エリカちゃん。見て

るこつちが心臓止まりそうだった……」

「うぐ、気をつけます」

「期待しないで見てるわ」

そこで控室の扉を叩く音がして、白衣の男性が2人入ってきた。エリカが呼んだ応援の医師のようだ。フィアは現在進行形で行われている試合があるために控室を離れるわけにはいかない。そのためシルヴィアを医務室に運ぶために飛んできたようだ。

医師が担架の前と後ろを持つとシルヴィアになるべく衝撃がいかないように慎重に持ち上げた。フィアが必要な処理を医師に伝えると、医師がフィアに一言礼を言って控室をシルヴィアを連れて去っていった。

「ふう、ほらエリカちゃんも向こうの部屋に戻りなさい？ もう試合始まつてるから一度外に出てから外回りで帰った方が良いわよ」
「分かりました。それじゃ、失礼します」

フィアに一礼すると、エリカも一度控室に戻るために部屋を後にし、通路をコロシアムの外に向けて歩き出した。

「見たか？」

「……ああ」

フードの男は同じ装束の男に話しかけた。

「間違いないな、どこへ消えたのかと思っただらこんな所にいたとは」
「想定外だな。まさか人里どころか人の世界のど真ん中にいるとは思わんだろう。ドクターはどう言っている？」

「現状維持、だそうだ。余計な手出しは無用、観察を続行とのことだ。動くとしたら1か月後の大会だそうだ」

「1か月？ 今ならまだ御せるが、もしこれ以上強くなったら我々でも手に負えなくなるぞ」

片方の言葉に背中を浮かせた男が少し語尾を強くした。それをなだめるように相方が手で男を制する。

「あまり『あれ』を舐めない方が良い。相手はこの世界の最上位種、軍隊で相手取っても勝てるか分からん相手だ。慎重に慎重を重ねる必要があるのはお前でも分かるだろう？」

「だが、自力で解決されれば我々の悲願はどうなる？」

「それはないだろうと、ドクターは言っている。この王国にそれに必要な情報はほとんどない。この国からの協力者が少ない事が幸いしたな」

フードから覗く口が嘲笑に歪む。おかげで俺たちが出張る羽目になったんだが、と小さく呟いた。

「……………」

「納得いかんか？　だが、これも全ては悲願のため。決して事を急いでも良い事は無い。何年待ったと思っっているんだ」

「……………分かった。ではどうする？」

「とりあえず『あれ』が試合に出る限りは監視を継続する。だが気取られぬようにな。明後日の決勝まで残った場合はその結果を見てから帰還する」

「御意」

2人の影がコロシアムの”真上”から掻き消えた。

第24話 手加減できないのは仕様です（後書き）

今日も今日とてテスト日和

テスト期間どころか、テスト当日も更新する愚かな作者、ハモニカであります。

いやまあ、明日は大変じゃないので少しばかり書いたただけなんです
が……、来週からの夏休みが待ち遠しい……

そして相変わらず話の最後にちよこつとだけ出てくる悪役決定なお
二人さん。さつさと帰れ！ 邪魔だ！ 話の輪を乱すな！ などと
自分でも考えているんですが、世の中そう言う人がいないと回らな
いのも事実。頑張ってもらいますか。

ではでは、またお会いしましょう。

ご感想などお待ちしております。

第25話 普段おとなしい人は怒ると豹変する(前書き)

ようやく夏休みiiiiiiiiっ!!

そして久々の投稿。

ではではどござ……

第25話 普段おとなしい人は怒ると豹変する

「お疲れ様」

「あ、バーバラさん……」

コロシアムの外を歩いていると、アレックスを連れたバーバラに出会った。昨日もそうなのだが、バーバラは自分の仕事をほったらかしているのではないだろうか、とエリカは思った。

「次は準決勝ね」

「バーバラさんの特訓のおかげでなんとかなった感じですね」

そう言うと、あら嬉しい、とバーバラは笑みを浮かべた。

「ちょっと話せる？ ちょっととした中間報告があるの」

そう言ってバーバラは宿舎を指差した。

エリカは今日はもう試合もないし、午後のジーンたちの試合まではまだ時間があった。別段断る理由もなかったので小さく頷くとバーバラと共に宿舎に向かった。

「昨日、公文書室に行ったわね？」

「うう、思い出させないでください、あの人苦手です……」

「クライムね……。まあ、根は悪くない、とは言い難い人だけど危険人物みたいな目で見てあげないでね？ 何考えているのか分からないのはずっと前からだし」

昨日のクライムとのやり取りが思い起こされてエリカは自分の顔が意志に反してその話題を嫌ったように歪んだのを感じた。それを見たバーバラもエリカの気持ちがよく分かるのか、同情の眼差しを送ってくる。

「あなたが帰った後に私もあそこに行ったのよ。そしてヴァルトに頼み込んで手に入れた許可証で閲覧制限の文書を幾つか借りてきたの」

「やつぱりバーバラさんは世渡り上手ですね……」

「人脈は多いに越したことはないわよ？ エリカもあまり警戒しまくらないで少しは他の人とも話さないな」

そう言われると、反論できない。

エリカは基本的にいつもジーン、フィア、ジャックと共にいる。彼らの紹介や、向こう側から近寄ってこない限りエリカから見知らぬ人に話しかけることは全くない。自分から秘密がばれる危険性を高める必要はないとの考えからなのだが、少ない交友関係にばれてい^{バーバラ}る人物、ばれかけている人物、^{テイテイ}ばれているのかばれそうなのかさ^{クライム}っぱりな人物など、狭いにも関わらず悩みどころが多いのも事実である。

（と言っても、この騎士団じゃこちらからは知らなくても向こう側があたしを知っていること自体は多々ありますし……、あまり深く考えるのも考え物なんでしょうか……ああでも、クライムさんみたいな人が増えても問題大ありますし……）

良い解決策が出てこない。やはりジーンたちを介して知り合う事が無難なのだろう、とエリカは自己完結する。

<何を1人で頷いているのだ？>

「クライムさんみたいなのが2人も3人もいる可能性を考えていたんです」

「……いない、はずよ。いたらさすがにキツイわ……」

<私もご主人に同意しよう。エリカ殿以外で私を初めて会った時に撫でてきたのはクライム殿だけだからな>

「アレックスのモフモフ権はあたしだけのものです!!」

アレックスの言葉に鋭く反応したエリカはバーバラの傍を歩いていったアレックスの首に抱き付いた。そして頬をアレックスの頭に擦りつける。

<エ、エリカ殿！　ここは外だという事を考えてくれんか!？>

「ならお持ち帰りするです」

「はいはい、500歳のお子様には少くしばかりアレックスは重いわよ。それにこれから私の部屋に行くんだからそこで好きなだけやりなさい」

「そういうことなら……って500歳のお子様ってどういう意味ですか？　あたしはれっきとした大人ですよ！　ピチピチの500歳です!」

途中までアレックスをモフモフすることで頭が一杯であったエリカも、バーバラの呟いた気になる単語に目ざとく反応して顔を上げた。

「うん、とりあえず最後の一言は聞かなかったことにするわ」

「なに無視してるんですか。ていうかバーバラさんの部屋遠いです」

気づけば随分と宿舎内を歩いている。コロシム最寄りの扉から入って1階の長い通路を歩き、階段を上りながらエリカはぼやいた。

「仕方ないじゃない。端部屋だし。その代わり端の階段から近いわよ。ほらそこ」

階段を上りきるとバーバラは目の前に現れた部屋を指差した。するとアレックスが走り出して器用に扉に寄りかかって2本立ちするとドアノブを捻って扉を開けて中に入っていった。その後についてエリカとバーバラは部屋に入った。

「おじやまします」

「あら、どこで覚えたの？」

「これくらいこの身体になる前から知ってますよ……、子供じゃあるまいし」

少しふて腐れてみせるとバーバラが苦笑した。

部屋はきちんと整理されていて、間取りはエリカとフィアの使っている部屋と同じような感じであった。ただ窓だけは少し小さめに作られている。広い部屋の壁際にベッドが置かれ、そのすぐ隣に分厚いクッションが置かれていて、そこでアレックスが丸くなっていた。

「とりあえずベッドにでも座って」

バーバラはそう言うと自分の机に置かれていた古い書物を手に取ってベッドに座ったエリカの隣に座った。

「古いですね……」

「まあ、埃も被っていたしね」

バーバラはそう言うと本を開いた。反対の手に持っていた紙をエリ

カに手渡すとそのある1カ所を指差した。

「昨日、半日かけてその本を調べただけど、怪しそうなのを幾つかピックアップしておいたわ」

「ありがとうございます。ええと……」

お礼を言って文字がびっしりと書かれた紙に目を落としてエリカが硬直した。

「……………」

内容に驚くとか、納得するとか以前の問題だった。エリカはまだ文字がそれほど多くは読めないのだ。エリカのためになるべく簡略化されたバーバラのメモでもエリカが理解できる文字は随分と少なかったのだ。

「……説明しながら行くわね」

「すみません……………」

エリカの表情からそれを読み取ったバーバラは本とメモを交互に見比べながらエリカに説明をし始めた。

「1つ目は、突然変異という可能性。ドラゴンに限らず生き物はその生態系の中で変体すること可能性はある。あなたの場合それがドラゴンからヒトになるという結果になったという考え方よ。まあ、そんなに可能性は高くないわ。2つ目の方が可能性が高いわ……………アレックス？」

ベッドの隣で丸くなっていたアレックスに声をかけると、アレックスがピクリと耳を動かして顔を上げる。そして一度部屋の扉を見て

から周囲に聞き耳を立てているのか耳を動かす。

<鍵はかかっている。周囲にヒトの気配はない>

「ありがとう。2つ目は、あまり考えたくはないのだけれど……、何者かが故意にあなたをヒトにしたという可能性よ」

「故意に？」

あくまで冷静に聞き続ける。バーバラ自身も出来れば信じたくないという表情が滲み出てきている。

「ある魔法に、ヒトを他の生物に置換するものがあるの。それを高度に発展させたものでヒトをより強力な存在にしようと考えた馬鹿が大昔にいるの。これがその為の論理なんだけど……」

本の1ページをエリカに差し出すと、そこには複雑な魔法陣が描かれ、ページの隅々にまで説明と思われる文章が書かれている。

「逆転の発想よ。魔法陣の論理を完全に逆にすれば獣をヒトにすることも理論上は可能なのよ。その方法までは書かれていないけれど、可能性としてはこれが大きいわ」

「つまり、誰かがあたしを狙って、故意に、私欲のためにこんな身体にしてくれたんですね」

<ぬっつ！？>

一瞬、エリカ自身から黒い殺気が溢れ出し、アレックスがビクンと跳ね上がって顔をこちらに向けた。

エリカには龍として生まれた事に誇りがある。ジーンたちが騎士としての誇りを持っているように、エリカには龍として大切に守ってきたものがある。それは自分自身でもあり、家族でもあり、同族で

もあり、友達でもある。

そのほとんどを一瞬にして奪われたエリカの喪失感はとてもじゃないが形容しがたい。

そしてその原因が自然現象や病気の類ではなく、ヒトの意志によってであれば、エリカの怒りが噴き出すのも無理はない。

「こんな、情けない身体に……」

エリカは自分の親からもらったありのままの自分の姿を大切にしていた。どんな攻撃にも耐えうる黒鱗、空を力強く、悠然と羽ばたくことの出来る翼、いかなる鱗も引き裂く爪と牙、龍としての誇りをほぼ全てと言っていいほど奪われたエリカの決して外に出すことのできない鬱積、龍としての強烈な殺意が、隣のバーバラに襲い掛かる。

（な、なんて殺気……！）

押し潰されそうなプレッシャーでバーバラは急激に冷や汗をかき始めた自分を認識した。黙って手に持つ紙を睨み付けるエリカに、初めて龍としての恐怖を感じたのかもしれない。

だが、ここで引くつもりは毛頭ない。むしろ、こうなる事はある程度想定していた。自分でも同じことを言われたら犯人を見つけ出して殺すぐらいの気持ちになる。それほどの事をエリカはされた可能性が高いのだ。

「エリカ……」

「……見つけ出してやる」

声をかけると、ゆっくりと顔を上げてエリカはバーバラに顔を向けた。その目は怒りに鈍く光り輝いている。

「見つけ出して、この身体で殺して、元の身体になって喰らってやる！」

「落ち着いて、エリカ！」

今にも暴れ出しそうなエリカをバーバラは抱き寄せて優しく手で包む。怒りで制御が甘くなっているのか、身体の至るところで突発的に黒鱗が発現しては消えてを繰り返している。

「落ち着いて、エリカ。怒りに身を任せては駄目」

「つつ、つつつつ」

押さえきれないのだろう。エリカは拳でベッドを思い切り叩き付ける。叩くたびにベッドが軋んで今にも折れそうな音を立てる。傍で見ているアレックスも気が気でない。

「この怒り、晴らさずにいられるか!？」

「今は駄目。相手も分からず、誰にぶつけるの？ 私？ それともジーンたち？ そうなればこの王国の持てる力であなただを止めるわよ」

口調が変化している。

おそらく、これが本来のエリカなのだろう。普段どんなに取り繕っているか痛感させられる。決して表に出さずにいた感情をバーバラとアレックスの前で爆発させている。

「くそっ！ それではあたしはどうすればいい！？ 本来ならばヒトの世界でこのような事をしている場合でもないのに！ パファイオベディルム、誰がやったか知っているのか？ 教えてくれ！」

パンツッ！！

乾いた音が部屋に響いた。

「あ………？」

バーバラの強烈な張り手がエリカの頬に炸裂し、アレックスが茫然とその様子を見つめている。

「落ち着きなさいと言っているでしょう？ 暴れたところで犯人が出てくるとでも思っているの？」

「で、でも………」

パンツッ！！

返す手の甲で今度は反対側の頬をバーバラの手が叩いた。

「未練たらしいわね、それでも最上位種のお姫様？ あなたのお父様が今のあなたの姿を見たらどういうかしら。憎しみに身を任せてハッピーエンドで終われるわけじゃないでしょうが」

「バーバラさん………」

頬が少し腫れてくる。エリカはその頬を手で覆いながら、今度こそ茫然とバーバラの顔を見つめた。先ほどまでの形相もどこへやら、何が起こったのか分からないという顔をする。

「はあ、やっと表に戻ったわね。頼むからもう馬鹿な事を言わない
でよね」

「……………」

「返事は！！」

「は、はい！！」

バーバラがエリカの前で開いていた手を握って拳を作ってみせると
エリカは震えあがったように布団を抱きしめて首を縦に振った。

「醜態をお見せしました……………」

「いいのよ。私としても、これをあなたに言うべきかは悩んだところ
で言った事だから私にも責任はあるわ。それにあなたの性格には
裏表あるという事が分かったしね。100年連れ添っても本性は見
せなかったのにな」

「父上にも見せませんよ…………」。はあ、感情の制御が出来なかったみ
たいです」

自分の不甲斐なさに髪の毛をかきむしるエリカに、バーバラは苦笑
混じりのため息しか出なかった。

「そんなに裏表はつきりと分けて、何のために？」

「いくらバーバラさんでも、言えないことはあります。これはあた
し個人の問題ですしね。ともかく、バーバラさんのおかげで一步前
進できました。ありがとうございます、そしてすみませんでした」

2つの意味でエリカはバーバラに頭を下げた。

だが、バーバラはエリカのわずかな心情の揺れ動きを感じ取ってい
た。バーバラは頭を下げるそのエリカの頭を手で包むと、自分に押

し付けさせた。

「……バーバラさん？」

「半泣きの顔被っても何の意味もないわよ？ 見ないであげるから少しは鬱憤晴らしなさい」

心を読まれたようにバーバラに言い当てられ、エリカの小さな肩がビクンと跳ねる。そしてそれは断続的な震えと変わり、小さく押し殺した嗚咽がバーバラの胸元から聞こえ始めた。

(ドラゴンとは言っても、やっぱり女の子ね……)

嗚咽を必死に抑えこもうとエリカはするが、押さえきれない。

部屋にはエリカの嗚咽だけが響いていた。

「……落ち着いた？」

小一時間とはいかずとも、随分と長い間泣いてしまったようだ。エリカが窓の外を見ると太陽の位置が随分と移動していた。自分の目が乾いた涙で引きつるような感触がしてエリカは瞼を擦りながらバーバラから離れてベッドから立ち上がった。

「大丈夫です。こんな醜態二度とお見せしませんよ」

「別に見せても良いと思うけれど？」

「あたしが、見せたくないんで……」

あまり自分では言いたくなさそうに顔を歪めるエリカに、バーバラもあえてそれ以上は言わなかった。

「また新しい事が分かったら呼ぶわ。それと、まだ可能性の段階だという事を忘れないでね？ 下手に動いて要らぬ誤解を招くのは双方にとって不幸よ」

「それくらいは分かっています。まあ、向こうから近づいてくるなら話は別ですが」

「だから……はあ、そうならないことを祈るしかないわね」

バーバラはこの可能性が外れることを切に願っている。だが、これ以外にめぼしい情報が無い以上、これが最有力になってしまつのは自明の理である。

もう少し、せめて試合を全て消化するまでは知らせるの遅らせるべきだったか、とバーバラは内心で後悔してしまった。少なからず今後のエリカの試合に影響を与えたのは間違いない。

試合で鬱憤を晴らすような事が無ければいいのだが。

「ジーンさんの試合、終わっちゃったでしょうか……」

「ああ、さつきテルミの大声が聞こえてきたわよ？ 勝ち進んで、明日ジャックと当たる公算が高まったわ。あいつが負けるとしたらジーンか、団長か、私か、あなたくらいなんだし。ジーンたちと合流するなら夕食一緒に食べましょうか。しばらくしたら私は食堂へ行くわ」

「分かりました。では後で食堂にて会いましょう」

エリカはバーバラに一礼すると、忘れずにアレックスをモフモフしてから部屋を後にした。まだ宿舎には人の気配は少なく、コロシアムの歓声とは逆に非常に静まりかえっていた。

（夜の森のようです）

ここだけを見れば、普段ならあり得ないほどに静かだ。おかげで周りに意識を研ぎ澄ませると遠くの物音までもわずかに聞こえた。

「さてと、夕飯まで時間を潰すのでしょうか……」

独り言を呟き、自室で横にでもなるうかと考えながら一步を踏み出そうとした時、エリカは誰かに見られているような感覚に襲われた。足を止め、ゆっくりと廊下の窓の方に向かい、窓から周囲を見渡してみる。コロシアムのせいで視界は著しく悪く、歓声で耳に頼る事も出来ない。

（気のせい、でしょうか……？）

いや、気のせいではない。

確かに誰かに視られていた。

「もしや……」

バーバラの言っていた犯人であろうか。確証はないが、丁度鬱憤を晴らすはけ口を探していたところだったエリカは視られていると感じた方角にかなり指向性を持たせて強烈な殺気を放つてみた。

気配に指向性を持たせることは並みの人間ならばほぼ不可能だろうが、龍であるエリカにとってこれは日常茶飯事で使用される技術だ。周辺に余計なプレッシャーを与えず、獲物を狩るにはこれが丁度良い方法なのだ。

その殺気を相手が感じ取ったかは定かではない。だがいくらかエリカの気も晴れた。自分の負のオーラをぶちまけてスッキリしたエリカは何事もなかったかのように宿舎の階段を下りていった。

「つつつ、おい、大丈夫か」

「あの野郎……、じゃなかつたあのアマ、喧嘩売るたあいい度胸じやねえか」

フードの男が2人、森の木の枝の上で落ちないように枝にしがみ付いていた。頭を押さえながら片方がもう片方を枝の上に引つ張り上げる。

木の上からは、丁度騎士団の宿舎が見えるわずかな隙間がある。だが、その宿舎は豆粒のように小さい。到底常人であれば窓に見える人影を認識することなどできないだろう。

「落ち着け、『あれ』はまだこちらに気が付いていない。我々の視線を感じ取ったようだが、そもそも我々という存在すら知らんはずだ。おそらく先ほどのものにはそれほど深い意味は込められてない」
「敵か味方も分からない状態であれだけの殺気を放つ馬鹿がどこにいるんだ……。ドクターに頼んで今からでも行動を起こすべきじゃないか？」

だが、言われた男は首を小さく横に振った。

「まだだ。ドクターは合法に『あれ』を回収する方法を模索している。それにあの大会を利用する気なんだろう。それまで我々が動くわけにはいかん」

「ちっ、仕方がないな」

「一度、報告に戻ろう。決勝まで見る予定だったが感づかれてはおちおち近寄れん。それに直接話したほうが良いこともあるしな」

「あの吸血鬼はどうする？ 殺すか？」

へらへら笑いながら下卑た笑みを浮かべた男に、片割れの男は一瞬のうちに剣を抜いてその首に突きつけた。枝から突き落とさんばかりに端に押しやると、その状態で口を開いた。

「いい加減殺す事ばかり口にするのは止める。我々の目的は殺すことではない、全てを支配することなのだ。支配される者が少なうっては面白味も半減するだろうが」

「へっ、怒る理由が狂ってるぜ」

剣を突きつけられているにも関わらず、その男は笑みを崩さなかった。すると剣を突きつけていた男は剣を収め、枝から飛び降りた。それに続いて2人目の男も飛び降りる。

「……狂っているのはお互い様だろう？」

「否定はできねえな。それじゃ、狂ってる者同士、面白可笑しく仕事をやり遂げようぜ？」

「当たり前だ、我々はそのためにいるのだ」

そう言うと2人は森の中へと消えていった。

第25話 普段おとなしい人は怒ると豹変する（後書き）

エリカ、ブチ切れる、の回でした。

まあ、ゲシュタルト崩壊させられたのが人為的なら起こりますよ。それくらいエリカには心理的ダメージがあつたんです。

エリカが怒る事など滅多にありません。だから1回怒り出すと辺りに構わず怒り狂ったわけですね。いや、エリカの怒りを上手く表現できたか不安ですが、バーバラは肝が据わってますね。

往復ですよ、往復。

黒鱗発現してたらどうなったんでしよう、みたいな事を自分で考えております。

さてさて、夏休みに入って投稿ペースが戻る、かと思いきや、むしろその逆になりそうです。生活スタイルが夏休み様になっちゃいますからね。

今までのようにほぼ毎日というのは無理だと思いますが、放棄する気はさらさらなので、気長に待っていていただけるとありがたいです。

最悪並行でサブ始める可能性すらあるんですが……。

こんな作者の小説でも、読んでいただいているみなさんに感謝を。

ではでは。

ご感想などなんでもお待ちしております。

第26話 大事な事は知らない場所で起こる

「お疲れ様でした」

エリカは鬱憤を爆発させた後、しばらく自室のベッドに横になり仮眠を取っていた。

そして夕飯の時刻になって食堂へ行くと、すでにだいぶ時間も遅かったためか多くの騎士に混じってジーンやジャック、ファイアも来ていた。エリカを視認すると手を振って招きよせてくれたので、近づいてジーンとジャックに向けてまずは慰労の言葉をかけた。

「ああ、エリカもな。明日は準決勝、お互い頑張ろうな」

「はい、ジーンさんもジャックさんも頑張ってください。ジーンさん、応援してます」

あえて、わざと、故意に、あからさまに、ジャックを指差しながらジーンにそう告げると、ジャックが泣きそうな顔をした。

ゴツイ顔で泣いても誰得、などと考えていると、ファイアが立ち上がってエリカの耳元で小声で囁いた。

「ジャック、あれでもエリカちゃんに応援されたいのよ。あの人豪快そうに見えて繊細なのよ」

「ジャックさんに最も似合わない言葉を使いましたね、ファイアさん。……ですが、まあ命の恩人ですし、応援ぐらいはしますか……、という訳ですのでジャックさんも、頑張ってください」

耳元で囁かれつつもジャックに顔を向けてそう言つと、ジャックが嬉しそうな顔をした。

「最後の『も』のニュアンスが気になったが、まあいいだろう。ジーン、明日は手加減なしな？」

「お前相手に手加減なんかしたら殺されちまうよ。頼むから殺さないでくれよ？」

「それはお前の腕次第だ」

屈託のない笑顔、本当にジャックはジーンより年上、というか皺が見え隠れし始めている中年なんだろうかと、その場の全員が思ったに違いない。ジャックの戦いにかけるものはエリカたちとは一線どころか天と地ほどに差があるのではないだろうか。

「そつえば、エリカちゃん、今日は試合終わって結局ジーンたちの方に行かなかったのね。何かあった？」

「おお、そつだ、試合終わっても戻ってこないから少し心配してたんだ」

エリカはフィアとジーンの疑問に対して返事に困った。ジャックは別に気にしていない様子だが、どうやら明日は応援してくれると聞いて気を良くしているのだろう。あまり話題自体に耳を傾けていない。

「ええと……、少し具合が悪くて？ 自室で、休んでました？」

「……どうして疑問形なんだ」

言い訳を考えつつ口に出していたら語尾が上がってしまった。笑つてごまかそうとするが、何故かフィアに肩を掴まれた。

「ファイ、ファイさん？」

「エリカちゃん、知らない人に声をかけられても安易について行っちゃ駄目よ？」

「……なんとなくファイさんが考えていることが分かりましたが、絶対的に、究極的に間違ってますので破棄してください。それと、さすがにあたしもそこまで不用心じゃありません！ ジーンさん、そこで何安堵のため息みたいなのをついているんですか!？」

エリカの返事に大きなため息をついたジーンにエリカは話題を逸らすかのように突っかった。

少し怒ったような顔をエリカはしているのだが、前振りから話を聞いているジーンたちは話を逸らそうとしていることを冷静に見抜いていたため、エリカに対する応対は至極冷静なものだった。

結局話を元に戻されて、しかも何かやましい事でもあるのかと勘繰られてファイとジーンの前で何故か正座させられる羽目になった。ジャックは後ろで面白そうに事の次第を高みの見物するつもりらしい。

「あの、どうしてこうなったんでしょうか？」

「エリカちゃん、何をかくしているのかしら？ あんな反応じゃ、聞いてくださいって言っているようなものなんだけど」

「できればこんなことはしたくないんだが、ファイがどうしてもと言って聞かないんだ。正直に言ってくれれば後が楽なんだが」

ファイは目つきを必要以上に鋭くさせつつも、口元に笑みを浮かべながらエリカに顔を近づけてきた。対してジーンは非常に居心地悪そうにファイの隣に立っている。嫌々やっているのだろう。どうも

この間、エリカをフィアが懇切丁寧に起こすところを見てからフィアに対してあまり強く意見が言えなくなっているように思える。少なくとも意見の相違で勝った例がない。

「い、言わなきゃだめですか……？」

「駄目」

おずおずと聞くが、フィアに一刀両断される。

エリカは仕方ないという風にため息をつく、少し恥ずかしげに頬をかきながら口を開いた。

「……モフモフしてました」

「……はい？」

ボソツと言った言葉にフィアがつい聞き返してしまった。隣のジーンは聞き取れていたのかどこかホツとした様子、それよりも遠くにいるはずのジャックに至っては今にも笑い出しそうなを懸命にこらえている様子だ。

「だから、バーバラさんの所でアレックスをモフモフしていました……。ああ、自己申告がここまで恥ずかしいとは……」

「ちょ、ちょっと待ちなさい、エリカちゃん。それじゃなに、半日モフモフしていたと言っの？」

「遠からず近からずですね」

言った瞬間、フィアがこれ以上にないくらい脱力したのは想像に難くないだろう。そして肩を震わせながらエリカに飛び掛かるうとしたのをジーンが今度も取り押さえる始末になった。

「だからっ、どうしてっ、そんなことをっ、隠そうとするのよ!!」
「アレックスのモフモフ権はあたしだけのものです!!」

売り言葉に買い言葉、地団駄を踏みながら叫ぶファイアにエリカも言い返すが、それは不毛な争いを招くものでしかなかった。ジャックがやや離れた所で大爆笑しているのが余計にエリカの癪に障った。

「ジャックさん、勝ち残ったらぬっ殺してやりますから、覚悟して
いてください……」

「うおっ!? 俺にまで飛び火させるんじゃないやねえ、ジーン!」

「俺のせいなのか?! とうか見てないでファイアを抑えてくれ!

このままでは腕がもたっ、ほげっ!?!」

無茶苦茶に振っていたファイアの拳がジーンの顔、丁度鼻の頭にクリンヒットした。根性なのかファイアを抑えるその腕は放さないが、その顔は苦痛に歪んでいる。

「むう!? ファイアさん、喧嘩は後です。夕食が出来たようですよ」
で

そう言うと、それまでいがみ合っていたのが嘘のように穏やかな顔になったエリカは、未だに暴れ続けるファイアを置いてさっさと夕食を取りに行ってしまった。後には怒りをぶつける相手を失ったファイアが残されてしまった。

「喧嘩よりも飯が優先されるの!?!」

「エリカらしい、とも言える。ファイアも相手がいなくなったんだし大人しくしてくれ。他の仲間にも迷惑がかかっているんだからな」

「うぐ……」

フィアはそこでようやく周囲に目が行くようになった。周囲で夕食を食べている騎士たちの視線を一点に集めていた。エリカにもある程度視線が行っているようだが、大声を上げていたフィアの方が圧倒的に多いのは必然だ。

やるせなさに、恥ずかしさまで加わったフィアはジーンの腕を振り払うと慌てて自分の椅子に戻っていった。

「……なんなんだ、まったく」

ジーンはその様子を見ながら呆れてため息しか出なかった。

そしてジャック、そろそろ笑い転げるのをやめないと

明日に響くぞ。

暗く、闇がどこまでも続く部屋にフードの男が2人、膝を床につい

て座っていた。フード越しにも分かるほど深々と頭を下げ、自らの
クライアント
依頼主でもあり、協力者でもある、とある人物の到着を待っていた。

「遅いな。あまり人を待たせるような人間ではなかったように思え
たが」

「へっ、案外忘れていました、だったりな。何しろ俺たちとは頭の
ある次元が違うからな」

「それは褒め言葉として受け取っておこうか」

不意に頭の上から声をかけられた。軽口を叩いた男が肩をビクツと
震わせたのが隣の男にもはっきりと確認することが出来た。

「す、すみません、ドクター。決して悪い意味で言ったのではなく
て……」

「良い。私はそれを褒め言葉として受け取ったと言っただろう。そ
れよりも、指示に逆らって戻ってきたのだ。それなりの理由がある
のだろう？ 報告を」

男の言葉を遮って、ドクターと呼ばれた影は説明を求めた。フード
をしていて視界の上部分が欠けている上に、下を向いている2人に
はドクターの顔どころか、膝から上を確認することもできない。

それが、協力する条件の1つ。決して彼の正体を知ってはいけない、
2人はそれだけはしっかりと守っている。

「はっ、実は、監視対象が我々に感づいたようでした。我々を視認
はしていないでしょうが、自分が誰かに監視されていると気づいた
可能性があります」

「ふむ……、偵察とは気づかれぬように行つもの、そちら側の失態

だ。だが、貴殿らが捕まらなかったのは幸いだ。存在が知られれば『あれ』は必ず襲い掛かってくるだろう。まだ我々の計画は準備段階、最終的には『あれ』が必要だが、それまでここに招待するわけにはいかん。……報告ご苦労、1か月後の大会までは『あれ』の監視を緩めよう。アールドールの協力者に偵察を依頼することにする」

ドクターがしばし考えた後に、そう言うと、フードの男がピクリと反応した。

「あの国に協力者がいないため、我々が出たのでは？」

「少ない、と言ったはずだ。おまけに定期的な連絡も取れないほどの場所にいるため、非常時の手段だったのだ。こちらが動けないとなると致し方あるまい、協力者に何とかして連絡を取らなくては……」

「してその者とは？」

「それを知るのは貴殿らの仕事ではない。むしろ、知らない方が身のためだぞ？ 安心しろ、信頼においては私が最も信頼している者だ」

ドクターはそう言うとスウツと闇の中へと徐々に消え始める。それと同時にドクターの気配が不気味なほど、はつきりと分かるほど消えていく。

「貴殿らはエオリアブルグに潜伏せよ。1か月後の大会にて第1段階を開始する」

「「御意」」

「災厄……」

「どうかしましたか、姫様」

ティティは、ふと目を開けて星空を見上げた。

いつもの仕事、ティティの使命でもある、星から未来を読み取る事。世界広しと言えどもアールドールの血筋にのみある特殊な能力。その予言を求めて諸外国の王家がやって来ることもし決して少なくない。

本来なら、外部に予言を漏らすことは一切ない。予言は国家機密であり、中には隣国の動向を示す予言すらあるからだ。

それでも、ただ1つの事については、アールドールンは情報を示している。それが龍に関する情報だ。

数百年前にあった、一国がたった2頭の龍に滅ぼされた事件が、今でもヒトに龍の危険性を忘れさせまいとしているのだ。すでに文献

でしかその存在どころか、その事件の有無すら確認できないが、滅んだその国の生き残りの子孫は今もどこかでひっそりと、人に紛れて暮らしているだろう。

そもそも、生き残りがいなければその国、パフィオベディルムが滅んだ原因が龍にあつたなど、誰も信じなかっただろう。当時も、現在も、龍は一生で1回、初めて目の当りにしたらその日が命日になるほど恐れられていた上に彼ら自身もヒトにその姿を見せない。

森の奥深くに住み、決してヒトと相容れようとはしない、それがヒトが持つ龍への一般的な認識なのだ。

「災厄の種が大陸に撒かれました。この国にも、エオリアブルグにも、ブラゴシユワイクにもです。いずれ巨大な災厄の渦となって、全ての生物を支配下に置こうとします」

「大陸外からの侵略ということですか……」

ティティがいるのは、星宮と呼ばれる予言をティティが得るために作られている山の山頂に近い場所にある天文台のような施設だ。天井が無く、ティティは直接星々の輝きを視界に入れることが出来る。週に何度か、非常時にはほぼ毎日をここで過ごすティティにとって、王宮にいる時からの話し相手が欲しいと言つのは至極当然のことだった。そして、アクイラ騎士団の団長であるヴァルトが護衛兼話し相手として同行していることが多い。

星宮がある山は首都からはさして遠くない。ヴァルトは大会の観戦が終わった後、休む間もなくティティと数十人のお供を連れて星宮にやって来て、ティティが予言を受けるのをその傍で静かに待っていた。

決して、居眠りなどしない。いつ寝ているのか、と聞かれれば、寝ていない、という答えが返ってくるだろう。

「分かりません。ですが、種を撒いているのはこの大陸の中からです。隣国を含めて、この地に惨禍を巻き起こそうとする者がいるのかもしれない」

「……これが災厄ですか？」

ヴァルトが意味したのは、最初の予言の「慈悲」と「災厄」の事である。

「おそらく。近い危機ではないようですが、決して遠くない未来です。遅くとも来年、速ければ数カ月後には」

それを聞くとヴァルトが驚愕に目を見開いた。

「まだ『慈悲』の方もつきりしていないのに……、問題が山積みのおようですな。国境沿いの警備を強化、不審者は片端から捕まえるようにしなければ……」

「もしかしたら、あなた方の出陣もあるやもしれません。十分に修練を行っておいてください」

「……初陣がこれになる騎士も少なくないのですがね。ですが、姫様、引いてはこの国のためなら、たとえこの身が砕けようとも負けるわけにはいきません」

ヴァルトの心配事でもあった。

ヴァルトの次の世代、つまり今騎士団の主力となっている騎士たちはそのほとんどが、いや全員が龍との戦闘を経験していない。龍の

出沒事態が稀有になってしまったのも理由であるが、今やっている選抜試合、1か月後の国家間大会のように、主に対人戦が訓練のメインとなってしまうている。

龍との戦闘経験がある騎士が少ないが為に、有用な対抗方法が見い出せていないのだ。

ヴァルトは、若い頃に1度だけ、龍と相対したことがある。だが、その時は王国最強とも言えた仲間がいたし、死にくさでは断トツだったバーバラがいた。バーバラは今も現役だが、ヴァルトはすでに身体の節々が老いに蝕まれつつある。とてもじゃないが龍相手に大立ち回りなんて出来る身体ではない。

つまり、万が一龍との戦闘になれば、経験のない若い世代が無駄に命を落とす可能性もあるのだ。それだけはヴァルトは阻止しなければならぬ使命がある。龍の森と隣接するアールドールン王国にはドラゴンスレイヤーが必要不可欠、いつ来るかも変わらない相手だからこそ、常に万全の状態でいなければならぬのだ。

「大会を中止すべきだな……」

そうと分かれば、呑気に対人戦などやっている場合ではない。相手が龍という可能性があるのなら、さしもの隣国も耳を傾けなければならぬだろう。とくにアールドールン共々龍の森が自国領土内にあるエオリアブルグ王国は性急な対応が求められる。何しろ大会の開催国なのだから。

「問題はブラゴシユワイクだな……」

現在、ドラゴンスレイヤーの部隊を保有しているのはアールドール

ン、エオリアブルグ、ブラゴシユワイクの3カ国だけである。これは龍の森に近いからであり、大陸の他の国は龍の森から比較的距離があるためドラゴンスレイヤーを保有していない。

中でもアールドールンとエオリアブルグでは危機意識が高い。数十年前にヴァルトたちアクイラ騎士団の精鋭が龍の森に入り、龍を探し求めて奥深くへと突き進み、奴らに襲われ、部隊の8割が討死するという事実を受けて、エオリアブルグでもドラゴンスレイヤーの必要性を痛感させられたのだろう。

だが、最後のドラゴンスレイヤー保有国であるブラゴシユワイク王国は若干形態が異なる。

ドラゴンスレイヤーという栄誉ある役職には、貴族に息子や、いわゆる2代目のボンボンと呼ばれる類の人間や、金で地位を買った者が所属している。

これで技術が高ければ文句なしなのだが、あいにくそうではなかった。

彼らにとってドラゴンスレイヤーとは所詮名ばかり、その特権を濫用こそしないものの笠に着るのは日常茶飯事、おまけに自分の地位自体が高いことも相まって他国のドラゴンスレイヤーを見下すような態度を取っている。協調性が低いのは言わずもがなである。

ヴァルトが団長となる以前のアクイラ騎士団も、似たような実情であった。だが、その結果龍と相まって満足以上に戦える騎士が不足し、龍の森に遠征した騎士もほとんどがまともに戦えるかどうかも分からない騎士ばかりであった。口ばかりで手を動かさない貴族の息子、無駄に豪華な剣を傷つけないように大切にしまっている貴族、

そんな連中しかいなかったのだから、8割死んでも当たり前だったのかもしれない。生き残ったのは、貴族ではなく、日々特訓に明け暮れ、ヴァルトたちと共に真つ向から敵に立ち向かった者だけだった。

貴族たちは龍を見た瞬間に我先にと逃げ帰るか、その場でへたり込んで失禁するか、龍の氣に当てられて気を失うかのどれかだった。そして、ヴァルトたちにはそんな奴らを助ける気も、余裕もなかった。

「ヴァルト様……」

「あ、申し訳ありません、考え事に耽っていました……」

話しかけられていることによやく気が付いたヴァルトは、自分の顔がこれ以上にならないほど強張っているのを自分でも感じ取る事が出来た。目の前にいるティティが少し心配そうな顔をしていることから、考え事をしているうちに無意識になってしまったのだろうかと思当をつける。

「大会は、予定通りやってください」

「……はあ？」

自分の主君に対して、あまりに無礼な、間の抜けた言葉をヴァルトは口にしてしまった。

「で、ですが、この緊急事態にそのような事を行っている場合ではないでしょうか？」

「今だからこそ、です。急にドラゴンスレイヤー同士の大会が中止になれば、皆疑問を持つでしょう。そして、ドラゴンスレイヤーの任務を考えれば、その理由にも民衆は自ずとたどり着きます。そう

なればどうなると思いますか？」

ティティが嗜めるような口調で言うが、それは決して非難ではない。

「……大混乱ですな」

ヴァルトにはその光景が鮮明に想像できた。龍の森に近い首都からは人々が一目散に逃げ出すだろう。そして混乱に乗じた略奪が行われるだろう。

「無用、ではないですが、混乱を避けるためにも、大会は開催します。エオリアブルグ、ブラゴシユワイクにもその旨を伝えておく必要はありそうですね」

「そのことに関しては、陛下の御裁断を仰ぐ必要がありますな」

「あたしからもお願いしておきます。……そうだ、明後日は試合を見に行けるんじゃないかね？」

暗い雰囲気を拭い去るかのように、ティティは表情を明るくしてヴァルトに詰め寄った。ヴァルトにはやはりこのくらいの子供には笑顔が似合う、という感想しか出てこなかったが、それで良いとも思った。

「ええ、どうも対戦予想ではダークホースと本命が当たるという予想が高いですが」

「ふふ、そういう予想はあたしより皆さんの方が当たるでしょうね」

「なら、姫様は星巫女お役御免ですな」

ヴァルトも少しだけ笑みを浮かべる。

「それで世界が回るのなら、それでもあたしは構わないんですけど

ね

ティティは白い歯を覗かせると再び瞑想するために星の見えるこの巨大な吹き抜けの部屋の中央へと歩いていった。

(ダークホース……、エリカ、お前と話するのはその後によろしく)

ヴァルトは心の中でそう呟くと、再び定位位置に戻って腰を下ろすことにした。

第26話 大事な事は知らない場所で起こる（後書き）

どうも、どうも、作者のハモニカです。

実は今書いている27話から28話にかけて非常に難産が続いております。

四時間かけて5000字って……、遅すぎますね。野球見ていたせいもあるんですが。

今回は少しばかり描写が拙くなる上に場面転換が多くなりそうなのです。ただでさえ拙い描写がさらにひどくならないように心がけているのですが、大変です。

まさか団内選抜試合がここまで長引くとは思わなかったもので。

一試合ずつやっていたらいつまで経っても話が進まないという事で、急遽話を作り直していたんです。

というわけで、今回はエリカが準決勝で大変な事をしてしまう予定です。そんでもってゴタゴタして、決勝やって、

それでようやく騎士団内選抜試合編（的な物）が終わるわけなんです。が、実にきな臭い。

まあ、そんなこんなで難産が続いておりますが、頑張ります。

ご感想などお待ちしております

第27話 一撃必倒！（前書き）

はぐい、今まで以上にエリカがやらかします

9月23日：誤字修正

第27話 一撃必倒！

騎士団内選抜試合3日目。

今日は準決勝の2試合のみが行われる。

そのため、午前中に試合はなく、最も観客の入りが多い昼食が終わって少しした頃、大体2時頃から試合が行われることになっている。

第1試合はエリカの試合。第2試合はジーン対ジャック。後者は血を見そうだという事で騎士たちの間でも注目度が高い。

とはいえ、エリカという入団1週間のダークホースもかなり注目されている。すでに観客の中には「エリカ」と書かれた横断幕を持った者たちまでいるほどだ。まるで娯楽の一部になったような気分である。たった数日でここまでになるとは、エリカは少しヒトという存在の情報網のきめ細やかさを甘く見ていたようだ。

「ええと、今日の相手は……」

部屋のベッドで横になりながら、今日の対戦相手の事に意識を回す。昨日の一件以来、食事時を除いていつも同じことが頭の中で反芻される。

「昨日から随分と落ち着かないようね」

寝転がっているとフィアが部屋に入ってきた。選抜試合で医療担当になっていくフィアは仕事着と思われる白い団服を着ている。普段

着ている物ではないようなので、支給されているものなのだろう。

フィアは部屋に入ってくるとエリカが横になっっているベッドに腰かけてきた。

「フィアさんに怒鳴られたせいです」

「いい加減忘れてくれないかしら……」

さも痛いところを突かれたような顔をフィアがする。

だが、エリカが落ち着かない理由はもちろんそれではない。場を茶化すのと、フィアの疑問をかわす目的があったのだが、それ以上にエリカ自身がその思考から抜け出すためでもあった。

バーバラから言われた事実を受け入れるのは簡単だ。

だが、それ以上の怒りを抑えるのはそう易々と行くものではない。竜としての気性の荒さは一度沸点を超えとなくなかなかそれ以下になつてくれない。エリカ自身はそれほど気性が荒いとは思ってはいないのだが、ヒトと比べればはるかに荒いだろう。ナカマが殺されたりすれば、それこそ国を挙げて復讐に乗り出すような性格なのだ。ひっくり返せば仲間内の結びつきが非常に強いとも言えるのだが。

合理主義、とも言える龍の社会では、事実を受け入れなければ何事も話が進まない。事実を否定している暇があったらその対応策を練る、といった具合だ。

対応策が報復になるかは置いておくとして、とにかくエリカは鬱憤が溜まっている状態に近かった。

本人はそれを表に出さないように押さえ込んで普段の態度を纏っているが、心の中で渦巻くそれは何もしい時間、夜寝る時などに破壊衝動のようなものを伴ってエリカを突き動かそうとする。

「準決勝、という事は一応選抜は決まってるんですけどよね。だったらここいらで負けてもいいですか？」

「はあ、手を抜くと痛い目に……、合いそうにないわね、あなたなら。確かに前回までの試合だったら準決勝進出で、無条件で選抜決定。1位から4位まで決めるのは選抜された5人のうち、大将、副将、中堅、次鋒、先鋒の中で適材適所を行うための。残りの1人は大将か団長が試合での戦いぶりを見て決定する感じだったのよ。それが今回、バーバラさんの意向で準決勝まで勝ち残らなくても場合によっては選抜されるのよ。逆を返せば勝ち残っても選抜されないという可能性もあるわ」

フィア自身、あまり記憶が定かではないのか、自分に言い聞かせるように、一つ一つ間違っていないかを確認しつつエリカに説明をする。

「まあ、バーバラさんが試合見てないのは周知の事実、多分団長が判断することになるだろうけど……。だから、わざと負けるなんてしたらそれこそ後で怒るわよ、主に私とバーバラさんが」

そう言ってフィアは手の平に小さな火の玉を作り出した。それを見た瞬間エリカの表情が火の玉の熱とは真逆に凍りついた。

「分かってるわね？」

「は、はいいいいいい!!」

ベッドの隅で小さく縮こまるエリカに、さらにフィアは追い撃ちを

かけていくことにした。

「モフモフ権とやらも、バーバラさんに頼み込んで廃止してもらおうかしら……」

「なあっ！？ それだけは止めてください！ 後生です！」

「その年でそういう事を言うもんじゃないわよ、エリカちゃん」

フィアにしがみ付くエリカは、まるで小動物のようにフィアには見えた。無いはずの尻尾を振って見えるのは、フィアの幻覚ではあるが事実に近いものとも言える。

「……分かりました。全力でやらせてもらいます」

「よろしい やっぱ子供は素直じゃないと」

「子供じゃないです……」

エリカとしても、凍結と灼熱の地獄を味わう上にアレックスのモフモフ権を失うとなると、試合でわざと負けることは百害あって一利なしである。

仕方なく試合に集中することにするのだが、そうなるこの鬱憤を試合で晴らしてしまいそうになって自分に抑えが利かない。

（良いですかね？）

少しくらい、自分のためだけに動いても。

「全力で、ほんの少し……」

小さく呟いたエリカの言葉はフィアにも聞こえなかった。

だが、少なくともファイアがとんでもない事の引き金を引いてしまったのは確かであった。

『さあ、今日もやってまいりました！！ 今日準決勝、今日勝った者同士が明日騎士団内でのトップを争って戦うことになりま
す！！』

響き渡るテルミの威勢のいい声。

エリカは自分の刀を手に馴染ませながらぼんやりとその声を聞き流していた。その目は一点を見つめて離さず、それ以外は一切、合切視界に入れる気は無かった。

『まずはAブロック準決勝、騎士エリカ対騎士マルコフ！！ 騎士エリカは昨日スピードでは騎士団屈指の騎士シルヴィアを打ち負かして準決勝に進出、対する騎士マルコフは騎士エリカには敵わないまでも21歳でその強靱な身体を生かしてここまで勝ち上がってきた』

た騎士団内でも猛者で知られております。騎士エリカもその身体に似合わない力を持っています。さてさて、どんな白熱した試合をしてくれるのでしょうか！」

エリカは無意識に姿勢を低くした。この身体で、最も自分の戦い方の自然体となると感じた姿勢だ。

憂さ晴らしを騎士団の仲間相手に行うのは間違っているという自覚はある。だが、これ以上溜めておくとんでもないことになりそうな気がしてならない。

だから、今だけは、この一瞬だけ、本気を出すことにする。

殺す気など毛頭ない。だから大丈夫、と相手ではなく自分に言い聞かせるエリカは、目の前にいる対戦相手、赤毛でまだ若い騎士に自らの照準を合わせる。

「加減はできません。お互い良い試合をしましょう」

対戦相手が何かを言っている。

だが、今のエリカには右から入って左から抜けていってしまふ。今だけはエリカは本能に従って動いている。わずかに残している理性で対戦相手、マルコフに小さく頷いてみせると、マルコフは愛想のいい笑顔を浮かべている。

アア、イイ獲物ガイル。

本能が甘い誘惑をしている。この身体になって、それまでの常食だった生肉が一切美味しく感じられなくなったにも関わらず、本能は目

の前の「動く肉塊」に舌なめずりしている。

そんな考えを理性が押し込め、照準をマルコフの足元に合わせる。直撃させなければ死ぬこともないはずだ。

『では、両者向かい合って

』

マルコフが背負っていた巨大な斧のような武器を両手で持った。槍のように長い棒の先端に巨大な刃が取り付けられている。

エリカは全ての力を足に回し、初撃に全ての力と鬱憤を乗せる。

『始めっ！！！』

瞬間、エリカは地面を蹴り碎いた。

正確には、踏み込んだ衝撃で地面が抉れたのだ。そして、体感にしてコンマ5秒もないわずかな時間でエリカは今まで出したことのないほどの速度でマルコフの目の前にいた。

だが、マルコフはまだエリカを認識できていない。ただ目の前で起きた地面の抉れに驚いている表情だ。そしてエリカが目の前に来た驚愕の表情にマルコフがなる前に、エリカは全ての力をつぎ込んだ腕で刀を振るってマルコフの足先数十センチの所の地面に刀を突き刺した。

自分が何をしようとしているのか、それが何をもたらそうとしているのか、エリカの中にある理性は理解できていないだろう。分かるのは本能が籠だった頃の最も効率的な無力化方法に出たという事だけだ。

ゴッ

ただ突き刺しただけだ。

だが、刀を突き刺した場所を中心にしっかりと整地されていた地面はそれだけで砕け散った。

「えっ

」

目の前のマルコフが茫然としているのが視界の端の方に見えた。

砕けた地面が衝撃で浮かび上がる。そして衝撃波が全方位に向けて広がり、至近にいたマルコフはその衝撃波を正面から受けたために吹き飛んでコロシアムの端、壁に激突した。そして意識を失ったのか地面に力なく倒れ込んだ。

だが、エリカにその光景は見えなかった。自らが作り出した土煙が完全に視界を塞いでしまっていたからだ。だが、周囲から動揺した観客たちの声が聞こえてくるのだけは聞こえる。

アア、モットダ。モット……。

ガリッ！

「っ!!」

龍の本能が良からぬ事を吹き込もうとしていた。エリカは自らの舌を噛んだ激痛で理性を取り戻す。

「……………これだから、困りものです……………」

エリカは再確認させられた。

騎士団という仲間であろうと、やはり彼らはヒトなのだ。本能からしてみればただの餌なのだ。理性が負ければ、何か本能を突き動かすようなことがあるれば、バーバラの故郷にしたように、ここでそれを起こす事も無きにしも非ずなのだ。

だが、おかげで溜まっていた鬱憤はだいぶ抜けてくれたようだ。

エリカは土煙が晴れる前に自分が吹き飛ばしたマルコフの元へと走り出した。

(死んで、ませんよね?)

それは今さらだ、という声がどこからともなく聞こえた気がした。

何かが違うと、ジーンは感じていた。

Bブロックの試合はエリカの試合が終わった後しばらくしてから行われる予定だったので、ジャックと共に観客席からエリカの試合を見ることにしていたジーンは、目の前でマルコフをジッと見つめるエリカにそんな感覚を抱かされていた。

「なあ、ジャック……」

「分かってる。嬢ちゃん、なんか様子が変わだな」

ジャックも分かっていたようだ。いつもの愛想のいい笑顔も消えて、真剣な表情でエリカを見つめていた。周りの観客は何も気が付いていない。テルミにしても、声を張り上げることに集中していてエリカのただならぬ空気に気が付いていない様子だ。

マルコフは何か感じているのだろうか、通常試合前に向かいあう距離よりもかなり離れてエリカと向き合っている。

すると、エリカがすうつと姿勢を低くした。わずかだが、腰を落とし、構えを取っている。

「飛び出す気か？」

「分かん。何かやる気なのは確かだが……」

テルミが試合の開始合図を出そうと手を振り上げている。その瞬間、ジーンとジャックはそれに気が付いた。

エリカの足元の地面が砕けている。足に相当の力を入れていることは明らかだ。それも、地面が砕けるほどの、常人レベルではない力を入れている。

それに気づいて再びエリカの顔に目を戻した時、ジーンは見えてしまった。

エリカの目を。

ヒトではない、何かの目を。

敵でも、仲間でもない、獲物を見るその目を、見てしまった。

黒い髪の間隙から見えるそれは遠くから見ているだけでも怖気が走るほどのものだった。だから、エリカが何かとんでもない事をするのではないかと思った。

すぐにもエリカに駆け寄って止めるべきだったのだろう。しかし、ジーンの身体は意志と相反して近寄ろうとすることを拒否している。

そして、何かが起こった。

何かが起こったのは確かだ。

テルミの合図と同時にエリカの姿が掻き消えたと思ったら、マルコフがいた位置で巨大な爆発のようなものが起こって土煙がコロシム全体に立ち込めたのだ。その中で何かが硬い物にぶつかるような音がして、地面に落ちた音がそれに続いた。

エリカのスピードは、今までのゲイリーやシルヴィアとの試合で見たそれと比べ物にならないほどの速さだった。まだ、それまでのエリカの動きは予測が出来た。

だが、今、目の前で、ジーンには何が起こったのか理解が追いつかなかった。ゆっくり考えればエリカがマルコフを強襲したことは分かった。だが、表現を直訳しても良いぐらい、「一瞬にして」動いたのだ。途中経過をすっ飛ばしたようなものだ。

「ジャック」

「ああ」

何かただ事ではない事が起こったような気がした。

ジーンはジャックと共にコロシムの観客席から飛び降りると土煙の中に飛び込んだ。立ち上る土煙はなかなか消えず、ジーンとジャックは手探り状態で前へと進んだ。

と、何かに足を取られてつまずきそうになった。バランスを崩す前にジャックがジーンの襟首を掴んで転ぶのを防ぐ。

「すまん」

「大丈夫だ。それよりも、修練場に転ぶような段差は無かったはずなんだがなあ……」

ジャックに言われてジーンは足元に目を向けた。

修練場は、騎士が問題なく練習できるようにしっかりと整地されている。だが、今現実にジーンは何か足を取られた。見れば地面が大きく抉れて巨大なクレーターのようになっている。クレーターと言っても、半円のクレーターというのが正しいだろう。

「十中八九嬢ちゃんの仕業だな。さて当のご本人は何処だ？」

『な、なにが起こったのでしょうか！？ 突如巨大な爆発が起きてコロシラム全体を覆い包んでいます！』と、騎士エリカが騎士マルコフを抱えて現れました、って大丈夫ですか！？』

テルミの拡声器を使った声が響き、2人は慌ててテルミの姿を探した。

ようやく土煙が晴れるとテルミの近くにいるエリカの姿が目に入った。エリカはマルコフを背負ってテルミに何事か話している。そして2人がそこに駆け寄ると驚いたような顔をしてジーンとジャックを見た。

「な、なんでジーンさんたちがここにいるんですか？ まだ試合じゃないですよね？」

「試合なら嬢ちゃんのおかげで大幅に遅れそうだな。という訳でちよっくら付き合え」

「はあ？ ってジャックさん何軽々とあたしを担ぎあげているんですか！？」

返事を返す間もなくエリカはジャックの太い腕に掴まれて肩に担がれてしまった。エリカはジーンに助けを求めるような表情をするが、あいにくジーンも今はジャックと同意見であるがためにその視線はあえて無視することにした。

ジーンはマルコフの状態を少し見て、大事に至っていないことを確認するとテルミに後の事は任せてジャックの後を追う様にコロシアムから走って出ることにした。

「……さて、どういづつもりか話してもらおうか」

端を切ったのはジーンだった。

ジャックに拉致まがいに連れてこられたエリカは訳も分からず何故

か物凄いプレッシャーをジーンとジャックから受けていた。

「な、何のことでしょうか？」

凶星、と言われれば、それは間違っていない。完全に先ほどの戦いの事だろう。

短期決戦などという考えがあったわけではない。一撃で、相手を行動不能にする技をやっただけなのだ。竜だった時は、主に爪か尾を地面に突き刺していた。地面を掘り返すように突き刺してそれを思い切り相手にぶつけるというものだ。1対多数や、広範囲に相手が散らばっている時に使うものだが、至近で喰らえば即死する猛獣もいるだろう。

もちろん、エリカにマルコフを殺す気などなかった。だから、本来ならばもう少し距離を取って最も威力の出る場所にマルコフがいるようにすると、足元、ほぼ真下に食らわしたのだ。威力が最大になってマルコフを襲う直前の、風圧をマルコフにブチかましたのだ。攻撃事態はこれ以上なく派手な上に、コロシアムの内壁をかなり破壊したようだ。マルコフ自身に入った攻撃は少ない。風圧で瓦礫よりも速くコロシアムの壁に当たったのは事実だが。

「いくらなんでも、やりすぎだろう」

「そう言われると否定できませんが、考えなしにやってるわけではないので」

「そう言う問題じゃない。あんな攻撃、一歩間違えれば死んでいたぞ」

ジャックが詰め寄ってきた。いつもの笑顔ではなく、少し怒気を含んだ顔だ。

「お前は一体、何者なんだ」

「っ……………」

答える事の出来ない問いをされてしまった。だが、この状態で逃げる手段が見つからない。

「あの目、まるで猛獣みたいだ。あんな目を見たのは俺も初めてだった」

やりすぎた、と言われても致し方が無い。もとよりエリカもそう言われることを覚悟していた。至極個人的な問題に対戦相手にブチかましたのだ、諫められるどころかヒトが言うところの土道不覚悟とでもいふべき状態だろう。

「それで、エリカ、どうやったんだ？」

「……………はい？」

だから、てつきりエリカ自身の正体とか、そういう事について聞かれるものだと思っていた。それに対する言い訳を必死に考えていたエリカは、ジーンの質問に間の抜けた言葉を口から漏らしてしまっ

た。

「だから、あんな大技、どこで身に着けたんだ？ そんな細い身体で、細い武器で、あんな真似をだ。正直大剣でもあんな巨大な攻撃範囲と攻撃力は出せないぞ」

「うむ、嬢ちゃん、その技は正直俺たちが考えたこともないものだ。酷く野性的、とも言えるな。その場の状況に合わせた攻撃、見事とも言える。だが、ちよつと規模がデカすぎたな」

どうやら、この2人はそういう事に興味があるわけではないようだ。それに気が付くとエリカは今まで強張っていた自分が馬鹿らしくなっていた。

そして2人を言いくるむべく口を開こうとした時、ジーンとジャツクの背後に1人の影が現れた。

「はい、そこまでよお2人さん。エリカ、団長がお呼びよ」

バーバラが腕を組んで立っていた。

足元のアレックスもどこか表情が硬いように思える。

(一難去つてもう一難ですか……)

第27話 一撃必倒！（後書き）

ジーンとジャックの所は、もう聞かないでください。

あんのバトルマニア共は目の前に不審な事があってもエリカの技に目がいくんですから……。

さてさて、次回、エリカの正体が？！ みたいな回になる予定。

ご感想などお待ちしております。

第28話 2度目の自己紹介（前書き）

まずは、随分と更新が遅れてしまったことにお詫びします。

ですが、今週一杯不安定になりそうです。

活動報告読んでいただけるとありがたいです。

とはいえ、なんとか時間を見つけて投稿します。

2011年8月9日改訂

第28話 2度目の自己紹介

「さて、呼ばれた理由は分かっているだろうな？」

ジーンとジャックの包囲網からバーバラによって更なる修羅場へと送り届けられたエリカは、団長の部屋でヴァルトと向き合っていた。バーバラは傍のソファに座ってアレックスに餌を与えているようだ。

「ええと、さっきの試合の事ですか？」

「的は得ているが、それだけではない。出来れば試合が全て終わった後に聞こうと思っていたのだが、目の前であんな真似をされては、さすがに周りの目というものがある。早急な対応を取らせてもらう事にした。明日の決勝は御前試合でもあるわけだからな」

ヴァルトの口調は酷く物静かだ。

だが、それが逆に張り詰めた緊張感を作り出している。

「エリカ、さすがにあれは庇いきれないわ」

「？ どういう意味ですか」

ソファのバーバラに聞きなおすと、心底呆れた表情を浮かべた。なぜかアレックスも首を横に振っている。

「はあ、無自覚か。これはまた面倒だな。エリカ、君はマルコフとの試合で何をしたか分かっているのか？」

「一撃必殺、じゃなかった一撃必倒しようとしたんですが……」

まさか、鬱憤晴らしとは言えないと思つて速攻で試合を終わらせようとした、と言つたのだが、どうやらヴァルトにしてもバーバラにしても信じていない様子だ。納得しているような表情ではない。

ヴァルトは執務机に肘を立てている。

「それじゃない、あの殺気だ。一般人でも感じ取れるほどの殺気を君は放つていたんだ。本来そんなもの、その筋の人間でもなければ感じ取つて良いものではないのだがな」

殺気を感じ取つて暴漢の奇襲から生きながらえる、とかいうレベルの話ではないとヴァルトは言つてるのだ。

相手を殺す事を自らのプレッシャーに濃密に込めたために、エリカは強烈な殺気を四方八方にまき散らしていたのだ。

「あれは並みの人間が出せるものではない。というより、人間なら出せるものではないはずだ」

エリカは知りもしないことだが、殺気にも、幾つか種類がある。

純粹に相手を殺そうとする殺気、これは闘争する人間なら誰でも出すだろう。それとは別に、まったく意味合いの違うものがある。

捕食するものが獲物に放つ殺気だ。相手を憎んでいるわけでも、打ち負かそうとしているわけでもない。純粹に腹も満たすためだけに殺そうとする時に放つものだ。常人にはその違いなど分からないだろう。

だが、ヴァルトは王国の騎士団を任される男だ。それなりに知識は

持ち合わせている。

「ようやくバーバラの話と繋げることが出来たよ。エリカ、君はヒトではないのだね？ それも、バーバラのような人外どうこうというレベルではない、化け物のような、ね」

ヴァルトの目がまっすぐエリカの両眼を射抜く。

エリカは何も言えない。言ったらそこですべてが終わる気がしたから。

「エリカ、ヴァルトは信用できるわ。ここで隠し立てしても何も無い。私から言うわけにもいかないから、あなた自身の口から言うてやりなさい」

「バーバラさん……」

もう、逃げ場はないという事か。

先ほどのジーンやジャックとは違い、ヴァルトは正確に事の本質を見抜いているようだ。

「私自身、ある程度の見当はついている。たとえ君が何者であろうとも、私は君をここから追い出すような事も、言いふらすような事もしない。何しろ、君はこの王国に必要な存在のようだからね」
「必要な、存在ですか……」

ヴァルトの眼は嘘をついているようには見えない。バーバラのお墨付きもある。

だが、それでも「それ」をいう事にはいささかの躊躇がある。

「……少し、質問しても良いですか？」

エリカは、重い口を開いてヴァルトに向かい合った。

「なんだろう？」

「20年ほど前、あなたは龍を殺しに行きましたか？」

「!？」

バーバラが跳ね上がる様に立ち上がったのが視界の端に映った。ヴァルトもまた、本来知りえないはずの情報をエリカが知っていた事に驚いているようだ。

「……どこでそれを？」

「問題はそこではないです。教えてください、『イエス』か、『ノー』で」

「エリカ……」

バーバラがまさか、という表情をしている。

「そのことは、陛下をはじめとする王家と、私、バーバラぐらいしか知らないはずなのだが……ジーンか？」

「いいえ、あたし個人の知識です」

「……どういう意味だ」

簡単な事だ。

エリカはその光景を遠くからではあるが見ていたからだ。

「教えてください、ヴァルトさん」

「……イエスだ」

誤魔化しても無駄だと判断したのか、ヴァルトはゆっくりと頷いた。

「あなたとバーバラさん、そして多分もう1人いたと思うのですが、その方の名前は……ホーリネスと言っくんじゃないですか？」

「なっ！　そこまで知っているのか!？」

これには心底ヴァルトは驚いているようだ。

「あなたが対峙したのは」

言っているのか、分からない。自分の父親に多大な迷惑をかける事にもなるだろう。

だが、言わないと話が進まない。

もう、逃げることはできないのだから。

「あたしの父です」

驚いた、などと言う単純な言葉では表現できない衝撃をヴァルトは受けていた。

目の前の美しい、幼くも見える小さな騎士が、想像を遙かに超える存在であったことにヴァルトは動揺を隠せなかった。

「あたしの父です」

そう言ったエリカは、一切の感情を押し殺した表情でヴァルトに向き合っていた。

「エリカ……」

バーバラがエリカの肩に手を置いた。

ここまで来れば、ただただ事実流されるだけだ。

（私は、パンドラの箱を開けてしまったのだろうか？）

聞くべきではなかった、という思いが脳内を過ぎる。目の前に、仲間を殺した張本人の娘がいるのだ。しかも、ヒトの姿をして。

これがどれほど異常な状況なのか、子供でも分かるのではないだろうか？

ヴァルトは、エリカが龍であるという可能性にはたどり着いていた。

バーバラの言葉、エリカ自身の言動から、少なくとも人外、それ以上の存在であるという事は想定範囲内だった。

だが、これは想定外だ。

目まぐるしく思考を回転させて、何をすべきなのか考えだす。

しかし、どうすればよいのか、まったく頭に浮かんでこない。ただ、目の前の少女を見つめるだけだった。

言ってしまった。

もう、開き直るしかなかった。

だからあえてわざとらしく、演技のように、膝をつくとヴァルトに向かって頭を下げた。

「では改めて自己紹介させてもらいます。我が名はエリカ、本当の名前は違いますがヒトの声帯では発音できない故、このように呼ばれております。我が父は龍の王、最も近い言葉ではイクシオンとお呼びください。そして我が名に最も近いのは

「

そこで少し言葉を切った。

隣にいるバーバラも、初めて聞くエリカの父親の事に驚きを隠せないようだ。アレックスもまた、どこか緊張した面持ちだ。

「イフォネイア、それが最も近い名です」

「……イフォネイア」

ヴァルトがその言葉を反芻するかのようにブツブツとエリカの本名を口にしている。

「エリカ、言つて良かったの？」

「言う様に仕向けたのはあなたですよ、バーバラさん、いえ、パフイオベディルム殿？」

「ちやつかりばらすのね……」

バーバラの名を聞いたヴァルトが、驚愕の表情に変わる。

「パフイオベディルム……、100年前に滅んだ王国の生き残り……、いやあの吸血鬼の娘なのか!？」

「あゝもう、隠してたのに、そうよヴァルト、そういう事よ」

「何てことだ、一度にこれほど衝撃を受けたのは20年ぶりだ……」

パフイオベディルム王国という名を聞いて、人々が思い起こすのは2つの事だ。

1つは龍によつて滅ぼされた国。

もう1つは、王家が吸血鬼を出したために滅ぼされたという事だ。

世にはその吸血鬼共々王家は滅ぼされたと伝わっているのだが、目の前にそのご本人がいるのだ、ヴァルトの衝撃は並々ではないだろう。しかも、その隣には龍の王女ともいうべき存在がいるのだ。

「つまり、エリカ、いやイフォネシア、殿、と呼ぶべきなのか？

君がバーバラと知り合いだつたというのは、君があの国を……？」

その問いにエリカは無言で頷いた。

「バーバラさんとはずいぶん昔に出会つて、それ以来の仲です。彼女の武器も、あたしの鱗ですし」

「こら、余計な事を言つんじゃないわよ」

「まてまて、話についていけん。取り合えず1つずつ解決させてくれ。さしもの私の頭が理解に苦しんでいるのでな」

「分かりました。全て、は無理ですが概要はお話できます。それと、エリカで構いません、本名は近い言葉であつて正しくはないし、エリカと言つ名も気に入ってますから」

そして、エリカはこれまでに起こつた事をヴァルトに説明し始めた。

もちろん、エリカが龍からヒトになつてしまつた後に起こつたことがそのほとんどだ。龍の事はなるべく話さないように努力するのは、その言葉から万が一にも龍の王国アラリニシク・シャングリラへたどり着かせないためだ。あそこを知るヒトは、少ないに越したことはない。

「……とまあこんな感じですよ。騙すような事をしてすみませんでした」

そう言うとエリカはヴァルトに対して頭を下げた。

どういう理由であろうとも、ヴァルトを、引いてはエリカに関係した全てのヒトを騙しているのだ。そしてそれは現在進行形でもある。

「……君の事情は分かった。この事は他言無用することを先に約束しておく。バーバラも」

「当たり前よ。エリカとはあなたよりも長い付き合いだし、無用な混乱を誘発する気はさらさらないわ」

バーバラにも確認すると、ヴァルトは小さく頷いて立ち上がった。

そして執務机を回り込むとエリカの目の前に立った。

「君の正体も分かった。事情も分かった。私も微力ながら君が元の姿に戻るよう力になりたいと思う。だが、それには条件を出させてもらいたい」

「条件ですか……」

「うむ、実はな、君がこの国に現れた事で1つの予言が生まれたと考えられている。『慈悲と災厄が1つになってやってくる』というね。『黒い影が北の森から』、おそらくこれは君の事なのだろう。という事は、君が来たことでこの王国に危機が訪れようとしていると考えられるのだ」

エリカは黙ってヴァルトの話聞いていた。

黒い影、おそらくはエリカの本来の姿を現したものでらう。

慈悲と災厄、これに関してはよく分からないが、エリカ自身にこの王国に害する気は毛頭ないため外部からの脅威という事になるだろうか？

「君には、この危機を解決する手助けをしてもらいたい。それで良いかな？」

「バーバラさんもいますし、ジーンさんたちもいます。拒否する理由はないですね。ですが、1つだけ問題があります」

「何かな？」

「その危機があたしが来たことで起こっているというのなら、あたしがここに居ない方がいいんじゃないですか？」

エリカにはそれが疑問だった。

エリカが来たことで起こった事ならば、エリカが消える事が一番手っ取り早いのではないか。エリカとしては名残惜しい事がかなり多くあるが、それがこの王国にとって最善の策であるはずだ。エリカにしても、ここに居場所がないのなら仕方ないが森に帰るという選択肢もあるのだ。

だが、ヴァルトはエリカの問いに首を横に振った。

「この危機は王国に留まらない。龍の森を中心とする周辺王国にも波及している。すでに君個人でどうにかできるレベルではないと考えられる。私はむしろ、君の協力を得てその危機を乗り越えられると考えている。星巫女、姫様の事だが、彼女曰く君は『慈悲』の方

だからな」

「姫様、ティティ様の事ですか」

星を見て相手を知る少女の顔をエリカは思い出す。どうやら、彼女とあの夜出会ったのは決して偶然ではなかったのかもしれない。

「名前で呼ぶとは、彼女に会った事があるのか？」

「まあ、あの人にそう呼べと言われてしまったので……」

「……アレックス、もしかしてあなたのせい？」

心当たりがあるバーバラはアレックスに冷たい視線を送っている。それにアレックスが必死になって首を横に振っている。実際、アレックスが原因ではない、と思いたい。あの夜外にいたのはアレックスに原因があるのだが。

「あれ、バーバラさんの差し金じゃ無かったんですか？」

そこまで来て、てっきりバーバラが裏にいるのかと思っていたエリカはバーバラに視線を向けた。見るとバーバラがため息をついて少し居づらそうな表情をしていた。

「あなたが1人になれる場所を探しているってアレックスから聞いて、なら適当な場所を見つけてあげなさいってアレックスに言ったのよ。まさかそんなことになっていいるとは思わなかったけど……」
「<私も同じだ。確かにあそこを紹介したのは私だが、まさかそんな事態を招いていたとは思わなんだ>

アレックスが必死になって弁明している。エリカとバーバラはともかくとして、ヴァルトにはアレックスが必死に何かを伝えようと尻尾を振ってハアハア言っているようにしか見えていないはずだ。

「はあ、それはともかくとしてだ。エリカ、頼めるか？」

「え？ ああ、もちろんですよ。それに関しては心当たりがありませんし」

「なにっ、と言つと？」

エリカが言った言葉にヴァルトが食いついた。正確にはバーバラからもたらされた情報ではあるのだが、1つだけ「災厄」に符合するような情報がある。

「バーバラさん、あの事じゃないでしょうか？」

「あの事？ つて、あの魔法！？ た、確かに『災厄』とも取る事は出来るけど……。ああ、でもそれならエリカが『慈悲』になるのも分からないではないか……」

「おい、バーバラ、私にも分かる様に説明してくれ」

「ああ、ごめんなさい。実はエリカを元に戻す方法を探そうと思って公文書室の閲覧制限の書物を幾つか読み漁ったのよ。ほら、あなたにこの前貰った許可で。それで人間を龍にすることで強大な力を得るっていう計画と、それに必要な魔法が書かれたページを見つけたのよ。それも、つい最近読まれた形跡があった、ね」

龍と言つのは、その力をもってすれば世界すら支配できる存在だ。

その鱗は軽々と鉄の武器を弾き返し、空から一方的に地上を焼くことが出来る。さらに、高位の龍ならばヒトと会話も出来る。ヒトすら支配することも可能だろう。

「つまり、その計画を実行しようとしている輩がいると？」

「可能性はあるわ。今でもこんな狂人じみた事を考える人間はきつというわ。どんな時代でも人間は強い力を、権力を求めるものよ」

「……ドラゴンになるのはあたしとしては全然かまわないんですが、ドラゴン全体が同じように見られるのはあまりよろしくありませんね。竜は至って大人しいんですから」

「……あなたが言っても説得力無いわよ？」

「なぜ!？」

心底理解できない、という表情をしてみせるエリカであったが、直前の自分の行いを思い出して閉口してしまう。さらに言えば、バーバラの故郷を滅ぼしたことすらも思い出して無性に恥ずかしくなっていた。

「うう、とにかく、そういう事ならあたしはヴァルトさんたちに協力しますよ。どこまで協力できるか分かりませんが」

「いや、それで構わない。それに今は明日の決勝もある。そちらに集中してくれて構わない。その後は、用があったらこちらから連絡を入れる。それと、これを渡しておこう」

ヴァルトは机の引き出しを開けると、小さな宝石のついたペンダントのようなものを取り出した。そしてそれをエリカに手渡した。

「それはちょっとしたお守りになる。困ったときはそれを出すと良い。大概の事態はそれで解決するはずだ」

「あらまあ、あげていいの？」

「な、なんですか、これ」

赤い宝石には、何かの紋章のようなものが描かれている。

「ヴァルトの家紋よ。ヴァルトがアクイラ騎士団の団長であることは大概の軍、政治関係者なら国の内外を問わず知られているわ。だから、その家紋にはそれ相応の『威力』があるのよ」

「なるほど……」

ペンダントに持っていた紐を通すと、端と端を結んで即席のネックレスを作る。そしてそれを首から下げるとペンダントを服の中にした。まいった。

「ヴァルトさん、この件は、王様や姫様には教えるんですか？」

宝石の冷たい感触を肌を感じながら、顔を上げてエリカは最後の疑問を口にした。

騎士団長と言えども、それよりも権力のある人間には従わなければならない。そうじゃなくとも、エリカの存在は国の存亡にも影響しかねないほどののだ、国政のトップに対しても他言無用を貫くのは難しいのではないかと思い、エリカは懸念を先に問う事にした。

「……難しい質問だな。教える必要があるだろうな。これは国難と言っても過言ではないことになる。だが、君の存在がすぐに影響を及ぼすものではない。必要な時期になるまでは、こちらで何とか先延ばしにする。駄目な様なら君も連れて行くさ。嫌なら私を殺して逃げてもらって構わん、宿舍裏の扉の鍵はまだ持っているだろうっ？」

冗談で言っている顔ではなかった。ヴァルトは、約束が守れない時は自分の命を投げ打つことに一切の躊躇いもないようだ。

エリカは自分の懸念が徒労に終わったと考え、とりあえずは目先の問題が解決したことに安堵のため息をついた。

「そんな事、しませんよ。情報と言うのは持つべき者が持つて初め

て効力を発揮するのですから。そうなら仕方ありませんけど、確認までにとっただけです」

「エリカも言うようになったわね。だけど、ジーンやフィアたちに黙っているというのも、結構辛いことよ?」

「割り切ります。いつか、本当の事が言える日が来ると信じてますから」

そう信じたい。

そして、受け入れてもらいたい。

いつかのバーバラがそうであったように。

「では、失礼します」

エリカは身を翻すと、部屋を後にしようと扉に向かって歩き出した。

「ああそうだ、1つ連絡事項がある」

それをヴァルトが呼び止めると、エリカは振り返って首を傾げた。

「試合会場の地面を抉ってもらったせいだな、試合が延期されている。あとでテルミに謝っておいてくれ、あれでも結構進行係は大変だからな」

「……悪い事をしてしまいましたね」

エリカは苦笑いをするしかなかった。

「なあ、ジャック」

「ああ？ どうした」

「俺が聞いてもいいか？」

「それは構わんが……、ああ、そういう事が、分かった、試合は都合をつけてやる」

「すまん」

「良いってことよ。それに、俺よりもお前さんの方が聞きやすいんじゃないかねえか？ それじゃそういう事で頼むぜ」

「ああ」

第28話 2度目の自己紹介（後書き）

ばれたああああ！！

みたいなの？ 回でした。

とまあ、エリカの本名とか父親父親呼ばれていた方の名前も出てきて、とりあえず問題を1つ解決、と。

イクシオン、まあ、どっかで聞いたことがあるような名前ですねえ、ネーミングセンスもへったくれもないです。

それですね、前書きにも書いたのですがどうも雲行きが怪しいのです、LANの。

そういう訳で次の更新が2〜3日先になるかもしれません。その間に必死になってストックを作ろうとしておりますので、どうか気長に待っていてくれるとありがたいです。

あ、待っていてくれる人そんなにいないかもしれませんが……

でもでも、お気に入り登録してくださっている方がいる事を小説情報で確認してやる気を出しております。

ご感想など頂けると嬉しいです。

第29話 再会と驚愕と諸々の決勝戦（前書き）

ソロモンよ、私は帰って（ry）！！

ようやく帰ってこれた。一週間が物凄く長く感じられましたよ……

これからはグダグダと安定した更新が出来ると思います。まあ、九月中にまた止まると思いますが（汗）

ではでは、ぶっぞぞお

第29話 再会と驚愕と諸々の決勝戦

あつという間の3日間だった気がする。

起こった出来事が多すぎてゆっくりとした記憶がほとんどない。

特に昨日一昨日と、1日中と言っても良いほどに肉体的にも精神的にも忙しかった。

（誰のせいだと言われれば、自業自得なのですが……）

そんな事を考えながら、コロシアムの通路を歩く。

昨日は、結局あの後コロシアムに行ったらBブロックの試合は終わっていた。なんでもエリカの時同様一撃で勝負が決していたらしい。エリカが団長の所に行っていたのはせいぜい30分ほど、その短時間でエリカが作り出した半円クレーターを修復したと聞いて、それはそれでエリカの驚きを誘った。

（はあ、秘密を秘密のままにしようという気があたしにはあるんでしょうか……）

自分の後先考えない行動に心の中で舌打ちする。これでは、ジャックの事をどうこう言う資格も何もないではないか。

だが、そのおかげとも言うべきものも得た。

少なくともこの騎士団の仲間にはエリカにとって危険因子になるような人物はいない、と信じていた。肉体に精神が引つ張られているのだろう、本来ならばそう簡単に他人を信用しないはずの龍が、わずか1週間かそこらしか共に暮らしていない彼らにこれほどまでに信頼を寄せている自分が不思議でならない。

近くにいて不快ではない。むしろ、故郷にいるような安心感を感じているような気がした。

矛盾しているという事は自分でも良く分かる。

ドラゴンスレイヤーの巣窟に安心感を得るなど、龍として狂気の沙汰であろう。

(今のあたしを見たら、父上、あなたはなんて言うでしょうか?)
笑うだろうか。

それとも、今すぐにも連れて帰ろうとするだろうか。

「ここで、どうかしてでも元の姿に戻って皆の所に帰りますからね。そのためなら、恥も外聞も捨てる覚悟はとうに出来ているはず」
元より、龍がヒトという、いわば自らよりも下等な生物になっていること自体、屈辱の極みなのだ。エリカはそこまで深く考えてはいないが、やはり心に引っかかる小さなトゲであることに変わりはない。

「ドラゴンが、ドラゴンスレイヤーになる、これ以上の皮肉は無いですね……」

通路の出口まで行くと、今日も相変わらずの眩しい日差しが外から照りつけてきている。雨の日は随分とこの辺りでは少ないのだろうか。

外からは歓声が地鳴りのように響いてきている。

その中に、エリカは歩いて出ていくと、その歓声はより一層音量が増した。

『さあさあ、ついに騎士団内選抜試合も決勝を向けました。今回の決勝戦は我らが忠誠を誓った国王、アーサー・アールドールン陛下、エルノア様、そして王女であるティティ様も来ております！！』

ロシアムにエリカが入ってきたのを見計らっていたようで、テルミはエリカが姿を現すと同時に声を張り上げて実況を開始した。

「一家で見に来ているのか」

「いつもは姫様って皆呼んでるのに、やっぱりこういふ場所ではお名前と呼ぶんですね」

テルミを挟んで反対側にいた影が声をかけてきたので、何気なく返事をする。

準決勝でジャックを一撃で吹き飛ばしたジーンがそこに立っていた。その現場を見ていたわけではないが、相当痛烈な一撃を見舞ったらしく、ジャックは今現在もベッドで唸っているとか。

多少の同情はあるが、どちらかと言えばジーンを応援していたエリカは少しいい気分がした。何かある度に笑われていた気しかない

ので、むしろいい気味だと思ったのも事実である。

「さて、どうやってジャックさんに負けてもらうよう頼んだんですか？」

「なんだ、分かったのか」

「えっ、本当にそうだったんですか、かまをかけてみたんですが」

「……はあ、やられたよ」

とはいえ、ジーンがジャックに勝てると思っていたエリカではなかった。だから、昨日ジーンが勝つたと聞いて何かしらの作為的なものを感じた。

ジャック、ジーン、双方と一線交え、エリカは自分なりではあるが2人の力量を計っている。

だから、圧倒的な差が2人にあるのは明白だった。確かにジャックは力でのごり押しが多いが、そのごり押しで相手を倒すだけの技術も持ち合わせているのだ。ジーンは確かに力もあるし技術もある。ジャックと違って大剣を型に則^{のつと}って振るう。だが、それだけではジャックは倒せない。

ジャックは普段はああだが、歴戦の騎士なのだ。経験はジーンよりもはるかに多い。そんなジャックが一撃でやられるとなると、相当ジーンに有利な何かがあったことになる。

そこから何かしらの八百長まがいの事があつたと行き当たるのにその時間はかからなかった。

「ジャックに頼んだんだ。決勝でエリカと戦いたいからってな」

「よくジャックさんが了承しましたね……」

「そこは男同士の話だからな。想像に任せるよ。それでエリカ、1つ頼みたいことがあるんだ」

「はえ？」

テルミの声にかき消されつつも、ジーンはテルミには気づかれないうように言った。

「もしこの試合で俺が勝つたら、俺の言う事を1つ聞いてもらいたいんだ」

「……なんですか、その下心丸出しな頼み事は」

ジーンがそう言った瞬間、エリカの顔から感情が消えたのは言うまでもない。さすがのエリカも嫌な予感しかしないその頼み事を何の根拠もなく信用する気にはなれない。むしろ滅殺したくなってもおかしくない。

「い、いや、別にそういう意味じゃないんだ。ただ、聞きたいことが1つあってな。それじゃあそれに正直に答えてくれるというのでどうだ？」

「内容によります」

「それじゃあ約束する意味がない」

随分と真っ直ぐな目でエリカを見つめるジーン。

その目は真剣にエリカの事を見つめている。どうも、それなりの理由があつて言っているようだ。

「……はあ、分かりました。約束しましょう、ただし、あたしもそういう事ならそれなりに本気出しますよ」

「はは、俺よりも年下のはずなんだがなあ、手加減されてちゃ形無

しだ。とはいえ、この前の練習とはわけが違う、こちらも一切の油断なく行かせてもらう」

ジーンが大剣を構える。以前戦った時と同じ構え方だが、ジーンの身体から発せられるプレッシャーはその時とは比較にならない。

（そのくらいしてもらわないとこちらも戦い辛いですからね、好都合……）

手加減する、という言葉はあまり適切ではない。ジーン相手に手加減すれば手痛い攻撃を貰ってもおかしくはないのだ。

だが、エリカが本気を出せば確実にジーンを準決勝のマルコフ以上に手荒に扱う事になりかねない。つまり、ジーンに悟られない程度に力を抜かないと、ジーンに多大な怪我を負わせてしまうかもしれないのだ。

決して舐めている訳ではない。ジーンを気遣つての事なのだが、それはジーンにとって侮辱としか取られないだろう。言い方が変わろうと、エリカがジーンに手加減する事は事実なのだから。

ならば、ジーンが本気以上の力を出してくれればいいのだ。そうすればエリカもそれなりの本気が出せる。本気の前に「それなり」が付いてしまうのは仕方ない、とエリカは割り切り、刀を抜くと鞘と共に両手で持ってジーンに向き合う。

テルミがいつの間にか随分離れた場所まで歩いて退避している。

「エリカ、あそこだ」

「え？」

不意にジーンが視線である一点を示した。視線に沿って顔を動かすと、コロシアムの最上部とも言える場所に豪華な布がかけられて特別席のようなものがこしらえてあった。その布にはこの王国、アールドールの紋章が描かれており、そこにはエリカがヒトとして忠誠を誓った相手であるアーサー王と、笑顔のティティ、そして見慣れない金髪銀眼の女性がいた。状況から判断するにティティの母親、この国の妃であるのだろう。

「いいところを見せてやらないとな」

「そうか、ジーンさんはあたしがティティ様と知り合いになってるの知ってましたよね」

確か、一番最初に出会った夜、ジーンにそのことを言った記憶がある。

「前は油断したが、今回は負けないからな」

「それはこっちも同じです」

「だろうな……、つたく、ジャックは遅いな、間に合わないかな……」

ふと、ジーンは周囲を気にするそぶりをした。

よく見れば、ジーンは大剣は持っているが、いつまで経っても構えようとしていない。どうも、ジャックの到着を待っているようだ。

「あれ、ジャックさんはジーンさんにやられて寝込んでいると聞きましたか」

「ああ、あいつがあれくらいでノックアウトされる奴じゃあないかな。問題なく動いてるぞ？ それで少しお使いを頼んだんだが……」

「……」
「お使い、ですか……」

キヨロキヨロと周囲を見渡すジーンは、「間に合わんか……」と小さくため息をついた。

「実はな、本気モードという事で普段使っている大剣じゃなくて俺の父親が使っていた大剣を使おうと思つてな。何分使う機会が無かつたんだが、エリカ相手なら使えるかと思つてな」

「……父親」

一抹の不安が脳裏を過つた。

ジーンの名字がホーリネスだと知つた時から、1つエリカの頭の中で未だに解決されていない疑問があつた。

エリカの父親、イクシオンが騎士団長ヴァルトやバーバラたちと戦つた時、1人だけイクシオンに一太刀入れた男がいると聞かされている。

イクシオンは白龍だ。世界で最も硬いと伝説にまでなっている鱗を持ち、強大な攻撃力を誇っている白龍相手に、鱗を貫徹する攻撃を放つた男がいると、エリカは自分の父親から直接聞いたのだ。

その時の父親は随分と気分が高揚していたように思える。

自分と真つ向から戦えるヒトがいると、嬉しそうに語っていたものだ。

その男の名を、ホーリネスとイクシオンは言っていた。そしてそれ

は今から20年ほど前、目の前にいるジーンは18歳、きつとそういう事なのだろう。

「俺の親父もドラゴンスレイヤーだったんだ。ヴァルト団長たちと共に今のアクイラ騎士団の基礎を作ったんだが、俺が生まれる前にドラゴンとの戦いで手傷を負ってな。俺が生まれるまでは生きてたんだが、俺が1歳になる前に死んじまった。だから俺は親父の顔も覚えてはいない。だけど、親父みたいになりたいと思ってここまで来たんだ」

ああ、やはり、そうなのか。

間違いない。

エリカは確信した。ジーンは、エリカにとって父親と戦った好敵手、エリカは、ジーンにとって親の仇の娘、とでもいう関係にあるのだ。

「親父が俺に遺してくれたものがあるんだ。それだけが俺の親父の証みたいなものなんだがな」

「おおい、まだ始まってねえだろうなあ!!」

世間話でもしているかのように身の上話をしていると、コロシアムの観客席からもうすっかり聞き慣れてしまった野太い声が響き渡ってきた。声の所在をジーンとエリカ2人で探すと、ジーンが出てきた方の通路の上の観客席で大手を振って何かを喚き散らしているジャックの姿があった。その背中にはジャックのものではない大剣が背負われている。

刃の部分が白い布か何かで巻かれているようで、ジャックは2人が

自分に気が付いたのを確認してその大剣の持ち手に手をやってそれを高々と持ち上げてみせた。

「ジーン！ 今度なんか奢れよな！！」

ジャックはそう言うのと大剣を持ってコロシウムに飛び降り、足早にジーンに近づいてきた。

『ちよ、ジャックさん何やってんですか、試合前ですよ！』

突然のイレギュラーの登場に焦ったのか呼び方も素に戻ったテルミが慌てながらジャックに走り寄った。

「いいじゃねえか、まだ試合開始してないだろ？ ほらジーン、テルミもうるさいからさっさと受け取れ」

「すまん、いきなり頼んでしまった」

「良いってことよ。それに俺もこれでお前がどんな戦いをするのか見てみたいからな。お前の親には代理で取りに来たと言ったが、信じてもらえてよかったぜ」

ジャックは持つてきた大剣をジーンに渡すと、それまでジーンが持っていた大剣を受け取った。

「そんじゃ、邪魔者はさっさと退散させてもらっぜ。頑張れよ、お二人さん」

エリカにも手を振っていくと、ジャックはそそくさと通路の方へと消えていった。そしてエリカの視線は自然とジーンの持っている大剣へと向けられた。

その大剣を見て、すぐに何か違和感を感じ取った。

（な、なんですか……懐かしくもあり、恐ろしくもある……）

そんな感覚に襲われる。

だが、エリカにとってそれは初めての感覚ではない。いつも、必ず感じていたものに限りなく近いものだ。

（まさか……）

「俺の親父が、戦ったドラゴンの鱗を元に鍛えた世界に唯一の大剣だ。これを使いこなせるようになれば俺も一人前っていうのが親父の遺言だったらしい」

ジーンはゆっくりと刃に巻かれた布を巻き取り始めた。

（そんな……こんなアリですか……？）

エリカは心の中であんぐりと口を開ける。それほどの驚きがエリカを襲っている。

ジーンの大剣は何重にも布が巻かれているのだろうか、いくら巻き取っても見慣れた銀色の刃がその姿を見せない。すでに巻かれていた布はかなりの量が巻き取られているにも関わらずだ。

（違う。あれが元からの色なんだから……）

おそらく、そのことに気が付いているのは今のところ目の前のエリカだけだろう。

「親父が戦ったのはドラゴンの王とも言える存在だったらしい。そんなの相手に戦ってたなんて、俺は信じられなかったけどな。けど、この大剣を見せられて納得したよ」

全ての布が巻き取られた。

だが、大剣の刃は真つ白のまま……。

「白鱗びやくりん、そう呼ばれているらしい。詳しい事は俺も知らないんでな。だが、これで斬れない物は無きに等しいとまで言われる硬度を持っているんだ」

そんな事、言われるまでもなく分かっている。

エリカの黒鱗を穿てるのは、戦略級魔法か、父親である白龍の鱗が牙くらいなのだから。

ジーンの持っている大剣は、まさしくその後者に符合していた。

(父上……)

我が親が、目の前に立ちただかっているかのような錯覚に陥った。たとえその身を離れようと、白鱗が放つ王たる存在感は失われていない。

美しく、曇りなき刃に鍛え上げられた白鱗は太陽の光を眩く反射している。決して豪華ではない装飾だが、その分実際に使うには申し分ないように作られている。

「さあ、俺の本気を叩き込ませてもらう。エリカなら、受け止められると信じてるぞ」

軽々とジーンはその白鱗の大剣を片手で持ち上げるとその切っ先をエリカに向けた。それだけでエリカは足が竦むような感覚に襲われる。

とはいえ、イクシオンを相手にしているわけではない。自分の父親の戦いぶりを見ているエリカとしては条件反射のように身体が戦うべきではないという警鐘を鳴らしていたわけだが、今は違うのだ。敵はジーンであってイクシオンではない。

(とはいえ、父上の鱗を鍛えた剣……、さすがにあたしの黒鱗も防ぐのは……)

もちろん、使い手にもよる。下手な使い手が振るったところでエリカの黒鱗はたとえ剣が白鱗でも切り裂くことはできない。

だが、目の前のジーンは十分すぎるほどの使い手だ。一撃でも貰えば黒鱗は意味を成さない。

この試合は殺し合う事が目的ではないから、ジーンも殺そうと思っ
ては斬りかかってこないだろう。だが、当たり所が悪ければエリカ
だからこそ致命傷を負いかねない。

黒鱗で大概の攻撃を防げるエリカは対応が追いつかない攻撃に関し
ては黒鱗で受ける。そんな攻撃をあの大剣で受ければ、さすがのエ
リカも重傷は免れない。

「……お手柔らかにお願いします」

そう言うしかなかった。

そして、一切の油断なく、合切の抜かりなく、ジーンと戦う事を決心した。

「人一倍、いや二倍は頑丈なお前だからこそ、頼めることなんだ。頼んだぜ、エリカ」

「丁重にお断りしたいのですが、それも出来ない様子なのでお受けします。こちらもお加減しません。死なないでくださいね？」

心の底から、ジーンを心配してそう言う。

本気を出す以上、自分がどこまで加減できるか分からない。もしかしたら、殺すつもりで戦うかもしれない。

「いざとなったら他の連中が止めに入る。そういう決まりだ」

「そうですか、なら、少しは安心して戦える、でしょうか？」

「俺も、死ぬ気はさらさらないしな。ま、精々足掻いてみせるさ。

だから、前回の俺と同じだと思わない方がいい」

「……なんか、すっごく負ける人が言いそうな台詞です」

「言うな！」

『はい、お2人とも、そろそろ良いですかあ？ 陛下も見えてらっしゃるんです、あんまり時間を取るのもあれなんですけど……』

物凄く居心地悪そうなテルミの声が響いてきた。さすがに時間を取らせすぎたようだ。

エリカとジーンはテルミに一応謝罪して、お互いの得物を構える。

第29話 再会と驚愕と諸々の決勝戦（後書き）

決勝戦、入りませんでした、すみません。

タイトル詐欺でしょうか、これ……。だ、大丈夫ですよ！ 最後まで少し入ったし！ それ以前に決勝直前のお話ですしね！！

ようやくフラグを一個回収、と。

え？ いつのフラグですって？ いやだなあ、……遠い昔のお話の、ですよ

ジーンの親父さんの名前……。が、出てませんでしたね。まあ、一応そういう存在がいた、ということ……。。

さてさて、次回も大変な事に……。、はあ、書いていてなんでこんなに主人公っているいろいろ話題に事欠かない事になってしまうのか……。

笑いが足りない……。シリアスばかり……

いやいや、そのうちふざけた回でも入れようかな……？

では

ご感想などお待ちしております

第30話 過剰放出（エグゼ・リベラ）（前書き）

あれよあれよという間に30話にまで来てしまいました。まったく、終わる気がしませんよ……

ようやく全体像（予定）の三分の一くらいまでは来たんですがね。

さあ、今回も頑張っていきましょう。

そんな話題じゃなかった……

今までも随分とやらかしてくれていた我が主人公ですが、いろんな意味でやらかしたりやらかされたり。

第30話 過剰放出（エグゼ・リベラ）

テルミの合図と共に、2人はコロシアムの中心目掛けて飛び出した。そしてお互いの得物を思い切り振るうと獲物同士が相対速度で強烈な勢いを纏ってぶつかり合った。

ぶつかった瞬間猛烈な風圧が四方八方に広がり、衝撃波となって空間に波を起こす。一瞬の事で気づいた者は少なかつただろうが、そのそれまでとは違う戦いの空気に歓声は息を呑むほど小さくなり、ただただ固唾を呑んでその戦いぶりを観客たちは見入っていた。

双方の武器が火花を散らした瞬間、エリカは目の前で自らの父親の姿を幻視したような気がした。それと同時に刀を通じて嫌な軋みを感じた。

（ヤバいつ……！）

ジーンの十分すぎる腕力によって振られた白鱗の大剣は鞘を持つ左手を前にして受け止めた。鞘だからもちろん刀の持ち手のように滑り止めなどは一切されていない。エリカ自身の腕力で十分持ちこたえることが出来たからだ。

だが、今回はそうは問屋が卸しそうになかった。

鞘を前に、という事は自然と全ての攻撃の重さを鞘が受け止めた事になる。白鱗の大剣に押されて鞘がエリカの手からずり落ちそうに

なるのがすぐに分かった。

さらに言えば、エリカは初めて手が痺れた。

とつさに黒鱗を発現させて筋肉の断裂を防がなかったらどうなっていた事やら。大剣の種類が違っただけでこうまでも威力に差が出るものなのだろうか、と疑ってしまいたくなるほどだ。

すぐさま飛び退いてジーンと距離を取ろうとするが、ジーンはそれを許さず追撃を仕掛けてくる。

「うらあっ!!」

掛け声と共にジーンは大剣を大根切りよろしくと振り下ろす。受け流すまでもなく思い切り跳んでそれを回避するエリカは、回避と同時に耳を突く轟音に見舞われた。

衝撃波が横殴りにエリカを強襲して体勢を崩させようとするが、すぐさま地面に着地して先ほどまで自分自身がいた場所を見た。

「……! 殺す気ですか、ジーンさん」

「い、いや、俺もここまでやる気じゃなかったんだがなあ……。この大剣は力の伝導が良すぎるんだ」

まったく、面倒な仕様だ。

切れ味最強なのだから、深く考えずとも白鱗の大剣は力を入れれば入れた分切れ味と威力を増すことになる。ジーンが振り下ろした地面には3メートルほどの太い斬痕とも言うべき亀裂が真っ直ぐ入っていた。どう考えても大剣本体で斬った長さよりも長く、さすがに

エリカも背筋を冷たい汗が伝った。

「だが、これくらいやらんとエリカは倒せんからな」

「そこまで化け物じみた記憶はないんですが……」

なんて口では言うが、引きつった苦笑しか出てこない。

「さあ、どんどん行かせてもらうー！」

構え直し、再びエリカに突貫しようとするジーン。

だが、さすがに2度も同じことを繰り返させるわけにはいかない。すぐさま反応したエリカは大剣を一切の加減なく鞘で防ぐと渾身の力で踏みとどまる。そしてすぐさま右手の刀でジーンの胴目掛けて斬りつける。

ジーンはそれを予期していたかのように鋭い動きで回避すると、回避した動きを攻撃に反転させて横に薙いできた。

（これは……、長期戦に持ち込まれればジリ貧もイイところだっ！）

1度戦っている相手だ。戦術は大ざっぱであれ把握できている。だが、全ての攻撃に上乘せ補正がかかっている今、ジーンの軽いジャブが強烈な一撃になっているのだ。

（やってみるしか）

「ないっ！ー！」

最後は声に出してしまったようだ。自分でも考えていることがダダ漏れになっているような気がしてならない。

エリカは横から薙いできた大剣を足甲のついて左足の脛^{すね}受け止め、大剣の勢いを借りて距離を取る。受け止めた瞬間足元から嫌な音が響いたような気がしたが、それを確認している暇はない。

「ジーンさん、しっかり受け止めてくださいね」

「うん？ 何かやる気か？ 死なない程度に頼むぞ」

やった事のない事を初めてやるのだ。一応、ジーンにも伝えておくべきだろう。

父親の姿でしか見たことがないし、自分自身が出来るといふ保証もなければ、その方法すらよく分からない。非常に感覚的な事なだろう。だが、今、エリカがジーンに勝つには、こうでもしないと勝機が見いだせない。接近戦において白鱗の大剣というものは存在感、攻撃力、耐久性全てにおいて自他ともに認めてもよい「最強」なのだ。それはエリカ自身が痛いほど知っていることだ。

つまり、そのような相手に格闘戦など挑むものではない。

だから、初めてではあるが、やるしかない。

「すう……」

距離を取ったエリカは、大きく息を吸い込んで意識を集中させる。戦闘中に目を閉じるなど、禁忌なのだろうが、あいにくエリカには集中するには今のところこうするしか方法を知らない。幸い相手がジーンである事もあって、ジーンは攻撃をしてこない様子。対戦相

手ではあるが、エリカはジーンに少なからず感謝した。

何ができるのか？

その答えをエリカは知らない。

昔、随分昔、エリカ自身、自らの父親イクシオンに問うた事があるが、返ってきた答えは曖昧なものだった。

＜アクアドラゴン水龍なら水、フレイムドラゴン火龍ならば炎、皆それぞれ自らの属性とも言うべきものを持っている。だが、我らは別だ。いかなるモノにも属しておらぬ。これは逆を取ればいかなる属性すらも身に着ける可能性を秘めている。我が身は光、姿身と相容れて属性のように思うかもしれないが、そうではない。必要に応じた時に初めて出た魔法が自らの力として形を成す。故にそなたの力を他者が知る事はそなたが使わない限りは、できないのだ。それは親であつてもな＞

結局、自分が必要に駆られるような事態にでもならない限り、きつかけとなるようなものは起こらないのだ。

しかも、エリカは黒龍、母親こそ水龍だが決して水が操れるわけでもない。ただでさえ魔法を使う機会の少ないドラゴンであるのに、それでいて使える種類すら不明、きつかけにすら出会えないのであれば、もはや一生使う事は無いだろうとすら考えていた。

（まさか、この身体カラダになって必要に迫られるとは思ってもいませんでした……）

何が出るかは見てのお楽しみ、なんて言葉が頭の中に浮かび上がって苦笑する。

まさしく、今のエリカにとってその言葉はピッタリなのだろう。

魔法というものの原理自体は概要であれば理解している。

とはいえ、それでどうにかなるものではない事もエリカは理解しているつもりだ。感覚でどうにかするしかない、「言うは易し行うは難し」な事を考えながら、きつかけになるような事を頭の中で数十パターンと繰り返し模索していく。

（あたしは一切の属性を持たない。逆を言えば、あらゆる属性を使える可能性がある……）

自らの父親の言葉を思い出しながら、エリカは身体の中を渦巻いている魔力　　感覚的な事すぎてエリカ自身それが魔力なのか理解に苦しむが、それを手探りでどうにか具現化しようともがく。

(具現化、発現……、おや？　もしかして黒鱗と同じ感覚？)

考え込んでいると、1つの終着点にたどり着いた。

「……モノはためし、です」

目の前に手を持っていく。

鞘は腰に差し、左手をジーンに向けて広げてみる。先ほどの衝撃がまだ尾を引きずっているのか、手が小刻みに震えている。

(発現させるのは　　)

魔法、と聞いて一番最初に思い起こされるものを試そうとしてみる。

「業火」

哀しいかな、それは自らを何度も焼こうとした炎。

寝起きの悪いエリカを何度と襲った、ファイアの炎であった。

(だ、だって一番最初に出てくるのファイアさんの笑顔なんですよ！
?)

誰に言い訳しているのかも分からない事を心の中で叫ぶエリカは黒鱗を発現させる時と同じような感覚で力を練り込んでいく。間違っても黒鱗が他者に見える範囲で発現しないよう細心の注意を払っているが。

「業火よ、全てを焼き尽くす焰……」

瞬間、身体の芯とも言える部分から左腕にかけて信じられないほどの熱を持った何か^{……}が移動したのをエリカは感じた。

感じたことのない、猛烈な痛みがエリカの左腕を先に向かって移動していく。

「うぐっ……」

「……！ エリカ、大丈夫か？」

エリカが苦悶の表情をしていた事にすぐに気が付いたのだろう。ジーンは試合中にも関わらず少しばかり近寄ろうとした。

「駄目です！！」

「え　　」

瞬間、コロシウムに太陽が生まれた。

『じ、これは……』

実況のテルミすら、絶句している。

コロシアムの地面すれすれ、丁度エリカの頭の上に位置した「それはコロシアムの最上部すら突き抜けようかという大きさだった。

「エ、エリカ……」

目の前のジーンに至っては、強烈な熱に当てられて冷や汗にも関わらず熱を持った汗を流していた。

コロシウムには、太陽のようなものが生まれていた。

火球、というにはあまりにも常識を逸脱した大きさ。表面はまるで太陽のようにフレアをまき散らしている。

だが、それだけならば、特大の火球という事で話は済んだだろう。

問題は、その中身にあった。

むしろ、近くにいる方が見えないかもしれない。観客席から見れば、おそらくその全体像が確認できる。

火球の中で細長い何かが蠢いていることに。

「エリカ……！」

ジーンは今日の前でこの特大の火球を作り出した当事者に大声で声

をかける。炎が轟く轟つという音に負けないうに声を張り上げるが、エリカは一切の反応を示さない。ただただ自分が作り出した特大の火球を見つめているだけだ。

「エリカ・リベラ
過剰放出よ！！」

茫然とするジーンに声をかけたのは、通路から荒い息で飛び出してきたファイアだった。

「一度に大量の魔力を放出したから意識が飛んでるのよ！ このままじゃ火球が暴発する！ ジーン、エリカを倒しなさい！！」

必死の形相とは、まさにこの事だろう。魔法に関して言えばファイアはジーンよりも一日の長、ファイアの方法を拒否したところで自分がそれよりも良い解決策を思いつくとは思えない。

「どうすればいいんだ！！」

「どうもしないわよ！ エリカの意識は魔力で根こそぎ持っていかれているようなものなのよ、だからすぐにでも意識が戻るくらいの衝撃を与えて！！」

「くっ……峰打ちで勘弁してくれよ……！！」

迷っている暇はない。両刃の大剣で峰打ちが出来るかどうかでジーンはかなり混乱しているようだが、すぐに動く必要がある。

観客も事が尋常ではない事に気が付いて我先にと避難を開始し始めた。

コロシアムの観客席には魔法障壁と呼ばれる物理的な防護壁が存在しているのだが、今日の前にある火球が爆発すればそんなもの容易

く突き抜けてしまいそうだ。

ホウ

その時、何かが鳴くような声が聞こえた。ファイアに目を向けていたジーンはすぐさま目の前の火球に目を戻す。みれば火球の輝きが増し、亀裂のような光が火球全体に広がり始めていた。

「だい、じょうぶ……怖がらないで……？」

「エリカ!？」

立ち尽くしているエリカの口から、拙い言葉が覗いた。その言葉は決してジーンに向けられたものではない事をジーンは本能的に察知した。

エリカの言葉は、火球の中の「何か」に向けられている、と。

「ジーン、さん。制御が上手くいきま、せん。申し訳ない、のですが、手加減なしでやって、ください。生まれたら……」

「生まれる？ 何が生まれると言っただ？」

エリカの言葉にハツとなってジーンは頭上の火球を見つめる。

「……卵か」

そう、この火球はただの火球ではない。内部に「何か」を宿した卵なのだ。そして今まさに、殻が破られようとしている。

「ファイア！ 治療の用意をしておいてくれ！」

「わ、分かった！！」

生まれたら、というエリカの言葉を信じて、ジーンはその時を待つ。

亀裂が火球全体に広がり、そして一際大きな輝きを放つと、火球の表面が炎としてはありえない、「割れる」という動作をした。

そして、中からそれが姿を現した。

「火龍、だと……？」

それは、知識にある火龍とは全く異なる姿見だった。

火を纏った龍だから火龍、と言うのは本来の火龍としては間違っている。正確には「火を操れる龍」を火龍と呼ぶのだ。

その結果として炎を纏う龍はあつたとしても、その身体を炎で構成している龍など、存在しない。いかに龍と言えども生きていることに変わりはない。高熱に四六時中身を晒されていればさすがに命を落としかねない。

だが、目の前に浮かんでいるものはそうじゃない。

簡潔に言おう。

これは火を纏った龍ではない。炎で形作られた龍なのだ。龍の形をした炎というのが一番いいだろう。

だが、その炎はまるで命を宿しているかのようにのたうち回りだした。まるで騎手を失った馬のように。

「ッ！！　そういうことか、エリカ……」

すなわち、騎手はエリカだ。

魔力に意識を持っていかれて、意識朦朧としているエリカに生み出した魔法を正確に操れているとは思えない。それが炎の動きとなって表れているのだろう。

ならば、今すぐすべきことはただ一つ。

「耐えるよ、エリカ！！」

ジーンは大きく大剣を振りかぶる。そしてエリカの胸を纏った鎧の上から思い切り斬り下ろした。

自分が何を持っているのかも忘れて。

ゾブッ

聞きたくもない、肉が斬られる音がした。

「……な、に？」

おかしい、エリカの鎧はここまで脆いはずがない。

ジーンは気絶させるつもりで斬り下ろした。当然鎧の上から衝撃だけ与えるつもりだったのだ。

だが、目の前ではエリカが斜めにパツクリと開いた鎧の間から、勢いよく血を吹き出しながら仰向けに倒れ込んだ。あまりの衝撃にスローモーションで事の次第がジーンの眼球に刻み込まれる。

ジーンは気が付いていなかった、忘れていたのだ。

自分が持つ大剣がいつもの切れ味並み程度の鉄の大剣ではないことに。

自分の大剣が比類なき切れ味を持つ白龍の鱗から鍛えられていることを。

そして、気絶させるつもりとはいえ、かなりの力を込めて振り下ろしたことに。

エリカの血が滴る大剣が手から零れ落ち、ジーンは何も考えずにエリカを抱き起そうとする。すでにエリカを中心に大きな血の海が作られ、傷口からは止め処なく血が溢れ出し、到底ジーンの両手で押さえきれぬものではなかった。

「コフツ、自分の血なんて、久々に、見ましたね……」

「喋るな！ すまん、俺が失念していたばかりに……、こんなことに……」

まだ意識があつた、いや意識を取り戻したと言つた方が適切なのだろうか、エリカは宙を見つめながらジーンに付いた自分の血をしげしげとその視界に収めていた。

「でも、おかげで、暴走は防げました。あの子もあたしが意識を失えば消えます」

「死ぬんじゃないぞ、くそっ、ファイア！ 速く……！」

妙に、他人事のようにエリカは喋っていた。

（実際、死ぬ気はさらさらありませんし……）

視界の隅から誰かが走ってきているのが分かる。おそらくファイアだろう。白衣の男を数人連れている。

（いろいろありすぎて、疲れました。少しばかり休んでも、いいですよね……）

失血と共に襲ってきた強烈な虚脱感と睡魔に襲われ、エリカはそこで自らの意識を手放した。

何が起こったのか。

一言で説明するにはあまりに多くの事が一度に起こった。

アールドールン王国の王たるアーサーは、眼下で起こっている事態にただただ目を見開いていた。

巨大な火球がコロシラムに発生し、その中で巨大な影が蠢いている。火球を作り出したであろう騎士の少女の姿は火球に隠れて見えないが、おそらくあの火球の真下にもいるのだろう。

「陛下！ 早く避難を！」

近衛の兵士が必死の形相でそう叫んでいるが、アーサーは梃子でも動く気は無かった。今さら、この火球が爆発したらおそらく城のどこにいようとも無駄だ。アーサーは自らの両手で我が子を抱きなが

ら、決して今日の前で起こっている現象から目を離さなかった。

「……卵、みたい」

「卵……？」

両手の中でアーサー同様、その光景を見ていたティティがふと口を開いた。

「災厄の子でも生まれるのかね……」

「いえ、あれは魔法です。皆が使うそれが少しばかり大きくなっただけの」

「……そうになると、術者は相当な力の持ち主という事になるな」

「エリカ、彼女に間違いありません」

おそらく下にいるであろう騎士の名前をティティが口にした時、アーサーはちよつとした違和感を感じ取った。

「ティティ、彼女とは知り合いか？」

「……ええ、何度か、個人的に会っています。丁寧なんですけど、どこか抜けている、そんな人です。とにかく、この火球には害意はありません。制御できなくなっているように思えますが」

「……だろつなあ」

アーサーは誰にも見えないように小さなため息をついた。

こんな衆人環視の場所で王ともあるう者が顔をしかめるものではない。公の場所では常に王族というものは民の支えであり、希望でもある。決して、弱音の見せてはいけないのだ。

「陛下あ、お願いいたします、後生ですから!!」

近衛兵が泣きそうな声でアーサーにすがりつく。考えてみれば、彼らは自らの仕事を果たそうと必死なのだから、これ以上この場にいることは彼らにとってもあまり良い事にはならないだろう。

そう判断したアーサーは、ティティを連れてその場から離れようとコロシウムに背を向けた。

そして、何かが割れるような音が聞こえた。

いや、聞こえてはいない。そう感じたのだろう。何しろ「割れる」要素がそれにはない。

振り返ると火球が崩れ落ちて巨大な龍がそこにいた。

もがき苦しみ、ただ宙を漂っているだけの龍が、いた。

アーサーはすぐさま下を見ると、今まさにエリカにジーンが斬りかかるうところにいるところであった。

そして、血飛沫が舞った。

おそらくはエリカを昏倒させてこの龍を消そうとしたのだろう。だが、それにしては尋常ではない量の血を今現在エリカは倒れながらも噴き出している。

タダでは済まない事を瞬時に察したアーサーは近衛兵に向き直って口を開いた。

「すぐさま下に治療の出来る者を向かわせろ。騎士が重傷だ」

「は、了解しました！」

バタバタと近衛兵の1人が走り去っていき、他の近衛兵に従ってア
ーサーとティティはその場から避難した。

第30話 過剰放出（エグゼ・リベラ）（後書き）

ノーコメント。

という訳にはいかないですね。

じゃ、じゃあ一定の目途がいたら……駄目ですか？ 流行に乗っちゃだめですか？

死なないから大丈夫、ということ、何しろ主人公ですから！ まったくもってお騒がせな事をやってくれましたよ。当初こうなる予定じゃなかったのに……

そう、本来はあんな「たいよおおお！！」みたいな（絶対違う）もの作る予定なんぞなかったのです。適当にバトってその拳句にぶった切られる予定だったのですが……

しまった、キャラが1人歩きしている気が……

扱いが酷い？

このイベント（？）は今後に不可欠なのです！（多分）

だ、だって次のデカイイベントは一か月後ですよ（小説内）！？
話題が無いと全部すっ飛ばす羽目になるんですよ（泣）

まあ、読者の皆様に飽きられないように頑張りたいと思います。

ああ、そういえば、いつの間にかユニークが4000を超えていましたよ、それとそれに比例したようにPVももつすぐ40000を突破しようかという、正直連載開始当初は考えてもいなかったほどです。

今度の切りが良いのは5万ですかね。

なんかやっちゃおうかな……丁度話題が切れそうな時期に来そうだし……

ではでは

ご感想などお待ちしております

どこかのホムンクルスみたいな事をのたまってやりましたよ。

ちょっと意味合いが違うんですけどね。

それはそうと、いつの間にか20万字突破しましたね。八モ二力は処女作で24万字弱書いたのですが、今回は軽くそれを越えそうです。何しろ未だに作者の中では中盤によくやく差し掛かった、的な位置でして……。

筆(正確にはタイピングですが)が止まらない事に感謝しつつ、飽きられないような作品が書けているかビクビクしつつも、こうして甲子園を見つつ小説を書いております(おいっ)

それとですね、今度また番外編でもやろうかと勝手に模索しているのですが、もしやってもらいたい事とか、要望とかあれば是非知らせてほしいんです。

案がない、という訳ではないのですが、こういうのもアリかなあ、なんて安直に考えている次第です。

もちろん、こんな駄作に付き合っている読者の皆さんからしてみれば「自分で考える!」と言いたいところでしょう。まったく反応がなかった場合でも一応自分が考えている(まだ要検討段階ですが)

奴で行こうかと思っています。

まあ、反応が無いとそれはそれで淋しいのですが……それが今の自分の実力だと真摯に受け止めずに受け流していきます（え？ ダメ？）

男共の心臓（というか神経、または煩惱）に悪いモノ系か、納涼かねての怪談を考えているのですが、前者はいかんせん知識が少ない他の作品を読みつつポイントと思われるところを参考にさせていただこうなんて考えているのですが、おそらくいろいろ大変な事になりそうです。

後者は……元ネタが分からないくらいアレンジして出そうかと思っているのですが、元ネタがいまだに決まっていないうんですねえ。ネット上で調べようにも、そういうサイトって背景怖いじゃないですか！

読者に納涼を届ける前に私が夜寝られなくなるじゃないですか？
夏だからともかく冬なら布団から足出して寝れなくなる人間ですから、作者は。

なににやろうとか考えている駄作者ですが、今後ともよろしくお願
いいたします。

予定では37〜8話程度のあたりで出そうかと思っているので、3
5話ぐらいまでに意見とかお寄せしてくれるとありがたいです。

あ、一応言っておきますが、反応があっても無くても私はビクビク

してしますので、その所よろしくなのです。

なお、番外編に関しては万が一本編をぶった切るような事になると判断された場合繰り越しや前倒しが行われる可能性がありますのでご了承ください。

長々と前書きに付き合っていたいただきありがとうございました。

第31話 夢の中で"あり得ない"などあり得ない

「くそっ！」

ただただ、自らの不甲斐なさに悪態をついていた。

自分の持つ大剣がそこの支給品とはわけが違うという事を失念していたことに、ジーンは自分の拳を壁に打ち付けるしかなかった。

「落ち着け、ジーン」

ここは応急治療室とでも言うべき部屋の前だ。

さすがに、今回のエリカの傷は治療魔法でどうにかなるレベルを遙かに逸脱していた。傷はあらかた塞がっているが、流した血は再生しない。意識を失ってからエリカが危険な状態にあるのだ。

幸い、傷は内臓までは届いていないとのこと。

輸血さえすれば死ぬことはないだろうという医師の診立てだ。

医師と言うのは、科学的な面から見た医師を指している。魔法は万能ではない。治療できるものにも限度というものが存在する以上、彼らが必要なのも頷ける。

特に、病や命に関わるような怪我は彼らの出番となる。病は気からなどと言うが、やはり医師の適切な処方というものが必要不可欠、

一昔前のように祈りで病と言う名の悪魔を追い出すような時代ではない。

治療に関してだけ言えば、魔法よりも彼らの方がはるかに優れているだろう。魔法ではできない事も、彼らはいとも簡単に（決して簡単ではないだろうが）治療する。否、治療する方法を知っているのだ。

「俺は、人として、失格だ……」

医師からの診立てを聞いても、ジーンの表情は浮かばなかった。

自分の手で仲間を、いやそれ以上の存在を傷つけた拳句、生死の境を彷徨わせる結果となったのだ。これで平然としていられる人間がいるのなら見てみたいものだ。

「ジーン、あの時は、エリカを気絶させるしか方法はなかった。そして、最も効率的なのが袈裟斬りだったのもだ」

肩口、首のすぐ近くで強烈な衝撃を受ければ、大概の人間は意識を失うだろう。それが今回、裏目に出ってしまったのだ。

エリカが意識を失ったと同時に、頭上で悶えていた龍は姿を消した。それもそうだろう、発現させたエリカが完全に意識を失えば、魔力は霧散する。最悪の事態は避けられただろうが、試合は中止、王と家族も城に避難し、エリカはすぐさまここに担ぎ込まれた。

今もジーンの鎧にはエリカの血がこれでもかというほど染みついている。

「私をもっと早くから魔法の制御を教えてれば……」

そう言ったのは長椅子に腰かけていたファイアだ。その後、エリカに駆け寄った彼女はその惨状にただただ立ち尽くすしかなかった。もはや魔力量の多いファイアでもどうにかできるものではないという事をファイアはすぐに察してしまった。だから、何もできずに担架に乗せられて血を流しながら運ばれていくエリカに付き添う事しかできなかった。

「ファイア、それは違うぞ。俺がもっと考えて行動していれば良かったんだ。あの剣でも、エリカなら受け止めてくれると思った俺が愚かだったんだ」

「ジーン、自分を責めるのはいい加減にしる。どうしようもなかったんだ。今さら過去を変えられるわけでもない。今は嬢ちゃんの無事目を覚ますのを待つことしかできんだろうが」

「それでもだ！」

ジーンは声を張り上げた。もやは悲鳴にも近い。

「あの森で、俺たちが助けた命を、俺が奪おうとしてどうするんだ！俺たちの剣はヒトを斬るためにあるんじゃないんだ！！」

まだ1週間かそこらの過去の話なのに、随分と昔の事のように思える。あの日から、あまりにも多くの事が起こった。今まで生きた18年間よりも圧倒的に価値ある1週間と言っても、ジーンにとって
は過言ではない。

「だから、俺はっ

」

「すまん、少し落ち着け」

今にも何かが壊れてしまいそうなジーンの鳩尾に、ジャックは正確に拳を打ちこんだ。ジーン意識が飛び、ダラリとジャックにその身体を預ける。

「すまんがファイア」

「ええ、分かってる」

長椅子を立つと、ジャックはそこにジーンを寝かせた。

「結局、何が起こったのかも分からんほどだな」

「エグゼ・リベラ過剰放出なんて、初めて見たわよ。ヒトがやったら普通死ぬわよ？」

「魔法に関しちや俺は何も言えんが、ともかくとんでもない、という事だけは分かった。大変なのはこれからだぞ。さすがにあれほどの魔法、正直戦略級と言ってもいいんじゃないかねえか？」

戦略級、という言葉聞いてファイアの顔が凍りつく。

「さすがは歴戦の騎士、言う事のレベルが違うわね。戦略級ともなれば、お隣さんたちも黙ってないわよ」

「おまけに試合は一般公開、当然他国の連中も視察に来ていただろう。明日には大陸中に嬢ちゃんの事が知れ渡ってるかもな」

「……洒落にならないわね」

「ああ、ただでさえうちアイルドールンは対ドラゴンのために隣国以上の兵力を持っている。これじゃ侵略戦争を警戒されてもおかしくねえぞ……」

難しい顔をして話し合っていると、治療室の扉が開いて白衣の医師が出てきた。すぐさま2人はその医師の前に急ぐ。

「治療は上々です。ファイア殿の応急処置もあって余計な出血を抑える事もできました。意識は戻っていませんが、こればかりは待つしかありません。驚くべきは彼女自身の回復力でしょうか、我々は傷の縫合だけで、筋肉などに関しては彼女自身で治してしまったようですよ」

それを聞いた2人は安堵の大きなため息をついた。

ともあれ、エリカの命は救われたのだから。

だが、ジャックだけは心の中で首を傾げていた。

ジャックはエリカの能力を一度見ている。いかなる攻撃も通さない鎧でも纏っているのではないかと、いつも気になっていた。何しろ自分の攻撃を片手の手甲で受け止められているのだから。

だからこそ、今回の事が不思議でならない。

ジャックは、鎧の下に何か特別な服でも着ているのかと考えていた。まさしく未知の素材でできた鎧、お笑い種かもしれないが、そうでもない理由が付けられなかったのだ。

だが、今回の1件でそれは完全に否定された。

エリカの固有の技能のようなものだろうか？ という考えが頭をよぎる。意識的に、格納されているものを取り出すようなものなのだろうか。

それとも、ジーンの大剣の切れ味があまりに良すぎたためにそれすら無きに等しい結果となってしまったのか。

そして、人並み外れた回復力。

あれだけの大怪我をほんの数時間で自己治癒するなんて、いくら魔法が発展しているこの世の中でもあり得ないほどだ。人間離れなんて言葉が真っ先にジャックの頭に浮かんだ。

ジャックの疑問は尽きない。

「全く、今年は退屈しないな……」

執務室でヴァルトもまたため息をついていた。

たった今、医師からエリカの治療が終わったという報告を受け、ヴァルトは背もたれに身体を預けた。

「無事で何より、だけど、とんでもない事をやらかしてくれたわね、エリカ」

「全くだ。エオリアブルグからもブラゴシユワイクからも矢のような質問の催促だよ。まだ2時間経ってないにも関わらずだ」

バーバラはアレックスを連れてもはや定位置となったソファに腰かけている。そしてヴァルトのため息を面白そうに見ていた。

そのバーバラも、エリカの無事が知らされるまではいても立ってもいられず落ち着かない様子だった。友の無事が心配になるのは当たり前だろう。

「で、なんて返すつもりなの？」

「”現在調査中につき、一定の目途がいたら公表する”とでも言うか？」

「言わない、って言ってるようなものじゃない……。どちらにしても、内外問わずエリカを放っておくわけにはいかなかったわね」

「当面はお前に頼むぞ。もはや大会に出さないといい事も出来なくなってしまうた。あれだけ目立てば必ず反応する輩ばかりだからな。我々の国の周りは」

はあ、ともう一度ため息をつく、ヴァルトは筆を走らせ始めた。

「バーバラ、エリカの近くにいてやってくれ。いついかなる時も、決して目を離さないでくれ」

ヴァルトは短く「現在調査中」と書く、顔を上げ、バーバラに視線を向ける。

「了解……と、そうだ、結局試合はどうするの？ 決勝戦やり直し？」

「……いや、さすがにそうはいかんだろう。選抜するメンバーは君が決めてくれ。1カ月後の大会は予定通り行われるからな。細かい打ち合わせを頼んだぞ」

「はあ、やる事はたくさんあるみたいね」

バーバラは今さらながら引き受けるんじゃない、などと内心で思いつつも、親友の元へ向かうために立ち上がった。

「戒厳令は……無理よね」

「当たり前だ。人の口に戸は建てられん。エリカのことならなおさらだ。むしろ噂を一人歩きさせるのも1つの方法だろうな」

「牽制？ 言っておくけど、エリカを政治の駒にしようとするんだつたら陛下だろうがあなただろうが殺すからね？」

バーバラは、普段あまり見せない険しい表情を作った。ヒトの都合で動かされるエリカではないだろうが、見ている方もいい気分がない。

「むろん、私も陛下もそのつもりはない、と信じたいな。陛下は深慮遠謀、どう動くかはさすがに私でも分からん」

「馬鹿な真似をしないことを祈っているわ」

そう言い残すと、バーバラは部屋を出ていくことにした。

不思議と、斬られたという実感は湧いていなかった。

意識が朦朧もろろとしていた事も理由の1つだろう。あの非常時、エリカ自身の意識を失わせることが最も有効だったことは、エリカでも分かる。魔力に引っ張られて意識が混濁し、制御もできない状態の魔法を消滅させるには術者の意識を元に戻すか、失わせるかのどちらかだ。

あの時、前者を選ぶというのはまずあり得ないと、エリカは思っている。

実際、あの「火の卵」を出現させた時、エリカは今まで体験した事がないほどにまで意識を失いかけていた。睡魔に襲われて眠くなるなんて比較にならない。自分の意識がどこか遠くに吹き飛ばされていくような感覚だったのだ。

「命があっただけマシ、だったでしょうか……おや？」

ふと、自分の意識がある事に気づく。

だが、そこは自分がいるはずがない場所だ。あまりに見慣れすぎて、逆に自分がどこにいるのか分からなかったが、すぐにそこが「我が家」である事に気が付いた。

「……なぜここにいる？」

夢？

故郷を想うばかりに、意識を失って夢の世界で帰還しているのだろうか？

ふと、自分の身体に目をやる。

黒く鈍く光りを反射させる鱗、鋭く突き出た爪、エリカは龍の姿をしていた。

「けど、ヒトの言葉を……、やはり夢ですか」

身体は龍、言語はヒト、これほど夢だと確信できる証拠はないだろう。

辺りを見渡して、外へと通じる穴を見つける。あの日、自分が泣き叫びながら飛び出した穴だ。そこを進むと、自分の姿を見せつけられた水飲み場が姿を見せる。

何故か、覗き込む気になれなかった。

単純に、夢とはいえ同じ喪失感を味わいたくなかったただけなのかもしれない。所詮これは夢、深くは考えずにエリカは「我が家」を抜け出して広い空を見上げる。

何も変わらない。

あの日、あの時最後に見た光景と同じものがエリカの視界一杯に広がっていた。エリカの記憶で、最も愛おしいと思った光景だ。あの時ほど、自らの生きる世界を愛おしく感じた時は無かっただろう。大切なものは失って初めてその大切さに気が付くと言うが、まさし

くその通りだった。

背後の山に気配を感じた。

振り返る事もなく、その気配を理解し、少し笑みが零れる。龍の身で笑っているかどうかは問題ではない、ただ、嬉しかった。

「夢でも、会えて嬉しいですよ、父上」

振り返る。

いつもその背中を追いかけて暮らしていた、最愛の家族、その白い影が太陽を背に静かにエリカを見下ろしていた。太陽を背にしたその姿はまさしく神を想起させる光景、美しいその姿にエリカは目を奪われる。

「ふむ、どうせなら中間報告、でもしますか、どうせ夢なのですから……」

気がつけば、エリカはすでにヒトの姿に戻っていた。アクイラ騎士団の鎧を纏い、すっかり相棒になった刀を腰に差している。もう、どちらが本当の自分かも分からなくなってきた。どちらも自分で、どちらも他人のような気すらする。

ヒトの身体に精神が引っ張られているのだろうか、随分と人間臭い考え方をするようになったものだ。

「どうやら、あたしの身体はヒトが、故意に、この姿にしたものという可能性にたどり着きました。とはいえ、まだ可能性の段階、でも、何となくですけどそうなのだろうという気がしてなりません。

それが一番現実的なんでしょうね」

バーバラに初めてそう言われた時と違って、怒りはこみ上げてこなかった。ただ、ヒトに対する失望感だけが心に残る。

「ヒトは、自分のためなら他者をどうとも思わない、そんな印象すら感じましたよ……でも」

エリカはそこで一度言葉を切る。微動だにしない白龍の影を見つめ、一度大きく息を吸い込む。

「そんなヒトが全てじゃない事も知りました。いや、最初から知っていた事を再確認させられた、の方が良いかな？ 言葉にするのは難しいですね……」

せつかく、父親がいるというのに言いたいことが言葉に出来ない。

なんとか最適な言葉を見つけようとするが、考えるほどじっくり来る言葉が遠のいていく。

「……ああ、そうだ、魔法、使えましたよ」

そこまで考えて、ついさっき自分がやっていた事に考えが及んだ。エリカがそう言った瞬間、白龍の影がピクリと反応したような気がした。

「炎で出来たドラゴンなんて作り出して、意識持っていかれて、ズバッと斬られましたけどね……」

おそらく、現実世界で自分は重症なのだろう。だが、ここは夢の世

界、傷は一切ない。

そこまで聞いて初めて、白龍の影が大きく動きを見せた。

そして直接エリカの頭の中に語りかけてきた。

「ふふ、夢ならでは、ですね」

頭の中に響くのは、他でもない我が父、イクシオンの声。

「それでも、押さえ込もうとしたんですよ？ 止められなくて止めてもらう事になっちゃいましたけど」

少し、拗ねるような仕草をエリカがする。照れも入っているのが、少し面白くなさそうな顔をしてみせる。

「最上位……、あたしそんな魔法使ったんですか……」

夢だからなのだろうか。イクシオンはエリカが教えてもないことについて語っていた。自分が作り出したものについて改めてその大きさにエリカは感嘆してしまった。

「少しは、父上に近づけたでしょうか……、そこまで言わなくても……」

少し嬉しそうにエリカが言うと、それをイクシオンが両断する。

「まだまだ甘いですからね。でも、同じ過ちは繰り返しませんよ。次は成功させてみせます！」

現実の自分が置かれている状況なんて、脳の隅にもなかった。

ただ、イクシオンとの片時の再開に喜んでいた。

フワリと影が浮き、巨大な白い影がエリカの目の前に降り立つ。そして大きな翼でエリカを包み込むように抱きしめる。あの日、あの時、森の中でそうしていたように。

「不思議です、夢なのに、父上の温もりを感じているような気がします……」

夢心地、とはまさにこのことを言うのだろう。

だが、夢には終わりが来る。明けない夜が無いように。

エリカの世界が崩れ始める。

再び、闇が世界を覆おうとする。だが、別段怖くもなんともない。

これは夢。

エリカにとっては夢でもあるが、いつか来る現実でもある。再び家族と共に過ごす時、それは決して、夢ではないのだから。

?? 往^ゆけ、我が娘よ。そなたが往く道のあらゆる障害を薙ぎ払い、
己の信ずる道を、往け ??

随分と、心配をかけてしまったのだろうか。

エリカはそんなことを考えつつ、夢の世界から意識をかき消した。

「んあ?」

随分と間抜けな寝起きをしてしまったことに、後悔するのはまた別
のお話。

第31話 夢の中で"あり得ない"などあり得ない(後書

はいはい、どうも、作者のハモニカです。

書きたい事は前書きで書きましたのであんまりここで書くこともないんですが、まあ、やります。

とりあえず、ジーンは自分で言ったことを自分で破りましたね。いや、約束でもないから問題は無いんですがね。そして相変わらずエリカはフィアには敵わないようですね。

後半はエリカの夢の中のお話です。

もしかしたらいろいろ「うん?」ってなる事があるかもしれませんが、あくまで夢です。ここ重要。

夢なんですって!

信じて!

では!

ご感想などお待ちしております。

第32話 知らない天井（ry（前書き））

目が覚めての第一声はこれに限る……と思ったら主人公そんなことを言っていなかったでしたね……

ではでは どうぞ

第32話 知らない天井（ry

「エリカ！ 目が覚めたのか！」

「ジーン、さん……？」

目を開くと、目の前にジーン顔、エリカを挟んで逆にはフィア、奥にジャックが立っていた。どの顔もエリカを見てホツとしているような表情だ。

「え、えと、何がどうして、どうなったんです、か？」

何故か、ついさっきまでそのことについて完璧なほど記憶が残っていたような気がするのだが、魔法を使おうとしてから後の事がなかなか思い出せない。何か言った記憶もあるし、何かを見たような記憶もあるのだが、それが何なのかパツと出てこない。

エリカが3人の誰にでもなく尋ねると、全員が揃いに揃って言いづらそうな顔をする。特にジーンに関してはその反応が顕著だ。

「あ、あの……？」

「すまん！ 俺が自分の得物もしっかり把握できていなかったばかりに、エリカにこんな大怪我をさせてしまった！」

「ジ、ジーンさん！？」

そして突如、ジーンは椅子から立ち上がると頭を床につけて謝りだした。エリカは横になっている為、ベッドの影に隠れてジーンの様子を見失ってしまった。

慌てて起き上がるうと腹に力を入れた瞬間、頭にまで来る鋭い痛みがエリカを襲った。そこでようやく、エリカは自分の身に起きたことを思い出すことに成功した。

フィアの手を借りて上半身を起こして、なんとかジーンを視界に収める。そして自分が着ている服に目をやる。

いわゆる、病院服とか、患者服などと呼称されるものだ。

薄手で、簡単に脱いだり着たりすることが出来るようになってる。

エリカはその胸元を前に引っ張って、できた隙間から自分の身体を覗き込んだ。エリカの目が自分の身体に出来た長い傷痕を捉える。肩口から反対の腰の部分にまで伸びた傷が今回の事の全てを物語っていた。

「そっか、あたし、斬られたんでしたっけ……」

「っ！ すまん！ 謝って済む問題ではないが、俺の責任だ」

「ちょ、ジーンさん、落ち着いてください。これはジーンさんの責任なんかじゃありませんって！」

このままでは腹でも斬ろうかという勢いだったジーンを宥め、顔を上げさせる。ジーンは今にも泣きそうな顔をしていた。よくよく考えてみれば、ジーンはまだ18歳、いつもは穏やかな性格だが、こここういう事に関してはやはり感情が表に出してしまうのは致し方のない事なのだろう。

「あれは、あたしが馬鹿な魔法を使おうとしたから起こった事故なんです。ジーンさんのせいでも誰のせいでもありません。あたしが、

ちょっと馬鹿だったんです。それに、騎士は頭下げるな、って言ったのジーンさんじゃないですか」

「いや、それとこれとはわけが違うんじゃない……」

「エリカちゃん……」

16歳でこの落ち着きぶり、とても思っているのだろうか。フィアは目を見開いてエリカを見つめていた。

もちろん、それで済む話ではない事はエリカ自身が最も認識している。しかし、シルヴィアも言っていたように、これは試合中に負ったもの、斬った方に責任は無い、とエリカは考えている。それにあの時は非常時だったのもある。

(実際は年齢よせい600年ですけどね。ドラゴンの600歳ってヒトの何歳にあたるのでしょうか?)

「それはそうと嬢ちゃん、傷はどうなんだ? 医者が言うには1週間もすれば退院できるそうだが」

「ああ、傷自体は大丈夫ですけど、やっぱり痛みが残ってますね……。それくらいは激しい運動は出来そうにありません……」

そこで、ある事に気が付いた。

さすがのエリカも、今すぐにとか、一両日中に復活することが出来ないことぐらい、把握している。だが、それ以上の問題を思い出してしまったのだ。

「そんな……」

それに気が付いてしまった時、エリカは何もできない自分の無力さ

に涙した。

「ちょ、エリカちゃん!？」

「どうした、どこか痛むのか!？」

「嬢ちゃん!？」

三者三様の反応を見せてエリカを心配そうに覗き込むが、エリカは涙は収まらない。

「ジーン、医師を呼んで！」

「お、おう！」

「だ、大丈夫です!!！」

病室から飛び出そうとしたジーンをエリカが大声で制止する。ジーンがつんのめる様に止まってエリカに振り返る。

「痛いとか、そういうんじゃないんです。ただ……」

「ただ？」

「騎士団食堂のご飯が食べれないなんて……」

それは、エリカに対する死刑宣告に等しいものだった。

アクイラ騎士団の元に来て1週間ほどだが、食事という新たな趣味に目覚めたエリカはあらゆるメニューを言い方は悪いが、食い漁っている。

しかも、今日は選抜試合最終日とあって食堂のコックたちも力が入っているのか、豪華な夕飯が食べられると思っていたのだ。だが、この状態では食へに行くことも出来ない。エリカは血の涙を流さん

ばかりに悔しがっている。

「今日だけは、食堂へ行きたかったのに……」

「今日？ ああ、エリカちゃん、言いづらんだけど、あなたは3日も目を覚まさなかったのよ？ 今日選抜試合最終日から3日経ってるわ」

「そ、そんな……」

無理にでも食べる、という選択肢すらエリカには残されていなかった。すでに、時を逸していたのだ。

それを知ったエリカは今度こそ再起不能なまでに落ち込んでしまう。

「どうして、神はあたしを捨てたのですか？」

「そこまで!？」

イエス。

エリカは泣きながらも小さく頷く。

ヒトの身体になって、初めて美味しいものを食べる、食事を楽しいものと感じることが出来るようになった。それまでではまず考えられない事だ。生肉を喰らって川の水を飲んでいたのが、突如こんな場所に放り出されれば、それに魅了されてしまうのも当然と言えば当然だろう。

「お、落ち着け、嬢ちゃん。俺もここには随分とお世話になってるが、ここの飯は捨てたもんじゃねえぞ？ だからそう気を落とすなって」

「一度知った幸福は放したがないのですよ、生き物というものは

……」
「エリカ、しつかりしろ」

ジーンが慰めようと肩に優しく手を乗せる。

先ほどまで自分が泣きそうになりながら土下座していたのが、不謹慎ではあるが、馬鹿らしくなってしまった。エリカにしてみれば、ジーンは頼まれたことをやってくれた、そう映っているのだ。だから、エリカにジーンを責める気もそもそも他人のせいにする気もさらさらなかったのだ。

「何とか、こちらに食堂の料理を回して貰えないでしょうか……」

エリカは、ジーンを涙目で見上げる。

「っ……！」

それがいかに破壊力のあるものは、言わずもがな、と言ったところだろうか。

「駄目よ、エリカちゃん、一応医者のお卵としてその要求は聞かなかった事にするわ。今度空耳が聞こえたらこの病室が燃え上がるかもしれないわねえ」

呆れた表情をしていたファイアがエリカに向かって笑顔でそう言う。さっきまでの涙も一瞬で枯れたかのようにエリカは首を必死に縦に振りだした。

そのファイアの台詞を聞いて、ふと何かを思い出したのかジャックが人差し指を立ててエリカの寝ているベッドに近づいてきた。

「卵と言えば、ありやあ何だったんだ？ あんな特大の魔法なんて見たこともねえぞ？」

「エグゼ・リベラ過剰放出はただの魔力の暴発、暴発で形を成した魔力構造物が出来るなんて、聞いた事もないわね、その点は私も気になっていたのよ」

「エグゼ……え？」

聞き慣れない単語がファイアの口から出てきて、エリカは顔をしかめた。それに気が付いたファイアは姿勢を正して座りなおすと、エリカに説明を始めた。

エグゼ・リベラ
過剰放出。

読んで字の如く、魔力を想定以上に体外に放出してしまう現象を意味する言葉だ。

ヒトだけに起こる現象ではなく、魔力を体内に保有する生物全てに起こる可能性はある。だが、本来は起こりえない物でもある。エグゼ過剰放出・リベラなどすれば、肉体が体外へ放出されようとする魔力に引きちぎられて術者を殺してしまう。ヒトであれば、人体がそれを無意識のうちを防ごうとリミッターを身体に施すのだ。

ヒトの身で起こるとしたら、豊富な魔力量を持っているにも関わらず、制御の方法を知らないか、無い魔力を無理に引き出そうとして魔力の放出口とでも言うべきものが決壊するかのどちらかだと言われている。

エリカの場合、おそらく前者だろう。

だが、そもそも過剰放出は魔力の暴走であって、それ自体は何の効力も持たない。身体から猛烈と魔力が漏出すれば外部からもそれに反応を確認できるが、それは「魔法」にはならない。あくまで「魔力」なのだ。

その点、エリカは特異とも言える。

暴走した魔力がその膨大なエネルギーのまま放出されるのではなく、魔法となつて発現するなど、本来はあり得ない事象なのだ。しかも、その形も問題だ。

そして何より、生きていることが問題なのだ。

「エケゼ・リベラ過剰放出は身体を破壊するものなの。つまり、一度それが出たら最後、まず間違いなく死んでしまうのよ、普通はね」

「特異中の特異、なんてもんじゃねえな。不死身か、嬢ちゃん？」
「そんなわけないじゃないですか……」

不死身など、この世には存在しない。それはある意味、バーバラが証明している。物凄く死にくい、とか、物凄く長命、というのが正しいのだ。

（ただ、今回はその頑丈な身体に助けられましたか……）

龍としての自分が、身体の破壊を防いだのだろうか。エリカには到底知りえない事だが、それでも本来死んでいるようなところを生きているのだから、それだけでも運が良かったとしか考えられない。

「あのデカイ火球で怪我人も出なかったんだし、コロシム内に入らなくても、当事者の嬢ちゃんも生きていて、終わりよければ全て

「よし、としたいところなんだがなあ……」

「そうはいかんだろうな……」

ジーンとジャックが表情を曇らせる。

「それはどういう……?」

「ドラゴンスレイヤーの大会は国際交流でもあり、お互いの実力を見極める、という意味合いもあるの、まったくそんな考え方もしていない国もあるのだけれど。それは置いて、世界にはパワーバランスというものがあるの。軍事的な意味でも、政治的な意味でもね。ドラゴンスレイヤーはその国で実力に定評のある人間が属する、つまり、戦争にでもなれば前線に一番最初に派遣される部隊でもあるということよ」

言われてみれば、至極当然のことなのだろう。

ヒトの世の中は龍だけ相手に備えていけばよいものではないのだ。同族同士の戦争というものをエリカ自身何度も目にして来た。怨嗟、遺恨、憎悪、そんなものが全て合わさった醜い戦争をヒトは何度も繰り返してきた。

ドラゴンスレイヤーも、そんな時に龍だけ相手に戦う方法しか知りません、では済まされない。むしろ、実力があるのだから真つ先に白羽の矢が立つのだ。だからこそ、普段から対人戦の訓練を怠らないのだ。

「少数精鋭、一国の全兵力からしてみれば、アクイラ騎士団とさえどもその実動人員は中の下、でもいざとなったら全軍の先鋒をやるような部隊なの。そんな所に、強大な魔力を持つ人間が現れたら、他国が反応しないわけないでしょう?」

ヴァルトたちが懸念していたことの1つ、いや現在進行形で問題になってきていることだ。各国は大会に向けて自国内で選抜試合をしている。これは内外に知れ渡っていることであり、もちろんエオリアブルグや、ブラゴシユワイクも同様な事をやっている。そして、アールドールン王国の「その筋の人物」が非公式に訪問しているのも事実なのだ。その逆も当然ある。」

「大会を前に、エリカは各国の関係者から目を付けられちゃったわよ、きつと。そして、それを快く思わない連中の方が、世の中は多いのよ」

「全く、嘆かわしい限りだよ」

他国からしてみれば、大きな脅威がお隣の国に現れたようなものなのだ。当事者であるエリカにはその感覚は分からないが、きつと自分が彼らであっても、恐怖するだろうことは察しがつく。

「気を付けなさい、エリカちゃん。大会まで1か月あるけど、接触してくる可能性は大いにあるわ。正式な物は団長に行くから大丈夫だろうけど、世の中そんなに甘くもないし……」

「その点は安心してもらって構わないわよ、ファイア」

それまでそこにいなかったはずの人物の声が病室に響いた。

声の元を探して視線を巡らせれば、窓の縁で肘を立てているバーバラの姿があった。肩にアレックスの顔がある事から、アレックスを背負っているようだ。

「ちよ、バーバラさん、ここ2階ですよ!？」

「細かい事は気にしないの」

窓から軽やかに病室に降り立つと、背負われていたアレックスがスルリと床に降りてくる。バーバラはそれを待って腕を組むとその場にいた4人に向かってうつすらと笑顔を覗かせた。

「とりあえず、エリカが病室こむにいる間はアレックスが護衛役になるわ。エリカ、アレックスは適当に使い潰しても構わないわよ」
「良い事聞きましたね……」

その場の全員が四六時中アレックスをモフモフしているエリカの姿を思い浮かべただろう。

「退院後もなるべく城の内外問わず単独行動は慎んでね。あなたたちもなるべくエリカの事を気にかけてあげて」

「……もちろんだ（よ）」「」

「ああ、それと……」

言いたいことを言い終わったのだろうか、退室しようとしたところで足を止めて振り返った。因みに退室しようと歩き出した方向は廊下へ通じる扉ではなく空が見える窓の方向である。

「大会メンバーは、私とジャック、ジーン、シルヴィア、そしてエリカで行くからそのつもりでいてね。さっきここに来る行きがけにシルヴィアには伝えておいたわ。それとフィア、騎士団の医療チームのリーダーをまた頼むわね。あなたぐらいしかいないし」

それだけ言うとバーバラは窓から飛び去る様に消えていった。あえ

てその後ろ姿を追いかけるような無粋な輩も、その時病室にはいなかった。

アレックスはエリカのベッドの脇で丸くなっている。その頭にエリカの手が伸びていることはしっかりと書いておく。

「まあ、妥当ラインだろうな。マルコフは誰かさんのおかげで半月は静養、調整は間に合わんだろうしな」

「う……」

「それを言うなら、ジャックも初戦の相手とか、瞬殺していたじゃないか」

「……見てなかった奴が何を言いやがる」

「ぐ……」

ジャックの思わぬ攻撃で閉口するエリカとジャック。ファイアも2つ目の件に関しては何も言えないためか苦笑いだけを漏らして何も口に出さない。

「先鋒嬢ちゃん、次鋒ジーン、中堅シルヴィア、副将俺、大将バーバラが順当なんだろうがバーバラが大将になるか分からないとか言っていたしな……」

「あ、あの……」

ジャックがブツブツと考えながら呟いていると、心底申し訳なさそうなエリカの声が3人の耳に入った。

「どうした、エリカ」

「そ、その……、大会大会、って言ってるんですけど、未だに正式名称とか、ルールとかを知らないんですけど……」

「あ……」

物凄く「しまった」という表情をしてみせたのはジーンだ。

「ジーン、あなたまさかまだ説明してなかったの？ てつきり王国に戻ってくる道中で説明していたのかと思っていたけれど？」

「い、いや、あの時はまさかエリカが字が読めないとは知らなかったから紙を読めば大体飲みこんでくれるだろうと思っただけなんです。すまん、エリカ、俺の説明不足だった」

「それじゃあ、教えてもらえませんか？」

「もちろんだとも」

説明を始めたのはジーンだったが、結局フィアとジャックの補足も必要となり、全ての説明が終わるのには数時間を要し、全ての説明が終わった頃には上にあつた太陽が窓から覗く位置まで傾いていた。

<私を忘れてないだろうか……>

1頭の軍狼がそんな事を呟くが、幸い、エリカの手はずっと彼の頭の上にあった。

第32話 知らない天井（ry（後書き））

うあゝ、ヤバい。

うちの主人公がどこの腹ペコ王みたいになりそうな予感……。

ま、いつか

ではでは、ご感想などお待ちしております！

第33話 敵は本能寺（身内）にあり（前書き）

うう、昨日更新しなかったのに……

飲み会の翌日だったせいか、眠くて眠くて……小説書く気力すら起こりませんでしたよ…

ではでは、どつぞ

第33話 敵は本能寺（身内）にあり

大陸統合軍事大会。

この名もない大陸に存在する全ての王国、帝国、共和国が参加して行う「平和の式典」だ。これが出来たからこそ、今現在この大陸において戦争は無い、とまで言われるほどでもある。それも遙か昔の先人たちが考え出したというのだから、先人たちの遠謀は計り知れない。

戦争が無い、というのは全ての国家が武力を保有していないという意味ではない。お互いがほぼ同程度の戦力を有し、戦争による利益よりも不利益が上回ると考えているからこそ、戦争が起こっていないだけである。

そして、それを知らしめるための方法が、大陸統合軍事大会なのであった。

お互いを知る事で戦争をする気を起こさないような枠組みを作る、というのが本来の目的だそうだが、それも1000年は昔に考え出された理論だという。

1000年で時代は大きく変わった。

ヒトの敵は同族から龍へと転移していった。そしてこの大会も本来の目的から、お互いの技術向上、敵ではなく、同じ敵と向き合う仲

間としての信頼を築くものへと変わっていった。

それが現在、「大会」と呼ばれているものだ。

共通の敵を得た事で人々が一致団結した、というエリカからしてみれば何とも皮肉めいた話であったが、少なくとも表面化した、露骨な国同士の争いは鳴りを潜めた。

現在では、「大陸統合軍事大会」という長つたらしい名称も、単に「大会」と呼称されることが多くなり、正式名称は書面にでもされない限りは人の目にもつかないほど。大昔のこととはいえ、やはりこの名称には何かしらの抵抗があった、という考えもある。

また、龍へと敵が移った事によつて龍に対して直接的な脅威を感じない、言ってみれば龍の森に隣接しない国家は関係者だけの出席に留まる様にもなった。そのような国家からしてみれば、龍が戦争でも起こすものなら真つ先に狙われる近隣の国家が襲われている間に軍備を整える、という腹積もりなのだろう。

だからこそ、アールドールンなど3カ国の戦力は把握しておきたいということだ。

と言つても、大会が現在の体系に移り変わつてからは、3カ国ともドラゴンスレイヤーのみを出場させることで合意している。巨大な敵相手に挑むからには、集団だけではなく、個人としても卓越した技術を持っていることが必須である。

少なくともアールドールン、エオリアブルグはそう考えている。ブラゴシユワイクに関しては割愛する。

人対人が基本となるこの大会では、その存在意義すら今では疑問視されることもあるそうだ。本来の敵が龍なのだから、その疑問は当然なのだろう。

だが、大会の目的は龍と戦う技術をお互いに共有し、信頼関係を築き、本来の敵と戦うことになった時には共に背中を預けあえるようになることである。

決して、龍と模擬戦でもしようというものではない。

兎にも角にも、ドラゴンスレイヤーたちが自分たちの技術をぶつけ合い、親睦を深める、というのが存在意義だ。それに関しては誰も異を唱えようとはしないだろう。

自国の力を無条件で曝け出していると、反対するものも多いが、そういう事は言い出すのが1000年ほど遅い。

すでに固有の文化にすらなっているのだ。

大会の開催国は1回毎に変わるが、他国からも多くの来賓、観客が来るため、それなりに経済効果も起こす。年に数回行われているが、龍への危機感もあってその注目度は下がる気配を見せない。むしろ龍と戦うことになる騎士を間近で見ることによって自分たちも敵を再認識しているようだ。

敵の敵は味方、とは言ったものだ。

まさしく、ヒトが表向きには手を取り合ったと言えるだろう。

大会の裏に各国の思惑がある事は除いて

。

「ふあ……暇です」

< 開口一番それか？ >

絶対安静。

エリカの事を思つてのこの宣告も、エリカにとってはただの足枷あしかせにしかならない。傷自体は腕の良い医師によつてほとんど傷もなく塞がっている。縫合に際して使われたという糸を抜くと、そもそも傷があつたのかというほど綺麗に傷跡も消えている。目を凝らせばうっすらとエリカの身体を斜めに走る筋が見えるかもしれないが、肌を晒す機会でもない限りはほぼ問題ないだろう。

とはいえ、その驚異的な治癒力のおかげで医師たちの頭の上に疑問符を浮かべさせてしまったのは、居心地が悪かった。

エリカは龍としての特異性を幾つかヒトの身体になっても受け継いでいる。黒鱗や、目、髪の色はすぐに分かったが、この治癒力ばかりは怪我でもしないと分からないものだ。

吸血鬼の不老ほどではないが、龍も十分すぎるほどの長命。それに見合った再生能力を龍は保持しているのだ。

とはいえ、失った血まで再生できるものではない。エリカは一度に大量の血を失っていたために、あわや出血多量で命を落とすところであった、とすら医師に告げられていた。その点では、即座に止血を行ったファイアの功劳が大きい。改めてエリカはファイアに感謝した。

エリカが目を覚めたのは4日前、選抜試合決勝からすでに1週間が経過している。

エリカが寝かされている病室は騎士団の宿舎ではなく、城の中にある大きな傷病者用の区画だ。龍の森が目と鼻の先にあるこの王国では、大きな町には必ず設備の整った病院があるそうだ。

龍だけでなく、隣国との戦争時も、病院が多いに越したことはない。それは、この首都においても例外ではないし、むしろその中心的存在でもある。

普通のヒトであれば、重体以上の大怪我をしたが為に、医師たちは1週間は絶対安静と通告した。

ところが、エリカは医師の通告ははるかに上回る勢いで回復した。そのためか今度はエリカの身体について調べたいと言い出す輩が現れ、結局1週間が経った今もエリカは退院に至っていない。

もちろん、身体を調べようなんて言う怪しい輩にエリカが首を縦に振るわけもなく、また強引にでもやるうものならアレックスに脛をかじられ、エリカに強烈な頭突きを喰らう事になる。

アレックスは、普段は起きているのか寝ているのかも分からないくらい動かないのだが、実は周囲にずっと意識を巡らせている。おかげでエリカは自分の感覚では誰かが来ていること程度しか分からないところをアレックスの敏感な感覚器官によって「誰か」来るのかまで把握することが出来る。

「動かない事がここまでもどかしいものとは思いませんでした」

<正直、もう歩けるのだろう？>

「というか、ここにいる意味がないくらい回復してるんですけど…」

1日のほとんどをこのベッドで過ごす羽目になり、エリカは少しばかり物足りなさを感じている。動きたくても、^{ひとけ}人気の多いこの区画では、廊下は看護師や医師が必ず視界に入るほどである。患者服を着ているエリカを見つけようものなら患者に対する対応とは思えないくらい強引に病室に連れ戻されてしまう。

さすがに鍵こそかけられていないが、診察という名の監視が厳しくなったことは確かだ。1時間単位で誰かしらが顔を覗かせるほどだ。

「1週間、ですよ？ 1週間も美味しい食堂の料理が食べられないのがどれほど辛い事か、アレックスには分からないでしょうが…」
<む、何やら侮辱されたような気がするのだが…。言っておくが私はそれなりに料理にはうるさいぞ？ やはり肉は生に限る>
「はいはい、あなたに聞いたあたしが馬鹿でした」

などと言いつつも、もはや習慣、いや中毒になったようにエリカはアレックスの頭を撫でる。

目が覚めた日にアレックスを抱いてモフモフしていたところを看護師に見つかってからは、ベッドの上に乗せないよう厳しく言われている。それに、抱き付いた際に、いつもと違って随分とアレックスが抵抗していたので、エリカも頭を撫でるだけに止めている。

<あんな服のはだけた状態で抱き付かれては敵わん……>

診察用に胸元が随分と覗く服、前を止めているのは1カ所の結び目だけの状態、そんな状態で抱き付かれてはさすがのアレックスも逃げたくなるようだ。

<今『お前は犬だろう』って思った奴、私は狼だ>

「誰に話しているんですか、アレックス？」

独り言を呟いていたアレックスの顔をエリカが覗き込む。

そこで、現在の状況を思い返してほしい。

現在、エリカはベッドの上、アレックスはベッドの脇。エリカがベッドの端に横になって手をダランと垂らした状態で丁度腰を下ろしているアレックスの頭に手が当たるくらいの高低差がある。

その状況でエリカがアレックスの顔を覗き込む、という事はベッドから上半身を逆さにするような体勢になるということだ。すると、重力の法則に従って服が少しばかり下がって

<たわらばっ！！！>

「アレックス!？」

アレックスは慌てて飛び上がると壁と向き合う様に顔をエリカから背けた。

「いきなり、何なんですか? ……も、もしや、あたしの事嫌いになっちゃいました?」

<そういう訳ではないんだがな……、その、私も男だ>

「え? オスでしょう?」

<……はあ>

実は、こんなやり取りは今日に始まった事ではない。診断の時は躊躇いなく服を脱ぐし、医師や看護師は時間がかからなくて楽だと言っているが、言っているのもちろん女性だ。万が一にも男性が診察に来ようものならエリカが視界に捉える前に女性医師たちによって排除されているそうだ。

お堅い騎士ならまずありえないことだが、幸か不幸かアクイラ騎士団は両方がどっこいどっこの勢力である。エリカは知らないことだが、すでに騎士団内でのエリカの注目度は計り知れないものになっており、見舞いと称してやって来る連中も少なくない。

大概が真面目な騎士たちなのだが、退院後の食事に誘おうなどという騎士も稀にいる。主にダニエルやゲイリーなのだが。

誰の事が分からない?

ならばエリカとジーンにやられたモブだと思いついてもらえれば良い。

ともかく、エリカには一般に羞恥心と呼ばれる感情がかなり抜けている。いや、異性が見ていないからそうなのである。アレックスとしては自分がオスであって男ではない、と言われているように少し傷つくところだ。

<ときにエリカ殿>

「はい？」

気を取り直したのかアレックスはエリカに向き直る。

<これからどうするのだ？>

「……………どうする、とは？」

アレックスの言葉にエリカの顔から感情が薄れる。

<すでにエリカ殿は各国から目を付けられてしまったと考えるのが妥当だ。そんな状態が長く続けば、いつかボロが出るというものだが>

「……………確かに、今のあたしならボロを出してもおかしくありませんね」

エリカの顔に自嘲の笑みが浮かぶ。今の自分がどれほど「おっちょこちよい」になっているかは、自分が一番分かっている。

たかだか数週間の間に、どれほどそういう意味での危機に見舞われた事か。後先考えずにやらかすことも多かった。いや、ヒトの常識が自分と大きく違っていることに気が付くのが些か遅かったようだ。

「でも、もう良いんです」

<うん？ 自分からばらすとでも？>

「まさか、そこまであたしは愚かじゃないですよ。考え方を変えた

んです。ばれるのを恐れていたら、何もできない。なら、自分が出来る事を存分に使ってあたし自身の望みを叶えてさっさとオサラバしよう、って」

<……ここにはいたくないか？>

アレックスの問いに、少しだけエリカの表情が曇る。

「居たくない、と言うと嘘になるよ。本当にわずかな間しか接していないのに、100年連れ添ったみたいな信頼が生まれてる。あたしの周りの人、いえドラゴンは『ヒトは野蛮』と言うけど、それ以外の一面もある。あたしはジーンさんやフィアさんたちにその一面を見たと思ってる。そして何より、今のあたしを手放したくないとも思ってる」

<決めるのは自分自身。戻る手段に関してはご主人や団長殿が突き止めるだろう。その時、エリカ殿、あなたはどうする？>

「分からない。戻りたいという思いも、失いたくないという思いもある。けど、誰にも打ち明けるわけにはいかない」

<私にはその苦しみは分からない。私はヒトに打ち明ける事すらできないからな、ご主人を除いてな。あなたの正体を知っている者に、少しでもその思いを打ち明けるのも良いのではないか？ ご主人ならまず相談に乗ってくれるだろう>

エリカは、いつもの冷静な彼女ではない。以前にもバーバラとアレックスにだけ見せた、1人の少女としてそこにいた。

「不思議です。やる事が無いと、そんな事ばかりが頭に浮かびます」
<ならば、騎士団に戻るか？ ひたすらに刀を振れば、ひと時の無心に浸れる>

「……それが一番いいです。いい加減ここにも飽きてきましたし。何より、一言物申したい相手がいるので」

騎士団の単語が出た瞬間、エリカの背中から黒いオーラが出たようにアレックスは感じた。恐る恐るエリカの顔を覗き込めば、口角を吊り上げて不気味な笑みを浮かべているエリカの顔があった。

「ふ、ふふふ、嘘は万死に値します……」

騎士団の彼に危機が迫る！

「っ!?!?」

騎士団の食堂で1人の男が身震いした。

「おい、どうした、ジャック?」

「い、いや、殺気を感じたんだが…」

身震いしたのは大男でもあるジャックだ。飯を共にしていたジーンが飛び上がりかけてテーブルに足をぶつけたジャックに笑いをかみ殺しながら話しかける。

「殺気つて、こんな場所で誰がお前を殺そうなんて考えるんだよ」

「心当たりが多すぎて分からねえぜ……」

「おい……」

そう言うジーンも、苦笑いが顔から離れない。

このジャックと言う男、とにかく戦い好き。それが高じているんな所で喧嘩を買っている。恨まれる記憶はそこかしこに転がっているのだろう。

「あれじゃないか？ エオリアブルグに行く前城下町で女性引つかけてた男ども伸しただろう？」

「ああ、あれか。いや、あん時は俺名乗ってないはずなんだが……」

「お前は顔パスで大体城下町通ってるだろうが」

「あ」

ジャックが間の抜けた顔をする。そして「しまったあ」と顔に書いてあるような表情をして後頭部を搔く。

「町ではちょっとした保安官、騎士団では屈指の強者。名乗らなくても顔出せば名乗ってるようなもんだぞ」

「抜かったなあ。あっちが全面的に悪いから恨まれても気にしないんだが、このままじゃ俺が神格化されちまうぜ」

「……大きく出たな」

「いや、英雄で止めておこう。俺が超ッ絶神兵なのは今に始まった事じゃねえからな」

ガハハツと笑うジャックに、ジーンは呆れてため息も出ない。

「……それはそうと、あの事、いつ話そうか」

「うん？ ああ、嬢ちゃんの刀の事か。退院してからでいいんじゃないか？ 一応あの区画は武器持ち込み不可だしな。鍛冶屋の方はどうなんだ？」

先ほどまでの笑いをどこかに押しやったジャックは冷えたビールを口に流し込む。喉を鳴らしながらジョッキ半分ほどの液体がジャックの胃へと流れ込んでいく。

「現物を見ないと詳しい事は言えないと言われたよ。だが、最低でも20日はかかるそうだ」

「結構ギリギリだな」

「だから、早いところエリカに話したいんだが、言うタイミングを逸して」

小さくため息をつく、ジーンは背もたれに寄りかかって食堂の天井を見上げる。

「あんな小さな身体であんな風に戦ってたんだ。ガタが来ててもおかしくないところだったが、案外タイミングとしては良かったんじゃないか？ 大会直前よりかはよっぽどマシだ」

「それはそうなんだが……、考えても仕方がないか。明日エリカに会いに行くよ。その時話そう」

「お、じゃあ俺もついて行こう」

虫が自ら火に飛び込もうとしている。

第33話 敵は本能寺（身内）にあり（後書き）

はいはい、なんかアレックスが羨ましいとか思った方、いないと思います。と言うか信じたい……とりあえず、アレックスは気苦労という代償を払って役得してるのかもしれないね。

言っておきませんが、そういう意味で男衆が役得することはあんまり無いと思います。事故るか、無意識はあるでしょうがね。

そういう事を上手く表現できるか自信のないハモニカは書くかどうかかわかりませんがね…。

ご感想などお待ちしております

第34話 食い物の恨み!? (前書き)

途中、我が主人公が大演説(そこまで長くはないですが)します。

意図的に改行してませんので、読みにくかったら申し訳ありません。

そして主人公がどこぞのアニキになります。

イイイイイイヤツホオオウウウウウウウツ!!!!!!

第34話 食い物の恨み!?

「お世話になりました」

エリカは丁寧にそう言うと、新調された真新しい騎士団服に袖を通す。

試合でジーンによって一刀両断よろしくぶった切られた鎧は使い物にならず、下に着ていた騎士団服もバツサリ斬られた上、血で赤黒くなってしまっていた。そのためエリカには新しい団服が用意されていた。

「本当は後1週間ほどいてもらいたいんだがねえ」

退院を見届けるためにやって来ていた男性の医師は、駄目でもともとそんなことを呟くが、エリカがそれを両断する。

「ここにいると身体が鈍ってしまいます。そもそも昨日で退院できると言ったのはほかでもないあなたですが？」

「それはそうなんだがなあ。はあ、分かった、私の負けだ」

両手を上げて降参のポーズをする医師。

「では、2度とこの世話にならないようにしてくれよ。仲間が傷つくのを見るのは大嫌いでね」

「仕事なくなりますよ?」

「ふふ、ならお医者さんごっつべら!」

「はい、エリカさん、この馬鹿者の話は聞かないで良いですよ」
何かを言おうとした医師の顔面に強烈な一撃が入った。薄い板、カ
ルテか何かを乗せるのに使っている物が、見事に医師の顔にめり込
んでいる。

よくエリカの看護をしていた女性看護師が物凄く良い笑顔で「これ
から起こる惨劇を見せたくないからさっさと失せる」と顔で言うも
のだから、エリカもアレックスを連れてそそくさとその場を後にす
ることにした。

ちなみに、その男性医師はその後女性看護師たちによって磔獄門はりつけに
処されて改心したという。

<どこへ行くつもりだ？>

「もちろん、騎士団の宿舎ですよ。ふふふ、ようやくこの時が来た
……」

物騒な言葉を呟きつつも、外面は非常に穏やかな表情をしている。
だがそれがむしろ不気味さを助長している。

<……まあ、ほどほどにな？>

「すみません、あたし加減知らないんです」

<あなたが言うところ洒落にならんのだが……>

「洒落を言っているつもりはありませんよ」

手を身体の前で開いたり閉じたりして、久々に動かす身体を温める。

「あ、そういえばあの試合の後、あたしの刀ってどうなったんです
か？」

そこでようやく、いつもあるはずの重みが腰にない事に気が付いた。病棟は武器の持ち込みが禁止されているので、てっきり退院の時に返されるかと思っていたのだが、その気配もなかった。という事は騎士団の誰かしらがあのだ試合の後保管してくれている、と考えるのが妥当だろう。

<私は知らんな。あの時試合を見てなかったのにな。それこそ、ジョン殿やジャック殿が知っていることだろう>

「そうですね……、なら話を聞くだけの時間くらいは与えないと……」

<いい加減、落ち着いてくれんか？>

「え？ あたしは至極冷静沈着ですよ？ 冷静に、獲物をどう調理するべきか考えているんです」

<……はあ>

相も変わらずアレックスの気苦労は絶えない。

ヒトならストレス性の胃炎でも起こそうところだ。犬が胃炎になるかどうかは置いておくとして。

<だから、私は狼だ>

もう、どうでもよくな？

「見つけた……」

< エリカ殿、顔が怖いぞ >

宿舎に戻る途中、前方から歩いてくる人影に気が付いて物陰に隠れて様子を見てみると、飛んで火にいる夏の虫よろしくジャックとジーンが現れた。

一応、ジーンには恨みもないエリカはジャックだけに照準を絞って2人の動きを見つめる。

「刀が無いのが残念ですが……、おや」

2人を見ていると、ジーンが右手に何か細長いものを持っていることに気が付いた。そしてそれがエリカの相棒である刀である事を認識するのにさほど時間はかからなかった。

「持ってきてくれたんですか、ジーンさんは本当にいい人です」

< ジャック殿は……? >

「嘘つきの大罪人です！」

「ん？ その声はエリカか？」

エリカはつい大声を上げてしまった。そして丁度目の前を通り過ぎようとしていた2人にももの見事に気づかれてしまった。これでは待ち伏せもへつたくれもない。

「くっ、気づかれたからには致し方ないです。ジャックさん、覚悟
! !」

「はあっ!? ちょ、待て嬢ちゃん! 意味が分からんぞ! ! !」
物陰から飛び出したエリカは勢いよくジャックに殴りかかった。訳も分からないジャックはエリカを落ち着かせようとしたが、エリカは1週間分の恨みを拳に込めてジャックの鳩尾に送り込んだ。

「ほげえっ! ! ?」

まったくの無防備状態であったジャックは情けない声を上げながら吹き飛んでいき、地面を転がって宿舎前でようやく止まった。ジーンが慌ててジャックに駆け寄るのを脇目に、エリカはジャックの目の前に仁王立ちした。

「ど、どういっつもりだ、嬢ちゃん?」

「ほお、心当たりがない、と申しますか」

「エ、エリカ、とりあえず落ち着いてくれ。何が何だかさっぱりな
んだが」

「ジーンさん、少し黙っててください」

ジャックを抱き起そうとしていたジーンの口を一言で封じると、エリカはジャックに視線を戻した。

「1週間前、ジャックさん、あたしに言いましたよね」

「な、なに?」

「『この飯も捨てたもんじゃない』と」

そう、エリカが怒り心頭なのはこの事なのだ。

「あ、ああ、言ったな。それがどうしたんだ？」

「これでも気づかないのですか？ 終いには泣きますよ!？」

眉間にしわを寄せ、幻滅した、という表情をする。

だが、相変わらずジャックは事の次第を理解できていない。首を捻りながら、なんとか心当たりを見つけようと脳内を駆けずり回っているようなのだが、この様子では答えが出てくる気配はない。

「あれのどこが『捨てたもんじゃない』んですか!！」

「……はあ？」

そして、エリカは大きく息を吸い込む。

「ジャックさん、あなたは何を見て、何を感じて、何を食べてあんな事を言えたんですか!？ あたしにはあれを食事と呼べるあなたの神経が信じられません。え？ あなた馬鹿ですか？ 馬鹿なんですか？ 火が通ってればなんでもいいんですか？ そういうレベルの話をしているんですか？ 否！ あたしは健康的な食事、確かに良い事だと思います。ですけど、あたしはすでに健康なんです。『健康になる』食事じゃなくて『健康を維持しつつ美味しい思いが出来る』食事を所望しているんです！ あんな食べると言うよりは流し込むという表現が正しいドロツドロの液体を強引に流し込まれて、さすがに3日も経てば普通の食事に変わりましたけど、あんな少ない量であたしが満足するとも？ そもそもあんなにさっぱりしてしまっただけは味なんて無いも同然、確かに負傷したヒトには丁度

良い、よく考えられた献立なのでしょうが、自分の事は自分が一番分かってます。以前と同じ量食べてもなんともないって事を何度も担当医に言ったのに全然相手にしてくれなかったし。正直飢え死にするかと思っただけですよ？ ひもじい思いをして何度アレックスに目が行った事か……。病院食なんて、あんなもの、情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ、そして何よりも……。量が足りないんですよ……！」

エリカが一息に言い切ると、ビシッとという効果音と共にジャックに指を向けた。

「ハア、ハア、ハア、分かりましたか？ あなたがどれほどの大罪を犯したか……！」

「す、すまん途中が聞き取れんもゴッ!?」

「分かったから！ とにかくその怒りの矛を収めてくれ!!」

ジャックが火に油どころか石油タンカーでも突っ込ませようかという爆弾を落とそうとしたのをジーンは必死になってジャックの口を封じることで回避し、なんとかこの場を収めようとする。

エリカの視界の端でアレックスがビクツと跳ねていたことは、今は何も言わないでおこう。

「その罪は、万死に値します!」

「だから、落ち着いてくれって!」

エリカの怒りはジーンの説得では到底鎮火出来るものではないものだった。握った拳を震わせながら2人に一步步近づく。

「ジーンさん、ジャックさんを渡してください。あなたには何の関

係ありませんから」

「だから俺の話を聞けっどわっ!?!」

エリカとジャックの間に入ってエリカを止めようとしたジーンをエリカは吹き飛ばした。手加減して怪我が無いように、最小限の力でジャック怨敵までの道を開く。

「ちょ、嬢ちゃん、とりあえず話をしようぜ? どうやらお互いに何か誤解があるようだ。それについてまずはしっかりと説明をさせていたきたい」

全てにおいて自分の何が悪いのか未だに理解出来ていないジャックだが、自分の身に生命の危機が迫っていることは否が応でも分かる。だから、どうにか話し合いで解決しようとする。だが、エリカはジャックに釈明の機会を与えるつもりはなかった。

「ふふふ、ジャックさん、あたしがファイアさんから受けた地獄、あなたも受けてみますか?」

「丁重にお断りする!」

「……………何をしているのかしら?」

エリカが今まさに不敵な笑みを伴ってジャックに歩み寄ろうとした時、エリカの背後から絶対零度の声が響いてきた。

エリカの肩がビクツと跳ねて、首を金属が軋むような音と共に後ろへと回すと、案の定、そこにはファイアが立っていた。手には果物が入ったバスケットを持って見ると、エリカの退院祝いとして持っていてこうとされていたのだろう。

「エリカちゃん、病み上がりのあなたが何をしているのかしら？」

ファイアの声には一切の抑揚がない。表情も笑みを湛えているが、どう見ても目が笑っていない。それどころか、エリカはこれ以上にならない生命の危機を感じていた。

「あ、あの、ファイア、さん……？」

それまでのジャックへの殺気もどこへやら、エリカの表情がどんどん恐怖の色へと変わっていく。その隙にジーンはジャックを担ぎ起こしてファイアとエリカの間辺りに入る。

「2人とも、落ち着いてくれ。ファイア、これは些細な行き違いから端を発した他愛もない事故なんだ」

「確かに私は医者じゃないけど、病み上がりのあなたが暴れるのを私は医者としての無視することが出来ないわ。エリカちゃん、覚悟は出来てるわよね？」

ファイアはジーンの声など一切耳に入れる気はないようだ。ジーンが話している時も、一度もジーンに視線を向けなかった。

「散々心配をかけさせて、退院だって聞いて来てみれば、ジャックと遊んでるし……、一度キツく言い聞かせないとダメなのかしら？」

「す、すいませんでしたあああ!!」

これぞまさしくジャンピング土下座。

今にも泣きそうな顔でエリカはフィアの前で土下座をした。そして何やら小声で「ごめんなさい」と連呼している。それをフィアは感情のない顔で見ている。

「ジーン、俺たちは生きていられるのか？」

「聞くな」

男2人が形としては抱き合うようにその光景を凝視していた。以前にもエリカがフィアにたたき起こされる光景を見ているだけに、エリカにとってフィアが絶対的な存在になりつつある事は確かなようだ。と言うよりはトラウマになっているのかもしれない。

と、そこでようやくフィアが普段の表情に戻った。そして土下座をして顔を上げないエリカの前でひざを曲げると、エリカの顔を上げさせてそのままエリカを抱きしめた。

「ふえっ？」

訳が分からず、てっきり制裁が来るとばかり思っていたエリカは情けない声を上げる。

「全く、心配かけて……。このバカ娘」

「ひ、酷いです……」

フィアは純粹にエリカを心配していた。これに関しては、あの場で

すぐに治療が出来なかったという自責の念も重なっているのだろう。エリカが元気そうに暴れている姿を見て、嬉しさ半分呆れ半分であったのだ。

(親子か……)

言ったら絶対に2人の矛先が向くと分かっているのに、ジャックもあえてそれを口にしようとは思っていない。さすがにそこまで馬鹿ではない。

「とりあえず、退院おめでとう。いろいろ話さなきゃいけない事もあるから食堂行くわよ」

「は、はい」

「あ、そうだ、俺たちもエリカに用があつて来たんだつた」

あまりの異常事態に、完全に本来の目的を失念していたジーンが思い出したようにエリカに駆け寄るとその手に持っていた刀をエリカの前に差し出した。

「すまん、あの試合の後見つけたんだが、エリカ自身の魔力に中^あてられてしまったようだ」

エリカはジーンにそう言われながら刀を受け取り、その場で鞘から抜いた。

だが、刀はエリカが知っているそれとははるかにかけ離れていた。

刃こぼれ、などと言うレベルの話ではない。刃全体が腐食したかのようにボロボロになっており、太陽を反射されて煌びやかに輝いていたその刀身にも、そのころの輝きはなかった。目釘が外れかかっ

ているのか柄つかを持って刀身を摘まむとグラリと揺れる。そして

ポキッ

「「「「あ」「」「」

何とも力ない音と共にエリカが摘まんでいた部分を境に刀身が折れてしまった。

そして切っ先が下になって地面に突き刺さる。

「これは、もう使い物にならん……と言っ訳でこれに関する相談もあるんだ」

「直ります?」

「そのことで少し説明がいるからな。長話になりそうだし食堂へ向かおう」

折れた刀身を慎重に地面から抜くと、ジーンは持つてきていた布を刀身に巻き付けて怪我をしないようにする。エリカは半分ほどの長さになってしまった刀を大切そうに鞘に戻すと、右手に持つ。

<魔力に中てられて刀身が腐敗するとは……>

アレックスは感心半分、恐怖半分といった面持ちでエリカの横を歩くことにした。

「さてと、何から話せばいいかしら……」

食堂は中途半端な時間という事もあって閑散としていた。食堂にたどり着くまでに出会った騎士たちからは、エリカに対して退院を祝福する声と、1か月後の大会に向けての応援が送られた。

食堂でいつものように席に着くと、エリカに向かってフィアは口を開いた。

「まずは、もう一度1か月後の大会に関して再確認させてもらうわね」

伝えなければならぬことが多いのか、フィアはポケットから小さく折りたたまれた紙を取り出した。そしてそれを広げて書かれている文字を指でなぞる。

「大会の通常試合、まあ国同士の騎士が戦う試合では先鋒がジャック、次鋒ジーン、中堅シルヴィア、副将バーバラ、大将エリカ、つてことで決まりだそうよ」

「はあ……って、はい!?!」

ルールを知っている訳ではない。だが、それでも大将というのだから、一番偉いとか、強いとかそういう人がなる役職だろう。

「あ、あたしが大将!？」

「バーバラさんに一任されているから、文句言っても多分変えてはくれないわよ。それよりも、続き行くわよ」

エリカの疑問も一言で片づけられ、頬を膨らませながらエリカは席に戻った。

「通常試合つてのは、騎士が1対1で戦って、先に3勝した方が勝利つてことになるの。だから、エリカが出場するまでもなく決着が着く事もあるわ。正直、エリカはいろんな意味で有名だし、できれば私たちの手の内見せたくないからその方が良いんだけどね」

苦笑しつつもフィアは続ける。

「それで、大将はいろいろ面倒くさくて、大会の開会式で前に出たりとやる事がたくさんあるのよ。詳しい事は直前でも大丈夫だから、一応『大変な役職』つて事だけ理解しておいてね」

「な、なんか最後までいアバウトに終わらせられた気がするのですが……」

エリカの疑問もフィアは完全にスルーする。どうやら質問は全ての連絡事項が終わってからゆっくり聞くんもりのようだ。

「ええと、次はこれか……、はい」

フィアは数枚の写真をエリカの前においた。見慣れない騎士団服に

身を包んだ屈強な男や、いかにも貴族っぽい華麗な姿の男女などが写されている。

「エオリアブルグ王国ドラゴンスレイヤー、シータス騎士団の団長とブラゴシユワイク王国ドラゴンスレイヤー、タロン騎士団の団長、副団長よ。名前くらい憶えておきなさい」

裏返すと名前が書かれていた。

エリカは小さく頷いて写真を自分のポケットに入れる。

「他にも小さな連絡事項があるんだけど、それよりもジーンたちの方が大切だろうから先にお問い合わせするわ」

「おう、そうか」

完全に蚊帳の外だったジーンとジャックがようやく出番が来たか、という表情で身を乗り出した。

「刀の事ですね」

「ああ、大会まで1か月もない、早急に代替の刀を探してみたんだが、あいにくこの国で今現在刀を扱っている武器屋が無くてな。少し遠出して鍛冶屋を当たってみた。それでようやく刀匠に出会えてな、持ってきてくれれば無償で鍛え直してくれるそうだ。それで、エリカが退院したら一緒に行こうと思っとな」

「名前はトウキ、と言う。エリカの話したら『未だに刀を使う騎士がいるとは嬉しい限りだ』と言って是非鍛え直させてくれ、と申し出てくれたんだ」

ジャックがジーンの後を継ぎ、補足を行う。

「エリカさえ良ければ明日にでも出発できるが、どうする？」
「そんなの決まってるじゃないですか」

ジーンの言葉にエリカは表情を明るくして笑みを浮かべた。

「すぐに準備をしますよ」

第34話 食い物の恨み!? (後書き)

はい、アニキがいました。

アニメ風にあの速度で喋ってると思ってくださるとありがたいです。さすがにあれだけ喋って息切れしない人はいないので息切れしてませんが……。

そしてエリカがフィアに O H A N A S H I をされかけました。まあ、ボディーランゲージで教導と言う名の調教やるような輩じゃないことを祈りましょう……。

うう、最近筆(キーボードですが)が遅い……。

現在、夏休み、という事で昼間に書いているのですが、丁度その時間帯に八モニカが大好きなドラマのスペシャル的再放送をやっているもので、それを見ながらのためか遅々として執筆が進まない。

え？

ああ、最近相方が結婚して公私共に相棒を得たとかいう彼が出てるあれですよ。

答えが出る？

気のせいです。

ではでは、止まらないように頑張ります。

ご感想、誤字脱字などのご報告お待ちしております。

どうも大昔の誤字が気づかれずに残っている可能性があるようなので……。

ではでは。 ノシ

第35話 目指すは鍛冶屋（前書き）

気づけばいつの間にか5万PVを大きく超えていました。具体的には2000から3000ほど。

いや、嬉しい限りです。

それはともかくとして、だいぶ時期を逸してしまいました。これでは『祝』にならないですね……

というわけで、単に番外編でもボチボチやろうかと思ってます。

とりあえず、ネタが尽きない事を祈っている今日この頃です。

では、どうぞ。

第35話 目指すは鍛冶屋

翌日明朝、城門の前に馬車が止められていた。

二頭立てのそれほど大きくもなければ、目立ちもしない、言ってみればお忍び用のようなものだ。正式な城の馬車はデカい上に横にアールドールンの国章がある。

今城の前にあるのは、普通の、その辺を走っていてもおかしくないような馬車だ。とはいえ、馬は城の中でも屈指の体力と速さを誇る馬であり、そこらの馬車馬とは一線どころか大河の彼岸と此岸からの差がある。

「首都からこの馬車で2日、と言ったところですよ。ではお気をつけて」

門番の兵士が敬礼すると、エリカたちもそれに返礼する。騎士団の団服の上から茶色いローブを身に着けたエリカたちは馬車の荷台に乗り込む。ジャックは御者を務めるので荷台には乗らないで手綱を握る。

刀鍛冶の元へ行くのは、もはやいつものメンバー、で括っても問題のない面子になった。

エリカ、ジーン、ファイア、ジャック、そしてエリカの護衛兼モーフ係となってしまうアレックスだ。退院したらバーバラの元に帰るものかと思っていたが、バーバラが何やら取り込み中らしくヴァルトから「もう少し借りてても良いそうさ」という連絡が入った。

それに気を良くしたのか、エリカもジャックの事は水に流した。背後にフィアの影があつては快く許さなくては命の危機に繋がる、と本能的に察したのもある。

遠出という事もあり、全員戦えるだけの装備はしている。いかに治安の良い国家であつても、中央から離ればそれだけ治安が悪くなるものだ。なまじ治安部隊のようなものを離れた場所に配置すると、その治安部隊が不正に働くという可能性もある。

いかに善政で知られるアーサー・アールドールンが国王であつても、下まで真つ白、という事はありえない。

また、国外から流れ込んできた盗賊の類がない、とは言いつてもいい。さすがにアールドールン王国の北西から北にかけては龍の森がある事もあつてそういう噂はさほど聞かないが、そうではない南や東、特に他国との重要な通商路である道沿いでは襲撃される危険性というものは決して低いものではない。

国内にそういう場所を縄張りとする輩が流れ込んでいてもおかしくない。街道沿いには警護の兵士が配置されているが、完璧というものは存在しない。

そういう事もあつて、国内を行くわけでもエリカたちは戦えるだけの準備をした状態で馬車に乗り込んだ。

馬で2日、どこかで野宿という事も考えられる。予定ではしつかりとある程度の大きさのある街で休めるように予定しているが、馬車には野宿用の寝袋などが載せられている。

「その、トウキってどんな方なんですか？」

エリカは馬車に乗り込むと目の前に腰を下ろしたジーンに話しかけた。

試合の後から、ジーンは自分への戒めも兼ねてなのか、白鱗の大剣を使うようになった。それまではずっと家に大切に収めていたらしいが、二度と同じ過ちを繰り返さないためにも自分が使いこなせるようにならなければならぬ、という結論に達したらしい。通常の大剣と使い勝手の違う大剣だけに、エリカが入院している間も四六時中大剣を振っていたという。

「トウキってというのは人の名前じゃないんだ。俺たちがあつた爺さんが言うには、刀鍛冶にも流派があつて、代々受け継がれるものらしい。トウキというのはその代の刀鍛冶を指す……階級、いや、代名詞みたいなものなんだろうな」

「因みにその爺さんっていうのはなんでも第23代トウキだそうだが、1000年の歴史を持つ名匠らしいが、今のご時世刀を使う人間がないせいか、随分と細々とやっているらしい」

敵が同族同士であつた時は、仕事がむしろありすぎて過労でぶつ倒れる事もあつた、とジーンは付け加えた。

敵が龍になり、刀の細い刀身では龍の鱗を貫徹できず、またリーチの短さから牽制にも向いていない刀を好き好んで使う騎士、兵士は激減した。ジャック曰く、この大陸でも刀使いは両手の指で数えられるそうだが。

「同業者のほとんどが廃業して、生粋の刀鍛冶はこの国じゃトウキの一族しかないんだ」

「なんと」

馬車が動き出す。

日よけの布の隙間から朝の涼しい風がエリカの頬をくすぐる。

「今のトウキも今年で87歳、正直、ギリギリだったかもな」

「ギリギリというと？」

「跡継ぎはいないと思うぜ？ この間行った時も爺さんしかいなかったしな。跡継ぎがいなけりゃトウキの刀鍛冶もこの代で終わっちゃう。そうなったら国内で嬢ちゃんの刀を直す手は大剣の鍛冶屋に行くしかなくなる。刀は大剣と違って細く、叩き砕くことよりも切り裂くことを主眼とした武器、作り手が違うだけでも出来上がりは相当変わっちゃう」

さすがは、バトルマニアと言ったところか。武器などの話になると途端に饒舌になる。

「そういえばエリカちゃん、その袋は何？」

「あ、これですか……？」

フィアはそこまで聞いて、エリカが見慣れない皮の袋を随分と大切にそうに抱えていることに気が付いた。それを指差しながらエリカに聞くが、エリカは目を泳がせながら、明らかに言い訳を探しているような表情をしている。

「……何が入っているのかしら？」

「べ、別に大したものが入ってませんによっ」

噛んだ。

瞬間、エリカの顔が熟れたトマト並みに真っ赤になった。ジャックがエリカの視界の端で笑いを堪えているのが分かってさらにエリカは恥ずかしくなる。

「エリカちゃん、今なら悪いようにはしないわよ」

ファイアが馬車の荷台で転ばないようにゆっくりとエリカに近寄る。ファイアの手は身体の前でワキワキと不穏な動きをしている。

「だ、だから、本当に大したものが入ってないんですって！ た、ただ鍛冶屋と聞いたので、鍛え直してもらった時に少し頼みたいことがあるってすね……そのう……」

そこでエリカは言いよどむ。

ファイアは期待していた答えではなさそうな事を察知すると、すぐに興味関心の色が顔から薄れ、冷静になるとさっきまで自分が寄りかかっていた場所に戻って腰を下ろした。

「頼みたい事？」

「それは………ついでのお楽しみ、です！」

言えないのには訳がある。

袋の中身は黒鱗だからだ。

随分昔に、エリカがバーバラに餞別代りに渡し、今はバーバラの剣となつている自分の鱗を参考に、自分の鱗を使って刀を鍛え直してもらおうと考えたのだ。

昨夜、こっさりベランダで腕に黒鱗を発現させ、刀の折れ目を引っかけて強引に剥がしたのだ。根本から剥がせば出血して翌朝フィアに気づかれるかもしれないので、ある程度黒鱗の半ばから程よい大きさの鱗を剥がした。

鉄板のような状態の鱗を数枚袋に入れて、エリカは馬車に乗り込んでいたのだ。

さすがにこれは気づかれると後々面倒になる。

比類なき硬度を誇る黒鱗とはいえ、バーバラの前例から加工が出来る事は分かっている。通常の鋼鉄に混ぜ合わせればより硬度を上げられるのではないかとエリカは考えたのだ。さらに言えば、もう一つ、とある可能性にもエリカは目を付けている。

(ともかく、そのトウキという方の腕次第、ではありますけど……)

そんな事を考えつつ、エリカは馬車に揺られながら馬車の後ろに広がる街並みを眺めていた。

「おい、お前ら起きろ」

首都を出て随分と経った。

あつという間に話す話題は尽きて、ぼんやりと風景を眺めている間にエリカは眠りについていたようだ。上からジャックの太い声が投げかけられ、ようやくエリカは自分が寝ていた事に気が付いた。

「お前、ら？」

ジャックの言葉が気になって振り返ると、ジーンもまた深い眠りについていた。エリカもジーンも毛布のようなものをかけられているのは、おそらくフィアがかけてくれたのだろう。

「嬢ちゃん、悪いがジーンを起こしてくれ。町についた」

「早っ」

「早くねえ、嬢ちゃんたちが寝てたからだ。もう4時だぞ？」

馬車から空を見上げれば、少し赤みがかっていた。馬車は見知らぬ街の細い路地のような場所に止められているようで、太い通りが目の前に広がっている。人通りも多く、なかなか活気のある街のようだ。

「ジーンさん、起きてください。宿屋についたそうですよ」

「ん……、そうか」

ジーンはすぐにモゾモゾと動き出して、起き上がった。それから横に置いてあった大剣を手に取って立ち上がると馬車から飛び降りる。エリカもそれに続いて馬車から降りると、辺りを見渡した。

「大きい街ですね」

通りには店が立ち並んでいる。宿場町のようで、宿屋が多く、生活感のある家や店は通り沿いには少ないように思われる。

「王国の南に行くなら、一度は通る街だからな。ああ、ここの宿屋に泊るぞ」

ジーンは大きく伸びをしながら1軒の宿屋を指差した。見たところ、結構な大きさを持つ3階建ての宿屋の入り口の上の方には『三叉路』と書かれた看板が取り付けられている。

その入り口の前に先に来ていたファイアが立っていて、こちらに気が付くと小さく手を振って招きよせた。

「ごめんね、2人とも気持ちよさそうに寝ていたからギリギリまで起こさない方がいいかなと思って馬車を裏に止めるまで起こさない事にしたの。すでに受付を済ませたから部屋に直行できるわ」

「すまん、ファイア」

宿屋の扉を開け、中に入ると、通り以上に人がいた。いや、人数は少ないだろうが密度が高い。

1階はどうやら酒場のような場所らしく、数多くの人が騒ぎながら酒を飲んでいる。エリカはその初めての「異様な」場所を眺めながら階段を上っていくジーンたちの後を追う。

2階からは個室が並んでおり、下の喧騒が僅かに聞こえるが、存外静かだ。フィアがそのうちの1室を指差した。エリカは最後尾にいたので、脇に寄ったジーンとジャックを追い越してフィアの後に続いてその部屋に入る。扉を閉める前にジーンたちにお休みを言うてから扉を閉める。アレックスは言わずもがなでエリカたちの部屋に連れてこられている。

「ふう、良い所じゃない」

フィアは荷物をベッドの脇に置くと、窓を開けて部屋を換気する。ベッドは2つあり、水回り関係は一切ない。個別ではなく、共同のものがあるようだ。

「夕飯は適当に作るから、その前にお風呂でも行く？」

「あるんですか？」

エリカがそう言うと、フィアが笑みを浮かべて扉に貼られた紙を指差した。エリカがそれに近づいて目を細める。

「ここの浴場は広い事でちょっと知られてるのよ。1つしかないから男女で入れる時間が決められてるから間違っても男の時に入らないでね」

「アレックスは入れても良いでしょうかね？」

<断固拒否する！>

アレックスが慌てた様子で首を横に振る。言葉こそ聞こえないだろうがフィアでもアレックスが相当焦っているのは分かった。

「ま、まあアレックスも嫌がってるし、部屋で荷物番してもらいま

しよつ？」

「……ちっ」

(ちっ、って言ったよ、この子！)

アレックスの危機は回避された。

「ええと、女性……6時から8時ですか。そして男性が9時から11時、と」

「浴場が1つだから間の時間でお湯を入れ替えるんですって。管理もすっかりしているから防犯もばっちりだから安心して入れるのよ」「なんか、以前ジャックさんがばやいてましたねえ」

風呂の時間までは少しある。隣の部屋を取ったジーンたちは何やら騒いでいる様子だが、馬車の荷台で寝ただけで疲れてしまったエリカはベッドに飛び込むとすっかりと洗濯された布団が心地の良い匂いでエリカの鼻をくすぐった。

「ちよつと寝ますので、フィアさんが入る時に起こしてください」

「ちよ、その恰好で寝ないで。布団が汚れるから」

フィアの最後の声は何とか聞こえたので、纏っていたローブを脱ぎ捨てて団服姿でエリカは再び意識を飛ばした。

「エリカ、起きなさいな」

「……うう、はっ！ 起きます、起きますから！」
「まだ何もやってないわよ……」

条件反射なのだから仕方がない。仮眠だったから起きられたようなもので、もし熟睡していたらどうなっていたか分からない。

「夕飯の前にお風呂行くんでしょう？ さっさと行くわよ。見た感じ今は女性客私たちくらいだから、ほとんど貸切状態よ」

そう言うとフィアは荷物の中から着替えと数枚のタオルを手にとった。フィアは団服ではなく、私服に着替えている。目立ちたくないのだろう。エリカも団服の上だけ着替えておくことにした。下は正直見ただけでは団服だと気づかれる心配はない。

「はい、あなたの分」

「ありがとうございます」

タオルを手渡されてそれを脇に挟んで着替えを荷物から取り出す。着替えと言っても、未だにフィアの服を御下がり同然に使っている。

「エリカちゃん、昨日買ったのは？」

「フィアさんの服に愛着が湧いてしまいました。ていうかあれは人

前じゃ少し恥ずかしいし……。それじゃアレックス、留守を頼みますよ」

丸まっているアレックスにそう言うと、返事はなくただ尻尾が一度だけ振られた。

部屋を出ると、宿屋に入ってきた階段の方向とは逆の方向へ伸びる通路を進む。ジーンたちの部屋の前を通り過ぎて通路を進む。

下はすでに店を閉めたのか、先ほどまでの喧騒はなく、静かになっていた。もともと宿屋だけに本業に差し支える時間帯までは酒屋も営業はしないようだ。

通路を突き当たると、もう1つ階段があった。

それを下ると水の音が聞こえてきた。

通りに面した建物の反対側、中庭のようになっている場所は外から一切見えないように窓が設けられていない。そしてそのスペースに大きな浴場が備え付けられていた。

「大きいですね。騎士団のほどじゃないですけど」

「ぶつちやけるわねえ。でもまあ、事実だけどね」

籠の中に着替えを入れて手早く服を脱ぐと、タオルを巻いて浴場へと向かう。フィアもそれに続き、浴場へ行くと、湯気が視界を覆う。

「ここはこの町で数少ない浴場のある宿屋なの。人気あるから空いてるか微妙なところだったけれど、運が良かったわ」

フィアは少し満足げに胸を張ると、タオルに巻かれた胸が揺れる。エリカはそれを見て少しジト目になる。

「……嫌味にしか思えません」

「あら、エリカちゃんだつてまだまだこれからよ、きつと。第一あなたまだ16歳だしね」

エリカはいわゆる着痩せするタイプだと、以前言われたことがある。エリカ自身はそういう事に一切考えたこともなかったが、それを知つてからは少し意識するようになってしまった。

身近な女性が皆スタイル抜群なせいもあるのかもしれない。

フィアにしる、バーバラにしる、スタイルが良い。おまけに美人。女性ならば憧れるであろう体型をしている。エリカも、ヒトの身体になつてからそういう事に考えを巡らせるようになっただけに、少ない知識で偏った反応をしてしまう事もままある。

「とりあえず、ゆっくり入って温まりましょう」

フィアは浴場のお湯を操つて浴場に入る前に身体を洗う。そしてエリカの頭からお湯をかけると、エリカが気持ちよさそうに呻いた。

「うう、人に流してもらつてやつぱり気持ち良いです」

「そう？　そういうえば試合の時はどうしていたの？　私忙しかったし」

石鹸でタオルを泡立たせてエリカの髪と背中を洗いながら、フィアは何気なく尋ねた。

「大体自分でやってましたよ。手の届かない所とかはその場にいた方と一緒に流し合っていました。ああ、一度シルヴィアさんともお話しながらやった記憶がありますね」

「ふふ、エリカちゃんも騎士団に馴染んできたようね。いろいろ面倒な事をしてくれたけど、保護者のような立場の私としては嬉しい限りよ」

エリカが騎士団入りする時に、推薦人となったのはジーンとフィア、ジャックだ。家なし子のような立ち位置のエリカには、そう言った感情があってもおかしくはない。

むしろ、エリカとしてはあんな出会いだったにも関わらず、ここまで真摯に向き合ってくれるフィアたちには感謝してもしきれないだけの思いがある。

そんなものを胸に思い起こしながら、エリカはフィアに背中を預けた。

第35話 目指すは鍛冶屋（後書き）

二度目のお風呂シーンなので描写はかなり手薄です。ていうか二度も三度もいらないでしょう？ え？ もっと？

は、い、何も聞こえません

それはともかくとして、5万ですよ、5万！

ちょっと信じられませんか、私。

話数が伸びているおかげでなんか一日のPVも1500越えしてるし……なんか、とてつもなく嬉しいです。

いやいや、これくらいで満足はしませんよ。目指すは完結ですから。

ふふふ、最近筆が進まない、という事は前回の後書きで書きました。ええ、結構毎日昼間修羅場ですよ。△切ギリギリなのにネタが出なくて悩んだ末、挫折する人ですよ、私は。

そんな私ではありますが、今後ともご贖頂いて頂けると嬉しい限りです。

そしてご感想、誤字脱字報告、なんでもかまいません。お待ちしております。おります。

ああ、番外編ですが、そのうち投稿します。

第36話 夜中は音が響くので大きな物音は控えよう(前書き)

何とか、書けた……。

いや、番外編書いていたらこっちがおろそかになってしまいました……。

ゆっくりゆっくり、焦らない焦らない……なんて出来るわけがない
不器用なハモニカはどうしても全部やりたくて仕方がない、という
厄介な性格でしてね。

まあ、そんなことはどうでもいいですよね。

ではどうぞ

第36話 夜中は音が響くので大きな物音は控えよう

「はあ、良いお湯だった……」

火照った身体を冷ますためにフィアの作り出す風に当たりながらエリカはため息を漏らす。

「私の魔法はこういう事のためにあるんじゃないんだけどなあ。だけれどまさかこんな使い方をするとは思いもしなかったわ」

緩やかな、清々しい風を浴びてエリカは気持ちよさそうな笑みを浮かべる。その笑顔につられてフィアもつい笑ってしまう。

「さて、何か食べてささっと寝ましょう？ 明日も早いわよ」

「合点了解です。ですが、まだ少し寝るには早いようない……」

まだ7時を少し回ったくらいだ。夕飯を食べ終わってもさすがに寝るには少々早すぎる。

そう考えると、フィアは少し思考を巡らせて、良い事を思いついたように人差し指を立てた。

「なら、簡単に魔法の使い方を教えるわ。夜だし、あまり大きな事は出来ないけど、手の平サイズなら問題ないでしょ」

「本当ですか？ それじゃよろしくお願いします」

服を来てタオルを首からかけて立ち上がると、フィアとエリカは部

屋に戻る事にした。エリカの髪は乾かすのに時間がかかるため、部屋に戻るまでの間、ずっとタオルで水気を取っていた。部屋に帰ってフィアにしっかりと乾かしてもらったためだ。

部屋に戻る前に、フィアは隣の部屋にいる2人に声をかけに行った。エリカの魔法の練習をする、ということと、明日の予定についての打ち合わせをするためだ。

その間、エリカは部屋でアレックスをモフモフすることで時間を潰していた。

<エリカ殿、魔法の練習をするのか？>

「まあね。同じ過ちを繰り返したくないのは、ジーンさんだけじゃありません。それに、あたし自身魔法はしっかりと使えるようになりたいですから」

病院と違って、ここではベッドの上でアレックスを抱いていても文句を言う人はいない。少し恍惚とした表情のエリカはアレックスの問いにそう答えた。

抱き付かれている為、アレックスは身動きが取れない。すでに脱出は諦めてなされるがままになっているが、隙あらば逃げ出そうと画策している。精神的にもこの状況が長く続くのは辛い。

アレックスがヒトの言葉を理解し、ヒトのような感情を持っていることを知っているのは、エリカとバーバラぐらいだ。だから、ほとんどの人間にアレックスの苦勞は気づかない。むしろ、彼の待遇を羨ましがるところだろう。

だが、当の本人からしてみれば、代われるものなら代わってもらい

たいくらいだ。

<とりあえず、この宿屋を吹き飛ばさないようにな>

「うっ、気を付けます……」

だから、余計な事を考えないように話題を必死に探している。

表面的には冷静を装っているが、内心滅茶苦茶心臓がバクバクしている状態なのだ。

<ご主人だつて、ここまでではなかった……>

小さくため息をつくが、エリカは気づかない。

そんな事をやっていたところで、部屋の扉が開いてフィアが戻ってきた。アレックスはこれ幸いとエリカの拘束から逃げ出して扉の近くで腰を下ろした。

アレックスは非常に器用だ。丸いドアノブでも簡単に回せる。おそらくそこに座つたのは何かあった時にすぐ逃げ出せるようにしているからだろう。

「ごめんなさい、待たせたかしら？」

「無問題です。アレックスと遊んでましたから。夕飯、どうします？」

「持ってきたものを適当にお腹に入れておきましょうか。こういう場所って外で食べるか持参するしかないから」

そう言うとフィアは荷物の中から出発前に詰め込んだ保存食を幾つか取り出した。エリカはそのうちの1つを出発前に味見したが、お

世辞にも味の良いものではなかった。

病院食とどちらが良い、と聞かれたら返答に困るところだが、1日に必要な栄養源を全て取れる、と食堂のコックに推されては食べないわけにはいかなかった。いつも極上の食事を提供してくれている食堂のコックたちが長旅をする騎士たちの事を考えて考案した保存食、エリカとしても長期的に見て今後の改善を促したいところだ。

エリカは、すでにコックたちにとってこれ以上ないオブザーバーのような立ち位置に立っている。それは食堂での新作に対する評価だけでなく、こういった保存食にも及んでいる。

今回は実際に持ち運びして、その携帯性、保持できる期間などを調べる事になっている。もちろん、公式なものではなく、あくまでコックたちとエリカの独断とも言える。

どの程度味を保持できるのか、に関しては段階を踏む必要があり、短期的、中期的、長期的、どれに最もこの保存食が合っているかを見極める必要がある。いきなり長期保存して、開けてびっくり、なんて事態を避けるためにも、まずは数日程度の保存を調べるのだ。

これに関してはかなり予定が固まっているらしく、もし上手くいけば1か月後に迫る大会への道中での保存食にも採用される予定だそう。

つまり、エリカにとってこれは重要な事なのだ。自分が食べるものなのだから、真剣になるのも当たり前、全力を尽くして改善点を見つけ出す、とコックたちに約束しているのだ。

おかげでコックからの信頼はうなぎ上り、食堂のコックたちにとっ

てエリカは女神に等しいのかもしれない。

「あら、見慣れない物ね」

「新作だそうです。これから改善点を見つけて改良を加え、美味しい保存食を作るそうです」

「……エリカちゃんって、結構知り合いの幅狭いかと思ったけど、食堂の人たちとは仲良いつて噂だもんね」

「噂じゃなくて事実です。あれほどの料理を作る彼らは、尊敬に値するのです」

満面の笑みでエリカはそう言うと、包まれていた保存食なる物体を見る。

見た目は、少し焦げ目がついたおにぎり、と言ったところだ。もちろん、米で出来ているわけではないのだが。

手の平サイズのそれが2つに分けられて収められており、それを手に取るとまずは見た目をじっくりと観察する。

「……悪くないですね、運んでみてどうでした？」

「私たち、モルモット実験体だったの？ ……はあ、そうね、気になるほどの重さじゃなかったわね。数も持てるし、やっぱり問題は

「

「味ですね（よね）」

ミリテル、と言っらしい。

正式な名称はまだ考えられていないそうだが、開発段階でこの保存食はそう呼ばれている。手の平サイズのミリテルを持つと、エリカ

はそれを口に入れてみる。

見た目とは裏腹に、ミリテルの触感はやわらかかった。少しモチモチとした食感で、口の中で咀嚼すると喉の奥へと送る。

「うーん……、やっぱり味が単調ですね……」

「男どもなら気にしないだろうけどねえ。グルメなエリカちゃんは許せないのかしら？」

「1日や2日なら大丈夫でしょうけど、やっぱり飽きると困るでしょうから……」

まだ、エリカは字が書けるほどヒトの文字を理解は出来ていない。そのため、後々説明するために出来るだけ頭の中で問題点を簡略化しておく必要がある。

「なら、『何とか味』、みたいに味の違うものを作って持ち運べば？ 1個の量は多くないけど、モチモチしてる分長い時間噛んでいられるから少ない量でも満腹感を得られるんじゃないかしら。それなら同じ量でも味の違うものを入れておくのも良いかもしれないわね。栄養が少し減っても、問題ないんじゃない？ 大切なのはメンタルであるし……」

「よ、予想外に具体的な説明、ありがとうございます」

フィアの言葉に呆気を取られつつも、エリカはフィアの言葉を自分の考えと比較し、考察する。

「味に関しては、まだまだ改善の必要があるようですね。バリエーションを増やして、と。とりあえずこれくらいですね。日持ちに関しては今すぐ分かるものでもないですし」

考えながら食べるのはあまり行儀が良い事でもないし、と呟き、エリカはミリテルの欠片を口に放り込む。

「アレックスの分もありますよ」

アレックスの近くに寄ると顔の前の床に置く。もちろん、床の汚れが付かないように包んでいた薄い紙を下に広げておく。

エリカはファイアの隣に戻って水を飲むと、残っていたミリテルを口に押し込んで早々に食事を切り上げる。エリカにとって食事よりも重要な案件があるのだから、気持ち^はが逸るのも当然といえば当然だろう。

「ちょ、エリカ、喉に詰まらせても知らないわよ？」

「んんーっ？ んんんーっ！」

「ごめん、分からないわ」

モチモチとしているだけに、飲みこむには存外時間がかかる。エリカは何とか飲みこもうと顔だけ四苦八苦させてミリテルを噛み続ける。

「んぐっ……、はあ、御馳走様でした」

「早いわねえ。もう少し落ち着いて食べればいいのに……」

と言いつつも、あまり待たせるもの嫌なのかファイアも手際よくミリテルを頬張っていく。

「それじゃ、簡単な魔法の使い方から教えるわよ」
「お願いします」

特にこれと言った用意は必要ない。身一つで出来る事でもあるからだ。

ただ、念のため窓は閉めてカーテンをしておく。火災などと誤解されてはたまらない。

「とりあえず、あの1件からエリカちゃんには炎が出来る事は確認できたわ。だから最初は炎、特に火力の調整が出来るようにならないとね」

フィアはそう言うと自分の手の平を広げて小さな炎を手の平に灯した。

「推測ではあるけれど、あなたの魔力には調整弁のようなものがないのかもしれないわ。なら、それを作って魔力がまた過剰放出しないようにしないと……」

炎の大きさを変えながら、ファイアはエリカにもやってみるよう促す。

「その、コツとか、無いんですか？」

「調整するのは集中力よ。炎や氷を発現させる魔法は主にイメージを具現化させるようなもの。つまり、手の平サイズの炎を頭の中で作り出そうと集中すれば、自然とそれに近いものが出来るはず、なのよ。普通はね。あなたはあの時何をイメージしたの？」

「えっ、えと、あの、そのう……」

言えない。

ファイアの業火を想像したとは。

「と、とにかく自分が出来る最大限のイメージ、をしたと、思います？」

「だからね、嘘が下手なのよ、あなたは」

案の定と言おうか、嘘は簡単に見破られ、ファイアはエリカの顔を見ながらため息をついた。

「ま、あんまり過去の事を根掘り葉掘りするのもなんだし、気にしないわ。あなたが見た魔法は、私とシルヴィアくらい……。あの様子だと、私の魔法を想像したんでしょ？」

「うう、すみません……」

まさしく言い当てられたエリカは少ししょぼんとして肩を落とす。

炎を操る魔法を見たのは、確かにファイアの魔法が初めてだった。もっと規模が大きく、破壊的な魔法を自分の父親の戦いぶりから見

いたが、あれは特殊、炎でも、氷でも、雷でも、風でもない、彼だけが使える魔法。

もとより、イクシオンは辺り一帯を焼き払うために魔法を使った。あんなものをコロシラムで使おうなどと考えるはずもなかった。

「もう、誰も巻き込まないために、上手く使えるようになりましよう?」

「も、もちろんです」

エリカは力強く頷くと、目の前でファイアが灯している炎を自分の手の上に作り出そうとイメージを固める。

魔力を魔法として具現化させる感覚は1回掴めば後はその感覚を辿ればいい。体内のどこにあるかも知れない魔力溜まりから魔力を手の平に流していく。

その瞬間、魔力が腕の中を大量に流れるような感覚に襲われ、鋭い痛みがエリカを襲った。

「っ！ それ以上、行くんじゃない!!」

あの時と同じだ。

だが、あの時とは違う。それがもたらす惨事を知っているし、押しとどめるといふ努力をするだけの余裕がある。

「エリカちゃん、魔力を逆流させては駄目。魔法を作り出す過程で魔力を放出するのよ。言ってる事は難しいかもしれないけど、手の平から全ての魔力を放出するんじゃないくて、腕から抜いていくのよ」

「は、はい……」

今まさに強引に押し込めようとしていたエリカはファイアの言葉を聞いて冷静に魔力を制御しようとする。手の平から魔力を放出しているのだから、腕から出すことも何とかやってみようとする。

パンパンに膨らんだ風船に小さな穴を幾つか開けて、ゆっくりと空気を抜いていく感覚だ。それによって手の平から放出される魔力の量が減り、結果、暴走は起こらない。

しばらくしてエリカの手の平に小さな炎が灯り、ユラユラと揺れる。

「どう？ 大きさの調整はできそう？」

「やってみます……」

炎の大きさの調整、つまり放出される魔力の量を増やしたり減らしたりすることで調整するということだ。腕からの放出を少なくすればその分手の平に魔力が回って火力が大きくなる。逆に腕からの放出を増やせばその分火力は弱まる。

後はそれを意識しなくても、自然と出来るようになる必要がある。こればかりは練習に次ぐ練習しかない。

「炎はこんなものね。それじゃあ、他にも試してみましようか」

ファイアはそう言うと、炎を消して今度は反対側の手の平で水を作り出した。

「炎と違って、水には気体、液体、固体と形態が分かれるわ。最初は氷が一番いいわ。床をびしょ濡れにするわけにもいかないし」

フィアは水球を一瞬にして凍らせると、それを手に乗せる。

「冷たっ」

「何をやってるんですか……」

手の平で氷の塊を転がせるフィアに少しため息をつきながらも、同じことをしようと手を広げる。

（水、母上の魔法ですね……）

エリカの母親は水龍、水を操る、もしくは司^{つかさど}る龍だ。

（そういえば、母上の魔法を見たことが無いな……シルヴィアさんの氷の剣はすごかったな……）

水と氷を自在に操ってエリカを翻弄したあの技術は、かなりの鍛錬を必要とする。自分の親の魔法を使った事もない、いや、使えなかったエリカとしては、羨望に値する。

「炎の時とは逆に、辺りの空気を冷やす、というイメージが良いかもね。いきなり氷にはできないわ。一度液体という過程を通る必要があるわ」

「あれ？ でも試合の時、シルヴィアさんいきなり足元に氷作ってませんでした？」

一度液体になる必要があるのなら、何らかの兆候があってもおかしくない。足元がひんやりするなどといった些細な事かもしれないが、そのくらい察知出来る。

「ああ、シルヴィアは多分地中の水を使ったのでしょね。それならいちいち気体から始める必要もないわ。ついでに言えば、彼女の剣は常に凍っている状態を維持できるように魔力を馬鹿食いするのよ。だからいつも彼女が腰に下げているのは持ち手だけの剣だね」
「なるほど」

小さく頷きながら、自分の手の平でまずは水を作り出そうとする。

だが、いくら集中したところで手の平の少し上あたりで白い靄が浮かぶ程度。水になりそうな気配はない。

「うーん、どうもあたしには水に関する素質が無いのでしょうか」
「そういう訳じゃないと思うんだけど……。あと少しなだけけどねえ。まあ、1日やそこらで出来るとは思わない事ね。誰でも得意不得意はあるものだし」

フィアは手の平で少し溶けて水になっていた氷の塊を炎で蒸発させる。瞬発的に大火力を作り出したようで生み出された炎は青白かった。

「まあ、今日はこんなもんでしょ。後は注意点ね。魔力は無限じゃないわ、知ってると思うけど。なくなれば体力を使い切ったくらい虚脱感に襲われて人にもよるけど数日は起き上がる事もままならなくなるわ。枯渇させる事だけはないようにね。魔力をたくさん消費する魔法はほとんど使われないのだけれど、魔力量が多い人は限度を読み間違えることもあるわ。気を付けてね」

「分かりました」

その後は、使えるようになった炎の調節をしばらく行い、明日に備えて就寝することにした。

第36話 夜中は音が響くので大きな物音は控えよう（後書き）

携帯食糧、乾パンで良いや、なんて最初思っちゃったんですが、よく考えれば乾パンなんてあるわけがない、という事に気が付きやめました。

とりあえず、飯があるところにエリカ在り、なので、エリカも食堂のコックさんたちには頭が上がらないのかもしれませんがね。フィアはそれ以前ですが。

魔法の説明ですが、結構詰めて考えてないので、何か変な点があるかもしれませんが。もしくは今後矛盾するような点が浮かび上がる可能性も無きにしても非ずです。

というか違う事書いてても気が付かない、という可能性すらあります。

まあ、そこまで突っ込んだ事は書く気はないので大丈夫かと思えますが。

前書きでも書きましたが、番外編はちよくちよく書いております。

なんだか、予定よりも普通な話になってしまっそうです。まあ、少しは崩そうと思ってるんですが、前回のようになタが入るかは微妙なところですよ。

番外編ではありますが、少しばかり今後に絡む予定あります。

ああ、あったなあ、こんな話、程度に思ってくればありがたいです。

では、またお会いしましょう。

ご感想などお待ちしております。

番外編 レッツ、ショッピング！（前書き）

先にお知らせしておきます。

時系列的には

退院 番外編 鍛冶屋に出発

という事になっています。

ところが、よくよく考えてみたら、退院した翌日に出発してくれるんじゃないですか！ 何やってくれたんだ我が主人公！

と言う訳でこの番外編は退院したその日の昼から午後にかけての出来事、という設定になっております。

ですが、それでも矛盾している場所があるかもしれません。

もしそのような点があっても、番外編という事でちょっと作者がおかしかったと思ってください。

そして、予想以上にネタが入らない……。

まあ、息抜き程度に書きましたから。

それはそうとして、5万PV突破の嬉しさのあまり書いたのですが、投稿しようとしている今（8月28日16時現在）6万PVになりかけているのです。

うわぁ

完全に記念でもなんでもねえ……

と言う訳で、ただの番外編としてお送りします。

ではではとじろ

8月29日：間違い修正

番外編 レッツ、ショッピング！

「くり出すわよ！」

全てはファイアのその一言から始まった。

退院したエリカは、すぐにも鍛冶屋の元へ向かうために部屋で持っていく物を整理していた。そこへファイアがやって来ると、問答無用で部屋から引っ張り出された。

「ちょ、ファイアさん!？」

「黙ってついてきなさい！」

かなりの剣幕で言われ、エリカも口を閉じてしまう。

出発は明日という事で決まっているだけに、出来るだけ早く用意を済ませてしまいたいところのだが、ファイアの状態からのつぴきならない事なのだろうと考え、大人しくファイアに引っ張られる事にした。

「ど、どこへ行くんですか？」

「城下町よ。服を買いに」

「……はい？」

一瞬、ファイアが何を言っているのか分からなかった。

「服よ。あなた、私の着ていない服と団服しかバリエーション無いでしょう？ 今時の女の子らしい可愛いのを幾つか買ってあげる」

「そ、そんな事してもらわなくても……。あたしはフィアさんの服で良いですよ？」

「私がそうはいかないわよ。お年頃のあなただから少しはお洒落しなさい。私の服は結構実用性ばかりの可愛げのないのばかりだから」

とはいえ、エリカとしては自分のためにわざわざお金を使ってもうのは忍びない。別に困っている訳でもないのに、必要ないとフィアに言うが返事はなく、フィアに引きづられるエリカはそのまま城の城門まで腕を掴まれた状態で連れてこられることになった。

「あれ、ジーンさんに、ジャックさん？」

城門の前に、騎士団の宿舎にいる時よりも随分とラフな格好をした2人がいた。外出用、とでも言うべき涼しそうな服を着ている2人が、エリカとフィアを見つけるとこつちに手を振ってきた。

「嬢ちゃんが服を買いに行くと言ったからな。ついでで付き合おうと思ってな」

「男の目から見てもらう、っていうのも重要だしね」

どうやら、フィアが呼んだようだ。

エリカにはその辺りの知識がない。そもそも服を着るという概念しかなかった生き物であるためだ。そのため、何も分からないエリカはただ「はあ」と呟いて3人について行くしかなかった。背後をフィアに遮られては帰る事も出来ない。

ちなみに、アレックスはエリカとフィアの部屋でお留守番している。3人護衛がいれば問題ない、と判断したのだろう。

「とりあえず、明日着ていく服じゃなくても良いから、あなたが好きな服を選んでね。それから、それが似合うか私たちが判断するわ」
「そんなことを言われても、何を着ればいいのか……」

そこまで呟いてファイアがエリカの顔の前で人差し指を立てた。その表情は至極真剣だ。

「服にはね、着るべきもの、なんてのは正装くらいしかないの。あなたが直感で『良い』と思った服を選びなさい」

「はあ」

そんな事を話しながら、4人は城の前の下り坂を進んでいく。

(そういえば、町に行くのは初めてですな……)

思えば、城の外に出たのは、城の裏の森以外では初めてだ。初めてここに来た時の事が随分と昔のように思われる。

正午を直前にして、町は賑わっていた。

町の人々が通りで買い物をしたり、食事を楽しんだりしている。

ファイアが道案内をしながら、4人は目的の服屋へと向かう。

目的の服屋は、町の中心部、大きな広場にあつた。店の前にまで商品であるう服が並べられており、時折店の中にお客が入っていく。

それなりに繁盛しているようで、店は大きく、外観も数多くの装飾が施されていて、巨大な看板がかけられている。広い広場の反対側からでも確認出来るような巨大な看板の店に近寄ると、店の前で立つ

ていた店員と思しき眼鏡をかけた女性がこちらに向かって手を振ってきた。

少なくとも彼女に記憶のないエリカは固まったままだったが、フィアがそれに応えて手を振った。どうやらこの店はフィアの行きつけか何かのようだ。

「待ってたのよ、フィア。久しぶりに来るっていつから、待ちきれなくて外にいたのよ？」

「ごめんなさいね、レナ。ああ、3人とも会うのは初めてよね、私の幼馴染のレナ。このお店の店長よ。レナ、騎士団の仲間よ。右からジャック、ジーン、エリカ。そして、今日の依頼は、彼女」

最後にエリカを紹介すると、レナは眼鏡をかけ直してエリカに視線を向けた。

足元から頭のとっぺんまで観察すると、レナはポケットから小さなメモ帳を取り出して何事か書き取り始めた。

「身長164……」

「い、今ので全部分かるのか!？」

驚きの声を上げたのはジーンだ。見ればジャックも感心したような表情で口笛を吹いている。

「レナはこの筋では一流よ。見ただけで服選びに必要な事は分かるわ。それはともかくレナ、その書いてる事を口にする癖、どうにかならないの？ 女性としては致命的な事を男に知られる可能性もあるのよ？」

「……えっ？ ああ、ごめんごめん。意識してないといっ、ね。だ

けどエリカちゃん、で良いのよね？ 彼女の体型は正直って私でも羨ましいくらい綺麗よ。しかもその黒くて長い髪、真っ赤な目。魅力は十二分にあるわ。……これはコーディネイトのし甲斐があるわね」

細く微笑むと、レナは4人を引き連れ自らの店の中へと入っていた。

店の中は外以上に服が溢れていた。いや、そういう店なのだから当たり前なのだが、2階部分を吹き抜けにした店には、巨大な棚のようなものが壁一面にあり、何重にも服が並べられている。その上、フロアも迷路のように入り組むほどに服が置かれており、吹き抜けの中央には地図がぶら下げられている。

「男物は置いてないから、連れの方は少し居づらいかもしれないけど、我慢してね。代わりに至福の時を味わわせてあげる」

店には男性の姿はなかった。見たところ売っている服も決して男性が進んで着たがるような代物ではなかった。そのせいかジーンは目のやり場に困ったようでも視線を泳がせては床に行きついている。逆にジャックは興味深げに周囲を見渡している。

「さてさて、あなたくらいの子なら、この辺の服がサイズ的には合うはずよ。あとは、似合う服を選ぶだけね」

そう言って指差された区画は、丁度エリカの身体のサイズに合った服が置いてあるであろう場所。だが、そこはあまりにも「この辺」で言い表されるには広い。年齢的に、今のエリカの肉体年齢の頃がそういう意識を持ち始める頃なのだろうか、他の区画よりもはるかに店内での場所の割合が大きい。

ちなみに、次に大きいと思われるのは水着の区画だ。

食事時な事もあってか、買い物に来ている女性はそれほど多くはなく、数人いる店員も暇を持って余しているのか談話をしている。

「さあ、エリカちゃん、好きな物を選びなさいな」

「好きな、って言われても……」

そもそも、数が多すぎる。

お洒落という事に関して疎いにもほどがあるエリカにとって、何が良くて何が悪いのかさっぱりな状態だ。とてもじゃないが自分から選ぶなんて事が出来るとは思えない。

「うーん……レナさん、どういのが良いんですか？」

「丸投げかよ、嬢ちゃん……」

ジャックの声は無視して、レナに視線を向ける。初っ端から意見を求められて若干意外そうな顔をしたレナだったが、すぐに柔和な笑顔に戻って少し考えるようなそぶりを見せた。

「そうねえ、どうもあなたは硬い印象を受けるのよね。それ、素？」

「嬢ちゃんはいつもこんな感じだぜ？ まったく、もう少し柔らかくても良いと思うが……」

「ジャックさんほど柔らかくなる気はさらさらありません」

「……それは酷いぜ、嬢ちゃん」

ジャックにはそう言うが、確かに自分がほぼ全ての人に対して敬語かそれに近い言葉で話しているのは事実であるし、碎けた会話をす

るなんて滅多にない。

よっぽど感情が昂ぶりでもしない限りは素には戻らないし、そんな現場に居合わせるのはバーバラやアレックスくらいなものだ。

「硬いから……見た目から変えるのもアリね……」

そう言ってレナは数多い衣服の中から白い服を取り出した。

「白のワンピース……。とりあえず着てみましょうか」

レナからワンピースを受け取ったフィアはエリカを引っ張って試着室に入っていた。その場にはレナと男2人が残され、しばらく静寂が3人を覆う。

「お2人は、この間の試合で選ばれた方ですよね？」

そんな空気に耐えられなくなったのか、レナはジーンたちに話しかけた。

「あ、ああ、と言っても、こいつはそれ以前から有名人だろうがな」

ジーンは苦笑いしながらジャックを指差す。

ジャックは巷でも有名だ。この町に住んでいれば一度は名前を聞くこともあるだろう。悪名高いわけでもないから騎士団も別に問題視していないし、むしろ人気があるため一たび存在が知ればちよつとした騒ぎになりかねない。

「確かに、ジャックさんは人気者ですから。ですが、この頃は彼女

の方が話題沸騰、と言ったところですね」

「エリカが……？ まあ、当然か……」

入団1週間で選抜試合への出場が許され、おまけに決勝まで破竹の強さを見せつけた上、コロシウムに第二の太陽のような代物を作り出したのだ。話題にならないわけもない。

「見たところ、あの子はまだその世界を何も知らない。あなたたちが守ってあげてくださいね。普段不満を漏らさない人って、溜めこんで潰れるかもしれないし……」

「初対面の人間に言われちゃあ、世話ないな……」

ジャックが小さくため息をつく。

「嬢ちゃんは責任感がある。言い換えれば全部背負いこんでいるってことか。ジーン、頑張れよ」

「な、なにを頑張れと言うんだ」

「お〜お〜、顔を赤らめて、本当に分かってないのか？ 本っ当に？」

「だ〜！ うっさい、黙れ！」

男2人がじゃれ合っているのを少し笑いながらレナが見ていると、試着室の中からフィアの声が出てきたのが耳に入った。

「ちょ、フィアさん、この服肌出過ぎじゃ……」

「あのねえ……、色気ナシの団服から比べれば全部肌出過ぎよ。恥ずかしかつてないで外に出なさい。見てもらわなきゃ良いか悪いかも分からないでしょう？」

試着室の扉が開いてフィアが出てきた。そしてその背中の中にエリ

力が立っている。

「ど、どうでしょう、か？」

ファイアがその場から横にずれると、レナと男2人の前にエリカが姿を現す。騎士のそれとは思えないほど細い身体、白い肌が白のワンピースと相まってエリカを騎士としての彼女ではなく、1人の少女としての彼女に豹変させていた。黒い髪とのコントラストも相まってエリカの魅力をこれ以上になく引き立てている。

「良いわね。ただ、その靴はどうにかしないと……」

エリカの見た目は、それこそ「純白」という言葉がぴったりだが、騎士団員用の靴がそれを台無しにしている。レナは何かを思い出したのか、店の奥へ駆け足で戻っていった。

「ジーンさん、似合い、ますか？」

「あ、ああ。すごく似合ってるぞ」

「あらら、何慌てるのよ、そこの純情さん？」

「はっはっはっ、ジーンもまだまだお子様だな」

大人2人にニヤニヤされて真っ赤になるジーン。その様子がおかしくてついエリカも笑みが零れる。

「あったあった、はい、これ履いてみて」

レナが戻ってきてエリカに白い女性用のサンダルを手渡した。バンドの部分に小さな花のアクセサリーが付けられている物で、エリカは渡されると、騎士団の靴を脱いでサンダルに履き替える。

ヒールがあるため少し目線が高くなったエリカは慣れないサンダルにヨロヨロと立ち上がるとその場で回りながら歩いてみる。

「うう、歩きにくっ、わっ！」

案の定、とうか少し歩いてすぐにバランスを崩して倒れそうになる。慌てて助けに入ったジーンの手を借りて転倒は防ぐが、慣れないサンダルをさっさと脱いで騎士団用の靴に履き替えてしまう。背後でレナが随分と残念そうな顔をしているが、まともに歩けないサンダルを履いていても意味がない。

「普通の服とがあります？」

「普通？ 何を以て普通とするか教えてもらえる？ 上半身裸が日常な男だっている世の中なのよ」

冗談混じりにレナがそう言うと、エリカはフィアの着ている服を引っ張って指差した。

「フィアさんが普段着ているようなのが良いです。なんかホツとできるっていくかなんというか……」

「……生まれて初めて見た動く物を親と見なす生き物がいたような気がする」

「ジャック、黙ってた方が身のためだぞ」

何か聞こえたような気がする。

とりあえず、ジャックへの制裁は後回しにしてフィアが普段着ているような服があるか聞いてみた。フィアから借りている服はやはり少しサイズが大きい。大きいサイズの服をぎっくり着こなすというのもありなのだろうが、エリカにはそういう知識はない。自分に合

った服を欲しがるとも無理はない。

「ファイアが着てるような服、ねえ。あるにはあるけど、本当にいいの？ もっと個性を出すつてもアリよ？」

「そうだぞ、ファイアが2人いても俺たちが困るだけだ」

「……ジャック、今日のお会計、あなたが払いなさい」
「なぜだ!？」

ジャックの反論は無視という形で拒否され、領収書を取り出したレナは「ジャック、と」と呟きながらジャックの名前を領収書に書きこみ始めた。

「ジャック、恨むならお前の口の軽さを恨むんだな」

「ジーンまでなんだ！ 昨日酒を買い込んだから金ないんだよ！」

「なら、騎士団の方に送っておいてくれ、レナさん。こいつの給料から天引きしてもらおう」

「了解。分割はどれくらいになさいますか、ジャックさん？」

男2人とレナが会計の話をしているのを、遠巻きに見ていたエリカはハツとなってファイアの方に顔を向けた。

「お金、あたしが着る事になるんですからあたしが払いますって！」

ところが、ファイアは人差し指を顔の前で左右に動かしながら首を振った。

「これは、あなたの退院祝いも兼ねてるの。それに、あなた今お金持っていないでしょう？」

「うぐっ……」

騎士団は騎士に対して毎月報酬を支払っている。最初の月は何かと入用なのもあって通常より少し多めに渡されることになっているのだ。

エリカが入院している間にその給料日と言つべき日を過ぎたのだが、エリカの場合、月の途中から入ったため日当扱いになり、月給をその月の日数で割って大体20日分ほどの給料が支払われた。

だが、給料日に入院していたエリカには直接手渡されるのではなく、ファイアが代理人として受け取っている。現在エリカは手持ちのお金が無い。

「それにね、レナの店は騎士団の女性ご用達なのよ。こんな内装だけど、私たちの団服のデザインから製造まで全部レナが中心でやったるの。だから少しだけ割引してくれるのよ。ね、レナ？」
「ん？ ああ、そうよ。だからジャックさんも安心してね」
「安心できねえつつうの。ファイア、あんまりたくさん買ってくれんなよ？」

諦めたようなジャックの声が店内に響く。

「ところで、水着は買うのかしら？」

「そうね、エリカちゃんのを買おうかしら」

「みずぎ、とは？」

「……………」

レナの問いに至極真面目な顔で答えてしまったがために、何故か物凄く可愛そうなものを見るような目で見られてしまった。

レナは小さくため息をつくとき店の反対側に向かって歩いていった。

「ええとね、エリカちゃん。水着って言うのは水の中に入るときに着る……服よ」

「そこで一瞬の躊躇いがあったのはどういう事ですか？」

何故か目を逸らされたので、フィアの顔を回り込むように覗き込むエリカに、気を取り直したジャックがエリカの肩を叩いた。

「来月、と言ってももうあと20日もないんだが、エオリアブルグでの大会があるだろう？ 実はエオリアブルグの首都の近くに大きな湖があるんだ。大会が終わったらその近くで各国の騎士団が和気藹々やるうってのが通例になってるんだ。まあ、戦い合った者同士仲良くやるうぜ、ってことで遊ぶのもアリだろ？」

「ジーンさんたちもその、水着ってやつを買うんですか？」

「俺たちは元から持つてる奴で行くさ。ジャック、またあの恐ろしい奴着るんじゃないぞ」

ジーンが思い出したくもない、という表情でジャックにそう言うと、ジャックは心外だと言わんばかりに胸を張ってジーンを見下ろしてみせる。

「ビキニパンツこそ、男の肉体美を漏れなく知らしめることが出来る唯一の水着だ。いつまでも短パンなお子様には分からないだろうがな」

「なっ！ あんなのただの露出狂だろうが！」

「なにい！？ 水泳競技をしている全世界の男たちに謝れ！」

「貴様だから言っているんだ！！」

「女性用の服屋で何を話しているんだか……」

言い合いをしているジーンとジャックを尻目にレナが戻ってきた。その手に数着の水着を持って試着室の扉を開けると、エリカを手招きして2人で試着室に入る。

フィアはとりあえず今にも取っ組み合いをし始めそうな男2人を鎮めるために小さく息を吐くと、2人に向き合った。

「少し、頭冷やそうか……」

「「すいませんでした」」

頭に大きなたんこぶを作ったジーンとジャックは試着室の前で正座をさせられていた。

「分かればよろしい。と、そろそろかしら」

エリカとレナが試着室に入って随分経つ。

フィアは2人の耳が物理的に痛くなるほどお説教をしていたから時間の経過に気が付かなかったが、どうやらだいぶ時間が経ってしまったようだ。

「こ、これはいくらなんでも見せすぎではないでしょうか……」

「良いのよ、水着だし、これくらいは当たり前よ」

「で、ですが、これでは防御力というものがあまりにも脆弱では……」

「こんな格好で戦場に出るつもりなら、止めておきなさい」

何やら試着室の中から可笑しな会話が聞こえてくる。

「そ、それに、これは……見えてませんか？」

「うーん、ちよつとキツイかしらね。女性の魅力を引き出すならこれが一番なんだけど」

「そういうのは結構ですから。ああ、これなら、まだマシですね」

「ええ、それ？ ていうか何故それを選んだ！ 私それを持ってきた記憶ないわっ、ってちよ、破壊力ヤバッ！」

試着室の扉が勢い良く開いてレナが飛び出してきた。随分と息が荒いようで、心配したフィアがレナに駆け寄る。

「ど、どうしたの？」

「あ、あの子に黒のビキニは殺人級……ガク」

鼻から血を流し、親指を立てながらレナは意識を失った。

「あ、あの、レナさん大丈夫ですか？」

開いたままにされた試着室の扉の向こうからエリカが顔だけを覗かせながら少し戸惑った表情をしている。

フィアは小さくため息をつく、エリカに顔を向けて首を横に振った。

「こいつの悪い病気が出たわ。当分起きないと思うわ。まあ、死にはしないだろうから大丈夫よ。それで、気に入った水着はあった？」

「え、ええと、よく分からないので適当に選んだら突然レナさんが飛び出してしまつて……。でも、今着ているのが良いかなあと」

「へえ、どんなのよ。見せてみて」

「こ、ここですか？」

しどろもどろになりながらエリカが困った表情をする。その視線は依然として正座をさせられているジーンとジャックに向けられている。

視線を追って男2人に行きついたフィアはなるほど、と納得して男2人を物凄い形相で睨んだ。

その目を直視したジーンとジャックは瞬時にエリカに向けていた視線をまっすぐに正した。

「それじゃ、それでお会計済ませましょう。エリカ、着替えてその水着を持ってきなさい。さっきのワンピース、私が着てる服のデザインの奴、そしてその水着をジャックに買ってもらうから」

この日、エリカは自分だけの服が5着増えた。

ファイアの服とお揃いの服、レナが選んだワンピース、そして、自分が適当に選んだ結果レナの吐血と鼻血を誘った水着。

これらが日の目を見るのは、エオリアブルグに行った時だろうか。

ちなみに、ジャックは案の定と言おうか持ち合わせでは足りず、騎士団の方に領収書が送られて大幅な天引きを喰らう事になった。

そんなジャックが思う事は1つだ。

「なぜ、ジーンとファイアは金を出さない」

ただ、それだけであった。

自業自得なのだが。

番外編 レッツ、ショッピング！（後書き）

最後に書きましたが、この番外編は番外編のくせして本編に後々絡んじゃいます。と言うより、「ああ、あの時の奴か」程度でしょうけど。

結構中途半端に終わってしまったのもそのせいなんですよね。

まあ、あれですよね。

女性用の洋服とかの店に男が引きずりこまれて服選びに付き合われるのは世の性^{さが}ってやつですよ。

結構、男衆が空気だった気もしますが。

そして、何か起こるとすると大体フィアがきっかけと云う……。

1人くらいこういう人いないと面白くないしなあ……

ま、番外編はまたそのうち出来たら良いなあ、なんて願望を持っています。ネタが尽きるのが先か、完結するのが先か、難しい所ですね。

ではでは、皆様、また次回。

ご感想などお待ちしております。

第37話 鍛冶職人ムラミツ（前書き）

うん、前書きで書くことないですね。

ではどうぞ

第37話 鍛冶職人ムラミツ

「やっと、着いた……」

次の日はほぼ一日中走り続けた。

途中に休憩を取れるような大きな町もなく、その日はお約束とばかりに野宿をする羽目になった。街道の脇の木陰に馬車を止め、ジョンとジャックが3時間交代で番をしていたこともあり、エリカとフィアは安心して寝ることが出来た。

夜盗まがいの事をしていた若い男が2人、運悪くジャックが番の時に夜襲をかけてきたようで、返り討ちにあつて木の幹にロープで巻き付けられていた。

翌朝、つまり今日だが、エリカとフィアが起きてきた時はさすがの2人も驚きを隠せなかった。顔中に打撲痕のある情けない姿の男が2人を失った状態で木に縛り付けられているのだ。ジャックから夜盗だという説明を受けるとエリカは至極冷やかな眼差しに変わり、フィアはエリカを起こす時のようなハイライトの消えた、感情のない表情で火球を作り出そうとしたので、全員で慌てて止めに入ったほどだ。

出発する時も、ロープは解かなかったが運が良ければ通りがかつた人に見つけてもらえるだろう。一応街道から見える位置に縛りつけておいたので、餓死することはないだろう。猿ぐつわをしたわけでもないのが付けば自力で助けを呼ぶことも出来るはずで、4人は一切の躊躇もなく夜盗の男2人を放って出発した。

そんなちよつとしたトラブルに見舞われたエリカたちであったが、その日は何のトラブルもなく、順調に行程を消化し、その日の夕方には目的地である鍛冶屋の家にとり着くことが出来た。

平屋建ての一軒家で、母屋の他に幾つかの倉庫や何かの作業場と思われる建物が密集して建てられている。その全てを囲むように塀が建てられていて、正面の門をくぐるとそれまでの光景とは全く違つ、まさしく別世界が広がっていた。

「なんていうか、情緒溢れる家ねえ」

「俺たちもこの間来た時は似たような感想を持ったよ。どこか世俗離れた雰囲気があるからな」

「お待ちしておりました、ジーン様、ジャック様」

母屋までの長い石が敷かれた道を進みながら周りの庭などを興味深げに眺めていると、母屋の玄関の扉が開いて1人の女性が姿を現した。エリカたちとはまた文化圏の違う服装をしている、「黒髪」の女性、まだ少し幼さを残した彼女はジーンとジャックに向かって小さくお辞儀をすると静かに歩いてきた。

「あれ、俺としたことがこんな綺麗なお嬢さんがいることに気が付かなかったのか。この人かい？」

ジャックが、頭の上に疑問符を浮かべながら目を細めた。

確かに、エリカも出発前の話ではトウキの跡継ぎはいないようだが、という話を聞いていた。

「ああ、先日来ていただいた時は所用で外出しておりましたので。
私はヒナ、第23代トウキである父ムラミツの娘でございます。あ
なた方のお話は父より聞いております。どうぞこちらへ」

長い黒髪は腰の下あたりまで伸ばされている。目の色も黒く、どこ
か不思議な雰囲気醸し出している。

ヒナと名乗った女性は物静かな物腰でエリカたちを母屋の中へと誘
い、応接間に案内した。いざな

応接間にはすでに年老いた男性がいた。

エリカたちに気が付くとゆっくりと立ち上がり、ヒナの時同様に小
さくお辞儀をすると男性の反対側の席を勧めた。

「先日はどうも、ジーン殿、ジャック殿」

「こちらこそ。ムラミツさん、と仰るのですね、先日はトウキとい
う名称しかお教えして頂けませんでしたが」

ジーンが丁寧な物腰で一礼する。

ムラミツ、という名を聞くと男性は少し困ったような顔をして、こ
こまでエリカたちを案内してきたヒナに視線を向けた。

「あまり私の名を出すなど言っているだろう。トウキの名を継いだ
以上、それまでの名は捨てねばならんことはお前が一番分かっ
ているだろう？」

「う、ごめんなさい、父様」

諫めるだけで、それ以上責める気はないようで、ムラミツはそれだ

け言つと顔を元に戻した。それを待つてからヒナがムラミツの隣に座り、丁度エリカの真正面に座る形になった。

「それで、使えなくなった刀を鍛え直してほしい、という依頼でしたな。してその得物は？」

ムラミツは話を切り出し、エリカが持つてきていた刀をムラミツに差し出した。刀を見た瞬間、ムラミツの表情が強張ったが、すぐに冷静さを取り戻してエリカが差し出した刀を受け取った。

するとムラミツは小さな小槌のようなものを取り出した。手に収まってしまうほど小さなものだが、ムラミツはその小槌の細い持ち手の棒で刀の目釘を器用に抜き取ると、鞘から刀を抜いた。

「これは……、随分と腐敗しておりますな。錆ではなく、魔力に中てられたのでしたな」

半ばで折れた刀をしばらく観察すると、柄の部分を軽く叩いた。するとただでさえグラグラだった刀身が支えを失ったかのように不安定なつた。そして刀の根元、刃が覆われている部分を手で持つて柄から刀身を取り出す。

ヒナが素早く白い布を机に広げると、その上にムラミツが静かに外した刀身を置き、それにならつてエリカも刀身の折れた先端を布から取り出して折れた部分が符合するような位置に置いた。

そしてムラミツは刀の全体像を見て腕を組むと、大きく息を吐き、視線を刀身の端から端までゆっくりと移動させていく。その間、エリカたちは黙つてその様子を見つめるだけだ。

「……この刀、一体どこで？」

しばらくしてムラミツは顔を上げるとエリカに向かってそう尋ねた。

「え？ ええと、確か武器庫か何かから持ってきた模擬剣が入っていた箱、でしたっけ？」

「ああ、確かそうだったはずだ。それがどうかしましたか？」

それを聞くと、ムラミツは随分と残念そうなため息をつき、ヒナもどこか表情が曇った。

「まあ、このご時世刀を使う方が皆無なのは致し方のない事、ヒトを斬る刀より龍を殺す大剣が求められておりますからな。しかし、それでも刀がそのような扱いを受けているのは残念な限りです」

「父様……」

ヒナがムラミツに寄り添おうとするが、ムラミツがそれを制した。ヒナに優しい笑みを浮かべて姿勢を正すと、エリカに向かって頭を下げた。

「不肖このムラミツ、トウキの名にかけて貴殿のこの刀、見事に鍛え直してみせましょう。して、何かご要望などはございませうか？」

「あ、それなんです……」

エリカはそこで出発前に尋ねられた袋を取り出した。そしてそれをムラミツの前に差し出すと、袋のひっくり返して中に入っていたものを机に出した。他でもないエリカの黒鱗だ。

「……これは？」

「詳しくは聞かないでください。ですが、それを素材に加えて刀を鍛え直してほしいのです。そして、最高の刀をもう一振り」

「2本と？ ではもう1本は新しく御造りいたしましょう。長さはこちらの本来の長さと同じで？」

エリカは小さく頷く。

ヒナがエリカが出した黒鱗を不思議そうに見つめ、手に取って軽く小突いてみる。

「父様、これはその辺の鋼はがねよりはるかに硬いです。こんな鉋物、初めて見ました……」

ヒナの驚いたような声を聞いて、ムラミツも黒鱗を手に取ってみる。そしてヒナのように手で叩く事もなく、その顔が驚愕の色に染まった。

「信じられん……。生まれてこの方、このようなものを見たのは初めてだ。しかし、これなら確かに最高の言葉が似合う刀も作れるやもしれませんな。全力を尽くさせてもらいます。そうですね、今日から始めるとなると……1週間ほど頂きますが、大丈夫でしょうか？ この刀の修繕は数日もあれば十分ですが、新しい刀は今から全ての準備を開始します。それくらいの時間は覚悟して頂きたい」

「それでも、1週間？ お1人で大丈夫なのですか？」

ファイアが驚いて身を乗り出した。

刀剣問わず、製造には体力が不可欠だ。いくら2本のうち1本が修復とはいえ、1週間で、しかも1人でやるというのは、無茶なので

はないか、とフィアは心配したのだ。

そんなフィアの心境を知ってか知らずか、ムラミツは穏やかな笑みを浮かべるとヒナの肩を叩いた。

「それでも、私の技術を受け継いだ私の娘です。新刀はヒナが御造りします。この子にも良い経験になるでしょう。このご時世、刀を作る機会にはなかなか恵まれませんからな、しかも、こんな不思議な鉱物を加えるという滅多にない事も出来るのです。老い先短い私がやるより、ヒナにやってもらった方がトウキの将来のためにも有益でしょう」

「父上、まだ教えてもらっていない事が山のようにあります。それを全て教えていただけるまで、黄泉よみの世界になど私が行かせませんからね」

にこやかに、だが確固たる決意がヒナの言葉から感じ取れる。

決して屈強とは言えない細い腕をかざして、ヒナはエリカに向き合った。

「私が、全力を持って最高の刀を作り上げてみせます、……ええと」「エリカです。よろしく願いますね」「分かりました、エリカ様」

入っていた袋に黒鱗を戻して、それを手にヒナが応接間から出ていった。それを見計らってムラミツは折れた刀身を手に取るとそれを窓から差し込む太陽の光にかざす。通常なら美しく光るだろうところだが、やはり鈍く乱反射している。刀身の表面もかなり腐食が進んでいたようだ。

「正直、ここまで腐敗が進んでいるとなると、修繕、ではなく差し換えの方が適切かもしれません。折れてしまっただけはその後接合してもやはり強度的な不安が残ってしまいます。その場合は、新刀同然になります。先にご了承承願したい」

そう言うのと、ムラミツは立ち上がり、それに反応してエリカたちも立ち上がった。

「刀を鍛え上げるまでは、我が家にお泊りください。部屋はヒナに案内させますので、ゆっくりしてってください。夕飯の時間になりましたら、お呼びいたします」

そのムラミツの台詞に合わせたかのように、ヒナが応接間に戻ってきた。

「どつぞ、こちらへ」

案内されたのは、母屋の一室だ。

畳が敷かれた八畳ほどの部屋で、壁は全て隣の部屋と襖ふすまで仕切られているだけで、廊下に面した襖を開ければ、広い庭が一望できるようになっていた。

「エリカ様とフィア様はこちらをお使いください。殿方は、2つ隣のお部屋です。何か御用があれば私をお呼びください」

「すまんな、部屋に加えて寝間着まで用意してもらって」

ジーンは今手に持っている寝間着を少し持ち上げてヒナに礼を言った。知る人が見れば、それが浴衣に似た形状の服だと分かるだろう。

「いえ、わざわざお越し頂きましたから。これくらい、なんてことはないですよ。それに、少し意外でもありましたから」

ヒナはそう言いながら視線をエリカに移動させた。

「意外？」

「刀を使うのが、私よりも年下の、あなたのような少女だとは思っていませんでしたから。もっと年季の言った老練な方かと」

（年季、は入ってますけどね）

子供扱いされるのはあまり好きではない。見た目はともかくこれでも三桁の歳だ。

「夕飯の用意までまだ少々時間があります。どうです、1戦やりませんか、エリカ様」

「はえ？」

ヒナは笑顔のまま、どこからともなく2本の木刀を取り出した。そしてそのうちの1本をエリカに手渡すと、そのまま廊下を横切って庭に出た。

エリカはどうするべきか悩んだが、そこで自分の戦い方に考えが及んだ。

エリカの戦い方は流派に沿ったものではない。ケンカ殺法に近いものだ。バーバラから多少の技術を学んだとはいえ、刀の正しい使い方を自分が行っているとは言えない。

少なくとも、今日の前で柔和な笑顔を浮かべて木刀を軽く振っているヒナは、エリカよりも刀の使い方に長けているだろう。刀を使って戦える人間は数少ない。ならばここで何かを学んでいくのもエリカにとっては今後のためになる。

「……良いですか？」

一応、ジーンたちには了承を取っておくことにした。すると3人も笑顔で首を縦に振った。

それに小さく頷いて返すと、エリカも庭に躍り出て、ヒナと真正面から向かい合った。

「流派などは、あるのですか？」

「いや、まったくです」

戦う前の確認と言ったところだろうか。ヒナがそう尋ねてきたので、

正直に答えると苦笑された。

「ふふ、では我が家の流派をお教えしましょう。何も考えずに戦うよりも、刀での戦い方を知っていた方が良いでしょう。剣ケンと刀は違うんですから」

ヒナは屈託のない笑みを崩さずにエリカにそう言った。

そして静かに両手で木刀を持つと、切っ先がエリカの喉元になる高さで構えを取った。

「まずはあなたの今の実力を計らせてもらいます。若輩ではありませんが、どうぞよろしく」

「こちらこそ、お願いします」

庭の中央で、2人は静かに向き合った。

良く考えれば、こんなに静かな場所で戦うのは生まれて初めてだ。聞こえるのは風が流れる音くらいなものだ。

庭に面した縁側にはジーンたちが座ってエリカたちの戦いを眺めようとしていた。それを視界の端に捉えながら、エリカはヒナの一挙一動に意識を集中させる。

「刀ヤ姫一刀流、ご賞味を」

「トウキ……？」

ムラミツの刀匠として代々受け継がれている名、トウキと同じ名の流派だと聞いて、エリカは顔をしかめた。すると、そのような顔をされることを想定していたようで、表情を崩さずに少し横に滑りな

がら口を開いた。

「私たちの祖先、初代トウキは女性だったのです。自ら刀を造り、また名のある剣豪でもありました。彼女が作り出した流派が刀姫一刀流、力で劣る女性でも男性と互角以上に戦える事を目指したのです。刀鍛冶としての彼女は、流派の名を皆伝した鍛冶職人に受け継がせ、父様まで受け継がれました。刀鍛冶としてのトウキと、刀姫一刀流は一蓮托生なのです。どちらかがなくなればもう片方もなくなってしまう、脆いものでもあるのですが……」

少しばかり、淋しそうな表情をヒナが浮かべた。

だが、姿勢はピクリとも動じない。切っ先はエリカに向けられて微動だにせず、ヒナはすぐに表情を元に戻してエリカを見据える。

エリカは、話している最中も隙あらばヒナに飛び掛かろうと考えていた。

不意打ちは卑怯だ、と言う者もいるだろうが、世の中全て正々堂々やって済むものではない。時には邪道が正道に勝つことだって決して珍しい事ではない。

しかし、ヒナは自分が話している最中ですら、一切の隙を見せなかった。ヒナはまだ成人するかしないか、という歳に見えるが実力はかなりのものようだ。ジャックや、ジーンとはまた違う威圧感にエリカは息を呑んだ。

ジャックやジーンの威圧感が刺々しいモノと表現するなら、ヒナのそれは全てを包み込んでしまいそんな穏やかな威圧感と言えよう。

決してこちらに敵意をむき出しにしている訳ではない。にも関わらず、エリカは動けば自分がやられてしまうような感覚に襲われた。一点に強烈な殺気を集中させるのが普通なのだが、ヒナは自分の周囲一帯に自分の意識を張り巡らせているようなものなのだ。

飛び込めば、返り討ちに合う自分が簡単に想像できてしまうのだ。

(強い、なんてものじゃない……下手をすればジーンさん、いやジヤックさんよりも……)

だが、いつまでもただ向かい合っているだけじゃ話が進まない。

意を決してエリカは一步前へ踏み出す。

一瞬、ヒナの持つ木刀がピクリと動くが、ヒナの反応はそれだけだった。エリカが動くのを待っている、いや誘っているかのような感覚を覚えるが、この際自ら飛び込まなければ何も起こらない。

「行きます！」

エリカは腹から声を出して、一気にヒナ目掛けて走り出した。

第37話 鍛冶職人ムラミツ（後書き）

侍同士の戦いって、刀は消耗品なんだそうです。

刀同士で打ちあっても刃こぼれるし、相手を切っても骨の所で刃こぼれるし、2、3回斬ればもう使い物にならなくなってしまいうそです。

戦場では落ちている刀を再利用するのは日常茶飯事だったというのですから、名刀担いで戦場行く人なんていないでしょうね。

戦場から生きて帰っても持っていた刀と違う刀を持って帰るなんてこともきつとたくさんあったんでしょうな。

ともなれば、名刀は戦場を知らない刀。

人を殺す武器が戦場に出ないで済む、なんか矛盾していて、不思議です。

使ってなんぼ、なんて考えちゃいますけど、それなら現在名刀とか国宝なんて残ってないですよね。

日本人、昔の日本人にとって、刀は武士の魂とも呼ばれ、特別な存在だったことも、それだけの価値があるものだ、作者は勝手に考えています。

ではでは、また次回お会いしましょう。

感想、誤字脱字の報告など、お待ちしております。

第38話 刀姫一刀流の実力（前書き）

今日から9月！

夏休みが明けて読んで下さる方が激減するのではないかとビクビクしているハモニカです。

え？

元から読む人少ない？

ならもつと減る事を心配しているのですよ。

まあ、こんな作品を読んでもらってくださっている方々にはこれ以上ない感謝をしているので、数が減っても問題ないんですがね。

しかしまあ、いつの間にか25万字突破しましたよ。すでに私の自己記録を超えていました。

いつの間にか未知なる世界に飛び込んでいましたよ。話数はまだまだですが、1話の密度が上がっているので気づきませんでした。

目指せ30万字！

……なんかあつという間に来そうな予感。

まあ、そんな感じでもって……

2014

第38話 刀姫一刀流の実力

ヒナは目の前に少女を見据えて彼女の技量を計りかねていた。

戦って技量を計るとは言ったものの、正直その人の技量ぐらい見ただけで分かる程度の技術は持っているつもりだった。

だが、目の前の少女、エリカは今までにない、異常な存在に思えてならなかった。

ヒナが流派の説明をしている最中も、エリカは何度か飛び掛かろうとしていた事はヒナには分かっていた。むしろ目の前にいて分からない方がおかしいのだろうが、少なくとも目に見えた動きはほとんどなかった。

ただ、エリカはヒナの一挙一動に意識を集中させていたところからも、隙あらば飛び掛かろうとしていた事は間違いない。

だが、それほどに血の気がある騎士であれば、どこかしらで不意打ちをしてくてもおかしくはなかった。ヒナも不意打ちされるだろうと思って話していた。来る事が分かっていたらそれは不意打ちではないのかもしれないが、この際それは置いておく。

飛び掛かかりたい衝動に駆られていただろうが、エリカはそれどころかヒナから攻撃をしてもらおうとわざと隙を作ってヒナを誘っていた。

エリカの技量を計るためでもあるから、できればエリカから攻めてきてほしかったヒナはわざとその隙に気づかなかつたふりをしたのだが、正面から見ていなければ分らないほどのわずかな隙だった。

(計ると言つて、計られていたのは私わたしだったかも……)

自分が戦う相手がどれほどのものか、エリカは逆に計っていたようだ。

それを直感で気が付いた瞬間、ヒナはエリカがそこらの騎士とは比べ物にならないほどの実力者だと悟った。

そして自分でも気が付かないうちに笑みが零れていた。それは、それほどの技術を持つエリカが刀を使っているという事に対する感謝と、エリカに対する畏怖が込められていた。

今現在、刀を使う者は世界広しと言えども非常に少ない。そもそも出回る刀の数が少ないのだからそれも当たり前だ。

質の悪い模造品などは多少出回ったとしても、そんなものを使う騎士はいないだろう。逆に名匠の鍛えた刀は物好きな貴族が買い占めたりと、まともな騎士の手にある刀はそれこそ皆無に等しい。

エリカが持ちこんだ折れた刀は、刀身が腐食してボロボロにはなっているが、使い手の不得手による損傷はほとんどなかった。鞘が妙に傷ついていたが、どうやら刀で攻撃を弾かずに鞘で弾いていたのも、損傷の少なさに繋がったのだろう。

付いた傷はほとんど攻撃に伴い仕方なく付いたものと考えられる。

つまり、それほどまでに刀を使いこなしていたのだ。

これで刀の使い方をほとんど知らないと言うのだから、信じられないという言葉しか出ない。

ヒナは、だからこそ、笑みが零れたのだ。

それほどの技術を持つエリカが、自分が鍛える刀を使ってくれる。それだけでも鍛冶職人として感極まる。

その上、ヒナはエリカに刀姫一刀流を教えるつもりだ。

それによってもたらされる結果を想像して、ヒナは武者震いをしてしまった。そんな機会に恵まれた自分が嬉しくもあり、そしてヒナにとって一世一代の最高の一品を造り、それを使うに値する流派の継承者を生み出すその場に居合わせる事が出来たのだ。

これほど嬉しい事はない。

刀の製造には1週間弱。

それとは別にエリカに流派を教えるとなれば、これまでにないハードなスケジュールになる事は不可避だ。

だが、刀を造ること以外で忙しい事がほとんどなかったヒナには、それはまた新鮮な感覚であった。

（忙しいのがこれほど楽しみなのも、また久しぶりです……）

ヒナはそんな事を考えつつ、人知れず笑みを零していた。

最初の一步を踏み込んだ時、エリカはヒナの反応に意識を集中させていた。ヒナが迎え撃つのか、受け流そうとするのか、その辺りは相手の初動で大体決まる。

だから、目の前に迫るまでヒナがほとんど動きを見せなかったのは少々動揺してしまった。

（受ける気……そんなわけではないですよね！）

木刀を振り上げてヒナの肩口を狙って振り下ろそうとする。

そこで初めてヒナは大きく動いた。

大きく、と言っても、回避、受け流し、などという動きではなかった。

ただ、構えていた木刀を突き出しただけ。

だが、その突きはエリカの振り下ろす木刀の速度を遙かに凌駕していた。先に動いたのがエリカだったにも関わらず、先に攻撃を入れたのはヒナだった。

「かはっ」

「いくら早くても、これではカウンターを打たれ放題ですよ」

ヒナの突きはエリカの鳩尾を捉えていた。エリカの突っ込む勢いと、ヒナの刺突が相乗され、相対速度はそれこそ人が成せる速度を軽く超えており、結果として黒鱗が発現していたにも関わらず胃の中身が大暴れさせられ、口の中が酸っぱい液体で満たされてしまう。

かろうじてそれを飲みこむが、黒鱗があつてこの威力、普通の人間なら簡単に背骨まで折られていたかもしれない。

「こ、殺す気ですか……」

涙目になりながらヒナを憎たらしげに見上げると、ヒナは慌てて両手を振った。

「そ、そんなわけないじゃないですか！ エ、エリカ様の速度があまりに速くて、つい加減が……」

あらぬ嫌疑をかけられて泣きそうな顔になるが、泣きたいのはエリカの方だ。

とはいえ、ヒナがエリカの攻撃を見切っていた事にエリカは内心驚いていた。全力、とまではいかないが7割から8割程度の力で突っ

込んだのだ。あれを見切るとなると、ヒナに対して速度を生かした攻撃はあまり効果が無いように思える。

元より相手も同じ武器、大剣相手とは違って武器の取り回しにおいてアドバンテージはない。大剣相手なら速度を生かして連打、取り回しの遅さを狙って攻撃することが出来るが、同じ武器ではそれも出来ない。

「刀姫一刀流、隼。相手のスピードを逆手に取って最小限の動きで最大限のダメージを与えます。結構深く入ったと思うんですが、大丈夫ですか？」

地面に倒れたままのエリカに手を差し伸べながら、ヒナは心配そうにエリカのお腹の部分を見た。エリカはヒナの手を掴み、反対の手でお腹を押さえながら立ち上がると、軽くお腹を撫でながら苦い笑みを浮かべた。

「痛い、なんてレベルじゃないですよ。これは芯に来ました……」

黒鱗があるため傷はない。だが、内出血しているのだろうか、鈍痛が少し残っている。衝撃だけでここまで来るのだから、滅茶苦茶威力がある事は一目瞭然だった。

「……強いですね」

「エリカ様こそ、人並み外れてますよ。今を受けて普通に立ててるんですから。それじゃ、続けますよ」

「ヒナさん、あなたも結構戦い好きですね」
バトルマニア

苦笑いがさらに引きつる。

お淑やかで物静かな印象しかないのに、笑顔が怖い。

そこに至ってエリカはヒナがバトルマニアか、それに準ずるレベルの人間であることを直感的に察した。

「ふふ、全力で行かなければあなたに勝てる気がしませんから」

ヒナはそこで言葉を切ると、今度はヒナの方から動いた。

緩やかなカーブを描きながらエリカとの距離を詰めると、腰の位置で構えていた木刀を逆袈斬りで下からエリカに斬りかかった。

エリカはそれを木刀で弾き返し、一瞬出来たわずかなヒナの隙に刀を構えなおさず柄頭つかがしらでヒナの胸に強烈な突きをお見舞いする。

「くっ！」

ヒナの表情が歪み、一步後退した。

だが、そこで距離を取られればまた振り出しに戻ってしまう。エリカは距離を開けずにヒナに突貫し、決して距離を取られないように張り付いた。

距離を詰めれば大振りの攻撃は出来ない。

お互いが隙の小さい小技を繰り返す乱打戦になるが、2人とも決定打に欠ける結果になってしまう。痺れを切らしたエリカは自分が持つ木刀を弾かれた勢いを利用して木刀を振り上げると、思い切り目の前にいるヒナの頭めがけて振り下ろした。

「駄目ですよ、忍耐は必須です」

事そこに至っても、ヒナは至極冷静だった。ヒナは頭の斜め上の辺りで木刀を構え、左手を木刀の峰みねに添えてエリカの木刀を迎え撃った。

木と木がぶつかり合う甲高い音が響き、エリカの木刀をヒナの木刀が受け止める。とはいえ、上から振り下ろされた木刀と、それを受け止める木刀、どちらに分があるかというところエリカの方だ。おまけにエリカはヒナよりはるかに力がある。

(行ける……っ！)

このまま力押しすれば勝てるかとエリカが思った瞬間、ヒナは持っていた木刀をエリカから見て左側に逸らした。力を入れていたエリカの木刀がヒナの横を通過し、前につんのめるような体勢になってしまう。そして、ヒナが逸らした刀は腰の位置でその切っ先をエリカの胸に向けられていた。

「刀姫一刀流、切っ先返し」

エリカに向かって左足を踏み込むと同時に地面に水平に構えていた木刀を突き出す。寸分の狂いもなく

ヒナの木刀はエリカの胸を捉え、エリカの身体がくの時に曲がる。

(同じところに2回っ！)

まだ痛みが引き切っていないところに追い撃ちとばかりに入った突きに、エリカは苦悶の表情を隠せなかった。

「まだまだだ！」
「うそっ!？」

身を翻してヒナは強烈な蹴りをエリカの腹へと送り込み、物の見事にエリカは吹き飛ばされてしまった。地面に叩き付けられて木刀が手放しそうになるが、そこは根性で握りしめる。

「けほっ、ヒナさん加減つてものを知らないんですか……」

「だから言ったじゃないですか、加減してたらあなたには勝てないと。それに、見たところ怪我はないようですし」

「いや、中身は結構来てます……」

おそらく今服を捲れば紫色の痣を見ることが出来るだろう。黒鱗の防御を突破してこれだけのダメージを喰らうのは、さすがに初めてだ。

ジーンの白鱗の大剣は、そもそも「白鱗の威力>越えられない壁>黒鱗の硬度」という構図をエリカは知っている為、ノーカウントらしい。

「あまり客人を痛めつけるのは好きではないのですが、負けず嫌いでして」

「お互い様のようですね。それよりも、刀姫一刀流の方こそ、本気まだ見てないんですか？」

「おや、気づいてましたか」

少しヒナが嬉しそうな顔をする。

エリカがそう思ったのは、そもそも技名を言って行われたヒナの技が2つともカウンター技だったこと、それ以外はエリカとほぼ同じ

ような戦い方をしていたからだ。

ヒナから動いたことはあったとしても、ヒナから攻撃的な技を受けていない。防御から派生する技が多い、というべきか。

「なら、お見せしますよ。丁度距離もありますし……」

そう言うと、ヒナは木刀を腰の位置に構える。丁度真剣ならば鞘に収まっている位置だ。そして右足を一步踏み出し、エリカに視線を合わせる。

「どんな技が来ようとも、受け切ってみせますよ。じゃないと刀姫一刀流を学べない」

エリカの中には習うより慣れろ、芸は盗むもの、と言った考えがある。

口で説明できることなど限界がある。実際に見て、受けてみなければ本当に理解したことにはならない。ならば多少の負傷でもエリカにとっては想定範囲内ということになるのだ。

「……刀姫一刀流居合」

(ッ！ これはまずい！)

気の流れ、と説明するのが一番適切なのだろう。

風の流れではない、何かエリカに向かってヒナから流れ出している。そしてそれはエリカに向けられた殺気すら運んでくる。

距離は5メートル以上。

にも関わらず、とてもじゃないが回避できる気がしなかった。この距離で振っても、当然のことだが空振りに終わるのは目に見えている。

だが、エリカには「刃ではない何か」自分に届いてしまう事を本能的に察知した。そして条件反射的に木刀を身体の前で構えると、何が起こるのか全てを目撃するために目を見開く。

「
屠龍とじゅうりゆう」

ヒナが持っているのは木刀だ。

だが、エリカには鞘に収まっている真剣を見ているような錯覚に襲われた。

目にも止まらぬ速さ、とはまさしくこの事だろう。一瞬にして抜かれた刀は空気を斬り裂き、爆発的な突風を伴ってエリカに向かって斬撃を「飛ばしてきた」。

あまりにも速度があつたために、エリカもそれを認識して対応することはできなかつた。もし木刀を構えていなければエリカでもタダでは済まなかつたかもしれない。

構えていた木刀にその飛ぶ斬撃が接触した瞬間、木刀は綺麗な切り口を残して真っ二つになり、威力が多少軽減された斬撃はエリカの胴を捉えて発現していた黒鱗を軋ませた。

(だから、どうして腹ばかりっ！)

いい加減にしてくれ、と内心で毒づきながら、今度は吹き飛ばされまいと地面に足の裏を張り付けるような感覚で姿勢を制御する。正面から受け切るのは無理と即座に判断したエリカは身体を逸らして斬撃を受け流した。

「へえ、受け流しましたか。本当にすごいですね」

「な、なにが起こったんだ？」

疑問を口にしたのはエリカではなく、見物していたジーンだった。すでにただの打ち合いを遥かに超えてしまったエリカとフィアの戦いに、ただただ見入っていたジーン、フィア、ジャックの3人であったが、事ここに至ってこのままではどちらかが大怪我してしまうと思つて2人に駆け寄つてきた。

因みにアレックスは3人から離れて直接エリカに近寄つてきた。

<大丈夫か、エリカ殿>

「まあね、ヒトの姿だった事に感謝したよ、それよりも

」

言葉の真意が分からなかったアレックスは首を傾げた。そして何かを続けて言おうとしたところにフィアが駆け寄つてきてヒナに詰め寄つた。

「ちよつとヒナさん、エリカちゃんは騎士団の超新星スーパーなのよ。傷物にしないですよ？」

「そんなつもりは毛頭なかったんですが……」

「なら、最後のアレは何よ。木刀だったからあの程度で済んだよう

なものじゃない。真剣なら威力は数倍に跳ねあがったはずよ」
「フィアさん、その件に関しては大丈夫ですよ」

何だからヒナが完全な悪役になりかけていたので、エリカは助け舟を出すことにした。もとより自分から受けようと思ったのだ。そのことについてはヒナの責任ではない。

「どついう意味、エリカちゃん？」

「ええと、ヒナさん、最後のは、人に向かって使うものではなくて、大型の目標用の技ですよ」

どう説明して良いものか分からなかったが、こう言えばヒナには伝わるだろう。

案の定、ヒナは首を縦に振り、真つ二つに折れたエリカの木刀の上半分を拾い上げるとその切り口をジーンたちにも見えるように傾けた。

「刀姫一刀流居合、屠龍。強烈な斬撃を生み出してその斬撃が威力を持つ限り目標を決り続ける技です。技の性質上、小さな目標では逸らされてしまうので、対人よりは対ドラゴン、とでも言うべきでしょう。刀でもドラゴンと渡り合えるようにと、私の先先代、祖父の代に編み出された技です」

木刀がいとも簡単に折られたのだ。龍の鱗といえども無傷では済まない威力だ。エリカも、生まれて初めて自分の鱗が悲鳴を上げたのを聞いた気がする。物理的攻撃、魔法による攻撃、そのどれに対してもほぼ敵なしの硬度を持つエリカの黒鱗が軋んだのだ。木刀でその威力、真剣だったらと思うとエリカは冷や汗が止まらない。

「エリカ様の仰った通り、対人で使える代物ではありません。隙も大きく、回避されれば反撃は必至です。エリカ様がこの国のドラゴンスレイヤーであるのなら、と思い使った次第です。とはいえ、エリカ様、お怪我はありませんか？」

「全然、とは言いませんが、大丈夫です。しかし、刀姫一刀流、ますます興味が湧きました」

「おいおい、ただでさえ強い嬢ちゃんがこれ以上強くなったらどうするんだ？ 俺の楽しみが増えても知らんぞ？」

強くなることを否定しているわけではないジャックがニヤニヤしながら言っている。強い相手と戦うのが好きなだけに、エリカが強くなることは大歓迎のようだ。

「ジャックさん、なますに切り刻んであげますよ。覚悟しててください」

「なぜだ!？」

「さっきあたしのアレックスをモフモフしていたでしょうが!！」

これ以上にならない場の空気をブレイクする言葉。

エリカは戦っている最中、一瞬見物している3人プラス1匹が視界に入ったのだ。意識していたわけではなく、まったくの偶然である。

だが、見ればジャックがアレックスをワシヤワシヤしているではないか!!

アレックスのモフモフ権は自分に独占権として与えられているものと勝手に解釈しているエリカにとって、それは悪魔の所業に等しかった。

「覚悟は出来てますよね、ジャックさん？」

黒いオーラを背景に、エリカはヒナの持っていた木刀を奪い取るとジャックにゆっくりと歩み寄っていく。

「お、落ち着け、嬢ちゃん！ あれは出来心なんだ！ つい、うっかりなんだ！ 謝るから！」

「謝って済んだら

」

木刀を先ほどのヒナのように腰の位置で構え、そしてそれを逆袈裟斬りに近い勢いで斬り上げた、のだが、怒りのあまり我を忘れていたエリカは木刀で腹から反対の肩口へと抜ける逆袈裟斬りではなく、ジャックの男の象徴へと木刀を振り上げてしまった。

「警察いらんいですよ!!」

第38話 刀姫一刀流の実力（後書き）

さてさて、どんなもんでしょう。作者のハモニカです。

夏休みが終わって「ぐわあ」な方や「ひぎい」な方や「イイイイヤ
ッホオウウウ」な方など、十人十色ではないでしょうか？

因みに私はまだあと20日夏休みなので今日も昼起きでした。

いや、昨日は夜遅くまで起きていたもんでね。夏休みになってから
1日2食が当たり前、「痩せた？」って聞かれましたよ。

とまあ、そんな事はどうでもいいんです。

今回はちよつとした意見を募集しますのです。

題して……

「主人公の新しい刀の銘を決めよう！大作戦」

ワー、パチパチ。

どうでもいいわ!!

どうして、こんなことを言うか、それはですね、刀の名前ってどう
いう決まりになっているんだ!? という随分と面倒臭い問題にぶ
ち当たったのです。

いや、適当につけても良かったんですが、それではあまりにも厨二
臭くなるんじゃないかなあと思った次第でござーます。

別に厨二でも構わないのですが、カッコいい名前はないでしょうか？

一応設定としては、刀身は黒です。

正式名称は長くても結構ですが、略して使えるものが丁度いいかも
? です。

今もネットでカッコいい名前を漁っているのですが、じっくり来る
ものがない……。

と言う訳でこれを読んでいるであろう奇特な方々に助言を求めている
次第です。

「こんなのがいい!」

みたいなご意見や、

「このサイト見ると良いよ」

みたいなご意見でも全然かまいません。

どうか、この四流作者に力をお貸しください。

期限としましては、次々回までが良いかと思えます。それ以降でも、良い名前であればギリギリでも変更します。

お願いします。

タスケテクダサイ。

よろしくお願いします。

第39話 またまた知らない所で事態が動く

「いただきます」

ヒナとの壮絶な戦いを終えた後、彼女は別段疲れた様子もなくそのまま夕食の準備へと向かった。その際真つ二つにされた木刀の柄がある方をヒナに手渡したのだが、ヒナの手は当然と言えば当然ながら非常に鍛えられていた。

か弱い女性の白い肌には不釣り合いな肉刺まめを指や手の平に作っていたらしく皮膚が分厚くなっていて硬かった。

どれほどの間、ヒナが刀と付き合ってきたかを物語っていた。

エリカはヒナに勧められて母屋にある大きな風呂に入っておいた。ヒナとの手合せで土で汚れた上に、汗もかいたので、着てきた服をヒナに預けて湯船に浸かった。同じ運動量と思われるヒナが汗の一滴どころか息も乱していないのには驚かされたが。

ちなみに、手合せの後、男の象徴を木刀で殴打されたジャックはものの数分で復活した。不覚にもエリカはジャックがセーフティパットを付けていることに気が付かなかったのだ。

馬車の御者が座る場所は硬く、緩衝剤となるものが無いと尻が痛くなるそうだ。まさかそれが命を救ってくれるとは思わなかったと、冷や汗かきながらジャックは言っていた。

夕食の時間までに風呂を上がったエリカは、着替えの服を着ようとして少し困った事になってしまった。着替えと言うのは、ヒナに渡された浴衣の事で、当然のことながら着方などエリカは知らない。腰に巻く帯など、エリカは適当に巻いて解けなければ良いと考えて硬く結んでしまったほどだ。さすがにそのまま部屋に戻ったらフィアに文句を言われながら巻きなおされる羽目になった。

「あむ、……美味しいです！」

そんなこんなとちよつとしたハプニングはあったが、無事エリカは夕飯にあり付くことが出来た。

ヒナが今日のために、と言って作ったのは、エリカが騎士団の食堂で見慣れていたものとは全く異なった文化から生まれたものようだった。

魚や野菜が中心で、全体として油の少ないさっぱりとした味付けが多い。

そのためか、量が食べられる。

瞬間にエリカの目の前の大皿に並んでいた野菜や魚の天ぷらがエリカの口の中に消えていく。

「お口に合って良かった。ですがエリカ様、こちらの天つゆに浸すと、美味しさが2割増しですよ」

「なんと!？」

「はっはっはっ、細い身体のどこにそれだけ収めておるのやら……」

ムラミツの家では、食事は家族全員、客がいるのであればそれも含めて、全員で1つのテーブルを囲むことが慣わしならになっているそうだ。

長方形のテーブルの上座にムラミツが座り、そこから左右に分かれてエリカ、ヒナ、フィア、ジーン、ジャックと座っている。

最も料理の減りが速いのはエリカの前とジャックの前だ。ジャックもエリカに負けぬ大食漢だ。こちらは食べた分大きくなるという違いはあるが。

「エリカって、本当に何食っても平気だよな」

「んく、……ぷはっ、こんな美味しいものを食べ残すなんてありません。あ、ジーンさん、そっちの大皿取ってください」

エリカはジーンの前にあった大皿を指差しながらお椀を持ち上げご飯を口の中にかき込む。

「お気に召して本当に良かった。娘の料理は天下一品、文句を言うなら叩きだそうかと思いましたが」

にこやかにそう言うムラミツの顔には厳格さの欠片もなかった。オンとオフのギャップが大きく、エリカたちは相槌の微妙な笑みしか出てこなかった。

「それはそうと、エリカ様は刀姫一刀流を学んで下さるとか。それならヒナをお貸しいたします。明日から朝から晩まで使い倒して貰って構いませんよ」

「ちよ、父様！ 私は新刀を鍛えなければならぬんですけれど…

…」

不服を申し立てるために腰を浮かせたヒナがムラミツに向かって頬を膨らませる。昼間のお淑やかさもどこへやら、子供のような仕草を見せる。ヒナもオン・オフがあるようだ。

ちなみに2人のオン・オフのスイッチは酒だ。エリカとジーンの前にだけお茶が置かれており、残り全員は酒を飲んでいる。ジャックが喉を鳴らしながら酒を胃の中に文字通り流し込むと大きく息を吐いて目の前のジーンが顔をしかめている。

ムラミツは小さなお猪口に酒を入れると、クイツと口の中に投げ込むかのように酒を飲み、ヒナに視線を向けた。

「二兎を追う者一兎を得ず、だ。刀は私とお前で鍛えれば良い。2人で2倍速とまではいかんが、不眠不休ならどうともなるう。お前がエリカ様に刀姫一刀流を教え、その間、私がエリカ様の折れた刀を修復する。2、3日で修復させるから、見事エリカ様に刀姫一刀流を叩き込め」

「そんな無茶な……」

1つの流派をたったの3日で教え込めというのだ。それがどれほど無茶な事かは、言っているムラミツでも分かっている。

だが、ムラミツはエリカたちの都合も考慮した上でそう言ったのだ。大会を20日ほど先に控え、1週間しかここに留まれないエリカたちにとつて、1分、1秒が大切になる。

「首都からエオリアブルグの首都まではおおよそ4日、早馬ならばその限りではないだろうが、刀を鍛えるだけでも予定がギリギリな

のだ。そこに刀の修練まで入れるとなれば、致し方あるまい？ エリカ様にも、一汗と言わず、二汗、それ以上に頑張ってもらいたいが、よろしいですか？」

「もちろんです。3日と言わず、2日でものにしてみせますよ」

エリカがジーンから大皿を受け取りながら笑顔でムラミツにそう言うのと、ムラミツも頬を緩めた。

「それは心強い。これで私は憂いなく刀の修復に打ちこめます」

「そういう事なら、私も文句は言えません。エリカ様、明日は3時起きです」

「はいはい、……え？」

エリカの表情が凍りついたのは無理もない。

翌日の明朝、まだ太陽も上らず、空が徐々に薄明るくなってくる頃、エリカはヒナに静かに起こされた。むろん、隣で寝ているフィアを起こさないためだ。アレックスは起きてしまったので、エリカはアレックスを連れてヒナの後を追って外に出た。

庭にはすでにヒナが木刀を持って立っており、エリカが庭に来たのを見ると、木刀を投げ渡してきた。

「おはようございます、エリカ様。昨日はああ言いましたが、大丈夫ですか？」

「も、問題ありません。寝落ちしたらたたき起こしてください……」
さすがに、少しばかり意識が眠気に引つ張られている。自分の意志とは全く関係なく、視界がぼやけていく。早起きには慣れたつもりだったが、太陽が昇る前に起きたのはこの身体では初めてだ。瞼が鉛のように重く感じられる。

「そうですね……、なら眠気を吹き飛ばすのが良いですね」
「えっ　　っ!!」

刹那、強烈な風がヒナを中心に吹き上がり、風に乗って重苦しいプレッシャーがエリカに覆いかぶさってきた。眠気などあつという間に吹き飛ばされ、エリカは条件反射で木刀を構える。

庭の小石や砂が風に巻き上げられてエリカの顔を直撃するので、痛覚を伴ってエリカの意識は眠気から解き放たれることになった。

「ふふ、眠気は飛びましたか？」

しばらくすると何事もなかったかのように突風は止み、中央にいた

ヒナは笑みを崩さず歩み寄ってきた。

「ね、眠気どころの話じゃないですよ……。なんだったんですか、今のは」

「簡単な風の魔法ですよ。作り出した風に気を纏わせ、風に乗せて相手に放つ。ちよつとした相手だったら威嚇程度にはなりますよ」

「ちよつとした相手って……。気を失う人もいるかもしれないくらいですよ」

「でもあなたは立っている。それくらいしないと眠気飛ばないんじゃないありません？」

確かに、寝起きが弱いエリカは今でこそ定刻に起きられるようになってはいるが、やはり寝ぼけていることがままある。

それ以前に関してはフィアによって朝から炎と水のコンボ攻撃を喰らっていたのだ。自分がもう少しましな方法でも眠気を覚ませるという自信はエリカにはなかった。

「はあ、まあ眠気が覚めたので問題ないか……。では、今日は何を？」

「朝食前には切り上げますので、基本的な事だけを」

「朝食前？ 朝ごはんはヒナさんが作るんじゃないんですか？」

「我が家ではご飯は交代制なんです。昨日は私の日、今日は父様がする日、もちろん、お客様がいる時はお客様にも台所に立ってもらいますよ」

（嫌な予感がする……）

何やら、自分の身に重大な危機が近寄っているような気がしてならない。だが、その正体が何の事なのか分からないエリカはただその

見えない脅威に冷や汗をかく事しかできなかつた。

「なので、思う存分鍛錬出来ますよ」

「……ちなみに、ムラミツさんの料理の腕前は？」

「ふふ、私に料理を教えたのは父様ですよ」

「なら安心！」

とりあえず眼前の不安は解消された。

それほどに、昨日のヒナの料理は美味しかったのだ。夕食の後、酔ったジャックがムラミツとジーンを巻き込んで飲み会を始め、ムラミツも前祝いだと言って騒いでいたのが記憶に残っているが、その間食器をエリカ、ヒナ、ファイアで片づけながら夕食の料理のレシピを興味津々でエリカは聞いていた。

もちろん、自分が作るのではなく、騎士団の食堂のレベルをさらにアップさせるのが目的だ。

「エリカ様は、基礎的な能力に関して言えば文句なし、むしろ有り余るほどの潜在能力を持っています。私も教えるのは技だけになりそうなほどにね。なのでとりあえず刀姫一刀流の基本的な戦い方からやりたいと思いますね」

切っ先を下げてた木刀を持っている右手も含めて真っ直ぐに伸ばす。

「刀姫一刀流は、自分よりも体格的なアドバンテージのある、またはドラゴンのような大型な生物を相手にする流派に移行したことは、昨日お話しましたね？　なので、エリカ様に実際に私が見せるというのは無理があるので、丁度いい的を用意しました」

ヒナはそう言うのと庭の一角を指差した。エリカがその指が指す方向へと視線を動かしていくと、昨日の夜まではなかった大きな岩が庭に置かれていた。どうやら引きずってここまで運ばれたらしく庭には岩を引きずった跡が残されている。

「これ、何時の間に……」

「今朝、いえ昨夜と言うのが良いでしょうか？ 岩に縄をかけて2キロほど」

「ヒナさんって、十分人外に近いですよね……」

何気なく言った言葉だった。

だが、言った瞬間ヒナの表情が暗くなったのを、まだ暗い中ながらエリカの目は捉えた。明らかに、表情が歪んだのをエリカは見た。ヒナ自身はエリカにはこの薄暗さの中で見えていないと思っているのか、その表情を少しの間静寂と共にしていた。

「あの、ヒナさん？」

「あつ、すみません。ちょっとボーツとしてました。ではまずはお手本を見せますね」

明らかに、何かを取り繕おうとして言った言葉だ。エリカ自身、隠し事をよくする、というよりし続けている為かそういう事に敏感になったのかもしれない。

とはいえ、それは今言うべきことではない。

今はヒナが教えてくれる事を完璧に体得することがエリカにとって最優先事項だ。

<人には、人には言えない秘密事の1つや2つ、あって当たり前なのだ。余計な詮索は相手に距離を取らせてしまつきっかけになっ
てしまっ>

「……どうも同じような隠し事のようにですが、ね」

ヒナには聞こえないようアレックスにそう言う。視線はヒナの動きから決して離さず、エリカも先ほどの事は頭の中から排除してしま
う。

「続きをお願いします」

「……誰か、来ているの？」

「おや、誰かと思えば君か」

ムラミツは意外そうな表情をしながら顔を上げた。

折れた刀を鍛え直すために土蔵のような場所で刀を高熱の窯の中に

突っ込み、折れたもう半分の片割れとくっ付けては叩き、熱しては叩く事を限界まで繰り返す作業をしていたムラミツの前に、エリカたちとは別の客人が立っていた。

「久々に来てみれば、表門からは入れないし、ヒナはこっちにいなし、あなたは忙しそうだし、何、また暇つぶししてるの？」

土蔵の扉の近くに立っていたのはバーバラだった。

大きなバツクを1つ持ち、日差しに当たらないように目深に被っていたローブのフードを捲し上げると、少し笑みを浮かべながらムラミツに近寄った。

ムラミツは刀を打つ手を止めずに耳だけをバーバラの言葉に傾けているようだ。

「表門から入れないようにしたのは客人がいるから。ヒナがいないのはその客人に刀姫一刀流を伝授しているから。私が忙しいのは客人から請け負った仕事をしているから、だ。君こそ、こんな所まで来るなんてよっぽど暇なのかな？」

一瞬手を止め、ムラミツはバーバラに視線を向けた。

「久しぶりだな、バーバラ。15年ぶり、と言ったところか？」

「まだヒナが小さかったから、そのくらいかしら。元気そうね、ムラミツ」

持っていた荷物を置き、近くに置いてあった椅子を引っ張ってきてムラミツの顔が見える位置にバーバラは座った。

「依頼、か。どこぞの物好きな貴族かしら？」

土蔵に置かれた水が入った壺に近くにあった湯飲みを掴んで水を掬うとそのまま口の中に流し込む。そしてプハーツと息を吐きながら頬を緩める。

「いや、少女だよ。この国のドラゴンスレイヤーだそうだ。私は北の情勢に疎いから詳しい事は分らんが。それよりバーバラ、その水は飲み水じゃないんだが？」

「なら湯飲みを置いておかないことね。この山の水は上手いんだから。さらに言えば、その少女って、もしかしてエリカという名前？」

そこでムラミツの手が今度こそ完全に止まった。中途半端に刀が冷えないように灼熱の窯に放り込むと、バーバラに向き合った。

「……なぜそう思う？」

「やっぱり、そうなのね。いや、知り合いよ、1000年来の」

「1000年来？ 君はともかくとして、ではあの少女も？」

「いや、私たちとはそもそも種族からして違うから。あの子は元ドラゴン、とでも言えばいいかしら」

ムラミツの表情が凍りつく。案の定の反応をしてくれたムラミツにバーバラは笑みを深めた。

「まあ、人間に敵意はないから、大丈夫よ、多分」

「最後に付け加えるな……。まったく、君の周りにはまともな人間はおらんのか？」

「あなた、自分の事言ってるの？」

「……減らず口を」

メキメキと言う骨が捻じ曲がるような音がしてムラミツの手が變形していく。爪が伸び、手の甲がヒトのそれとは思えないほど毛深くなる。

俗にヒト族と呼ばれる種族には、通常のヒト、特異な能力を持つ獣人、セリアンスロピイと呼ばれるヒト、これには吸血鬼なども含まれる。

ヒトならず者として、社会から敬遠され、時には奴隷のような扱いを受け、迫害されてきた獣人は、今ではその人口を大きく減らし、生き残った獣人たちも山奥などに隠れひっそりと暮らしているのがその大半だ。

獣人は、ヒトと他の動物が融合したヒトと考えられてはいるが、詳しい事は未だによく分かっていない。そもそも獣人はヒトなのか、という議論すらあるのだから、目も当てられないのだ。

獣人には2種類ありヒトが獣になったのか、獣がヒトになったのかで分けることが出来る。後者は人語が話せないというのが判別基準となる。

前者は普段はヒトの姿をしているが、意図的、または無意識的に獣の姿に変わる者たちだ。こればかりは隣にいても獣にならなければ分からない。ボロが出て数多くの獣人が無意味に虐殺されたのは決して遠い昔の出来事ではない。今でも差別意識は残っている。

「まあ、初めて見た時から普通の人間じゃあないとは思っていたが……。では、これは……」

ムラミツはエリカから渡された黒鱗を手にとってバーバラに見せた。

「ああ、彼女のね。私の剣^{サーベル}覚えてるわよね？ あれと同じ材料よ」
自分の剣をローブの切れ目からムラミツに見せると、ムラミツは小さく頷いた。

「その妙に黒い剣か。細い癖にそこらの大剣以上の強度を誇っていたな。なるほど、こいつを混ぜて鍛えられていたのか……」

ムラミツはしげしげと黒鱗の破片を見つめる。

その手は毛むくじやらになったまま、まだ戻っていない。

それを見たバーバラは顔をしかめてムラミツの手を指差した。

「戻したほうが良いわよ。私と違って、あなたたちは戻れる保証、ないんだから」

「ふっ、会う度にそう言われている気がするよ。私はもう年老いた狼だ。いつ自我を失おうが、全てはヒナが引き継いでくれる。問題あるまい？ まったく、不老の君が羨ましいよ」

ムラミツがそう言うと、バーバラは少し淋しそうな表情をする。少し顔を俯けて椅子の背もたれに寄りかかる。

「長生きも良い事ばかりじゃないわよ。知り合いが皆先立つのを見るのは、やっぱり淋しいわよ。先代にしてもね」

「君は、私が子供の頃からちっとも変わっておらん。君以外には、刀姫一刀流とトウキを見届ける事が出来る者はおらんだらうな。しかも、よりもよってトウキの一族は人狼だからな」

腕を元に戻すと、再び窯を開けて熱せられた刀を取り出した。すでに折れる前の刀の形には戻っており、真っ赤になった刀身を再び叩き始める。

人狼とは、獣人の中でも凶悪とされる種族だ。

強い殺人衝動を持ち、獰猛な性格に変容してしまうため、少し前までは討伐隊まで組まれていたほどだ。その殺人衝動に飲みこまれれば、身も心も狼になってしまふという恐ろしい性質まである。

「私なら、噛まれてもそう簡単には死なないからねえ」

「そう言ってくれるな。私の父がした事は本当に申し訳ないと思っている」

バーバラはムラミツの親の代からトウキというこの家と付き合いがある。世界を流れ流れていた時に、偶然出会ったのだ。同じ獣人仲間だったからか、すぐに意気投合してムラミツの両親の結婚、出産、死別まで見守った仲だ。

「首の骨が折れるかと思ったのは、あれを最初で最後にしたいわ」

そんな仲であったが、ムラミツが幼少の時にムラミツの父親は殺人衝動に飲みこまれた。まず母親をかみ殺し、ムラミツにも襲い掛かろうとしたのをバーバラが庇ったのだ。そして、バーバラが父親に最後の一太刀を浴びせた。今でもあの光景は忘れようがない。

「ムラミツ、あなたまでそうはならないでよね？ 親子を手にかけるなんて、「ご免よ」」

「安心しろ。君やヒナに手を出すことになれば、私は自刃してやる」

不敵な笑みを浮かべるとムラミツは刀をひっくり返して反対側を叩き始めた。

「それくらい意志がはっきりしてれば大丈夫そうね。さてと、それじゃ私は帰りますか……」

「おや、泊っていかんのか？ 知り合いもいるのに」

ほっぴり出した荷物を持ち上げると、バーバラは苦笑しながら出口に向かった。

「忙しそうだしね、また出直すわ。元気でね」

バーバラはそう言うと土蔵から姿を消した。

後にはムラミツと刀を叩く甲高い音が残されることになった。

「……まったく、素直じゃないところも変わらん」

第39話 またまた知らない所で事態が動く(後書き)

どうもどうも、作者のハモニカです。

刀の銘の件は、まだ少ないですが候補が上がりに始めております。まだまだ決めかねておりますので、妙案があればまだまだ受け付けておりますので是非お教えください。

というか、反応があるか心配していたのですが、反応があって良かった……。

こんな作品でも読んでくださっているという事を改めて実感したよ
うな気がしますよ。

さてさて、この作品は2日に1話ペースで投稿していて、期限が次回というのは結構短いんじゃないかなあと、思われたかもしれないのですが、実は明日から10日ほど投稿が止まりそうです。

その間も受け付けておりますので、是非カッコいい名前を付けてくださるとありがたいです。返事は出来ないでしょうが、次の投稿時にはお返ししたいと思います。

是非是非、お願いします。

というか、助けてください。

案が多い事に越したことはないですから。

え？

私の案ですか？

姫鶴一文字とかになりそうな予感ですが？ ググれば多分出てきますよ。自分で考えようにも、考えようとすると、くそ真面目に

太刀 銘一（号 姫鶴一文字）附 黒漆合口打刀拵

みたいな、どうでもいいほど真剣な事になっちゃいましたから。

ちなみに上のは姫鶴一文字、鎌倉時代の太刀で重要文化財だそうです。

これになぞって名前を考えているので、どうしても遅々として進まない。馬鹿ですね、私は。そこらへんの漫画のような名前にすればよかったです。というわけで、そう言うのでも全然かまいません。

では、しばしの間、それを考える事もあつて投稿が止まってしまいますが、こんな作品でも次回を待っていただいている方々には、少しの間待っていた貰いたいと思います。

ご感想など、お待ちしております。

第40話 人にして獣の者、龍にしてヒトの者（前書き）

ふい〜、お久しぶりです。

帰ってまいりました。

いろいろと、地理的にも、ネット的にも。

今回、折れた方の刀が出てきます。こちらの方はもともと名前が決まっていたのでそのまま出していますが、もう一本の方は依然募集中です。出てくると言ってもさっそく使うという事にはなりませんけどね。今回は少しだけしか出てこないの……w

とりあえず今書いているところではまだ名前の影も出てきていないのでもう少しの間なら案を送って下さっても大丈夫です。

一応今届いている案、そして私が考えている案から選考、または合体という形を考えております。

ではでは、本編をどうぞ

第40話 人にして獣の者、龍にしてヒトの者

「エリカ様、これを」

朝のヒナとの修練を終え、朝食を取っていると、ムラミツがエリカに折れていたはずの刀を手渡した。鞘に収まった状態だが、鞘に付いていた傷も全て修復され、漆が塗り直されており、まるで新品のような姿になっていた。

「直ったのですか……。早くないですか？」

エリカが刀をしげしげと見つめながらそう呟くと、ムラミツは笑みを浮かべて刀を抜くよう促してきた。

「刀身の補強にエリカ様から頂いた素材を少し使ってみましたところ、相性が良かったのか非常に上手く繋がりましたね。あとは私の魔力で強化しましたので、そう易々と壊れるような代物にはなっておりません。不眠不休でやらせてもらいましたので、何とか今日の朝までには形に出来ました」

立ち上がって、机から少し離れるとエリカは刀を抜いた。鈍い輝きを放っていた少し前までの姿はそこにはなく、エリカの顔が確認できるほどに美しい刀身がそこにはあった。黒鱗が若干使われた影響で少し黒い色に仕上がっているが、それもまた美しく思えるほどの出来栄えだ。

「綺麗……」

言ったのはフィアだ。見ればジーンもジャックも刀の美しさに見入っていた。ヒナはその様子を嬉しそうに見ている。

エリカが刀身を見つめていると、根元に小さく文字が刻まれている事に気が付いた。

「太刀 銘 黒羽^{くろはね}」と。長期間手入れがなかったのと、腐敗により完全に文字が消えておりましたので、刻み直しました。その刀の名は黒羽と言います」

「黒羽……。綺麗な名前です」

感慨深げに文字をしばらく見つめて、エリカは刀を鞘に戻した。そして自分の席に戻ると座ってその隣に刀を置いた。

「これと加えて、もう1本作るんだろう？ 嬢ちゃん、二刀流でもやるのか？」

エリカが立っている間に、自分の皿にエリカの前にあった大皿の料理をたんまり移し替えたジャックがそのうちの1つを口に放り込みながらエリカの刀を指差した。

「深くは考えてないんですけどね。鞘では限界があるので」

「まったくですよ。鞘を攻守に使用するなど、聞いたことがない。エリカ様は刀での戦闘においては常識から逸脱しておりますないや、それがまた面白い」

ムラミツが汁物を啜り、ご飯を口の中に頬張る。

よくよく考えてみれば、今日は確かムラミツが朝食を作る、とヒナ

は言っていた。朝まで刀を鍛えていたのなら、何時朝食を作ったの
だろうか、という些細な疑問がエリカの頭に浮かぶ。

(まあ、美味しいから良いですけど……)

「……さて、もう一つ……あ、あ、!?」

腹が減っては戦は出来ぬ、そんな事を考えながらおかずを自分の皿
に移そうと目を動かした瞬間、エリカの目に信じられない光景が飛
び込んできた。

朝食にしては随分と作りすぎた感が否めなかった大皿のおかずがも
の見事に消え失せていたのだ。油が皿にこびり付くのを防ぐ目的
だと思われる野菜の葉だけが残されており、上に乗っていたはずの
おかずは一つも見当たらなかった。

「そんな、どうして……」

「エリカちゃん、あれ」

ファイアに言われてゆっくりと首を動かしていくと、なんとヒナの小
皿に山のようにおかずが乗せられていた。

「ヒ、ヒナさん、それは……?」

「はむ ……え? あ、す、すみません! 父様の料理は大好物
でつい……、どうぞ!」

心底幸せそうに料理を頬張っていたヒナがエリカの言葉にまずエリ
カに視線を向け、その後その目の前にある小皿、大皿と移っていき、
最後に自分の小皿にたどり着いて、顔を真っ赤にした。そしてその
半分ほどを慌てた様子でエリカの前の大皿を介してエリカに渡した。

「ヒナさんって、本当にお父さんっ子のようだな」

「そう言われると、恥ずかしいですね……」

「いや、ムラミツさんが頬を赤らめてどうする」

ジーンの言葉に頭を掻いたムラミツに、すかさずジャックが突っ込みを入れた。

自然と食卓に笑い声が湧きあがる。

しばらくしてムラミツは真剣な表情に戻ると箸を置いて職人のトウキとして口を開いた。

「午後からは新刀の製造に入ります。ヒナには最後の仕上げをやってもらいますので、途中までは私が1人で作れます。それとエリカ様、食後少々時間をいただけませんか？ 頂いたあの素材の事でお聞きしたいことがあります」

「あ、分かりました」

「そういえば、結局ありゃあ一体なんだったんだ？ 出発前にも教えてくれなかったが」

ジャックが最もな質問をエリカに聞いてきた。

後片付けは全員でやる事になっているので、ジャックも自分が使った皿をまとめて……、ジーンに押し付けている。

「ああ、北方で取れる希少な鉱物でしたよ。昨日書物を漁っていたら出てきました」

答えたのはムラミツだった。エリカが意外そうな顔をしてムラミツの顔を見ると、ムラミツは小さく頷いて「話を合わせてくれ」と目で言ってきた。

「そ、そうなんですよ、出発前にバーバラさんを探してヴァルトさんの所に行ったんですが、刀を鍛えるならこれでも持ってけ、って言ってくれたんです。そんな貴重な物だとは夢にも思いませんでした」

本当は、自分で言い訳を考えていた。それを言う前にムラミツが反応したという事は、少なくともムラミツは本当の事に見当がついているのかもしれない。

エリカとムラミツのダブルの誤魔化しによりジャックはもとよりジーンとファイアも納得したようで、感心しながら皿を運んでいる。ジーンは妙に自分の皿が多い事に気が付いてジャックにそれを押し返そうとしている。

(全く、いつも身近にいる人には気づかれず、たまに会う人に気づかれる。……なんたる皮肉)

苦笑が漏れたのは致し方のない事だった。

「どなたから、聞いたのですか？」

後片付けが終わると、エリカとムラミツは母屋から少し離れた刀の精錬所の前に移動した。ジーンたちはヒナが相手をしているらしく、少し離れているにも関わらずジャックの楽しそうな笑い声が時折聞こえてくる。

「唐突ですな。ですが、的を得ている」

隠そうともしない、そんな表情をムラミツが見せる。

そしてエリカに向き合つと、うつすらと笑みを浮かべた。

「あなたの古い友人から、とでも言えば十分でしょう？」

「……バーバラさんですか。どういう関係ですか？」

人脈が狭い事に感謝した。

エリカの記憶の中で、現在のエリカを知っており、過去の自分も知っている者など非常に限られている。騎士団長であるヴァルトという可能性もあったが、彼は事務仕事で忙しくここまで連絡を入れる余裕はなかったはずだ。その原因を作ったのがエリカなのだから、痛いほど詫びておいたから間違いない。

ともなれば、自ずと答えは見えてくる。

バーバラが団内選抜試合の時に言っていた可能性も頭の片隅にあったが、ムラミツとヒナの様子を見ている限り、その可能性は極めて低いと判断した。この2人がエリカをヒトの姿に変えた者たちと関係があるなど、エリカの見立てではまずありえないと判断したのだ。

「彼女とは、私の親の代からの付き合いだ。私はもう40年以上の付き合いだが、彼女からしたら私を赤ん坊の頃から知っているんだろうな。昨日、不意にやって来たんだ。相も変わらず歳を取らないもんだ……」

「という事は、彼女の正体を知っているんですか」

そう言うと、小さなため息をムラミツはついた。

「あなたなら、すでにお分かりかもしれませんが、私たちの一族は世間一般の言うところの『人外』なんですよ。それも冷酷非道、凶暴な事で有名な、人狼でね」

メキツと言う不気味な音と共にムラミツの腕が獣化していく。爪が鋭く伸び、獣のそのように腕が太く、毛深くなっていく。

「……人外だなんて。あなたはれっきとした人間じゃないですか。あたしと違って」

バーバラと関係があるのであれば、それも昨日会っているのであれば、エリカの正体も聞いているのだらうと見当をつけて言ってみたが、案の定、ムラミツはその点で驚くことはなく、代わりに少しさ

びしそうな表情を浮かべた。

「そう言っていたけると、私もヒナも、まだまだ生きていいんだな、って思えますよ。この国は随分と昔に獣人狩りを廃止しましたが、他国ではまだ続いている所があります。隣のブラゴシユワイクでは未だに獣人は奴隷扱いされております。ブラゴシユワイクの獣人狩りは他国にまで及んでおりますゆえ、我々もこんな山奥にいなければならないのです」

そう言つて、ムラミツは精錬所の扉を開ける。すでに火を入れていたようので、猛烈な熱気が室内からエリカとムラミツを襲った。

エリカが熱さにたじろいだのに対して、ムラミツはすでに慣れっこのなだらう、全く意を介さず室内へと入っていった。

エリカもそれに続いて中に入ってみると、大きな窯から轟ツという音が聞こえてくる。

「それで、あたしに話と言つのは？」

まだ、エリカの方からしか話題を振っていない。ムラミツが話したことは、表では話せないということなのだらうか。

「実は、先日、あなた方が来る少し前に妙な連中が私の元に来ましてね。身分を偽っていましたが、おそらく獣人狩りの手の者でしょう。現在この国が国境の道の警備を強化していることを良い事に、川沿いや森を通って密入国したようので、我が一族の事を嗅ぎつけてきたのです」

「命を、狙われていると？」

無言の頷きが返される。

「私は、古い先長くないし、この仕事を最後に全てをヒナに引き継いでもらって引退しようとも考えております。唯一の心残りと言え、ヒナの事だけです。あの子まで殺されるのは、私が許しません」

「あたしにどうしろと?」

「……話が早くて助かります。新刀を鍛え上げましたら、首都へヒナも連れて行ってやってください。ここよりは、あなた方の傍の方が断然安全です」

真剣そのもの。

娘を想う父親。

エリカの前には、1人の父親としてのムラミツが立っていた。

「では、ムラミツさんも一緒に。1人になったら、絶対に襲われてしまいますよ?」

当然、2人だった目標が1人になった方が、襲う方としては仕事が楽になるだろう。エリカたちが出て行った頃を見計らって襲われる公算が高い。ならば、2人とも引き取った方が良いのではないかと、エリカは考えた。

「彼らは私の娘の事までは知らないでしょう。少なくとも、ここしばらくヒナはこの家を空けていましたから、精々近くの村のお使い、程度に考えてもらいたいところです。私が殺されれば、彼らの任務はそれで終わり、ヒナに矛先が向かう事もないでしょう」

「……自ら死ぬつもりですか？」

エリカは眉間にしわを寄せてムラミツに詰め寄る。

「いくら娘のためだからって、自分から死ぬなんて許しませんよ。あたしが無理やりにもあなたを首都に引きずってあげますが？」

ムラミツは目を見開いて驚いた。想定していた言葉ではなかったのだろう。大方、「娘は任せてください」とか言ってくれるものだと思うっていたのだろう。

しばらく放心状態だったムラミツはすぐに破顔して大きな笑い声を上げ始めた。

あまりに唐突に、豪快に笑い出したのでエリカは面食らってしまう。腹を抱えて、とまではいかないが、腹から笑っているのは間違いない。

「くくつ、ヒトとドラゴンの考え方は、違うのでしょうかねえ？出来るものなら私もそうしたい。だが、会って3日の私たちのために、あなた方にそこまでご迷惑をかけるわけにはいきませんよ。こんな老人、何も遣せませんから。ヒナだけでもよろしくお願いいたします。私は、ここに骨を埋める覚悟ですし、彼らの目が騎士団に向けば、いつも一緒にいるヒナが疑われるのも時間の問題。敵は曲がりなりにも隣国の暗殺機関のようなもの。逃げ切る自信もないんですよ」

「なら、ここよりも安全な場所に連れていけばいいんですか？ 首都ではなく、なおかつ安全な」

「そんな場所があるのなら、とっくに行ってますよ」

すでに、何かを諦めたような表情だ。

それも、当たり前なのかもしれない。自分の正体を明かす事も出来ず、こんな山奥で隠れて生活しなければならぬのだから達観していても仕方のない事なのかもしれない。

一族が長年逃げて隠れてを繰り返していたのなら、隠れられそうな場所はほとんど調べ上げているのだろう。

だが、そんなムラミツでも絶対に知らない場所がある事をエリカは知っている。

「あたしがドラゴンだと知っているからこそ、話を通る場所なんですよけどね。竜の森に、あたしが長い事交流を持っている小さな村落があるんですよ。外界との交流もなければ、その存在を知るものはドラゴンか、人里を追われるような人たちだけ」

「……つまり、人外の者だと？」

ムラミツの言葉に、エリカはいい加減嫌気が指した。ムラミツに詰め寄ると語気を強めてムラミツに言葉をぶつけた。

「人外なんかじゃない！ 誰が人外で、誰がヒトなのかなんて、あたしからしてみればどうでも良い事です。今問題なのは今、ここに命を狙われている人がいるっていうことなんですよ。人外って言うのは、こういう事をいうんですよ！」

感情的になっていた、と言われれば否定はしない。

エリカはその場の感情のままに、両腕に黒鱗を発現させた。そしてその腕でムラミツの胸ぐらを掴むと精錬所の壁に叩き付けた。

身長の上でははるかにムラミツの方が上なのだが、エリカが力任せに押したので、ムラミツと言えどもほとんど抵抗らしい抵抗も出来ずにエリカに壁に押し付けられた。

指先に発現した黒鱗が爪のように伸び、腕全体が鱗に覆われる。ムラミツは息を呑んでその様子をただ無言で見つめていた。

「あなたは生まれながらの人間なんです。それを自分で否定するよ
うな行為、あたしからしてみれば、許せない事なんですよ。自分が
自分を否定したら、誰があなたを肯定するんですか？ 同じことを
ヒナさんにまで押し付けるんですか！？ 自ら幸福になるという選
択を放棄するんですか！？」

無言。

エリカの言葉に中てられたのか、自分の中で考えが混濁しているの
か、ムラミツはエリカの前では初めて目を泳がせている。

「生きたくないんですか？ 幸せになりたくないんですか？ もし、
もう幸せにはなれない、なんて考えているのなら、今ここであたし
が殺してやりますよ！ 世の中には、生きたくても死んでしまう者、
幸せになりたくてもなれない者だっているんですよ！」

胸ぐらを掴んでいる腕に力が入る。自分でも、目頭が濡れているの
が分かる。自分から生きることを放棄しようとしている人が目の前
にいるのが、エリカには本当に許せなかった。

鱗同士が擦れて軋むような音が響く。

「エリカ様……。……そうでしたね、ヒトとしての幸せ、探し直すのも悪くないかもしれませんな。獣人だろうが『人』であることに違いはない、そんな言葉、初めて聞きましたよ」

不意に、ムラミツの手がエリカの肩に乗せられた。右手は獣の手、左手は人の手だったが、エリカは毛むくじゃらの手を握り返した。

「我々は、幸せになっても良いんでしょうか」

エリカに言う訳でもなく、宙を見つめながらムラミツはぼんやりと呟いた。

「幸せになっちゃいけない生き物なんて、この世にはいないんですよ」

エリカとムラミツの会話をバーバラは建物の裏手の壁に身体を預けながらぼんやりと聞いていた。途中からエリカの語気が強くなり、少し心配になっていたがどうやらその心配は杞憂に終わったようだ。

「幸せになっちゃいけない生き物なんていない、か。エリカらしい言葉ね」

空を見上げながら、バーバラは自嘲のような笑みを浮かべた。

吸血鬼と蔑まれて、国を追放され、血の繋がる全ての人を自分のために殺されたバーバラ、いやカトレヤとして嗤ったのかもしれない。

多くの命をバーバラが吸血鬼だという理由で奪われ、自分も国を追われ、表の世界から追放されたバーバラは自分が再び幸せになれるわけがないと思っていた時期もあった。

だが、エリカ、正確にはイフォネシアと出会い、全てが変わった。彼女に出会わなければきっと「バーバラ」という人間は存在していなかったに違いない。

「なまじ帰るって言っちゃったから顔を出すわけにはいかないけど、出す必要もなかったか……ん？」

不意にバーバラは空を見上げていた視線を森の方へ向けた。そして睨むような目で森の中を見ると、小さく舌打ちをして壁から離れる。

空の流れに血生臭いものが混ざっているのを、吸血鬼だから気づけたのかもしれない。常人ならまず気づかないくらいの希薄な臭いだ。だが、バーバラにはそれが無数の血が混ざった臭いだという事がすぐに分かった。

「……嫌な臭いね」

ロープの前を開いて、腰に吊っている剣の柄に手をかけ、ゆっくりと森に向かって歩き出す。

「家族に手を出す者はたとえ誰であろうと許さない、それが私の信条なのよ」

第40話 人にして獣の者、龍にしてヒトの者（後書き）

うーん、どうも変な事になってしまった……。

偉そうなことを主人公に言わせるのはあまり好きじゃないんですが、こうなってしまうました。

と言っても、主人公が思っていることを言葉にしかただけ、みたいなもんなんですけどね。

それはさておき、前書きにも書きましたが、今回を持ちまして一応刀の銘の募集を閉じさせてもらいます。

ですが、刀が完成するまでにはまだ数話あるので、その間ならまだ受け付けております。すでに読者様から送っていただいた5つほどの案と、私自身の案、さすがにこの間後書きに乗せたあれにはなりませんけど、そのあたりでまとめたいと思います。

こんな駄作のアンケート（？）に反応していただいた方々には本当に感謝しております。今後とも、龍旅をよろしく願っています。

感想、誤字脱字の報告など、お待ちしております。

第41話 専任シェフにしようなんて思ってますんよ？（前書き）

タイトル、どーでもいいですから、ご心配には及びません。（え？
してない？

最近、話がなかなか進まず題名に困っているだけですから。

主人公の台詞になってたり、シリアス調になってたりと、統一性の欠片もないですが、何時の間にやら40話を超えておりました。前回投稿してから正しくそのことを認識したのですが、いまさら40話の後書き変えるのも面どっ、げぶんげぶん、大変だったので41話の前書きにてよくやるわ、と自分で自分に呆れ半分嬉し半分ですっております。

ここまで来れているのもアクセス解析でいろんな方が読んでくれているということを実感させてもらい、お気に入り登録していただいてもらっているおかげです。

今後ともどうぞ龍旅をご贖に

ではでは、本編をどうぞ

9月18日：不備により後書きの一部を削除

第41話 専任シェフにしようなんて思ってますんよ？

「はあっ！」

庭にエリカの威勢の良い声が響き渡る。

くれぐれもヒナには内密に、と言われたエリカは、その後何食わぬ顔で母屋の4人と合流した。正確には、今夜にもヒナに自分の口から伝えたいから、黙っていてくれというものだった。それを言うムラムミツの表情は、どこか憑き物が落ちたような晴れやかなものだった。それを見たエリカは安心してそれを了承して母屋に戻った。

どうやらジャックが自らの武勇伝をヒナに語っていたらしく、ジャックのテンションが異様に高く、実際の熱とはまた違う熱気に満ち溢れていた。襖を開けた瞬間、「武勇伝武勇伝」という理解不能な踊りをジャックがしていたのを見てしまったのだが、理解不能で1度襖を閉めてしまったほどだ。

慌てたジャックがすぐさま弁解してきたのだが、エリカとしては面白いものが見れたので何か言いたそうな笑みを浮かべて無言で部屋に入る事にした。とりあえず、ジャックをいじるネタが出来たので、フィア、ジーンと裏が思いっきり表に出ているアイコンタクトをして、ジャックが床を転がりまわる光景を眺めていたのだ。

ジーンとフィアにはどうやら以前にも酔った勢いで見せてしまったようで2人は冷静だったがヒナはツボにハマったのか苦しそうな笑い声を上げていた。ジャックはエリカにだけは見せたくなかったのか、どうにかしてエリカに誰にも言わないようせがんできたのが、

エリカには印象が深い。

その後、エリカはヒナとの特訓のために庭に出て鍛え直してもらったばかりの黒羽で技を習得しようと躍起になっていた。

「岩を斬ろうとするものではありません。そこにある空間を斬る、という感覚です。岩を斬るのに十分な威力を放つのはその手の人には簡単です。ですが、空間すらも斬るといふ事を心がければ、斬れない物などほとんど存在しません」

朝見かけた大きな岩を目標にして、エリカは黒羽を構えて立っていた。岩には無数の傷痕が付いているが、貫通するに至るものはまだない。

「空間を斬る、んですか……。出来るようになるのにヒナさんほどのくらいかかったんですか？」

少し息が上がってはいるが、限界には程遠い。

黒羽を一度鞘に戻して、大きく腕を回しながら岩ではなく、空間を斬るといふイメージを頭の中で反芻させる。

ヒナはエリカの問いに少しの間を開けた。指を順に曲げているところから見るに、1年ずつ数えているのだろう。

「……そうですね、私が刀姫流を始めたのが5歳。実際に技を伝授してもらったのは15歳くらいでしたので、まあ技に関して言えば3、4年でしょいか」

「それをほんの数日でやれとは、またとんでもなく無茶な事をするわねえ、エリカちゃん」

呆れたような声が母屋の方から聞こえてきて、そちらに顔を向けるとフィアが立っていた。

「少し休みましょう？ 朝食の後からもうずっとやってるでしょう」

「そうですね、エリカ様、休憩にしましょうか」

「ふう、分かりました」

ヒナも刀を納めるとエリカを促しつつ母屋へと足を向けた。

「調子はどう？」

隣に並んだフィアがエリカにそう尋ねてくると、エリカは小さくため息をついて首を横に振った。

力任せに刀を振り回すのと、刀姫一刀流の立ち回りに雲泥の差がある事を改めて認識させられたのだ。今までのやり方で刀を振っていても、刀を砕くことは出来ても斬る事はできない。砕くだけなら鉄槌でも構わないのだが、エリカが求めているのはそのようなものではない。

「全然、ですよ。とてもじゃないですけど出来る気がしませんね。」

ヒナさんに丁寧にご教授してもらっているんですけど、コツがちょっと

……」

「すみません、私の教え方が悪いのかもしれないです」

少し気落ちした表情を見せたヒナに、エリカが慌てて首を振った。

「ヒナさんのせいじゃありませんよ！ あたしが下手なだけなんです」

そう言うと、今度はヒナが首を振る番になった。エリカが斬りまくった岩を指差しながら、ヒナは嬉しそうな笑みを浮かべて口を開いた。

「下手だなんて、謙遜にもほどがありますよ、エリカ様。2日で『飛ばせる』ようになるなんて、普通じゃあり得ませんよ？ 何かきっかけがあればきつと上手く行きますよ」

自分の事のようにヒナは喜んでいる。

その笑みは、世界の膿を知らない純真無垢な笑みだった。この山奥で一切の俗世との干渉が無かったからこそ、ヒナが在るのだろう。ムラミツが必死になってヒナを守る理由が良く分かる気がした。

ムラミツはエリカにヒナの素性も全て話してくれた。

騎士団に共に戻るとなれば、いずれジーンたちにも言わなければならぬ事なのだが、エリカには事細やかに説明してくれた。

ヒナはムラミツ同様に獣人だ。そしてもちろんの事だが人狼だ。ムラミツと違って殺人衝動もないほどだが、人狼である事に違いはない。

ムラミツの妻、つまりはヒナの母親はムラミツが人狼だと知ってもそれを受け入れるだけの度量がある人だったそうだ。半ば駆け落ち気味に人の街を飛び出してムラミツの実家、この屋敷に逃げ込んで、夫婦になった。

ヒナは、そうして生まれた。

獣人であるムラミツの血を引いてやはり獣人であったが、別段文句をつけるような人間もここにはいない。兎にも角にも、ヒナは俗世間が持つている獣人への偏見にほとんど接していないのだ。話は全てムラミツからの又聞き、人に対してきつと多少なりとも疑心暗鬼になっているだろう。表情にはほとんど出ないが、先日の反応からもその兆候は窺えた。

母親は昨年他界したそうだ。もともと病弱だったこともあって、ヒナはムラミツと共に母親を看病しながら生活していた。生活のイロハもほとんどムラミツ仕込みであり、お父さんっ子になった理由も想像に難くない。

(ここを出ていくとなると、それなりに抵抗があるでしょうね)

そんな事を考えながら母屋の一室に戻ると、ジーンとジャックが机の前に座って何かを食べていた。朝からすでに5時間弱、昼食を食べる事も忘れて特訓に打ちこんでしまっていたようだ。

<何を考えているのか、想像に難くないのはこっちの台詞だ>

「アレックス、何時から心が読めるようになったんですか？」

机の下で丸くなっていたアレックスがジーンとジャックのように座ったエリカにそう呟くと、エリカは机の上におかれていた煎餅にパクつきながら小声でそう言って足でアレックスを小突いた。

<前にも言ったと思うが、顔に出過ぎるのだ。下を向いていれば良いというものでもあるまい？>

「今度からは上を向いてやります」

誰にも聞かれない、相手が耳の良いアレックスだからこそその音量でエリカは屁理屈を言う。

とはいえ、気づけばアレックスはエリカにとって心許せる数少ない仲間の1人、いや1頭になっていた。エリカの正体を知り、なおかつ傍にいる事が出来る存在、両手の指で足りる数しかいない中で、普段から会話の出来る存在はさらに限られる。

バーバラは会いに行けばいるが、別段ジーンやフィアたちのように四六時中一緒にいるというのは案外少ない。ヴァルトは騎士団長、それこそ用事が無ければ会う事もままならない。

その点、アレックスはエリカがバーバラからモフモフ権なるものを譲渡してもらったが為に、ほぼいつもエリカに捕まっている。

おまけに頭が良い。

エリカにとって、アレックスはちょっとした相談役、ご意見番のような存在になっている。他愛のない事を語り合う存在は今のエリカにとっては三度の食事の次に大切な事だ。

「お先に頂いてる。エリカは特訓で忙しそうだったから呼ばなかったんだが」

「嬢ちゃんが食事を忘れてやる光景なんて、めったに見られるもんじゃねえからなあ」

カラカラと笑うジャックは煎餅を摘まむと半分ほど口の中に押し込んでそこでようやく煎餅を割った。パリッという心地の良い音がして煎餅が真っ二つになる。

「朝食が少し遅かったですし、軽い昼食で済まそうと言ったのですが、これで良いと言われるので……」

「そう言えば、さつき母屋に戻ってましたね。あたしも貰います」

特訓の最中、エリカが集中している際にヒナが一度母屋に戻った時があった。今思えば丁度正午の頃合いだっただろうか。

エリカもジーンたちのように煎餅を手に取ると、まず手で2つに割ってからその片割れを口の中に放り込む。塩気のある旨味が口一杯に広がって、硬い触感と絶妙にマッチする。正直なところ、これだけでご飯が進みそうなほどである。残りを手早く口に頬張ると、返す刀の要領でその手を新たな煎餅へと伸ばす。

「しかし、こんなものまで自家製とはな。改めてヒナさんは多芸だな」

煎餅をしげしげと見つめながら、ジーンが感心する。

刀姫一刀流、刀鍛冶トウキの後継者であり、物腰も丁寧、料理も絶品となれば、世の女性たちが嫉妬しまくるんじゃないかというほどだ。才色兼備もここに極めりと言ったところだろうか。

「騎士団きしだんにもヒナさんくらいなのがゴロゴロしていたら、良いんだがなあ」

「とりあえず、騎士団の女性たちに謝りなさい、ジャック？」

ポロツとジャックの手から煎餅が零れ落ちる。何の気なしに言ったのだから、今のはどう聞いても侮辱としか取られないだろう。

だが、エリカには料理、と言う点ではジャックに賛成だった。さす

がに口には出さないが、騎士団の女性たちは揃いに揃って料理が下手だというのだ。これは噂ではなく、エリカ自身の体験と、食堂の厨房で働く本職の人たちの情報を合わせたものだ。

ファイアの料理、というのは正直料理ではない。一度だけ夕食を作ると言われて馬鹿正直に自室のテーブルの前で待っていたのだが、出てきたのは黒ずんだ物体だった。料理ではなく、事故が起こったとは思えなかった。一部消し炭になっていたので、さすがに食べるわけにはいかず、何とかファイアにこの事故を説明して事なきを得た。それ以来ファイアが料理の猛特訓をしてはエリカが試食と言う名の拷問に遭っているわけだが。

これは氷山の一角だ。

別段、料理が下手と言う訳でもない女性騎士にしても、騎士団が支給する携行食料が主食の者もいる。

だが、それよりも大きいのは、三食全て食堂で済ませているという原因だ。城でも王族の食事の次に美味いとすら言わしめる騎士団の食堂は女性たちから料理するという意欲を吹き飛ばしているのだ。自分で作っても必ず食堂の食事と比べてしまい、エプロンを脱いでしまうわけだ。

そういう訳だから、ジャックは自爆してファイアに睨まれているが、ファイアとしても痛いところを突かれたので、あまり大きな声で責めていない。

まあ、ファイアに限って言えば、最近は大いぶ改善されており、料理を名乗っても問題ないレベルまで来ている。それ以前までが長かったが。

「そ、それはそうとして、ムラミツさんは来ないのか？ 朝から工房に籠りきりじゃないのか？」

ジャックが話題を変えようとヒナに向かって話しかけた。

お茶を人数分淹^いれて配っていたヒナは顔を上げて苦笑しながらお茶を乗せていたお盆を置いて自らも座った。

「鍛冶職人はほぼ1日中工房に籠りますよ。夕飯の時は釜の温度が下がらないように魔力で細工をしてから戻ってくるので、刀がおかしな形で固まらないように工夫しているんです」

「鍛冶職人は何を造っていようが、どこにいようが関係ねえんだないや、尊敬に値するよ」

珍しく、ジャックが人を褒めている。

エリカ、ジーン、ファイアの3人が意外そうな顔をしてジャックを見つめていると、視線に気が付いたジャックが恥ずかしいのか頭を掻きながら口を尖らせた。

「お、俺だって人を褒めることぐらいあるぞ。俺たちが思う存分剣を振れるのは一概に良い剣を造ってくれた職人のおかげだ。俺の剣だって、城が支給する鈍^{なまく}らじゃねえからな」

「その割には乱暴に扱^{あつか}うがな」

ジーンに指摘されてジャックは言葉を詰まらせた。

「そついうのは今言う事じゃねえだろつ」

笑いが起こる。

のどかな、時間がゆっくりと流れるひと時だ。

そんな他愛のない会話をしばらくした後、エリカとヒナは再び特訓に戻った。と言っても同じ事の繰り返し、ひたすら刀を振っては改善を繰り返す。

結局、この日は「飛ばす」ところまでが限界だったようで、夕食になるまでこれと言った進展が起きる事はなかった。

「皆さんにお話があります」

そして夕食。

エリカにとっては待ちに待った時が来た。

今日の夕食はヒナが作った。父ムラミツに似て豪快な料理が多いが、その味は繊細この上ない。一口でエリカもその魅力に憑りつかれてしまった。

しかし、今、待っていたのはそれではない。待っていたのはムラミツの一言、エリカたちと共に騎士団に行くという話を、ムラミツからヒナに伝える事なのだ。

食事を始めてしばらくして、箸を置いたムラミツは姿勢を正してその場にいた全員を見渡した。食事時には珍しく神妙な表情をしているムラミツを不審に思ったのか、ヒナも山のように積んだ揚げ物に向けていた箸を置いた。

「ヒナ、これから言う事はお前の将来に関わる。よく聞いておいてくれ。騎士団の皆さんも、少しばかり耳をお貸してください」

「返してよ」なんて冗談が言える空気ではない。当然のことながら全員が箸を置いてムラミツに顔を向けている。

ムラミツは一度エリカと視線を合わせ、小さく頷くと大きく息を吸い込んでから口を開いた。

「私とヒナの身を、アクイラ騎士団にお預けしたいと思っております」

「「「「ええ!?!」「」」」

(まあ、当然の反応ですよね)

「父様! どういう事ですか!?! 何のために私たちがここにいる

かお忘れになったのですか!？」

そして、こちらも当然のように予測されていた反応。

ヒナは自分たちが獣人だということ人で人から差別されている事を知っている。自分の父親、強いて言えばトウキの一族がそれから逃れるためにこんな人里離れた山奥にいる事もだ。

だから、エリカにしても、ムラミツにしても、この反応は想定の内だった。

「うん？ ここにいなきゃいけない理由があるのか？」

ジーンに指摘されてヒナはしまったという顔をした。ジャックやフイアも、ヒナがかなり切迫した表情をしたので何事かという顔をしている。

「ヒナ、落ち着きなさい。今から説明するところだ」

「で、でも、いくらなんでも……」

その後の文句は言葉にならないほど小さくなってしまった。

「何か、人には言えない理由なら、我々は聞きませんが……」

ジーンも空気を読んでそう言うが、その意見はムラミツによって否定された。ムラミツは首を横に振ると、身体の前で右手を伸ばしてみせた。何をしようとしているのか理解したヒナはその手にしがみ付いて父親を止めようとする。

「駄目です！ 見られたら、見られたら駄目です!!」

それをムラミツは空いている左手で遮ると、ジーン、ジャック、フイア、そしてエリカの順に視線を動かしていき、口を開いた。

「もし、あなた方にこれから見せる事実を見てなお、我々を受け入れる用意があれば、我々は騎士団の元に往きたいと思っております」

その瞬間、ムラミツはエリカにしてみせたように右腕を変化させた。相変わらず背筋が凍るような音をさせて腕が獣のそれに変わり、爪が鋭く伸びて皮膚が体毛で覆われていく。

事実を知らないジーンたちは一瞬息を詰まらせたが、それ以上に反応したのはヒナだった。

「な、なんてことをするんですか！ 私たちがヒトとは違うと言ったのは父様ではないですか！？ 私たちの正体が知られれば、殺されると言ったのも父様ではないですか！」

「ヒナ、この人たちはそんな事をする人ではない。それは、バーバラが証明している」

「っ！ バーバラ、さんが？」

意外な名前が出たので、案の定ジーンたちは顔を見合わせている。だが、質問は置いておいて、今はムラミツの話に耳を傾ける事に集中することになっている。時折まったく言うほど驚かないエリカに視線を向けては、あとでどういう事か説明してくれ、という視線を飛ばしてくる。

「彼女が今身を置いているのは、彼らの所だ。それが証明にはならないか？」

「そ、それは……」

黙ってしまったヒナをしり目に、ムラミツは変化した腕をジーンたちに見せつける。

「トウキの一族は見ての通り人狼なのです。バーバラがいるという事を信じて、私はあなた方をお願いをします。私とヒナを守ってもらえませんか？ 騎士団に加わる代わりにりますが」

「……なるほど、吸血鬼がいるアクイラ騎士団なら、ということね腕を組んで考え込んでいたフィアがそう言つと、ムラミツが頷く。

「未だにお隣の国では獣人狩りが行われていることはご存じでしょうか？ 我々にもその手が伸びておりますゆえ、安全な場所を探しているのです。如何でしょう？」

「父様、いくらなんでも、無茶ですよ。私たちは最も人を殺している人狼なんですから」

人狼、という言葉にジーンたちが立ち上がりそうになったのは事実だ。

人狼と言えば、それほどまでに悪名高いのだ。

ムラミツはヒナの言葉には耳を傾けず、ただ騎士団の3人を見つめていた。

「……エリカちゃん、あなたは知っていたのでしょうか？ という事はあなたが事の発端？」

「まあ、そうですね。正確にはあたしとバーバラさんの共謀ですけど」

それを言うと、呆れたような表情をされる。

「まったく、とんでもない拾い物をしたようね……。ムラミツさん、ヒナさん、バーバラさんがそう言ってあなた方を騎士団に招いているのなら、私たちがどうこう言えるものではありません。それに、安心してください、私は獣人だろうがなんだろうが、一晚寝食を共にすれば仲間だと思ってますから。そこに人じゃない、とか獣人だから、とかいう考えが入り込む余地はありませんよ」

フィアはにっこりと笑みを見せた。

ヒナが信じられない、という表情ををしてムラミツを見ているが、ムラミツはただ静かに頷くだけだ。

「まあ、騎士団には何かと一癖も二癖もある連中ばかりだからな。今さら獣人が増えようと関係ないだろ。それに、俺としては料理の出来る女性が増える事は願ってもない僥倖だ」

ジャックが心底嬉しそうに言うと、ヒナを見た。

「ムラミツさんにしても、ヒナさんにしても、人を襲うような人じゃない事はこの2、3日で分かっている。おそらく、ヴァルト団長や、皆もあなたたちを快く受け入れてくれると思うぞ」

ジーンがにこやかに言う。その表情は、心から新たな仲間を迎え入れる事を喜んでいる顔だ。

「……………だそうです、ムラミツさん、ヒナさん。どうしまっ……………！」

エリカが最後に2人に問いかけようとして、途中で止まってしまっ

た。

ヒナが涙を流していたからだ。

ムラミツがそつとヒナの肩を寄せ、優しく頭を撫でる。ヒナは身体をムラミツに預けて嗚咽を漏らしている。

「い、いいのです、か、父様？ 私たち、が、えぐつ、外の世界に出て、も？」

「ああ、良いんだよ。私たちも人並みの幸せを得ても、な。少なくとも、彼らは私たちを受け入れてくれる。外の世界には、何も色眼鏡をかけた連中しかいないわけじゃないんだ」

エリカたちはただ黙ってその様子を見つめていた。

おそらく、これは2人にとって大きな一歩なのだろう。敬遠されるのが怖くて、恐れられるのが嫌で、踏み出せなかった一歩だ。

「本当によろしいのですか？」

ムラミツが顔を上げてフィアに尋ねると、何を今さら、という表情をフィアがしてみせた。

「もちろんですよ。歓迎しますよ、ムラミツさん、ヒナさん」

そう言つと、ついに感極まったのか、ムラミツの頬にも光る物が流れた。

第41話 専任シェフにしようなんて思ってませんか？（後書き）

イッヤッホーウツ！

天界から悪戯天使が舞い降りた感じでもってえっ！

…

…

…

どうも、作者のハモニカです。

え？ テンション差激しい？

いや、最初のは私がよつつべにて偶然見ていたアレですからお気に
なさらず。ええ、アレです、アレ。分かる人だけ分かればいいんで
す。ぶるああ。

それはそうと、

ヒナとムラミツが仲間になった！

みたいなテロップが流れそうですね。

さてさて、この後どうなる事やら。

では、感想などお待ちしております。

ノシ

第42話 ヒナの決意（前書き）

思った。

…

…

…

…

ジーン、空気ですねww

いや、そうするつもりはなかったんです。

プロローグにて主人公っぽい扱いしてるのに、なんか回を追うことに影が薄くなっているのはきつと気のせいじゃないでしょう。

というわけで、現在ジーンの出番を増やそうと模索中。

ではでは、本編をどうぞどうぞ、珍しく筆が（正確にはキーボードを叩く指）が進むので今日も投稿です。

9月21日：設定ミスを修正

第42話 ヒナの決意

「ぎゃああああああああっ！！！！！」

真夜中の森に男の醜い悲鳴が響き渡る。

黒装束、夜の闇に紛れて目を凝らさなければ分からないほどの男が、自身の腕を肩からバツサリと斬りおとされて泣きわめきながら地面を転がっている。男の腕は少し離れた所に落ちており、その近くには男のそれではない足が、腕が、首が、胴が、これでもかと言うほどに裁断されて落ちていた。

泣きわめく男の傍に1人の影が歩み寄ってくる、斬り落とされた男の腕を拾い上げた。斬られたばかりでまだ鮮血が斬り口から止め処なく漏れてきているが、影は腕を自分の顔よりも高い位置に持つてくると、自分の口に血が滴り落ちるようにして血を喉を鳴らしながら飲み干していった。

「ば、化け物めえ！！！」

男が、何とかひり出した一言に、影は血を飲む動作を止めた。

影は男の腕を地面に投げ捨てると、地面に転がっている男の前まで歩み寄って膝を折った。そして男の目に影の顔が見えるほど近づけられる。

「化け物とは言ってくれるじゃない。それじゃあ、化け物の私に今まさに殺されようとしているあなたは何者よ？」

影の正体はバーバラだった。

龍だった頃にエリカから貰った鱗を元にして鍛え上げられた剣を男の首元に突きつけながら、バーバラは表情を変えずに男を睨み付ける。

「う、うるさい！ 俺を殺そうとも、本国には俺の仲間がわんさかいる。今頃生き残った奴らがこの事を報告しているさ。貴様ら人外に安息の地はないと知れ！」

ここに至ってまだ、これだけの事を大声で喚き散らせるのであれば、この男は腕を飛ばした程度では死なないだろうな、などと考えながら、バーバラは男を眺めていた。

話など、聞いてやる気は毛頭なかった。ただ、目の前で人の姿をした「何か」が聞きたくもないだみ声を発しているだけだ。

（確かに何人が逃した感触はあったけど、やっぱり戻って来るかしら……。ここからブラゴシユワイクの一番国境沿いの街でもこいつらの足で5日、往復10日ならムラミツたちはここにはもういないだろうけど、戻ってなかったら問題ね。私がここにいると知られた以上、すぐにでもムラミツたちを仕留めようと考えるかもしれないし……）

「おいっ、貴様！ 聞いているのか！？ 貴様らがいくら策を練ろうと我々から逃げる事は出来なざいっ！！」

「少し、黙りなさい」

突きつけていた剣を男の喉に軽く突き刺す。

喉を貫通するとさすがに死んでしまうので、氣道にギリギリ届かない所で止める。男の喉から血が吹きだそうとするが、剣が突き刺さったままなので多量にはならない。それでも男が少しでも動こうものならあつという間に男はあの世へ行く事になる。

（私が出張ると事が大きくなるしなあ）

出来る事なら今すぐにもムラミツとヒナの所に行って城に連れて帰りたいのだが、それをするとバーバラの存在を知った敵がバーバラに差し向けた分の敵もムラミツたちの方に行ってしまう。

自分で言うのもなんだが、バーバラはそう言う意味では超有名人なのだ。

相手がバーバラだと知れば、敵もかなりの数で出張って来るだろう。

（まったく、他国の領土で好き勝手やってくれるじゃない）

ここは、自分がすぐにでも敵の攻撃の届かない場所に立ち去るのが得策だろうか。バーバラがいなくなれば、敵も人員を大きく増やすことはないだろう。そうなれば、ムラミツたちへの負担も大きくならず済む。決して軽くなるわけではないが、リスクを減らす事にはなる。

「ぐびっ」

「……あら？」

妙な音がして考え込んでいたバーバラは顔を上げ、剣を突き刺して

いた男に視線を戻した。

見れば突き刺された場所からかなりの出血をしている上に、既に白目を剥いている。力が入ってしまったのか、絶命させてしまったようだ。

「ふう、それじゃあ、何もかもエリカたちに任せるしかないのかしら……」

剣を男の喉から引き抜くと、噴水のように血が噴き出し始める。バーバラは軽く剣に付いた血を払うと鞘に納めて大きくため息をついた。

「任せても良いわよね、エリカ？」

ここにはいない、古き友に向けて、バーバラは小さく呟いた。

その夜は夕飯そっちのけでムラミツとヒナを迎え入れるならどの部署がいいだろうか、と言った事や、ジーンが是非とも騎士団の連中を対象に料理教室をヒナに開いてもらいたいなどという話をして盛

り上がった。ジーンもやはりそう思っていたようだ。

ムラミツは夕飯を早めに切り上げてジャックと共に酒盛りをしていた。羽目を外すとはまさにこの事、ジャックの勢いに乗せられたムラミツは翌日も早朝から工房に籠ると言っておきながら一升瓶を二本飲むという酒豪ぶりをジャックに見せつけていた。

ちなみにムラミツは笑い上戸のようであった。

エリカはと言うと、ヒナと共に庭に出て、雲一つない夜空を見上げて浮かび上がっている月を眺めていた。

「まさか、このような事になるとは、夢にも思っていないませんでした」
ヒナは、泣きに泣いて目を少し赤くしていた。だが、その表情は昼間のムラミツのように晴れやかだった。どんなに明るく振舞っていても、「人狼だから」という負い目を持っていたが、それを受け入れてくれる人たちに出会えたのだ。その嬉しさは人並みじゃないだろう。

同じ境遇の者たちはその境遇を慰めあっただろう。しかし、普通の人から受け入れられることは滅多に、いやまずないだろう。

哀しいが、そういう世の中なのだ。ヒトは自分と違う存在を受け入れられない。

「父様が最初にあなたに打ち明けたのには、訳があったのでしょうか？」

しばらくして、ヒナは振り返ってエリカに顔を向けた。その顔は、

それを咎めているわけではなく、純粹に興味が湧いたような顔だった。

「あなたは普通のヒトとは違う。だから父様も本来なら死ぬまで持つていく筈の秘密をあなたに打ち明けた。違いますか？」

「その通りですよ、ヒナさん」

不思議と、隠さなくていいのか、という疑問は浮かんでこなかった。むしろ、相手が明かしてくれたのに自分が明かさないのは無礼になるという考えの方が強かった。

「あたしは、ヒトの仇敵、この国の敵、世界が討伐しようとしている存在、ドラゴンの変わり果てた姿ですよ」

自嘲の笑みが零れる。

相変わらず、自分で自分がドラゴンだ、と言つのは自嘲以外の何も出てこない。

ところが、返ってきた反応は予想とは違っていた。

ヒナはエリカの前に歩み寄ってくると、エリカの身長に合わせて腰を折ると、エリカの顔の前に自分の顔が来るように調整した。

「それじゃあ、これは私とあなただけの秘密、という事ですね」

ウインクしてみせると、ヒナは悪戯っぽい笑みを浮かべてそう言った。

エリカはどう反応するべきか困ってしまい、作り笑いを零すことになった。

(こ、こんな性格でしたっけ?)

<これが本来の彼女なのだろう>

「うわっ!?!」

ヒナが目の前にいるにも関わらず、エリカは大げさに驚いてしまった。いつの間にもやら近寄ってきていたアレックスが足元でそう言ったのだから、彼の声が聞こえる者なら誰でも驚くだろうが、夜で静かだっただけに威力は増していた。

「あら、あなた喋れるんですか」

だから、ヒナがそんな事を呟いていたのにワンテンポ遅れて反応してしまった。

「アレックス、突然現れるんじゃない……ってヒナさん、アレックスの声聞こえてるんですか!?!」

「ええ、一応『獣』人ですから。それに私は人狼、あなたは狼ですものね、聞こえますよ」

それを聞いてさらにエリカの驚きが大きくなる。

エリカがアレックスに出会ってこの方、初対面の人間がアレックスを狼と正しく認識したことが一度もなかったからだ。大抵犬と間違われてエリカかバーバラ辺りが訂正していたのだが、ヒナはそこを正しく言い当てた。彼女自信が人狼であるという事もあるかもしれないが、エリカは驚いてアレックスの方に顔を向けた。

<わ、私を正しく認識してくれたのは、ご主人に次いで2番目だ…
…グスン>

最後に何か、鳴き声ではなく鳴き声のようなものが聞こえたが、こ
こはスルーすべきだろう。

エリカは初めて狼と間違えずに言ってもらえた嬉しさから若干打ち
震えているアレックスからヒナに視線を戻し、朗らかな表情をした。

「バーバラさん辺りは知ってますけど、少なくともあたしの正体は
絶対の秘密ですからよろしく頼みますよ?」

「ご安心を、これでも口は堅い方ですよ。生まれ持った秘密の塊で
すから」

クスツと笑ってみせるヒナの表情に、負の感情は見当たらない。

「なら、これからは『様』付け止めてくださいね? あの呼ばれ方、
性に合わないんです」

とはいえ、一応エリカは龍の世界に戻れば現役バリバリのお姫様だ。
名前で呼ばれることは少なく、大抵「様」付けで呼ばれていた。

そのはずなのだが、身分も正体も全て失ったも同然な現在、そう呼
ばれることに多少の抵抗があった。今の自分は「様」を付けられて
も良いような存在ではない。ヒトからしてみれば、忌むべき存在、
恐れられる存在、善悪どっちかで聞かれれば悪の権化ごんげなのだ。

ヒトの社会にいる以上、その事は肝に銘じておかなければならない。

それはそうとして、ヒナはエリカのささやかなお願いを快く受け入れてくれた。

「あら、でもエリカさ……んは今何歳なんですか？」

「ま」と続けなかっただけマシだろう。

とはいえ、物理的にも、肉体年齢的にも年上なヒナに「さん」付けされるのは少々歯がゆい。「ちゃん」付けも好きではないが、フィアが呼び方を改めるとは思えないからとうに諦めている。

「そうですね、実年齢だけなら500歳を超えてるんですけど」

「……バーバラさんよりも年上ですか。見た目は16歳くらいにしか見えないのに」

「見た目で判断すると痛い目に合いますよ？ まあ、肉体年齢に精神年齢が引っ張られているような気はしなくてもないですけど……」

口が軽くなったと言おうか、注意散漫になったと言おうか、ヒトの小さな脳では籠の頃から出来ていたちよつとしたことでうっかりボクを出してしまう事が多くなった。というか、正体がばれた原因はほぼそれだ。

後先考えずに派手にやれば、目を付けられることぐらい最初から分かっていたにも関わらずだ。

「ふふ、そうみたいね。それじゃ、呼び捨てで構わないかしら？」

「その方が良いです。あたしは今まで通りの呼び方をしますよ」

そう言うと、ヒナが音もなく腕をエリカの前に差し出してきた。エリカもすぐに手を差し伸べて、お互いに力強く握りしめあった。

翌日からは、前日までとは見える世界が変わったようにヒナは思えた。

それまではいかに親しくなろうとも、秘密を共有できる存在は父親であるムラミツと、吸血鬼であるバーバラ程度であった。総人口が通常の人と比べて雀の涙ほどの獣人にとって、腹を割って話せる存在はあまりに希少であった。

だから、ヒナも別段そのような存在を期待してはいなかった。

そんなものがなくても自分たちは生きていける。

そう信じて、本当の自分を隠し続ける事を心がけて生きてきた。

獣人狩りに襲われて、大怪我をした同族に会ったことはあるが、彼らは大抵すでに他人が信じられないほどまでに性格を破たんさせら

れていた。人を信じられなくなるのも当然なのかもしれない。強靱な肉体があつても、精神もそうとは限らない。

心を壊されて、身も心も獣になつてしまふ者も、決して少なくはない。特に殺人衝動の大きい人狼はその傾向にある。

心が壊されるきっかけは様々だが、自ら墮ちる者もいる。世界に幻滅して、ヒトとしての精神を保つていられなくなった者たちだ。何らかの意図を持って墮ちる者もいるだろうが、そういう者に出会つたことのないヒナには何とも言えない。

（人狼は、そうじゃなくても寿命が短いですしね……）

それは、人狼に限つた事ではない。

獣人は基本的に短命で知られている。物理的にも、精神的にもだ。

獣の精神に侵されてヒトでなくなる、という意味も含まれているが、物理的にも、50年も生きていられれば十分な方なのだ。

生きられる年月を量、死にくい身体を質とすれば、量より質を取つていることになるだろう。例外は吸血鬼くらいだろう。吸血鬼は不死ではないが不老だ。質と量を兼ね備えていると言える。

その点、トウキの一族はそのご多分から漏れているケースが多い。ムラミツにしても、既に87歳、獣人だからなのか年よりも若く見える事があるが、獣人としては生きているのが不思議なほど生きている。おまけに未だにその身体も精神も衰えを見せる気配がない。

ムラミツが長命なおかげで、ヒナは多くの事を学ぶことが出来た。

鍛冶職人としての知識、刀姫一刀流の技、そして何よりも、父親の最高の料理だ。

初めてヒナが手料理をムラミツに御馳走したのは10歳の時、強靱な身体を持つ人狼には珍しく夏風邪をこじらせていたムラミツに普段のムラミツの様子を見よう見まねでやって料理した。その時は母親に手伝ってもらって必死になって台所に立った。あの頃はまだヒナの母親も立つことがまだ出来ていた頃だ。

案の定と言おうか包丁で指に切り傷を付けたり、かまどで火傷したりと踏んだり蹴ったりだったが、それでもそれを食べた時のムラミツの表情は今でも覚えていいる。

それ以降、料理を人に振舞うのが好きになった。振舞うと言っても、ほとんどの場合はムラミツと味比べをしていただけなのだが、それでもそのおかげで料理に関しては父親を超える事が出来た。

こうして、はるばる首都から来た客人に笑顔になつてもらえる料理が作れるようになったのは、他でもない父親、ムラミツのおかげだ。

1人だけで生きていけるとは言わない。

だが、ヒナにとって、母親を失った今、父親であるムラミツさえいれば十分だった。

2人で、半世紀程度の短い人生をひっそりと過ごそうと思っていた。

ところが、そこに彼女が現れた。

人にして獣であるヒナとは明らかに違う、本質的に部分がヒトではない彼女が、この屋敷にやってきた。最初から警戒していなかったと言えば嘘になる。普通の人でさえヒナたちは警戒するのに、人と共にいる人外が現れたら警戒しない方がおかしい。バーバラはヒナが生まれていた時から傍にいたからそういう抵抗はなかったが。

傍から見れば、まだまだ童心の残る少女であつたが、その内に秘めた圧倒的な存在感は、分かる人には脅威としか映らない。

どんなに隠しても、本質にある野性的な感覚は隠し通す事が出来るものではない。

刀を鍛え直しに來ただけ、と聞いた時は若干安堵もあつた。数日前に現れたという男たちの連れだつたそうで、ムラミツも信頼できる人たちだから大丈夫、と念を押してくれた。

そして、面と向かつて彼女と話し、自分の考えが杞憂に終わった事を知つた。

それどころか、彼女を迎え入れる事にしていた。

ヒナの作つた渾身の手料理を、あれほど美味しそうに、幸せそうに食べる彼女の表情を見た時は、少々肩透かしを食らつた印象もあつた。これがこの少女の本質かと思つたほどだ。父親共々料理を褒めてもらえたことはとても嬉しかったが。

そのせいか、なし崩し的に彼女に刀姫一刀流を教える事になり、終いには共に首都に行く事になった今も、何故か不安、恐怖はない。

彼女自身が気づかれずに過ごしているのだ。そして少なくとも、こ

の国は公式に獣人狩りを禁止、獣人だろうとなんだろうとヒトならば就職することが認められている。僻地に行けばその限りではないだろうが、首都ともなれば国王の御膝元、そのような差別があれば一発検拳だろう。

それに、騎士団の面々は、ヒナの印象では信頼に足る人たちだった。ムラミツが自ら人狼である事を明かした後も、別段態度が変わる事もなかった。さすがに腕を変化させた時は驚いたようだが、あれを見せられれば誰でも驚くだろう。

「もう、ここには戻らないくらいの気持ちで行くよ」

ヒナは、屋敷の裏手、林の中に1本立つ巨大な木の下に立っていた。ここに来るのは、何か困った事があった時か、心の平穩を求める時くらいだ。

木の根元には小さく土が盛られた場所があり、上には石が乗せられている。そばに小さな竹の筒が置かれており、その中で線香がうつすらと白い煙を発している。

「母様、人狼であろうと、人はヒトと言ってくれたのは母様でしたよね。私は、あなたの子であることを誇りに思っています。だから、私と父様を、ここから見守っていてくださいね」

その目に迷いはない。

他人からの目など気にしない。自分という本質を変える事は出来ない。出来るのは、周りを変える事だ。自分が認められない場所なら

ば、認められる場所にすればよい。至極簡単な結論だが、実行に移すのは困難を極める。

「私たちと同じ境遇の者が世界には大勢いる。1人で出来る事には限度があるけど、やらなければ始まらない。それに、私にはもう仲間と呼べる人たちがいる。そして何より、父様がいる」

だから、こんなところで立ち止まるわけにはいかない。のたれ死ぬわけにはいかない。茶毘だびに付されるなど、願い下げだ。

狼の耳が、鼻が、森の中を蠢く影を捉えている。

おそらく、自分と父親を狙っている暗殺機関だろう。

近づいてこないという事は機会を窺っているのだろうか。そこらの獣人と違って、ヒナには、ムラミツには、自らを守るだけの力がある。それを警戒してのことなのか。

「あと3日、それだけあればエリカさ、……いえエリカの刀が出来上がる。そうすれば、もはやここに居る理由はなくなる。そうすれば、私たちは自由。だから」

森の奥に潜む影を見つけたわけではない。ただ、大ざっぱにその方角を睨んでいるだけだ。

「こっちは当分お役ご免、というわけで預けておきます。いつか取りに来るので無くさないでくださいよ？」

持ってきていた二振りの刀のうち、木刀の方を木の根元の地面に突き刺すと、身を翻してヒナは母屋へと戻っていった。

第42話 ヒナの決意（後書き）

まずは、この龍旅を読んでくださっている方々に作者の不手際というか不注意をお詫びします。

指摘が無かったのでスルーしていただいたものと思っ
ているのですが、一応こちらの滅茶苦茶大きなミスなのでお知らせさせていただきます。

前回、後書きにて「バーバラにぬつ殺された」云々をボソツと言っていたのですが、よくよく考えたらぬつ殺されるのは今回の冒頭だったのです。

そこら辺の時系列を誤解していたらしく、半ば以上にネタバレをしていました。

本当に申し訳ありません。

一応前々回辺りでそういう事をやりそうな雰囲気は出ていたので、それを誤解していたのかもしれませんが。

こんな馬鹿な作者が小説書いてて良いのか、と自己嫌悪に陥るほど……ではないですが自分のミスが辛い……。

次回予告レベルじゃなくネタバレをしておりました。

改めて、お詫び申し上げます。

ネタバレになっていた部分は削除させていただきました。本編じゃ

ないだけマシですね。

ではでは、また次回。

ご感想などお待ちしております。

第43話 止まらなかった狂気（前書き）

ようやく、ようやく刀の銘を出すことが出来ました……。

ご協力いただいた方々には無上の感謝を。

また、今回送っていたいただいた案の中では、他の機会に出そうかと思
った案も幾つかあるので、もしかしたら刀と限らず何かしらの場
面で登場することがあるかもしれません。

いや、自分で案を考えるのが面倒とかじゃなくて、純粹にこんな作
品にでも助言を下さる皆様に少しでも報いたいなあと思った次第で、
他意はない（はず）です。

ではでは、本編をどうぞ。

第43話 止まらなかった狂気

あつという間に3日が経った。

早朝訓練を終えて母屋に戻ると、既に朝食の用意が出来ていたのかジーンやジャックたちが席についていた。エリカはいつも彼らが寝ている時間からヒナと共に特訓をしている為、この時朝の挨拶をする。ジーンはしっかり返してくれるのだが、毎日毎日夜遅くまで起きていると思われるジャックは眠気眼でぼうつとしていることが多い。

今日もジャックはご飯の入ったお椀を手に持ったままうつらうつらしている。危うく頭から焼き魚の乗ったさらにダイブするところだったので、ジーンと2人がかりでそれを抑えた。

正確には直撃寸前だったジャックの額をジーンが抑え、零れ落ちたお茶碗をエリカがダイビングキャッチしたという寸法だ。食べ物は大切にするのがエリカの信条だ。焼き魚の救出(?)はジーンに委託してお米の救出に専念したのにはそういう理由がある。

「エリカ様、新刀の方ですが、午後には仕上がります」

食事を始める少し前に、ムラミツは箸を持ったままエリカにそう伝えた。

「ですので午前中はヒナをお借りします。最後の仕上げた2人でやると約束しておりますな」

「全然構いませんよ。残念ながらここにいる間に刀姫一刀流はマスターできませんでしたけど」

「はっはっはっ、それも問題なくなっただけで済みました。騎士団の元にヒナが行けば、いくらでもお教えできます。この仕事を最後に鍛冶屋は引退しますので、私もお手伝いできますよ」

気さくにムラミツがそう言うと、ジャックが少し残念そうな顔をする。

「なんだ、鍛冶職人が来るなら是非とも俺の大剣を見てもらおうと思っただがな。造る得物は違えど鍛冶職人、使うこちらとしては何か興味深いものが見ればと思っただが」

ジャックが心底残念そうな表情をしている。大方、自らの大剣をさらに強化する方法でも模索していたのだろう。

そんなジャックの心境を知ってか知らずか、ムラミツは笑みを浮かべてジャックに向かって口を開いた。

「そういう事なら、全くもって大丈夫ですよ。私は剣は門外漢ですが、強化の仕方には共通点もあると聞きます。引退はしても、お力にはなりますよ」

それを聞いたジャックは打って変わって嬉しそうな表情に変化した。百面相になりそうなほど表情が多彩だ。それを見ているジーンは相変わらず冷静な顔をしているが。

(ジーンさん、最近空気がします)

ご飯を口の中にかき込みながら、ジーンに視線を向けながらエリカ

はそんな若干メタな事を考えていた。

ムラミツとヒナは朝食を早々に切り上げると、工房へと向かった。

ヒナがいないので特訓ができないエリカは出来る頃合いまでジーンたちと雑談したり、ジャックの昨日のネタを掘り返してからかったりしながら時間を潰すことにした。

もはや黒歴史と化しているジャックの「武勇伝」はエリカたちの脳内に永久保存されているのは言うまでもなかった。

森の中を数人の影が素早く動き回っている。

黒装束に小回りが利く短い剣を腰に巻き付けて男たちは木々の間を軽快なステップで走り抜けていく。

「隊長、本国の応援を頼まなくて大丈夫ですか？」

一番後ろを歩く男が、先頭の男に話しかけた。

隊長と呼ばれた男は後ろを振り返る事はなく、少しスピードを落と
して代わりに話しかけた男が隣に追いついて顔を向けた。

「さあな。少なくともあの女吸血鬼がいない今しかない。俺たちの
存在を知られた以上、これ以上待っていたらアールドールのドラ
ゴンスレイヤーがやってくるぞ」

ドラゴンスレイヤーという言葉に後続の男たちが息を呑む。

龍だけではない、対人においても十二分すぎる實力を持つ騎士団だ。
彼らの本国、ブラゴシユワイクにもそれはあるが、ドラゴンスレイ
ヤーを保有する他の2ヶ国とは程度が低いのは周知の事実だ。

彼らが、それが最も分かっているのだ。

偉そうな貴族の2代目のボンボンがレジヤー気分になっている、と
いうのがブラゴシユワイクの実情、口には出さないがとても戦える
ような状態ではない。

だからこそブラゴシユワイクの軍部にはそれ相応以上の危機感があ
る。通常の軍隊が他国に比べて充実しているのには、対ドラゴンに
おいてもそれなりに対応できるようにするためだ。

そして情報収集の分野でも充実を図った。その結果が彼らだ。

国家機関による獣人狩り、公式にはその行動を禁止され、解体され
たはずの機関。

「あいつらが来たらいくら俺たちでもこの少人数ではどうしようもない。そして俺たちの存在が公になれば国際問題に発展することは目に見えている」

「しかし、確か現在一般人があの人狼の所に来ているようですが？
一般人に見られては……」

彼らはエリカたちの事を「トウキのところを刀を鍛えてもらいに来た一般人」程度にしか見ていなかった。正確には情報を集める前に人員の大半をバーバラに瞬殺されてしまったために、それを行う余裕がなくなってしまったのだ。

ジーンやジャックが大剣を背負っている事が多少気にはなっていたが、このご時世遠出するなら護身用の武器は必要不可欠だし、何より少女エリカがいるだけで彼らからしてみれば危険度は大幅に下がった。

あの外見でまさか、ほぼ敵無しの実力を持ち、おまけにその正体が龍だとは考えも及ばないのも致し方のない事だろう。

ジャックが超筋肉系ではあるが、エリカとジーンの2人（一応確認しておくがジーンは18歳、見た目はまだ子供が残っている）を見て、その後ファイアを見れば、少々厳しいが家族にも見えなくはないだろう。

鎧を着込んでいるわけでもないのに騎士団とは気づかれないし、昼間エリカがヒナと特訓している時は彼らはあまり動かない。昼間、日の当たる所を動くことはほぼない彼らにとって、数少ない情報収集のチャンスすら失っていたのだ。

「俺たちの目標はただ1人、人狼ムラミツだが、目撃された際には全ての目撃者を殺せ。いつも通り、塵だ」みなころし

隊長格の男は黒装束に隠れて見えない口元を歪ませる。

男の言葉に後続も気合を入れ直す。仲間を多く殺されたために、彼らにとってこれは甲い合戦の意味合いもある。

「塵だ」みなころし

男は小さく呟き、走る速度をさらに上げ、森の先にあるムラミツの屋敷を目指した。

「ヒナ、柄を取ってくれ」

工房の中で、ムラミツは今まさに鍛え上げた黒い刀を手に持って顔の前にかざしていた。

まだ柄を取り付けていないので、完成すれば柄に覆われる部分、なかこ茎を白い布で覆って掴んでいる。ほぼ全ての部分においてエリ力が持ってきた黒鱗が使われている。

鍛える事が出来るほどの大きさに砕くのに苦勞し、熱してもなかなか柔らかくならない事にも苦勞し、言ってみればとんだじゃじゃ馬だったとムラミツには思えた。

だが、苦勞した分、ここまで仕上げたムラミツ、そしてヒナの満足は人並みではない。黒光りする刀がかまどの炎のオレンジ色の光を反射させて妖しく光っている。

ヒナが柄部分を持つてくると、それを手に取りムラミツは刀身と柄を合体させるために先日も使用した小さな木槌を取り出す。

柄の部分も黒を基調としたデザインで、柄に巻かれている細い紐は外縁が赤い紐で縁取られており、より黒を引き立てている。

その柄に刀身を差し込み、柄と刀身両方に開いている目釘穴に小さな棒を差し込んで木槌で中までしっかりと打ちこむ。

その間にヒナが鞘を取りに行き、漆がしっかりと塗られた黒い鞘を持ってきた。

「ついに、完成しましたね」

ヒナがムラミツから刀を受け取り、先ほどのムラミツがしたようにしげしげとその黒い刀身を見つめる。

ヒナの言葉にムラミツは満足げに頷き、耐熱用の分厚い手袋を外すと頭に巻いていた手ぬぐいを取って椅子に座り込んだ。

「今までにない、頑固な素材だったからな。苦勞もそれ相応だったが、引退前最後に良い仕事が出来た」

大きく息を吐くと、ムラミツは天を仰ぐように天井を見つめた。

「銘は、どうします？」

これも、鍛冶職人として大切な事だ。

鞘に一度刀を収め、傍にある刀を置く台に乗せると、ヒナはムラミツの正面に椅子を持ってきてそれに座った。

「そつだな、お前が考えるか？」

「え、良いんですか？」

天井に向けていた顔をヒナに向けると、ムラミツは笑みを浮かべて小さく頷いた。

「私より、ヒナの方がネーミングセンスはある。銘を刻み込むの後にするとして、今のうちに決めてしまおう」

そう言うと、ヒナは少し考えるような仕草を見せて黙り込んだ。

もちろん、ムラミツも案は考えている。

だが、できればヒナに名付け親になって欲しいという思いがあった。これから、どう生きてもヒナの方が自分より長生きするのは明らか、

ヒナのためにもこういう経験が多いに越したことはない。今まではほぼヒナはムラミツの鍛冶を見ているだけという事が多く、造つても刀鍛冶に関しては鬼が付くほど厳しいムラミツにことごとく落第点を押され、とてもじゃないが銘を決めるなんて作業をした事が無い。

それでも、ムラミツはヒナがいつか自分が刀を鍛えた時、世に送り出すに相応しい銘を付けようと日々紙に良い銘をしたためている事を知っている。

子供らしい、と言えはそうとも取れるが、父親としてここいらで娘の背を押してやりたかったのだ。

「……そうですね、黒いから『暗』、『闇』……、いやここは素直に『黒』で行くのがいいかな？」

真剣に考えるその表情はまさしく鍛冶職人のそれ。

今回は仕上げにしか携わってはいないが、既にムラミツからしてみれば皆伝しても良いほどの実力を持っている。だからこそ今回、最も繊細さが求められる仕上げを全て任せてみたのだ。

その結果は今ヒナが置いた刀に現れている。

素晴らしい、という一言では言い尽くせないだけの刀に仕上がった。親子合作にして最高の一振り、その銘をヒナが付けるとなれば、たとえ公にはならずともトウキの一族には受け継がれる。

それもヒナが結婚して子を成せば、の話になってしまおうが。

「……………姫黒なんてどうでしょう?」

「姫黒、響きも良いな。シンプルだが、姫黒と黒羽くろはね、良い名だ。先代が鍛えた刀のように主人を守って、人を生かすために振られるとよいな」

「ええ……………」

ヒナは棚から小さなナイフを取り出した。角ばった刀で、先端がかなり尖っているそれを手に刀を持ち上げ、鞘から引き抜く。

「おいおい、ここでやらなくてもいいだろう?　せつかく今目釘を入れたところだぞ?」

「こういう事に早い遅いはないんです、父様」

(気が逸はるか。まあ、当然と言えば当然か)

銘は、茎なかこに入れる事になっている。つまり、先ほどムラミツが入れた目釘を再び外し、鞘から刀身を取り出さなければならぬ。

とはいえ、今のヒナにそれくらいの労力は使ったのうちに入らないだろう。ムラミツはここ1週間で2本も刀を鍛えて心身共に疲れ切っているのだが、ヒナは今日まではエリカの特訓、ほぼ1日中仕事をしていたムラミツに比べれば疲れは少ないだろう。

そして何より、一心不乱に目釘を抜いて刀身に銘を刻んでいくヒナの横顔を見て、止めようなんて気も失せてしまった。

(ヒナの造る刀も見てみたいものだ)

ここではもう刀を造る事は出来ないだろう。

だが、首都に行っても鍛冶屋はある。むしろここよりも設備の整った場所もあるだろう。そこで働くことが出来れば、ヒナもいずれ刀鍛冶として生計を立てる事が出来るようになる。

龍の鱗も貫くことが出来る刀を、黒鱗のようなイレギュラー無しで鍛え上げる事が出来るようになるのも、決して遠い話ではないと、ムラミツは直感で感じ取っている。

(にも関わらず、ドラゴンのために刀を鍛える、か。皮肉だな)

自然と笑みが零れてしまった。

正体を知っていると云っても、実際にその姿を見たわけではない。それでもエリカを龍だと信じている自分が不思議だった。エリカにはそれだけの存在感、オーラのような物があつたのかもしれない。少なくとも、ヒトよりは自分たちに近い、それが。

「姫……………黒……………」と

しばらくして、顔を上げたヒナは満足げに刀身をムラミツに見せた。ムラミツが身を乗り出して刀身に刻まれた「姫黒」の文字を覗き込む。刻まれたとはとても思えない、まるで書いたかのような美しい形をした文字を見てムラミツは満足そうに数度小さく頷き、ヒナに視線を戻した。

「良い仕事をしたな」

「ふふ、いつも練習してるから」

嬉しそうに満面の笑みを返すヒナは刀身を引っ込めるとさっきの作

業の反対を行い始める。

工房の中には、かまどの中で木材が立てるパチパチツという音と、ヒナが木槌で目釘を叩く乾いた音だけが響き渡る。

「ヒナ」

「はい？」

ムラミツの呼びかけに、ヒナは視線を移さずに返事をした。意識はまだ目釘の方に向いているようだ。

「首都に行ったら、どうする？」

その言葉で、ヒナは木槌を打つ手を止めて顔を上げた。ヒナがムラミツに顔を向けると、先ほどとは打って変わって真剣な表情をしたムラミツが座っていた。

ヒナは木槌を下して小さく息を吐く。

「何をする、とか何がやりたい、なんてことはまだ決まってないよ。今までそんな事考えた事もなかったから。でも、これからは一杯考えられる。そういう事を考えても良い所に行くんだしね」

「ここにいるよりも、厳しい現実には直面することも、覚悟は出来ているな？」

「昨日、私と父様をあの人たちにお任せする、と言ったのは父様ではないですか。今さらそれは愚問と言う奴ですよ。自由に生きる事は、困難に立ち向かい、それを乗り越える事、なんですから」

「……あいつの言葉か」

自分の唯一の理解者であり、同じ刀鍛冶を志した同志、そして世界で唯一ムラミツが愛した女性でありヒナの母親。

彼女の行く手も、困難しかなかったはずだ。ムラミツと出会ってからはなお一層増した。

人狼と心通わすなど、世間からしてみれば自殺行為、気が狂ったと見られてもおかしくはなかった。事実彼女の両親は彼女を監禁してまでもムラミツとの交際を絶とうとした。

一度は殺し屋を雇ってムラミツを殺そうとしたこともある。その時の情報が洩れて暗殺機関などに狙われる羽目になったという事実もある。

とはいえ、その程度ではムラミツの恋路は邪魔できなかった。

ある夜、密かに彼女の家に忍び込んだムラミツは彼女を連れて街を出た。世間では人狼に娘を誘拐されたという同情を両親は集め、何とかムラミツから彼女を取り戻そうと躍起になっていただろう。

だが、当の本人に戻る気が無いのだから、2人が追手に引っかかるはずもなかった。

そして、この屋敷にたどり着き、最初はムラミツの父親にも反対されたが、遂にはムラミツたちの言葉に負けて結婚を認めた。

トウキの一族としては、やはり最初は抵抗もあった。

だが、ムラミツたちの仲睦まじい様子を見て、子供まで成したとあ

つてはその考えも変えるしかなかった。一族の後継者として正式にその子、ヒナを認め、今までムラミツが教え伝えられてきたことを全てヒナに受け継がせることにした。

とはいえ、獣人の家系が長続きする保証はない。同族の異性に出会える可能性は低い。残念ながら、ムラミツの両親は血が繋がっている。

だから、できればヒナには血の繋がらない男性と付き合ってもらいたいという思いがムラミツにはある。

もし、騎士団の人たちがエリカたちが言う様に本当に良い人ばかりならば、ここにいるよりは明らかに出会いは増える。

「ヒナ、乗り越えて、立派に生きるよ」

だから、そう願わずにはいられなかった。

優しくヒナの頬を撫でると、ヒナが少し不思議そうな表情をしている。

それもそうだろう、彼女は2人で行けるもの、と信じているのだから。

(私も、そうであって欲しかった)

「父様………?」

「行け、ヒナ」

奴らが来る。

工房の奥の方へとヒナを押し込み、部屋と部屋を区切る襖を閉めたと同時に、工房の扉が蹴破られた。黒づくめの男が飛び込んできてムラミツに剣を突きつけようとして来るが、全てを予期していたムラミツにはそれを回避することなど児戯に等しかった。

剣を持つ手を叩いて逸らし、男の首筋に強烈なチョップを入れると椅子目掛けて投げ飛ばした。椅子が壊れる大きな音がして男は工房の床に倒れ伏した。するとさらに扉から複数の男たちが飛び込んできて、ムラミツを素早く取り囲んだ。

「人狼ムラミツだな。貴様の命、貰い受ける」

隊長と思われる男が一步踏み出しながらそう言うと、剣を持ちなおしてムラミツとの距離をジリジリと詰めてくる。

「ほほう、私を殺すか」

ムラミツは、今までに見せた事のない、底意地の悪そうな笑みを見せた。そして一度大きく息を吸うと、ムラミツは身体を一気に狼へと変化させていった。

メキメキツと言う音がして腕が、足が、頭が、胴が、毛に覆われ、太ももの筋肉が異様に太くなる。鼻が突き出して、鋭い牙が口の端から覗く。

獣の目がギョロツと自分を取り囲む黒装束の男たちを見渡すと、ムラミツは大きく口元を歪ませ、口を開けると腹から力を入れて叫んだ。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ………！！！」

それは、狼の叫び声に他ならなかった。

第43話 止まらなかった狂気（後書き）

ぎゃく、誰か私にギャグ分を分けて下されえ……

シリアスには疲れたよう……

時々入るボケというか、その程度が必死の私の抵抗、番外編なんかやっても結局はストーリーに関連する話しか書けないし……

……よし、わかりました。今度番外編を書く機会があれば本編何ぞ関係のない、ぶっ壊れたものを書こう……

書く機会があれば……

第44話 久々の出番とか言わない！（前書き）

……まあ、そういう事です。

私の夏休みが本日終了するのでやりたいことを終わらせようと思って必死にキーボードを叩いた結果、またまた2日連続の投稿が出来ました。

それはそうと、設定ミスの報告が来たのでそれに関するお知らせ。

35話にてムラミツの年齢を87歳と設定したにも関わらずそのことを忘れて42話にて65歳と書いておりました。速攻で修正させてもらいました。

年齢なんて覚えてられっかーいっ！（オイッ！！

……すっかりとした設定を作らなかつたばかりに話が進むにつれて設定が変わるなんて、馬鹿ですね、阿呆ですね。

漫画の第1巻と30巻で絵柄が全然違うのとはワケが違います。

今後ともこんな馬鹿な間違いがありましたらご報告ください。

今回に関しては、そんな所まで読み込んでくださったっていた読者様に感謝しております。イヤ、年齢見て「うん？」ってなれるなんてどんな観察眼ですか……。35話から42話だからいっぺんに読んでは話は別でしょうが、よく気が付いてくれましたよ……。

そして、その報告を見て気が付いたこと。

…

…

ヒナって今何歳だっけ？

やっちまったああああああっ！！！！

何の気なしにムラミツを87歳になんてするんじゃないかなかったあああ
あ！！！！

作者の脳内ではヒナは二十代前半（あえてプライバシーを鑑み具体的に
には言いません）という設定だったのですが、それなら生んだの
ムラミツが60代後半の時！？

どんだけ無茶な設定してるんだ、私は！

ていつかムラミツさん、どんだけ!?

はあ、即興のせいですね。

私が悪いんです。

と言う訳で、今後はもうチヨイ気を付けるように気を付けます（ア
レ? 日本語がおかしいぞ?）

ではでは、本編どうぞお〜

第44話 久々の出番とか言わない！

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

.....

「な、なんですか!？」

部屋でぼんやりと刀の完成を待っていると、突然狼の遠吠えのようなものが聞こえてきた。ここ最近に野性の狼がいるとは聞いていないし、アレックスはエリカのすぐそばにいる。

ともなれば遠吠えを叫ぶことに心当たりがあるとすれば、2人しかない。

「エリカ、何かあったのかもしれない。見に行こう」

「ええ、ジーンさん。ファイアさん、ジャックさん……は無理ですね」

ファイアが立ち上がり、それを見てジャックの方に目を向けたエリカは呆れたような口調になってしまった。昼寝をしてみると横になっていたジャックは大きないびきをかきながら爆睡している。ファイアがだらしなくと言って何度か蹴ったが、一向に起きる気配が無い。こんな危機管理能力でよく生きていられるものだ。

「仕方ないですね、ファイアさんはここに残ってジャックさんを叩き起こしてください。あたしとジーンさんは工房へ向かう事にします」
「分かったわ。2人に一体何が……、心当たりがあるってのも嫌ね」
「おそらく、例の暗殺機関とかいう奴らだろう。エリカ、敵は殺す

気で来る。エリカにそいつらを殺すだけの覚悟はあるか？」

それは、1人の少女としてエリカを心配してかけられた言葉だろう。ジーンと言えども人を殺したことはないだろうが、それでもエリカを心配してくれているのだ。エリカはジーンに向き合って小さく頷くと、少し笑みを見せてジーンに手に持つ刀、黒羽を持ち上げてみせた。

「仲間を殺そうとする者はたとえ誰であろうとも許しません。それは、ジーンさんも同じでしょう？」

それを聞くとジーンは少し驚いたような表情をしたが、すぐに苦笑して頷いた。

エリカは黒羽を、ジーンは白い大剣をいつでも抜ける状態にして走り出した。工房がある所は母屋から少し離れているが、走れば数分とかわからない。ジーンは行った事はないが、エリカは一度行っている。迷う理由もなくエリカとジーンは一心不乱に足を動かし続ける。

「エリカ、あれはどっちだと思う？」

工房へと走りながら、ジーンはエリカが出来れば聞かれたくなかった事を聞いてきた。

「……どちらでもあって欲しくはない、というのが本音ですが、おそらくムラミツさんかと」

「くそ、そこまでして獣人を殺したいのか……」

珍しくジーンが悪態をついている。

だが、エリカも同じ気持ちだった。なぜそこまで獣人を憎むのか、エリカには理解できなかった。同じ人間でもアールドールン、強いではエリカの周りの人とは大違いだ。

「……怖いんですよ」

「え？」

ポツリと、エリカは小さな声で呟いた。走っているため、腹に力が入って自然とそれなりに大きな声にはなっているが、それでも隣を走るジーンが聞きなおすほどの音量だった。

ジーンが聞きなおそうとエリカの方に一瞬顔を向けると、エリカは複雑な表情をしていた。

「自分とほんの少しだけ違うという理由で、人は他の人を怖れるおそんですよ。でも、人はそれを他人に知られたくないし、それを自分でも見たくない。だから、自分たちとは違う存在を『悪』とすることで、恐れる自分を正当化するんです。明確な『悪』あれば、人は誰でも自分は『善』だと思える。時に、双方が『善』である
うと……」

「エリカ……」

ジーンが本当に不思議そうな顔をしているのが視界の端に映っている。

それもそうだろう。ジーンからしてみれば自分よりも年下の少女がまるでそれを見てきたかのような表情で、言葉で、そう言うのだからこれほど驚くことはないだろう。

だが、あえてエリカもそれに対して言い訳をしようとは思わない。少なくとも今言った事は自ら経験したことだ。

獣人という『悪』、吸血鬼という『悪』、龍という『悪』がある事でヒトは自分は正しいと思いたいのだ。それをエリカはもはや人からしてみれば大昔に痛いほど知ったのだ。

彼らが一体何をしたというのか。

確かに、ごく一部の者は人に害を与えるかもしれない。だが、それだけでその種族を全て同じように見てもらっては困る。それ以前に獣人なんていう呼び名も人が付けたもの、彼らは決して人外などではない。

龍はそもそもヒトとほとんど交流を持たない。

そして全く無意味に、自己満足にヒトを襲う龍はいない。理由もなく龍がヒトを襲う事はない、つまり龍がヒトを襲うのには全て理由があるのだ。かつてのエリカのように。

仲間をヒトに殺された。

龍の領域を大きくヒトに侵犯された。

理由はそれくらいだ。

だが、彼らはそれを理解しない。

野蛮な化け物が畏れ多くも人を襲って人を丸呑みにした。そんな感

じに受け取られているだろう。

だから、獣人が、吸血鬼が迫害されるのを見るのは心が痛い。

同じヒトにすらそういう扱いをする人が許せない。

怒りを超えて殺意を覚える。バーバラ、いや当時はカトレヤだが、彼女の時は我慢が出来なかった。

しかし、あの時は力があつた。

圧倒的な、人を屈服させ得るだけの力が。

それが今はない。腕っ節と黒鱗だけである程度は戦えるが、それはあくまで一対一の時の話だ。暗殺機関などと称するからには複数人だと考えるのが妥当だ。以前なら人が10人いようが100人いようが問題ではなかったが、今は人の身体、一方的に空から攻撃などできない。どうしても死角というものができてしまう。

それが不安だった。

いかに黒鱗の保護があろうとも、急所は守れない。特に首から上に關しては出せば生き残れるだろうが全てばれてしまう。

たとえこの場を切り抜ける事が出来たとしても、その後はエリカ自身も付け狙われる事は火を見るより明らかだ。

だがそれを恐れる気はない。

死角に逃れられたがゆえに仲間を失うのが怖かった。今のエリカは

万能ではない。ヒトの身になって初めて明確な「敵」に出会い、仲間を失う事が怖いのだろう。

「エリカ、背中を守る。前だけ見て行け」

そんなエリカの心境を知ったかのような一言をジーンが呟いた。

(そうだ、仲間を失うのが怖ければ、共に助け合えばいい)

エリカはジーンに視線を向けて小さく頷く。

工房まではそう遠くない。エリカは刀の柄に手をかけていつでも抜けるように構える。

「もう少しで……っ！」

曲がり角を曲がろうとした時、突如目の前に影が現れた。

とっさに出した足で地面を踏み込んで急制動をかけると刀を抜いて斬りかかれる用意をするが、それをジーンに制される。

「ヒナさん！」

飛び出してきたのはヒナだった。

息を荒げ、涙目になりながら手にはしっかりと刀を持っているヒナがそこにいた。膝に片手をつけて大きく息を乱していたヒナは顔を上げてエリカとジーンに顔を向けると掴みかかる勢いでエリカに迫ってきた。

「父様を、父様を助けて！」

それを聞いて、エリカの予想が全体的中してしまったことを知ってしまった。エリカは内心で小さく舌打ちするとヒナの肩に優しく手を置いてヒナの目を真っ直ぐに見つめる。

「あたしたちが助けに行きます。あなたは母屋に戻って下さい」

「わ、私も行きます！ 私だって刀姫一刀流の使い手、戦えます！」

明らかに気が動転している。震える手でヒナは自分の手に持つ刀をエリカに見せる。

「ヒナさん、人を斬った事、ありますか？」

「え……？ ない、けど」

「人を初めて殺そうとするなら人は必ず躊躇します。その躊躇が、殺し合いでは命取りになるんです。あたしたちだって人は殺したことはないですけど、必要とあれば殺すのが、あたしたちなんです」

殺し合い、という言葉にヒナの肩がビクツとなったのを感じた。

そして、エリカは嘘をついた。

人を殺したことなど、数えきれないほどある。初めて人を殺すのを覚悟して躊躇しないのではなく、エリカの場合、もう慣れてしまったのだ。

「敵は何人ですか？ 武器は？」

顔を俯けたままのヒナにエリカは静かに尋ねる。

「……5人、普通の剣ブレイドよりは短かったと思います。走りながら工房に入っていく男たちを見ただけだから、もう少し多いかもしれません……」

「それだけ分かれば十分です。ヒナさん、工房には近づかないでください。後から来るフィアさんたちにも説明頼みます。行きますよ、ジーンさん」

「おう」

ヒナは地面に力なくへたり込んでしまう。それでも、ヒナは何とか顔を上げて持っていた刀をエリカの前にかざす。

「私と父様の、最高傑作です。これで、父様を助けて下さい！」

後半は、もはや叫びに近かった。

息も絶え絶えにそう言うヒナはムラミツを失う不安で一杯であった。

エリカはかざされた刀を受け取り、小さく頷く。

「全力を尽くします。だからヒナさん、あなたも負けないでください」

それだけ言い残すと、エリカはジーンと共に工房へと駆け出した。

黒装束の男は、正確には7人だった。

だが、最初の1人は突入と共にノックアウトされ、もう1人は一番最初に工房に突入したがために、ヒナは見落としてしまったようだ。

「こ、この化け物め!!」

工房の外、建物の壁には人一人が十分に通れるだけの大穴が開いていて、もはや人の形をした狼となったムラミツを囲んで6人の男が恐怖していた。

さすがはその手のプロ、隙を突かれて噛み殺されるような者はいないが、最後の一步が踏み込めず、一進一退が続いていることも事実だ。

どうも工房にはもう1人何者かがいたらしく、助けを呼びにものと思われる。男たちには一刻の猶予もない。彼らとて、人は殺したくないと考えている。

だが、目の前の人狼はそう簡単に殺されてくれるような男ではなかった。

荒い息をし、鋭い牙の間から涎を流しているその姿はまさに狼。獲

物を狙う目で男たちの動きを抜け目なく見渡している。

（なんて男だ。6人がかりで一太刀も浴びせられないとは……）

彼らにとって今まで戦ったこともないタイプの相手だった。大抵の獣人は逃れるように距離を取るのだが、ムラミツは違う。距離を詰めてここにいる人間を皆殺しにしてから逃げるつもりなのだ。人狼自体が持つ高い先頭能力と殺人衝動、そして刀姫一刀流の使い手、刀こそなくともその実力は侮る事は到底できない。

男はムラミツを取り囲む仲間に一瞬視線を飛ばし、ジリジリとムラミツに攻撃を加えるタイミングを見極める。

「グルウ……」

もはや、人語は話していない。だが、明確な殺意は痛いほど伝わってくる。

「グルアアアアツ！！！」

「しまっ……！」

先手を取られた。

黒装束の男の1人に飛び掛かったムラミツは自らに振られた剣を素手で弾き飛ばすと男の喉笛に思い切り噛みついた。一瞬男の口から悲鳴が漏れようとしたが、すぐに血が口の中を塞いでくぐもった呻き声しか漏れなくなり、じたばたと抵抗する男の手足もすぐにダラリと力なく垂れ下がる。

仲間が殺された事で事態は一気に動いた。

喉笛を噛みつかれた時点で残りの男たちがムラミツの背中に向かって斬りかかった。ムラミツは啞えていた男の死体を飛び掛かる男の1人目掛けて投げ飛ばすと男たちの攻撃をすり抜けるように回避すると男たちの背後へ潜り抜ける。

「速すぎる、このままじゃ……」

男の1人が死体を見てたじろぐ。工房の中の仲間と合わせて2人を一方的に殺されたのだ。工房の中には椅子の足に頭を貫かれた状態の男が転がっているのを、彼らは飛び込んだ時に見ている。

「拘束して、そこを叩くぞ。全員拘束術式展開、四方捕縛用意」

動揺している仲間の前で弱音は吐けない。むしろ彼らを勇気づけるのが隊長である男の役割だった。冷静に事態を見極め、敵が自由に動けるままでは一向に事態が好転することはないと遅まきながらに気が付いた男は仲間に指示して再びムラミツを取り囲む。

「隊長、これは本来10人単位でやる捕縛魔法です。4人ではどうなるか……」

「一瞬動きが止められればそれでいい。手練れ同士の戦いではその一瞬が生死を分ける」

4人で数秒も止められるものではない事は隊長である彼が一番良く分かっている。だから、捕縛とほぼ同時に斬りかかるつもりだ。

狼と化したムラミツは、男たちが何かをしようとしていることに敏感に気が付くと警戒心を露わにして遠吠えのような叫びを上げてい

る。

「展開」

バリッ！

電気が発生したような音と共にムラミツを取り囲む4人を繋ぐ光の帯が現れる。丁度4人の男を頂点とする四角形を作り出すと、帯は男たちを離れて内側、ムラミツへと向かって小さくなっていく。完全に拘束するにはムラミツにこの帯が巻きつかなければならぬ。

だが、それを素直に受け入れてくれるものとは最初から思っていない。距離があっても、ムラミツからしてみれば少し身体が重くなるくらいの影響はある。そして何より、回避する方向を絞る事が出来る。

ムラミツは拘束から逃れるために強靱な足を使って大きく飛び上がると拘束から脱出する。

しかし、その頭上に影が現れた時、ムラミツは内心できっと舌打ちをしただろう。

隊長である男がムラミツよりも高く飛び上がり真上から襲い掛かってきたのだ。空中で回避などできない。ムラミツは男の攻撃を防御するために腕を振って男の剣を叩き落とそうとする。

「甘いわああああっ！！」

これくらい見切れなくては隊長の名が廃る。

振り回される腕には目もくれず男はムラミツの胸を狙って剣を突き出す。瞬時にムラミツが剣を打ち払うのが無理だと判断して腕を胸の前に回し、剣を受け止めるが剣は落下の勢いと男の体重を受けて易々とムラミツの毛むくじらの手の平を貫通して手の甲へと抜け、さらにムラミツの胸へと迫る。

「やったっ……なにい!？」

取った、と思つて口元を歪ませた男の顔が驚愕に変わる。

手を貫かれたムラミツはそれを抜こうとも思わず、無事な方の手で男の肩を掴むと思ひ切り振りまわした。空中、もはや地面まで数メートルもない距離でそれをされたのだから、目も当てられない。男は地面に叩き付けられ、ムラミツは男の手から力が抜けたのを見計らつて手に剣が突き刺さつたままの状態で距離を取り、少し離れた所で剣を手から引き抜くと投げ捨てた。

「隊長!」

「大丈夫だ、くそつ、本当に化け物だな」

「そこまでだ!」

不意に、若い声が男とムラミツの耳に飛び込んできた。

見れば工房から母屋の方へと続く細い道に若い男女が立っている。男、いや青年は白い大剣を構え、少女は二振りの刀を手に男たちを睨み付けている。

エリカとジーンが、息を荒げながらもムラミツと男たちの間に割つて入ると、お互いの背中を守る様に剣と刀を構える。ジーンは男た

ちに向けて、エリカはムラミツに向けて己の得物を構えている。

「ただの一般人ではなかったか……」

その様子から、男は仲間の手を借りながら立ち上がると小さく舌打ちをした。

「エリカはムラミツさんを止めてくれ。俺はこいつらをやる」

背中を合わせてお互いの死角を消し、ジーンは小さく呟いた。

ムラミツがすでに自我を失いかけているのは一目見れば分かった。わずかにでも人の意識が残っている事を祈りつつ、エリカはジーンに向かって頷く。

「1人も抜かれないくださいね」

「伊達にデカイ剣を振り回している訳じゃない。そっちは任せる」

そして、2人は全く逆の方向へ共に走り出した。

第44話 久々の出番とか言わない！（後書き）

中身シリアスなのにタイトルふざけてるなんて言わないで！

本当にそろそろ話を進めないとタイトル考えるの苦しいんです！

次話投稿のところに入って投稿するまでの時間の半分くらいをタイトル決めに費やしてますからね！

いや、書いてるときは「龍旅○○」って感じでタイトル考えてないんですよ。かき始めてから話作りますから（笑）え？ ダメ？

まあ、ジーンに出番が少なかったのは事実ですし、もう少しいい待遇をさせてあげないとボイコットされかねませんし……。

某剣道少女マンガじゃありませんが、どうも私は女性は結構大切にちょこちょこ出番をあげてるんですが、男共はヴァルトとか王様を除いて扱い酷い気がしますしね。

ジャックは存在自体がネタなので無問題なのですが、他の人たちは……アレ、もともとこの作品男少ないかも……。

ハッ（嘲笑）！

逆ハーなんて期待するんじゃないやありませんよ！

と、話が逸れました。

そんなわけで男共のカッコいい出番をもう少し増やしてあげないと

なあ、などと考える今日この頃です。

でわでわ、

この作品を読んでくれている読者様方に無類の感謝をお送りして、
今日はこの辺で。

そして男共に幸多からんことを。

ご感想などお待ちしております。

第45話 人狼ムラミツ（前書き）

ジーンが主体となる文章を書くのは、滅茶苦茶久しぶりな気がします。

でもすぐにエリカにバトンタッチするんですけどね。

では、ごきげん。

第45話 人狼ムラミツ

(敵は5人、1人は手負い、だが油断は出来んな)

駆け出したジーンは素早く敵の情報を集める。ムラミツがやったのである。血まみれの死体を見て、何が起こっていたかは大体想像がついた。ムラミツはエリカが止める。その間、ジーンはこの厄介な黒装束5人を足止め、もしくは戦闘不能にしなければならぬ。

殺すつもりではない。気絶させれば十分だと思っている。

だが、相手はきつとこちらを殺すつもりでかかってくるだろう。そうなれば、こちらとしても手加減している余裕はなくなる。それでもジーンは殺さないで済むならそれに越したことはないと考え、何とかこれ以上犠牲が出ないような方法を模索する。

とりあえず、敵がバラバラになってしまおうとさすがに一对五は不味い。幸いと言おうか、ムラミツによって地面に叩き付けられた隊長格の男を肩で支えているため1人はそこまで動けないだろう。そして残りの3人がそれを守る様に立っていることから、彼らが隊長を何が何でも守ろうとしていることが窺えた。

つまり、隊長を狙えば彼らは必死になってジーンを止めにかかり、ムラミツの方へ目を向ける余裕もなくなるだろう、とジーンは考えた。

(部下からの信頼が厚いのだろうか……)

誰だか知らないが、部下からはそれだけ慕われているという事なのだろう。そうでもなければ周りの男たちがそこまで必死になって守る理由が分からない。

その信頼につけ込んで戦う訳だからあまり良い気はしないが、今は少しでも時間を稼がなくてはならない。ジャックが来ればこれくらいの相手ならば無双できるのだろうし、エリカの掩護にも回れる。

今のムラミツはおそらく自分の周りにいる人物が誰なのかも認識できていないだろう。先ほどジーンが叫んだ時も、ムラミツはあからさまな警戒態勢を全く解かなかった。今のムラミツからしてみれば敵が2人増えたようにしか見えていないだろう。

(それが人狼の本能か……)

「うらあっ!!」

考え事を終わらせ、手負いの男を狙って大剣を振る。

案の定、3人の男が前に出て、手負いの男を後方へと移動させていく。素早くジーンが手負い狙いだと察知したのだろう。

だが、それで止まるジーンでもない。先頭の男の寸前で足を踏ん張ると身体を捻ってその脇をすり抜ける。一瞬背後に視線を向けると自分とムラミツの間には背中を見せるエリカしかいないにも関わらずこちらに追いつがるうとする男の姿が映った。

(予想通り……!)

内心でニヤリとしつつ、敵の攻撃を大剣で振り払いながら牽制しつつ手負いの名も知らぬ隊長との距離を詰めていく。

「それ以上、行かせるか！」

どいつもこいつも同じ顔に見える。

顔も隠している為、見えるのは必至の思いで上司を守ろうとする部下の眼差しだけ。剣を素早く振って大剣を受け流すと小回りを利かせてジーンの首を取りに来る。

ジーンは流された剣のそれ相応に長い柄部分を使ってそれを受け止めるが、一歩間違えれば指が飛んでいた。模擬戦ではなく、これが実戦、殺し合いなのだ。

引いてくれたらそれで終わり。戦う必要などない、と言っても聞いてはくれない。その場にいる全ての敵を打ち倒すのが殺し合いなのだ。

男たちの目を見てそれを嫌と言うほどジーンは感じ取った。

（戦う相手が違っただろうが！）

人同士が戦ってどうする、と内心で悪態つきながら、男たちと決して間合いを取らずに肉薄し続ける。こちらも攻撃し続ける事になるが、相手にも他の事に目を向ける余裕をなくすことが出来る。

（俺たちの敵は、龍なんだろう！？）

それは、随分昔に聞いた言葉だ。

国のお偉い人たちが戦争を終わらせ、人同士が手を取り合うために言った事。

さっきまではそれで良いと思っていた。

だが、エリカの言葉を聞いて、本当にそれでいいのか、という考えが頭を過ぎった。確かにヒト同士の争いは少なくなった。それまで戦っていた隣国との交流も増えた。物流が増えて双方の国が豊かになったのも事実だ。

いつ来るとも知れぬ龍の襲来に備え、戦いが起こる事を前提に過ぎていく日々。

そんなものが平和と言えるのか？

ジーンは戦いながら、頭の中は全く戦いの事を考えていなかった。

「ムラミツさん、聞こえて………ませんかっ!!」

話しかけようとしたら、いきなりムラミツはエリカに飛び掛かってきた。鋭く伸びた狼の爪でエリカを引き裂こうとしてくるが、エリカは素早く黒黒と黒羽を抜いて顔の前で十字を作るとムラミツの素手を受け止める。

刀の腹とムラミツの爪が擦れて甲高い音が響き、エリカの足が地面を後ろへと滑る。

いかにエリカが常人離れた力を持っているとはいえ、体格の差はどうしようもない。本来のムラミツとは違い、人狼と化したムラミツの体格は本来の3割増し、身長も高くなり、何よりその身から発するプレッシャーが物凄い。

「なんて様ですか、ムラミツさん……」

力負けしていた足にさらに力を込めてその場で踏みとどまる。だがムラミツは力任せに腕を振るおうとしている。彼が今、エリカをただの敵、もつと悪くすれば餌としか見ていないのは確かだ。その眼光には殺気以外感じられなかった。

エリカは腕の関節部分に黒鱗を発現させて腕が一定以上内側に曲がらないように補強する。それでもムラミツの力は壮絶で黒鱗の端が腕にめり込んで鋭い痛みがエリカの表情を歪ませる。

「生きるのを諦めるなんて、あたしが許さないと言いましたよね？」

身体を引いてムラミツの攻撃を自らの右に受け流す。刀を逆に持ち、

峰打ちでムラミツの首筋にある程度加減をして刀を振るい、寸分の狂いなく首筋に命中させる。

通常の間人なら、氣絶するには十分な威力があった。

だが、今のムラミツは通常の間人ではなかった。

「グルアアアッ!!」

痛みに怒りが倍増したのだろう。

首筋を打った刀を振り払うと反対の腕で至近にいたエリカの胸をその鋭い爪で切り裂こうとする。エリカはそれを飛び退いて避けようとするが、ムラミツの異様に伸びた腕の攻撃範囲から逃れる事は叶わず、胸を引き裂かれる。黒鱗と爪が擦れる音がして一瞬だが火花も散らせ、切られた場所から肌が露出する。コンマ2秒判断が遅れていたら腹を深々と抉られてしまっていたかもしれない。

常時黒鱗を発現させるのは体力的に非常に疲れる。だからエリカが必要と認識した時に発現させるよう心がけていたのだが、今のは前もって発現させていなかったら危なかったかもしれない。無意識のうち切られた腹の部分を撫でながら自分の黒鱗に感謝した。

「本当に自我がないのか疑うほどの冷静さですね、ムラミツさん」

こうやって話しているのがムラミツという「個」に届いているかは分からない。だが、何かのきっかけになればと思って話し続ける。

「できれば、あなたに鍛えてもらったこの刀で、あなたを傷つけない」

ムラミツが飛び掛かってくる。頭を下げて横に薙いできた太い腕を回避すると、その鳩尾を柄頭つかがしらで突く。威力はそれほどないが、肉にめり込む嫌な音がしてムラミツの動きが鈍る。素早くもう片方の刀の背でムラミツを空中から地面に叩き付けると、その上に押し掛かつて首筋に刀を突きつけようとする。

だが、ムラミツは足でエリカを吹き飛ばすと跳ね上がる様に立ち上がってエリカが地面に着地、いや落着する前にエリカ目掛けて走り出した。それを視界の端に捉えて刀を地面に突き刺すとエリカは強引に自らの身体を地上へと引き戻し、着地の隙を作るといふ隙すらも許さず身体を横に滑るように移動させてムラミツの強烈な蹴りを回避する。

そして間髪入れずに蹴りだした足を回してエリカに回し蹴りをお見舞いしてくる。ほぼ溜めもなく出された追撃についてエリカは刀の刃の方で攻撃を受け止めてしまいが、ムラミツはお構いなしに足に力を込めてエリカを蹴り飛ばす。

今度はバランスを立て直す間もなく地面を転がる羽目になり、数回空と地面を視界が往復した後ようやく自分の身体が止まった。

土のついた顔を上げてエリカがムラミツに目を向けると、若干足を気にしている様子のムラミツが視界に映った。

だが、エリカが視線を足に動かしていくと、わずかばかりに血が滲んでいる程度であった。毛むくじやらで傷の全容は分からないが、それほど深いものではないのは確かだ。それどころか、遠見ではあるがすでに傷が塞がっているようにも見える。

信じられない治癒速度だ。打撲程度一瞬で直ってしまうだろう。

強烈な一撃が必要だ。腕を斬り飛ばすくらいの、致命傷になりかねないほどの一撃が。

(そんなもの、出来るはずがない……！)

わずかな間ではあるが、ムラミツの人柄はよく理解できているつもりだ。殺さないよう細心の注意を払うとしても、エリカには「仲間」を斬る事は出来ない。

蹴られた衝撃で視界がぼやける。転がった際に頭を打ったのかもしれない。立ち上がるうにも上手く頭から命令が回ってくれない。物理的な損傷は防いでも、黒鱗すら貫通する衝撃は逃しきれない。固い外側と違って内部はヒトのそれと大差ない。

エリカの様子が変わったという事に気が付いたムラミツはこの機を逃すまいとエリカに向かって襲い掛かってくる。

が、エリカの寸前で白い横やりが入ってムラミツの身体がエリカの正面から真横に吹き飛ばされる。

「すまん、捕縛に時間がかかった」

「グッドタイミングです、ジーンさん」

白い横やりの正体はエリカ自身をも切り裂いた白い大剣だった。そしてそれを持つジーンが肩で息をしながらも笑みを見せてエリカに手を差し出した。エリカはジーンの手を掴んで立ち上がると、一瞬黒装束の男たちの方へと視線を向ける。全員が地面に伸びている中、負傷していたと思われる隊長格の男だけがその様子にうめき声を上

げている。武器は全て破壊されているらしく、抵抗らしい抵抗も出
来ず、ただその場にへたり込んでいる、といった様子だ。

「最近出番がなかったのな。存分に暴れさせてもらった」

「あれ、死んでませんよね？」

どう考えても彼らは悪人なので同情はしないが、やりすぎ、と言わ
れればその部類に入る事間違いないだろう。何をやったか知らない
が、相当その意味で「暴れた」ようだ。意識がないにも関わらず一
部の男は股間を抑えて不気味に痙攣している。

「ま、まあ、大丈夫だろう。それよりも今はムラミツさんだ。あれ
を止めないと」

「……ですね」

心の中で黒装束の男たちのこれからの人生という意味での冥福を祈
り、顔をムラミツに戻す。

相当強く吹き飛ばされたようで、呻き声を上げながらもがいている。

「く、くそつ、若造に4人が簡単にやられるとは……」

聞いてないのだから黙ってる、と心の中で思いながらも、完全に無
視してムラミツを見つめる。その目は未だに狂気を湛えている。

「これを止めるとなると、俺たちで大丈夫なの、か？」

「殺すとなれば話は別ですけど、それは当然ながらできませんし、
話に応じるような意識は残ってなさそうです。後は……ヒナさんで
すかね」

「家族の声なら届くと？」

エリカは自身なさげに頷く。

「可能性はある、と信じたいです。それに彼女も人狼、会話出来るかもしれない」

そう言うと、ジーンはムラミツに一度視線を戻してから、意を決したように大きく息を吸い込んだ。

「なら、ジャックがさっさと叩き起こされて、フィアと共にやって来て、途中でヒナと合流して、ここに到着するまでの時間を稼げばいいんだな」

「目的も決めずに戦うのは危険です。とにかく、ヒナさんたちの到着まで何とかムラミツさんをここから動かさないようにしましょう」

なんて事をジーンと話し合っているのだが、本当に意識がないのか、と疑いたくなるほどムラミツは静かにエリカたちを見つめていた。逃げる様子も、襲い掛かってくる様子もなく、まるでこちらの話が終わるのを待っているかのようだ。

「あたしは右から。ジーンさんは」

「正面から突っ込んでムラミツさんの目を引き付ける」

エリカの言葉を先読みしてニヤリと笑うジーン。エリカは少し意外そうな顔をするが、すぐに真顔に戻って小さく頷く。

そしてほぼ同時にムラミツへと向けて駆け出す。ジーンは真っ直ぐムラミツへ、エリカは弧を描く様に緩やかなカーブをしてムラミツの横に回り込もうとする。

こちらが動き出したことでそれまで不気味な沈黙をしていたムラミツも動き出した。地面を蹴ってまずは正面から突っ込むジーンへと飛び掛かり、両手の爪による斬撃を繰り出す。ジーンは大剣を盾の代わりにして防ぐと、自分を軸に大剣を一回転させ、その勢いでムラミツを思い切り左から横殴りにする。

瞬時に腕で胴への直撃だけは防ぐがムラミツはそのままジーンの右つまりエリカがいる方向へと飛ばされる。飛ばされると言っても何メートルも宙にあるわけではなく、すぐに地面に鋭い爪を喰い込ませて停止しようとする。

それでもエリカが攻撃するには十分すぎる隙が生まれた。

背後から思い切りその背中に斬りかかると、ムラミツは背中に目が付いているかのような動きでそれを回避するとエリカの足を掴んで放り投げる。

「うそおっ!？」

「遊んでんのか、戦ってんのか分からなくなるな……ッ!!」

宙を舞うエリカに一瞬視線を持っていかれたジーンをムラミツが強襲する。強烈な掌底をジーンの腹に打ちこむと巨大な鉄槌に直撃されたかのような衝撃をジーンに与えてジーンを吹き飛ばす。

太い木に直撃する寸前で地面に落ち、転がって木に当たったジーンは苦悶の表情を浮かべながらゆっくりと立ち上がる。起き上がった時によやく宙を舞っていたエリカが地面に戻ってきて、ジーンの傍に着地した。

「時間稼ぎなんて出来そうにないんだが……」

苦笑いしながらジーンが大剣を構えなおす。

「いえ、ムラミツさん自身が時間を稼いでいます」

ジーンの言葉にそう返したエリカに、ジーンは首を傾げる。

「どういう意味だ？」

「先ほどの技、本来であれば刀で刺突してくる技、つまり刀姫一流の技なんです。完全に自我を喪失しているのなら、人であった頃の技術など使えるはずはないと思うんです。ならば、ムラミツさんの自我はまだ完全には喪失していないと考えるのが妥当です」

超人的な人狼の身体能力、というだけでは説明がつかない動きをかなりしている。それも、ここ1週間で随分と見慣れた動き方を今のムラミツはしている。

「やろうと思えば、すぐにでもムラミツさんはここを離脱することも出来るはずです。それをしないのは、あたしたち同様に時間を稼いでいるということですよ。あえて肉体に対してあたしたちを敵と判断させ、この場から離脱しないように仕向けているんです」

「そんな器用な真似が出来るものなのか？」

「実際は違つかもしれませんが、ムラミツさんの意志があるという事は確かです。あたしたちがやるべきことは、敵がいなくなってしまうのを防ぐこと、つまりあたしとジーンさんがやられることがなければいいんです。そうすれば、ヒナさんたちが来るまで時

間を稼げま……来ますよ！」

今度は話が終わるのを待つてはくれなかった。地面すれすれを、顎が擦れるような位置まで身体を傾け、エリカたちの足元へ滑り込んでくる。飛び上がったそれを回避すると、背後にあった木にムラミツの腕がぶつかり根元から木を真っ二つにした。

（威力ヤバすぎるだろう!?）

倒れてくる木を避けながらジーンはムラミツの一発の重さに冷や汗を流した。

当のムラミツはと言うと、なぎ倒した木を幹に手をかけ、指がめり込むほど力を入れると10メートルはくだらない倒木を片手で持ち上げるとジーンに向かって投げつけた。距離はそれほど離れていない。縦に回避しても、横に回避しても当たってしまう位置だ。

「ちいっ」

大きく大剣を振りかぶり、全力で飛んでくる倒木目掛けて振り下ろす。

「せいっ!」

ど真ん中から倒木がバターのようにならされると、直撃コースを逸れて2つに分かれた倒木がジーンの左右へと落ちていく。そうしてできた真正面の空間に、ムラミツが飛び出してきた。ジーンは大剣を振り下ろした直後でまだ反撃、防御がすぐに行える状態にない。それをムラミツは読んでいたのだ。

(だが……)

「脇がお留守ですよ、ムラミツさん！」

先ほどとは役割が逆になった。

横合いからエリカが飛び出すと今まさにジーンにその爪を突き立てようとしていたムラミツに飛ぶ斬撃をお見舞いする。済んでの所で身体を逸らしてそれを回避するとムラミツは素早くエリカとジーン双方から距離を取る。

「飛ばせるようになったのか」

ジーンがホツとしたような表情をすると、エリカは小さく頷いた。

「結局、何事も実践、いや実戦あるのみですね。こんな形の実戦は嫌でしたが」

刀を振り抜いた状態のエリカは嬉しさ半分悲しさ半分という口調、表情でジーンにそう言った。

「ヒナさんの『屠龍』には遠く及びませんが、牽制くらいにはなります」

本来あれは居合、つまり抜くと同時に斬り、それと同時に鞘に納めるといふ人間離れた技だ。それにより第二撃、第三撃を連続して放つことが出来る、とヒナには教わった。だが、まだエリカは振り抜いた状態で止まってしまう。わずか1週間、正確には4日ほどでここまでやっているのだから、さすがにこれ以上を望むのは厳しい。

ジーンの横に立ってエリカは刀を右手に持つ黒羽をムラミンツに向ける。

「何が何でも、止めますよ」

「父、様……？」

掠れた声が、その場に響いた。

第45話 人狼ムラミツ（後書き）

よくある終わり方でした。

まあ、この後の展開は想像しやすいというか、なんとというか……。

実は、ようやく予定していた龍旅と言う物語の半ばを過ぎました。

ええ、この辺りが丁度ターニングポイント、折り返し地点なんですよ。とはいっても、この後は超展開が予想されるので話数的にはそこまで伸ばさない予定なのですがね。

しかし、後先考えずに即興で物語を書いているのは皆さんご存知の通り……。何度か見直してから投稿するように心がけているんですが、やっぱり人間、万能じゃないですから。

そういう訳ですので、間違いがありましたら今後とも一報入れてもらえるとありがたいです。

誤字報告も好きですが、感想はもっと好きです。

ではでは、また次回。

第46話 自分の信じるモノ（前書き）

重い。

いろいろと、重い。

では、本編どうぞ。

第46話 自分の信じるモノ

ヒナは自分が見ている光景が信じられなかった。

自分の父親が、仲間であるはずのエリカやジーンに向かって襲いかかってきたからだ。てつきり、共闘して黒装束の男たちを撃退しているものと思っただけに、ヒナの脳は理解に苦しんでいる。

「こいつぁ、どういう状況だ？」

後から駆け付けたジャックもまた、信じられないという表情で辺りを見渡している。隣のフィアは心配そうにエリカたちを見ている。

「ムラミツさんが、自我を失い暴走している……？」

「ヒナさん！ ムラミツさんに呼びかけてください！ まだ自我が残ってるはずです、ムラミツさんを止められるのはヒナさんしかないんです！！」

茫然としているヒナにエリカが呼びかける。

「父様、だと……？ ではあの娘は……」

黒装束の隊長がムラミツとヒナを見比べている。ジャックはその男に走り寄ると、その胸倉を掴んで自分の目の高さまで持ち上げる。隊長格の男も決して小柄ではないのだが、ジャックと比べるとかなりの差がある。結果男は地面を離れて息苦しそうにもがく羽目にな

る。

「てめえが下手人か。この代償、高くつくから覚悟しておけよ？」

ジャックの目は怒りで満ち溢れていた。

1週間しか共にしていないが、共に酒を飲み交わし、ジャックとムラミツは硬い友情を作り出していた。

ジャックの本能でもある、強い存在と戦いたいという思いも確かにムラミツに対してあった。

獣人がどれほど強いのか、この目で確かめたいと思っていたのも事実だ。

だが、これは違う。

「覚悟しておけよ……」

怒りを言葉に滲ませながら、ジャックはこれ以上にならないほどの憎しみを込めて男に言い放つ。そして男を手放すと男は尻から地面に落ちて横たわった。

「ヒナさん、お願いします！」

「っ……、目を、目を覚ましてください、父様……！」

ヒナは走って走って喉を枯らしていたが、そんなことも構いなしに叫んだ。ヒナの到着以来、ヒナに視線を合わせて全く動いていなかったムラミツが不意に肩の力を抜いていく。

もがき苦しむわけでもない。人の姿に戻ったわけでもなかった。

だが、ムラミツという「個」があの人狼の中に今いる事だけは分かった。エリカたちに向けられていた明確な殺意が薄れ、ムラミツの目が正気を取り戻したように見える。

「一言で覚醒、家族の力ね」

ファイアが安堵のため息をつく。

「グルウ……」

どこか、申し訳なさそうな呻き声を漏らすムラミツ。どうも、人に戻れないのかそのままの状態で見渡している。

「なんだ、俺の出番なかったじゃねえか」

黒装束の男の1人をわざと踏みながら少し残念そうな表情のジャックが歩み寄ってくる。踏まれた男が爬虫類みたいな呻き声を上げるが全く意に介していないようだ。

「すまん。だがお前が本気になればこの屋敷が消し飛んでしまうのも事実だろう?」

「そう、俺は超絶神兵、俺が通った後には何も残らっでえっ!？」

ファイアの強烈な一撃がジャックの脳天を襲ってジャックが見てるこっちが痛くなりそうなほど思い切り舌を噛んだ。口元を抑えてジャックはその場をグルグルと走り回りだす。

「父様、無事ですか？」

ヒナが、おずおずとムラミツに歩み寄る。この姿のムラミツと会うのはあまり多くないのか、ヒナも少し不安そうな顔をしている。ムラミツはそんなヒナに気が付いてその大きな足でヒナに近寄るとガツシリとヒナを抱きしめた。

言葉はない。

今のムラミツは人の声帯を持ち合わせていないため、荒い息が牙の隙間から漏れるだけだ。それでもヒナは自分の父親の温もりを確か感じていた。

ヒナは顔を上げるとムラミツの今は獣のそれになっている目をまっすぐに見据えると、目頭にたまった涙を擦ってようやく笑みを浮かべた。

（あの娘が人狼ムラミツの娘？）

遠巻きにその様子を見ていた黒装束の男は、どうにかこの場を打開できないかとなし頭を絞っていた。

(くっ、仲間を殺したあの人狼を取り逃すくらいなら……！)

男は右腕をムラミツの娘に向ける。

丁度、男に対して背中を向けているその細い背中に腕を向けると、何かを絞るような動作をして袖の中から何かが飛び出した。切っ先が鋭いその柄を持つと、男はあらん限りの力を込めて柄にある留め金を外した。

「死ねえええええええっ！！！」

男のまるで地獄を見せるかのような叫び声に、全員がそちらを見た。

男が背中を向けるヒナに向けて腕に持つ何かを発射するのと同様同時だ。火薬が何かで撃ち出されたそれは一直線にヒナへと向かう。

ジャックはムラミツの後ろ、ジーンは大剣を収めている。エリカは

刀を抜いたままだが発射されたのを見ているという時点でこれから起こるであろう悲劇を止めるだけの余裕を持ち合わせていない。

誰も間に合わない。

ヒナが後ろを振り返って自分へむけて飛ぶ30センチはあるうかという剣を視認して、それを避けようとするが、とても間に合わない。ヒナは走り続けた事でかなり体力を消耗しており、とてもじゃないがこの距離で剣を避けるだけの体力は残されていなかった。

「ヒナさん！！」

エリカが間に合わないと脳が理解しつつも、身体を動かしてヒナの前に入るうとする。刀は抜いている。何とかして飛来する剣を叩き落とそうとする。いざとなればエリカ自身が盾になっても守るつもりだが、それも間に合えばの話。必死に黒羽を持つ右手を伸ばすが、あと一歩が届かない。

そしてヒナの背中に剣が吸い込まれて

ゾブッ

肉を裂く音が響く。

剣が背中に突き刺さり、長い剣は肉体を貫通して胸元からその切っ先を覗かせている。その切っ先からは大量の血が滴っている。

「……え」

毛むくじやらの腕がヒナの頭の後ろに伸ばされている。そしてヒナの顔にその滴る血が落ちてくる。

「父、様？」

ヒナを貫くはずだった剣はそっくりそのままムラミツを貫いていた。最後の瞬間、ヒナと身体の位置を反転させたムラミツは身を挺してヒナに向けられた凶刃を阻止したのだ。

「ムラミツさん！」

一番最初に我に返ったのはエリカだった。膝をついて倒れ込もうとするムラミツを受け止めると、ゆっくりと自分の膝に寝かせる。地面に寝かせようものならムラミツの身体を貫いている剣がさらに食い込んでしまう。地面と少し隙間を空けてこれ以上の事態悪化を防ぐ。

「ファイアさん、回復魔法！」

「わ、分かった！」

血がどンドンムラミツの身体から抜けていく。エリカの服を血で染め、口元からは弱弱しい息が漏れる。

ファイアが急いでムラミツに手をかざして回復魔法をかけ始めると、それにタイミングを合わせてエリカがムラミツの身体から剣を引き抜く。

と、その手から煙が上がってエリカはすぐに剣を地面へ投げ捨てた。

「猛毒が塗られてる……」

エリカは自分の手の平を見て舌打ちをした。表面だけの接触ではこの程度で済んでいるが、体内に入れば致死量になってしまう。

「てんめえ！　そこまでして殺しがしてえのか！？」

男に飛びかかるジャック。ジーンもジャックを取り押さえようとはしているが、その目に涙が浮かんでいる。

「何とか言えや！　このっ！？」

思い切りその頬を殴り飛ばそうとしてジャックの拳が止まる。

エリカは一瞬ジャックたちの方に目を向けると、男は全く抵抗することもなく、手足をダランとさせてジャックに持ち上げられている。

それが意味するのはただ1つ、自害。生きて捕らわれるわけにはいかないと考えた彼らは皆自ら命を絶っていた。気絶していたはずの男たちも皆、口から血を吐きながら死んでいる。

「ファイアさん、解毒は!?!」

「毒の種類が分からないとどうにもならないわよ! 血をそっくり入れ替えれば話は別でしょうけど輸血用の血液なんて持ってきてないし……」

傷は塞ぐことは出来ても、身体に回った毒までは抜けない。

「父様、しっかりしてよ、父様!」

ムラミツの身体にしがみ付き、泣きわめくヒナだが、それを止める者はいなかった。誰もと同じ思いだった。

ふと、ムラミツの身体に異変が起きた。

狼の毛で覆われていた身体が少しずつ縮んでいき、人の頃と同じくらい大きさまで小さくなると、獣のそれと全く同じだった顔も徐々に人間らしさを取り戻していく。そしてすぐにエリカたちも見慣れたムラミツの姿に戻った。だが、その胸には痛々しい傷痕が残っている。塞がってはいるものの、毒が回っている証拠なのか、傷口の周囲に紫色の痣のようなものが広がっている。それを見るだけでヒナの涙腺は再び決壊した。

「ヒ、ナ……」

「父様!?!」

弱弱しい、ムラミツの声にヒナが顔を上げるとムラミツの顔に近寄る。ムラミツは目を開けているが、その目はヒナを捉えていない。

「すまん……、約束は、守れそうに、ない」

途切れ途切れに言いながら、震える手をヒナの声へと伸ばす。ヒナがすぐにその手を掴んで祈る様にその手を自分の顔の前に持つていく。

「嫌っ！ 一緒にいて！ 1人にしないで！！」

「お前は、もう1人じゃ、ない。こんなにも、仲間が、いる」

もはやムラミツには何も見えていないのだろう。何を見つめるでもなくムラミツは虚空を見上げる。

「エリカ様、そこにいらっしやいますか……？」

「いますよ、ここに」

エリカは自分が呼ばれてすぐにムラミツに返事をした。それを聞いて安心したのか、小さくため息をつく。ムラミツは血を流す口を必死に動かす。

「こんな状態をお願いするのもなんですが、娘を、ヒナを頼み、ます。騎士団の皆さんと共に、ヒナを、守ってください……」

懇願、最後はもはや血によって聞き取れなかったが、それだけは聞こえた。エリカは何度も頷いてヒナも握るムラミツの手を握る。

「約束します。ヒナさんは、あたしたちが守ります」

顔を上げ、ジーンたちを見る。

「当然だ。約束する、ムラミツさん」

「おめえさんの意志、必ず……」
「私も約束するわ」

そう言うと、ムラミツは安心した表情になり、そしてゆっくりと息を吐く。

「そう、ですか。……これで、安心して、逝けると、いつも、の……」

握っていた手から力が抜けていく。それと同時にムラミツの身体から生気が抜けていくのが分かる。

「父様……？ 父様？ 父様ああああああああああっ
！……！！……！！」

ヒナの悲鳴が、透き通る空に響き渡った。

ムラミツの遺体は、その日の夜、全員の立会いの下で火葬された。墓はヒナの母親の墓の隣、大きな木の根元に作られ、全員でムラミツの冥福を祈った。

遺体を掘り返されてその一族が獣人である事が露見するのを防ぐための慣例らしいが、そんなことをしないで済む世の中になって欲しいものだ、思わずにはいられない。

ムラミツを殺した黒装束の男たちの遺体はこことはかなり離れた場所に土葬された。昼間の間にジャックとジーンが遺体を大八車に乗せて運んでいったのだ。黒い覆面を取って見れば、まだ若い青年のような男もいた。直接手を下したわけではないが、死に追いやった事には違いはない。

罪を憎んで人を憎まず、なんて偉そうな事は言えないが、それでも死ねば仏、死んだ者を蔑にする行為はすべきではない。しっかりと7つ分の簡素な墓を作って埋葬した。

「ヒナさん……」

「……エリカ、ですか」

夜、母屋にいつまで経っても戻ってこないヒナを心配して工房へ来てみると、いつもムラミツが座っていた椅子にヒナがボンヤリとした表情で座っていた。

その手には刀を叩いて鍛えるための金属製の槌が握られている。窯には火が入っておらず、夜の虫が鳴く静かな音しか聞こえないほど静寂に支配されている。

「不思議です。今も父様が私を呼びに来たのかと思ってしまいました。今日は父様が食事の当番、母屋に戻れば料理を作って待っていてくれるような気すらします……」

明かりも点けていない暗い工房では、ヒナの表情を窺い知ることは出来ない。エリカは工房の壊れた扉の縁に身体を預け、黙ってヒナの話を聞くことにする。

「ここは、父様との思い出に溢れています。鍛冶だけは厳しかった父様でしたけど、だからこそ心にも強く残っています……。でも、もう、会えないんですよね」

押し殺したような鳴き声が聞こえてくる。

いつも冷静沈着、穏やかな性格のヒナが、今はただの少女と同じように泣いている。エリカが以前、バーバラに身体を預けて泣いた時のように。

「二度と、父様の料理も食べられない。二度と、鍛冶を教えてもらえない。二度と、一緒に笑い合う事も出来ない……」

独白にも思える。

「いつも私の進むべき道を示してくれた。私は、道標を失った……」

頭を抱え込んでいるのが扉から入ってくる月明かりだけでも分かる。

エリカはそこでようやく工房の中へと歩を進め、ヒナの隣に椅子を持ってきて座った。だが、慰めはしない。これはヒナが乗り越えるべき壁、たとえ何人であろうとその苦しみを分かち合う事も助ける事もできない。

唯一出来るのは、ただ傍で見守ってやることだけ。

上っ面だけの同情など、本人にそれ以上の負荷をかけるものでしかない。

だが、助ける事は出来る。苦しみは分かち合えなくとも、隣を歩くことは出来る。

「私は、これからどうすればいいのですか……」

「……道がなくなったのなら、新しく道を作ればいいんですよ」

「新しく……?」

そこでようやくヒナはエリカの方を見た。相当泣いたのだろう、昨日と比較してもかなり目が赤い。憔悴しきったとはまさにこの事を言うのだろう。

エリカは赤く腫らした目を月明かりの中でも真っ直ぐと見つめると、小さく頷く。

「道は常に1本とは限らない。むしろ1つに限られる方が珍しいんじゃないですか？ ヒナさんはムラミツさんという確たる道があった、けど今はない。でもそれで道が閉ざされたわけじゃないと思いますよ。今度はヒナさんがムラミツさんの道を受け継ぐ番です。自分で考え、自分が信じる道を往って下さい」

「自分の信じる、道を……」

それだけ言うとエリカは立ち上がって工房から出ていこうとする。工房の扉の所で一度足を止めると、振り返らずにエリカは一言言い

放った。

「昨日はああ言いましたが、ここに残ってもらっても結構です。ヒナさんが決めてください。明日出発前にムラミツさんのお墓の前で、答えを教えてください」

エリカはそう言うと、ヒナを残して工房を後にした。

「様子はどうだった？」

母屋に戻ると、全員が心配そうな顔でエリカを迎えた。あんなことがあったその夜だ、簡単に眠れるものでもなかった。ジャックに関して言えばヤケ酒に近い勢いで残されていた酒を飲み漁っていたように顔が少し赤い。

「漬れてなければ良いんですけど……。明日、ムラミツさんのお墓の前で答えを聞くとっておきました。あたしに出来るのはそれく

「らいですし……」

(偉そうなことを言うのは気が引けましたが……)

アレックスもエリカの顔を窺うように見上げてきている。アレックスはあの時現場にはいなかったが、そのことを悔やんでいるのだろう。彼は狼、もしかしたらムラミツと何らかの交渉が出来たかもしれないと考えているのだ。

「それくらいよね、私たちに出来る事は。それはそうと、あれ、まだ持つてる？」

「ええ……」

エリカは胸元から30センチほどの剣を取り出した。黒装束の男が放ち、ムラミツの胸を抉った剣だ。柄はなく、飛び出し用の専用武器であることが窺える。あの後エリカは剣を拾い上げ、血を拭い去って黒装束の男たちの墓前にでも突き立てようかと思っていたのだが、血を流してみてもある事に気が付いたのだ。

「やっぱり、ブラゴシユワイク王家の家紋、よねえ」

ナイフを机に置くと、ファイアがそれをしげしげと見つめながらそう言った。

「彼らは王家直属の機関という事か。戻ったら公式に抗議できるか？」

「団長に頼んでみる。あの人なら陛下に掛け合ってくれと思う」

2本の水平な逆十字の間に鏃のような物が描かれた紋章、エリカはファイアに言われて初めて知ったのだが、この紋章はブラゴシユワイ

ク王家のものなのだそうだ。それを知ってエリカはすぐにもブラゴシユワイクに乗り込みたい衝動に駆られたのは言うまでもない。

だが、もちろんだがジーンたちに止められた。

ジャックが「そんなことしなくとも大会で貴族とか王族とか来るぜ？」とエリカの耳に囁いたので、慌ててフィアとジーンがジャックをつまみ出したが、エリカも黒い笑みを浮かべていたので一緒に放り出された。

(さすがにそれをやると他の人たちに迷惑がかかりますからね)

さすがに恩をあだで返すような事は出来ない。だが、何かしら物申したいのは事実だ。

「ともかく、帰りは急ぐわよ。ヒナの答えがどっちであろうと、説得している時間はないわ」

エリカも覚悟を決め、フィアの言葉に小さく頷いた。

第46話 自分の信じるモノ（後書き）

「感想など、お待ちしております。」

第47話 迫る『大会』と影（前書き）

むう、最近前書きで書く事が見つからないハモニカです。

いや、書かなきゃ良いじゃん、と言われればそれまでなんですがね

……w

シリアス抜けてさつさと普段の調子に戻りたい今日この頃、ふざけた番外編を執筆中なんですな。

機会があればきつと表に出るでしょう……

ではでは、本編じつぞ

第47話 迫る『大会』と影

「おめえさんとこの酒ですまんが、これで勘弁してくれや」

ジャックが昨日の夜作ったムラミツの墓の上に置かれた石に一升瓶の酒を流し落としていく。

結局、昨夜は横にはなったものの一睡もできなかった。まだ朝靄の残る時間からエリカたちはムラミツの墓の前に来ていた。その分ヒナが早く来るわけでもなく、ただぼんやりと、時間が過ぎるのを見ているだけだ。

ジーンは近くの木に寄りかかってぼんやりと朝靄の空を見上げているし、フィアは切り株に座っている。

エリカはアレックスを膝に乗せてジャックが墓に酒をかけているのを眺めていた。隣にある墓がヒナの母親のものだと知ったのは昨夜ここにヒナが墓を作ろうと言った時だ。

< 来ると思うか……？ >

アレックスが静かに尋ねる。

「……一緒に来てくれると、願いたいです。こちらの意見を押し付ける気はありませんし、どうしてもと言われれば大人しく引き下がるつもりですが」

墓の横に突き刺さっている木刀に視線を移す。おそらく、エリカと特訓していた時に使っていた物だろう。とても使い込まれており、傷だらけの上、少し血が付いている。さすがに木刀の刀身についていたら問題なのだが、持ち手に滲んでいるように感じているところを見るに、マメが潰れた時に付着してしまったのだろう。

どれほど長い間、ヒナによって使われていたのかを物語っている。そしてそれすなわち父親との思い出でもあるだろう。

「そうだったら、致し方ないだろうな……、と、来たようだ」

ジーンがエリカたちの背後に現れた人影に気が付いて木から離れる。ジーンの言葉でエリカたちは後ろに振り返りつつ近づいてくる人影に目を向ける。

やって来たのは当然のことだが、ヒナだった。

これと言った表情を見せず、真剣を右手に、左手には脇差を一振り持って歩いてくる。

ヒナは墓の前にエリカたちを視認すると、苦笑しながら立ち止まり、小さく会釈した。

「この時間に来ていらしたとは、ちょっと予想外です」

エリカたちの前を通過してムラミツの墓の前に立つ。そして右手に持つ刀を鞘から抜いてムラミツの墓の前に突き刺すと、その横でうずくまるとぼんやりと墓を見つめる。

「寝ていらっしやるものとはかり思っていたんですが」

「仲間を失ってその夜をぐっすり寝られるほど俺たちは薄情じゃないさ。夢枕に立ってもらえなかったがな」

ジーンがそう言うと、ヒナが嬉しそうな笑みを零し、ジーンに視線を向ける。

「そう言ってもらえると、父様も報われます。一生のほとんどを孤独に過ごしましたが、最後の最後に、仲間を得る事が出来たのですから」

「87歳、大往生だったな。もつと共に酒を飲みたかった……」

一升瓶の四分の一ほど残っていた酒をクイツと一気飲みすると、少し寂しそうな表情をする。

「そのお酒も、父様が作った物ですね？ 町の酒とは一味違うんじゃないですか？」

「一味どころじゃない、今まで飲んだどんな酒、ビール、ワインよりも美味かったぞ」

少し顔を赤くしているところを見ると、飲んだのはこれだけじゃないさそうだ。

そういえば、ここに来る前に部屋に半ダースほど瓶が転がっているのを見た気がする、とエリカは一見無頓着そうなジャックも実はそのガタイに似合わず繊細だったという事を再認識させられた。

（そんな事をフィアさんが言っていたような気がしないでもないです
ね……）

「あなた方には感謝してもきれないほどの事を言っていたいただきました。今まで私たちが感じていた負い目も、何もかも、皆さんに吹き飛ばしてもらいました」

誰に言うでもなくヒナは言葉を紡ぐ。俯いたまま、脇差を握るその手が小さく震えているのが背後のエリカにも分かる。

「この1週間は、多分今までの一生分以上に充実していましたし、これからもそうでありたいと願った事も事実です」

エリカたちに出会い、それまでの人生とは生活が一変した。それまでほとんど言葉を聞く機会すらなかった外部の人間と触れ合い、語り合い、人狼として閉ざされていたはずの心を開くことが出来た。

ヒナにとって、もはやエリカたちはただの仲間以上の存在であった。

「きつと、父様も同じことを願ったでしょう。でも」

そこでヒナは言葉を切る。

「ヒナは共には行けません」

その言葉に、エリカたちの表情が曇る。

それは紛れもない、拒絶。

エリカは一瞬瞑目するが、次の瞬間耳に妙な音が響いてきた。

「ちよ、ヒナさん!?!」

ファイアの驚いた声がその後耳に飛び込んできてエリカが目を開けると、艶のある、美しく細い黒髪がエリカの視界を横切っていった。

脇差を手にし、髪の毛を手で押さえたヒナが自分の長かった髪をバツサリと切り落としたのだ。あまりに突然だったので、その場にいる全員が啞然とその様子を見つめる。首筋のあたりでエリカと同じ黒髪を切り落としたヒナは切った髪の毛でまだ手に握られているその大多数を持ってきていた小さな紐で結ぶとそつと2つの墓の間に置いた。

「何を……」

目的が分からず、茫然とするその場の全員を代表してエリカがそう言つと、ヒナは振り返ってエリカたちの顔を見渡した。

「ヒナは行けません。父様と、母様の思い出に溢れるこの屋敷を出て行くことはできません。ですが、私、ヒナ・ワカオミという人間は、あなた方と共に行くことを望んでいます」

脇差を鞘に納めると、ヒナはどこか吹っ切れたような表情をしてみせた。

「あなた方と共に行ってもよろしいですか？」

その言葉にエリカたち全員が満面の笑みになる。

「それは、いまさらと言つものですよ、ヒナさん」

エリカがそう言つと、ヒナが嬉しそうに頷くと、頬を一筋の涙が流れる。

ヒナにとって、今日この時、何かが終わり、何かが始まった。

今まで大切にしてきたものと決別し、新たな一歩を踏み出すことを決めたのだ。

だが、ヒナは決して不安を抱いてはいなかった。

ヒナという一人の女性とその父親であるムラミツを結んでいた物は切れてしまったが、ムラミツはヒナに多くの繋がりを遺した。

エリカであり、ジーンであり、フィアであり、ジャックであり、もちろんアレックスでもある。そしてそれは今後ヒナに更なる繋がりをもたらすだろうことも。

だから、ヒナは恐れない。全てを受け入れて、先へと進むことを選んだ。

ヒナはここで一度死んだのだ。そして新たな生を受けてここに在る。人狼の娘、ヒナではなく、一人の人間として、ここに在る。

「これから、よろしくお願いいたします」

ヒナは、腰を折って大きく頭を下げた。そして肩を小刻みに震わせ始めた。

それは、両親との別れを惜しむ涙でもあり、これから訪れるであろう新たな人生への歡喜の涙でもあった。

そのせいか、涙は止め処なく流れていくのであった。

「と、いう訳です」

「何が、『という訳』なのか教えてもらえんか？ それと、人事は騎士団員個人が勝手に決めてよいものではないのだが？」

ヴァルトがため息交じりにそう言うが、ジーンは全く気にするそぶりも見せずにヴァルトの執務机の上にどこかで見た事のある紙を静かに置く。

エリカの時も使った、入団に必要な志願書だ。

だが、今回は全て真実が書かれている。エリカの時と違い、出身を偽る必要もなかったからだ。

エリカの志願書は年齢など全てジーンにとって不可抗力ではあるが偽りになってしまっているのだが、その事実をジーンは知らない。

「問題ないでしょう？ バーバラの旧知の男の娘、彼女自身が騎士団への保護を求めている事、剣、彼女は刀だがその実力もお墨付き、こちらに不利益はないはずだが」

「そういう問題ではない。そもそも、何故当の本人がここにいない」
ヴァルトが眉間に皺を寄せると、ジーンが何とも言えない苦い顔をする。明らかに何か不都合があったのだろう。

「で、彼女はどこに？」

「ええとですね、ヒナは今、食堂で入団祝いをされているのです」

「……はあ〜」

ため息をついたヴァルトに罪はないだろう。入団を決めてもいないのに勝手に入団祝いなどされてしまったては後から「やっぱ無し」は出来ない。

「……故意にか？」

呆れた目でそう言うと、ジーンは慌てて弁明に走った。

「違いますって。この宿舎に入った時に運悪くダニーたちに見つかってしまい、事情を聞かれてそれに応えたらどうという訳かあいつら『それなら今から祝賀会だ！』と言ってヒナを連れていってしまった次第です。さすがにそれを終わらせてからここに来るのもなんだと思っここにごうして来たのですが……」

「あんの馬鹿どもは……」

こればかりはジーンを責める事は出来ない。彼らの女性関係の話題に対する反応ははっきり言って異常だ。言い方が悪いかもしれないが、女に飢えていると言っても良いほどだ。

（そのくせ、ダニーに関しては彼女が出来たなんぞ一度も聞いたことがないな、そういえば）

ヴァルトは普段から団内の様子には気を回している。暇があれば食堂で騎士と言葉を交わすことも多いし、修練場に顔を出す時は手ごるな騎士を捕まえて指導している。だからそういう浮ついた話があれば確実にヴァルトの耳にも入る。

ただでさえ、城内という所は出会いに乏しい。同じ部隊内、騎士団内での結婚というのも別段珍しいものではない。確かシルヴィアも似たような状態だったはずだ。

（確かお相手はゲイリーだったか。シルヴィアも苦勞するな……）

「はあ、分かった。このヒナとやらに関しては処理しておいてやる。今度ここに来るよう言っておいてくれ」

「分かりました」

引き出しから判子を取り出し、志願書に押すと「承認」の文字が押された。そしてその下にヴァルトは自分の名前を書き、これが正式に受理されたことをジーンに向けて見せた。

「それで、いろいろ問題があったそうだな」

「それはあたしからお話させてもらいます」

それまで完全に沈黙していたエリカがそこでようやく口を開いた。というより、何時からここにいたのか分からないくらい心配が無かった。ジーン隣の隣に立っているのだが、ジーンはエリカの存在に今初めて気が付いたようで驚きの表情を隠しきれていない。ヴァルトは正面から向き合っていたので最初から気が付いていたのだが、具体的にはジーンが入室してその扉が閉まる前に音もなく滑り込んできたのだ。

ヴァルトもジーンがてつきり知っているものだと思っていたので何も言わなかったが、本当に知らなかったようだ。

エリカは驚いているジーンに小声で謝った後、一步踏み出して懐から一振りの剣を取り出した。

そしてそれを執務机に置くと、元の位置に出戻る。

ヴァルトは置かれた剣を慎重に手に取ると、その刃に拭っても拭いきれぬ血のりがまだ残っている事に気が付き、鋭い目でエリカとジーンを見る。

「これは……？」

「ヒナさんの父親、ムラミツさんを死に追いやった剣です。刃の付け根を」

エリカに言われて刃の付け根へと視線を移していくと、そこにある紋章を見てヴァルトは目を見開いた。

「まさかっ……」

「ブラゴシユワイク王家の紋章で間違いない。かの国は領土侵犯という外交問題に発展しかねない事をしてまでも、ムラミツさんを殺しにきた。目撃者として俺たちも殺されそうになったし、ムラミツさんはヒナさんを庇って死んでしまった」

「獣人狩りか……。まだやっておったのか、あの愚か共は」

「ヴァルトさん、ヒナさんが人狼であるという事は、既に団内には知れ渡っています。先ほどヒナさんの口から皆さんに伝えられました。ですが、臆することも、憎むこともなかったです。ヒナさんはこの騎士団の中が全世界にも及ぶことを望んでいます。どうか、ブラゴシユワイクに獣人狩りを止めるよう要請してくれませんか？」

エリカはここで引く気はなかった。自分たちは良い、別段恐れられて困った事はない。恐れて武器を手に飛び掛かってくるのならそれを振り払うだけなのだから。

だが、ヒナたちは違う。

今、獣人は表社会から逃れるようにして暮らしている。そんなもの、社会が許してもエリカは許す気などない。そしてジーンも同じ思いだ。

「王家を相手取るのは大変だぞ？　いくら相手がドラゴンスレイヤーだとしてもだ。しかもその相手がブラゴシユワイクともなれば、さらに事は複雑になる。獣人を見下す、それは彼らの根幹にあるよなものだ。それを止めると言うのなら、ドラゴンの相手をする方が幾分マシなくらいだ。だが」

そこでヴァルトはエリカの持ってきた剣を持ち上げてエリカたちに見せた。

「物的証拠があるのなら話は別だ。感情云々はともかくとして国際的に禁止されている行為を行っていたのだ、今度の大会の時にこの事を先方に話し、反応を窺ってみよう。反応次第で公式に抗議するか決定する」

「初めから公式に抗議は出来ないのですか？」

エリカの意見はもつともだ。先に相手に教えれば、言い訳を用意されてしまうかもしれない。言い訳じゃなくても、事実を握りつぶすような暴挙に出ないとも限らない。

「相手によるだろうな。幸いといおうか、ブラゴシユワイクでは穏健派で通っているブラゴシユワイク第一王子が大会を見にいらっしやる。彼に直接言えば話は別だろう」

「なら、そうしてくれ」

「おいおい、冗談はやめてくれ」

ジーンがそういう事で話を進めるよう頼むと、ヴァルトが苦笑混じりにそう言った。

「俺みたいな一介の騎士団長が一国の王子に会えると思うか？ さすがに防犯上からもそれは出来ない相談だ」

「ではどうしろと？」

「そこで良い手がある。わが国からは国賓として姫様が大会を観覧

に行かれる」

「つまり姫様にご協力いただく、と？」

ヴァルトがニンマリと頷く。

「詳しい話はエリカから姫様にしてもらおうのが一番いいだろうな。ともなれば、王子に直談判するのもエリカだな」

「へ、あたしですか？」

さすがに、そうなる事は想定していなかったエリカが間抜けな声を上げながら自分を指差す。

そしてすぐに何故そういう流れになったのか理解して「しまった」という表情をした。それを見てヴァルトが満足そうに笑みを浮かべる。

「そういう事だ。この中で一番姫様と話しやすいのはエリカだろう。私も仕事上姫様に付き添う事はあるが、こういうのは歳の近いエリカが言った方が姫様も聞きやすいだろう。私が行くとどうしてもリラックスできそうにないからな」

この顔でリラックスしろと言うのも無茶だな、と豪快に笑いながら言うヴァルトに、曖昧な同意しかできなかったが、言われてみればそれが一番いいのかもしれない。

「……分かりました。何とかしてみせます」

その答えを聞いてヴァルトが小さく頷き、ジーンは全面的に協力するという表情をしている。

話しはそれで終わり、エリカとジーンは部屋を出るとドンチャン騒ぎの聞こえてくる食堂へと向かう事にした。

食堂でヒナが酔い潰されているのを見て、ジーンと共にジャックを鉄拳制裁したのはまた別のお話だ。

ちなみに久々に会ったゲイリーとダニーによって戻ってきたエリカは食事に誘われたが、それはフィアによって壁に叩き付けられるという形で拒否されることになった。さすがにヒナの次はエリカという感じにしか感じられなかったエリカは、2人に同情することなく他の騎士団員と1週間ぶりの再会を喜んだ。

「なかなか、楽しい事になってるじゃない？」

「相変わらず馬鹿騒ぎが好きな人達ですね」

城の地下まで聞こえてくる、騎士団の騒ぎ。

飲食禁止と書かれた紙の目の前で酒を口に流し込むバーバラは、本を整理しているクライムにそう語りかけた。クライムも別段バーバラを咎める気はないらしく、一通り片付けるとバーバラの前の席に腰を下ろした。

「人狼、だそうですね」

「まあね。正直私と何が違うのか分からないくらいだけれど」

バーバラの足元にはアレックスがいる。帰ってきてすぐにアレックスはエリカに別れを言ってバーバラの元に戻ってきた。別れ際に思い切り抱き付かれたが、もう今さら驚くような事でもない。

「いよいよ、騎士団はなんでもありの所になってきた気がするのですが？」

「否定はしないわ。そもそも吸血鬼がいる事自体、お隣からしてみれば信じられない事でしょう。ただ、気になるのは……」

「ブラゴシユワイク王家直属の暗殺機関、ですね？」

バーバラの言葉を先読みしてクライムがそう言うと、バーバラが小さく頷く。

「私は旧友を助ける事が出来なかった。あの時、私があいつらを皆殺しにしておけば、何の問題も起こらなかった……」

「過ぎた事を悔やんでも始まりませんよ」

クライムの言葉に小さく頷きつつも、やはり心に思うところがある

のだろう、バーバラはグラスに入っていた酒を一気に飲み干すと、グラスを机に置く。

「奴らの正体は？ 目的は？ あなたなら知っているでしょう？」

本当の事以外、聞きたくないという目でバーバラはクライムを見つめる。クライムも隠し立てする気はないのか、指を軽く振ってびっしり積まれた本の中から一冊の本を取り出すと、それを広げて中身を読み始める。

「彼らはミスニックと呼ばれる非公式機関です。任務は破壊工作、誘拐、暗殺、なんでもござれの特務部隊。獣人狩りは彼らの一任務にすぎません。知つての通り、最高指揮官は国王、他のいかなる権力からも独立しており、その存在自体表立った事は今までありません。規模、本拠地、構成などは一切不明、唯一分かっているのは『狙った獲物は逃さない』という事だけ。……厄介な者たちを敵に回しましたね」

「随分と詳しいわね」

真剣な表情のまま、バーバラはクライムの目をまっすぐに見つめる。だが、笑みの中に隠されたクライムの真意は読み取れない。

「私は少しばかり裏の事情を知っているにすぎません。伊達に元暗殺機関はやってませんか」

「それが今じゃ司書なんだから、世の中どうなるか分からないものね」

クライムは不敵な笑みを崩さない。

バーバラとて、何の手がかりなしにクライムに聞きに来たわけではない。クライムがその手のプロだという事を知ったうえで来たのだ。クライムが元暗殺者だという事を知っている人間はこの城において片手の指で事足りる。

この国で獣人狩りが禁止になったのは決して遠い昔の事ではないのは皆が知っている。それが意味するのは、ほんの一昔前までこのアールドールン王国にもブラゴシユワイクの暗殺機関と似たような機関があったという事だ。

現在の国王、アーサー王になってからそういえば汚い政治はかなり浄化され、暗殺機関も今ではただの諜報機関という事になっている。少なくともアーサー王の名のもとに暗殺は行われていない、はずだ。

「あなたも人が悪い、知っていて来たのは分かっています。私があるあなたの求める情報を持っている事を。あなたが聞きたいのは、これだけではないのでしょうか？」

クライムがそう聞くと、バーバラは口元を歪めて顔をクライムに近づける。机から身を乗り出す形となり、バーバラは自らの豊満な身体をクライムに見せつけるかのようにくねらせる。これでわざとやっていないというのだから、まったくもってたちが悪い。

「ふふ、話しが早くて助かるわ、クライム。私が知りたいのは、次に何時、どこで、何が目的で彼らが動くか、という事よ。私はムラミツの屋敷近くの森で18人の男を始末した。そして7人がムラミツ、エリカ、ジーンとの戦闘で死亡。ただどね、私が最初に全員殺そうとした時、あいつらは確かに26人いたのよ」

最初から全員殺すつもりだったのだ。全部で何人いるのか最初に確認するのは当然の事、エリカたちに全てを任せただけによって、彼女たちが城に戻ってから全てを聞いたバーバラは、勘定が合わない事を不審に思い、生き残りが本国へ逃げ帰った可能性にたどり着いた。

「……それで、私の出番ですか」

「そうよ、あなたの広い情報の網であいつらを見つけ出しなさい。たまにはこの薄暗い部屋から日の当たる場所に出るのも良いわよ？」

「お生憎、ここにいっても外の情報は入ってくるのですよ」

「嫌味しか言えないの、その口は？」

バーバラが凄みのある顔でクライムに迫るが、クライムは少しも臆する気配を見せない。だが、一度小さく息を吐くと開いていた本を閉じ、席を立った。

「分かりました。出来る限りの事はしましょう。明日までに情報をまとめてあなたの部屋に送っておきます」

「早いわね、何か理由があるのかしら？」

「おや、まだ知らされてないのでですか？」

バーバラの言葉にクライムがニヤリとする。

「あなた方は明後日エオリアブルグへ向けて出発するのですよ。今回から試験的に運用されることになった転移魔法を使用して」

「転移魔法？ 荷物とかを動かすあれで人を運ぶの？」

「まさか、そんなチャチな魔法じゃありませんよ。さすがは魔法大国エオリアブルグ、とでも言いましょうか、一度に100人単位で長距離転移が可能な魔法陣を構築したそうです。すでに我が国の魔

法陣も構築が完了しているんですよ。これが公式に運用されるようになれば、各国の交流はさらに活性化するだろうと、息巻いていますよ」

クライムの説明にあまり関心なさげに返事をするが、とりあえず目先の疑問は解決した。

「下手をすると、エオリアブルグで事を起こす可能性すらある、という事ね？」

クライムは返事をせず、ただ小さく頷いた。この時ばかりは、クライムも笑みを消していたようにバーバラは思えた。

第47話 迫る『大会』と影（後書き）

どうもどうも、何やらついに敵の影が濃くなってきた龍旅ですねえ。

そういう話題が出ると完結が近いのか、と思うのですが、どっこい、終わりは見えてもその過程が見えないww

この小説始めた頃と言ってることが全く同じですね。はい、自分でも馬鹿らしいです。

ま、それがこの私、四流小説家クオリティってやつです。このまま変える気もないですからどうでもいいですよ。

それはともかくとして、ついこの間から誤字脱字の報告が結構来るようになりました。それも最新版ではなく結構昔の奴にね。

有り難い限りなのですが、間違っただけのまま皆様の目に晒していたかと思つと恥ずかしいっいたらありゃしない……。

ですので、これからも間違いがありましたら教えていただけるとありがたいです。変換ミスがかなりあったようなので、チマチマ直しております。

では、ご感想などお待ちしております。

第48話 主人公はツツコミスキルを得たようです(前書き)

(・・)んん？

()ゴシゴシ……

(・・)……ひーふーみー……え？

10万……PV、だと？

え、これ夢ですか？

違う、そうですが、では本当なんですね。

ゼロが幾つでしたっけ、ええと、4コ、じゃない5コ……アンビリーバボー！

またはシンジラレナイ。

とりあえず本編どうぞ

第48話 主人公はツツコミスキルを得たようです

久々に戻ってきた、と言つても1週間ぶりなだけなのだが、もはや第二の我が家となったアクイラ騎士団宿舎の自室、ソファで目を覚ましたエリカは、身体を起こして大きく伸びをする。

「んん、あれどうしてソファで……、つてそうだった」

ソファで毛布を被って寝ていた自分に疑問を抱き、すぐに解決したので納得する。

この部屋にはエリカのベッドとフィアのベッドがそれぞれある。窓に近いベッドがエリカの物なのだが、今は別の人物が穏やかな寝息を立てながら寝ている。

「荒っぽい歓迎を受けましたね、ヒナさん」

クスツと笑いながら、立ち上がると眠っているヒナの顔を覗き込む。何者かの気配を感じたのか寝づらそうに寝返りを打ったのでエリカは顔を離してその隣で同じように寝ているフィアに視線を向ける。こちらはヒナと違って寝返りを何度も打ったのか、シーツがクシャクシャになっている。

騎士にとって休日というものは存在しないのだが、長旅から帰ってきて、その足でヒナの入団祝いをやっていたのだから、さすがに疲労がピークに達したようだ。着替える気力も残っていなかった上に、エリカも眠たかったためにフィアは着替えもせず、旅から帰ってき

たそのままの格好で眠っている。

(ヒナさん共々、随分飲んでましたからね)

昨日の食堂はまさしくどんちゃん騒ぎという言葉が最も似合う場所であった。ヒナの事を口伝えに聞いてやってきた騎士たちが揃いも揃って大騒ぎ、果てにはヴァルトが鎮圧に来るという始末だ。

あれだけ五月蠅ければ上階の執務室まで聞こえていたのだろう。堪忍袋の緒以外の何かが切れる音をさせながらやって来たヴァルトの姿は阿修羅を思わせるものだった。

エリカとジーン、ジャックはヴァルトの接近をいち早く察知するとお休みも告げずにノックアウト寸前だったフィアと、ゲストにも関わらず真っ先に潰れて介抱されていたヒナを担ぎ上げると食堂の窓から脱出、その直後ヴァルトの怒号が響き渡った。

その後の事は分からない。

ただ言えるのは、酷い目に合ったであろうことだけだ。

「結局、まだ部屋も決めてなかったからこの部屋に担ぎ込んだんでしたっけか」

眠気に負けてあやふやな記憶を掘り返して昨夜の出来事を整理する。

そそくさと服を着替えて毎日の日課となっている早朝訓練のために部屋を出る。もちろん、2人を起こさないように静かに扉を閉めると、修練場へと通ずる宿舎の1階玄関から出るのが面倒なため窓を開けてヒョイと外に飛び出る。あまり感心される行為ではないのだ

が、見てる人が誰もいないので何の問題もない。

（この1週間仕方ないとはいえさぼっちゃいましたからね。代わりにヒナさんの特訓だったんだけど）

姫黒と黒羽を鞘から抜くとダランと下ろして精神を集中させる。まだ気温の上がない朝はこうしているだけでも肌寒い風で眠気が覚めていくのだ。

ちなみに、2つの鞘は邪魔にならないように背中の中の低い位置に交差させて固定している。鞘に元々取り付けられている黒い紐を結んで鞘が落ちないようにしておく。

「ふう、居合いなんて器用な真似はできませんが……」

身体を左に捻り、腕だけではなく身体全体で刀を振る。姫黒を振り抜くと正面にある標的の周囲に防御魔法が展開され、エリカの攻撃を弾き飛ばす。

防御魔法は全ての標的に備わっているもので、壊れては直すという事を減らすのが目的だ。攻撃してこない分とでも言おうか、無駄に耐久力が高く、そう易々と壊れる心配はない。

おかげで思い切り攻撃が出来るため、騎士の間でも評判は良い。ちよっとしたストレス発散装置代わりになっている時もあるのだが。

防御魔法が作り出す障壁は攻撃を受けると可視化する。そして「どこに」、「どのように」、「どれくらいの威力で」を色で見分ける事が出来るようになってる。

今の場合、障壁に赤い線が横に入っているため、横に軽く当てた事を意味している。ウォーミングアップであるからそこまで力を入れていないことが分かる。

「朝から頑張っていますね」

ふと、背後から声がかかり振り向くと、この場には似つかわしくない恰好をしたクライムが立っていた。相変わらず嫌味なほど清々しい笑みを顔に貼り付けたクライムがエリカの傍に歩み寄ってくる。

だが、エリカは不思議な違和感を感じた。目の前にいるクライムから、存在感とか気配とかいうものが一切感じられないのだ。それこそ、まるでそこにいないかのように。

「ああ、この姿は私の分身、とでもお考えください。外に出るのは面ど……億く……所用で手が離せないので意識だけをそちらに向かわせています。よろしければ公文書室へ来てもらえませんか？ いろいろとお話しなければならぬ事が増えましたので」

いろいろ言いたいのはこっちの方に思える。話があるのなら自分の方から来るのが筋ではないのか、とエリカは思うのだが、クライムはよりにもよって自分が外に出るのが面倒で、億劫だからエリカを呼びつけているようだ。最終的に「所用で手が離せなく」なったようだ。あそこまではつきり言われて気づかないほどエリカは馬鹿でもない。

「話があるのならそちらから来てもらえませんか？」

「おや、来ていますよ？ 朝は寒いので騎士団の食堂までは来ています」

「……それならここまで数分とかからないんじゃない？」

「言ったでしょう？　あまり外に出たくないんですよ。お待ちしております」

ああ言えば、こう言う、という台詞がぴったりだった。最後に嫌味つたらしい笑みを浮かべるとクライムの姿がすうつと消え、修練場には再びエリカー1人だけになり、静けさが辺りを支配する。

「食堂つて、まだ開いてないような気がするのですが……」

そんな事を考えながら、エリカは宿舎へと戻る事にした。

「おはようございます」

食堂に行ってみると、朝の仕出しなどをしている料理人たちをしり目に席で優雅に寛いでいるクライムがいた。エリカに気が付くと手を振って招き寄せる。

「無理言って入ったんですか？」

「まさか、この料理長とはちょっとした仲でして、これくらいなら快く許してくれるんですよ」

クライムの前の席に座ると、つくづく不思議に思えてしまう。

（食堂の硬い椅子でどうして優雅に寛げるのでしょうか……）

クライムは自分の目の前に置かれているコップを持ち上げると一口飲んでエリカに視線を戻す。

「約束、これで守った事にしましょうか」

「約束？ あ……」

身に覚えのない事に思えて記憶を掘り返すと、その意味が分かった。団内選抜大会の時に、そんな約束をしたように思える。

「まあ、その約束含めでお話したいことがありますね」

そこでようやくエリカは端からクライムが真剣に話している事に気が付いた。いつも何かを含んだような笑みを浮かべているからなのか、エリカが薄暗い公文書室でしか会っていないからなのかは分からないが、クライムの目は真剣そのもの、それをどうして表情にも反映しないのかと不思議に思えるほどにだ。

「表情から心を読まれるのはいい気分ではありませんから」

「そう言いながら、人の心を読まないでください」

ジト目で見るが、反省している様子はない。クライムという男は自

分以外の人間にはそういつたルールを適用しないようだ。

「ともかく、人が来る前に話を終わらせたいので、単刀直入に言わせてもらいます」

少しだけ顔を近づけ、声のトーンを落とす。エリカも自然とクライムのこれから言うであろう言葉に耳を澄ます。

「水着の色は？」

スッパ ンッ!!!!!!

クライムの台詞を聞いた瞬間、真っ赤になったエリカはいつぞやのファイアのようにどこからともなくハリセンを取り出すとクライムの脳天目掛けて振り下ろした。流れるような動きで回避されてハリセンがむなしく椅子の背もたれに当たって乾いた音を響かせる。

「おやおや、地雷でしたか」

「はあ、はあ、それが聞きたいが為にここまで来たんですか？ なら良いですよ、試し斬りの標的にしてさしあげます」

姫黒と黒羽の柄に手をかけるのを見て、ようやくクライムは自らの非礼を詫びた。とは言っても、「こちらが譲歩してやった」という笑みを見せつけてくれるのだから始末に負えない。エリカは本当に1回クライムをぶった切りたい衝動に駆られる。

「まあ、お座りください。立ち話もなんですし」

「誰のせいで立ってると思ってるんですか……」

引っ叩こうとした時に倒してしまった椅子を元に戻して座ると、こ

れ以上の冗談は許さないという思いを視線に乗せてクライムに送る。だが、それを受け取っているのかクライムの表情からは読み取れない。

「では、本題に入りましょうか」

「最初からそうしてください」

疲れる。

クライムに付き合つと無性に疲れる。

「お話をする前に、バーバラから聞いた事を確認させてもらいますが、あなたはヒトではないのですかね？」

「……バーバラさんから聞いているのなら正体くらい分かってるでしょう？ 遠まわしに言わないでください」

内心で、今度は真面目な話だ、と安心したエリカは悪くないだろう。

クライムはエリカの言葉に笑みを深めると1冊の本を取り出し、パラパラと捲って目的のページを開くとそれをエリカの方に向ける。

「ドラゴンがヒトになるなどという夢物語のような事態が自然に起こる可能性はほぼゼロです。バーバラの言う通り、やはり人為的な要素がからんでいると考える方が自然です。そして、このページに見覚えがありますよね？」

最初の言葉でクライムが全てを知っている事を理解したエリカは、その件には何も言わず、差し出された本のページを覗き込む。

「ええ、バーバラさんに見せてもらった本です。あたしをヒトにした魔法陣ではないか、と言っていましたか」

「十中八九それで間違いありません。目的までこの本に書かれた事と同じ、とは限りませんが、良からぬことには間違いありません。そしてそれにはどうもブラゴシユワイクが絡んでいるようです」

クライムの言った事にエリカは目を見開く。

「正確にはブラゴシユワイクだけではありません。エオリアブルグも、このアールドールンをも巻き込む巨大な陰謀が見え隠れしています。大会で動きを見せる可能性があり、必然的にあなたは巻き込まれるでしょう」

「敵は何者なんですか……？」

先ほどまでの冗談などすでに地平線の向こうまで吹き飛んでいる。

抑揚のない、静かな声でエリカが尋ねるとクライムは再度周囲を確認してから口を開く。

「本当の名前は分かりません。そもそも名前など無いのかもしれませんが。ですが、彼らは国家という枠を超え、共謀しています。各国の政治上層部に影響力を行使できるだけの力を持ちながらその姿を見せない、不気味な影、ゆえにその存在を知る者からはシャドーと呼ばれています」

「シャドー……」

クライムが小さく頷く。なぜこんな重い話をニコニコ顔で語れるのか理解できないが、少なくともクライム自身の口ぶりは真剣そのものだ。

「つい最近まで、アールドールンにも彼らの手の者が侵入していたようなのですが、どうもエオリアブルグに集結しつつあるそうです。これが示すのは大会で何かをやるうとしている、という事です」

「そのことは、ヴァルトさんたちには？」

「彼には伝えてませんが、バーバラ経由ですぐに話は行くでしょう。もしそうなれば、この騎士団全体が無関係ではいられませんから。ただ……」

そこで一度言葉を切る。話すべきか迷っているようにも見えるが、すぐに決心したのか一瞬泳がせた視線をエリカに戻す。

「目的は分かりません。ですが、その目的のためにあなたを狙うでしょう」

「あたしを？」

「向こうに着いたら、気を付けてください。向こうでは誰一人信用できません。たとえ王族であろうと、彼らの仲間ではないとは言いきれないのですから」

クライムはそれだけ言うのと立ち上がる。ポケットに手を入れればし中を探り、手を出すと小さなペンダントのような物が握られていた。クライムはそれをエリカの前に置くと、手をかざして何かを唱える。手から淡い光が現れてペンダントにつけられた赤い石の中に吸い込まれていく。

「お守りです。あなたに危機が迫った時、少なからず助けになるでしょう。では」

小さくお辞儀をすると、クライムは滑る様に食堂から立ち去っていた。

残されたエリカはネックレスに視線を向けて、両手でそのペンダントを持ち上げてそれを眺めてみる。

首に巻く部分は銀色を主体とされており、それほど装飾が施されている訳ではない。その分、先端につけられた赤い石が際立ち、美しく輝いている。

赤いと言っても、よく見ると石自体が赤いのではないと分かる。正確には石の中の何かが赤く輝いているのだ。まるで液体のように波打っており、それがまた神秘的に思える。

「大会で動く、か……」

ボンヤリと先ほどクライムが言っていた事を頭の中で繰り返してみる。

「望むところです」

それは、ヒトとしてではなく、龍としての言葉。今まで誰にもぶつけようがなかった感情を、ぶつけるべき相手にぶつけられるかもしれない。そう思うとエリカは来るべきものがようやく来たような感じがして気持ちが昂った。

（ただ殺すだけでは足りない。この世に生きている事ヲ後悔サセテヤル……）

負の感情が黒い炎となって心の中で燃え上がる。

それにハツとなって気が付き、自分の頬を軽く叩いて自制心を蘇らせる。

「つと、またですか……」

最近鳴りを潜めていた、負の感情がエリカをイフォネイアに変えようとす。エリカという仮面で常に穏やかな性格を装っているが、ムラミツの死を境に感情に忍び寄ってくるようになった。本来の自分自身が感情を押し込めるな、と言っているかのようだ。

「この感情は、敵が目の前にいる時にでも解放しますか」

その時には、もはやヒトではないだろう。龍としてこの世に存在し、自分をこんな目に合わせた奴らに思い知らせてやる、という事を考えながら、エリカは食堂に話し相手でも来ないかと天井を見上げるのであった。

「ふむ、アレは我々の存在を知ったか」

暗闇。

声だけが反響してその空間が広い事を教えてくれる。

「貴様には苦勞をかけるな。だが、それももう終わる。我々の悲願は成就し、世界は我らの手の内に入る」

暗闇の中でドクターと呼ばれる男が影に話しかける。影は誰にも聞こえないかというほどの声でドクターにだけ話を伝える。

「うむ、そうなればアレは用済み、我らの力を持つてすればたとえドラゴンであろうと敵ではない。こちらは準備できている。後はアレが到着すれば良い。大会では皆の活躍に期待するでしょう」

影が小さく頷き、暗闇の中へと溶け込んでいく。

ドクターと呼ばれる男はしばらく動かなかったが、不意に口元を歪ませる。

「永かった。それを思えばあと数日、待つことなど……」

第48話 主人公はツツコミスキルを得たようです（後書き）

10万PV、1万ユニーク、そして今さっき気が付きましたがお気に入り登録件数も100件を超えていました。お気に入りに関しては上下するので今現在の情報ですが、それはともかくとしても10万PVです。

なんか、嬉しいですね。

いつも言っているような気がしますけど、こんな小説でも評価を下さる方、感想を送っていただけの方、誤字脱字を報告してくださる方がいると思うと本当に心強い限りです。

まあ、ファンタジーで、結構メジャーなタグをつけて50話前後で10万なんて遅すぎるぜ、と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、10万なんて単位初めて自分の小説で見た八モ二力はとても嬉しいのです。

今後とも、龍旅をよろしく願います。

追伸：記念に番外編（前回辺りからポツポツ存在が出てきている奴です）を作成中です。そのうち投稿させてもらいますが、シリアスをぶった切っていると言っても過言ではない出来になりそうなお上、

執筆途中の現在です。すでに8000字、どうも1万字を超えそうな勢いです。長いのでシリアスの間に読むと「あれ？」ってなるかもしれないので。

ま、気にしませんがねww

ではでは、また次回。

番外編 テルミによるテルミのための画策（前書き）

え、という訳で、10万PV、1万ユニークの記念という事で今回は番外編をお送りしたいと思います。

まあ、タイトルの通り、今回のメインはテルミです。

そして、シリアスなんてどこか遠い所まで吹き飛んだと思います。

とりあえず、本編、じゃなかった番外編をどうぞ。

番外編 テルミによるテルミのための画策

「皆さんこんばんは、アケイラ騎士団広報担当のテルミが、早朝の騎士団宿舎からお送りしております……」

突如現れたテルミは、小声で手に持つマイクに向けてそう言い放った。

「なぜ、私がこのような事をしているか、きっと皆さん疑問に思っている事でしょう。ですが、これには大きな、のっぴきならない、回避不可能な、この世の真理になりそうな、天よりも高く、海よりも深〜い理由があるのです」

ずずいと身を乗り出すテルミ。

「ちょっ、テルミ、あまり近づかないでくれ、画面からはみ出る」

「え、ああ、ごめんごめん」

「は〜い、それじゃもう1回撮り直しますよ〜」

「時間もないんだし、ちゃちゃっで行きましょう〜」

テルミが謝ると同時に周辺から小声で指示が飛ぶ。

そう、これはとある番組を作るための撮影をしているのだ。

朝の3時に。

まだ誰も起きていない、静まり返った宿舎の一角でカメラを構えた

騎士、集音用のマイクを持ちなおす騎士、カンペを素早く書いていく騎士が静かに、それでいて慌ただしく動いていく。

「それにしても、城の敷地内からこんなものが発掘されるなんて、不思議ね〜」

テルミは撮影が止まっているわずかな間に自分に向けられているカメラを指差して何度目かという台詞を放つ。

魔法を一切使わず、風景を記録できる装置、その名もムービーカメラ！ 写真撮影も可能な優れもの！

以前仮設の観客席を設営する時に、地中から掘り返された、旧文明の遺物とすら考えられている代物だ。古今東西、この世界で魔法を使わずに映像を、写真を記録するなど不可能とすら考えられてきたため、この大発見はすぐに城中に知れ渡り、その存在はすぐに広報であるテルミの耳にも入った。

その存在を知ったテルミは誰かが貰いたいという前にヴァルトに直談判してこのカメラの調査を任せてくれと頼みこんだのだ。

そしてものの見事にテルミの思惑は成功し、カメラとその周辺機器一式を引き取る事が出来たのだ。

映像を記録することが出来る、と聞いてテルミはすぐにそれをある事に利用しようと考えた。

『騎士団の内部を世に広く伝えるため』

で・は・な・く！

『騎士団のあの人やこの人のあんな映像はこんな画像』を取るためだ。

もはや私利私欲に動いていると言っても過言ではない。

「ちよつと、私はそれを騎士の皆に配る事で最近面白味に欠けるこの騎士団に新たな風を入れようとしているだけよ」

知らんがな。

「はい、テルミ、誰と喋ってるか知らんが撮影を再開するぞ、さっきのドアップの直前で切ってその後からって感じでよろしく」

「はいはい、ダニー」

カメラを持つのはダニーだ。テルミの案に最も速く反応し、協力を申し出た。協力する代わりに未編集の全ての映像記録を複製させるという条件付きだったが、人手が必要なテルミはそれを快諾した。

するとダニーは同じ志を抱く騎士を集めて撮影隊を組織、テルミの謀略とも言える行為に全面的な協力をしている。

「ふう……、ではでは皆さん、今日のテーマはこちら！」

小声だが、しっかりと集音されるだけの音量でテルミが背後の壁をバツと叩くと、それを合図に魔法が発動、壁に文字が浮かび上がる。

『寝起きドッキリ！ 今話題の騎士の寝起きを激写！！』

読んで字の如く、とはまさにこの事だろう。

「ふっふっふっ、今日のターゲットは今騎士団で話題の絶えない騎士たちの無防備な寝顔を激写した後、魔法で怖い顔になった我らが仕掛け人たちが寝起きドッキリを仕掛けるというものです。男性には男性が、女性には女性がそれらを仕掛けますので、手違いは起こりませんので、ご了承ください」

可愛くウィンクして見せると、「はい、オッケー」という声が上がってテルミが大きく息を吐く。

「結構キャラ作るのって大変ねえ」

「だが、その苦労以上の利益が上がるのだ、そう思えば苦労など吹き飛ば、そうだろう？」

「ええ、ダニー」

「フフフフフフフフ………」

（（（（「怖い……」））））

怪しい笑みを浮かべて小声で笑い合う2人に撮影スタッフは息を呑む。だが、志を同じくする者しかいないため、ここで臆する者はいない。むしろこの2人が頼もしくすら見えているのだ。

「っと、笑っている場合じゃなかった。最初のターゲット、行くわよ」

「「「「「応」」」」」」

「というわけで、寝起きドッキリ、最初のターゲットはこの人！」
カメラに映らない位置から差し出されたプレートを受け取ると、それをカメラに映る位置まで持ち上げる。

プレートにはテルミが協力を仰いだ騎士の中で最も絵心のある騎士が描いた1人の女性の似顔絵が描かれていた。赤いポニーテールが印象的な騎士、シルヴィアが描かれていた。

「今回、ドラゴンスレイヤーによる対抗戦、通称『大会』において選抜メンバーに選ばれた我らがアネゴ！ 凛々しい普段の様子とは違った彼女が見られることに期待しましょ〜」

当然の事だが、この宿舍の各部屋には鍵が設けられている。鍵はその部屋の住居人と、宿舍全体の管理人、そして責任者として男性の部屋の鍵はヴァルトが、女性の部屋の鍵はバーバラがスペアを持っている。ヴァルトと云えど、女性陣には譲れない一線があったのだろう。バーバラがいない事が多いためにほぼ常時全ての鍵のスペアはヴァルトが管理しているが、少なくとも女性1人以上の同意がないと開かないようにヴァルトが作った金庫に保管されているので、過ちが起こる心配はない。

だが、テルミの計画に鍵は不可欠だ。

そもそも寝起きドツキリとは不法侵入をして行われるもの、部屋に入れないのでは話にならない。

そこでバーバラが戻っている今を狙ってテルミが、どストレートに「皆の寝顔が撮りたいから鍵を貸してください」と言ったところ、

「良いわよ」

と予想外な事に了承してくれたため、テルミは宿舍全体の鍵を手に入れる事が出来た。男性の分はバーバラがヴァルトの金庫から拝借したらしい。詳しく聞くと命の危機にあるためこれ以上は聞けないし、言えない。

「その代わり、エリカの寝顔を撮れたらそれを寄越しなさい」

薄ら暗い交渉が成されたという事だけ分かってもらえればそれでいい。

「というわけで、まずは侵入です……」

鍵を差し込み、音がなるべく立たないようにゆっくりと鍵を回すと、扉の反対側でカチリと小さな音がして開錠された。ドアノブを握り、慎重に扉を開けると、まだ暗い部屋がカメラの前に姿を現す。

扉を開けた状態でテルミが一度カメラに目を向け、小さく頷くと、それに反応してダニーがカメラのスイッチを操作する。すると画面が緑を主体とした画面になり、廊下と違って暗く視界が悪い部屋の中が鮮明に分かるようになる。

暗視機能付きの優れものなのだ！

テルミが室内に（許可なく）入り、少し遅れてダニー以下撮影陣がシルヴィアの自室に（許可なく）入っていく。

「どうやら、シルヴィアはまだ就寝中のようです……」

そもそも、起きていたらこの撮影自体が成り立たないはずだ。

テルミは声を殺し、一度カメラに振り返るとそう言い、忍び足でシルヴィアの姿を探す。

ちなみに、騎士は寝ていても周囲の気配を察することが出来るくらいの実力は誰にでもある。当然ながら邪な思惑の元、やって来たテルミたちが気配で気づかれるという可能性もあった。

そのためテルミたちは全員で突入する者たちに気配を消す魔法を何重にも重ねてかけている。

また、1人目がシルヴィア、つまり女性であるため、ダニーも突出はせず、後続の女性騎士（自称腐女騎士）にカメラを渡すと決してそれ以上踏み込むような真似はしない。いかに馬鹿でどうしようもない連中の集まりとはいえ、超えてはならない一線は理解できているようだった。

「……………お、発見です」

テルミは室内でベッドをわずかな光源から見つけると、ニンマリと笑みを浮かべてカメラに向けてその方向を指差した。カメラがそちらに向き、ズームされると静かな寝息を立てるシルヴィアの姿が緑色の画面に浮かび上がる。

シルヴィアは完全にテルミたちの侵入に気が付いていないようだった。

「見てください、氷の女王の寝顔ですよ……………って」

シルヴィアはその戦闘方法から「氷の女王」としばし揶揄されることがある。獲物の種類を自在に変化させる事からそういう名がついたわけだが、それ以上に氷の鎌を構える彼女の姿を畏怖の念を込めての呼び名でもある。

だが、今日の前にあるのは、普段の鋭い目や、キリッとした表情も今は鳴りを潜めて穏やかな雰囲気、なのであるが……………。

「剣を持って寝るとは、さすがと言おうか……」

シルヴィアは氷の剣を抱えていた。

冷たくないのか、とかいう疑問がテルミたちの脳裏を過ぎっていくのだが、見た目にはそのようには感じられない。

「ま、まあいつもと全然違うシルヴィアが撮れたから問題ないか……」

気を取り直してテルミはカメラに向き合おうと、悪人の笑みを浮かべる。

具体的に言うと、顔が若干下を向いているため、目元が影になり、そこで怪しく2つの目が「キューピーン」と光り輝き、口元が吊り上っている。

「では、いよいよお待ちかねの、寝起きドッキリを仕掛けたいと思います」

カメラの背後で何か動く物音が僅かにして、カメラが横に避けると手前から人影が現れる。

首から下は普通の格好だ。

だが、首から上は魔法とメイクによって恐ろしい事になっていた。

口が裂けているのだ。それも通常の口裂け女のように、耳の近くまで裂けているのではなく、縦に裂けているのだ。顎先から丁度目と目の中間辺りまでがメイクによって裂けているように見えるのだ。

明るい所で見ればグロテスクなほどリアルに塗装された鼻頭や、本来の口元が見えるのだが、この暗い中ではそれ以上に縦に裂けた口がインパクトを与える。

「志を同じくする騎士が自らの女を捨て、お茶の間に笑いを届けるために自己犠牲してくれました。今後に差し障るためお名前は伏せさせてもらいます」

口裂け女のメイクをした女騎士が小さく拳を握りしめると、テルミとアイコンタクトをする。テルミがカメラの手前へと移動し、丁度立ち位置が入れ替わる。懐中電灯を手に持ち、真っ赤なライトが点灯すると、テルミに合図を送る。

テルミがそれに反応して小さく頷くと、どこから出したのかも分からない細長い棒を取り出し、それをシルヴィアの顔の上へと伸ばしていく。先端からは細い糸が垂れており、その紐は直方体の何かをぶら下げている。

みよろんっ

「ひゃっ、何奴っ!？」

「うらめしやあ〜……」

「なっ、悪霊退散!!!」

「ちよ、シルヴィア、デスサイズは駄目!!!」

説明しよう。

まず、プルプルと震える灰色の物体を顔面に受けたシルヴィアが普段は言わないような悲鳴を上げて目を覚ましたシルヴィアの目の前に口裂け女が姿を現し、それを視界に収めた瞬間シルヴィアが持っていた剣を鎌に変化させて大きく振りかぶった。そしてそれを見て本気で不味いと思ったテルミが割って入ったという寸法だ。

鎌をテルミの喉元ギリギリでシルヴィアは止めるが、テルミを見て全てを察したのである。シルヴィアの表情は氷の女王にふさわしいものになってしまった。

「テルミ、覚悟は出来てるでしょうね……？」

「へ？ ちょ、待って、落ち着きましよう？ 争いは何も生みはしないわよ？ だからその自家製断頭台を元に戻して！」

カメラの前でまさしく公開処刑が始まりそうになったので、さすがにこれ以上はテルミの命に係わる、と判断した撮影陣がシルヴィアを止めにかかる。

「え、命からがら戻ってまいりました。これからはシルヴィアに実況と解説を担当して頂きたいと思えます。予定では次の方にもやつてもらいたいと思っております」

「……人の苦勞も知らないで」

カメラを動かすと白い椅子とテーブルとセットになったシルヴィアが映し出される。机の上には「実況」、「解説」と書かれた立札が並べられており、テルミが言った通り2人でやるものなのか空きの椅子が用意されている。

「で、では気を取り直して2人目のターゲットを発表します……この方です！」

1回目同様に白いプレートを持ち上げると、そこにはジーンの顔が描かれていた。

「シルヴィア同様今回大会選抜メンバーに選ばれたジーンは、18歳とは思えぬ冷静さを武器に戦っています。寝起きの彼にも普段の冷静さがあるのか、見物です」

「……何のリアクションもない気がするわね」

テルミの台詞に短い言葉で解説(?)を入れるシルヴィアの声がボソボソと集音される。

「外野、黙ってよ」

「外野じゃなくて解説なんでしょ？ さっさと終わらせなさいな。」

二度寝できなくなるじゃない」

((これだけでも十分イメージブレイクしている気がする……))

撮影陣が声にならない声を心で呟くが、もちろん口には出さない。

なぜならシルヴィアは表面上は怒りを収めているのだが、代わりに常に彼女の隣の床に突き立てられている青白い鎌が不気味な存在感を醸し出しているからだ。いつその持ち手に手がかけられるかわからない恐怖感の中、ダニーたちは収録を続けているのだ。

「ではでは、ダニー出番よ」

「了う解い。積年の恨み、ここで晴らす！」

カメラを別の騎士に渡すと、即座に不気味なマスクを被って、顔に似合った不気味な笑い声を上げてみせる。どこかの墓場で地面から出てきそうなマスクは目を赤く光らせ、大きく開けた口の中の牙にはそれにしか見えない赤い塗料が付着している。

テルミが鍵を解除して扉を開けると、ダニーが中に入っていく。

「えー、ここでお知らせです。野郎の寝顔なんぞ見たくねえ、という撮影陣の意見を尊重して、男性騎士にはいきなり寝起きドッキリを仕掛けたいと思います」

テルミはそう言うとカメラを引き連れダニーの後を追って室内へと入っていく。室内ではすでにダニーがいつでも行けるように準備万端で待機しており、カメラが来たのを確認して親指を当てると、シルヴィアの時同様、灰色で直方体の物体を寝ているジーンの顔にぶつける。

「ぬっ！ 何奴！！！」

「悪い子はいねがああああ〜」

「なっ！ おのれ化け物、まだ生きていたのか！！！」

「あれ、なんか……」

目を覚ましたジーンが、妙な事を口走つたのに気が付いたテルミはカメラを後退させて自らも扉へと通じる狭い通路へと隠れる。

だがダニーは逃げ遅れ、扉とダニーの間に寝起きのジーンが割り込んでしまった。武器は手にしていないが、素手で戦おうとしているジーンにダニーは命の危機を覚えて慌ててマスクを取る。

「ちょ、ジーン、俺だ、ダニーだ！！！」

「なあっ！？ 化け物がダニーに化けたのか！？ おのれ仲間化けるとは小癩な奴、俺が成敗してくれる！！！」

「あれ、まだ夢の中のような……」

「そうみたいです……あ、顔面に膝入った」

シルヴィアの呆れたような声にテルミが返事をした時、ジーンがダニー目掛けて飛び、強烈な膝蹴りをダニーにお見舞いし、ダニーは壁に激突する。

「お、お前、仲間の顔でも平気で蹴るのか！？」

「正体を現したな、化け物め。貴様はダニーではない。仮にダニーと全く同じであろうと、それが俺の攻撃を止める手段とはなりえない！！！」

「ちよつとまてええええええええつ！！！！！！！！！！」

ダニーの悲鳴が部屋に響き渡るが、騒音迷惑防止のためにターゲットの部屋にはあらゆる音、振動を外に出さない工夫がなされている。それをやったのは他でもないダニーだ。

結局、ダニーは寝ぼけたジーンにフルボッコされ、スタッフが止めに入るまでサンドバッグ代わりにされてしまったのであった。

「…………シルヴィア、なぜテルミの悪事に手を貸す？」
「…………後で私の分だけテープを抜き取る予定」
「…………俺のも頼めるか？」
「頼まれたわ」

実況・解説席で2人がボソボソと話しているのはテルミたちには聞こえていない。

ダニーことダニエル・オジュをフルボツコにして廊下に放り出したジーンは、そこに至ってようやく撮影スタッフによって現実世界に引き戻されることになった。一応ダニーにも謝っておいたのだが、別段気にしている様子もなく、ジーンはシルヴィアというこの場に何故いるのかも分からない人物を見つけると隣に座る事にした。

「まあ、あまり大事にならなければいいんだが……」

「団長たちが良く許可したものね……」

「案外許可取ってないんじゃないか？」

「それはさすがに……ありそうね」

2人は知らされていない事だが、事実テルミは自分が何を仕出かそうとしているのかヴァルトに許可など取っていない。そもそもヴァルトはテルミが何をしているのか気が付いていないだろう。

テルミは自らの持つ技術を総動員して情報統制を行っている。テルミたちがやっている事は、当事者にならないとそれが行われている事すら感知できないのだ。

「この流れだと、選抜された人は全員やられるわね……」

「人死にが出なきゃ良いが……」

2人の心配事はまさにそこにあった。

3人目、ジャック

「うおおおおおおおっ！！ 天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ、悪を倒せと！ そう、俺は超絶神兵ジャックその人だ！！」

「だ、誰かこの人を止めてくれ！ マジで殺される！！」

「ダニー、あなたの死は忘れないわ！！」

「まず助けようという努力をしてっ……あ、ちょ、ま……ア
ッ！！！！！！」

4人目、ヒナ

「では、4人目のターゲットは……」

「皆さんおそろいで何をやってらっしゃるんですか？」

「あ、おはよう、ヒナ。実は今からヒナに寝起きドッキリを……え
？」

「え？」

5人目、ファイア

「ラストターゲットと同じ部屋ってのが参ったわね……。どうにか
ならないかしら」

「フィアを諦めるってのが一番いいんじゃないか？ フィアにはこちら側に回ってもらえば、後々楽だと思うが」

「ジーン、なんか楽しげね……」

「なんか楽しくなってきた俺がいるんだよ、シルヴィア。そういうお前も随分と顔がにやけているが？」

「ダニーがボコボコにされるのは見ていて飽きないわ」

「さすがは氷の女王だな」

「……死んどく？」

「すまん……」

「ふう、ついに長い朝も終わりを告げる時がやってきました。今日最後のターゲットは、皆さんも想像がついているでしょう、この人です！」

プレートを掲げ、ラストだけに若干興奮気味のテルミがカメラ目線で悪戯好きの子供のような笑みを浮かべる。

「我らがお嬢さん、エリカです！」

何故か、今まで描かれた誰よりも絵のクオリティが高い。しかも背景にバラが咲く始末。

「本来ならば5人目の犠せ、じゃなかったターゲットであったフィアと同室であったため、これを見るであろう皆さんがおそらく見たいであろうエリカに犠せ、違う違うターゲットを絞り、締めと行きたいと思います」

「なんであんな馬鹿な事をやってるのかしら。そして止めないあなたたちも」

「見てて楽しいんだ(のよ)」「」

「はあ……。どうでもいいけど、死人が出るわよ、下手をすると」

先ほどから思い出し笑いを必死にこらえている2人を見て呆れたようにため息をつく、フィアは不意に真剣な表情になって今まさにテルミたちが突入しようとしている部屋、エリカとフィアの自室の扉を見つめながらそう言った。

「死人？ ジャックの時にダニーが旅立ったが、エリカなら大丈夫

だろう。むしろ起きるかどうかが気になるな」

エリカが本来起きる時じゃない時間帯に起こされると非常に寝起きが悪い事を知っているジーンは、フィアの言葉を気にせずそんなことを言う。

シルヴィアはエリカの寝起きに関しては知らないのでキョトンとしてフィアとジーンの会話を聞いている。

ジーンのことを聞くと、フィアはまたため息をつき、頭垂れた。

「（ボソツ）私だって慣れるのにしばらくかかったのに、耐性のない人間が入ったら……」

「うん、何か言ったか？」

「ここにいる連中がもし、『そういう』連中だったら、致命傷を負いかねないわ」

「………どういう事？」

フィアのあまりに真剣な言葉、表情に、ジーンも黙り、話が見えないシルヴィアはフィアに疑問をぶつけてきた。ジーンは、ある心当たりに行きつき、「あっ」と小さく声を漏らした。

「よし、行くわよ」

テルミが先頭を歩き、部屋に音もなく突入していく。どうもエリカの寝顔がそんなにも見たいようで、本来行く必要のないスタッフまでもが部屋へと続々と入っていく。

「まあ、見てれば分かるわ」

その様子を見ながらフィアはそう言い、解説席に据え付けられたモニター、カメラからの画像をリアルタイムで見られるというボードの前に先ほどテルミが使ったエリカの似顔絵が描かれたプレートを置いた。

「どうして……?」

「見たらあなたも犠牲になりかねないわよ」

シルヴィアが「なぜ?」と言おうとしたその時!

ブ

ツ! ! ! ! !

カッハ

ツ! ! ! ! !

部屋の中から何かが大量に吹き出す音が聞こえ、続いて悲鳴のような謎の声が聞こえてきたのを見て、フィアは「遅かったか」という表情をした。

そして悲鳴の後には一切の音が消え、不気味なほどの沈黙が辺りを支配する。

「行くわよ、早くしないと本当に死人が出るわ」

「お、おう」

「分かったわ」

フィアが部屋へと向かうのを追ってジーンとシルヴィアは席を立つてその後続いた。

部屋の中は当然だが暗闇だ。3人は慎重に、一步一步暗闇を進むと、フィアの足に何か当たった。フィアはそれ以上は動かず手探りで机の上に置かれているはずのランプを探す。

「なに、水でも漏れてるの？」

3人が歩く度に、ピチャピチャと水の音がする。見当がついてしまふがゆえに全員がそれ以上喋ろうとしない。

「点けるわよ」

ランプにフィアが炎を灯すと、そこは地獄だった。

突入した撮影陣は1人の例外もなく鼻と口から大量の血を流して床に倒れていた。

さすがのシルヴィアも明かりが灯った瞬間は狼狽えたが、すぐにまだ生きているかどうかを確認するために血の海に膝をついた。

「ジーンは普段からエリカといえるから大丈夫でしょうけど、原因はこれでしょうねえ」

「……………ああ」

こんな地獄が自分の寝ているすぐ隣で起こっているとは夢にも思わないだろうエリカがこれ以上にならない幸せそうな表情で眠っている。

（まったく、この世の人間の寝顔とは信じられないくらい可愛いわね……………）

その表情は天使を彷彿させる。

これを見て鼻血を吹き出し、大量の吐血をするのが理解できてしまっただ。

「あゝ、な・る・ほ・ど。確かに可愛い寝顔ね」

「ええ、まったく……………ってシルヴィア、大丈夫なの!？」

「なにがよ?」

「駄目な」人間はもとより、「普通の」人間でも多大なダメージを喰らうエリカの寝顔スマイルを見てまったく堪えていない様子シルヴィアにフィアが信じられないという表情をする。

「と、ともかく、こいつらをヴァルト団長に突き出しましょう。ほらカメラ」

「あ、すまん」

「駄目な」人間に分類されてしまった女性騎士が持っていたカメラをフィアが拾うとゾーンに投げ渡す。受け取ったゾーンはすぐさまテープを抜き取る。カメラを扉の外に投げ出すとありあえず手近な騎士の肩に担いで外へ運び出す作業に入る。

「その辺に縛って放り出しとけば後はヴァルトがやってくれるわよ」
「了解」

「ふあ、よく寝ました……、どうしたんですか、フィアさん？」

エリカが気持ちよく目を覚まして部屋を見渡すと、壁にもたれてぼんやりとしているフィアが視界に入った。手には真っ赤になった雑巾を持って頂垂れている。そして何故かその隣でシルヴィアが全く同じ格好をしていた。

「なぜにシルヴィアさんまで……ってなんか床が湿ってるし、あれ、こんなにこの部屋の床赤っぽかったでしたっけ？」

とりあえず立ち上がってフィアとシルヴィアの前でうずくまり、フィアの顔を覗き込む。

「あ、エリカちゃん、おはよう」

「あら、もうそんな時間だったの？ うっかり寝てしまったようね」
エリカの気配に気が付いたのか顔を上げる2人。徹夜で何かをして
いたようで2人とも目の下に隈を作っている。

「何かあったんですか？ それ、まさか血ですか？」

「え？ ああ、これ？ そういうんじゃないのよ」

「でも「大人の事情」ってやつよ」……はあ」

エリカには何がどうしてこうなったのか理解できない。ただフィア
とシルヴィアは慌てた様子で雑巾をゴミ箱に捨てると立ち上がって
大きく伸びをした。

「さてと、エリカ、朝の特訓をするなら修練場じゃない場所にして
おくと良いわ。今あそこは使えないだろうから」

「またわけの分からない事を……。それも大人の事情ですか？」

「まあね」

「……はあ、分かりました。今日は軽く城の中をランニングしてき
ます（少なくとも皆さんよりは年上なんですけどねえ）」

「なあ、ありゃあなんだ？」

1人の騎士が、修練場でもう1人の騎士に尋ねる。

「関わらない方が身のためだ。テルミが非公式な行動をする時はろくな事になりやせん」

対人用の訓練をする時に使用するカカシのような人形一つにつき、騎士が1人ずつ縛り付けられている。全員無様に鼻血を流してはいるが、意識は戻っているので近くにいる騎士に助けを求めている。だが、テルミがいる事なるべく関わりたくないという騎士が大半、誰も彼女たちに近づこうとはしない。

「なんでも、昨夜馬鹿な事をしていたらしいぞ」

「ジーンか、何か知っているのか？ …… 酷い顔だぞ、どうした」

2人の騎士が振り返るとフィアとシルヴィアのように隈を作ったジーンが立っていた。

「まあ、いろいろあってな。団長に伝えてきた。早々に撤去されるだろうな」

「それなら良いが……馬鹿な事か、相変わらず後先考えないな、テルミの奴は」

「まっただくだ」

2人はどこかで時間を潰そうと話しながら宿舎の中へと戻っていった。ジーンはしばらく喚き散らしているテルミたちを眺める。

「私はどうなつてもいいから、あのテープだけは返して!!」

「なんつう根性だ……」

テルミのジャーナリスト魂とでも言うべきものがそう言わせているのだろうか。それにテルミに追隨した騎士たちも似たような事を喚いているのだから手に負えない。

縛り付ける最中に目が覚めて、また思い出して吐血して、気を失つて、を繰り返されたおかげでジーンは数十人縛るのに一晩かかってしまった。

「まあ、収穫はあつたしな」

ジーンはポケットを探って小さなテープを取り出した。シルヴィアとの約束通り、彼女と自分の分は削除されているテープ。本来ならテープごと廃棄するべきところなのだが、ジーンはなんと廃棄したことに見せかけて拝借していたのだ。

「まさかボランティアで解説してたわけじゃないんだ。ま、エリカたちと共に見る事にしよう。カメラにはテルミたちがエリカの寝顔を見てぶっ倒れていく姿も映っていた。あれは爽快だったな」

カメラを持っていた騎士が早い段階で倒れたようで、カメラには次々と倒れていくテルミたちの姿が映されていた。まさしく痛快もの

だ。

「さて、一眠りさせてもらおうか」

「覚悟は出来ているだろうか？」

「煮るなり焼くなり、好きにするが良いわ」

「そうか、ではO H A N A S H Iと行くこうか」

「え、ちょ、団長の5時間にも及ぶそれだけはっ、それだけはイヤ
アアアアアアッ！！！！！！」

「エリカの寝顔……まさしく天使ね」

結局、バーバラだけが良い思いをしたというのは、また別のお話……。

番外編 テルミによるテルミのための画策（後書き）

エリカ（以下：エ）

：「はい、という訳で何故かこのような形になってしまった後書きです」

ジーン（以下：ジ）

：「理由が分からん。そもそもこういうのは作者が自分が書いたキャラと会話するという妄想をして楽しむものだろう。作者がいなのはどういう事だ？」

ファイア（以下：フ）

：「出たくないそうよ。キャラのイメージ壊したくないって。ぶっちゃけチキンだから読者の反応が怖いのよ」

エ：「どうでもいいですけど。で、何をやるっていつんですか？」

ジ：「うむ、俺もそれが知りたい。俺の出番を増やす相談なら万々歳だが」

フ：「安心して、多分そうじゃないわ」

ジ：「そうか……」

エ：「あ、本気で落ち込んでますね」

フ：「そりゃあ、プロローグでまさしく主人公、的な扱い受けてるのに、いつのまにか空気だものね。ジャックがほとんど出番奪って

るし」

エ：「ちょ、フィアさん、ジーンさんが地面にめり込んでます！」

ジ：「いいんだ。どうせ、俺は、俺は……」

エ：「……これ、正直作者が上手くキャラを操作出来てないってことですよね？」

フ：「正確には、作者が『某剣道漫画のように女性には優しく、男性には厳しく』という言い訳の下、キャラを動かしているのよ。ま、私の出番が減るわけじゃないから良いけど」

エ：「どうも、この場合は作者の思いが吐露される場のようですね……ってジーンさんがついに見えなくなっただんですけど!?!」

フ：「大丈夫よ、死にゃあしないわよ」

エ：「それはそうと、いつものメンバーならどうしてジャックさんがいないんですか？」

フ：「そりゃあもちろん、省略したらジーンかジャックが分からなくなっちゃうからよ。名前を考える段階で後先考えなかったからよ」

エ：「そう言えば、あたしたちの名前の由来と違ってあるんですか？」

フ：「ああ、一応、由来はあるらしいわ。考えなしというわけじゃないのね。」

エリカ 作者の知り合いから（承諾云々は一切なし）

任）
ジーン 映画「アポロ13」よりジーン・クラント（飛行主

ジャック 映画「アポロ13」よりジャック・スワイガート
（飛行士）

ファイア 自動車やバイクの開発などをしているフィアロゲル
ープの「ファイア」から

以下略

……、エリカだけ扱いが雑ね」

エ：「……いいですよ。あただけ日本名だったから想像はついて
ましたから……と、ヒナさんやムラミツさんは？」

フ：「ええと、ヒナの名前は日本古典落語の雛鰐から来ているそう
よ。作者はあらずじしか知らないそうだけど。ムラミツさんは名刀
『大般若長光』の作者である忠崎村光宗吉長岡船正から来ているそ
うよ」

エ：「……なぜそんな所から……」

フ：「ほら、よくあるじゃない？ 設定だけ無駄に凝って結局あん
まり関係なくなっちゃうってやつよ。まあ、刀繫がりだったのは良
い事だけだ」

ジ：「ムラミツさんに関しては、人物よりも先に刀に出会ったみた

いだな。漫画『銃夢』で『大PANNYA長光』という剣に会ってググったらしい」

エ：「復活しましたか。とはいえ、結局は偶然の産物でしたか」

フ：「それを言うなら、ヒナの名前だってそうね。落語に興味がほとんどない作者なんだから。落語家は好きらしいけど」

エ：「一番好きなのは歌○師匠だそうです。あ、誤字じゃなくて伏せてるんです」

フ：「伏せてないわね……」

ジ：「笑○いっつも見てるもんな」

エ：「ていうか話がずれてますけど?」

フ：「いいのよ、どうせ何の目的もなくやってるし」

エ：「そうですか、それじゃ名前ネタをさらに突きますか……。」「アポロ13」好きですね」

フ：「トム・ハ○クス主演の映画、実はあれ、船長のジム・ラベルご本人も登場していたらしいな」

エ：「ええ、っと見てない方に言うのもなんですのでここはスルーで。ジャックさんの名前の由来の方は……ベーコン、美味しそうです」

フ：「ちょ、食べちゃダメよ。最近では『X MEN』のセバスチ

ヤンショウね。あの人を皮肉ったような笑みは好きだわ」

エ：「ま、あたしたちの思考は全て作者が作ったものですから、あたしたちの好み」作者の好みになるわけですが」

ジ：「それを言ったらおしまいだろう」

エ：「むう、やる事もないのです。あゝ、もしかして今回あたし初めて脇役に回りました？」

フ：「そうね、ほぼ台詞なかったし、あまり出番がなかった人たちへの救済策と考えるべきかしら？」

ジ：「その対象に俺が入っている気がするのには気のせいかな？」

エ&フ

：「」「」気のせいじゃないと思います（思っわ）」「」

ジ：「orz」

エ：「そうだ、結局あの赤いシミはなんだったんですか？」

フ：「……………知らぬが仏よ」

ジ・「orz……あれ、俺放置？」

第49話 お姉ちゃん宣言、どっしてそっなたし…(前書き)

相変わらず、適切なタイトルですww

ではでは、ごじね

第49話 お姉ちゃん宣言、どうしてそうなったし…

「あら、今日は私の方が早かったみたいですね」

夜、もはや行きつけの店に行くかのような気持ちで城を抜け出してあの切り株の所へ行くと、ティティが夜空を見上げていた。

「とりあえず、誰もいない場所に少女が1人いるというのは褒められる行為じゃないですよ、ティティ様」

「大丈夫、あなたがすぐに来るって分かってたもの、姉さん」

「……はい？」

最後に付け加えられた理解不能な単語に、聞き返さずにはいられなかった。

「あ、あのティティ様？ なにやら聞き捨てならない妙な単語が聞こえてきたのですが……？」

まさしくその問いを待っていたのだらう。ティティは切り株から立ち上がってエリカの前に立つ。その表情は悪戯心をくすぐられた子供そのものである。

「私決めました。エリカ、私はあなたを『姉さん』と呼ぶことにします」

「いや、あたしの意志は無視ですか？」

血筋的にも、生物学的にも、世界の常識的にもエリカが「姉さん」と呼ばれる理由が分からない。そもそもなぜそう呼ばれなければならないのかも理解できない。

「別にいいじゃない、2人だけの時だけで良いから、ね？」

「ね、じゃないですよ。どうしてそうなるんですか」

自分が仕える王の娘に対して言うべき言葉ではないのは分かっているのだが、何故か「姉さん」と呼ばれるというのが悪い風にしか作用しない気がする。

「むう、文句は却下です。それはともかくとして、今日は聞きたい事があつてここに来たんです」

「聞きたい事？」

姉呼ばわりの件はともかくとして、用があるのならそちらを先にすべきであろう。仕方なくエリカも話がすり替えられるのを黙認してティティの話しに耳を傾ける。

「まあ、正確には私ではなく、父上から、なんですけどね」

「あゝ、陛下からですか」

なんとなく聞かれるであろう事に見当がついたエリカは曖昧な返事を返す。

「団内選抜大会での一件は私も父上も目の前で見ていましたから、ヴァルト様からの報告を受けずとも大体の事は聞いています。その件で幾つか聞きたいことがあつて今日はここに来ました」

当然と言えば、当然のことだ。部下^{エリカ}が見たこともないような力を持

っているのだ、気にならない方がおかしい。

だが、そうなると疑問が残る。

「陛下ともあるう者なら、あたしを呼びつけることくらい容易いと思うのですが……？」

こんな面倒な方法を取らなくても王であるアーサーならば一介の騎士を呼びつけることくらい苦もないはずだ。気になっているのだから、それこそ自分の耳と目で確かめたいはずだ。

「ま、内容が内容ですからね。大丈夫です。この会話は父上に転送されていますから問題ないです」

ティティはそう言うと小さな水晶玉を懐から取り出してエリカに見せた。夜の暗闇の中でも自ら淡い水色の光を発していて、うっすらとエリカとティティの顔を照らす。

『このような形ですまない、騎士エリカ。出来れば直接話がしたかったのだが、できれば他の者に聞かれたくなかったのですね』

水晶玉の中の水色の光が揺らぐと、アーサー王の声が響いてきた。ティティが水晶玉に向かって呪文を唱えようと水晶玉が宙に浮き、ティティは切り株にちょこんと座って水晶玉とエリカの方を眺める。

『私が抱いている疑問と同じものを娘も抱いている。君さえ良かったら、我々の疑問を解消してもらいたいのだが』

「王様なんですから、頼まないで命令した方が良くないですか？ 聞きたい事の内容にもよりますけど、話せる限りの事であれ

ばお答えします」

水晶玉が話している事に関して言えば、別段驚きはない。衝撃に弱いから繊細な作業があまり得意とは言えない龍はあまり使用しないが、ヒトが使っている事は知っている。実際見るのは初めてだが、相手と会えない時などには便利だ。

エリカが自分の主君に対する言葉とは思えないような事を言うと、水晶玉の中からくぐもった笑い声が聞こえてきた。夜中なので随分と笑いを堪えているようだが、こちら側にははつきりと笑っているのが分かる。

『くくつ、宰相たちでもそこまでは言わんたらうな。まったく、君は礼儀というものを知らないのかね、騎士エリカ？』

戒めてはいない、むしろ面白がっている。どうも、以前会った、と言っても主従の誓いを立てた時だけが、あの時の厳格なイメージとは随分とかけ離れている。いわゆるオフ状態なのか、話し方はかなりフランクだ。

「ついでに言えば、エリカで良いですよ、騎士ってつけられるのあまり好きじゃないので」

『そうか、ではエリカ、君は一体何者なのかな？ 言い訳なら聞きたくないから、結論だけ聞かせてもらいたい』

瞬時に空気がピリツとした緊張感を持ったのが分かった。チラリとエリカがティティの方に視線を向けると、ティティも質問の意味を理解した上でエリカの答えを待っているようだ。

(ばれそうだったのが、ついにばれちゃいましたかね)

ティティは星巫女と呼ばれる、エリカからしてみれば「よく分からないがとにかくすごい」事を行っている。そのせいも、会ってすぐにエリカの他の人との違いを見抜かれてしまった。1週間前の試合でのエグゼ・リベラで違和感が確信に変わったのかもしれない。

だが、できれば今ティティたちに知られるわけにはいかない。

明日行くエオリアブルグでのドラゴンスレイヤーの大会、観戦にはティティが来るという事はすでにエリカも知っている。

もし、クライムの言う通り、エリカを狙う何者かが動きを見せた時、エリカの正体を知っているという理由だけで巻き込まれる可能性がある。エリカにしてみれば、自分以外の誰かを巻き込むのは本意ではない。

「あたしは、エリカというちっぽけな存在ですよ。それ以上でも、それ以下でもありません」

だから、あえてアーサーが、ティティが求める答えとはかけ離れた回答をする。そもそも、聡明な2人のこと、答えは既に出ているだろう。ここで聞いているのは、あくまで確認の意味合いが深い、とエリカは考えている。

『……その答えで我々が納得するとは毛頭思っていない口調だな。では言い方を変えよう、君は我々に正体を隠してまでしなければならぬことがあるのだね?』

質問というよりは、やはり確認、と言った感じだ。答えが「はい」

か「いいえ」しか用意されていない。

「……はい」

『それは、我々に危害が及ぶものなのかね？　そうであれば、我々は君をこのまま野放しにはできない』

さすがは国を統べる王、国のためなら娘の友達であろうと容赦はしない、という思いが言葉に滲み出している。ティティは少し悲しそうな顔をしているが、それを見てエリカは苦笑してしまった。

「ご安心を、陛下。少なくともあたしがやりたい事は誰にも危害を加える事はないはずです。ですが、外的要因によって事態が悪い方に傾く可能性は大いにあります」

「っ！　それはどういう意味、姉さん」

『ね、姉さん！？』

アーサーが物凄く驚いた声を上げている。飲み物でも口に含んでいれば10メートルは嘔き出しているだろう。

「ティティ様、人前では言わないって約束じゃ……」

「父上は人前に入りませんよ？」

『ま、まったく、我が娘ながらやる事が……。それはともかくとして、外的要因とは何のことかね？　よもや我々を指しているのではないな？』

「大丈夫です、それはないですから。あたしはやる事やったらここ

をさっさと出てきますからご安心を」

少し乾いた笑みを浮かべてそう言うと、水晶玉の向こう側でアーサーが黙り込んだ。少なくとも、この事に関して嘘は言っていない。ここで嘘を言っても良い事はない。

「姉さん、どこかに行っちゃうの？」

「正確には家に帰るのよ。家に帰るのだから、また会いに来ることはあるわ」

龍に戻れば、もはやここにこうして来ることは出来ないだろう。

だが、エリカ自身はここに戻ってきたいと思っている。すでにここは第二の我が家、ここで出会った全ての人たちには感謝してもしきれないだけの恩がある。それを返したいという思いもある。

「だから、帰ってくるためにも陛下には1つお願いがあるんです」

『……………何かね？』

向こうには今のこちらの状況が見えているのだろうか？

どこか怒りが滲んでいるような声で返事が返ってくる。今の状況はというと、何故かティティに抱き付かれている。そして上目遣い、涙目で「行っちゃうの？」と言われているのだ。アーサーの声に含まれる怒りは、むしろ嫉妬にも感じられる。

(ティティ様に甘いって、そういう意味も含まれてるんだろうなあ)

ここに本人がいないことに感謝した。いたらきつと直視出来ない目

で睨まれていた事だろう。そして今もアーサーは確実に自分用の水晶玉を睨み付けているに違いない。

「え、ええとですね、ドラゴンの討伐を止めてもらいたいんです」
気を取り直してそう言うと、ティティの顔が凍りついた。きっと、「あたしドラゴンですよ」と言われるのと同じ効果だろう。エリカもそのつもりで言った。

『……それは、我々の問いに対する答えと受け取っても良いのかな？』

そう聞かれると、エリカは少し悪戯っぽい笑みを浮かべてみせる。

「フフツ、あたしの言葉をどう受け取るうが陛下の自由です。ですが、それが成されないとあたしは帰ってくる事が出来ないのです、ぜひともお願いしたいです。あたし『たち』はあなた『がた』との不和を望んではいませんから」

ぶっちゃけると、「俺たちはお前らに何かされない限り干渉しないから、そっちも干渉すんな」と言うのが龍のヒトに対する考え方だ。

だが、エリカは少しその考え方からずれている。それは自分でも自覚出来ている。エリカはヒトと付き合う事で、ヒトの良い面も悪い面も見てきた。時に憤り、時に怒り、むしろそちらに掛かる比重が大きいようにも思えるが、それを遙かに超えるだけの良い面をここ1カ月の間にこの目で見てきたのも事実だ。

エリカとしては、龍とヒトは共存し、共生し合えると考えている。だが、双方にその準備が出来ていないし、今の段階でどちらもそれ

を望んでいないのが大多数だ。エリカはそれを変えたい。

幸いにして、龍の方はヒトに歩み寄る用意はある。というよりはエリカがそうさせる腹積もりだ。イクシオンに頼み込んででもやり遂げる気ではある。

だが、ヒトの方は？

こればかりはヒトに任せる他ない。それが成った時、エリカはここに帰ってくる事が出来るだろう。

『……私を感じていていたエリカという人は、真面目で、丁寧で、他者に優しいという性格を持っている。君たちが皆そうである事を祈っているよ』

アーサーがそう言うと、どうやら向こうの方から転送を切ったのか水晶玉から輝きが消える。

「言質は取れませんでしたか……」

口約束にこだわるつもりはなかったが、やはり一国のトップからそういう言質が取れると取れないでは話が大きく変わってくる。だが、やはり用心深くなるのは当然の事、アーサーは明確な答えを残さなかった。

「姉さん……」

ここまで早く適応する彼女も彼女だ。

アーサーとの会話が終わった事でティティに意識を回せるようになる

ったエリカはティティのエリカに対する呼び名の定着ぶりに感心半分呆れ半分だった。

「まあ、当分はあなたのお姉さん』になってあげられますから、絶対に人前では言わないでくださいね？」

そう言うとティティは満面の笑みを浮かべた。そういう所は、本当に年相応の少女だ。

「やっぱり、姉さんが『災厄』なはずがないです」

「災厄とは、また随分な言われ方ですが……ああ、あの予言ですか裏でなんと言われようが一向に構わないのだが、何故そうなったのかには多少興味がある。そんな思いを込めて言ってみると、ティティが顔を上げてクスツと笑った。

「私は星を視て未来を知ります。森から黒い影が降り立ち、『慈悲』と『災厄』がやって来る。あなたは『慈悲』に違いありません」

「……『慈悲』が『災厄』を連れてくる、という事ですか。どちらにも当てはまらないような気がするんですが……」

『災厄』になりたいとは心から思わないが、『慈悲』になるような事をしている記憶はない。黒い影がエリカを表しているのは間違いないだろうが、予言とか神託とか呼ばれる類の物はやはり捉え方が複数あるという厄介な物のようだ。

エリカが自身なさげにそんなことを言うと、ティティが真っ向から否定してきた。

「姉さんは『慈悲』です！ 誰が何と言おうと、これだけは確かです！」

「いや、でも結構騎士団の人もボコボコにしている気がするんですが……」

「そういう事を言っているんじゃないありません！」

ポカポカ、という可愛い音が似合う小さな拳でティティがエリカの胸元を叩く。

「冗談です。では、『慈悲』にふさわしい仕事をしないといけませんね」

ティティの返事を待たずに彼女の腰に手を回すと、ひょいと持ち上げて切り株に座らせる。そして切り株の反対側にティティと背中合わせになるように座る。

「何を……？」

返事はしない。

代わりに返すのは歌。

夜の星空の下、この時に最も似合うであろう歌だ。

夜の澄み渡った空気に、淀みのない歌声が広がっていく。

ヒトの声帯で歌えない部分が無いと気が付いたのは結構最近だ。以前歌った歌と違い、この歌は口ずさむように歌う。歌詞と言えるような部分はほとんどない。

だが、それだけでも心癒されるのだ。それが目的で作られた歌なのだから。

「これは……、子守唄……？」

そう、幼い子供を夢の世界へと誘うための歌。

エリカ自身が聞いていた、龍の子守唄だ。不安になった時は、これを聞きながら寝るといのが当たり前だった。まさか、自分が誰かに聞かせるような立場になるとは思ってもいなかった。

この歌は、ティティに向けての物でもあり、そして、もう1人、ここにはいないが聞こえているはずの、もう1人に対する歌でもある。

「綺麗……温もりがある歌……」

ティティはそつと目を閉じ、エリカの曲に耳を澄ませた。

歌が聞こえる。

それに気が付いて目を開けてみると、月明かりの下、開けておいた窓の外から綺麗な歌が風に乗って入ってくる。

「誰かを、慰めているんですか、エリカ？」

ヒナは窓の外を見渡すが、残念ながら見える範囲に声の主はいない。今日、ヒナは正式にこの騎士団の仲間となった。とはいえ、前線に出るような騎士ではないので主従の誓いは立てていない。まあ、この国にいる以上王に従うのは当然ではあるのだが。

そして、それに伴って部屋替えが行われた。

この宿舎が初めてという事もあり、ヒナはフィアと同じ部屋になった。それに伴ってエリカは1人部屋を貰う事になったのだ。とはいえ、ヒナの部屋の隣だからエリカの荷物は移動させられていない。あくまで寝るためだけの部屋という扱いらしい。

だから、今もヒナの寝ていたベッドの隣ではフィアが眠っている。明日に備えて今日は早く寝たのですでに深い眠りの中、ヒナが起き上がった程度では起きる気配もない。

「エリカ、あなたの想いは受け取りました。私とて、いつまでもうじうじしている訳にはいきませんからね。父様の意志を継ぐために
も……」

ヒナは下唇を軽く噛む。涙が止まらない。

だが、少なくとも壁は乗り越えられる。

乗り越えて、さらに歩み出すだけの意志はある。

「ここに連れてきてくれて、ありがとう、エリカ」

ヒナは聞こえてはいないと分かりながらも窓の外に向けてそう呟くと、カーテンを閉めて再びベッドに横になる事にした。

第49話 お姉ちゃん宣言、どうしてそうなったし…（後書き）

あゝ、脳内がまだ番外編の可笑しいな空気から抜け出ていないので難産です。

さっさと元に戻しておきます。

ではでは、また次回。

感想などお待ちしております。

第50話 エオリアブルグまでは3秒と少し（前書き）

50話ですよ、50話。

私の処女作が50話とちょっとだったので、間もなく自己記録更新なのです。字数でとっくの昔に記録更新はしているのですが、やっぱり話数が伸びるのは嬉しい限り、……ていうかここまで書く事が出来ている自分がおかしい。

期末試験中も書いていたし、夏休みも特にやる事がない日はPCに向かって小説書いてたし、あれ、私もう十分駄目かな？ なんて考えております。

創作意欲が湧いていたからしょうがないですけど、ポチポチ私の脳内では終わりを詰め始めております。と言ってもまだ半分、終わらないと思うのですが、ぜひとも完結するまでお付き合いして頂けると嬉しいです。

完結するかは、時と場合によりますけどねw

ではでは、本編をどうぞ

第50話 エオリアブルグまでは3秒と少し

翌日、朝食を終えた後、大会に出場する騎士、応援に行く騎士、その他諸々の目的を持つ騎士たちが城の前、丁度城の巨大な門がある前に集まっていた。

そしてその周囲を囲むように見慣れない服装の男女が立っている。エオリアブルグから来た魔法使いだそうで、この城にエオリアブルグとの間を繋ぐ転移魔法陣の構築と試運転のために来ていたそう。すでに数人単位での転移は成功しているらしく、時空の狭間に放り出されるような事はないそうだが、実際に出発する騎士たちの中には不安な表情をしている者もいる。

「随分とたくさん行くんですね」

大会に出場する騎士だけでなく、数多くの騎士が魔法陣の中に立っているのを見て、エリカは周囲を見渡しながら隣にいたゾーンに話しかけた。

「ま、大会だけが目的じゃない奴らも混じってるからな。向こうの連中と久々の再開をしたい奴や、新たな出会いを求めている奴、あと勝負で負けて全員分のお土産を頼まれてる奴もいるぞ」

「なんとまあ……」

妙にテンションが低い者たちがそうなのだろう。1人ではなく数人それらしいのが見受けられる。

「全員、傾注!!」

雑談に花が咲いていた騎士たちにヴァルトが一喝すると、瞬時に私語が消え失せる。ヴァルトは行かないため魔法陣の外に立っているが、声は城壁の反対側にも届きそうだ。

「まずは大会出場の騎士諸君、我々の代表として正々堂々、自らの持てる全ての技術をぶつけてくる事を祈っている。その他の諸君も、向こうでも粗相が無いように常に気を緩めずにくれ。祭りだ祭りだと騒ぐのは構わんが、羽目を外しすぎて国の汚点にならないように」

全員が黙ってヴァルトの言葉に耳を傾ける。

「よし、諸君らと共に姫様も参られる。騎士団として、万が一の場合には備えておけ、以上!」

城の内部へと通じる門が開き、数人の近衛兵に守られてティティが姿を現した。その瞬間その場の全ての人が膝をつき、頭を下げる。

「皆さん、しばしの間ですが、護衛をお任せします」

ティティは作つたような笑みを顔に貼り付けて静かにそう言った。顔は下げているが、それでも視界の上の方に少しだけ見えるティティは、昨夜の「姉さん」と言ってくるティティではない。

ティティの護衛は、転移魔法で移動した後、エオリアブルグの近衛兵が任務を引き継ぐまでだ。国賓には最高の待遇というわけであり、彼らとしてもおろそかな待遇は出来ない。向こうでの各国からの来賓の護衛は全て大会の開催国が責任を負うというのは、そのため

ある。

「姫様、用意は整っております」

「はい、ヴァルト様、あなたもご苦労様でした」

「はっ」

そう言うとヴァルトは立ち上がり、一礼して魔法陣から少し離れる。ヴァルトが立ったのを見て全員が立ち上がり、ティティが魔法陣の中央に入れるように自然と通り道が作られる。

ティティはその道を通って中央にたどり着き向き直ると、一瞬エリカと視線を合わせた。

ほんの一瞬だったが、姫という地位の少女ではなく、ティティという少女の表情になったティティは小さく頷き、エリカも頷き返す。

昨日、別れ際にヴァルトからほぼ丸投げされてしまっていたブラゴシユワイク第一王子との面会、それに協力を頼んだのだ。ティティは「漫然と観覧するよりずっと面白そう」と二つ返事で快諾してくれた。そういう所は、まだまだ少女であるようだ。

そのことは先ほどヴァルトに伝えてある。ヴァルトはそれを聞くと諦めたかのようなため息をついていたところを見るに、ティティの自由奔放な行動は今に始まった事ではないようだ。

エオリアブルグでこの、下手をすれば暗殺と誤解されてしまうような事をするというのは知っているのは、エリカ自身とティティ、バーバラぐらいだ。アールドールンに残る者としてはアーサー王、ヴァルト、クライムくらいだ。バーバラにはエリカから伝えてあるから、向こうで突然エリカが姿を消しても騒ぎにならないよう取り計

らつてくれる予定だ。

「では、発動させますので、騎士の皆様はその場を動かないようにお願いします。下手に動かれると身体の一部だけが別の所に転移するという事もあり得ますので」

にこやかに恐ろしい事を魔法使いの男性が言い放った。何人かの騎士が笑うが、冗談に聞こえないほど現実味のある事だけに引きつった笑みを浮かべている者が大半だ。

魔法使いの男性は全員がその場を動いていないことを再確認すると仲間同士で死角にいる騎士も大丈夫か確認を取る。そしてそれが全て問題なく済むと、魔法陣に向かって手をかざした。

それを合図に魔法使いが全員魔法陣に向かって手をかざす。淡い光を放っていただけの魔法陣が一気に輝きを増し、視界が真っ白になるほどの明るさになる。騎士の中に同様が走るが、一部の微動だにしない騎士たちが冷静さを保つことでその場を動くような愚者を生み出さない。

「では、皆様の御武運を、お祈りしております」

エオリアブルグの者に言われるとどうも嫌味に聞こえてしまうのだが、男性は心の底からそう思っていたのだろう。幾人かが頷きを返している、一気に視界が真っ白になり、身体が宙に浮く感覚に襲われる。

浮かんでいるというよりは、襟首を何かに思い切り掴まれて上空に引つ張り上げられているという感覚に近い。視界はないが、物凄い勢いで身体がどこかに向かって飛んでいるように感じられ、次の瞬

間には地面に落とされるかのように空間に放り出される。

「のわっ!?!」

背後から声が上がって振り向くと、着地に失敗した騎士が今まさにこけようとしていた。仲間がそれを支えて情けない醜態を晒す事だけは避ける。

「姫様、大丈夫ですか？」

「ええ、無事到着したようですね」

ティティの声にエリカは周囲を見渡した。

そこはついさっきまでいたアールドールの城の景色とはかけ離れていた。

巨大な尖塔が目の前にそびえ立ち、魔法陣の周りには見慣れぬ軍服を着た兵士が立っていた。尖塔までの道は整地されていて、左右には緑が生い茂る木々がある。

「ここが、エオリアブルグ……」

エリカがポツリと呟くその言葉に、全員が自分たちが今いる場所を再認識したのはほぼ同時であった。

「長旅……、でもないですね、ようこそ我がエオリアブルグ首都、グリーンベルへ」

指揮官と思しき女性が歩み寄ってくると、一番先頭にいたバーバラに話しかけた。

ちなみに、昏間ではあるがバーバラはそう言う意味で無防備だ。日の光を遮るような物は持ち合わせていないため少し眩しそうな表情をしているが、それ以外は全くというほど変化がなく、これなら吸血鬼と言われても分からないほどだ。

「あなたが指揮官？　という事は我らがお姫様の護衛という事でよろしいかしら？」

バーバラが手を差し伸べると、女性もその手を握り返す。

赤い髪は兜でほとんど隠れているが、凜々しい表情は指揮官のそれにふさわしいように思える。腰にはバーバラの剣と同程度の大きさの剣が吊るされており、身に着けている赤を基調とした甲冑と同じデザインが施されている鞆と相まって美しさと精悍さを兼ね備えた姿をしている。

バーバラの問いに女性は小さく頷くと鎧の上から胸に手を当て、少し頭を下げた。

「私はエオリアブルグ近衛隊を束ねるセラと申します。ティティ王女は我らが命を賭してでもお守りさせていただきます」

「頼もしいわね。だけど挨拶する相手が違うんじゃないかしら……」

バーバラは後ろを見て身体を引くと、セラの目の前にティティが姿を現す。

一瞬、セラたちエオリアブルグの近衛兵が硬直したが、すぐに我に返って膝をつく。国は違えど、やはりこういう所は同じだ。

「ご苦労様です、セラ隊長。皆様はもう到着されているのですか？」

「はっ、ブラゴシユワイクからの大会出場者、来賓の王族、貴族の皆様は既に到着されております」

セラは顔を上げると、姿勢を正して仲間に小さく合図を下す。

「大会の全行程が終了するまでの宿へご案内いたします。王女様はグリーンベル城にて、代表参加者も同様、その他の皆様は城下町の宿をご用意させております」

同じ騎士でも随分と扱いに差があるな、とエリカは思ったが、周囲の騎士たちはさも当たり前のように話を聞いている。

「大会に出もしないのに城に泊らせてはくれないわ。それに遊びに来ている人も多いから、宿代くらいは皆持ってきてるのよ」

フィアが小声でエリカの疑問に答えをくれる。

「という事は、ブラゴシユワイクの人たちも城にいるわけですか？」
「そういう事になるわね……」

エリカの言わんとする事を理解したファイアが少し声のトーンを落としてそう言った。

どこかで出会いでもしたら、エリカとしては冷静な対応が取れる保障はない。

セラが何か指示を飛ばすと、近衛兵が二手に分かれ、宿に泊まる騎士たちとティティ以下城へ向かう者たちそれぞれの案内に回った。ファイアの他出場しない騎士たちも数人エリカたちと同じ方向に向かうが、治療を担当する騎士たちは出場する騎士と同等の扱いを受ける事になっているらしい。

尖塔がある方向が城へ、反対側が町に通じる道らしく、騎士団は二手に分かれる事になった。

セラを先頭にティティ、その後ろにバーバラと続いていく。

セラはティティの話し相手になっていくらしいが、ティティが気軽に話しかけているせいか随分と対応に苦慮しているように思える。正確には「私のような一介の騎士が話して良い相手ではないのですから」と顔が言っている。

だが、ティティはそういう事を気にするような性格ではない。

その様子を後ろから眺めていると、ジーンがエリカの隣に来てセラ

を指差してきた。

「あの隊長、ドラゴンスレイヤーだ。前回も随分と大暴れした歴戦の騎士、どこかで当たるのは確実だから今のうちに得物を確認しておくといい」

「ちなみに、事前情報だとあのセラって隊長は大將だ。おまけにエオリアブルグ代表唯一の女性騎士だそうだ」

「ジャックさん、どこからそういう情報を仕入れてるんですか？」
「もちろんテルミ経由さ。そういう事に関してはあいつは一流だからな」

エリカは2人の情報を聞いた後、再びセラに視線を戻す。ティティとの会話で多少なりとも狼狽はしているが、周囲への警戒は怠っていない。ここはいわば彼女たちの裏庭、まずティティを狙ったの攻撃などあるはずはないのだろうが、万が一に備えるその姿勢は数々の修羅場を潜り抜けてきたからなのだろう。

目の前に見える尖塔に近づくと門が姿を現す。

左右にいた兵士が姿勢を正して一礼する。セラが小さく頷くと門が開かれ、一行は中に招き入れられる。

アールドールンの城とはまた違った趣のある城内だ。尖塔は高い城壁で囲まれた中央にそびえ立っていた。地面付近はステンドグラスが壁を独占しているような場所もあり、芸術性にも富んでいる。

普通の人なら、その光景に見とれるだろうが、エリカの感心はむしろ城壁の内側、広い庭園のようになっている場所に時々見かける人

影にあった。

「何か言いたそうな顔をしているわね」

フィアが「言いたいことは大体想像つくわよ」という表情をしている。

「ティティ様は国賓なんですよね？　なら、護衛の騎士じゃなくてもっと偉い人が出迎えに来るものじゃないかな、と思ひまして」

周囲を見ても、人影の中にはこちらにほとんど興味を示していない人もいる。どう考えても礼儀をわきまえていないとしか考えられない。

「まあ、私たちからしてみればそう見えるわよね。だけど、今回はちょっと例外なのよ」

「例外？」

フィアが少し面白くなさそうな顔をする。セラに聞こえていないことを確認して声を小さくするとフィアは背後を指差す。それが意味しているのは先ほど到着した魔法陣の場所であろう。

「あれ、何十人っていう規模でやるのはこれが初めてらしいわ。つまり、何かしらの不都合があった時、大衆の前じゃ言い訳のしようがないって事なのよ。多分、ブラゴシユワイクの連中も同じような待遇だったと思うわ」

国賓を大衆の面前で、自分たちの責任で「不都合」にあわせてしまったともなれば、国際問題などというレベルの話ではなくなる。

「なんか、複雑ですね」

「それが政治よ。大会が始まるのは明日、表向きには明日到着した
という設定らしいわ」

「モルモット実験体みたいで嫌です」

成功すれば一躍実用化、国賓のお勧めともなれば各国でも需要は増加、失敗しても自国の人間に被害はない、しかも目撃者が少なければ何とでも言える。

「エオリアブルグは魔法大国だから、ちょっとくらい危ない魔法なんて山のように作ってるわ。今回は成功して良かったと思うしかないわね」

「歩いてくるよりよっぽど楽だったのも事実よ。あまり気にしない方が良いわよ」

話を聞いていたバーバラが顔を半分ほど後ろに向けてそう言うてる。

（そんな事で死にたくないんですが……）

終わりよければ全てよしなどと言うが、その過程に死ぬ可能性があるのなら話は別だろう、とエリカは心の底から思った。

城の中は煌びやかな装飾が様々な所に施されており、生活感をほとんど感じさせなかった。

ティティはセラたちに護衛されて、エオリアブルグの現王の所へ挨拶に行き、エリカたちは大会期間中寝泊りする部屋に通された。

「……とりあえず、広すぎます」

大会出場者は一人に一部屋割り当てられていた。それも以前宿場町で泊ったような、そして騎士団の宿舎の部屋よりもはるかに広かった。部屋の広さだけで考えても、宿舎でいうと5人部屋かそれ以上だ。とてもじゃないが1人に割り当てるような広さではない。どうもその考えは同じような部屋に泊った全員に共通していたらしく、1人ずつ部屋に案内され、部屋の扉が開かれた時、全員が唾然としていた。

エリカは自分の番が来るまでその意味がよく分からなかったが、今なら痛いほどよく分かる。

（おまけに……）

「本日より大会期間中、エリカ様の部屋を担当いたしますユーリと申します。ご用の際は何なりと申し付け下さい」

一部屋に1人、いわゆる使用人が割り当てられているのだ。

濃い紫色の髪の毛を背中まで伸ばし、白いエプロンドレスを着こなしたユーリは深々とお辞儀する。

「いくらなんでも、一介の騎士にこれは……」

「国を代表されている方々には万全の状態で試合に臨んでもらいたい、という陛下のお気持ちです。遠慮をいりませんよ」

(やっぱり、敬語はこう、首筋が……)

エリカは小さくため息をつくとユーリに向き合う。

「せめて敬語を止めてください。年上の方に敬語を使われるのあんまり好きじゃないんです」

「それは出来ない相談です、私たちにとってこれが標準語ですから」

「……ならせめてもう少しフランクにできませんか？」

「まあ、その程度なら……。ではエリカ様、わずかな間ですが、よろしく願いますね」

またユーリが頭を深々と下げる。

これが、彼女の自然体だというのなら、それを曲げさせようとするのは彼女に対する侮辱になるだろう。エリカは諦めてユーリに軽く頭を下げると、とりあえず3人は余裕を持って寝られるであろう巨大なベッドに飛び込んでみる。

「むう、アレックスには劣りますがモフモフ……、ってユーリさん？」

人の気配が消えないのを訝しんで振り向くと、扉の横に人形のようにユーリが佇んでいる。

「何か御用ですか？」

「いや、もしかしてずっとここに……？」

「この部屋にエリカ様がいる限り御傍にいるのが私の仕事ですから」

「本当ですか……？」

それすなわち、常に監視されているということだろうか。

そんな事を考えると、落ち着けるものも落ち着けなくなるのだろうかと思ひ、この部屋に入って何日目かというため息をエリカはつく事になった。

第50話 エオリアブルグまでは3秒と少し（後書き）

今回は、移動回みたいな感じになってほとんど話が進んでませんでしたね、すいません。

さてさて、エオリアブルグという未知なる土地にて新たな人々と出会う訳ですが、いや〜、名前を決めるの面ど、じゃなかった大変です。

番外編でチヨロツとキャラの名前の由来のようなものを見せたんですが、あれはメインのキャラだからマイナーっぽいところを攻めたのです。

モブにそんな苦勞は掛けられませんww

いや、最悪「あの騎士」「あの男」で終わらせりゃいいんですがね。それじゃあまりにかわいそうだと思い、一部の例外を除いてはちゃんと名前を考えているのです。そこで役に立つのがウ〇キですね、とりあえず車の名前で調べりゃいいのが出るわ出るわ、あ〜、楽だこりゃ、最初からこうしておけば良かったなんて考えております。

でもまあ、車の名前を使うのは結構メジャー？ なんですかね、なので数人程度にとどめる予定。

とはいってもすでに手遅れが1人いるのですが……、え？ 誰の事か分からない？

今回初出の人って言えば分かります？ ええ、トヨタです、確か。

車好きな方が読者におられれば、「ああ、あれだな」ってなる名前が出てくるかもしれません。まあ、別に出てきたところで「こいつだよ！ こいつだって！」なんて言いませんけど。

そういえば、主人公は何かやらなきゃならないことがありましたね。さてさて、どうなる事やら……。

……ネタバレしてないですよ？ 以前 みたいな事書いて馬鹿な目に合いましたから、ちょっと心配……。ま、いつか。

ではでは、また次回。

ご感想などお待ちしております。

第51話 こちらエリカ、潜入を開始する（前書き）

あれ、どこかのリアルかくれんぼゲームみたいなタイトルになってしまった。

ではでは、どしどし。

第51話 こちらエリカ、潜入を開始する

盛大な式典、とはまさにこの事だろう。

国を挙げて開催された大会会場へと通じる道は人で埋め尽くされていた。歓声の中をブラゴシユワイクの騎士たちが民衆に手を振りながら歩いている。

エリカたちはブラゴシユワイクの少し前を歩いている。

まるでお祭り騒ぎだ。ジャックはまるで国の英雄のように手を振り上げて何かを叫んでおり、その隣でジーンが呆れたような顔をしつつも何も言わずにいる。こういう時は多少騒いでも問題ないのだろう。バーバラも何も言っていない。

とはいえ、バーバラは晴天の下を歩いている。あまり他の事に意識を回している余裕がないのかもしれない。そんな状態では試合で戦えるのか、と心配になってしまっただが。

「雲一つない晴天なんて聞いてないわよ……。いくら昼間でも外を歩けるとはいえ、これじゃストレスが溜まるわ……」

「ならそのストレス、試合で発散させればいいじゃねえか」

ジャックが「俺はそうするぜ?」と言ってくるが、そもそもジャックは昼間外を歩くだけでストレスが溜まるような人間ではない。冗談混じりで言っているのは間違いない。

「ジャックさん、バーバラさんが本気にしますから止よして下さい。
ほら、バーバラさんが黒い笑みを浮かべてるじゃないですか」

「フフフ、大丈夫よ、エリカ。殺すような真似はしないから。せい
ぜい100分の97殺して我慢するわよ」

「それは我慢しているに入らないしほとんど殺してるじゃないです
か」

「人生は厳しいものよ」

バーバラがいつものバーバラではない。

幸い、その後しばらくして南から雲が流れてきて多少日差しを防い
でくれたおかげでバーバラが暴走するような事はなかった。

大衆が道の左右を埋め尽くす道を進んでいくと、巨大なコロシウム
が姿を現した。修練場に仮設された時のあのコロシウムとは比較に
ならないほどの大きさだ。自国含め3か国の観客と要人を収容でき
るといっただけあって、曲がり角を曲がってその姿を見た時は息を呑
んだ。

「まるで要塞だな」

「アールドールンうちにも闘技場はあるけど、多分エオリアブルグには負けるわね」

ジーンが感心しながら闘技場を見上げると、フィアが外壁の装飾に
見とれながら口を開いた。

外壁には、人を模った彫刻が無数にあつた。剣を持った騎士や、杖を持った魔法使い、馬に乗った騎士など、どれ一つとして同じ形の物はなかつた。

道は真つ直ぐに闘技場へと吸い込まれており、大きなアーチの下をくぐると闘技場の敷地内に入る。闘技場もすでに人で埋め尽くされており、警備の兵たちが四苦八苦しながら闘技場内へと向かう列に大衆が流れ込まないように抑えこんでいる。

闘技場内、つまりこれから戦場になる広い荒野のような場所に入ると、一度見た光景が数倍になってエリカに降りかかつてきた。

まさに大地が揺れていると言つても過言ではない。数百とか、数千という規模の話ではなく、軽く万を超えるだけの人々が観客席に入っている。その全員が歓声を上げながら騎士たちを迎えているのだ、それがいかに物凄いものかは想像に難くない。

観客席の正面上方には国寶が座る特等席が設けられている。エオリアブルグの国章と思しき紋章が描かれた垂れ幕が掲げられており、その左右に、アールドールン、ブラゴシュワイクの垂れ幕が掲げられている。そしてアールドールンの垂れ幕の所にティティの姿があつた。その隣にはエオリアブルグの王が、さらにその隣、ティティの反対側にはブラゴシュワイクの第一王子であるう若い青年が立っている。

3人も拍手で騎士たちを迎えている。3人の左右には貴族であるう男女が10人前後いる。正直好印象な人物が1人もいない。必要以上に肥えている男とか、無駄にたくさん装飾のある服を着た女などばかり、一番の理由はその全員が騎士たちに視線を向けていないことだ。

そうなる理由は何となく想像がつく。中央のエオリアブルグの王はともかくとして、左右は王子と王女、自らの子供を嫁、婿に出して玉の輿を狙っているのだろう。この大会はお近づきになる手段であり、彼らには毛頭興味などないのだ。

エオリアブルグの王を正面にエオリアブルグの騎士団、シータス騎士団が、ティティの前にアクイラ騎士団が、ブラゴシュワイクの王子の前にブラゴシュワイクの騎士団、タロン騎士団が整然と並んでいく。

ざっと見た感じでは、平均年齢が一番若いのはどう考えてもアクイラ騎士団だ。未成年（1人は肉体年齢のみ）が2人いるアールドールンはどうしても屈強な騎士を束ねるシータス騎士団や、随分と無駄な装飾の多い鎧を身に纏っているタロン騎士団には見劣りするかもしれない。

（意外性とかでいったら間違はなく一番でしょうけど……）

ちなみに、メンバーの構成は先鋒バーバラ、次鋒ジーン、中堅シルヴィア、副将ジャック、大将エリカという事で落ち着いた。エリカは最後まで大将をバーバラかジャックに譲ろうとしたのだが、多数決の結果1対4でエリカが大将になってしまった。

この大会では、先鋒、次鋒などと個人の役割があるが、別に先鋒が一番最初に出なければならぬというルールはない。

さらに言えば、同時に複数人がコロシウムに入っても問題はない。ただ、複数人对複数人になった場合、2カ所で戦闘が起こらない事がルールには書かれている。つまり、1対1が複数できてしまうの

は駄目だが、2対2が出来るのは問題ない、という事だ。

また、2人を相手取って1人で戦うのもありだ。残りの1人に疲れきたらバトンタッチという戦い方も出来る。

大将が最初に出て、相手全員と戦っても良い。さすがにそれで試合が決まるような事は今までなかったそうだが。

相手を見てこちらの手を変えろという事が出来るのが、この大会の醍醐味の1つだ。本当の戦場では自分の都合の良い戦場など滅多にない。敵も考え、それに合わせて自分たちも考える。

ケースバイケースの柔軟な対応が求められるこの大会は、言ってみればそこいらの模擬戦よりもよっぽど実戦に近いと言える。

『諸君、よくぞ集まった!』

拡声器が何かで声を大きくしたエオリアブルグの王がコロシウム中に声を響き渡らせると、それまで轟轟と響いていた歓声が静まり返る。

『私はエオリアブルグ王国を統べるグラン・レオパルドである。我々の共通の敵、ドラゴンと戦うために剣を取った騎士たち、存分に自らの技術を出し切り、より一層の向上を祈る』

グランはそう言う隣にいたティティに顔を向ける。ティティが頷いて一歩前に出ると、グランと同じように騎士たちに訓示を与える。

『アールドールン王国、アーサー王の娘、ティティ・アールドールンです。皆さん、日ごろの訓練の成果をここで発揮できるよう、頑

張ってください。星々は常に皆さんと共に在ります』

星巫女としての言葉のようだ。ティティの言葉を聞いて観客席からティティが言った言葉に反応するかのように声援が生まれる。

そして最後にブラゴシユワイクの王子にバトンが渡された。

その姿を見た時、エリカは彼ではなく、彼が背負う「ブラゴシユワイク」という存在を睨み付けていた。

『ブラゴシユワイク王国第一王子、シャリオ・ブラゴシユワイクです。敵味方という戦いではなく、好敵手として共に力を磨けるような試合を期待します』

シャリオがそう言うと、3人が共に手を振りかざす。

『『『ここに大陸統合軍事大会の開催を宣言する!!!』』』

歓声が地面を割らんばかりに響き渡る。

そしてその歓声には、騎士たちの雄叫びも混じっていた。

「すぐに始まるもんじゃないんですか」

ティティ、グラン、シャリオが大会の開催宣言をした後、全員がコロシアムの建物内に引き上げると、それと入れ替わりに随分とふざけた格好をした男たちが闘技場へと向かっていった。

「前座だよ。ガチの試合も良いが、面白おかしく戦う連中を見るのも楽しいんだろうな、見てる分には」

ジーンはあまり気にしていないようだ。というより、気にしているのはエリカくらいで、フィアもジャックも全くというほど意識していない。

「言ってくれたら余計な気合を入れなくて済んだのに……」

「気合の入れ損はないさ。それに試合以外でも油断は出来ない」

ジーンが出来れば思い出さたくない事を思い出すような表情をする。

「何か、あつたんですか？」

「4年くらい前の大会だったな。開催場所はここ、今まさに俺たちが歩いているようにエオリアブルグの騎士が歩いていったんだ。そして……」

曲がり角に差し掛かり、ジーンは室内とは思えないくらい慎重に左右を確認してから曲がり角を直行する。左右を確認したのはジーン

だけではなく、フィアもジャックもごく自然な動きで左右を確認している。

「曲がり角でブラゴシュワイクの騎士とぶつかったんだ。ぶつかったのが運の尽き、エオリアブルグの騎士はその場でバツサリ」

ジーンが首を掻っ切る仕草を見ると、エリカが眉をひそめる。

「酷いですね」

「貴族つてのはそういうもんさ。普通の人間を動物でも見るような目で見てくる。大方、目つきが気に入らないとか、態度が気に入らないとかいう理由だろう。貴族の息子だからできれば事を公おおやけにしなければならなかった両国の上層部は殺された騎士が転落事故に遭ったように隠蔽した。結局後でバレて大問題になっただけだ」

「まったくもって、嫌な話だ」

どうやら途中から会話を聞いていたらしい。ジャックとフィアもジーンと同じように苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「公式に抗議もされたいけど、効果のほどは定かじゃないわ。だから、それ以来アールドールン、エオリアブルグの騎士連中は絶対**にぶつからないようにしている**の。もはや慎重すぎるほどにね」
「今のうちに言えて良かった。1人で歩くこともあるだろうが、気を付けるよ」

国柄という奴なのだろうか。少なくともその程度の事で人を殺すような人間の神経が信じられない。

「ああ、一応言っとくが、ブラゴシュワイクにも心のある奴はいる

ぞ？　だが、圧倒的少数なのは確かだ」

ジャックが面白くなさそうな顔をしている。それほどの実力もないのに、権威だけはある奴ほど面倒な者はいないようだ。

「まあ、最近はこちらが注意しているのもあるけど聞かないわね」

バーバラと話していたシルヴィアも会話に加わる。必然的に全員がこの話に参加することになった。

「バーバラも1回当たられたよな」

「ええ、まあ、私の正体に気が付いたら尻尾巻いて逃げていったけどね。『血を吸われるう！』って情けないっいたらありやしなかったわ。あれでドラゴンスレイヤー気取ってるんだから信じられない」

(斬りかかったら確実に殺されるでしょうね……)

バーバラに斬りかかるような馬鹿がいたら、自殺願望者が相手を見ていない愚か者だけだろう。そもそもバーバラの存在はドラゴンスレイヤーの間ではそれなりに有名だ。実力、風貌、そして何より吸血鬼なのだから。

「少なくとも無防備に斬られるような愚鈍な騎士はアクイラにはいないだろうから、大丈夫でしょうけど」

シルヴィアはそう言いながら自分の剣の柄をポンポンと叩く。少なくともシルヴィアに斬りかかったらその相手が氷の鎌で首を刈られるだろう。

「だからエリカも気を付けるよ」

「了解しました」

「さて、お仕事開始ですか」

「はい？」

部屋に戻ったエリカはさつそく身動きしにくい騎士団の鎧を脱いで動きやすい普段着に着替える。普段着と言っても、未だにフィアの服だ。以前買った服はまだ一度も着ていない。

着替え終わったのを見計らったように部屋の扉がノックされ、ユーリが扉を開けるとエリカとしては予定通り、バーバラが立っていた。

「時間よ。用意は出来てる？」

「はいはい、大丈夫です。ティティ様は？」

ユーリが話が分からずエリカとバーバラを交互に見ている。さすがに本当の事をいう訳にはいかないのではらく外に出る、とだけ言

って部屋を後にする。布で包まれた件の剣を握る手に力を込めながら、ただただこれから行う事の成功を祈る。

「丁度今、特等席から離れてるわ。合流して、戻る時に一緒について行って」

「分かりました。相手が教養のある人だと思いたいです」

王族や貴族がいる席にこちらから入る事は出来ない。さすがに騎士と言えども許可なく入ろうとすれば止められてしまう。つまり、テイティと合流するにはテイティの方からエリカが近づける場所に来てもらうしかない。バーバラは部屋に戻るとすぐに行動を開始し、テイティに何かしらの合図を送ってテイティに席を外すよう促した。

城へ戻らないでその場でテイティと合流、という手もあつたのだが、かさばる上に動くと金属が擦れる音を立てる鎧ではあまりにも「こつそり」には出来ないため、仕方なく一度城に戻った。とはいえ、走れば数分の距離、エリカとバーバラはすぐにコロシウムまで舞い戻ってくる事が出来た。

コロシウムでは丁度前座の試合などが行われているらしく、中からはや声援などというレベルではない熱狂的な音が聞こえてきており、コロシアムの外にいる人々も中の様子の事などで話題は持ちきりのようだ。

中に入り、バーバラに先導されて走り続けると、コロシアムのある一室にたどり着いた。扉を開けて中に入ると、正装のままのテイティが座っていた。

「待たせてしまったわね、姫様。エリカ、私が出来るのはここまでよ。後はあなたと姫様で行きなさい」

「では参りましょうか。随分と席を外してしまいましたので、そろそろ戻らないと誰かが探しに来てしまいかもしれません」

そう言うとティティは立ち上がる。

「でも、どうやってあたしをあそこまで連れていくんですか？ 部外者はあそこまで近寄れないんじゃない……」

方法に関して、エリカは何も聞かされていなかった。言いだしつペではあるが、どうやるかなど何も考えてなかったのが実情だ。その結果、ティティに方法を丸投げしてしまった感は否めない。

「私も、伊達に王族じゃありません。不可視の魔法ぐらい使えます」
ティティは自慢げな表情をしながら手を差し伸べてきた。

「私と触れている限り、誰からもあなたを見られなくします。ですが音や気配は消せません。そこは、エリカの方でお願いしますね？」

「姉さん」と呼ばれなかった事に安堵と少し残念な気持ちが入り混じっている。だが、そんなことを考えている場合でもないので、余計な事は頭の中から排除してエリカはティティの手を握り返した。

すると視界に映っていた自分の手が見えなくなる。

「わっ、本当に消えてる……」

「完璧なまでに透明ね。それじゃ、頼んだわよ」

扉を開き、透明になったエリカとティティを送り出すと、バーバラ

はその場からいそいそと立ち去っていった。人気がないだけに、あまり長居すると誰かに見られて疑われてしまいかもしれないからだ。

「透明になった気分は、姉さん？」

「2人になっただけならいきなりですか……」

エリカだけに聞こえる小さな声で、なおかつ顔をこちらに向けずに話しかけてくると、エリカはこのティティの入れ替わりの素早さに舌を巻きつたため息をつく事になった。

「……でも、身体が消えているって不思議な感覚ですね、五感は普通にありますし、自分の姿を見ないと身体が消えている事も実感が湧かないですね。それよりも、姿を現した時どう言っているか、それだけいじわるなんでしょうか……」

問題はそこにもある。

当然ながら、特等席にも護衛の兵士たちがいる。王族、貴族がいる所に突然刀を持った騎士が姿を現せば混乱は免れない。それで済めばいいが、最悪暗殺者と誤解されてしまうかもしれない。その懸念は依然からあったが、事ここに至ってその可能性が脳内でじわじわと大きくなっていく。

「私が弁護します。姉さんはシャリオ王子に直談判することだけを考えていてください」

ティティが振り返り、彼女からは見えているのかエリカの目をまっすぐ見て微笑んだ。その表情は頼もしく、エリカは小さく頷き、再び歩き出した。

2人、傍から見れば1人だけだが、コロシアムの階段を上り、護衛のセラたちを見つけて特等席へと向かっていった。

第51話 こちらエリカ、潜入を開始する（後書き）

どうもどうも、作者のハモニカです。

パレードなんて華々しいものを想像しづらかった私ですので、こちら辺は結構ざっくりになってしまった感が否めません。

ただ、一言だけは言えます。

グラン王が言った「大会開始を宣言する」辺り、「オールハイブルリターニア！」になってます。脳内でそう勝手に変換されてしまいました。

大丈夫です、脳内でのCVが「ぶるあ」なわけではありません。ただ映像化したらそうなっちゃっただけです。

ではでは、また次回。

ご感想などお待ちしております。

第52話 これを死亡フラグと呼ぶのですね（前書き）

ちよつと違う、と主人公に言いたい。

ま、そんな感じな話なんですがね。

第52話 これを死亡フラグと呼ぶのですね

「覚悟は良いわね、姉さん？」

「いつでも」

小さく受け答えをすると、さすがに護衛のセラに気が付かれた。

「ティティ王女様、どなたとお話で？」

だが、ティティはセラの問いに答えず、特等席中央のグランの後ろを通ってシャリオの前に立つ。グランはただ無言でその様子に視線を向けている。

「何か、ご用ですか、ティティ王女」

「正確には、あなたと話がしたい人がいるんです」

ティティがそう言うと、シャリオの眉が吊り上る。

「あなたの横の不可解な気配は、そういう事でしたか。衛兵を呼びますか？」

「シャリオ王子、相手はティティ王女だ。そんな馬鹿な真似をするようなお人ではない。ティティ王女、結界を張りますがよろしいか？」

そこまで2人の受け答えを見ていたグランが低い、重みのある声でそう提案すると、ティティは小さく頷く。

「ご配慮に感謝いたします、グラン王」

「良い、セラ、そなたは外せ」

「はっ……」

セラが少し3人と距離を置くと、グランが小さく何かを呟く。その瞬間グランを中心に3人とエリカをスッポリ覆うような球体の膜が作り出される。

「外部からは我らが普通に観戦しているように見える。これで好きなだけ語り合おうがよい。私という部外者がいる事は、この際捨て置いてな」

グランはそう言うが、会話の全てに耳を澄ますであろうことは間違いない。

ティティがチラツとエリカがいる方向に視線を向けると、エリカの手を握っていた手から力が抜ける。エリカが手を放すとエリカは虚空から突然姿を現し、シャリオを正面から見据える。

「無粋、とは言わないけど、とりあえずどういう事が説明してくれるとありがたいな」

シャリオは別段驚く様子も見せず、自らを見据えるエリカの目をまっすぐに見返す。

エリカは膝をつき、頭を下げてまずは非礼を詫げる。それで話が出るのなら頭の1つや2つ、下げても安いものだ。

「まずは、非礼をお詫びします、シャリオ王子。そして計らいに感

謝を、グラン王」

「ふむ、貴殿はアクイラ騎士団の者だな。先ほどから貴族の連中が話題にしていた、最年少の騎士、確か……」

「エリカとお呼びください」

シャリオは決してこちらを見下すような話し方をしない。ヴァルトが言っていたように、ブラゴシュワイクの間人ではあるがこの男はまともな思考が出来るようだ。ジーンたちの話を聞いていると、さすがに一抹の不安があったが、杞憂に終わったようだ。

「ではエリカ。下手をすればそなただけでなく、そなたに与したくみテイ王女すらも、さらに言えば我がブラゴシュワイクとアールドールンの外交問題に発展してもおかしくない事をしてまで、私に会いに来た目的はなんだ？ よもやサインが欲しいなどという下種な輩ではあるまい？」

シャリオはそこで結界の外に視線を向けた。その先には若い貴族の娘がいる。どうやらシャリオとお近づきになりたいのか、しきりにシャリオに視線を向けている。といっても、外から見ればシャリオは闘技場をジッと見ているようにしか見えていないが。

エリカは手に持つ剣を布から取り出し、それをシャリオに差し出す。それを見た時、一瞬シャリオが目を細めた。おそらく、刃にこびり付いている血に気が付いたのだろう。

「これは……、我が国の紋章か？」

差し出された剣を静かに受け取り、自分の手を斬らないように慎重

に観察していると、シャリオはその剣に刻まれた紋章に気が付いた。

「あたしの大切な仲間を殺した男が持っていた剣です」

「我々の名を騙る者ではないのか？」

当然、そう考える事も出来るだろう。シャリオにとって、これは自分たちの国を殺人容疑で訴えられているようなもの、「はい、そうですか」と納得できるものではない。

「殺されたのが人狼だとしても、そう言いきれますか？」

エリカが静かにそう言うと、シャリオの目が見開かれる。

「それは、間違いないのか……」

「この目で見ました、何か心当たりがありますか？」

ない、とは言わせない。獣人狩りはブラゴシユワイクが国家ぐるみでやっている、と聞いているだけに、エリカも怒りを抑えきれない。怒りを視線に込めてシャリオを見つめるが、シャリオは表情を崩さず、じつと剣を見つめている。ティティが心配そうにその様子を見つめていると、グランが立ち上がりティティに席に座るよう促した。

「……我が国の情報機関が使用する剣に間違いない。だが、知つての通り公式には我が国も獣人狩りを禁止した。つまり行われているとしたら一部の者の独断、私たちが関知できるものではない」

「なら、今からでも関知してください。これ以上、同じような犠牲

者を出したくないのです」

「獣人は元よりヒト、私も同じ考えた。この事は他の者に話したか？」

エリカが首を振ると、シャリオは安堵のため息をついた。それは、これ以上話が広がるのを防げると思ったからなのか、自分にいの一
番に知らせてくれたという事だからなのか、エリカにはその真意は
分からない。

「では、私にこの件は任せてくれ。それと、これを指示した者に、
『公式に抗議してくれれば私が此方の窓口になる』と伝えてもらい
たい。他の者ではもみ消すか有耶無耶にされてしまっただろうからな」

「感謝します、シャリオ王子」

「知らなかった事とはいえ、このような事になってしまったとは嘆
かわしい事だ。そなたの仲間という者、名前は何と言う、いつか墓
参りをしたい」

そんな言葉を聞くとは思っていなかったエリカは少し驚いてしまっ
た。

王子ともあるう者が、そこまで言うとは考えもしなかった。むしろ、
「ご苦労だった」の一言で終わりにされてしまうという公算の方が
大きかった。

ヒナがこの事を聞いたら、きっと喜んだだろう。

だが、ムラミツとヒナの正体をブラゴシュウィクの他の者に知られ

るわけにはいかない。シャリオほどの人間が墓参りなどしようものなら、その墓の主の事を調べようとする輩の1人や2人、現れて当然だ。そうなればヒナに危険が及ぶかもしれない。

エリカは小さく首を振り、シャリオの提案を退ける。

「お気持ちだけ、貰っておきます。あたしから、伝えておきます」

「……そうか、そう言われてしまえば私から強引にするわけにもいくまいな。しかし、それを言うために自国の王女まで協力させるとは、そなたは随分と信頼されているのだな」

シャリオの言葉にエリカはキョトンとしてしまう。その表情が意外だったのか、シャリオは声を上げて笑い出した。

「無自覚か、そなたの事は我が国でも話題だぞ？ 選抜試合では随分と暴れたという噂だが……、その様子では噂は本当のようだな」

表情に出てしまっていたようだ。一瞬、決勝戦の時の光景が脳内に蘇ってきていたため、中途半端な言葉しか出てこなかった。

「エリカは、我がアールドールン王国の切り札なのです！」

「ちょ、ティティ様、そんな誇大な事を言わないでください」

結界で見ている人間がいないのを良い事に、ティティはスイッチをオフにしたようだ。星巫女、王女という役柄に縛られた少女ではなく、1人のティティという少女になってしまっている。

「ほお、星巫女様がそこまで言うとなれば、よほどのものなのでし

ような。エリカ、と言ったな、貴殿の今大会での活躍に期待しよう。だが、我が国のシータス騎士団も負ける気は毛頭ない。覚悟しておくがよい」

グランがティティの言葉に茶化すような事を言い、最後にどすの効いた脅し文句を付け足す、という器用な真似を試みせると、負けじとシャリオも身を乗り出した。

「おや、我がタロン騎士団を蚊帳の外においてもらいたくないな。馬鹿な輩もいるが、それを補うだけの技術を持った者がいる事をお忘れなく」

「馬鹿な輩」の部分随分嫌そうに言ったが、その後の部分は自慢げに笑みを浮かべていた。

エリカが茫然と自分たちの騎士団の自慢話を始めたグランとシャリオを眺めていると、グランが思い出したようにエリカに視線を戻した。

「話はもうよろしいか、エリカ？」

「あ、はい、ご配慮に感謝します」

グランに頭を下げると、グランは少し微笑んでみせると立ち上がり、エリカの頭の上に手をかざした。

「ティティ王女の魔法では手を繋いでいる事で姿を消していたようだが、それではここから立ち去れまい？ 数分間、貴殿の姿を消すゆえ、仲間の元に戻るがよい」

そう言うと先ほどティティと手を繋いでいた時と同じ感覚に襲われ、見ればエリカは来る時のように透明になっていた。

「さすが魔法大国エオリアブルグの王。私なんかよりよっぽど上手いですね」

ティティはそう言っているが、少し悔しいのか頬を膨らませている。

「ティティ王女には私たちが持っていない、星巫女の力がある。それに、この程度、王女も大きくなれば出来るようになる」

「王子たる者が言うのもなんだが、羨ましいな。我が国では技術よりも権力が重視されてしまうからな」

「なら王子、君がそれを作り直せば良い。よもや、その恩寵を受けるほど君は腐ってないと私は思っているが？」

グランが思わしげな笑みをシャリオに向けると、シャリオも同じような笑みを返す。

そしてグランはすぐにエリカに視線を戻すと、指を天に向けて小さく振った。その瞬間、結界が解除される。

グランは小さく指でエリカが来た道を指差し、戻る様に指示をする。魔法をかけた本人には見えているだろうから、と思いエリカはグランに向かって大きく頭を下げると、戻ってきたセラの横をすり抜けて特等席を後にした。

「あの、結局なんだったのでしょうか？」

「ふふ、セラは知らなくて良いのよ。それよりも、あなたもそろそろ準備をしたら？ 出場するのでしょうか？」

「ご安心を、間もなく交代の騎士が参ります。彼らが来たら行かせてもらいます」

仕事が上手く成功したから浮かれていた、と言われれば否定は出来ない。

さらに言えば、自らの姿が消えていたという事で他人から見えていないと思っていた事も原因の1つかもしれない。

だから、つい先ほどジーンに言われたことを迂闊にも失念していた。

「すっかりにもほどがあります……」

後悔しても、時すでに遅し、だ。

まさか、本当にこんな事に自分が巻き込まれる、というよりは仕出かすとは思ってなかった。

だから、しばしの間、自責の念で頭が重くなって大きなため息が出てしまったのも仕方のない事だ。

「おい、話を聞いているのか？　アールドールンの平民？」

エリカの前には青い装飾の施された鎧を身に纏った男が2人と、ドレスのような服を着た女が1人、見下すような、いや事実見下しているのだろう、そんな視線でエリカを見ていた。身長的な面から物理的にも見下されているだけに、見返せないのが残念だ。

(いや、曲がり角を思い切り直行したあたしにも非があるんですが……)

左右を確認せずに曲がり角に飛び出したエリカは、物の見事に今日の前で偉そうな態度を取っている男にぶつかってしまったのだ。ジンよりは年上だろうが、まだ子供っぽさが随分と残っている騎士は何かを喚んでいるが、エリカは自分の迂闊さを後悔するという作業で忙しい。

「おい、僕の話を知っているのか!？」

「ああ、もう、ちょっと黙って下さい。今考え事をしてるんです」

謝罪はとっくの昔に済ませている。ぶつかった直後に謝ったのだが、どうやらこの騎士は土下座でもさせて自分の靴を舐めさせないと気が済まないのか、いつまで経ってもその謝罪を受け取らず、ただた

だ喚き散らしている。

それがいい加減うるさく感じられたので、冷たくそう言い放つてやると、騎士の顔がトマトを彷彿させんばかりに真っ赤になった。こんなトマトを食べたら腹を下す事間違いなしだろっが。

「ぼ、僕はブラゴシユワイクの貴族だぞ！ 平民風情がそんな口を聞いて良いと思ってるのか！？ こ、この……」

「まあまあ、落ち着きなよ。平民は僕たちの理解なんて及ばないよっな下々の人間なんだから」

もう1人の優男、随分と垂れ目が特徴的な騎士が肩を叩いて激昂する騎士をなだめる、のだが随分な宥め方だ。

「まったくですわ、この機会にあなたにも目上の者を敬うという事をお教えしてあげましょうか？ どうせなら私たちの爪タロウの垢を煎じてあげてもよくなってよ？」

扇で口を隠しながら、「おーっほっほっほっ」という笑い方が物凄く似合いそうな女が言う。おそらく彼女も騎士だろうが、そうとは思えないほど動きにくそうな服を着ている。

(ええと、こうなった場合の対処法は……、聞いてなかったですね) 自分はそんな間抜けな事をしないだろうと高を括っていたエリカは最悪の場合どうするべきかジーンたちに聞いていなかった。そのせいでさらに自責の念が重くなる。

優男に宥められて多少なり冷静さを取り戻した騎士は大きく息を吐

くと腕を組み、鼻を鳴らしながらエリカに視線を向ける。

「さて、それじゃあ、謝罪の気持ちというものを態度で表してもらおうか」

「いや、だから謝ったじゃないですか」

エリカがそう言うのと今度は優男の制止も間に合わず、男は剣を鞘に収まった状態で抜くと思いきりエリカの腹に向かって振ってきた。男ではあるがジーンやジャックのような大剣ではなく、レイピアのような細い剣ではあったが、至近から力一杯振られた剣はエリカを壁に打ち付けるには十分な勢いがあった。

受け身を取っていた上に、威力自体正直黒鱗無しでも耐えられるほど弱かったが、ここはあまり抵抗しない方が後々のためになる、と思ったエリカは別段反撃する様子もなく壁に背中を任せる。

（雑魚、ですね……）

剣の使い方がまるでなっていない。大方、魔法だけ使って敵をアウトレンジで潰すのが得意なのだろう。近接戦をやるとは思えないその細い腕がその証拠だ。身体を鍛えていないから今の攻撃も傍から見れば威力があるように見えるが、弱いにもほどがある。

それなのに、自分は強いし偉いと思っているのだから手におえない。

（ドラゴンでこんなのがいたら、喉笛噛み千切られてますね）

「お前、命が惜しくないのか？」

「あゝあ、本気で怒っちゃったよ、下手にプライドに縛られないで言う事聞いておいた方が身のためだよ、君」

(プライドも何も、そもそも謝ってるんですけどねえ)

心配しているような口調だが、その結果どうなるのか見たくてうずうずしているのが傍目にも分かる。結局、この優男も同じ穴のムジナのようなのだ。

「でも、さすがに命を取ってはお父様たちに迷惑になりますわよ、4年前に馬鹿をした人がいるのを忘れたわけじゃないですわよね？」

「分かってるよ！ それじゃ、どうしてもらおうか……と」

何か良い事を思いついたかのように表情が入れ替わると、男はエリカの耳元に口を持っていった。それだけでもエリカに鳥肌を立てさせるには十分だった。

「今夜、僕の部屋に來い。それでチャラにしてやる」

「っ!!」

ニチャアツとした笑みとはまさしくこれの事だろう。下卑た笑みを浮かべた男が耳元でそう言った瞬間、エリカはこれ以上我慢できなくなった。

エリカを壁に押さえつけていた剣を容易く弾き飛ばすと姫黒を鞘ごと抜いてその鳩尾に1発お見舞いする。

「がはっ?!」

口から汚らしい唾を吐くので、それをかわすと優男目掛けて男を吹き飛ばす。優男は済んでの所で回避するが、おかげで男は尻から床に落ち、情けない悲鳴を上げる。

「な、なにをつ！？」

「こんな攻撃も凌げないでよくドラゴンスレイヤーを名乗れますね。あなたたち、ドラゴンと戦った事あるんですか？」

本当の龍の恐ろしさなど、絶対に理解できていないだろう。今ここで龍に戻るなら、戻って噛み殺して吐き出したいという衝動にエリカは駆られてしまう。

「ば、馬鹿にするなよ！ ドラゴン狩りならやった事ある！」

「……な、んですって？」

今、目の前の男は何を言ったのか。エリカの中で何かが音を立てて崩れようとしている。

「龍の森でドラゴンのガキをとっ捕まえた時にだ、必死こいて逃げようとするドラゴンの羽をぶった切って心臓をついたら、皆歓声を上げたよ。お前たちもそんなことはした事ないだろう！」

自慢げに言う男は、心の底からそれを誇っている。それを見る2人も「羨ましいわ」とか、「僕もいつか……」なんて事を言っている。

(ドラゴンをそんな事のために殺すなんて……！)

赦せない。

エリカも龍だ。仲間が殺されるのを黙って見ている事なんて出来ない。それも、子供をまるで殺しを楽しむかのように狩るなんて、エリカは到底赦すことは出来なかった。

ドラゴンの中には、人里に下りて腹を満たす者もわずかだがいるだろう。そういう者を討伐するためにヒトがその者を殺すのは致し方のない事だ。そもそも龍を相手に大規模な戦闘にならずに済むことはない。龍が戦えば必ず他の龍たちも気づき、様子を見に来るのだ。そうすれば、どちらに非があるのかすぐに分かる。ヒトに非があれば仲間が助太刀し、龍に非があれば静観にとどまる。

だが、これは駄目だ。

エリカは優男と女が男を起き上がらせようとしている間に、自然と黒羽と黒羽を鞘から抜いていた。

国際問題？

他人に迷惑がかかる？

そんなもの、今のエリカの脳内からはすっかり消え去っていた。

殺す。

平然とそんなことが出来るこの男たちを龍として、赦せなかった。

エリカの気配に気が付いたのか3人がエリカに視線を戻すと、その表情が驚愕と恐怖に変わる。当然だ、目の前には殺気を加減無しに放つエリカが立っていたのだから。

「何故だ！ ドラゴンを殺すのは僕たちの使命！ それはお前だつて同じはずだ！ 奴らを殺して名誉を得る、それがドラゴンスレイヤーだ！」

「……とりあえず、その馬鹿な口を閉じる、下種」

あらゆる遺恨を込めて、エリカが言い放つと、3人は押し黙る。目の前に自らの「死」が迫っている事にようやく理解したようだ。

だが、今さら命乞いを聞くほどエリカは冷静ではなかった。

姫黒を振り上げ、とりあえず目の前の男に振り下ろす。加減などしない。殺す事で、殺された龍への手向けとするつもりだからだ。

「待った」

ところが、振り下ろそうとしたその手を掴まれた。

そのまま振り下ろそうとするが、しっかりとエリカの手首を掴んだ手はビクともしない。そこでようやくエリカは後ろに振り返ると、神妙な表情をしたジーンが立っていた。

「放してください、ジーンさん」

「却下だ。どうしてこうなったか知らんが、目の前で人が殺されようとしているのを黙って見ているほど俺もお人よしじゃない」

「こんなの、ヒト以下です」

汚物でも見るような目で床にへたり込んでいる3人を見下ろすと、3人が小さく悲鳴を上げる。

「それには激しく同意するが、ここで殺して立場が危うくなるのはエリカだ。冷静になれ」

ジーンの声には、切実な思いが込められていた。

エリカはしばらく3人を睨み付けていたが、小さく息を吐くとジーンに顔を向けずに俯いて口を開く。

「……手を、放してください」

「放した瞬間斬りかからないな？」

「分かっています……」

ジーンはエリカの返事を受けてすぐに手を放した。エリカは姫黒を鞘に戻すと、へたり込んでいる3人に手を差し伸べた。それだけの事でも、3人は今にも失禁しかねないほど恐怖で表情を歪ませる。

「大丈夫ですか？」

「お、覚えてる……！」

まるで、負け犬の遠吠えだ。差し伸べられた手を無視して立ち上がると3人は脱兎の如く逃げ出そうとする。

「ああ、そういう事なら……」

その3人の背後から声をかけると、3人は恐る恐る振り返る。

そこには物凄く良い笑顔のエリカが立っている。

「試合で思う存分、殺^やり合いましょう?」

思いつきり殺気を飛ばしてやると、3人は今度こそ再起不能なまでに腰が抜けてしまったようだ。その3人に背を向けると、エリカは城へと戻るためにコロシアムの出口へと向かう事にする。

ジーンは何か言いたそうな表情をしているが、あえて何も言わずにエリカの後を追ってコロシアムを後にすることにした。

第52話 これを死亡フラグと呼ぶのですね（後書き）

ちよつとだけ補足。いや、ほんの少しだけ補足。

ヒナは来てません、まだ。

以上。

ではではまた次回。

ご感想などお待ちしております。

第53話 vs シータス騎士団（前書き）

駄目です、水曜更新とかもう無理……orz

水曜日はリアルが忙しすぎて入ってる余裕がない……

ま、あんまり気にしませんけど。

それはともかくとして、大会のルールを軽く整理しておきたいと思います。何しろ、自分でもどういうルールにしたか危うかったので概略だけですし、本編でも触れますが、一応、どうぞ。

- ・大将が倒されたら他にメンバーが戦っていたとしても試合終了
- ・5対5は認められるが、1対1が5つ出来る事は認められない
- ・戦略級魔法の使用は不可
- ・故意に相手を殺そうとする行為、または結果として殺害するような行為は認められない
- ・その他のあらゆる行為は、戦闘という名において許可される

2つ目が自分でも作らなきゃよかったなあ、と思ってるルールです。
正直スルーしてくださって構いません。

ぶっちゃけ同じ戦闘なのに場面が変わりかねないので作っただけですから。

では、本編をどうぞ

第53話 vs シータス騎士団

「何があったのかは、大体想像がつく。だが、あれは駄目だ、エリカ」

「何も言わないでください。あそこまで頭に來たのは久しぶりです」
コロシアムの試合出場者のうち、アクイラ騎士団のために設けられた部屋に連れていかれると、そこにはすでにジャックやシルヴィア、バーバラもいた。フィアはエリカを見るとすぐに駆け寄ってきた。

「大丈夫だった？ ブラゴシュワイクの騎士と言い争いになったそうじゃない」

誰かに見られていたのだろうか、と思っているとバーバラが近づいてきて、「私が見ていた」と目で言ってきた。よくよく考えてみれば、戻る時はバーバラと合流する手はずだったことを思い出し、ジーン同様異変を感じ取ったバーバラが近くまで来ていたのだろうかと思当をつける。

「問題ないです。丁寧に謝罪したら、尻尾巻いて逃げていきました」
「それ、おかしくない？」

正確には「丁寧に謝罪したら、聞き入れてくれずエリカがブチ切れるような事を言ったので殺そうとしたらジーンに止められ、去り際に思い切り脅迫してやると、尻尾巻いて逃げていきました」となるだろう。事実を隠しただけで嘘は言っていない、多分。

「まあ、大事に至らなくて良かったわ」

バーバラがホツとした表情をしているが、その「大事に至らなくて」の対象があのかトリオに向けられている事はエリカだけが分かった。あと少しで殺すところだったのだから、そう言われて当然である。少しではあるが、バーバラの目にはエリカの行動に対する責めが滲んでいる。

「それはともかくとして、もうすぐエオリアブルグとの試合が始まる。さっさと鎧をつけてくれ」

「あ……」

エリカはジャックに言われて、ようやく自分が鎧をつけていないことを思い出した。だが、思い返すと確か鎧を脱いだのは城だ。城に置いて来てしまったという事は、このままでは試合に出られないという事だ。

「しまった、城です」

「何故城に戻った……」

ジャックに呆れたような表情をされるが一応秘密なので本当の事は言えない。

それはともかくとして、今から戻って間に合うかと頭をフル回転させて考えるが、どうしても間に合う気がしない。

「はあ、前半は私たちが時間稼ぐから、その間に取ってくる？」

「それには及びません」

突然、そこにいる者ではない声がして扉の方に全員視線が向く。すると扉の前にユーリが立っていた。その手には大きな布の包みが抱えられている。

「エリカ様がいつまで経つてもお戻りにならないので、こちらにお届けに参りましたが、正解のようですね。エリカ様、鎧です」

「ユーリさん、感謝します！」

抱き付かん勢いでエリカはユーリに駆け寄り、鎧を受け取る。ユーリは一礼すると部屋を出ようとしたので、エリカはそれを呼び止める。

「ユーリさんは試合見ていけないんですか？」

「私たちはエオリアブルグの人間、あなたたちの対戦相手を応援することになりますが、それでもよろしいですか？」

「いや、正直敵味方ないし、両方応援って事で」

物凄く、考えの浅い事を言うと、ユーリは苦笑しながらも小さく縦に頷いた。

「では、観客席に行っております。皆様も、ご武運をお祈りしております」

改めて一礼すると、ユーリは部屋の外へと消えていった。

それを見送るとエリカはいそいそと部屋を仕切っている壁の反対側

へと行って団服、鎧姿に着替える。その後、もう一度二振りの刀を差し直して5人の所に戻る。

「さて、全員準備が出来たところで作戦会議と行こうかしら」

「待ってました。相手はエオリアブルグのシータス騎士団、個人でも団体でも強いぞ」

ジャックが椅子を引っ張ってきてエリカの方に滑らす。それを受け取って腰を下ろすと、バーバラが全員の前に立って作戦会議の進行を始めた。

「ジャックは前回も戦ったのよね、面子は？」

ジャックほどの実力の持ち主であれば、毎回のようには大会に出ても当然、結果前回の情報を元に相手を知る事が出来る。

ジャックはバーバラに聞かれると腕を組み、珍しく真剣な表情をする。

「面子はほぼ変わってねえ、というか、大将が変わっただけだな。それがどう影響しているかを除けば、ここにいる面子であいつらに負ける理由はないはずだ」

「油断は禁物だぞ、ジャック。これは個人戦だけじゃないからな」

「力負けするという可能性はあるわね、私は中距離から魔法を使っても？」

シルヴィアの意見に全てを取り仕切るバーバラが頷く。大会に関して、どうこう言えるほどの知識もないエリカはただ黙って4人の話

を聞いているしかない。

「シルヴィアは相手の足止め、連携の断裂をメインにして。近寄ってくるなら反撃してもいいわ。シルヴィアは常時闘技場にいるとして……、ジャックとジーンは可能な限り相手を殲滅して」

「それは良いが、いきなり全員で出るわけじゃないだろうか？ とりあえず最初に誰が行く？」

大会は誰が、どういう順番で、誰かと組んで出ても問題はない。とはいえ、闘技場で複数の場所で同時に戦闘が起きると観客への安全の面からも問題があり、複数同士が出る場合は「1つの戦闘」を行うという取り決めがある。

この決まりは非常に曖昧で、複雑な意味を含んでいるのだが、要は広がって戦わなければいいのだ。2対2なら、その2人がお互いを支援できる距離にあればいい、ということになる。

とはいえ、シルヴィアのように距離を取って戦うという騎士ももちろんいる。その場合は、極力戦闘が広範囲化しないよう心がけなければならぬ。

何故、そんな面倒な、騎士からしてみれば行動の制限が設けられているかという点、それはもちろん実践を想定している。龍との戦闘は大規模にならない方がおかしいわけで、近くにある守るべき対象を巻き込んで戦うなどご法度である。そのため、大会では限られた範囲に敵を押し込め、効率よく戦う事を常に求めているのだ。

「最初はジーンとシルヴィア、状況に応じて私が出るわ。まあ、様子見ね。相手が1人なら私は出ないし、複数出れば私が加勢、場合

によつてはジャックが出るという事で行くわよ」

「……あれ、あたしは？」

最後まで名前を呼ばれなかったエリカがバーバラに尋ねると、バーバラは視線をエリカに向けて微笑を浮かべた。

「大将は、座つて勝利がもたらされるのを見てればいい、とは言わないけど、大将が倒されるとそこで試合終了、たとえまだ戦える騎士がいてもね。だから、あなたはギリギリまで出すわけにはいかないわ」

「皆さんがピンチの時も、ですか？」

そう言うと、ジャックが声を上げて笑い出した。それは別段エリカを嘲っているわけではなく、純真に自らに対する自信、自分がピンチに陥るなどあり得ないという確信があつてこそなのだろう。

「ま、そうなつたら是非とも助けてくれ。対人戦で死者は出ないだろうが負傷者はゴロゴロ出るからな、この大会は」

ジャックはそう言うと立ち上がり、ストレッチを始めた。身体を曲げる度にゴキツという音がするが、むしろその音がジャックを頼もしく見せる。

「それじゃジーン、シルヴィア、行くわよ」

「おう」

「分かつたわ」

闘技場は今まさに始まるうとする戦いを前に爆発寸前だった。エオリアブルグ、アールドールン双方を応援する観客たちが異常ともいえるほどの熱気を放っている。

「天幕があつて助かったわ」

闘技場に姿を現したバーバラは、頭上を見上げて嬉しそうに笑みを浮かべた。

コロシウムは当然ながら吹き抜けであるが、団内選抜試合の時にようにそこには白い天幕が吊るされており、直射日光を防いでいる。日光が苦手なバーバラとしては僥倖であった。

「さてと、相手は……」

ジーンが白刃の大剣を構えるのを視界に捉え、顔を前に戻すと、前方に3つの人影が現れる。

「……これは予想外」

3人のうち、中央にいる人影を見てシルヴィアが意外そうな声を上げた。それはバーバラ、ジーンも同じであった。

「そちらの人数に合わせたのですが、予想外でしたか？」

透き通るような声が耳に届く。声を発したのはシートラス騎士団選抜の大将であるセラだった。バーバラたちが大将であるエリカを温存したのに対し、シートラス騎士団は最初から大将を出してきたのだ、バーバラたちとしてみれば予想外であった。

セラの左右には屈強な男が立っている。どちらもジャックに負けず劣らずの体格で、2人も巨大な大剣を担いでいる。鈍く光ついているところを見ると、斬る事よりも叩き潰す事の方に主眼が置かれているのだろう。

（大将、実力は騎士団でトップと考えるのが妥当、ならやはり何か考えがあつて、よね……）

初っ端から予想を外されたバーバラは即座に戦略を立て直す。試合開始の合図がかかるまでに新たな作戦を作ると、ジーンとシルヴィアにだけ聞こえる小声で作戦を伝える。

2人が小さく頷くと、セラたちも剣を構える。

セラは鞘から剣を抜くと、観客席がどよめく。ここは彼女たちの本^ホ拠地、その歓声も一際大きい。

両者が戦う準備を整えると、試合開始のサイレンが鳴り響く。そしてそのサイレンすらもかき消すほどの歓声の中、6人は相手に向かって地面を蹴った。

ジーンとバーバラが横に並んで走りだし、その少し後ろをシルヴィアが続く。

バーバラが考えた作戦は大将であるセラを集中的に狙うというものだ。残りの2人は出来る限り無視し、セラと3対1になるように戦おうと考えたのだ。

当然ながら、そうはさせじと相手も動く。

「コルサ、レジアス！」

「っ応!!」

セラの呼びかけに2人の大剣騎士が応じ、セラを守る様に前に1人、後ろに1人陣取る。突貫するジーンは先頭の男、コルサ目掛けて大剣を振るうと、コルサは大剣を身体の横に構えてジーンの一振りを受け流すことなく受け止める。接触した瞬間、火花が散り、一瞬拮抗するが、守る方と攻める方では後者の方が力を入れやすい。コルサの身体が横にずれていく。

だが、その一撃で終わるわけではない。動きを止めたコルサの頭上を飛び越えて本来の目標であるセラ目掛けてバーバラが飛び掛かる。黒い剣を抜いてセラに飛び掛かるのとはほぼ同時にシルヴィアが土中の水分を凍結させて動きを封じようとする。

「甘いっ!!」

寸前でそれを察知したセラは横に飛び退いて氷を避けるとバーバラの頭上からの攻撃を剣で受け流す。そして受け流した先には、今まさに大剣を振ろうとしているレジアスが立っていた。

「うらあっ!!」

「連携が取れてるわね!」

大剣の強烈な一撃をしゃがんで避けると、頭の上を風が斬れる音が通過していく。だが、余裕を持つ間もなく、ジーンの攻撃を受けていたコルサがジーンを跳ね除けると振り返ってバーバラの背後から斬りかかってくる。バーバラは剣で受け止め、その攻撃の勢いを使って囲まれた状態から脱する。

(私を先に潰しにくるか……)

慢心ではなく、バーバラは今の3人ではもつとも強い。それを理解しているセラたちは、バーバラを先に排除し、その後は、とバーバラたちを各個撃破するつもりのようなのだ。

ジーンが突破口を開き、そこにバーバラが突っ込む。シルヴィアは相手の動きを制限するために距離を取る。現在のバーバラたちの戦い方では各個撃破を目論むセラたちにとって飛んで火にいる夏の虫になりかねない。

「シルヴィア、デカいの!」

「了解っ!!」

シルヴィアがすぐに反応すると地面に氷の剣を突き刺す。するとシルヴィアの目の前に大人1人ほどの大きさがある氷の円錐が地面から現れる。それも1本や2本ではない。セラたち目掛けて一直線に次々とその円錐状の氷が飛び出していく。地面を割る轟音と共に迫る氷を見てジーンとバーバラはセラたちから距離を取ると、それに追隨する形でセラたちも射線上から飛び退いていく。

「バーバラ、とてもじゃないけど大将だけ狙うなんて無理よ」

「そのようなね、ならこちらも固まって迎え撃つわよ」

次はセラたちの番、と言わんばかりにセラを先頭に3人が突っ込んでくる。

ジーンがセラの剣を大剣で払うと、さっきのお返しでも言うつかのようにジーンの上をコルサが飛び越えていく。そしてジーンがコルサの影に一瞬気を取られた隙に、セラが手をジーンに向けた。

「なっ……」

轟っ！

ジーンの耳にまさしくその音の表現が似合う物が通過する。

少しでも回避が遅れていれば、ジーンはセラの手から発せられた巨大な火炎に飲みこまれていた。直撃はしなくても肌がピリピリとして、その威力が並大抵でない事をジーンの脳内に警報として発してくる。

「くっ、炎の範囲攻撃はキツイぞ……って！」

回避した先に待っていたかのようにレジアスが攻撃を仕掛けてきた。

「ジーン！」

炎の影に隠れて見えなかったレジアスの攻撃をバーバラが受け止める。休む間もなくジーンは体勢を立て直して飛び退き、もう1人の敵、コルサを探して周囲を見渡す。

すると背後にコルサが倒れているのが見えた。どうやら、ジーンを倒すまでの間、バーバラを牽制するのが目的だったようだが、その思惑は外れ、バーバラはジーンの助太刀に入った。

コルサは気絶しているのか、ピクリとも動かない。

とはいえ、それが戦闘を中断させる理由にはなりえない。2人の白衣の男がシータス騎士団側から現れると、闘技場の縁に沿って移動するとコルサを担架に乗せ、手早く安全な場所に運んでいく。

この間、戦っているバーバラたちは若干コルサたちから距離を置くことを意識しながら戦っていたが、コルサが収容されると即座にまた縦横無尽に戦い始める。

「コルサをやるとは、やはりあなたは最重要目標のようですね？」

「あら、お褒めの言葉ありがとう。けれども、うちの大将は私なんか目じゃないわよ？」

「あんな幼い少女を大将に据えているあなた方が理解できませんね！」

3対2。

不利だと理解しているセラは接近せずに炎で牽制しつつ距離を取り始める。当然、増援を待ったためだろう。

セラはバーバラと話しながら、という器用な真似をしながらも動き続けるが、仲間を倒された事で多少なりとも集中力を削がれたのは確かな様で、動きにむらが出来始めた。

レジアスはバーバラと共に突っ込もうとするジーンと大剣で火花を散らしあうが、シルヴィアの氷による牽制を受けて思う様に動けない。

戦況がバーバラたちに傾きつつある。

「ちい、レジアス、跳べ！」

返事を待つ間もなく、セラはバーバラと思い切り距離を取ると地面目掛けて炎を作り出す。

すると炎がまるでカーペットを広げるかのように地面を這って広がっていく。そしてその縁が一瞬脈動したかと思うと、セラを中心に炎の輪が地面を勢いよく進み始める。それも1回だけにとどまらず、第2波、第3波となって地面を進み、地面から突き出していたシルヴィアの氷をことごとく水蒸気にしていく。

そしてセラの炎に跳んで避けようとしたジーンを一瞬早く跳んだレジアスが地面に叩き付けると、セラに一瞬視線を向ける。

言葉など必要ない、という連携でセラは手に炎を作り出すとそれをレジアスの大剣目掛けて投げつける。

「ふんっ！」

レジアスの大剣が炎を巻き取るかのように回転すると、炎が大剣に乗り移る。刃に沿って炎を纏った大剣を構えると、地面に叩き付けられて迎撃の態勢が出来ていないジーンをしり目に最も後方にいるシルヴィアに照準を合わせた。

「くっ！」

シルヴィアは氷の魔法を得意とする。それすなわち、今日の前にしている敵は最も相性の悪い敵だと言える。

剣で大剣を受け流そうとするが、刃に纏われた炎によってシルヴィアがレジアスの攻撃を受け流す前に強固な氷の剣を溶かしてしまった。

その結果、シルヴィアは武器を失い、土中の水を氷に変えて防御することも出来ずにレジアスの攻撃をまともに喰らってしまう。吹き飛んだシルヴィアは闘技場の壁に激突し、ずるずると地面にずり落ちるとそのまま倒れ込んでしまう。

「これで、勝負はイーブンに戻ったわね」

セラが不敵な笑みを浮かべると、その背後に4人目の騎士が現れる。

「シルヴィアがやられたか。それじゃ、俺が出るとするか……」

ジャックが立ち上がるのを見て、エリカも共に行きたい衝動に駆られる。闘技場が見える場所にある控室にいた2人はシルヴィアが吹き飛ばされるまでの一部始終を見ていた。

「そんな顔をするな、嬢ちゃん。嬢ちゃんは大将、あのセラって大将は初っ端から出てきたが、相手を見極める事も兼ねてバーバラは嬢ちゃんを温存してるんだ。次に誰かやられたら、その時こそ嬢ちゃんの出番だ」

「……はい」

文句は言えない。

大将が最も重要な存在であることは分かっているし、それを踏まえただでバーバラが戦略を立てている事も分かっている。

だが、作戦とはいえ仲間の危機をただ見ているしかできなかったエ

リカはただ悔しかった。

<エリカ殿、これは殺し合いではない。だから安心しろ、とは言わんが、その感情はもつと大切な時に取っておくといい>

アレックスと共に控室を出ていくジャックを見送ると、それと入れ違いにシルヴィアが担ぎ込まれる。フィアが回復魔法を搬送中にもかけていたようで、外傷自体はかなりなくなっている。

シルヴィアがベッドに寝かされるとエリカも駆け寄ってその顔を覗き込む。

「エリカ、情けない姿を見せちゃったわね」

回復魔法もあつてかシルヴィアは意識を取り戻していた。

力のない笑みを浮かべるシルヴィアにエリカは首を横に振る。

「そんな事ないです。シルヴィアさんは正々堂々戦って負けたんです。決して、情けないなどという訳がないです。だから、あたしにセラさんたちの事を教えてください。シルヴィアさんの仇を取ってやります」

エリカが力強くそう言うと、シルヴィアは小さく頷き、フィアの手を借りて上半身を起こすとエリカに情報を渡し始めた。

試合はまだ中盤に差し掛かったばかりだ。

第53話 vs シータス騎士団（後書き）

あれ、もしかしてバーバラの戦闘シーンって初めて？ なんて考えてました。

どうも、ハモニカです。

戦闘シーンがマンネリ化しないように今回は団体戦です。それも不規則なww

さてさて、馬鹿トリオに随分な目にあつたエリカですが……あ、あの3人は今後馬鹿トリオと呼ばれる予定です 今後どうなるか……頑張つて書きます。

ではまた次回。

ご感想などお待ちしております。

第54話 飛んで火にいる夏の虫

「おい、ジーン。随分と苦戦してるじゃねえか」

「出たわね、アクイラの人間兵器……」

ジャックが姿を現すと、セラがそんなことを言ったのがバーバラたちにも聞こえた。

(まあ、否定はしないけど)

ジャックがそう言う風に知られているのが少しおかしかったのか、バーバラは人知れず笑みを浮かべてしまっていた。

「おうつ、人間兵器とは言っじゃねえか。だがな、俺様は神の兵士、超絶神兵なんでよろしくな！」

「前回も似たような事言ってなかったかしら、あなた」

「お、お前も前回の俺を観戦してたのか」

それを聞いたジャックが嬉しそうな顔をする。

実は、こんな呑気な会話をしているが、ジャックとセラは今壮絶な攻撃をお互いに繰り出している。後方支援を行う者がいなくなつたバーバラたちは現在全員がセラに照準を戻している。レジアスとジャックより少し前に戦線に加わつたシータス騎士団の騎士、クルー

ガーはジャックの攻撃の合間にセラを狙うバーバラとジーンの攻撃を受け、その隙にセラが炎魔法で範囲攻撃をする。

セラの炎は厄介な事に追尾性能を持っているものがある。炎の輪を地面に這わせる攻撃は誘導性能が無いとはいえ、闘技場の端まで届いた。遠距離から近距離まで、その全てで安定した実力を発揮するのがセラという人間らしい。

バーバラは内心、彼女が大将に選ばれた事に納得していた。

（正直、力じゃ私にも敵わないでしょうけれど、頭の回転は想像以上……！）

生み出した炎や水を自在に操るのは少し練習すれば大体の人間なら出来る。

だが、戦闘中、自分以外の事にも気を配りながら神経を集中させる作業を並行して出来る人間はなかなかいない。

（なにより、あのジャックと渡り合ってる……）

勝ってはいないが、決して負けてもない。男女の体格差、体力差という到底無視できないものをセラは技術と集中力で補っているのだ。ジャックも軽口を叩いてはいるが、なかなか倒せないセラに対する見方を変えている。

「バーバラ、よそ見してないでジャックの掩護を！」

「分かってるわよ、ジャック、もうちょっと考えて！」

ジーンにわずかに動きが鈍っていたのを見咎められ、そこでようやくバーバラは思考を目の前に戻した。レジアスの攻撃をわずかなステップで避けるとその脇腹に回し蹴りを食らわせる。鎧を着ている相手に効果的な攻撃とは言えないが、少なくとも怯ませることは出来る。その間にレジアスの脇をすり抜けるとバーバラはセラと壮絶な戦いをしているジャックの加勢に向かう。

「おめえ、腕が立つなんてレベルじゃねえな……」

「まだまだ、あなた方全員を倒すまで戦うつもりですから！」

レジアスの大剣にしたように、今度は自らの剣に炎を纏わせる。だが、炎は刃だけにとどまらず、切っ先からさらに伸びていく。そうして全体が大きくなった剣は、さながら大剣のようになる。それを思い切り振ると風に炎の部分が流されて弧を描く。

「はあっ！！」

そしてジャック目掛けて振り抜く。

ジャックは自らの大剣で防ぐことはせず、一度距離を取って振られようとする炎の剣の射程外へと逃れようとする。

だが、そこでセラは笑みを深めた。

すると炎がさらに伸びる。結果剣の射程圏外であったはずのジャックにまで炎は届くことになった。

「うおっ！？」

炎の刃を胴体に食らって鎧が炎に巻かれる。布の部分に燃え移った炎をジャックが慌てて叩いて消そうとするが、なかなか消えない。

「あつちい……」

「火達磨にするつもりでやったのですが、その程度で済んでしまいましたか……」

セラは意外そうな顔をしているが、動揺はしていない。冷静に剣に纏わせる炎の火力を上げる。真っ赤だった炎がオレンジに、そしてさらに青白い炎になると、銀色の刀身と相まって美しいオブジェのようなものを作り出す。

「おいおい、火傷じゃすまねえぞ……」

「殺す気でかかってても殺されないのが、あなたという人間なのでしよう？ 神兵さん？」

セラの言葉にジャックは心底面白そうな笑みを浮かべる。

事ここに至ってバーバラはようやく理解した。

彼女と彼は同種の人間であると。

「頑張ってますね……」

ジャックが加わり、闘技場での戦闘はさらに白熱しているように思える。

その様子を眺めていたエリカは、どこか仲間外れにされたような気分になってしまった。シルヴィアは医務室へ移送させられ、ファイアも付き添いで一緒に行ったため、現在控室にはエリカしかいない。

ジーン、バーバラ、ジャックと共に戦いたいという思いもある。

だが、そのためには誰か1人がリタイアしなければならぬので、できればこれ以上誰も倒れて欲しくないという気持ちもある。

「妙にアンビバレントな気分……、暇つぶしが出来ますかね」

ボンヤリと闘技場を見ていたエリカの表情が急に無表情になり、背後の室内に意識を張り巡らせる。

「アレックス」

<ふん、狼藉者め、無粋にも天井裏に潜んでいるな>

アレックスは軽蔑の念を込めながらそんな事を吐いたアレックスはエリカの傍に近づき警戒心を態度に表す。

エリカは窓から室内に目をやり、腰の刀に手をかける。

「隠れてないで出てきたらいいじゃないですか。少女1人に何の用ですか？」

少し語気を荒げ、隠れている者たちにも聞こえるように言うと、音もなく天上裏から黒づくめの影が部屋に降り立つ。その姿を見てエリカの表情が不快感に歪む。

現れたのは、憎むべき黒装束。ムラミツを殺し、ヒナすら殺そうとした男たちの仲間に相違なかった。

黒装束の男たちは既に剣を抜いていた。そして指揮官と思しき男が一步前になるとエリカに鋭い視線をぶつける。

「さてと、何しに来たんですか？」

どんな答えが返って来ようとも、エリカはいつでも刀を抜ける体勢だ。

そして、黒装束の男たちの返答は「エリカにとって」最高のものだった。

一番前の男が剣を構えると、エリカは口元を吊り上げる。

「今回は思う存分戦ってやりますよ」

彼らが来た理由がムラミツの一件なのか、先刻の馬鹿トリオの一件なのかは分からない。見たところ後者であるような気がするが、そんなことはエリカにとってどうでも良い事だった。

重要なのは、ムラミツを殺したのと同じ暗殺者が目の前に現れた事だ。

エリカにとって彼らは憎むべき敵でしかなく、殺すことに一切の躊躇はなかった。

姫黒と黒羽を抜くと狭い部屋の中の全周囲に黒装束の男たちを見据える。たとえ死角であろうとも、今回は自分1人だけ、自分の事だけを考えて戦う事が出来る。

決して、ジーンたちが邪魔とは言わない。

むしろ、共に戦う事はとても安心できるし、頼もしい。

だが、1人で戦うのは仲間と戦うのとはまた別の心地よさがある。自分が思う様に動き、思う様に戦い、思う様に殺す。

「……………ははっ」

エリカが笑ったのを不審に思った男たちがにじり寄る足を止める。

刀をダラリと下ろしたまましばらく間肩を震わせて笑うと、エリカは顔を上げた。

（敵は10人。得物は剣、毒が塗られてると考えるのが妥当でしょ

うね……)

「来ないんですか？　ならばこちらから行かせてもらいます」

彼らにとつては、不意打ち以外の何物でもなかっただろう。兆し、前兆、予感、エリカが動く事を示すはずのそれが一切なかったのだから。

男たちが警戒していなかったわけではない。むしろ不審な笑みを浮かべていたエリカに対して最大限の警戒をしていた。

だが、最初の一撃に反応出来た者は誰一人としていなかった。

音もなく振られた刀によつて最もエリカに近い場所に立っていた男の頭がずらされた。構えていた剣はもの見事に真つ二つに斬られ、その剣が男の手から零れ落ちるのに続いて男の頭上半分が床へと落ちていく。切り口から噴水のように血しぶきを散らしながら倒れていく男を見て、初めて男たちはエリカが攻撃したことに気が付いた。

エリカが軽く血振りをしていると、仲間をやられて激昂した男たちが一気に襲い掛かってきた。連携も何もない、物量攻撃とでもいうべきものだ。全周囲からほとんど同時にエリカ目掛けて振り下ろされた剣はその半分は二振りの刀で防がれたが、全てを防ぐには足りなかったために残りの半分は無防備な胸、背、腕に振り下ろされた。鎧を着てはいるが、それでもこれだけ多くの攻撃を同時に受けたのだ。鎧は無残に斬られて剣の刃はエリカの肉体に躊躇なく致命傷を与えようとす。

<無知は罪、何も知らない者は、自分が相手にしている者が何者な

のか知ろうともしない……>

アレックスが小さく呟いたのがエリカには聞こえた。それを聞いてつい吹き出しそうになったのを堪えながら、エリカは黒鱗を発現、防ぎきれなかった全ての攻撃を黒鱗によって弾き飛ばす。

男たちの驚愕した表情があまりにも予想通りで面白くなかったが、人を斬ろうとして金属と金属がぶつかりあうような音がすればその顔になるのも当然だった。

結果、全ての攻撃はエリカによって防がれた。

そして、エリカの前にはエリカに剣を振り下ろしているため自らを守る事も出来ない獲物が9人いるだけだ。姫黒と黒羽だけでなく、身体の全てを使って男たちの剣を跳ね除けると、手近な男の太ももを刀で撫でるように斬る。

（ムラミツさん、あなたの鍛えた刀は、まさしく名刀です！）

骨を斬るのにほとんど力はいらなかった。少し力を入れるとバターを斬るかのように肉を裂き、骨を両断した。男の右足が本人の制御から離れ、男共々床に倒れ伏す。逃げる間も与えずその胸に刀を突き刺し、捻ると悲鳴を上げる間もなく男は絶命した。男2人を倒しただけだが、既に床は血の海と化しつつある。

「だ、誰だよ、ガキ1人殺すだけなんて言ったのは！」

「ば、化けもんだぞ、こいつは！！」

ほとんどの男たちが恐怖しながらも必死にその恐怖と戦っている中、そんな声が聞こえてきたのでそちらに目を向ける。

すると2人の男がエリカの視線にビクツと反応する。その目は既に恐怖に吞まれており、戦意は感じられない。

「今逃げるのなら、命だけは見逃してあげますよ？」

エリカがにこやかにそう言う。

男2人は一瞬お互いの顔を見合わせる。周りの男たちが何とか押しとどめようと目で合図したり、退路を断つたりしているのがまた滑稽でならない。

そして、意を決した男2人は、剣を捨て、部屋の出口目掛けて駆け出した。

「お、おい！」

男たちが引き留めようとするが、それには及ばなかった。エリカは自分を取り囲んでいた男たちの隙間をすり抜けると背を向けて走る男の頭をガシツと掴む。

「う・そ」

「ひいつ!？」

男が情けない悲鳴を上げたので、エリカはその喉元に刀を当て、横に引く様に滑らせ男の喉を脊椎辺りまで切断する。頸動脈から血が大量に吹き出し、口からも大量の血が溢れ出し、男は痙攣をし始める。

エリカはその男を横に放り出す。力なく壁にぶち当たった男の死体は、当たった衝撃でついに首が折れたのか、床に倒れた時にはあらぬ方向をうつろに見ていた。

逃げ出したもう1人が扉の前にエリカに振り返る。すでにその目は生を諦めたようにも見えた。

「き、貴様、だましたな！」

「随分な良いようですね。殺し合いとは策謀、騙し合い、そんなものですよ？ 敵を前に背を向ける者が生きていられる道理などないんですよ。ま、今回の場合は全員死にますけど」

もはや狂気に溺れた、正常な判断など目の前の男には出来ていなかった。剣を持っていない事を思い出すと袖から仕込みナイフを取り出してそれを武器にエリカに突っ込んできた。エリカは回避するそぶりも見せず、ただ丁度自分が腕を伸ばし、その状態でギリギリ男に刀が接触しない位置まで男が突っ込んでくるのを待った。

そしてそこまで男が近寄った時、エリカは両手を目にも止まらぬ速度で前に突き出す。もちろん、目の前の男もそれを認識することなどできなかつた。

男は自ら二振りの刀の切っ先に自ら突っ込み、刀が背中に突出し、刀の半ばまでが肉を穿った辺りでようやく男の身体は動きを止めた。自分の身体に刀が突き刺さっているのが信じられないのか、もはやあと数秒しか生きられない男は恐怖に涙しながら自分の身体に突き刺さる刀を見つめた。

エリカは刀を持つ手に力を入れて下に斬り下ろす。

あばら骨を左右・中央に三等分すると足の付け根の辺りから外に出る。肉塊と化した男が扉に倒れ込み、出口を封じる。

(あと、7人)

この場にいた全ての者が同じ考えに達しただろう。これはもはや戦いなどではない。圧倒的強者による、弱者に対する殺戮、虐殺だ。

その地獄の窯の中で正常な考えをしていたのはおそらくその地獄を司っているエリカと、アレックスだけだっただろう。

2人の未遂とはいえ逃亡者を出した男たちに広まった動揺は計り知れない。おそらく内心逃げ出すべきか戦うべきかという究極の選択を迫られているのだろう。

だが、エリカはその両者にも生を見出させる気はさらさらなかった。そして何より、悠長に彼らが決断するのを待つ気もなかった。

三枚に下ろされた男の身体から吐き出された血がエリカの足元にたどり着く前に、エリカは動いた。

まず1人目の腹を横に裂く。そしてその裂かれた傷の中央辺りから縦に、腹から首を通り、顔面へと斬り上げる。腹を十字に斬った事で無造作にその傷から内臓が零れ落ちようとするが、エリカは男の腹を蹴って後ろにいた男にぶつける。

そして間髪入れずにもはや絶命している男とともにその後ろの男を串刺しにする。引き抜く時間も節約するために横に振り抜くと2人の男の身体が引き裂かれ、最初に腹を十字に斬られた男はもはやど

こが傷か分からないほど血まみれになっていた。

残り5人。

背後から斬りかかってきた2人の攻撃を振り返りながら黒羽で防ぐと、力負けという言葉など存在しないかのように黒羽を持つ左腕に力を込めて2人分の腕力を押し返し、姫黒で男に袈裟斬りをお見舞いする。そしてもう1人の持つ剣を二振りの刀で巻き込むように挟むと切っ先で男の腕を斬り剣を奪い取る。

男が仕込みナイフを出す間も与えずその首を刎ね、その頭を掴むと残り3人がいる方向に向かって投げつける。生首の飛来を避けた3人のうち、1人になった方に狙いを定めてその懐に飛び込む。エリカに向かって斬りかかってくるが、まともにも力も入れてないその攻撃は騎士団の鎧で軽々と弾かれる。

そして男の口に刀を突っ込むと一捻りして引き抜く。

「弱い、弱すぎます。運動するにも入りませんね、これじゃ」

残り2人。

闘技場の歓声をBGMにしながら、エリカは2人の男に手の平を向けた。このような形で使いたくはなかったが、腕へと魔力を伝導させていき、手の平で炎を作り出す。何度も練習し、暴走無しで火球を作れるようになったエリカはその火球を男の1人に向かって飛ばす。

それほど速くはないため男も余裕を持って回避することが出来たが、火球はそれで終わらなかつた。回避したと思ったらもう1つの火球

が男に襲い掛かり、それに気を取られた一瞬の間隙について背後に回り込んだ火球が男の後頭部に命中した。

「ぐああああああっ！！！！！！」

炎に包まれて男がのたうち回り、頭の炎を消そうともう1人の男がその周りで右往左往している。

「安心してください、消し炭になるまで燃やしてあげます」

魔法で作り出された炎はそう簡単には消えない。燃やしているものが可燃物ではないため、水をかけたとしても消えることはない。

<ふん、いい加減諦めんか>

聞こえていないだろうが、アレックスがそんなことを言うと起き上がり、炎を消そうと必死な男に背後から噛みつく。

さすがは軍狼、人間の急所を心得ているようで、ただの一噛みで首の骨を砕く。

<余計なおせっかいだったかな？>

ダラリと力なく倒れた男の上で牙から血を滴らせたアレックスが尋ねると、エリカは小さく首を振った。

「別にいいですよ。それはともかくとして、これ、どうしましょう？」

部屋には10人の死体が転がっている。おまけに血の海、足の踏み

場もないくらいに床は真っ赤に染まっている。こんな状況を見られたらどうなるかは考えたくもない。

「では、お掃除の時間ですね」

不意に扉の方から聞こえてきた声に驚いて振り向くと、観客席にいるはずのユーリが立っていた。

「ゆ、ユーリさん、どぞど、どつしてここに？」

ユーリはにこやかな笑みを崩さずに部屋の中に入ってくる。血の海を歩いているはずなのに、表情は一切揺らぐず、それどころか足音1つ立たない。

むしろ先ほどまで冷静沈着の極みだったはずのエリカが動揺しまくっている。

「いえ、試合はどうもエリカ様の出番なく終わりそうな気配でしたので、ここで皆様をお迎えしようかと思いましたが、どうもそれどころではないようですね……」

辺りに散乱する死体を見て、どうしてここまで冷静になれるのか理解できない。エリカ自身がやったことだからエリカはどうも思わないが、突然そんな現場に居合わせたらエリカでも動揺ぐらいするだろう。

「では……」

ヒラリと指を振ると、血が巻き上がる様のように渦巻いて巨大な赤い水球を作り出す。ユーリはその水球を操って扉の外へと追いやる。

どこへ向かったかはおそらくユーリしか知らないだろう。

「遺体は……ま、こんなもんでしょうか」

辺りを見渡して手近な死体を持ち上げると血で服が汚れるのを全く気にせず死体を背負って部屋の外へ出る。そしてしばらくすると背中が真っ赤に染まったユーリが戻ってきて、今度は首と胸が生き別れた死体に近寄り胸を担ぐと頭を掴んで再び外へと出ていった。

それを10回繰り返してようやく全ての死体が部屋から消え失せると、水魔法で部屋を隈なく洗浄していく。

その様子は正確無比で、まるで普段からそのような事を行っているかのように思えてしまう。

そんなエリカ的心情を知ってか知らずか、ユーリは床にこびり付いた血が乾く前に綺麗にしつつ口を開いた。

「メイドになる前は国の研究所にいました。あそこでは死体が出るのは日常茶飯事でしたから」

死体慣れならエリカもしているが、ユーリのようなまだこれからの人生の方が圧倒的に長い女性が死体慣れしているのも考え物だ。

エリカはユーリが掃除しているのを呆気にとられながら見ているしかなかった。

第54話 飛んで火にいる夏の虫（後書き）

妙にグロテスクな表現が入ってしまった感が否めません。

どうも、ハモニカです。

ようやく主人公が無双できるようになってきたかな？　なんて、楽観視している今日この頃です。

試合なんかで戦うよりも、スタンドプレイした方がカッコいい感じがしたので今回はこんな感じになりました。

しかし、どうなることやら。

ではでは、また次回。

ご感想などお待ちしております。

第55話 クンクン嗅がれた、ってことですか？（前書き）

ふぐう、腹に強烈なダメージを喰らって一晩苦しみましたよお。

夕飯に餃子を食べようと思って焼いて、お皿に盛りつけようとしたらツルツと滑って……後はお察しください。三秒ルールなんて都市伝説だという事を身を持って思い知りましたよ。落ちた瞬間、皿を置き、即座に拾い上げたわけですが、なんかついていたんでしょうね、寝ようとした時に腹が痛くなってきましたよ。

ハモニカは結構そういう悪い意味での勿体ない精神が強いようで、結構やりますが、今回ほど表だって腹の中を重戦車が走り回ったのは初めてです。

いつもはバイクが走ってるくらいが精々で、全く影響ないときの方が多かったためですね。

いや、正直重戦車が歩兵一個連隊連れてやってくる感じ？ ザツザツザツザツという音が聞こえてきて、その後にキュラキュラキュラキュラってデカいのがあああああ!!!

ああ、今度からこういう事が無いようにしたいですね。ここの更新だけでなく学業にも影響でかねないですから。

とはいえ、今現在も実はちょっとまだ残ってたりww

前書きなのに関係ない話してましたね、ではでは本編どうぞ。

イ
テ
テ
W
W

第55話 クンクン嗅がれた、ってことですか？

「勝負あり、だな」

ジャックが試合終了を宣言する。

セラの喉元に巨大な剣を突きつけながら、ジャックは得意げな表情をしている。

「アクイラの人間兵器は健在のようね……」

皮肉を込めてセラがそう言うが、今のジャックにはむしろそれは褒め言葉のようだ。ニツと笑うとジャックは大剣を引き、その代わりに反対の手を差し伸べた。

試合は終始アクイラ騎士団有利に運んだ。エリカが登場しなければならぬ理由はほぼなかっただろう。シルヴィアが倒されたのは予想外であったが、それ以外の損耗はなかった。

ジーンは多少傷を負ったが、問題ない程度だ。バーバラに関しては言わずもがな、怪我と言えるようなものは一切受けていない。

ジャックはセラとやりあったために随分と傷があり、出血も激しいが、正直あの程度で死ぬような男ではない、というのがアクイラ騎士団内共通の認識であるため、出血多量でジャックが死ぬ心配はない。

正直、黒こげになっている部位も決して少なくはない。

だが、ジャックは満足げに息を吐きながらセラの手を掴んで立たせると、「どうだ参ったか」と言わんばかりに剣を天に突き上げる。

その瞬間、闘技場に割れんばかりの歓声が響き渡る。

バーバラが剣を納めて闘技場を見上げるとティティがホツとした表情をしている。その隣でグラン王が憮然とした表情で観客と共に拍手をしている。これは国家同士の競い合いではあるが、決して負かすための試合ではない。それを深く理解できているからこそ、グラン王は勝者に拍手を、そして敗者に労いをかける事ができるのだらう。

「ジーン、さっさとジャックを控室まで引つ張りなさい。あのままじゃぶつ倒れるわ。そうなったら運ぶの面倒だわ」

「了解つと。ジャック、ファンサービスは良いからさっさと戻るぞ」

「じゃかましい。俺は全然大丈夫……でもなかった」

「アホッ！」

立ちくらみでも起こしたのかジャックが額に手を当ててフラフラするのでジーンが慌てて肩を支える。実質1人でセラを相手していたジャックの体力損耗が激しいのは致し方のない事だ。

ジャックが後先考えずに突貫してくれたからこそ、バーバラは冷静に戦況を見る事が出来た。そしてジャックを中心に置いてセラを無事倒すことが出来た。

そのセラは、仲間に支えられながらすでに闘技場を後にしていた。

向こうの控室から騎士団員と思しき女性が現れてセラたちに治癒魔法をかけている。

「さて、私たちも戻らないとね」

バーバラはそう言うと、足元もおぼつかなくせに口だけは達者なジャックとそれを支えるジーンの後を追って闘技場を後にしていった。

「お疲れ様でした」

極力冷静を装った。そのせいか語尾が間延びしてしまったような気もするが、試合を終えて一息つくこうとしているジーンたちはエリカの劳いの言葉に力なく返事をする。と部屋に備え付けられている椅子やソファに倒れ込んだ。

とはいえ、ジャックはすぐに戻ってきたフィアによって小言を言わ

れながら医務室直行、部屋にはエリカを含めてバーバラ、ジーンしかいない。

「エリカが出る状況にならなかったのは嬉しいが、不満か？」

「まあ、ちょっと……」

実際のところ、試合をしていた4人と同程度かそれ以上の激しい戦闘をこの部屋で繰り広げていたのだが、ユーリの迅速かつ正確、そして何よりその完璧な仕事により部屋から血の気配はすっかり消えていた。

返り血をそれこそ血で染まっていない所などないほどに浴びたが、ユーリがエリカごと御手製ドラム式洗濯機に放り込んでくれたおかげできれいさっぱり落ちている。髪の毛もユーリが慣れた手つきで乾かしてくれたので、正直普段よりもスッキリしてしまった。

まさか、ここで10人ほど殺しましたと言うわけにはいかないのです。エリカはありふれた答えを返すと刀の柄に触れながらぼんやりとしているそぶりをする。

しばらく無言の時間が続き、バーバラがコーヒーを入れて飲む音だけが部屋に響く。

「今日はこれで終わりなんですよね？」

沈黙に耐えられなくなったエリカが天井に向けていた顔を水平に戻し、ジーン、バーバラ両者に聞こえるように言う。

「ええ、明日は午前がエオリアブルグ対ブラゴシュワイク、明後日

がブラゴシユワイクとの試合、そして勝率が高い騎士団が優勝ね。次の日は1日休息があつて、その次の日、つまり4日後にその騎士団に対する最後の試練をやつて終わり。優勝するのは良いけど、最後の試練とやらが面倒としか言いようがないわ……」

バーバラが暗記した内容を思い出す様につらつらと述べる。

「……………」

「……………言いたいことは分かるわよ」

表情に出ていたのだろう。ブラゴシユワイクのタロン騎士団との試合があるのを改めて聞かされ、やはり良い気はしない。

言いたい事は山ほどあるが、それを全て言葉にする気はさらさらない。

死なせはしない。命での贖いは先刻10人分の命によって支払われた。あの馬鹿トリオに望むのは、彼らが恐怖すること、自分たちがどれほど愚かな真似をしたか、それを知らしめるために刀を振るおつとエリカは心に決めている。

「ブラゴシユワイクとの試合では、全員一度に出るわ、その方があなたに暴走した時止めやすいから」

「暴走なんてしませんよ。ただ、彼らにはちょっとキツイ……、いや痛烈な？ ……いや地獄を見せ……いや生きている事を後悔させ……じゃない……泣いて死を懇願させ……とにかく反省させてやります」

「……死ぬこと前提になってないか？ 後半気になる単語があったんだが」

「気のせいです」

ソファで横になっっているジーンの疑問をバツサリ切り捨て、エリカは無然とした態度を貫く。

「まあ、殺さなきゃ何しても良いのがこの大会なんだけれど、それにも限度つてものがあるわ。それを超えるようなら止めに入るから。それと、あいつらもそう簡単には殺されてくれないわよ？」

バーバラの最後の台詞に「殺すの前提か」というジーンの呟きが聞こえたが、あえてスルーしてエリカはバーバラの話に耳を傾ける。

「あの馬鹿トリオも一応騎士の端くれ、魔法の技術に関してはそれなりの力を持っているわ。近づけないよう必死になられたら近づくのは容易じゃないわ。それに、彼らの従者がいる」

以前、何か思い出さしたくない事を思い出した時に見せたあの表情にバーバラがなった。

こうなるとその後に楽しい話は確実に来ないからエリカもそのつもりでバーバラの次の言葉を待った。

「貴族つてのは馬鹿よね、自分たちが本当に実力を持っていると思ってる。そして、本来主力となりうるだけの実力を持つ騎士たちを卑下して、虐げる」

「……残りの2人は、本当に強いということですか」

肯定の頷きが返される。

エリカはシャリオ王子が言っていた言葉を思い出して、今の話と照らし合わせる。

「ブラゴシユワイクの貴族以外の騎士は対人戦については突出して
るわ。元々あの国は陸軍国家だから、その手の実力者はわんさかい
るのよ。ただそれを束ねる指揮官が無能なだけ」

随分な言われようだが、あながち間違ってもいないようなので黙っ
ておく。頂点に立つてであろうシャリオ王子はそのご多分には入って
いなさそうではあるが、少なくともあの馬鹿トリオがそれに当ては
まっているのは事実だろう。

「今日の試合はこれで終わりだから、早々に城に引き上げるとする
か。ジャックたちを拾ってくる」

気怠そうにジーンは立ち上がると、ジャックたちを呼びに部屋を出
た。

城とコロシアムの間は、定期的に往復する馬車がある。それに乗れ
ば疲れている身体に鞭打つ必要もなく城まで行けるといふ寸法だ。

ジーンを見送り、部屋にはエリカとバーバラだけになった。そして
ジーンが出ていった扉が閉まる音を合図にしたかのようにバーバラ
は立ち上がってエリカの前に仁王立ちした。そこには先ほどまでの
どこか冗談めいた空気を纏っていたバーバラはおらず、鋭い目でエ
リカを睨んでいるバーバラがいた。

「吸血鬼の嗅覚を侮ってもらっては困るわ、エリカ」

全てを見透かしたような瞳にエリカは顔を背けそうになる。だが、それをすれば自白したも同然、エリカはバーバラの目をまっすぐに見返す。

「……だんまりかしら？ こう言っちゃなんだけど、気のせいっていうレベルの話じゃないわよ、これ。多分ジーンも気が付いているわ」

「え……」

ジーンの名前が出てきた事に生まれた一瞬の動揺、それをバーバラは見逃さなかった。エリカもすぐに自分の失態に気が付くが、時すでに遅し、全て露見してしまった。

「何があったかはあえて聞かないわ。だけど、これだけは言わせて私たちは仲間なの、もう少し頼ってよね？」

最初、叱責が来るとばかり思っていた。

エリカはバーバラの言葉を理解するのにはしばらくかかり、それを完璧に理解した時、ただただ頭を下げるしかなかった。

「細かい事は後でアレックスに詳しく聞かせてもらおうから。アレックス、あなたもちゃんと牙綺麗にしないとね」

<う、うむ……>

アレックスが気圧されたような声で言うのが聞こえ、エリカは苦笑

してしまう。

姫黒と黒羽についた大量の血は全て拭つてある。刀身が黒い、または黒に近い事もあり、拭いきれなかった分もほとんど目立たない。さすがに10人近くを斬つて完璧に血を拭い去る事は出来なかったが、そこはユーリによって可能な限り磨かれた。大概の事は出来るユーリに、エリカは感嘆と感謝しか出てこなかった。

ジャックたちを迎えに行くためコロシラムの中の通路を歩いていたジーンは、鼻を撫でながら険しい表情をしていた。

バーバラの予想通り、ジーンは血の臭いを嗅ぎ取っていたのだ。

ジーンはエリカと初めて会った時も、随分と距離があつたにも関わらずエリカが食べるために殺した獣たちの流した血に敏感に反応した。10人分の血が流れた現場に来て、それに気が付かないほど鈍感ではなかったという事だ。

（バーバラは何も言わなかったが、何か心当たりでもあったのだろうか？）

ジーンが部屋を出た直後、バーバラが立ち上がる気配を扉越しではあるが感じ取った。ジーンが気が付いてバーバラが気が付かない道理はない、エリカに詰め寄ったのだらうとジーンは見当をつける。

とはいえ、それで問題が解決したわけではない。

そもそも、エリカ1人だけがいたあの部屋で何故それほど大量の血が流れたのか、その根本が分からない。

決して心当たりがないわけではない。試合前にブラゴシユワイクの騎士と一悶着あったせいとも考えられなくはない。

それだけの事で、とジーンは考えたが、よくよく思えばエリカは彼らを殺そうとしていた。仕返しとばかりに「今度やつたらこうだぞ」と警告を発しに来て返り討ちに合ったとも考えられなくはない。

（それが本当だったとしても、この事が表沙汰になることはないだらうな……）

警告だらうがどうだらうと、この事が表に出ればブラゴシユワイクにとつて今後を左右しかねない不祥事に発展する。それだけは防ごうと必死になって関係者は事態の隠蔽に努めるだらう。

シヤリオ王子の耳にでも入れれば話は別だらうが、そういう事を専門にする者が情報を漏らすとは思えない。結局、何も「なかった」事にされるだらう。

エリカ自身が、戻ってきたジーンたちに何も言わなかったところからも、彼女自身なかったことにしたいという思いがあるのだろう。

（だが、仲間を殺されかけて黙ってるほど俺たちもお人よしじゃない……）

ジーンは前を見据える。通路に突き出た「医務室」の案内を視界に捉え、扉の前に立つ。

（考えても仕方ないか……。エリカ、お前の口から聞かせてもらうまで、俺たちは待つてるからな）

部屋の取っ手に手をかけ、それまでの考えを心の奥底にしまうと、扉を開いて医務室の中に入る。

「ジャック、大丈夫……か……？」

思考を普段通りに戻して医務室に入ったジーンは、茫然と目の前に広がる光景を見つめる事になった。

「んぐ？っ！ん？ん？っ！！」

ジャックが体中に包帯を巻かれ、ベッドに縛りつけられていた。そしてそれをフィアとシルヴィア、そしてシータス騎士団の面々が眺めているという状態だ。

何とか自らに施された拘束を外そうとジャックが暴れる度にベッドが揺れてガタンガタンという音を立てる。

「あら、ジーン、どうしたの？」

フィアがジーンに気が付いて顔を向けてくる。

「あ、いや、城に戻るから皆を迎えに来たんだが、どういう状態だ？」

「怪我は直したけど、一晩は大人しくしていて、って言ったら『俺が大人しくなんてすると思うか？』なんて言ったのよ。だから、実力行使」

フィアは既にだいぶ回復しているようで立っているシルヴィア、そしてセラたちシータス騎士団に視線を向ける。

どうやらジャック捕縛にはシータス騎士団も協力していたようだ。

「私たちとしても、人間兵器を負かす事が出来たような気がして気分が晴れました。これが、勝利というものですな」

多分、というより絶対に違う。

ジーンは内心でそんなことを思いながらセラの言葉を聞いていた。だがシータス騎士団の面々にとってはまさしく「大勝利」だったらしく、騎士たちが何故か感動によるものであるう涙を流している。よく見れば試合の後に出来たと思われる生傷があり、捕縛に際してジャックが激しく抵抗したという事が分かった。

手負いの熊は相当大暴れしたようだが、最終的には捕えられ、今に至ったということだ。

「ジャックはこのまま運んでもらうとして、シルヴィアとジーンは先に行って良いわよ。私はここの後片付けしてから戻るから」

「分かった」

「それじゃ先に戻ってるわね。セラ、今度は私とも戦いましょう？」

シルヴィアは部屋を出る前にセラに呼びかけた。セラは治療した後、にまた激しく動いてしまったせい、か塞いだ傷が開いたようで腕や足に包帯を巻かれた状態だったが、ここは指揮官らしく姿勢を正して力強く頷いてみせた。

「もちろん、負ける気はありません。ジーン殿、あなたとも一度サシで勝負がしたいのですが」

「ああ、ジャックが今回全部持って行ってしまったからな。よろしく頼むよ、と他の方とも、もちろんね」

ジャックを中心に戦った今回は、相手と正面から戦うというよりはヒットエンドランの戦い方が多かった。是非とも正面から戦いたいというのは、騎士として当然欲するところだった。

ジーンがそう言うのとセラだけでなく、他の騎士たちも嬉しそうに握手を求めてきた。

ブラゴシュウィクの騎士たちもこれくらい愛想が良くて親しみやすいと助かるのだが、などと考えるが、求めてもそうなるはずもないためその可能性は諦める。

「それじゃ、また明日。明日のブラゴシュウィクとの試合、応援し

てるよ」

ジーンはそう言つとシルヴィアと共に医務室を後にした。

第55話 クンクン嗅がれた、ってことですか？（後書き）

はい、表の試合はエリカ出ずに終了しちゃいました、テへ、ヤツチマツタZE

いや、本当は血の臭いさせながら戦って、その過程でバーバラなりジーンなりにばれる予定だったのですが、おやおや？ 予想外にジャックがやりすぎた、といった感じになってしまいました。

ジャックは超絶神兵ですからねえ。

超絶 神兵

って書くとなタにしなければならないんですがねw

それはともかくとして、皆様覚えていらっしやるでしょうか？

以前番外編でエリカの水着云々の話をしたんですが、実を言うところ書いた本人であるハモニカがこの事実をパーペキに忘れていたらしく……え？ 古い？ いや、ハモニカはそんなに古い人間ではないので大丈夫です……今さらになってそのイベントを何とかこじつけようとして、一日の休暇が出来ちゃったわけです。

ね、バーバラが今回言ってたでしょう？

はい、実害が出る前に間に合っ
てよかったW W

では、また次回お会いしまし
ょう。

ご感想などお待ちしております。

第56話 そうだ、散歩しよう(前書き)

JRO海じゃあるまいて……。

昨日の間にだいぶ書き上げる事が出来たので、何とか今日投稿することが出来ました。いつもこれくらい執筆が順調だと楽なんですけどね……。

ではでは、とじつぞ。

第56話 そうだ、散歩しよう

大会2日目が始まった。

午前はエオリアブルグのシータス騎士団とブラゴシユワイクのタロン騎士団の試合だ。昨日と変わらずホームのシータス騎士団へ送られる声援はタロン騎士団の比ではない。

それどころか昨日アクイラ騎士団に負けたのもあってそのボルテージは下がることを知らない。まだ試合が始まってもないのに噴火寸前の火山のような状態になっている。

その声援は城の部屋まで聞こえてくる。今日は1日やる事がないエリカは城に宛がわれた部屋のベッドでゴロゴロしていたのだが、常に部屋の扉の傍にいるユーリのおかげで休んでいる気になれない。

昨日、あんな事があつた直後なのだ、嫌でも何かと勘ぐってしまう。

「……………暇です」

天上をぼんやりと眺めながらポツリとそんな事を呟く。

「試合は見に行かれないのですか？」

「行つたが最後、あの馬鹿トリオに襲い掛かりかねないので」

バーバラにはああ言ったが、正直明日の試合で試合を忘れてあの3

人を殺しそうになる可能性はとても高い。龍とは普段は非常に穏やかな性格を持っているのだが、一度怒りの沸点を超えるとなかなか元に戻らない。

ヒトが見るのは大体その状態の龍であるため、「龍は凶暴」という半分は正しいが半分間違った評価がなされている。

実際、冷静を装ってはいるがまだエリカの怒りは沸点よりも上にある。出来れば今からでも殺しに行きたいくらいだが、それは理性で押しとどめている。あまりに多くの人たちに迷惑をかけると分かっているし、自分の今後にも非常に不都合になる。

さらに言えば、クライムから貰った情報にあつたシャドーという集団。ここエオリアブルグに終結しているという情報が正しければ、今こうしている間にも彼らはエリカを捕まえようとしているかもしれない。そんな時に下手な動きを見せれば相手の思うつぼ、エリカは殺すにしても試合中の不幸な事故で済ませるつもりでいる。

「……そういえば、エオリアブルグの名産品ってなんですか？」

ふと、出発前に騎士団の数人がお土産を頼まれているという話をしていた事を思い出した。エリカもせっかく来たのだから、この国ならではの物を見たくなり、顔だけ起こしてユーリに視線を向ける。

明後日は全騎士団の面々が一堂に集まり、3日間の疲れを癒すために首都近くにある湖の畔に行くことになっている。ブラゴシユワイクの連中がいる事を除けばエリカも楽しめる要素しかないのだが、さすがにそういう場では見る事が出来ないものもあるだろう。

昨日、城と闘技場を往復した際に道すがらに見えた華やかな店など

を思い出していると、ユーリが何か思い出したように指を立ててみせた。

「でしたら、『フクロウの壁』というお店がお勧めですね。この国のお土産を買うもよし、あそこの料理を食べるもよし、です」

前者にはこれと言った反応を示さなかったエリカであったが、後者には飛び跳ねるようにベッドから起き上がるという俊敏な反応を示した。

そしてユーリの前まで早歩きで近寄るとその両肩をガツシリと掴む。

「あ、あの……？」

「ユーリさん……」

いきなりの事にユーリが戸惑う。エリカは顔を上げて真剣な顔でユーリの目をまっすぐ見ると、たった今最重要に分類された情報をユーリから引き出すために肩に置く手に力を込める。

「その店の場所は？」

「……………で、どうして私が案内を？」

それが理解できない、と言わんばかりに不満げな顔をするセラが、エリカとジーンの前を歩いている。

試合は予定通り行われ、僅差でシートス騎士団が勝利した。観戦しに行っていたジャック曰く、「あの2人は面白え」らしい。バーバラが言っていた通り、ブラゴシユワイク戦で障害となるのは馬鹿トリオを守る2人という事なのだろう。

ジャックは仮眠を取ると言っていたため出てこなかった。バーバラは晴天の中街中を歩く気にはなれないという理由でダウン。シルヴィアは今日の午後に行われる闘技場でのイベントを見ると言っており、フィアは明日に備えて体力を温存しておきたいという理由でエリカと共に来る事は出来なかった。

結局、共に行くのはジーンだけになってしまったのだが、それでは土地勘もないエリカたちが道に迷ってしまうのは目に見えていたため、偶然見かけたセラたちシートス騎士団を捕まえて道案内を1人頼むことにした。

誰が一番この町に詳しく、顔も広いかという話になり、セラが最もそれに符合しているという事で話がついた。正直他の男たちが結託してセラに道案内を押し付けたようにも思えたが、セラはその場では文句も言わずに了承してくれた。

「私だって試合が終わった直後で疲れてるんですよ？」

「なら、その『フクロウの壁』という店で疲れを取りましようよ」

「いや、ゆっくり寝たいのだけれど……」

そこまで言っただけでエリカを見たセラは、エリカの顔が童心に戻ったその様子になっていたので、それをみて反論を諦めた。後にジーンはその時の事を「あれは何を言っても聞いていない顔だった」と振り返っている。

エリカとしては、アールドールンの城下町とは一味も二味も違うエオリアブルグの風景は興味深いものばかりだった。

最初に気になったのはエオリアブルグの服装だ。

アールドールンよりも緯度が高い位置にあるエオリアブルグは夏でも比較的涼しいそうだ。そのため全体的に厚手の服や、保温性に優れた服を着ている人が多い。冬にもなれば豪雪が降るそうなので、建物の屋根は片側に傾く様に作られている上、その傾きが通りに向かっていないように工夫されている。屋根に積もった雪が通りを歩く人の上に落ちないようにする工夫で、なんだかんだでセラは詳しくその言った事を説明してくれた。

「俺たちの国じゃ考える事もない工夫だな」

「アールドールンでは雪は降らないのですか？」

ジーンの言葉にセラが意外そうな顔をする。

「いや、降るには降るが、足首まで積もれば良い方だな。1階部分が埋まるなんて信じられん」

エリカはそれを聞いて少し残念に思ったが、実を言うと龍の国も高緯度にある。しかも山の上、これで豪雪にならない方がおかしく、ヒトの建物の1階部分などというレベルではなく、場所によっては埋まってしまうと大型の龍でもその身体が全て埋まるような豪雪地帯もある。冬場は川の水も凍ってしまうため、その雪を溶かして飲み水を確保するようにしている。

「やはり、国によって天候は大きく違うのですね。ブラゴシユワイクは夏場非常に熱いそうですしね」

「そう言えば、あつちでは水に関係する遊びが人気だそうだな。気温が高いのもその理由の1つという事か」

そんな事を話しているうちに、3人は目的の店にたどり着いた。

店頭には「フクロウの壁」と書かれた看板があり、通りに面した壁は全て取り払われ内部が良く見えるようにされている。棚には小さなアクセサリーが並んでおり、店の奥には飲食できる場所も見受けられる。

「綺麗な店ですね」

エリカが呟くと、セラが自分の事のように嬉しそうな顔をする。

「この町では1位を争う人気店です。観光客がお土産を買っていくこともあれば、食事をしにこの町の人に来ることもあります」

セラが店の中を覗いて席に空きがあるか確認する。昼過ぎというところで昼食を食べている人が多いように見えるが、まだ空いている席も幾つかある。

「ギリギリですね。これからここは30分待ちくらい覚悟する時間帯です。運が良かったです」

そう言うとセラは店の中に入っていき、エリカとジーンもその後が続く。

セラが店に入った瞬間、店の中の全ての視線がセラに向けられたのは気のせいではないだろう。容姿端麗、今回の大会で騎士団の大将を務めているセラを見て彼女だと気が付かない者はいなかった。

だからこそ、その後誰もセラに話しかける事もなければ、セラに視線を向ける事もなくなったのには驚かされた。

「プライベートで来ていますからね。邪魔されたくないのは誰だっ
て同じですよ」

本当の所であれば、きっと皆セラと話をしたいと思っているのだろう。

だが、騎士団の服に身を包んでいないセラは騎士団のセラではなく一般人という括りになるようだ。店の人の態度が多少違うのは別にして、皆平然と食事や談話を続けている。

「さてと、何にしますか？」

メニューを受け取り、セラはそれを広げてエリカたちに見せた。

「私のお勧めとしては……これですね」

メニューに書かれた単語を指差すと、エリカはその文字とその隣に描かれた円柱状のパンにも見えるものに視線を向ける。何かのジャムがかかっているのか、パンの上には何かが垂らされたような物も描かれていて、お勧めというだけあって美味しそうだ。

「それじゃそれにしてください。ジーンさんはどうします?」

「俺はこの鶏肉の照り焼きを貰おう。試合観戦していたから腹が減った」

「私も同じものを貰いましょうか。すいませ〜ん」

セラが全員の注文を確認すると店員を呼んで手を上げた。店を回っていた店員がメモ帳を片手にやって来て注文をそのメモ帳に書き取っていく。一礼して店員はカウンターの背後へと消えていく。カウンターの背後には厨房があるようで、香ばしい肉の匂いや、甘いスイートの匂いなどが店舗の方にも流れてくる。

そのおかげで何も運動をしていないエリカの腹の虫が鳴いてしまう。

「そういえば、初めて会った時から気になっていたんですけど、エリカさんの髪、綺麗ですね」

「そう、ですか? 前にもそんな事を言われた記憶はあるんですが……」

「黒髪つて、それ自体あまり見かけないのもあるけれど、光を反射させた時綺麗に見えるんです。……ていうかその艶、どうやって維持しているんですか？ 今後のために聞いておきたいんですけど」
長い髪は手入れが大変なんです、と言いながらセラは自分の短い髪を指でクルクルと巻く。

「そうは言っても、何もしてませんし……なんででしょうね？」

「……俺に振るなよ」

ジーンが困った表情でエリカの方に顔を向ける。こういう話題を男であるジーンに振るのはお門違いも良い所だろう。

「何もせずに？ 羨ましいですね。それにしても、そんなに長い髪、戦闘中邪魔になりませんか？」

言われて初めてエリカは気が付いたが、激しく動くと髪が乱れるのは事実だ。振り向いた瞬間など視界の3分の1くらいが黒い物で隠れている事もある。邪魔にならないと言えば嘘になるが、切りたくはない。

「ふふ、ちよつと失礼しますよ」

席を立ててエリカの背後に回る。ポケットから紐を取り出すと長いエリカの黒髪を後ろで結んでいく。

髪の毛を後ろに引つ張り上げられるのに首に力を入れて抗っていると、髪の毛を右に引つ張られ、今度は左に、と2つに髪の毛がまとめられていくように感じられる。

「……はい、完成」

セラに肩を叩かれて恐る恐る自分の頭に手を持っていく。耳にかかっていた髪が後ろに持つていかれており、丁度側頭部の少し上の辺りでまとめられているのが分かる。反対側にも同じものがあり、左右で同じようにまとめられているというのは分かる。まとめられた髪は一度上に向かっているが、すぐに全体の重さで下に向かっている。背中の半ば辺りまで髪の毛の先端が上がっている。

「ツインテールだけど、似合ってますよ」

「鏡があれば是非見てみたいんですけど」

すぐさまセラから手渡される手鏡。まるで用意していたかのように思える。

その手鏡を受け取って自分の顔を見ると、そこには別人のようになった自分の顔があった。髪型1つでここまで変わるものなのか、と思えるほどだ。

「どうですか、ジーンさん？」

「ああ、似合ってるぞ。その方が戦いやすいんじゃないか？」

試しに少し首を回してみるが、全くというほど邪魔にはならない。ピョンピョンとまとめられた髪が跳ねてはいるが、それも気になるほどのものではない。

「良かった。あ、セラさん、やり方教えてください」

「良いですよ。簡単ですからすぐに出来るようになると思います」

「……………見たか？」

通りの反対側、あまり繁盛しているようには思えない小さな店に2人組の男が座っていた。目の前のテーブルにはコーヒーが淹れられているが、既に湯気も消え失せて随分経つ。

彼らの視線は通りを挟んで反対側、「フクロウの壁」にいる1人の少女に向けられている。

「まさか、ここまで計画通りとはな。ドクター、予言者か何かか？」

「それだけ綿密な計画だつて事さ。だが、ここで確認できたのは運が良い。ターゲットがこの町にいるのかもすっかりと確認できたからな」

「昨日の試合に出てなかった時はヒヤリとしたぜ」

「フンと鼻を鳴らすと男がそこで初めて完全に冷めてしまったコーヒ
ーを一口すする。」

「……それで、そっちの準備は？」

「用意は出来ている。後はタイミングだが……。本当に上手く行く
んだろうな？」

「最終的にはドクター自身が動くからな。俺たちとしては奴を信用
するしかあるまい。だが奴とは道中を共にしているが目的地が同じ
わけではない。警戒しておくに越した事はないかもしれんな」

「他の奴らも続々と集結している。ブラゴシユワイクの愚かな貴族
には感謝しないとな」

「ああ、都合よく死体を用意してくれた。死体の回収は？」

「聞かれた男は思い出せなかったのか懐から折り畳まれた紙を取り出
した。随分とくたびれたその紙を広げるとびっしりと文字が書かれ
ている。」

「……死体^{モルグ}安置所に浮かんでいた死体はしっかりあいつの刀傷がつ
いていた。使いどころを間違えなければ……」

それを聞いた相方が満足げに頷く。

「物的証拠があれば我々以外も動くことするだろう。その中を潜り

抜けるからには人手が10数人は必要だ。そっちは？」

「問題ない。すでに9人が首都に入っている。残りも一両日中には」
後は覚えている、と小さく頷きながら男は紙をしまつ。そして一度窓から見える反対側の店に視線を向け、コーヒーを流し込む。

「服は？」

「内部なかの仲間が用意する。人数分は既にこちらに渡す準備があるそ
うだ」

「ここの連中も酔狂な人間が揃っているな。さすがは表沙汰に出来ない事を平然とやって来た王国だ」

そう言つて鼻で笑つと、反対の男も笑みを浮かべる。

傍から見れば怪しげな男が2人、それこそ悪だくみをしているようにしか見えないだろう。だが、繁盛していないこの店には店主の男しかおらず、その男にしてもカウンターの反対側で新聞を読んでいる。窓際のテーブルでの会話など聞こえていない。

「……」
『そして鳥は翼を？がれて地に墜ちる。旅は終わりを迎え、
我らが旅立つ時が来る』

第56話 そうだ、散歩しよう(後書き)

うわぁ、出ちゃったよ、悪役コンビww

ああ嫌だ、平穏な日々を奪わないで欲しいですねえ。

そんな事はどうでもいいんですが(え? どうでも良くない?)もうすぐ龍旅も4カ月目になるうとしていたんですね、この間気が付きましたよ。

早いもんです。チマチマやって来たわけですが、チリも積もれば山となっていくわけですね。

まあ、今後もチマチマやっていくわけですが……。

ではでは、また次回。

ご感想などお待ちしております。

追伸

最近少しずつですが総合評価が増えている事に気が付きました。

評価をしてくださっている方々に無上の感謝を申し上げます。

そしてもちろん、この龍旅を読んでくださっている方々、お気に入り登録してくださっている方々にも感謝しております。

では。

第57話 準戦略級魔法（前書き）

10月22日：誤字修正しました。

第57話 準戦略級魔法

「さてと、エリカ親衛隊の出陣だぜ」

「ふざけたこと言ってるとまずジャックさんから、潰しますよ?」

シートラス騎士団の時と違い、全員で闘技場に出ると、ジャックは腕を振りながらそんな事を言っていた。エリカの言葉にジャックが「それはねえぜ」という表情をするが、それは場を和ませる事にしかならなかった。

因みに、エリカの現在の髪型は普段に戻っている。やり方を教えてもらったが良いが、左右対称にするのが存外難しく、自力でやった結果ジャックの大爆笑を誘発してしまったためだ。

慣れるまではヒトに見せるまい、とエリカが誓ったのも致し方ないと言える。

「馬鹿トリオとやらは遠距離戦をメインにしているわ。前衛2人を抜ければこちらの思いつきよ」

「抜ければ、ね」

シルヴィアが冷静にバーバラの言葉を補う。昨日の試合を観戦していたジャックたちは彼らの実力を目に焼き付けているのだろう。そもそも、対戦相手に全く興味を持っていなかったエリカも問題なのだが。

「良いわね？　こういう試合に私情を持ちこむのはご法度だけれど、これはエリカの私闘にさせてもらうわよ。皆文句はないわね？」

バーバラは剣を抜き、不敵な笑みを浮かべながらそう言ったが、反対する者は誰もいなかった。ジャックは少しつまらないという表情をしているが、ジャックが戦いたい相手とエリカが倒したい相手が違う事が幸いしてジャックも不満を口にはしなかった。心の底から戦いを味わいたい彼からしてみれば、私闘を目の前でされるのは興奮めになっってしまうのだろう。

「俺の敵は遠巻きに生ぬるい魔法を使うような奴じゃねえからな。それに、嬢ちゃんが片手で吹っ飛ばすような奴、俺にかかれば鼻息で吹っ飛ばせるぜ」

「いや、それは無理だろう？」

不満を解消するかのようにジャックが大声でそんな事を言うと、すかさずジーンが突っ込みを入れる。

「そんな事はない……と、お出ましか」

ジーンに向かって何かを言おうとしたジャックが視線を前に向け、手に持つ大剣に力を込めた。

見れば正面に5人の姿があった。3つはエリカが覚えたくもないのに覚えてしまったあの男女、そしてその後ろに付き従うように2人の騎士が立っていた。表情は読み取れないが、エリカの経験があの5人の中で最も警戒すべき相手があのだと感じ取る。

白を基調とした精悍な鎧に身を包んだ2人の前に立つ馬鹿トリオは、

相変わらず人を見下すような目でエリカたちを見ている。

まるで一昨日の事など無かったような表情をしているが、エリカにはその自信がどこから来るのか分からない。

「先日はよくもやってくれましたわね。この試合で、その身体に思い知らせてあげますわ！」

女性用のものとはいえ戦闘用の鎧のだが、無駄な装飾が多い事が遠くからでも分かるほどの動きづらそうな物を着込んでいる馬鹿トリオの1人の女が憎たらしげな目でエリカを睨み付ける。先日同様扇を手に持ち、武器と言える物を見につけているようには見えない。近接戦闘をする気は最初からないという事か。

「僕に剣を向けた報いは、払ってもらおう！」

「……あたしより、あちらの方がよっぽど私情を持ちこんでいるよ
うな気がするんですが……」

「みなまで言うな。俺もそう思ったから」

馬鹿トリオが餌を求める雛鳥のように喚き散らしているのを見て、エリカは冷めた目でそれを見ていた。

エリカが本気になればあの3人を瞬時に倒す自信があった。魔法による攻撃のほとんどは黒鱗で防ぐことが出来るため、彼らの攻撃がエリカに通る道理はほとんどないに等しい。

そうになると、目下の障害はあの2人という事になる。あの馬鹿トリオの従者か何かなのか、3人が喚いている間は何も言わず、ただ黙

つてエリカたちを見据えていた。大剣はとてもじゃないが正規品とは思えない粗末なもので、持ち手には布が巻かれて滑り止めにされているが、破れてその意味を成していない場所も多い。

また刀身も刃こぼれが酷く、斬る事はまず無理である事が遠目にも分かる。

「それじゃ、あの2人をエリカが突破したら私たちは足止めに徹するわよ」

「その必要もあるか微妙ですね……」

バーバラが飛ばした指示に疑問符を投げ出したエリカに4人の視線が集中する。エリカは激しく喚いている3人よりもその背後の2人に注意を集中させていたのだが、その挙動からある事に気が付いた。

「どういう意味かしら、エリカ？」

シルヴィアが剣の形を変化させながら聞くと、エリカは4人にだけ分かる様に2人を指差した。

「右の男の人は腕を負傷しています。単純な裂傷か何かでしょうけどきちんとした治療を受けてるとは思えませぬ。左の人は足に内出血か何かあるみたいです、先ほどから左足を庇うような体重の乗せ方をしています」

「……よく分かるな」

ジーンが感心を通り越して呆気にとられている。

エリカも別に意識していたわけではない。ただ、獲物を狩る者は相手の状態に敏感に反応できてしまうというもはや条件反射に近い感覚を持っている。それに違和感が引っかけただけの事だ。

だが、疑問も残る。

「どうして、治療しないんでしょう……？」

当然、万全の状態でなければ負ける公算は大きくなる。それが分からないほどあの馬鹿トリオも愚かではないと思いたい。あの3人が勝つ気満々なのは嫌でも分かるが、それにも関わらず接近戦の主力2人が全力を出し得ない状況というのは理解できない。

「けっ、どうせあの馬鹿共に昨日負けた腹いせにやられたんじゃねえか？ 下種がやる事とはことん下種だからな。これじゃ弱い者いじめになっちまうじゃねえか……」

相手が手負いだと知ったジャックは落胆の表情を隠そうとはしなかった。他の3人も戦うべきか悩んでいるようで、複雑な表情をしている。

「……多分、防戦一方になる事はあちらも想定済みでしょう。2人があたしたちを足止めしている間にあの3人が強力な攻撃をぶつけてくるつもりなのでしょうね」

「なら話は早い。あいつらを速攻でリタイアさせてあの3人をフルボッコだ」

それ以上言葉はいらなかった。

開始の合図が闘技場に響き渡り、エリカたちはシルヴィアを除いた4人で相手に向かって走り出す。対してタロン騎士団は例の2人が飛び出してくるが、やはりどこか動きが鈍いように思える。

先頭に行くのはジャックだ。次いでジーン、バーバラ、エリカが横一線に並んで続いていく。

「うらあっ!!」

ジャックが思い切り大剣を2人の間目掛けて振り下ろす。相手2人が左右に分かれてその攻撃を避けると、中央に出来た突破口をジーンが潜り抜けようとする。

「行けるかつ……うおっ?!」

2人の間を絶妙なタイミングですり抜けようとした矢先、ジーンの目の前を大剣が振り下ろされた。濟んでの所で急制動をかけて直撃は防いだが、足は止まってしまったため再び4人の前に2人が防衛線を構築してしまう。

避けると同時に剣を振って突破しようとしたジーンを止めたのだ。明らかにそうなる事が分かっていたがための動きで、手負いとはいえ決して侮る事の出来る相手ではないという事を思い知らされることになった。

(足を怪我しているのにあの動き……、おかしい、踏ん張れば相当痛むはずじゃ……)

エリカの判断では、足を負傷している騎士は歩くことは問題なくとも力を込めて踏ん張れば痛みが出るのは確実なレベルの内出血をし

ている。

避けた直後にジーンを止めるために片足に重心を移して踏ん張ったため、痛みが彼を襲ったはずなのだ。

だが、表情はまったく歪まず、平然と立っている。先ほどまでのように足を庇うような動きはするが、それが動きを鈍くしている原因にはなっていないかのようだ。

「おいおい、怪我してるとは思えねえなあ」

ジャックがその動きに少し楽しそうな声を上げる。

「おしゃべりしてる暇はないわよ、来るわ！」

不意に頭上に真っ赤な球体が出現して、エリカたちに向かって落下してくる。とてもじゃないが個人レベルで耐えられるような色をしていないのでエリカたちは瞬時に飛び退いて落下点から離れる。

「遅いですわよ!!!」

回避した瞬間、巨大な火球が脈動して4つの人の大きさほどの火球に分裂する。速度を一気に上げて回避したばかりで次の動きへの予備動作中だった4人に突っ込んでくる。

直撃、と思われた時、エリカたちの目の前に青白い盾が出現する。地面から生えるように現れた盾は火球がぶつかった瞬間蒸気を上げて消えていったが、消えた時には火球もまた消滅していた。馬鹿トリオの女性が茫然とその様子を見ている。

「あの女とは相性が良いみたいね、シルヴィア？」

盾を作り出したのはほかでもないシルヴィアだ。剣を地面に突き立て、その周囲には空気中の水分が凝結したのか白い霧がかかっている。その中心でシルヴィアは不敵な笑みを浮かべていた。

「セラには火力負けしたけど、分散してもらったおかげでこちらが押し勝てたわ。さすがに4つ同時は初めてだったけど……前見て前！」

シルヴィアに叫ばれて前を向けば、今度は優男が何かを詠唱していた。先ほどの火球のおかげで分散してしまった4人の中から迷うことなくエリカに手を向けると、その手が青白い稲妻を発生させる。

刹那、エリカに向かって稲妻が突進する。とてもじゃないが認知できる速度ではない雷は一直線にエリカの胸を捉え、背後に貫通していく。

「がつー!!」

「エリカ!!」

駆け寄ろうとしたバーバラをエリカは手で制した。バーバラは制したその手とは反対側の手を見てハッとなった。

その手は真っ黒になっていた。黒焦げになったのではなく、黒燐を発現させているのだと瞬時に理解したバーバラはエリカが今の稲妻を回避することが出来たと判断した。

「エリカ、大丈夫なのか!？」

「大丈夫です……、ちょっと入りましたけど」

鎧には稲妻によって開けられた穴が開いている。だが、それだけで稲妻はエリカの胸を貫くには至らず、避雷針よろしく黒鱗によって左腕へと流れていったのだ。黒鱗を通るわけだから、体内に電撃はほとんど入っていない。

（黒鱗が金属に近いもので助かりましたね……）

そうでなくとも、黒鱗が物理的に破壊されない事は分かっていた。電撃はもろに食らっていただろうが、胸に風穴を開けられるよりはマシだ。電撃が左手に持つ黒羽に残っているのか、時折バチツと放電するような音と共に火花のようなものが散る。

「ば、馬鹿な。僕の電撃を喰らって立っていられるだと……？ シ
ータスの連中は1発だったのに」

優男も随分とショックを受けているようだ。自分たちの力を過信したがために、それが破られた時思考が止まってしまったのだ。だが、まだ1人残っている。

「く、くそつ、お前ら揃ってだらしないぞ！ こうなったら僕がや
つてやる！ おい、リコ、ネア、そいつらを僕に近づけるな！」

リコ、ネアというのはあの2人の名のようだ。小さく頷いた2人はエリカたちと慌てながらも魔法を使おうとする男の間に入る。

「邪魔するなら、退いてもらいますー！」

エリカが走り出す。

そしてそれにジーン、ジャック、バーバラが続く。女が作り出す火球が当てる事よりも牽制するために雨霰のように頭上から降り注ぐが、狙って撃っていないようでありかなり照準が甘い。直撃コースにあるものも遠巻きがゆえに冷静かつ集中して魔法を編み出せるシルヴィアによって作られる氷の盾で防がれる。優男の電撃は全て先頭を行くエリカが受け流していく。

先ほどは黒鱗を前面に展開したが、今度は腕だけに発現させる。刀の切っ先で電撃を拾い、地面へと誘導していく。両手に刀を持つエリカの対電撃の有効範囲はかなり広いため、よっぽど工夫しないと後方に行くジーンたちに電撃が通る事はない。

「信じられん、電撃を見切ってたのか、嬢ちゃんは！」

見切ってはいない、と言いたいが、さすがに今は言っている暇がない。優男の視線や仕草から誰を狙っているのかを見抜き、優男と目標の間に割り込むように刀を突きだしているにすぎない。さすがのエリカも電撃を見切れるほど目は良くない。

だが、迎撃できるのも外部からの妨害が無い時だけの事だ。リコ、ネア両名が飛び出してきたため電撃の迎撃が出来なくなり、優男の攻撃がダイレクトにジーンたちへと向かっていく。

「ジーンさん！」

稲妻がジーンに迫り、その鼻先で霧散する。見ればバーバラがジーンの前に立っていた。

「まったく、エリカみたいな子に守られるなんて、あなたたち男失格よ?」

「バーバラ、大丈夫なのか?」

「私を誰だと思ってるのかしら、ジーン? とつても死にくい吸血鬼よ? 多少身体が黒焦げにされても問題ないわ」

エリカのやり方を見て実践したのだろう。剣を突き出して避雷針とし、バーバラの身体を通じて地面へ逃がしたのだ。黒鱗があるエリカと違いバーバラは生身だ。言葉とは裏腹に立っているのだけでも辛そうだ。

「ほら、あの見境ない魔法は私とシルヴィアで守るから、ジーンとジャックはエリカに加勢しなさい。シルヴィア、氷で雷撃を受け止めなさい!」

「出来るは出来るけど、貫通されたら意味ないわよ!」?

「正面から受け止めなきゃ良いのよ。稲妻に対して斜めに盾を作つて、地面に逃がしなさい。多いときは私も身体張るから!」

「ああもう、死なないでよね!」

大量の盾を作り出し、頭上の火球に対応しながらもそれとは別に対電撃用に盾を作り出す。地面から生えるように生み出されると、その1つをバーバラが根本辺りから折って手に持つ。そして自分に向けて放たれた稲妻を受け止めてみせる。

「ぐっ、多少身体こしちにも流れるけど、問題ない程度ね。これなら……

！」

バーバラとシルヴィアが防御に回ったおかげで、ジーンとジャックはそれに守られながらエリカの加勢んに向かう事が出来た。

エリカはリコたち2人を相手に二振りの刀で応戦していたが、相手に一撃を入れる事の出来る最後の一步が踏み出せずにいた。踏み出そうとするタイミングでもう片方の騎士が横やりを入れてくるからだ。

「まったく、あなたたちのような実力の持ち主があんな奴に仕えている理由が分かりませんよ！」

「僕たちはご主人様の奴隷だ。異を唱える事も、否定することも、抵抗することも、拒絶することも許可されていない」

初めて、口を開いた青年が静かに言った。もちろん、その手に持つ剣でエリカを足止めすることを疎かにすることはない。あくまでつなぎの一瞬に言葉を発している。

「奴隷、主に隷従するだけの状況に満足しているんですか？」

「それをご主人様が望むなら」

救いようもない馬鹿だ。馬鹿トリオとは全く逆、愚直なまでに真っ直ぐすぎるのだ。それが正しい事だと教えられてきたのか知らないが、エリカにはそんな事を強いている奴も、それを受け入れている奴も理解できないし、それをただ見てるだけで何もしないようなお淑やかな性格でもなかった。

「自由になりたいとは思わないんですか!？」

「自由はご主人様の望むところではない。僕たちの使命は、ご主人様を命に代えてでもお守りすること。それは、あなた方も同じなのではないですか？」

「違いますよ。守るだけの価値がなければ、守ろうなんて誰も思いません。あたしたちが守ると誓った相手は守るだけの価値があるんですよ」

もはや、どちらがリコで、どちらがネアなのかは重要ではなかった。言葉は交互に紡がれ、まるで2人の総意のように発せられているからだ。

「なら、僕たちと同じだ。僕たちもご主人様を守る事に価値があると思ってるし、そう確信してる。だから、僕たちと君たちは対立してる。守りたいが為にね、……ほら、時間切れ」

2人がそう言っつて、エリカはその背後にいる男に視線を向けた。相変わらず見るのも嫌になる笑みを浮かべており、その両手はエリカたちに向かって突き出されている。

「喰らえ、準戦略級魔法の威力を!！」

魔法陣が作り出され、その中心に白い光球が生み出される。周辺の空気中から何かを集めて徐々に大きくなると、それが強烈な魔力を放っていることを察知する。

10メートルはあろうかという光球は、一度小さく縮むような動きをするとその直後破裂した。無数の光の槍がエリカたちに向かって

飛び散り、防御しようとシルヴィアが作り出した氷の盾を容易く貫徹してエリカたちに迫ってきた。

「死ねえええええっ！！！」

男の狂気じみた声と共に、無数の光の槍は地上に着弾した。

第57話 準戦略級魔法（後書き）

そうですね、光球がデカくなるところはまさしくSLBを想像してもらえると分かりやすいですかね？

いや、あんな化け物じみた威力ないですけどww

さて、どうなることやら、ではまた次回

ご感想などお待ちしております。

あと誤字脱字あったら是非是非お教えしてください。本当に以前の影響がビクビクしてるんです。報告が上がってこないという事は「ない」という事と考えたいのですが、それはそれで少し不安になります。

書いた後に2回ほど見直しはしているのですが、それでも見落とす時は見落としてしまいますからね。

ではでは。

第58話 黒き翼

闘技場は土煙に包まれている。

結界によって観客席への直撃は全て防がれたが、闘技場全体と言っても過言ではないほど広範囲にわたって大量の光の槍が降り注いだ。準戦略級魔法はその名の通り、戦略級魔法に近い威力を発揮する魔法だ。その広大な攻撃範囲がゆえに仲間を巻き込むことが必至であったため、誰一人使う者などいなかった。

そもそも「準」が付くとはいえ戦略級魔法、使用は制限されているはずなのだが、この男にはそんな考えは微塵もなかったようだ。

土煙の中で、男は荒い息を吐きながら光の槍が降り注いだ先を睨んでいる。

横にいた2人は難を逃れたようだが、その顔は恐怖に歪んでいる。

男は仲間がいる事を知っていたにも関わらず、躊躇なく魔法を撃ちこんだのだ。とてもじゃないが正気の沙汰とは思えなかったのだろう。

「こ、これだけやれば……」

彼は勝つことしか頭になかった。

自分を見下してくれた憎たらしい少女諸共に、相手を殺す気で魔法

を使ったが、それに対する罪悪感などこれっぽっちもなかった。むしろ、今頃肉片と化しているであろう敵を想像して悦に浸っていると言った方が適切だろう。

「お、おい、あいつらも巻き込まれたんじゃない……？」

優男がさすがにやりすぎだと感じているのか仲間を心配するような言葉を言っているが、様子を見に行こうとはしない。想像できてしまっからだ、あの土煙の先で血みどろになっているであろう仲間の姿が。

「ふ、ふん、シータスの連中相手にも負けたんだ、そろそろ代わりに奴を用意してもらおうと思っていたところだ！」

そんな事、今思いついた言い訳に過ぎない。仲間を殺したかもしれないなどという考えはなく、ただ消耗品が擦り切れたから自ら始末をつけたかのような言い草だ。

「だ、だけど準戦略級魔法って大会規約違反じゃ……」

あまりの事態に冷静さを失っていた女も、徐々に冷静さを取り戻し、今起こった事の重大さを認識するに至り蒼白が普通に戻り、また蒼白に、とコロコロと表情が変わる。

少なくとも優男と女は事態が自分たちにとって非常に不味い方に流れている事を察知している。今までヒラリヒラリと自分たちの非を他の人間に押し付けてきたような連中なのだから、そういう空気には敏感だったのだろう。

幸か不幸か、それが2人には働いたが、残りの1人には働くことは

なかった。

既に、彼の耳には闘技場を包む拍手喝采の幻聴が聞こえているのかもしれない。実際にはほんの少しも拍手など鳴り響いていないにも関わらずだ。もしかしたら、自分の魔法のおかげで鼓膜が破れたのかもしれない。

「ふ、ふははははっ、僕を馬鹿にした報いだ！ 皆死んじまえばいいんだ！！」

そして土煙が晴れた時、彼の目は見開かれることになる。

「……本当に、どうしようもない馬鹿ですね」

静かに、彼女の声が闘技場に響いた。

正直、彼がやるうとした事にはある程度の予想がついていた。

だが、仲間を巻き込むとは想定外だった。龍にしる、人にしる、仲間を巻き込んでまで攻撃するような馬鹿はほとんどいない。それくらい仲間という絆は強いものだ。エリカは考えていた。

（あの人たちに絆があるなんて思ったあたしが馬鹿でしたね……）

あの馬鹿トリオには絆があるかもしれない。しかし、彼らとリコ、ネアにはそれが無いと早く気が付くべきだった。そうすればまた別の結果に導けたかもしれない。

光の槍が放たれた時、丁度エリカはジーン、ジャック、バーバラ、シルヴィアを背後扇状に、リコとネアを目の前にしていた。ほんの一瞬、シルヴィアの氷の盾が迎撃してくれることを祈ったが、容易く撃ち破られるのを見て動く事にした。

ジーンやジャックは自分の身の丈もあるような大剣で守ろうとしていたが、それが出来ないバーバラとシルヴィアはまともに直撃弾を喰らってしまうところだった。

さらに言えば、エリカの目の前にいたリコとネアは光の槍を背後から受けようとしていたので対応がワンテンポ遅れていた。おそらくエリカたちの反応を見て初めてそれに気が付いたのだろう。大剣持ちとはいえ、反転して身を守るには少々時間が足りなかった。

身体を半ばまで捻った辺りで光の槍は目の前まで迫っていた。

だから、エリカは自分がやったことに後悔することはなかった。自分がいなければ誰かしらが確実に死んでいたのだから。

「こ、これは……」

リコかネアか、どちらか分からないが驚愕の声を呟いているのが耳に聞こえてくる。

「エ、エリカ……」

ジーンが何かとてもじゃないが信じられない物を見る時に出すような声を上げている。

(どうやら、全員守れたようですね……)

エリカは姫黒と黒羽を前に突き出すように構えている。身体に流れる魔力を腕から手に流し、シルヴィアの氷の剣のように自らの刀を変形させたのだ。もちろん、それが出来たのも黒鱗を混ぜて鍛え上げられたからこそだ。鋼鉄という不純物が入っていたため上手く変形させることが出来るか不安ではあったが、何とかなったようだ。

出来る限り防御できる範囲が広がるように刀身を変形させ、リコとネアを守るのに十分なだけの黒い盾を作り出した。おかげで刀とは思えないほど不恰好になってしまったが、それも原形に戻すことが出来るから問題はない。

むしろ問題は仲間を助けた方法になるだろう。

とてもじゃないが、刀の黒鱗で間に合う距離ではなかった。それ以前に、そこまで届くほど伸ばせば、さすがの黒鱗も貫通されてしまう恐れがあった。

「嬢ちゃん、これは……」

では、何がジーンたちを守ったのか。

言うまでもなく黒鱗だ。刀のように不純物を含んでいるものではなく、エリカ自身が発現させた黒鱗だ。背中部分の鎧を引きちぎり、強引に発現させた黒鱗を可能な限り長く、広く、4人を守れる丁度の大きさなんて考えずに全力を出した。

距離があつたため身体のバランスが崩れ、慌てて広げた黒鱗の一部をつつかえ棒にして転倒を防ぎ、右後方にいたジーンとバーバラ、左後方にいたジャックとシルヴィアをカバーすることが出来るように肩甲骨の辺りか2カ所、黒鱗を伸ばした。

それはまるで黒い翼。

巨大で、力強く広げられた黒鱗の翼には無数の光の槍が消えずに突き刺さっている。だが、どれ1つとして貫通してはいなかった。雨霰のように降りかかった光の槍は全て黒鱗によって直撃は防がれていたのだ。誰一人として怪我をすることもなければ、死ぬこともなかった。

「けほっ、さすがにこれは……不味いですねえ……」

自分の身体を見て他人事のようにエリカは呟いた。

当然のことではあるが、エリカ自身には最も多くの光の槍が降りかかった。彼の目標がエリカであった事を考えれば、それもエリカにとっては想定内の範囲だ。

だが、自分を守るだけの黒鱗を発現させるには少々時間が足りな

った。

鎧にはポツカリと穴が開いている。肌に沿って黒鱗は発現させたが、周りに配る気はあったのに自分を守るのが疎かになってしまったように、脇腹に深々と槍が突き刺さっている。瞬時に血を黒鱗で押さえ込めてはいるが、さすがに長くは持たない。

それに、妙に視界が赤い。

赤い水の中で目を開けているような感覚だ。

その赤い視界の中にリコとネアが理解できない、という表情でエリ力を見つめているのに気が付いた。

「『どうして?』、『なぜ?』なんてのは愚問という奴ですよ。目の前で死んでもらいたくもない人が死ぬのは嫌ですから」

2人の心境を勝手に解釈させてもらい、質問が飛ぶ前にそれに対する答えを出す。

エリ力はそう言うと黒羽を元の形に戻して地面に突き刺すと、その手をそのまま脇腹に突き刺さった槍に添える。

そして思い切り引き抜く。

「う、ぐうううううう!!!」

脳にまで届くかという強烈な痛みがエリ力を襲う。出血こそ少ないが、身体の内部が多少なりともぐちゃぐちゃにされてしまったのは確実だろう。内臓を損傷したのか喉の奥から何かがかみ上げてくる

ような感覚に襲われる。

「さ、さすがに2度も3度もぶっ倒れるわけにはいきませんよね……」

引き抜いた槍を手の力だけで握りつぶすと、地面に突き刺したままの黒羽を杖代わりにして倒れる事だけは避ける。ここで意識を失えば血を抑えている黒鱗まで消えてしまう。

背中から翼のように発現させていた黒鱗を身体の中に戻す。誰も何も言わないでくれたのが救いと言えば救いだろう。

土煙がまだ残っているため観客席からは黒鱗の翼は見えていないだろうが、これでジーンにも、ジャックにも、シルヴィアにも見せてはいけない物を見せてしまった。この後どんな顔をして彼らに向き合えばいいのか分からなくなってしまふ。

「エリカ！ しっかりしろ！！」

混濁する意識の中に、ジーンの声が響き渡る。それを聞いて初めて自分が意識を手放そうとしていた事に気がつく事が出来た。

「大丈夫、夫、です。ジーンさんこそ、怪我はない、ですか？」

「俺の事なんてどうでもいいだろうが！　なんでこんな真似を……っ！」

意識を手放すつもりは毛頭なかった。ジーンに斬られた時とは訳が違っし、あの時から随分と成長したつもりだ。あの時はもともと意識が朦朧としていた上に斬られたために意識を失ってしまったが、

今度は違う。あれは不可抗力もあつたが、今回は自ら望んでこの様
になったのだ。とてもじゃないが意識を失うなんて惨めな真似は出
来ない。

エリカはそんな事を考えながらジーンに顔を向けると、力なく笑っ
てみせた。その笑みもジーンの悲壮感を増長するものでしかなかつ
たかもしれないが、エリカは出来るだけ明るく振舞つてみせる。

「なんでって、あたし言いましたよ、ね？ 皆がピンチの、時は助
けに行く、って」

言つてなかったかもしれないが、もとよりその腹積もりだったし、
さっきのが「ピンチ」に入らないと言わせるつもりはない。

「だから問題ないので……ととつ」

バランスを崩しそうになったエリカは背後から支えられた。見ると
リコとネアが倒れそうになったエリカを2人で受け止めていた。

「医務室まで運びます。ジーン殿、案内を頼みます」

「あ、ああ。ついでにお前らの怪我也診てもらおう」

ジーンがそう言うと、2人が驚いたような顔をした。

「何時お気づきに……？」

「俺じゃなくてエリカが気が付いたんだ。痛み止めか何か知らんが、
そんなもんで楽になつたわけじゃないんだろ？」

バーバラたちが駆け寄ってくる。

土煙が晴れ、ようやく観客たちも闘技場内の様子を見る事が出来るようになってきた。

とはいえ、既にエリカがリコとネアに抱えられている所まで話が進んでいる訳だから、エリカが黒鱗を展開させた場面は見られていない。

だがそうじゃなくとも異様な空気が闘技場、観客席問わず渦巻いているのは事実だ。

すると観客席から誰かが飛び降りた。一般人なら足の骨を折ってもおかしくない高さなのだが、その鎧を見た瞬間、エリカはそれが誰なのか見当が付き、大人しくリコとネアに身体を任せるようにして身体から力を抜く。

「嬢ちゃん、しっかりしろよ……、どうした、セラ？」

ジャックが飛び降りて駆け寄ってきた人影、セラに気が付いて声をかける。

「どうしたも何も、何かお力になればと思いましたが。ティティ王女様には許可を頂いております。ついでに言えば、試合は中止されました」

「中止？ 勝ち負けで言えば、大将を倒された俺たちの負けだが？」

「それ以前に、あのタロンの大将は愚かにも準戦略級魔法を使用しました。相手を倒すのではなく、殺す事を目的にした魔法です。大

会規約でもしつかり禁止と明記されていますから、中止されて当然です」

「そんな事はどうでもいいんです」と言いながらセラはエリカに駆け寄ると、傷口に手を当てて治癒魔法をかけ始める。

「得意分野ではありませんが、ファイア殿が来るまでの時間稼ぎくらいは……。今のうちに医務室へ」

治癒魔法が脇腹の傷口を修復し始めたのを感じて、エリカはそこでようやく黒鱗に向けていた集中力を抜く事が出来た。黒鱗を消した瞬間、黒鱗と身体の間で塞ぐ前に出た血が溜まっていたので、その一瞬大量の血が噴き出したように見えて辺りを騒然とさせる。

慌ててエリカが大丈夫と自分で言う羽目になった。

リコとネアに担がれ、セラに治療されながら、仲間にもまれてエリカは闘技場から姿を消していった。

闘技場に残されたのは、茫然と立ち尽くすタロン騎士団の3人組だけだった。

観客席からの聞こえてくるどよめきはまったく耳に入っていないのだろう。ただただ目の前で起こった事実が信じられずに硬直している。

「随分とやってくれたじゃないか……」

その3人の前に立ちほだかる様に姿を現した人物がいた。

その人物の顔を見て、3人の顔が蒼白になり、蒼白を通り過ぎて血の気が本当になくなったかのような色になる。

「シャ、シャリオ殿下……」

立っていたのはシャリオ王子だった。その背後には護衛の騎士とエオリアブルグの衛兵を従え、3人を見下ろしている。

シャリオ王子はニコリと笑ってみせるが、その一挙一動にすら、3人はいちいちビクビクと反応してしまう。

「由緒正しいタロン騎士団の没落は別に今に始まった事じゃないが、さすがにこれは見過ごせないな。敵を殺そうとしただけでは飽き足らず、仲間まで巻き込もうとしたんだから、いくら君たちが貴族の子息だろうと罪から逃れる事はできない。言っておくが、言い逃れしようなんて考えないでくれよ？ ちょっと頭に来てるから」

シヤリオ王子が手で合図をすると背後の衛兵が3人を取り囲むように立つ。

「しばらくの間、自室で謹慎している。君たちの処分は追って通達する」

衛兵に連れられ、3人が闘技場から外に出される。

「……申し訳ありません。陛下の兵を無言で使わせてもらいました」

背後に現れた気配にシヤリオ王子は振り返り、深々と頭を下げた。

背後にはグラン王とティティが立っていた。ティティはエリカの状態が気になるのかしきりにエリカが消えた反対側の方を見ている。

「構わん。おそらく彼らも同じ気持ちであったろう。それどころか、君はこのロシアムにいた全ての騎士の意志を体現した事は間違いないであろうな」

グラン王が観客席を見上げる。

既に観客の避難が始まっており、だいぶ人が減ってきている。準戦略級魔法の直撃に耐えた魔法障壁であったが、そのおかげでほとんどが機能を停止してしまったのだ。試合も出来る状態ではないので、衛兵たちの誘導の下一般人の退避が先ほどから行われている。

「私からも感謝を申し上げます、シヤリオ王子」

「いえ、それは受け取れません、ティティ王女。感謝をお受けする前に、お詫びをしなければなりませんから。私の部下がこのような

事態を招いたのは偏ひとへに私どもの監督不行き届き、あのような者を野放しにしていたこちらに責せがあります」

「ブラゴシユワイクのお国事情は承知しているつもりです。ですからお顔を上げてください。今のあなたにはどうしようもないという事も、分かっています」

そう言うと、シャリオ王子は少々表情を曇らせた。

今の自分は王子。

貴族の腐敗した権力が強いブラゴシユワイクでは王子と言えども下手に動けば貴族によって王位継承権争いから蹴りだされるか脱落させられることもある。それを怖れたがために、彼らの跳梁を許したとも言える。

「……そのお気持ち、決して無駄にはしません。必ずや、後の治世のちに生かさせてもらいます」

「ほお、ブラゴシユワイクの若造が言うではないか。そのほえ面がいつまで続くか見ものだな」

「エオリアブルグにも、アールドールンにも負けないような誇りと強さを取り戻してみせますよ」

シャリオ王子がグラン王に対してそう言うと、グラン王は満足げに頷いた。

「では私たちも引き上げようか、あとであの騎士、エリカの見舞いにも行きたいからな」

グラン王はそう言うと個人用の転移魔法を構築する。それにティ
イとシャリオ王子も乗ると3人は姿を消した。

第58話 黒き翼（後書き）

わっひゃーっ。

どうもハモニカです。

なんか、いつつ仲間を庇ってぶっ倒れているような気がしてならない我が主人公ですねw

まあ、それが主人公たらしめているものだと思ってますけど。

主人公と聞いてふと思った、というより前々からそのつもりでいたんですけど、エリカって主人公であってヒロインではないような気がします。

女性ですしヒロインにあたるのかなあ、と思った時期もあったのですが、やっぱり主人公って言った方がしっくりくるようです。

かといってヒロインを出しているつもりはないですけどw

しかし、そうなるっちゃぱりジーンって主人公「格」、もしくは主要キャラになっちゃうんですよねえ。どうしましょう……。

おかしいですね、一応ジーンは主人公の1人のはずなんですけど……、あ、それだけでも主人公「格」にはなっちゃいますね。言い換えましょう、主要キャラになっちゃったようです。

第59話 始動する影（前書き）

第59話 始動する影

「とりあえず、無事で何よりです！」

無事を確認して言いたかったその台詞を言おうとした瞬間、バーバラの拳が脳天に降りかかってきた。

「『無事で何より』？ あのね、その台詞は医務室のベッドで横になってるあなたがいう台詞じゃないわよ」

呆れ半分怒り半分と言ったところか、バーバラのエリカの脳天に振り下ろした拳は少し震えていた。

試合は中止になり、エリカはリコとネアによって医務室に担ぎ込まれた。医務室に入る直前にフィアが飛び出してきた応急処置を行おうとしたが、セラの機転のおかげで応急処置はほとんど終わっており、フィアは医務室での本格的な治療に集中することが出来た。

結果、大事に至ることなくエリカの脇腹の傷は治療された。もちろん、1日は安静にしなければならぬが、今エリカがベッドに横たわっている理由は失った血液を取り戻すためだけ、と言っても良いくらいだ。

「嬢ちゃん、少しは自分の事も考えろ。いつつも嬢ちゃんに守られてるようじゃ俺たちも立つ瀬がねえ」

「まったく、自分の身を守った上で他人を守ってくれ。そんな事で

は守られたこっちが辛い」

ジャックとジーンがそんな事を言うと、シルヴィアとバーバラが「その通り」と言わんばかりに首を縦に振る。

「過剰放出の時といい、今回といい、治療するこちらの身にもなつてよね？ あなたばかり重症だなんて、嫌なんだから」

フィアはそう言いながらもリコとネアの治療をしている。先ほどジーンがリコとネアの負傷の事をフィアに伝えたところ、「戻っても治療してもらえないでしょう？」と言って2人もベッドに寝かせた。非常に今さらなのだが、リコとネアは顔の作りがそっくりで、自己紹介もしていないエリカにはどちらがどちらなのか判別することが出来ない。髪の毛の色も、目の色も同じ、違うのは利き手くらいなのだ。

「僕がリコで」

「僕がネアです」

と言われても、一度後ろを向いて入れ替わられていたら分からなくなってしまうレベルで似ている。

「双子ですから。右利きがリコで、左利きがネア、と覚えてもらえれば……あだっ!？」

治療中に動いたためにフィアにほつたをつねられる。その光景は子供を諫める母親のそれには見ええない。

「あ、結局試合、どうなるんですか？」

エリカはようやく試合の事に意識を回すことが出来るようになり、その事を誰に聞くでもなく口にした。

「正式な発表はまだですけど、タロン騎士団が大会規定違反しましたから、結果はどうあれアクイラ騎士団の勝ちという事になると思いますよ。そうなれば優勝はあなたたちとなり、明後日は試練とやらを受ける事になりますが、大丈夫ですか？」

セラの最後の言葉はエリカを心配しての言葉だろう。

確かに治療されたとはいえ風穴を開けられかけたのだから、1日や2日で回復できるか心配なところだろう。

「傷は問題ないんですが、内容にもよりますよね……」

そう言うとセラが周囲を一度確認した。

「実は、その件なんですが、先ほど仲間内で大型の猛獣か何かとの戦いになるそうですよ。情報提供者の話ですと昨日巨大な鉄の檻が転移魔法で運ばれてきたそうです。その直後に猛獣のそれと思われる叫び声も。下手をすると王立研究所で作られた魔法生物キメラという可能性も」

「さすがはエオリアブルグ、と言いたいところだが、猛獣くらいなら俺たちだけでも何とかかなるかな」

ジーンがセラの言葉を聞いて考え込む。

エリカはジーンの言葉に首を振り、ベッドから立ち上がるうとすると慌てて周りの人間が止めようとするが、エリカはそれを手で制した。

「大丈夫ですよ、頑丈に出来てますから。明日1日大人しくしてれば明後日には全快できますから、ご心配には及びません。確か明日は休養日でしたよね？」

「正確には各国の騎士と関係者によるパーティみたいなものです。湖畔ですので、泳ぐ方もいらっしやいます。大会に出ていない騎士の方も来られるのでかなりの人数になりますし、盛り上がるのは確実ですね」

「それが目当てで来てる奴もいるだろうしな、うちには」

ジーンがそう言うのと周りの笑いを誘った。

セラの話では、先ほどブラゴシユワイクの馬鹿トリオの処遇が決まったとのこと、謹慎処分の上で、早々に帰国命令が出される予定で、当然ながら明日のパーティには出る事は出来ない。それを聞いたエリカは安心して小さくため息をついた。

「とりあえず、城に戻って安静にしてください。さっきユーリさんを呼んでもらったからそろそろ来ると思っけど……」

ファイアがドアの方を気にするそぶりをした時、まるでその話題を待っていたかのようにドアがノックされてユーリが入ってきた。ユーリはエリカの姿を見るとホツとした表情をして歩み寄ってきた。

「大事に至らなかつたようで安心しました。城までお供させてもら

います」

「私たちも荷物をまとめたら城に戻るから一足先に戻ってなさいな」

「了解です、バーバラさん」

エリカはフィアに礼を言ってから姫黒と黒羽を持ってユーリと共に医務室を後にした。

後にはそれを見送ったままの状態で黙り込んだバーバラたちが残された。扉の向こうから遠ざかっていく足音が消えたのを確認してからジーンはバーバラに向き合い、厳しい目でバーバラの目を真正面から見つめる。

「何かしら、ジーン？」

「……言いたい事は分かってるはずだ。言葉にはしないが、皆気に

なっているのは事実、何か知っているとしたらバーバラ、あんたしかいないんだよ」

バーバラの前で仁王立ちになり、逃げ場を防ぐようにジャックが扉とバーバラの間に入った。

「あら、何を根拠にそんな事を言うの？　そもそも、何を聞きたいのか言ってくれなきゃ、知っているとしても答えようがないわ」

わざとしか思えないほどあからさまに「何を言っているか分からない」という表情をバーバラがすると、ジーンは一步にじり寄ってバーバラの目の前に立つ。

「エリカの事だ。何か知っていると考えなきゃ理屈が通らないんだ。あの黒い翼みたいな物にしても、これまでの行動にしてもな。出来れば本人の口から聞きたいところなんだが、そういう状況でもないからな」

「そりゃあ、そうかもしれないけれど、たとえ知っていたとしても私の口から漏れる事に期待しない方が良くないわよ？　それくらいあなたたちも知ってるでしょう」

バーバラはその出生云々のために秘密を守るとかそういう事に長けている。それはもちろん、現在も変わりない。アクイラ騎士団の中ではそう言う意味で「情報公開」がされていたが、それでも周囲の人間が知らない事の1つや2つや3つ、あつて当然だ。

バーバラがそれを伝えるとジーンも押し黙ってしまい、ジャックたちも何も言わずにただバーバラを見ているだけになってしまう。

それを見渡すとバーバラはため息をついた。

そしてジャックの脇をすり抜けてドアを開けるとそこで足を止めて部屋にいる全員を見やる。

「ただ一つ、言えることがあるわ。もしかすると、もうすぐエリカは私たちの前から姿を消すかもね」

「「「「「!!」「」「」」

ジーンがそれを聞いて何かを言おうとしたが、バーバラはそれを聞かずにドアを閉めてしまう。直後怒鳴り声に近い何かはバーバラの耳に届くが、バーバラは足を止めずに闘技場の通路を歩き続けた。

「……何かとんでもない事が起こっているような気がします……」

ユーリは個人用の転移魔法を使用してエリカを城の部屋まで送り届けた。

エリカはアールドールンにもこの技術が普及してくれれば、と思いながらも虚脱感が拭いきれない身体をベッドに投げ出すと、大きく息を吐いた。

治療された直後は治癒魔法を受けた影響で身体が非常に重くなってしまう。それも何か重い物を背負っていると同時にそれを支えようとする身体にも上手く力が入らない、という厄介なものだ。エリカはフィアの大がかりな治癒を受けたのは2度目だが、やはり慣れる事が出来ない。

「準戦略級魔法を防ぎきるなんてエリカ様は底なしのポテンシャルの持ち主なんですね。さすがに驚きましたよ」

横になったエリカに布団をかけながらユーリは優しくそう声をかけてきた。

エリカはうつ伏せにしていた身体を仰向けにしてぼんやりと天上を見上げながら、視界にユーリを捉える。

「そんな事頭の片隅にすらなかったですけどね。しかし、貧血気味ですかね、頭がボーっとします」

いくら治癒魔法で物理的な傷は癒えたとしても、失った血液まで元には戻らない。しばらくの間は血液を作る作業に没頭してもらえない。

「少し寝ます。夕食の時間になったら起こしてください」

「分かりました」

ユーリがにっこりと笑みを浮かべると、エリカもそれに応えるように微笑む。そして静かに瞼を閉じるとあっという間に規則正しい呼吸と共に眠りについた。

ユーリはそれを確認するとベッドから音もなく離れ、エリカが机に無造作に置いた刀を壁に立てかけた。

しばらくエリカの鎧などの整理をしていると、不意に扉がノックされた。

一度ベッドのエリカを見て、まだ起きていないことを確認するとユーリは静かに立ち上がり、ドアノブを回して扉を開ける。

「今、大丈夫かな？」

低い声だが、それでいてどこか温もりのある声を聞いてユーリは目を丸くした。

「へ、陛下……」

扉の外にはグラン王がティティとシャリオ王子を連れて立っていた。

「そう硬くならんくれ。アクイラ騎士団の者の見舞いに来ただけでな」

「そ、そうでしたか、し、しかしエリカ様は先ほど横になられまして……」

それを聞いてティティが扉から顔の中に入れて、ベッドで静かな寝息を立てているエリカを視界に捉える。

「まったく、せつかく来たのに寝てるなんて……騎士失格です」

頬を膨らませながらティティはそんな事を言うが、そう言う音量は小さく、エリカを起こさないように配慮している事が窺える。

「お、起こしましょうか？」

グラン王を前に緊張しているのか、先ほどから言葉が詰まり続けているユーリは冷静さを維持しようと必至の様子だ。だが、一挙一動が不自然なほどに固いために背後の騎士たちから苦笑を貰ってしまふ。

「いや、それには及ばん。寝ている少女を起こすのは気が引ける」

「私としては謝罪の1つもしないと気が収まらないが、仕方ない、明日会った際に言う事にするか……」

シャリオ王子が残念そうにため息をついた。

彼にしても、自分の部下が起こした不始末に対する責任というものがある。国家を代表する者として詫びの1つも言っておかないとやるせないのだろう。

「ふむ、そうとなれば今日のところは退散するでしょう。そなた、名前は何と言う？」

グラン王は顎を撫でてからユーリに名前を尋ねた。ユーリとグラン王は縦にも横にも非常に体格差がある。ユーリはその圧倒的な存在感に押しつぶされないようにするのが精一杯という様子だ。

「ユ、ユーリと申します、陛下」

何とかかすれ気味の声を絞り出してユーリが答えると、グラン王が柔らかな笑みを浮かべた。

「ではユーリ、エリカの世話を頼むぞ」

「は、も、もちろんです」

グラン王はそう言うのと来た道を帰っていった。

後には緊張のあまり汗をだくだくと流したユーリだけが取り残されることになった。

「くそっ、どうして僕が監禁されなきゃならないんだ！」

所変わってタロン騎士団の馬鹿トリオの部屋、謹慎という事で3人が同じ場所に集められているのだが、試合中止直後は停止していた頭がようやく動き出すと、自分たちの処遇が納得いかなかった男は物だろうと人だろうと関係なく当り散らす様になってしまった。

女と優男は距離を置いて頂垂れているだけでほとんど反応しないため、男の鬱憤のはけ口はもっぱら部屋に備え付けられた調度品や家具に向けられている。

「僕は貴族だぞ！　こんなことをして良いと思ってるのか！」

扉の向こうにいるであろう警備の兵士に向けて放たれた言葉なのだろうが、扉に向かってそんな事を喚き散らす。

もはや冷静さなど地平線の向こう側に飛び去ってしまったようだ。

「もう、少しは黙りなさい。そんな事をしても扉を開けてはくれないわ。シャリオ殿下に言われた以上、私たちに弁解の余地はないのよ」

「うるさい！　何が王子だ、王にしてやるのは僕たち貴族だぞ！　貴族が王位継承に合意して初めてあいつは王になれるんだ、今のあいつに何が出来る！！」

女がいい加減我慢できなくなったのか男に声をかけるが、それで手に持った椅子を下す男ではなかった。それどころか反応したのを良い事に女に向かって怒鳴り散らし始めた。

女は「言わなきゃ良かった」と後悔しつつため息をつきながらまた頂垂れた。

「……まったく、ブラゴシユワイクの腐敗は想像以上ですね……」

「……！！」

突如、この部屋にいるはずのない第三者の声がかかり、男たちは扉の方に顔を向けた。扉は開いていないが扉の前に1人の男が立っていた。

フードを目深に被りその顔を見る事は出来ないが、口元がどこか馬鹿にしたような笑みを湛えているのだけはかるうじて分かる。

「誰だ貴様は」

「私ですか？ あなた方を解放するためにやって来たものです」

不機嫌そうに声を荒げて聞いた男の表情が満面の笑みに変わった。背後の2人は信じられないという表情をしているが、男にはそんな疑念これっぽっちもないのか先ほどまでの怒りもどこへやら、足取り軽くフードの男の元に歩み寄った。

「当然だな、やはりあの王子程度では僕たちを拘束することも出来ないという事だな。宰相の父様か？ それとも軍司令の兄様か？ 誰の使いだ？ 後で礼を言わなければ」

男がそう聞くと、フードの男は懐に手をつ突っ込んだ。おそらく、何か手紙か何かを取り出そうとしているのだろうと思っただ男はそれを

覗き込もうとする。

「そうですね……、あえて言えば、地獄からの使いです」

「……は？」

意味が分からないという男を前に、フードの男は懐から勢いよく手を抜いた。その手には刀を短くしたような刃物が握られており、その小刀は少しの無駄もなく男の喉を斬った。頸動脈が斬られ、大量の血が喉を逆流して口からあふれ出す。

だが、それを認識しても男は自分が斬られたことが信じられない、という表情をしている。そしてフードの男がその額に指を当て、軽く押した瞬間、首の皮1枚残して斬られた頭がその後頭部で背中をタッチした。

結果、振り返る事もなく背後の2人を見つめた男はバランスを崩して床に倒れ込んだ。倒れた衝撃で首が千切れ、ベッドの傍に転がる。

「ひ、ひいっ！！！」

「おやおや、あまり下品な悲鳴を上げては、お嬢様の名が廃りますよ？」

それを見て半狂乱になった女は隣の優男を置いてフードの男の横を駆け抜けると扉から外に出ようと必死にドアノブを回す。

だが鍵がかけられているためかピクリともドアノブは動かない。それに業を煮やした女は扉を激しく叩き付けて外にいるであろう兵士に助けを求める。

「無駄ですよ。先ほどからこの男が騒いでいたおかげで外の兵士はそれくらいじゃ耳を貸しません。それに、この城は防音もしっかりしてますから声なんかそう簡単に外には漏れません」

背後にゆっくりと歩み寄ると、フードの男は女の頭を掴んだ。そして女が何か言葉を発しようとしたその喉に小刀を深々と突き刺した。女の身体が痙攣したようにのたうち回るが、次第にその動きも弱くなり、すぐに動かなくなつた。

「く、くそ、しねえ！」

優男が手の平サイズの火球を作り出すと、女の死体を片手に背を向けている男に向かってそれを投げつけた。

男はそれを避ける事もせず、女の亡骸を火球に投げつけて自分に着弾する前にその攻撃を無効化した。

「おやおや、室内でそんな事をするなんて、危ないですねえ」

人殺しをしているとは思えないほど穏やかな声だ。むしろ何かの遊びを楽しんでいる子供のような声に近い。

炎に包まれた女の死体が床にドスンと音を立てて落ちると、その上を乗り越えて男は優男の目の前に立った。目の前に立ち、その口元を思い切り吊り上げると両手を優男の顔の横に置く。

「生きたまま脳のローストされる気分を味わわせてあげましょう」

「ひ、ひぎいいいいいっ！！！！」

両手から放たれた電撃が優男の脳内を駆け巡る。

耳や鼻から本来出るはずのない液体が流れ出すが、男はお構いなしに男の頭を焼いていく。そして室内が少し焦げ臭い臭いを漂わせ始めた頃、ようやく男は優男の頭の横から手を退けた。

眼球は黒ずみ、顔にある穴という穴から何かの液体を垂れ流しながら棒立ちしている優男を前にしてフードの男はその腹に小刀を深々と突き刺した。

既にそれに悲鳴を上げる事も出来ず、優男の身体は突き刺された勢いでベッドに投げ出された。

「ふふ、久しぶりに運動すると気持ちがいいですねえ。……そうだが、明後日には発見してもらえないでしょう。何しろ明日一杯一切の出入りが禁止されていますからね。では3人とも良い夢を」

フードの男はまるでサーカスの終焉のように仰々しいお辞儀をする
と、その場から姿を消した。

第59話 始動する影（後書き）

うひゃ〜、なんかバーバラは口が硬いとか言っておきながら、随分とお粗末ですね!?

自分で書いておきながらそんな事を思っている、どうも、ハモニカです。

いや、勝手にエリカの事をばらしかけてるし、ねえ?

そして、前回、前々回で描写がほとんどなかったりニコとネアが実は双子だったという、何とも後付け的な（事実ですね）設定が明らかになりました。

いや、実はニコとネアはもう少し詳しい描写をしたかったんですが、どうにも上手くいかなかったもので。同じ顔、同じ髪ときたら、自己紹介もなしに個人を特定なんてできませんからね。

とはいえ、彼らも個人名出てますから、もしかすると、もしかするかもしれませぬw

そして、いよいよ動き出したシャドー。

今後どうなるんでしょう、物語はいよいよ終盤へと向かいます!

今後ともよろしく願います。

ではまた次回。

ご感想などお待ちしております。

第60話 つかの間の休息（前書き）

ふう、やっと書けた……。

終盤に入ったとか言っておきながら、今回はシリアスの「シ」の字も出てこないかもww

いや、今現在執筆中の部分は既にバリバリのシリアスですから。

おかげで全然進まないんですけどね。

ではでは、本編どうぞ。

第60話 つかの間の休息

「ここがエオリアブルグの観光名所の1つでもあるセラピア湖です。またの名を『癒しの湖』と言います」

やって来た一同に観光ガイドのように説明するセラの表情も明るい。エリカが無事に回復して同行できたのもその理由の1つだろう。

昨日、一眠りと言って仮眠を取ったエリカだったが次に起きた時間は既に日付が変わって随分と経った後だった。なぜ起こしてくれなかったのか、とユーリを問いただしたが、どんなに揺さぶってもピクリとも反応しなかったと言われて閉口するしかなかった。

ユーリはエリカが一度眠りにつくると非常に起きにくい事を知らされていなかった上、そこまで熟睡しているのを起こすのも気が引けたそう。エリカは自分がしっかりと行っておかなかった事を悔いた。

とはいえ、そのおかげか体調は万全に近い状態まで回復した。

まだ多少なり違和感が残っているが、ファイアの適切な治療のおかげでほとんど気にならない。その状態でジーンたちの所へ行くと最初何か言いたそうな目で見られたが、すぐに快復した事を喜んでもらえた。

遠目にバーバラが何か目で言っているが、さすがにそれだけでは理解できなかった。アレックスに言伝を頼むと、昨日エリカが医務室を去ってからの顛末を聞かされ、エリカはため息しか出なくなっ

てしまった。

「さすがに『姿を消す』なんて言わなくても良いじゃないですか……」

「だが、そのつもりなのだろう？ 少なくとも今のアクイラ騎士団にドラゴンを迎え入れるだけの用意はないことを最も理解できているのはエリカ殿だと思うが？」

「そりゃまあ、そうですね、タイミングってものがあるでしょうが……」

ぶつくさとアレックスに文句を言うが、文句を言う相手が違つと考え直して口を閉じる。

だが、アレックスの言葉で周りにいるジーンたちの先ほどの視線の意味を理解できた。ここに来る道中、皆普段通りを装っていたが、どこか落ち着きがなかった。

おそらくは、エリカに事の次第を問いただしたくて仕方がなかったのだろう。病み上がりという事で自重してるようだったが明日になれば何かと理由をつけてエリカから答えを引き出そうとするのは目に見えている。最もそれが顕著に顔に出ていたのはジーンで、エリカがバーバラたちと話している時もかなりの頻度で視線をエリカに向けていたように思われる。

「……ってちょっと待ってください。となると、その話はセラさんやリコさん、ネアさんにも聞かれたという事ですか？」

よくよく考えてみれば、あの場にはアクイラ騎士団の面々以外の人

がいた事を思い出したエリカの顔から血の気が引いていく。

くう、うむ。その事に関してはご主人も悔いているらしい。あまりにも無防備に話すぎた、と。人払いをするという事も出来たかもしれないが、タロン騎士団の2人に関してはベッドに寝かされていたそうだからな>

アレックスはあの場にはいなかった。試合には騎士が使役する獣などは参加できるのだが、バーバラがそれを認めなかったようだ。おかげでこちらに来てからエリカは一度もアレックスをモフモフできていない。

「下手に話が広まらなきゃ良いんですけど……」

<もしそうなっていたら、とつくに何かしらの騒ぎになっているだろうな。それが無いところを見ると、彼らの間で他言無用とされたと言ったところか>

考え直してみれば、あの場にいた人でこんな、どう考えても大事にしかなりそうにない事を気軽に喋る人間はいない。ジャックはかなり不安ではあるが、それでも彼は騎士だ、さすがに人を貶めるような事をしゃべる事はないだろう。

リコとネアが心配だが、彼らの主人は謹慎中。仲間への暴力が公になったため、あの馬鹿トリオがリコとネアに会う事は二度とないだろう。

セラも同様だが、彼女はその人格を信用できる。外部に情報が漏れる心配はないと思いたいが、人の口に戸は建てられない。用心しておくに越したことはない。

「おい、エリカ。ここまで来てアレックスを抱いているのは少しお門違いじゃねえか？」

「良いんです。3日ほど撫でる事も出来なかつたんですから」

ジャックにそんな事を言われながらも、エリカはアレックスを抱いて湖畔の木の幹に背を預けている。近くにあるコテージを大きくしたような木造の建物の庭先ではパーティの準備が行われている為か随分と騒がしい。

パーティというよりは食事会と言った方が正しいかもしれないが、それはともかくとして夕方から始まるその催しの場所に日もまだ真上に差し掛かる直前と言った時刻にいるのにはもちろん理由がある。

「どう言えばいいんだ？ 海水浴とは言えないから、湖水浴か？」

「んなもんどうでもいいじゃねえか。で、俺がやったアレはちゃんと持ってきたのか？」

「そんな恥ずかしい物を穿けるか！」

ジーンが真剣な表情で呟いているのにジャックが反応する。

するとジーンはジャックの恰好を見て恥ずかしさを隠すかのように声を上げた。

因みに現在の2人の格好は、ジーンが長袖のシャツに短パン、ジャックはどこで買ったのかも定かではないアロハシャツに、………ビキニパンツという姿だ。もちろんアロハシャツのボタンなどあって無

きが如し、ジャックは持ち前のチキンナゲットと化している腹筋を余すところなく曝け出している。それを見てしまったからか、それ以降セラがジャックを見る時少し視線を逸らす様になっている。

季節は夏とはいえ、高緯度のエオリアブルグはそこまで暑くはない。むしろ過ごしやすい気温と涼しい気温の間くらいだろう。

にも関わらず湖に入ろうなどという案が出てきたのには、この湖の水のある特別な点が絡んでいる。

「ほら嬢ちゃん、湖に手を突っ込んでみな」

「……突然人食い魚が噛みついてきませんよね？」

「……エリカちゃんはここをどこの未開のジャングルとってるのかしら」

ジャックに促されるまま立ち上がり、湖の水に触れると、エリカは驚いた。

「……温かい」

そう、湖の水は温かかったのだ。熱過ぎる事もなければ、冷た過ぎる事も無い、丁度人肌が心地よいと感じる水温だった。

「森を1つ抜けた所に火山があるんだそうだ。その影響でここいらの湖は皆温泉になってるんだ。冬はさすがに入る者はいないだろうが、秋の初めくらいまでは身体を温めに来る人も多い」

ジャックの言葉を感心して聞きながら、エリカは温かい水の中で手

を動かす。湖面は透き通っており、浅い所であれば湖底も見えるほどだ。

「……ところで嬢ちゃん、その恰好は何なんだ？」

どうも、先ほどから気になっていたらしい。ジャックが聞きづらそうな顔をしながらエリカに尋ねると、エリカは自分の着ている服を見て首を傾げる。

「どこか、おかしいですか？」

「いや、そうじゃなくて、確かこの日のために俺たちを引っ張って服屋に行ったように俺は記憶してるんだが」

「そういえば、そうだったな……」

ジーンも忘れていたようで、「そんな事もあったなあ」といった表情をしている。

とはいえ、ジャックが質問したくなる気持ちも分からなくはない。今エリカが着ているのはフィアのお下がり、つまりフィアの知り合いの店で買った物ではない。女性物の服選びに付き合わされた男衆からしてみれば、それではあの時の自分たちの苦労はなんだったのか、と言いたくなるのかもしれない。

「うう、あれは結構恥ずかしいんです……。湖に入るのなら入った後の着替えにして、日が暮れて目立たなくなるのを狙ってたんです」

「とりあえず、エリカちゃんにはおしゃれの意味を教えないとダメ

なようね……」

ファイアもため息をついている。

エリカの近くにいるのはジーンとジャック、ファイアの3人だ。屋外という事もあってバーバラはあまり動き回らないし、シルヴィアは先ほどからセラと何かを話し込んでいる。コテージ周辺の喧騒から少し離れようと思ってアレックスを抱いて湖畔の木の下に来たわけだが、何故か3人ほどおまけがついてきてしまった。

セラピア湖にやって来ている者はかなり多い。アクイラ騎士団の関係者だけでも数十人に上り、シートラス騎士団の面々も加わっている。タロン騎士団は先日の事もあって来る事が出来ず、リコとネアも医務室で横になっているためエリカとしては会いたくもない人間と顔を合わせる事にならないで済んだので心持気分も良くなった。

夜のパーティにはグラン王やシャリオ王子、ティティも参加することになっているため、今この時間から周囲の警備は随分と厳しい。

「まあ、そんな事はもうどうでもいいじゃねえか。おい、ジーン、あの湖の真ん中に浮いてる流木まで勝負だ!」

「子供かよ……ってフライングするとか卑怯だぞ!」

会話の途中で湖に飛び込み猛然と泳ぎだしたジャックに釣られてジーンも慌ただしく上着の脱いで湖に飛び込む。

「まったく、2人と子供よ……!」

ファイアが呆れたようにその様子を眺めている。

最初こそジャックに大差をつけられていたジーンであったが、半ばの辺りでほぼ横一線にまで追いつき、一進一退の攻防が始まる。

すると騒動を聞きつけたアクイラ騎士団の面々がやって来て、ジーンを応援する者とジャックを応援する者が出始める。

そして必然の如く、「ジーンに10!」、「ジャックに20!」とお金を駆ける連中が現れる。休日の行動にそれほどうるさくはないバーバラであることを良い事に、賭けはさらにエスカレートしてシータス騎士団の面子すら巻き込み始める。

その様子を見たシルヴィアが隣のセラに頭を下げているが、セラはそこまで気にしている様子はない。

「本当に騒ぐのが好きですね、うちの人たちは」

「あらエリカちゃん、それは気が付くのが2カ月ほど遅いわよ?」

「あ、フィア、エリカ!一緒に泳がない?」

賭けに熱中する男衆はさておいて、と言った様子で女性騎士たちが2人の元にやってきた。彼女たちにしても、ここまで来て遊ばないわけにはいかないのだろう。

「ま、今日くらい羽目を外すのも良いと思うけど、さて、それじゃ少し入る?」

「分かりました」

女性騎士たちは既に泳ぐ気満々の状態だ。というより既に湖に入っている者もいるくらいだ。この日のために用意したのか、妙に露出の多い水着を着た者もいる。

「新しい出会いを求めて、ってそういう意味もあるんですか……」

女性騎士たちが湖に入ると、賭けをしていた男衆もそちらに視線を向けるようになる。もちろん賭けがあるためジーンたちからも目が離せないが、男としてやはりこちらにも気になるようだ。

フィアは木の影で手早く服を脱ぐと泳ぎやすい恰好になった。それほど着飾ってはいないようだが、もともとフィアはスタイルが良いため、身体のラインが分かる薄い生地服はとて頼りなく思えてしまう。

その様子を見たエリカは、そろそろ自分が覚悟を決めなければならぬ番が来たと察知した。

エリカは小さく息を吐くとフィアのお下がりの少しぶかぶかな服を脱ぐ。

その瞬間、何故か女性陣の間から「おおっ」という声が上がったように思えるが、何も聞こえない事にしておく。男衆などカボチャだと思わなければ今のエリカは卒倒してしまいかねないほど恥ずかしい思いをしているのだ。

あの日、あの場所で、フィアの知り合い、レナによって勧められた水着、さすがにそれだけでは肌寒さを否めないので1枚羽織っているが、それでもエリカの魅力を引き立てるには十分すぎる破壊力があつた。

真っ白な肌に黒い水着、黒髪とも相まってエリカの女性らしさをこれ以上にないまでに見せつけており、その中でエリカの赤い目が2つ、美しく輝いているのだから、見惚れるなと言う方が無茶である。

上に羽織っている服にしても、フィアの物と同じような服であるため、反対側が簡単に透けてしまう。

とてもじゃないが羽織っている意味を見いだせない。

「やっぱり似合うわね、エリカちゃん」

「うう、こんな格好で敵に襲われでもしたらどうすればいいんですか……」

泣きそうな顔でエリカは自分の格好を恨めしげに見た。水着姿なのだから、当然背中や腹は限界まで露出している。エリカはその恰好を見て真剣にどう戦えばいいのか悩んでいるのだ。実際、この恰好では黒鱗を発現させることはできないのだが、どうもエリカには物事を実用的か否かで見えてしまう癖があるようだ。

「とりあえず、戦う時は服を着ましようね？」

何故か、フィアにかわいそうなものを見るような目で見られた。

その言葉でエリカは顔を上げ、茫然と立ちすくんでエリカを凝視している女性陣と、若干名の男衆に目がいった。

「か

」

されてしまつ。

「ちよ、皆さん落ち着いて……ひゃわっ!？」

突然、腕を掴まれ、腰を持ち上げられ、胴上げのように女性騎士たちの頭上へも持ち上げられてしまふ。フィアに助けを求めようとしたが、当のフィアもその集団に加わっているので助けを求める事も出来ない。少し遠いがシルヴィアたちに救援要請を必死に視線で送ろうとするが、笑みを浮かべながら「頑張れ」という口パクとサムズアップが返される。

アレックスはこの集団を止める事など出来ないと判断したのか木の影にいるし、バーバラは視界にいない。万事休すだ。

「……そおれっ!!」「……」

女性たちがそんな掛け声と共にエリカを空中に放り出した。

一瞬の浮遊感の後、エリカは湖に着水する。女性とはいえ騎士、随分と飛ばされたらしくギリギリ足が湖底につくくらい場所まで放り投げられてしまい、水面に顔を出すとエリカはジト目で彼女たちを見つめる。

だが、そんなもの今の彼女たちにとっては蚊に刺されたほどのダメージすらなかった。エリカを投げた集団は続々と湖へと入っていき、思い思いに遊び始める。

最初はただの水かけ遊びだったのだが、そのうち強烈な水鉄砲で数人まとめて湖に沈めたり、水流を上手く利用して自分の身体をマッサージしたりする騎士が出始める。そうなるともはや止める事など

出来ないという事がエリカにも分かった。

シータス騎士団の女性陣も加わって派手な水上ショーまで始まる。

その場だけ見れば、男衆よりよっぽどアクティブに遊んでいる。

「人を投げておいてそのまま放置ですか……」

エリカはその様子を見て、苦笑するしかなかった。

因みにジーンとジャックの競争は引き分けに終わり、誰の得にもならなかった。

「いただきます」

散々遊んだためか、皆お腹が減っていたようだ。

料理を口にする速度が普段より随分と早い。

結局、日が随分と傾くまで遊んでいたが、コテージの方から漂ってくる香ばしい匂いに惹かれて徐々に湖から出ていった。着替えをするためにコテージにある更衣室に行き、着替えを済ませると庭に出る。

するとそこにはたくさんのテーブルとその上に乗せられた料理が並んでいた。

立食パーティーだったようで椅子はなく、テーブル毎に種類の違う料理を自分の取り皿に盛り、談笑しながら食事をすることにしたように、周辺からは笑い声も聞こえてくる。

そんな中エリカはコテージのテラス、湖を一望できる場所で日が沈んだ空を眺めながら食事をすることにした。

というより、そこに食べたい物を担ぎ込んだと言った方が適切だろう。アレックスにも手伝ってもらい、到底一人で食べる量とは思えないほどの料理をなくなる前に確保してここに集めておいたのだ。

アレックスにはお礼として上等な肉を貰ってきているのでそれを渡すと礼を言ってからそれにかぶり付いていた。

< 良いのか？ 皆と話したくないのか？ >

「そういう訳じゃないんですよ。ただ、ちょっと1人になりたいと思ひまして」

日が暮れた空には徐々に星々が昇り始めている。まだ紅の空も地平

線の近くには見えるが、夜がそれを徐々に浸食している。

「ここにあるのを食べきったら皆さんと合流します」

<これ、全てか……>

皿の枚数だけでも優に10皿は超えている。おまけに限界ぎりぎりまで盛り付けているため、ちょっとした衝撃でも崩れそうだ。

「ティティ様も来ますからね、さすがにここにずっといる訳にもいきません」

各国の国王、王子、王女が来るというのにそれを無視するのはよろしくないことぐらいはエリカだって分かっている。

だからこそ、談話に夢中になって食事がおろそかにならないように先に味わっておこうと思ったのだ。さすがに庭でじっくり味わう余裕はない。

「おや、今日は満月でしたか」

見上げた空、星の海の中に丸い月が姿を現していたのに気が付いてエリカは自然と笑みを浮かべていた。

「さて、ささっと食べ終わっておきましょう」

そう言ったエリカは、空を眺めながら食事に耽る事にした。

因みに全14皿、25種の料理は10分足らずでエリカの胃に収まった。

第60話 つかの間の休息（後書き）

どうもどうも、作者のハモニカです。

この小説もついに60話ですか、なんかすごいですね。

さてさて、前書きでも書きましたけど、終盤に入りシリアスが増えちゃったおかげでなかなか筆が進みません。

更新が遅れないか心配でなりません。

ですが、ノンストップで行けるように頑張らせてもらいます。

ふっ、四流作者にスランプなんてないんですよww

では！

ご感想や誤字脱字の報告、お待ちしております。いや、後者は来ない方が良いんですけど。

第61話 嵐の前の静けさ(前書き)

第61話 嵐の前の静けさ

「皆、楽しんでおるようで何よりだ」

庭で雑談をしていた面々に耳に、威厳のあるよく通る声が響き、即座に声が下方向を見るとグラン王が立っていた。もちろん、その横にはシャリオ王子とティティもいる。

シャリオ王子は部下の不始末もあってこの場への出席を辞退しようとしていたらしいが、グラン王の計らいで出席することになった。

その3人を視界に収めると、その場にいた全員が姿勢を正して、直立不動になる。その様子にグラン王は苦笑しながら手で休めと指示をする。

「今宵はそのような堅苦しい礼儀作法は抜きにしてくれて構わん。各国の騎士たちが一同に集まる機会などそう多くはない。この場では君たちが主役なのだ。私たちは隅の方でのんびりさせてもらうよ」

一国の王である自分よりも、騎士たちを立てる、その度量が今の彼の地位を確たるものに行っているのかもしれない。

グラン王は護衛の騎士数名を引き連れてコテージの中へと入っていき、残されたシャリオ王子とティティは騎士たちとの談笑に加わっていく。

シャリオ王子に対しては最初こそどこか警戒感のようなものをむき

出しにした騎士もいたが、それも彼と会話をしていくうちに消え失せ、すぐに笑顔で会話をするようになっていった。

ティティに関して言えば、シータス騎士団の女性騎士と何やら話し込んでいる。見ている限りでは他愛のない話をしているようだ。

「むう、こんな様子ならもう少し皿を増やしておいても良かったですわね……」

ティティたちがやってきたという知らせを受けて庭に戻ってみれば別段格式ばった事をやっている訳でもなかったのだ。1人ぐらいいなくても気づかれなくらいの人数がいるのだから、テラスでもう少しゆっくりしていても良かったかもしれない。

そんな事を考えながらコテージの中へ消えていくグラン王を目で追っていると、その視界にこちらに向かって歩いてきた影があった。

その人影に気が付いてエリカは手に持っていた皿を置き、立ち上がって姿勢を正す。先ほどグラン王が堅苦しいのは抜き、と言ったが、こうやってしっかりと立場の違いを意識することで必要以上に近寄られる事もなくなる。

当然のことではあるが、近づいてきた人影はそれを見て苦笑した。

「先ほどのグラン王のお言葉、聞いてなかったのかな？」

「聞いてましたけど、あたしがしようと思ったんです、シャリオ殿下下？」

近寄ってきたのはシャリオ王子だった。どうも周りの人間からは「

殿下」と名前の後ろにつけて呼ばれているようなのでエリカもそれに倣ってみる。

シャリオ王子は比較的ラフな格好をしている。一見すると上下黒の正装にも見えるのだが、どこかくだけたように思える。そのせいか、シャリオ王子を見る女性騎士たちの目が多い。

「で、どうしたんですか？」

「あなたに謝罪と礼をしたかったからだ。我が国の騎士が、あわや大惨事を起こすところだった。死者を出さずに済んだの、あなたのおかげだ。あの馬鹿な奴らに一泡吹かせてくれた事に感謝し、あなたを負傷させてしまったことに詫びたい」

シャリオは躊躇なく頭を下げた。下げてもその頭はエリカと同じくらいの高さにあるため、改めてシャリオ王子の長身を実感させられる。

「詫びなんて、あれはシャリオ殿下の責任じゃない事は誰が見ても明らかです。だから自分を責めたりはしないでください。そんな事をしてる暇があったらお国の体制を変える事ですね」

突っぱねるつもりはないが、どうもこのシャリオという人間は他人以上に自分を責める傾向にあるようだ。冷静さを装ってこそいるが、自分の不甲斐なさを他人以上に責めているのが分かる。

エリカがそう言うと、シャリオ王子は頭を上げながら再び苦笑した。だが、今度のは自嘲の意味も含まれていたのだらう、どこか淋しげだ。

「同じような事をグラン陛下にも言われたよ。どうもあなたにはそういう血が流れているような気がする」

「そんなわけないじゃないですか。あたしは一介の騎士ですよ」

そうは言いつつも、シャリオ王子の観察眼といおうか、直感といおうか、第六感というものの鋭さに舌を巻いた。どこぞの愚鈍な馬鹿トリオと違って人を見る目があるようだ。それはそれで対応が面倒になるのだが、あの馬鹿トリオよりはよっぽど話しやすい。

（こんな人ばかりだったらブラゴシユワイクの政治も腐らずに回るでしょうね……）

どこの世の中にだって誠実な人物、真面目な人物はいる。

だが、その数を圧倒的に逆の人間が上回っている、それがブラゴシユワイクの実情であり、問題点でもある。アールドールンやエオリアブルグとはその点で大きく違う。

とはいえ、政治は腐敗するもの、それを限りなく少なくするのが政治家の仕事である。少なくともシャリオ王子にはそれをやるだけの力も、意志もあるとエリカは考えている。

人は失敗から学ぶ生き物、などと言ったのは誰だっただろうか。

「それと、仲間を、リコとネアを庇ってくれた事に感謝をしたい」

「あの2人はどうなるんですか？」

ご主人様、と言ってたのだから、あの2人と馬鹿トリオは主従の関

係にある事は明らかだ。

だが、その主人に命を奪われかけたのだ。従う側が反旗を翻したとしてもおかしくはない。

シャリオ王子は少し表情を曇らせるが、なるべく口調が暗くならないようにして言葉を紡いだ。

「あの2人はもともと貧しい家の出だった。それをあの3人の親が買い取ったのだろう。人身売買は禁止されているが、親が貧しさ故に自らの子供を金に換えるというのは悲しい限りだ。つまり、2人は商品であり、所有物なのだ。持ち主が手放さない限り、彼らに自由はない」

「そんな……、殺されてもおかしくなかったんですよ？」

人が人を所有する。

それがどれだけ馬鹿げた事を意味しているのか、エリカは分かっているつもりだ。

だから、それを黙認するシャリオ王子に批難の眼差しを向けた。

「契約があるからな、それも正式な。いかに王族と言えども個々人の間で交わされた契約に介入することは簡単な事ではない。まあ、確かあの2人の所有権は息子に委譲されていたはずだから、あいつらが事故死でもすれば話は別だが……」

記録に残らない会話ということの良い事に、シャリオ王子はペラペラと表に出たら問題になりそうな事を平気で口にする。日頃の彼ら

への鬱憤は相当のものなだろう。

「ああいう奴に限って長生きするのが世の常、皮肉なものだな」

鼻で笑ったのは、誰を笑ったのだろうか。自分か、それとも彼らか……。

「……と、すまん。楽しむ場でこのような重い話をしてしまった」

「良いんですよ。あたしが聞いたことなんですし。それよりも、グラン陛下がご用みたいですよ？」

エリカがシャリオ王子の背後に視線を向けると、シャリオ王子が背後に振り返る。グラン王を護衛していた騎士が1人、2人の方に歩いてきていた。シャリオ王子の前にやって来るとグラン王が呼んでいる旨を伝える。

「そうか、ご苦労。すぐに行くと伝えてくれ。……ではエリカ、これで失礼させてもらう。明日の試練の成功を」

シャリオ王子はそういうと自分を呼びに来た騎士が向かっていったコテージへと去っていった。

「……政治って大変ねえ」

「盗み聞きですか、バーバラさん？」

割と近くから聞こえてきた声に呆れたようにエリカが返すと、背後の椅子に座っていたバーバラがヒラヒラト手を振っていることに気が付いた。確か椅子は全て片付けられていたはずなのだが、どうや

ら自分用に1つ確保していたようだ。

「盗み聞きじゃないわよ。ここでワインを飲んでいたらあなたたちが勝手に話し出したんじゃない。少なくともあの王子様は私の存在に気が付いていたと思うけど」

「そりゃ、椅子の背もたれの先から頭が見えてれば気づきますよ」

椅子の前に回り込み、バーバラを真正面に見据える。

バーバラは椅子に足を組んで座っており、足元にはアレックスが定位置のように丸まっている。バーバラの手には血のように赤いワインが注がれたグラスが握られており、バーバラが揺らすたびにワインがグラスの中で回転している。

「で、話しかけてきたという事は何か用でもあったんでしょう？」

「あら、話が早くて助かるわ。出発前にもクライムから話があったと思うけど、どうもきな臭くなってきたわ」

言った瞬間、エリカの表情から感情が消え失せる。

バーバラもまた、先ほどまでのおちゃらけた雰囲気もどこへやら、真剣なまなざしになっている。

「……シャドーとやらが？」

「……」名答、動き出したようよ。まだ正確な足取りはつかめないけど、確実にエリカの周囲に近づいてるわ。念のために聞いておくけど、ここ数日誰かに視られているような事はなかったかしら？」

「少なくとも、エオリアブルグに来てからはないと思いますけど…」

「そう、なら良いけれど。用心のし過ぎはないわ、気を付けてね。何をしてくるか分かった相手じゃないんだから」

バーバラは立ち上がり、エリカの横に立った。そしてその手をエリカの肩に置く。

「アレックスを貸すわ。何かあったら私に知らせなさい。クライムの話じゃ、少なくともシャドーの構成員が10人前後、首都に入り込んでるわ」

その言葉にエリカは顔をしかめた。

何故、そこでクライムが出てくるのか、分からなかったからだ。あの人物が公文書室だけに飽き足らず国すら出るような人間には思えない。こう言ってはなんだが、日陰から出たがらないように思える。

「言っただけでなかったわね。今回の一件、つまりエリカの事を指すのだけれど、クライムは騎士団とは別ルートでエオリアブルグに来ているわ。相変わらず太陽の下に出てこないけれど、ちよくちよくアレックスを介して情報を回してくれているの。元暗殺機関の名は伊達じゃないわね、密入国なんて楽勝なんですって」

「クライムさんが元暗殺機関ですか。そうは見えませんでしたけど」

「あれでも、その界限では随分と名が知れた暗殺者だったらしいわよ。暗殺されたように見せないのが彼のやり口。事故に見せかけて

ターゲットを闇に葬るのよ。今じゃ毒気も抜けて、隠遁みたいになっちゃったけど」

そう言うバーバラの表情は穏やかだ。

ふと、その顔を見ていてエリカはピーンと来た。そしてニンマリと笑みを浮かべるとバーバラの顔を見つめる。

「……な、なによ？」

「バーバラさん、恋してますね？」

「ぶっ！！！！？？」

小声でそう言ってやると、バーバラが盛大に吹いた。先ほどまで月明かりで青白く浮かび上がっていたバーバラの顔がみるみる真っ赤になっていく。その光景があまりに面白くてエリカは笑いを堪える事が出来なかった。

「ななな、なにを言ってるのかしら？」

「誤魔化したって無駄です。人の事散々『分かりやすい』とか言うておいて、自分だってそうじゃないですか」

「わ、私は別にあいつに恋なんてしてないわよ！」

無駄に慌てるバーバラ。だが、それが結局は裏付けのようなものになっってしまう。

普段クールなだけに、慌てた顔を見るのはまた面白い。

「落ち着いてください、バーバラさん。誰も邪魔なんてしないで
から」

「だから！」

こうなつては完全にバーバラに分が悪い。エリカは珍しく、いや、
もしかしたら初めてバーバラから一本取つたような気がして優越感
に浸る。人をからかうのはあまり好きではないが、今まで散々やら
れているだけに多少なりとも仕返しがしたくなつたのだろう。

「ま、頑張ってください」

「だから、何をよ！ …… そういうエリカこそ、気になる人はいな
いのかしら？」

「……へ？」

投げた球をダイレクトに返されたような気がして一瞬反応に困つた。

（気になる？ それはつまりバーバラさんのように恋愛対象として
男の人を見ると言う意味でしょうけど……、ふうむ）

バーバラのカウンターに思考を持っていかれて考え込んでしまうエ
リカ。今まで出会つた人々を一人ひとり思い出していく。

ジーン、ジャック、ヴァルト、クライム、アーサー王、その他諸々。

男性を挙げてみると言われた初めに出るのは、やはりジーンのよう
だ。

(かといって、ジンさんを？ ……皆同じくらい大切な仲間ですしねえ)

「という訳で、黙秘します」

「『という訳で』を説明したら黙秘を認めてあげるわ」

「それは黙秘していることになりません！」

(い、いけない、立場が逆転しかかっている！)

バーバラが立場を入れ替えて自らへの追及を阻止しようとしている意図を見抜いたエリカは早急に対応策を講じる必要が出てきた。このままではエリカが追及の対象になってしまう。

「くっ、フィアさん、シルヴィアさん！」

巻き込むのは嫌だったが、こうなっては致し方ない。

エリカは近くにいたフィアとシルヴィアを呼び寄せる。

「どうしたの、エリカちゃん」

「あらバーバラも」

2人してやや顔が赤いように見える。程よくアルコールが回っているようで、エリカは内心ニヤリとしながらフィアとシルヴィアにバーバラの事を伝える。

「バーバラさんに好きな人がいるようです」

「ちょー!!」

もう遅い。

アルコールが入っているフィアとシルヴィアはそれを聞いた瞬間こそ目を丸くしたが、即座にバーバラに視線を向ける。

「バーバラさん、ぜひともそのお話詳しくお話してもらいたいです」

「そうねえ、堅物のバーバラが一体誰に、もしかしてヴァルト団長？」

「違うにきまつてるでしょう!」

「違う、ってことは他にいるのね。言質は取ったわ。もはや言い逃れは出来ないわよ」

アルコールが回っているにしてはやる事が揃め手だ。シルヴィアの誘導尋問のような会話にまんまと引っかけたバーバラは恨めしげにエリカを睨み付けてくる。

「いつもの仕返しってやつです」

「いくらなんでも、これは酷いわよ。このままじゃここにいる全員に知れ渡っちゃうじゃ」

「セラさーん」

「ちよ、ファイア、何をしようとしているの!？」

宴はその後バーバラの恋愛話で大いに盛り上がる事になった。

意外なところでは、シャリオ王子が途中から話題に加わってきた事だろう。さすがに男性に言う気にはなれなかったバーバラはついにオーバーヒートしたかのようにどこかに逃げ出してしまった。

「いや、楽しかった」

「随分とご機嫌ね、お姉ちゃん」

バーバラがエスケープしたのを見送ったエリカは、昼間いた湖畔の木の陰に腰を下ろしてアレックスを抱えていた。バーバラはアレックスすら置いて逃げてしまったので、エリカが勝手にモフモフ権を行使、強制連行するに至った。

そんな所にティティが現れ、2人きりである事を確認してからエリカの隣に腰を下ろした。

「こんな所にいてもいいんですか？」

「良いのよ。どうせ暇ですもん。皆畏まっちゃって話じづらいつたらありゃしない」

「ふふ、お姫様も大変ですね」

「あら、それはお互い様でしょう？」

アレックスの耳がピクツと動いたのが分かった。

「……どういう意味ですか？」

「しらばっくれなくても結構ですよ。これは私の勝手な想像ですから」

エリカは黙ってティティの顔を見つめる。だが微笑みを張り付けたティティの心を読むことは出来ない。

「お姉ちゃんって、ドラゴンのお姫様でしょう？ 立ち振る舞いやかもし出す空気で分かりますよ」

「そう、ですか……」

内心ホツとしつつも、複雑な気持ちは拭いきれない。ティティには間接的ではあるがエリカ自身が龍であることは教えている。だが、そこまで割り出されるとは思ってもいなかった。

エリカの口から「あたしはドラゴンだ」と言ったわけではないし、王の娘である事なんてちらりとも言っていないはず、やはりこれはティティ自身が持つて生まれた感性の高さに由来しているのだろうか。

とはいえ、ティティは星巫女という役目を持っている。

未来を知り、今を知る。

それが彼女の役目、エリカの事を調べていたとしても不思議ではない。

「星が言っているんです。帰るべき所へ帰る時が近づいていると」

そう言ったティティの表情は曇っている。月明かりと若干の明かりだけのためエリカにはその全てを読み取る事は出来ない。

「……それは、あたしの事ですか？」

「分からない。でも、黒い影が森に消える時、争いは止む、と」

ピンポイントでエリカの事を指し示している。

「確か、ティティ様はあたしを『慈悲』と仰いましたよね。ならば『災厄』が迫っている、という事ですか？」

「『災厄』とは何を基準にそう言うか分かりません。後々考えてみれば、そう考える事も出来るほどの事かもしれないし、それこそ国家レベルの危機かもしれない。ただ、その『災厄』の種が一カ

所に集まるうとしていることは確かです」

『災厄』の種……。

もはや、それはシャドーの事を意味していると考えて間違いないだろう。そしてその中心にはエリカがいるという事も。

黒い影が森に消える、つまりはエリカは元の姿を取り戻して自らの故郷へ帰る事を意味しているのだろうが、その過程が分からない。そもそも元に戻る方法は今のところ見つかっていない。

シャドーがエリカを追う理由すら、まだはっきりとはしていないのだから、ただ単純に元の姿に戻りました、めでたしめでたし、になるとは到底思えない。

「……帰っちゃうんですか？」

「それは……」

純粹にエリカを心配してくれるティティの目。

それを直視できず、エリカははっきりとした返事を返すことが出来なかった。

第61話 嵐の前の静けさ（後書き）

どうもどうも、ハモニカです。

まさかのバーバラww

さて、どうなることやら……。

では、また次回。

ご感想などお待ちしております。

第62話 離別と決意

「ふあ、ちよつと寝足りないですね……」

1日の休息はあっという間に終わってしまった。

翌日に備えて他の者よりも早く切り上げたアクイラ騎士団の面々は城に戻って睡眠をとる事になっていた。

エリカも同様にベッドに横にはなったのだが、シャドーの事とテイイの台詞が頭から離れず、結局わずかな睡眠しかとれなかった。体調に変調をきたすほどではないが、やはりもう少し眠りたいという気持ちは否定できない。

だが、時間というものは無情にも朝を迎えてしまった。太陽は既に随分と高い位置まで昇っており、当然ながら優勝したアクイラ騎士団の最後の雄姿を見に来た大勢の観客が闘技場の座席を埋め尽くしている。

昨日、散々騒いでいたアクイラ騎士団ご一行も観客席の一角におり、始まるのを今か今かと待っているようだ。

「随分と気が抜けてるわね。そのまま引きずらないですよ？」

「あれだけ騒いでいた皆さんが何で平然としているのか不思議なんです……」

心配して聞いてくれたのだろうか、エリカは恨めしげにバーバラを見つめ返した。

それもそのはず、最も騒いでいたジーンとジャックは疲れも吹っ飛んだようで爽やかな表情、随分とワインを飲んでいたバーバラもシルヴィアも、むしろさっぱりとしている。

何故、昨日の疲れが残っていないのかエリカは不思議でならなかった。

「そりゃあ、騒いだ後にしっかりと睡眠を取ったからだが……、エリカ、気のせいかな目の下が黒ずんでるぞ？」

「……多分気のせいじゃないです」

顔を覗き込まれ、たじろぎながらもエリカはため息をついた。

結局、この中で絶好調になっていないのはエリカだけのようだ。

寝不足で判断力が低下すれば、命に関わるミスをしかねない。エリカはどうにかして迫りくる睡魔の誘惑に打ち勝とうと手の甲の皮をつねる。

「エリカちゃん、眠気はどうにもならないけど、疲れは多少取れると思うからそこに座って？」

そんなエリカの状態を見かねたのか、フィアがエリカにそう言っと椅子を引いてエリカを座らせた。

そしてフィアの首筋に手を添えると、おもむろに治癒魔法を唱え始めた。その瞬間、エリカの首筋から温かい感触が身体を包んでいき、気怠さに似た身体の疲れがスーッと引いていくのがはっきりとエリカにも分かった。

「筋肉疲労を幾分軽くしたから怠さはなくなったと思っけど、どうかしら？」

先ほどまで何か重りでも吊るしているかのような感覚のあった腕が羽のように軽くなった。エリカはそれを確認すると笑いながら背後のフィアに振り返った。

「ばっちりです。ただ眠気に勝てるかどうか……」

「そういう事なら、嬢ちゃん、朝の一杯だ」

「フゴツ!?!」

突然ジャックの腕が伸びてきたかと思うと、エリカの口にマグカップに入ったどす黒い液体を流し込んだ。

「~~~~ツ!?!」

まずは熱気、次いで苦さがエリカの舌に襲い掛かってきた。

「がっはっはっはっ！ 朝のブラックコーヒーで眠気も気怠さも一発解けつくへっ!?!」

まるで人助けをしたかのように満面の笑みを浮かべるジャックの鳩尾にとりあえず右ストレートを送り込み、左手で口元を抑えながら

エリカは涙目でジャックを睨んだ。

「ひ、ひたがやへどするかとおもっはじゃないへふか!！」

「エ、エリカ、ほら水」

ジーンが差し出してきた水を口の中に流し込んで何とか焼くような熱さからは解放されるが、一度強襲してきた苦さの方はなかなか舌の上から撤退しようとしめない。

「だ、だが眠気は冷めただろうっほげっ!？」

床を転がっていたジャックの鳩尾に今度は蹴りを入れる。今度は手で防御されたが、態勢が悪かったせいで結局防御した意味がないくらしいの衝撃を受ける事になる。

「冷めないわけないでひようが! ああ、まだ舌が少ひりひりしまふ……」

何とも情けない声しか出ない。

「まったく、コントなんてやってないで準備しなさいよ……」

「バーバラさん。あたし被害者なんですけど?」

「そんな隙見せてたあなたも同罪よ」

「な、何故!？」

言っても聞いてくれるような表情ではなかったが、そう言わざるを

得ない。

バーバラもこの状況を楽しんでいるらしく、先ほどからニヤニヤしっぱなしだ。シルヴィアは笑いを堪えようとして肩が震えているのが分かる。エリカに水を渡したジーンは悶絶しているジャックを抱き起そうとしているが、どうも御小言を言っているらしくブツブツ何かを言っているのが聞こえてくる。

「ほら、エリカちゃん、舌見せてみて」

呆れたような顔をしたフィアに言われて舌を出すと、フィアがしばらくそれを観察するように見ていたが、しばらくして「良いわよ」と言われてエリカは舌を引っ込めた。

「火傷までは言っていないから大丈夫みたいね。まあ、眠気が覚めたみたいだから結果オーライで終わりましたよ？」

「むう、非常に納得がいきませんが、致し方ありませんね……。ジヤックさん、帰ったら一度ゆっくりお話しする必要があるみたいですね」

「うおっ！？ 俺の死亡フラグか！？」

「今そのフラグ、回収しましょうか？」

椅子に立てかけていた刀に手を伸ばす仕草をしてみせる。

「す、すいませんでした！！」

即座の土下座。

鎧を着ているから腰はそこまで曲がらないのだが、その分は膝を立てて補っている。結果、腰が突き出してどこか間抜けな男の図が出来る。

その瞬間、爆笑が起こる。

さすがのエリカもそのあまりに間抜けすぎる光景に吹き出してしまい、先ほどまでの怒りもどこかへ吹き飛んでしまう。何とか耐えていたシルヴィアも我慢の限界を迎えたようで腹を抱えて笑っている。楽しいのか苦しいのか、彼女の目尻には涙が浮かんでいる。

「お、おい、笑うんじゃないねえ！」

「ジャック、そいつは無理な相談だ」

ジーンにそう言われてジャックはガクツと項垂れてしまった。

しかしそこはジャック、立ち直りの速さも神兵並み、即座に気分を切り替えて迫りくる最後の舞台に臨む準備に取り掛かる。

「さて、それじゃ私たちも準備しましょうか……あら？」

シルヴィアがそう言った時、控室の扉が2回ほどノックされた。

「このタイミングで……誰かしら」

ファイアがコーヒを飲みながら扉に顔を向けていると、一番扉の近くに立っていたシルヴィアが扉を開けた。

すると、そこにはエオリアブルグの衛兵が立っていた。兜を装着していて顔は見えないが、皆屈強な男で、腰に剣を吊るしている。

「このような時間に申し訳ない。騎士エリカはいるか」

言葉の上では礼儀をわきまえているように思えるが、その言い方は非常に高圧的だ。とてもじゃないが一国の衛兵とは思えないほど粗雑な口調だ。

衛兵は扉の隙間から室内を覗き込み、椅子に座るエリカを確認するとシルヴィアを押しつけるようにして部屋に入ってきてエリカの前に仁王立ちした。

「……あたしに何か用ですか？」

扉から衛兵が顔を覗かせた時点で、エリカは彼らが決して幸福を運んできたわけでない事は分かっていた。

だからエリカはあえて声のトーンを落として睨み付けるような目で衛兵を見てやった。

部屋に入ってきた衛兵は全部で5人、廊下にまだ人の気配がある事から、少なくとも10人前後はいるだろう。中に入ってきた衛兵のうち、隊長格と思われる衛兵が1枚の紙を取り出すと、それをエリカの前に突き出した。

「貴殿に殺人容疑がかかっている。タロン騎士団所属の3名の騎士が殺害され、死体が今朝軟禁されていたはずの部屋で見つかった」

「なっ！！」

部屋にいたジーンたちが驚きの声を上げた。

「な、なにを根拠にエリカを犯人しているんだ！」

ジーンが声を荒げて衛兵に詰め寄るが、途中で他の衛兵に遮られてしまう。

「3人とも刀による致命傷を受けていた。しかもそのうちの1人は脳を焼かれており、非常に強い怨恨が原因と思われる。刀の使い手であり、なおかつ彼らに恨みを抱いている人物となると、貴殿しかおらんと思うが？」

衛兵の話はつじつまが合っていた。

エリカにはあの馬鹿トリオを殺す動機もあるし、殺害方法は使い手の少ない刀によるもの、それが揃っているのだから、エリカに疑いが向けられてもおかしくない。

「昨日の夜、何度か部屋を出たそうだが？」

「……ええ、眠れなかったので」

眠れなかったエリカはユーリに声をかけて部屋を数回出ている。もちろん、殺しに行ったわけではなくただ城の中をボンヤリ歩いているだけだ。とはいえ、殺す機会すらあったことになるのは確かだ。

「3人が最後に目撃されたのは部屋に軟禁される時、それ以降彼らを見た者はいない。つまり、いつ殺されたかもはっきりしないのだ。昨日の段階で殺されていたのか、それとも一昨日にはすでに、ある

いは「

「やめなさい！」

衛兵が1人で話を進めようとしていた所に、バーバラの鋭い声が飛んできた。

「……何か？」

衛兵は至極冷静な声でバーバラの方に顔を向ける。バーバラは今にも爆発しそうな怒りを抑えるかのように荒く息を吐きながら衛兵を睨み付けている。

「あなたたちがエリカをどう考えているか知らないけれど、こちとら随分と長い付き合いなのよ。だからエリカが後先考えずにそんな馬鹿な事をするほど愚かじゃない事ぐらい分かってる。あなたたちには悪いけれど、その推測は全て大外れよ」

ジーンを押さえつけていた衛兵を軽々押しのと、逮捕状と思しき紙を持った衛兵を真正面から睨み付ける。

「ほ、なかなか良い仲間に恵まれているようですね、騎士エリカ？
しかし、騎士バーバラ、彼女に対する容疑はこれだけじゃないのですよ」

まるでバーバラが反論してくるのを待っていたかのように衛兵はもう一枚の紙を取り出してバーバラに突きつけた。

「彼女にはこちら、タロン騎士団の関係者10名を殺害した容疑もかかっている。こちらからも、おびただしい数の刀傷が発見されて

おり、死体の中には、獣に噛みつかれた牙の跡すらあった、そう、その狼のもののようなね」

そう言われた瞬間、バーバラがハツとした表情をする。

「……確かあなたが飼い主でしたな？ 心当たりがあるようで何より」

何が「何より」なのかさっぱり分からないが、旗色が悪いのは確かだ。

少なくともその10人はエリカがアクイラ騎士団とシータス騎士団の試合中に襲ってきたブラゴシユワイクの暗殺部隊である可能性が非常に高い。

そうになると、そちらに関しては言い逃れすら出来ない。殺したのは事実なのだから。

おそらく身分を偽ってまったく関係のない人物として死体を処理し、容疑を作り出したのだろう。そうでなければ、その1件でエリカを拘束することは出来ない。なにせ彼らの方から襲ってきたのだから、多少過剰ではあったとはいえエリカには正当防衛が成立するはずだ。だが、彼らが「そのつもり」で来ているのなら、今それを主張するのは厄介だ。一度認めれば、後はなし崩しに悪い方へ転がり落ちてしまう。

「さて、騎士エリカ、ご同行してもらえますか？」

勝ち誇ったような声で言う衛兵。エリカは無表情でその男を見るが、

兜に隠された男の表情は読み取れない。

「シルヴィア、姫様の所に行ってどういう事か聞いてきて」

「わ、分かったわ……っ！！」

扉の傍で茫然とエリカとバーバラ、衛兵のやり取りを聞いていたシルヴィアはバーバラに言われて扉から出ようとした。

だが、出ようとしたところで先ほどからエリカも察知していた残りの衛兵が姿を現し、扉の前を塞いでしまう。

「アクイラ騎士団の皆さんにも一応お話を伺いたいのでね。外には出ないでもらいますようか」

「十分な説明もなく、誰の命令なのかも分からず、『はい、分かりました』って言うと思ってるのか？ おめえら、少し俺たちを舐めてるんじゃないかねえか？」

ジャックがおもむろに立ち上がると自らの相棒である大剣を持って切っ先を衛兵に向ける。

「おや、抵抗するという事は何かやましい事があるのかな？」

「おめえじゃ話にならねえ。セラを出せ」

「セラ殿は任務でお忙しい。だから我々が来たのだが？ そうか、それほどまでに血に染まった仲間を守りたい、そういう事ですか？ いやはや、騎士エリカ、あなたの人望には感服ですな」

殺意すら湧くほどの台詞だ。

だがエリカは黙っている。まったく狼狽えもしなければ、反論しようもしない。

それに気を良くしたのか、衛兵はエリカの横に立ってせせら笑いを上げる。

「ほら、当の騎士エリカがだんまり。これここでは言えないような事をしてきた証拠ではないのですか？ あなた方は黙ってここにいてくれればいいのです。後は我々と騎士エリカで話をしなければなりませんので」

腐ってる。

欲望にまみれ、人を貶める事に快楽を感じるような愚者が醸し出す匂いがこの男からする。

(シャドー、ついに動き出したという事ですか)

確実に、彼らが正規の兵士でない事は明らかだ。ジーンたちはそれでも彼らを衛兵だと思っているようでどうすべきか悩んでいるようだ、少なくともバーバラはエリカと同じ考えに達しているようだ。

だが、それを言えば無用な争いを招きかねない。正規の兵士でない事を知ったらずに確実にジャックが剣を振るうだろう。

(殺すつもりなら、あたしがこの程度の戦力では殺せないことくらい分かってるはず、もしあたしをこの身体にしたのがシャドーなら、あたしの正体だって知ってるはず)

「……これ以上、皆さんに迷惑はかけられませんね……」

もはや、隠し通せる範疇から事態は超えた。相手側からその範疇を超えてきたのだから、エリカにはどうしようもない。

だとすると、今エリカがすべきなのはただ1つ。

「おや、罪を認めるのかな？」

衛兵が意外そうな声で言う。まるで、抵抗されることを想定していたかのような感じだ。エリカ自身も、抵抗して皆殺しにするという手も考えたが、それでは今度こそ言い逃れができなくなるのは目に見えていた。

だから、エリカは顔を上げて立ち上がった。

「どこへなりとも連れていくがいいです。そこであたしの無実を証明できるなら」

「どこまでその強気が続くかは別として、大人しく同行してくれることには感謝しましょう」

「エリカ!？」

驚くのも無理はないだろう。

皆がエリカを連れていかせまいとしているにも関わらず、当のエリカが自らついて行くと言ったのだから。

「バーバラさん、後の事は頼みますね」

エリカは一度振り返り、ニコリと笑みを浮かべると衛兵に連れられて部屋を後にしていった。

「そんな、エリカがそんな事をするはずがない！」

エリカが去った控室、扉の外には衛兵が立っており、鍵をかけられ実質監禁状態にされてしまった。外の状況も分からず、この事をテイヤセラが関知しているのかも分からない。

「そんな事は言われなくても分かっているわよ、ジーン。問題は、エリカと一緒に引っ越した事にあるわね」

「どういう意味だ、バーバラ」

エリカを連れていかれた直後、ジャックは構えていた大剣を力任せ

に振ってテーブルを真つ二つにした。

そして勢いそのままに床に大剣を突き刺すとそのまま椅子を蹴り飛ばして壁に寄りかかっていた。

「言ったわよね？ そのうちエリカが私たちの前から姿を消すかも、
つて」

「っ！ まさか……」

「多分、あの子自分でカタをつけるつもりね。それに私たちが巻き込まれないように、自ら私たちから距離を取ったのよ。確かにここにいれば、私たちに危害は加わらないでしょうね、なにせあいつらの目的はエリカなんだから」

「そろそろ、嬢ちゃんの正体を教えてもらえるか、バーバラ」

全員の視線がバーバラに集中する。

バーバラはしばらくだんまりを貫いたが、しばらくして小さくため息をつく顔を上げた。

「今さら隠したってしょうがないわね……」

「まさかあも大人しく従ってもらえるとは意外だったな」

扉を出ると、衛兵、いや正確には衛兵の鎧を着たシャドーの構成員の男は早々に兜を脱ぎ捨てた。

するとそれに倣って前と後ろを固めていた男たちも兜を脱いでいく。

「随分と長い間、お前を監視していたんだ、気づいていただろう？」

「……気づかないわけないでしょうが。あなたですね、アールドールンにいた頃からあたしを監視していたのは」

睨み付けると男はニヤリと笑みを浮かべる。

「いかにも。貴様のおかげで我々はより高尚な存在となれる。その意味では貴様に感謝しなければな」

「感謝など貰いたくもありません。貰うも何も、今すぐあなた方には死んでもらいますからね！」

刹那、エリカは刀を抜く。

帯刀を許していた男たちにエリカは感謝しつつ、素早く真横にいた

男の首を斬り飛ばそうとする。

「おっと！」

だが、その刀は寸前のところで防がれる。エリカは即座にその男から前を歩いていた男たちに照準を移して逃げ道を確保しようとする。鎧を着ているとはいえ、そんなものエリカにとってはないも同然、その防備されている無防備な背中を易々と斬り払うとエリカは振り返らずに廊下を走り出す。

背後から怒号が聞こえてくるが、そんなものには意も介さず、コロシラムを脱出するために出口を目指す。

「皆さん、もしまた会えたら、謝ります……！」

「……ふう、おい、大丈夫か？」

背中を斬られた男を担ぎ上げながら、男が聞くと、斬られた方の男が力なく頷く。

「斬られると分かっている、斬られるのはいい気分じゃないな……」

真つ二つにされた鎧を外すと、中に着込んでいた輝く鎖帷子をポンポンと叩く。

「さすがは鉱石の中で最も硬いとされるダイヤモンドだな。半ばまでしか斬られてない」

「それでも半分削れたんだ、黒龍の鱗で鍛えられた刀、油断できねえ」

「まあ、2度と相手にすることはないだろう。後はドクターがやってくれる。そうしたら我々の悲願まであと一歩だ。そら、移動するぞ。本当の衛兵が来てしまっ前にな」

第62話 離別と決意（後書き）

そろそろ後書きで何か書きたいという意欲すらなくなってしまった
ハモニカです。

理由？

本編で燃え尽きてるんですよw

シリアスぶっ続きの終盤はそちらで体力を使い果たしてしまうので
す。

まあ、こんな感じでこれからも行きます。

ではでは、ご感想などお待ちしております。

第63話 逃走劇(前書き)

もう11月ですか。

気温もなんだか肌寒くなってきた今日この頃、そろそろ冬用の布団を出そうかと思っているハモニカです。

第63話 逃走劇

「うん？」

ふと、ジャックが顔を上げる。

そして壁から離れると扉に近づき、そのドアノブをガチャガチャと回してみるが、当然ながら鍵がかかっている。扉は開かない。

「どうした、ジャック」

「くそっ、やられた!!」

ジャックは思い切り扉を蹴り飛ばす。ジャックの蹴りを受けた木製のドアは蝶つがいの部分から見事に引きちぎれて廊下に吹き飛ばされる。

そしてジャックは廊下に飛び出す。それを止めようとする者はいなかった。

「あいつら、本当に嬢ちゃん……、いやお姫様にしか用はなかったのか……」

ジャックは歯ぎしりしながら室内に戻ると、床に突き刺さったままだった大剣を引き抜くと背負う。

「俺も行くぞ、ジャック」

その背後にジーンが近寄る。当然ながら白鱗の大剣を背負っている。

「よし、俺とジーンは嬢ちゃんを探す」

「私もアレックスと一緒に探すわ。フィアとシルヴィアはティティ様の所に行つてこの事を知らせて」

「分かった、皆にも声をかけて探すのを手伝ってもらつわ」

ジャックによつて蹴り壊された扉から出ると、ジーン、ジャック、バーバラの3人は出口方面へ、フィアとシルヴィアは観客席の方へと走り出す。

既に廊下からは人の気配がない。

エリカを連れ去つた衛兵たちはやる事を済ませるとさっさと退散したのかもしれない。そうなるかと搜索は著しく困難になってしまう。

「大人しくついて行くような性格じゃねえだろ、嬢ちゃんは」

焦っていたのが顔に出ていたのだろう。ジーンが暗い表情をしていたのを見てジャックがそう言ってきた。

「そうね、刀だつて持っていたし、問題はないと思うのだけれど……」

バーバラも冷静を装つてはいるものの、声には焦燥の念が滲みだしている。彼女にしてみれば、全てを理解したうえで悔やんでいるのだろう。知っているからこそ、動けないという時も存在するのだ。

「外に出ているとなると探すのは難しいな。アレックスで探せないのか？」

バーバラの横を走っているアレックスにジーンが視線を向ける。

「もとよりそのつもりよ。アレックス、頼むわよ」

バーバラがそう言いながら軽くアレックスの頭を撫でる。

するとアレックスは走る速度をさらに上げて3人の前が出る。そして3人を導く様に出口から飛び出すと人の流れの多い首都の大通りを指す。

「待つてなさい、エリカ。なんでもかんでも自分で解決しようとする悪い癖、矯正してあげるわよ」

「な、なんですって!？」

ティティが座っていた椅子から飛び上がる様に立ち上がると、公衆の面前という事も忘れてフィアとシルヴィアに詰め寄ってきた。

試合直前という事もあり、既に観客席に入っていたティティに会うため、警備をしていた衛兵を何人が昏倒させてしまい、今も背後を衛兵に固められている。だが、彼らも2人が話す事を聞いてどう行動すべきか悩んでいるようだ。

「エリカが、連れ去られたって、本当なの?!」

「お、落ち着いてください、ティティ王女様!」

必至の形相で事の真相を聞き出そうとするティティをセラが何とか押さえ込もうとするが、いつもの冷静さも吹き飛んでしまったティティはジタバタと暴れてセラの制止を振りほどこうとする。

「すみません、私たちは何もできませんでした……」

「そんな謝罪はいりません! 全力でエリカを探してください! 陛下、遠距離転移魔法の使用を許可してもらえますか!？」

声は荒げているが、エリカを心配する気持ちは強い。すぐに頭を切り替えるとセラに抑え込まれている体勢のままグラン王にそう尋ねる。

「騎士が誘拐されるなんて事があるとはな……。しかも私の国の衛兵を偽って、か。私たちも協力しよう、セラ、騎士団を総動員しろ。それから魔法陣を起動、アールドールンとのゲートを開け!」

「はっ、承知しました！」

にわかに騒がしくなる他の観客たち。

それもそうだろう、突如本来闘技場にいるはずの騎士とその仲間が王族の観客席に乗り込んで何やら押し問答をしているのだから、不審に思わない方がおかしい。

「私もお手伝いする。先日の無礼の詫びにもならない微力ではあるが」

シヤリオ王子が立ち上がると、すぐさま観客席を後にする。

その様子を、ファイアとシルヴィアはただ見ているしかなかった。今ここで彼女たちに来る事はない。そう思うと、無性に自分の無力さが腹立たしくなってくる。

そんな2人の心の内を読み取ったのか、ティティは穏やかな表情をして2人に近づいた。

「何をぼさつとしているんですか？ 2人には2人にしかできない事もあるんですから。すぐに魔法陣でアールドールンへ帰国、アクイラ騎士団のお留守番で暇を持て余している方々を呼び寄せなさい。一刻の猶予もないのです。仲間を見捨てるような真似をしては騎士の名が廃ります」

そう言われて、2人は顔を上げる。

「エリカのためにも、……いえ私のお姉ちゃんのためにも、速く！」

決して人前では言わないと言った呼称でエリカを呼ぶ。

一度は平静を取り戻していた声も再び荒くなるが、それは2人の背中を押す力強さが宿っていた。

フィアとシルヴィアは姿勢を正し、一礼すると先ほど走り去ったセラの後を追うために観客席を後にした。

それを見送ると、ティティはグラン王に向き直る。グラン王も事態が深刻である事は理解しているようで、ティティの目を見て小さく頷くと、観客に向かって試合の中止を宣言、今いる手勢にコロシアル内を徹底的に搜索するように指示した。

「一介の騎士1人に、ここまでとは。やはり彼女は只者ではなかったのだな？」

「ええ、それも下手をすると人類が滅亡してもおかしくなくらいの超VIPですよ」

「ふっ、それは洒落にならん。では、全力で探さなければな」

「ふう、ここまで来れば……」

コロシアムを飛び出し、背後を気にする暇もないくらい全速力で走り続けたエリカは息を整えようと深呼吸をしながら近くにあった木箱に腰かける。

不思議にもエリカを追おうともしなかったあのシャドーの男たちの行動には疑問符が浮かぶが、エリカが逃亡することも想定範囲内だったということなのだろうか？

騎士団の鎧は目立つため、早々に脱いで身軽になっている。姫黒と黒羽の腰に括り付け、辺りを警戒しつつしばし身体を休める。

「さて、これからどうしましょうか……」

シャドーが行動を開始した以上、エリカにアクイラ騎士団の所に戻るという選択肢はない。エリカとしても、自分個人の問題に人を巻き込みたくないという思いがある。

（このままこの町にいるのは得策じゃないですね。とはいえ、土地勘もないですし……）

アールドールの首都でさえ、迷子にならないとは言いきれないほどなのに、やって来て3日か4日のエオリアブルグで当てもなく走れば迷子にならないはずがなかった。

事実、今も自分が首都のどの辺りにいるのか把握できていない。敵が近くににいるか、いないか、ただそれだけを考えていたからだ。

「……こんな別れ方は嫌でしたね」

後頭部を建物の壁にゴツンとぶつける。狭い裏路地の隙間から見える空が随分と遠くに感じられる。

さよなら、すら言えなかつたのが悔やまれる。そもそもあの時はそんな事を考えていられるほど余裕はなかつたし、いかにして敵を振り切り、この状況を打破するかが問題だった。

そこまで考えて、エリカはそんな思考を振り払う。

（生きていれば、また会える……）

敵は10人以上と考えるのが妥当だろう。あそこまで組織だった行動が出来るのだから、背後にバックアップを担う人間がいてもおかしくない。いれば必ずエリカを追撃してくる。

案の定、エリカにとっては最悪な事に、裏路地の奥からエリカに向けて放たれる強い敵意をエリカの敏感な神経が捉える。なぜ殺意ではないのか疑問が残るが、今はそれどころではない。敵意だろうと殺意だろうと、結局は同じ穴のムジナ、エリカに危害が加えられることに違いはない。

大通りの方からも幾つかの敵意が接近してくる。まるでエリカの場所を把握していたかのように反応が早い。

(きつと、ジーンさんたちも動いているんでしょうね。あの人は、あたしみたいな者でも、初対面で受け入れてくれたのですから……)

あの出会いがなければ、エリカの人生は随分と違った方向へと進んでいただろう。

ジーンたちと出会い、世界観も全て変わった。それまでとは全く違った物の考え方をするようになり、龍の伝統など馬鹿らしくなるような事をたくさんしてきた。

まだ数カ月しか経っていないのがウソのようだ。1回分の人生を生きたような気がしてならない。

(だからこそ、あの人たちを巻き込むわけにはいかない！)

自分にここまで良くしてくれたアクイラ騎士団の面々、ティティ、まだ数回しか話をしていないアーサー王、ほんのわずかな間に、エリカはとても多くの人々と出会った。

「……全部終わらせてやりますよ」

しばしの休息を終わらせ、木箱から腰を上げると刀を抜く。

その時、路地の奥から数人の人影が現れる。先ほどコロシムにやって来た男たちではないところを見ると外で待機していた仲間なのだろう。エリカを見つけると剣を抜き、戦闘態勢に入った。

「大人しくついて来い。怪我をさせたくはない」

言っている事とやろうとしていることが矛盾している。剣の切っ先をエリカの喉元に突きつけようとする男を睨み付け、背後を一瞬気にする。

大通りの方からも男たちが現れ、逃げ道を塞いでしまう。

「どのみち逃げ場はない。下手に騒いで関係のない人間を巻き込みたくはないだろう？」

男たちの目を見て分かった事がある。

彼らは殺しのプロだ。人を殺すことを生業とし、今までに数えきれないほどの命を奪ってきた、そんな目をしている。彼らの言う通り、助けを求めて大通りに出ようものなら、片っ端から斬り捨てられるかもしれない。

「……なら、ここであたしが全員相手にすればいいだけの話です」

狭い路地、男たちは必然的に縦列を作らざるを得ない。いかに腕が立ったとしても、数がいたとしても、瞬間的にエリカが相手にする人数は2人、各個撃破できるとエリカは踏んだ。

エリカがそう言つと、まるでその言葉を待っていたかのように男が意地汚い笑みを浮かべる。

「それでこそ、我らが追い求めた至高の存在だ。楽しませてくれよ？」

言つと同時に狭い路地でエリカに斬りかかってきた。路地での戦闘を予測してか、小回りの利く小ぶりの剣をエリカに振るつと、エリ

力はそれを受け流して反対の刀で男を突き刺そうとする。

男はそれを身体を捻って避け、刀は脇と腕の間をすり抜け、男は腕をその刀に巻きつけるとエリカの腕を掴んで動きを止める。

その瞬間、背後からもう1人の男がエリカに襲い掛かろうとする。

「くっ！」

片腕を取られ、身動きの取れないエリカは襲い掛かろうとしてきた男の腹を思い切り蹴り、数歩退かせると腕を掴む男を力任せに引張るとそのまま背負い投げのように持ち上げて反対側の男にぶつける。

2人の男がぶつかった拍子に地面に倒れ込むが、他の男はそれを気に掛ける様子もなく2人を飛び越えてエリカに追撃の機会を与えまいと攻撃してくる。

どうやら飛び出してきた男は魔法も使うようで、手の平に小さな光の球を作り出すとそれを撃ち出してくる。狭い路地では避ける事もままならないため、姫黒と黒羽で光の球を斬りおとそうとその刀身が光の球に当たった瞬間、爆発したかのように光の球が眩い光を放ち、エリカの目を焼こうとする。

「っ！！！」

強烈な閃光はエリカの視界を一時的に奪い、動きを鈍らせる。エリカが避けずに斬ろうとすることを見越しての行動、腕もあるがしっかりと研究されているようだ。

だが、視界を奪われた程度でエリカが倒せると思われては心外だ。

隠そうともしない敵意のおかげで、男たちの動きは手に取る様に分かる。ついでに言えば、視界を奪われて感覚で敵の位置を把握しようと思ったために、さらに複数の敵意に気が付くことが出来た。狭い路地、それを構成する壁の上、屋上にも誰かいるのが分かった。

そして、今まさに真上から襲い掛かろうとしていることも。

視界を奪われ、動揺して動きが鈍ったところを袋叩きにしようとも考えていたのだろう。前、後ろ、頭上の三方から剣が突き出され、エリカに向かってくる。

「甘い」

前から来た剣は姫黒で、上から来た剣は黒羽で、背後からの一撃は防ごうという態度すら見せず、黒鱗で受け止める。

3つの金属がぶつかり合う甲高い音が路地に響き、その余韻が終わる前に頭上から襲い掛かってきた男が重力の法則に基づいて黒羽に自ら突き刺さる。いとも簡単に貫通し、100キロはあるうかという大柄の男がくの字に曲がってエリカの腕にぶら下がる。

もちろん、こんな重いものを持っているつもりなど毛頭ないエリカは即座にまだ生と死の合間にいるであろう男を放り投げ、近くの木箱を粉碎させる。

(とはいえ、このままではじり貧ですね……)

敵はまだ随分といる。いくらエリカと言えども、ここまで走ってきた

た事だけ随分と体力を使っている。徐々に取り戻しつつある視界に男たちを見据え、早々に決着をつける事に決める。

(1人ずつなんてまどろっこしい事は終わりニシマシヨウ)

「っ!!」

また、自分の中で「人間じゃない方の自分」が囁きかけてきた。

(おかしい、この間暗殺者たちを殺した時は来なかったのに……)

「エリカ」という存在を作り上げているものの中に存在する、「イフォネイア」という龍。

きっと、彼女はどこかでヒトを見下しているのだろう。エリカにもっと殺せと耳元で囁いている。

確かに、龍からしてみれば、遥かに矮小な存在であるヒトが世界を統治しているのだ。どこか卑下した印象があってもおかしくない。

だが、エリカは竜人族と触れ合い、バーバラに出会い、アクイラ騎士団の人間と出会い、同族を殺して利益を得るだけがヒトではない事を知っている。

「邪魔を、するなあああっ!!」

それは、男たちだけに向けたものではない。自分の中にいる、ヒトに無慈悲な自分に対してでもある。

彼女の囁きは悪魔の誘惑のように甘い。全てを破壊しつくせば、な

にも憂う事はない。そんな事は言われなくても分かっている。しかし、エリカはそれが出来るほど道徳心が欠如しているわけではない。あくまでエリカが殺したいと願うのは自分をヒトの姿にした張本人目の前にいるのはその下っ端、殺すにも値しない存在だ。殺す事に抵抗はないが、彼らを殺す事以上に恨んでいる相手がいるのだ。

路地方向の男を刀を握る拳で殴り飛ばす。反応すら出来ないほどの速度の拳は男の頬にクリーンヒットし、頬骨が砕ける音と共に口の中から白い物体が幾つか飛び出す。そのまま男を壁に打ち付けると、グチャツという音と共に鼻、口から大量の血が流れ出し、男はズルズルと壁伝いに地面に倒れ込んだ。おそらく壁にぶつかった瞬間、エリカの拳によって男の頬と反対側の頬がくっついたのだろう。

エリカは血の付いた拳を男から離すと、路地の方向へと走り出した。

「……まったく、逃げ足が速いにもほどがある」

死体となった仲間を見下ろしながら、男の1人が呟いた。

「予定通り、目標は首都中心を西に向かっている。そろそろランデヴーポイントにつくだろう。後はドクターに任せよう」

仲間の死体に魔法で作り出した炎をつけ、証拠を隠滅する。

「許せ、お前たちの分まで、俺たちは生きてやる」

そういうと、男たちは路地から姿を消した。

「大通り近くで火事？」

エリカを探していたジーンたちの耳に、周りを歩いていた人々の話し声が聞こえてきた。

もちろん、すぐに辺りを見渡してみると、黒い煙が立ち上っているのが付いた。

「なんでも死者2名、消し炭になってるが……、奴らだな」

ジャックが呟き、ジーンとバーバラが頷く。

「大方返り討ちにあったのよ。エリカはそう簡単に負けるわけないんだから」

「という事は、エリカは順調に逃げているわけだな。なら俺たちは奴らより早くエリカを見つけ出さないと」

「私は火事の現場に行って何か手がかりがないか探してくるわ。あなたたちは引き続きエリカを探して」

バーバラはそう言い残すと黒い煙が立ち上る方向へと走り出し、ジーンとジャックは引き続きエリカを探すためにアレックスと共に大通りを走り出した。

第63話 逃走劇（後書き）

あゝ、進まない。

今書いている部分も本編では初めて一万字を超えようとしております。

終盤だけあって台詞が増えたり複雑になってきたりと、悪戦苦闘しております。

ではでは、また次回。

ご感想などお待ちしております。

第64話 ドクター

城の裏側、長距離転移魔法陣が眩く光り出す。

そして周辺の空気が渦を巻くと魔法陣の中に4つの人影が現れる。

魔法陣の外側でそれを待っていたセラは、魔法陣の輝きが消えるのを待ってその人影に近寄り、一度頭を下げた。

「わざわざご足労頂き、申し訳ありません、ヴァルト騎士団長」

4つの人影は、フィア、シルヴィア、ヴァルト、ヒナだった。当然ながらヴァルトとヒナは戦える恰好をしている。

「問題ない。これは一国で解決できるような問題ではないからな。貴殿にも話さねばならないだろうが、今はエリカの搜索状況を教えてもらいたい」

ヴァルトは穏やかな口調で、なおかつ一切の予断を許さないといった面持ちでセラに尋ねる。

セラは現在までに起こった事をかいつまんで説明し、城で詳しい話をするためにヴァルトたちを案内する。

「それと、1つ気になる事があります」

「気になる事？」

セラの言葉に聞き返したのはヒナだ。まだ真新しい騎士団の鎧に身を包んだ彼女はエリカの持つ刀よりも若干長い刀を持っている。

「先ほども申したように、大会出場の騎士にはメイドをつけております。しかし、エリカ殿のメイド、ユーリが先刻より姿を見せていないのです。少なくとも自分が担当している騎士にこのような事があつたのですから、どこかで顔を見せていてもおかしくないのですが……」

「……確か、エリカを連れ去った男たちはこの国の衛兵の鎧を着ていたんだっただな？」

ヴァルトは首を捻ってファイアたちに顔を向ける。ファイアとシルヴィアはヴァルトの言葉に小さく頷く。

「あれは間違いなく衛兵の鎧でした。コロシウムや、城で何度も見えていますから確かかと」

「ふむ……、鎧を外部で手に入れる事は？」

ヴァルトは考え込みながらセラに尋ねると、セラは首を振った。

「無理です。あれは城の専属技師が作り上げている物で、外部の間はその設計図すら見る事は出来ません」

「となると、鎧を入手するには城内に協力者が必要、という事だな？」

「まさか、ユーリさんが……？」

シルヴィアが信じられない、という表情をしているが、それはセラも同じだったようだ。ヴァルトは第3者として客観的に事実を述べているだけだが、フィアにしても、シルヴィアにしてもユーリとは何度か顔を合わせて話もしている。そのような事をする人間には思えなかった。

「まだ可能性の段階だがな。姿を消す理由は、何かしらこの件に係していると思われるのが妥当だろう」

「ユーリの搜索も並行して行っていますが、あまり芳しくありません。エリカ殿の搜索は先ほど大通りで火災があり、それが関係しているとの見方があります、既にアクイラ騎士団のジーン殿やジャック殿が大通りでの搜索を行っております。フィア殿とシルヴィア殿はそちらに合流されては？」

搜索しているのはアクイラ騎士団の人間だけではない。シートラス騎士団、タロン騎士団も搜索に協力しているため、随時情報は城に集まってくる。

「いいえ、いざって言う時すぐ動けるように城で待機します」

「では、我々と共に来てください」

「……やっぱり、どこかに誘導されているようで嫌な感じがしますね」

先ほどの一戦以来、姿を現さなくなったシャドー。

だが、追っつけてきているのは確かで、つかず離れずの距離を維持してブレッシャーをかけてきている。まるでどこかにエリカを閉じ込めようとしてもしているかのような動きに、エリカは警戒心を高めざるを得なかった。

（あたしを捕まえるつもりであれば、力づくにでも、という雰囲気でしたけど、やり方を変えた……？）

首都の近くに生い茂る森の中、木に寄りかかりながらエリカは今後の行動を考えながらシャドーの出方を見る事にした。ここなら死角も多く、シャドーからしてみれば接近する方法はいくらでもある。

事実、エリカが森に入ってから森と町の境界辺りにシャドーの気配が増えてきている。目視こそ出来ないが、何らかの方法でエリカの場所を知り、追いかける事が出来るようで、エリカは少しも気が休まらない。場所が知られている以上、1カ所に長居することも出来ないため、断続的に移動はしているが、やはり精神的にもかなり負担が溜まりつつある。

まだ数時間しか経っていないだろうが、エリカには随分と時間が長く感じられる。

（逃げ回るだけというのも性に合いませんが、さすがに打って出るのも……）

「っ！」

エリカは素早く顔を上げ、辺りの気配に神経を張り巡らせる。

かすかではあったが、エリカの耳は枯れ枝か何かが踏まれる音を見逃さなかった。

獣ではない。獣ならばもう少し気配があってもいい。唸り声が聞こえるなり、そういうものがあってしかるべきだ。

だが、それが無い。意図的に気配を殺している人間であることは間違いない。

エリカは鞘走りの音すら出さず姫黒を抜いて素早く木の陰に隠れる。音がしたのは丁度エリカが寄りかかっていた木の背後、馬鹿でもエリカを狙っているのは分かる。

腰を低くして、先ほど音を出した主の居場所を何とかして把握しようとするが、相手も同じ轍は踏まないようで、気配は完全に消えてしまっている。

そこに「いる」のは分かっている。

先ほどの音は不可抗力というよりはむしろエリカに自分の存在を知らせるためにやったものだろう。これほどまでに綺麗に気配を殺している者が、枯れ枝をうっかり踏むなどという事があるとは思えない。

エリカが自分の存在に気が付いたとしても、居場所を突き止められない自信があったのだろう。

(舐めているのか、それとも……)

戦いになってエリカに勝つ自信があるか、という事になる。

「そんなに怖い顔をしていると、男に逃げられますよ?」

「なっ!!」

背後からかけられた声に驚きつつも、素早く背後に向けて姫黒を振りかぶる。そして間髪入れずに声がしたやや下の部分、首を両断しようとした瞬間、エリカの全ての動きが止まる。

「やあ、エリカ」

「クライム、さん……?」

そこに立っていたのはシャドーではなくクライムだった。相変わらず取ってつけたような笑みを顔に貼り付けている男がエリカが首の寸前で止めた姫黒の刀身を指でどかすとエリカに手を差し伸べた。エリカはその手を握って立ち上がると、クライムに短く礼を言った。

「どっしてここに……?」

「あなたに渡したあのお守りが教えてくれたんですよ」

「お守り？」

エリカはそこで思い出したように自分が身に着けているネックレスを服の隙間から取り出す。赤い石が取り付けられたネックレスを見ると、クライムがホツとしたような表情を一瞬見せた。

「持ってなかったらどうしようかと思いましたよ。バーバラからあなたが連れ去られたと聞いて、町の宿から慌てて飛んできたんです」

「……それって、これには居場所を知らせる機能があったということですか？」

「ええ」

さらっととんでもないことを言うのはもはやお約束なのだろうか。それはつまりエリカがどこで何をしているのかほとんど筒抜けであったという事を意味する。プライバシーもへったくれもない。

「ですが、おかげでシャドーより先にたどり着けたようですね」

「すでに何人が殺してますけど……」

そう言うと、「おや、そうでしたか」と意外そうな顔をクライムはしてみせる。町の宿屋にいたのなら合流するのは容易かったはずなのだから、大方ある程度状況が把握できるまで傍観していたに違いない。

「ふふ、何か誤解をしているようです。いくら私でも慣れない町であなたを追うのは一苦労したんですよ？　ですから助けを求めたんです」

「誰にですか？」

エリカが訊ねると、クライムの陰から女性が現れた。

「ご無事で何よりです」

メイド服に身を包んだユーリがそこに立っていた。まったく想定していなかった組み合わせにエリカは目を丸くしてしまう。

「ユーリさん？　どうしてクライムさんとユーリさんが？」

まさしくその質問を待っていたのだろう。クライムがさらに笑みを深める。

「ユーリとはちょっとした仲でね、彼女が研究所にいた頃、情報を得るために私が使っていた協力者でもあるんだ」

「そういえば、クライムさんって元暗殺機関の人間でしたっけ……」

そういう繋がりだったのか、と表向きには納得するが、胸の片隅に何か小さな針が引っかかったような違和感が残る。

何か、今クライムが言っていた事と繋がるものがあるような気がする。

だが、それが何を意味するのか分からなかったエリカはそれを表に

出すことなく胸の内に仕舞う事にした。

「とりあえず、私が取った宿に向かいますよ。おそらく、シャド―は騎士団の動向もチェックしているはず、今合流することはあなとも望んでいないのでしょうか?」

クライムはエリカの心を読み取ったようにそう言う。

エリカは少し表情を暗くしつつもはつきりと頷き、歩き出したクライムの隣に並ぶ。

「そういえば、シャド―について調べていたんですね、だったら何か成果はあったんですか?」

元より、クライムがこの町に来たのはそういう理由だったはずだ。ここまで表だって動いているのだから何かしらの情報をクライムならつかんでいるだろうと思ったエリカはそう訊ねた。

「そうですね……目的は概要だけなら把握できました」

いきなり彼らの行動原理の核となる目的が分かった、と言われてエリカは本当に驚いてしまった。そんなに簡単に彼らの最も重要な事が漏れるほど、情報管理が甘かったのかと、ついシャド―に呆れてしまう。

「彼らの目的はドラゴンになる事です」

「……はあ?」

「聞こえませんでしたか? 自らをドラゴンにすることです」

「聞こえていなかったわけじゃありません。何のために？」

「そればかりは彼らに聞かないとどうにもなりませんね。ですが、ドラゴンになるうと言うのですから、それ相応の邪な計画でもあるのでしょうか。あの本に書かれていたような事を本気でやろうとしていたとしてもおかしくありません」

あの本、以前バーバラがエリカに見せた分厚い公文書の事だろう。ヒトをより高位の存在へと変化させる事を目的として研究されていた魔法でヒトをより効率的に支配するといういわば恐怖政治に近い世界を確立させようとする計画だ。

二度目だからなのか、今度は別段癩癩を起すこともなかったが、酷く冷めた、青白い靄が心に広がったのは確かだ。

「……そうだとして、あたしとどんな関係が？」

問題はそこだ。

ドラゴンになりたければ、勝手になりぞこなって死ねばいい。

そこにエリカが巻き込まれる筋合いはないはずだ。

当然、クライムのその結論には達していたのだろう。小さくため息をつくときエリカに視線を向ける。

「彼らとしても、何の保証もなくドラゴンになる魔法など使いたくないでしょう。だったら、まずはその魔法を逆用してドラゴンをヒトに変え、それを元に戻せるか実験したかったのでは？」

「そんな事のために、あたしを？」

チラリと後ろを歩くユーリに視線を向ける。一瞬、ビクッとユーリが肩を震わせたようだったが、黙って頷いた。

この様子では、エリカの正体を知らされているようだ。

「命知らずも良いところですね。まさかドラゴンの王の娘に手を出したのですから」

「つまり、シャドーは最初からあたしをまたドラゴンに戻す気でいたと？」

「そう考えるのが妥当でしょうね。ですが、ここで問題が起きた」
ヒトにして、また龍に戻るのならすぐにも出来るはずだ。一度エリカをヒトにしているという事は苦勞して龍の巣窟にまでやって来たという事、その場で龍に戻せば済む話はずだ。

「あまりにも身体に負荷がかかりすぎたのでしょうね、その場で気を失っていたであろうあなたを元に戻せば、その過程で死んでしまう可能性すらあった。だから、体力の回復を待つて出直すつもりだった……」

「ところが、あたしは人里に下りていた……」

普通の龍であれば、何が何だか分からずシャドーの思い通りになっていたかもしれない。

しかし、エリカはヒトの言葉を理解し、ヒトの世界の知識もあった。彼らにとっては、龍の王女をターゲットにした事が裏目に出て、出直した時にはエリカの姿はなかったというわけだ。

彼らはさぞたまげただろう。ヒトの世界に自分たちが姿を変えたはずの龍がいたのだから。

「そして、彼らはあなたの……、言い方が悪いですが捕獲に動いたのです」

「まったく、迷惑千万ですね」

人の都合で勝手にヒトにされ、人の都合で龍に戻されるなどまっぴらご免だ。彼らと共に行けば確かに龍に戻る事は出来るだろう。だが、それによってヒトの世界にもたらされるであろう「災厄」が大きすぎる。

「……と、そうだ、逃げ回っていて喉が渴いたのではないですか？」

ユーリが思い出したように手を鳴らすと、持ってきていた大きな袋から筒状の物を取り出した。その筒の蓋を開き、同じく袋の中から取り出したコップの中に水を注ぐ。

「ありがと、ユーリさん」

思えば、この数時間何も飲んでいなかったし、何も食べていなかった。すでに昼は随分と前に過ぎているから、喉が渴いているのは事実だった。

エリカは渡されたコップを礼を言って受け取り、喉の奥に流し込ん

で渴きを潤す。よく冷えていて体の中に水分が吸収されていくのがよく分かるほどだ。コップの中の水を飲みほしたところで、エリカは思い出したようにコップをユーリに返してクライムに顔を向ける。

「……って、森の周囲にはシャドーがいたはず、彼らをどうやって撒くんですか」

今さらながら、堂々と町に戻ろうとしている自分に気が付き、慌てて足を止める。仲間が来た事で完全に気が緩んでいた。まだここは敵の包囲網の中である事を一瞬ではあるが失念していた。

「大丈夫ですよ、彼らは手を出しはしません」

「……？ 意味が良く理解できないのですが」

クライムが一瞬笑みを深める。それが意味することを理解できず、首をかしげる。

すると、3人の前に数人の男が姿を現す。同じ男でなくとも分かる、シャドーだ。

「お待ちしておりました、ドクター」

「ドクター……？ ってクライムさん、これはどういう事ですか？！」

見れば3人を取り囲むようにシャドーの男たちが立っていた。誰も剣を抜いてはいないが、明らかな敵意だけは健在だ。

エリカはわけが分からずクライムに詰め寄るが、その瞬間、視界が

急に歪む。同時に身体の平衡感覚がおかしくなって立っていられなくなる。

「っ!?!」

何とか刀を杖代わりに倒れる事だけは阻止するが、もはや立つこともままならず、急激に意識が遠のこうとしている。

「な、なにをつ……!?!」

「君が身に着けているネックレスには、発信機以外の役目もあつてね」

すぐに分かった。

クライムはシャドーの一味なのだ。

怒りが沸々と湧きあがり、遠のこうとする意識を強引に身体に押し込めて立ち上がるとクライムに向けて刀を抜く。

「う、あああああつ!?!」

もはや言葉すら出すことが出来ないほどに身体の自由を奪われている。

だが、全身を奮い立たせ、叫びながらクライムの首を、今度こそ両断しようとする。

(馬鹿だあたしは! こんな、こんな人だとも知らずに……!)

仲間だと思っていた人に裏切られたエリカの心は酷く混濁していた。いつも冗談ばかり言っていてエリカをからかい、いつも取ってつけたような笑みを張り付けていたとしても、クライムはエリカにとって大切な仲間の1人だった。

あと数センチでクライムの喉元に届こうかという所まで刀の切っ先が迫った。クライムは避けようともせずそれを見ているだけだ。

殺れる

そう思えたのは一瞬だった。

そのすぐ後には、首の後ろに強烈な衝撃を受け、今度が強引に意識を飛ばされる。すぐにそれがユーリによるものだと分かった。

刀が手から零れ落ち、膝が地面につく。

最後の気力を振り絞ってクライムを怨嗟の目で睨むが、クライムは無表情のままだった。

ただ、どこか悲しそうな表情を浮かべていたようにも見えたが、エリカが関知できるほどのものではなかった。

地面に倒れ込んだエリカを、ユーリが担ぎ上げる。

「ご苦労様です、ドクター」

男が1人歩み寄ってくる。先ほどまではいなかった、エリカを監視していた男だ。

背後には相方の男もいる。

「これで我らが悲願はついに現実となりますな」

「ドクターには感謝してもしきれません」

ドクターと呼ばれたクライムは、無表情のまま小さく鼻で笑った。いつもの皮肉っぽい笑みはまるでどこか遠くに落としてきたかのように消え失せている。

エリカを担ぎ上げたユーリの表情は暗く、出来ればこのような事はしたくない、という表情をしている。

それに気が付いたクライムは、男たちが勝利に沸きあがり先に進むのを見て男たちに気づかれぬようユーリの肩を叩いた。

「辛いのであれば、やらなくてもいいんですよ？」

「……短い間でしたけど、エリカ様の人柄は理解できているつもりです。このような形で裏切る事になるとは……」

「ならどうして……？」

「あなたに頼まれたからですよ？ 当時ただの死体処理係だった私に世界を教えてくれた。だから、あなたの頼みに応えようと思ったのです」

「あの時、拒否することも出来たはず、このような事に手を貸すほど、あなたは馬鹿ではないと思ってましたが？」

「あなただつて、好き好んでこんな事をしているわけじゃないでしょう？ そのくらいは分かります。だから、何かしら考えているのでしょうか？ 以前彼らが言っていました、『ドクターとは目的地が違う』と。あなたの目的は何なのですか？」

ユーリが真つ直ぐクライムの目を見つめる。

クライムは黙ってその視線を受け止めるが、何も言わない。

「……あなたの技術、知識があればエリカ様を元の姿に戻すことも容易いはず、そもそも彼らに協力する意図は？ 今までアールドールンで積み上げた全てを代償にしてまで得なければならぬほどの？」

ユーリの問いに、クライムは口を噤み続けた。

第64話 ドクター（後書き）

なんという急展開！！

すみません、表現力に乏しいハモニカにはこれ以上展開を遅くすることが出来ませんでした。

さてさて、この後どうなってしまうのでしょうか？

それは「神のみぞ知る」のです。

はい、ハモニカじゃなくて神様は知ってると思いますwwww

ではでは、また次回。

ご感想などお待ちしております。

第65話 話して初めて分かる事の方が多い(前書き)

今さらなんですが、タグのR15が機能してないですねW W

取っ払うのも近いうちかもしれませんね。

基本タグをちよくちよくいじくっているハモニカですから。

ではでは、どうぞ

第65話 話して初めて分かる事の方が多い

「仮にそのシャドーとやらが根城にするとしたら、どこになる？」

ヴァルトは今しがた城に戻ってきたセラに城下町の地図を見せながら訊ねた。

セラは地図を隅から隅まで睨んだ後、幾つかの場所に印をつけていく。その数は10数個にもおよび、城下町に点在している。

「私の知る限り、大人数が悪だくみできるほどの設備を整えることが出来る建造物はこれだけです。いずれもすでに無人で、近々建て直しが行われる予定のものもあり、立ち入りが制限されており人の目にもつきにくいです」

「よし、ではそれをしらみつぶしに搜索しよう」

ヴァルトは地図を折り畳むとそれを持って部屋を出る。それを追ってフィアとシルヴィア、セラを部屋を後にする。

部屋を出て通路を歩き出した4人はしばらくして反対側から息を切らして走ってくる衛兵に気が付き足を止める。

「どっした」

セラが衛兵の前に立つと、汗だくになった衛兵は1通の便箋をセラに手渡し、そのままへたり込んでしまった。おそらく休みなしでこ

ここまで走ってきたのだろう、内容を告げる余裕すら彼にはない。

「手紙……、あて先は……ヴァルト団長です」

「私か？」

少し意外そうな顔を見ると、ヴァルトはセラから便箋を受け取る。

少なくとも、今現在ここにヴァルトがいる事を知っているのは城に
いる一部の人間のみだ。外部の人間で知っている者がいるとすれば、
それこそアールドルンの関係者くらいになる。情報を集約するた
めに外で走り回っているバーバラたちですらヴァルトが城にいると
いう事は知らない。

にも関わらず、目立った汚れもないところを見るとかなり最近書か
れた手紙だと思われる。

ヴァルトは便箋の封を切り、中から手紙を取り出すと広げて読み始
める。

「……………っ！！」

ヴァルトの目が見開かれ、手紙を握る手に力が入った。

グシャツと言う音と共に手紙が握りつぶされ、ヴァルトはセラによ
り鋭さを増した目を向ける。

「セラ殿、馬車をお借りしたい」

「手がかりがつかめたのですね、分かりました、お供します」

セラはヴァルトの表情からあえて手紙の内容には触れず、ただそう言った。

ヴァルトはセラに礼を言うと、後ろにいたフィアとシルヴィアに顔を向ける。

「エリカの居場所が分かった。行く途中でジーンたちを捕まえるからお前たちも用意しておけ」

「了解!!」

セラが馬車を手配させると言って駆け出していった方に2人も走り出す。それを見送ってからヴァルトは自分が握り潰した手紙に視線を一瞬向ける。

「……馬鹿者が」

ヴァルトの眩きは誰にも届くことはなかった。

「……っつ、……ここは……っ！」

混濁した意識が身体に戻ってきたのは、あれからどれほどの時間が経ったかも分からなくなるほど後だった。

窓のない大きなドームのような場所のど真ん中にエリカは倒れ込んでいた。足には鉄製の枷が取り付けられていてエリカを逃がさないようその反対側は床に深く打ちこまれている。持っていた刀も没収されたのか視界の範囲内には見当たらない。

エリカは胸のネックレスを忌々しく引きちぎるとどこか遠くに放り投げてしまう。ネックレスが床に落ちる音が空間に響くが、それ以外何の音も聞こえてこない。

「クライムさん、一体何のためにこんなことを……」

シャドーと同じ事を考えているとは思えない。少なくともエリカはクライムがそのような人間だとは考えてはいない。

さらに言えば、ユーリが「あちら」側にいるのも理解が出来ない。クライムとの昔の話が本当だったとしても、ならばクライムの蛮行を止める側に回るのではないか、というエリカの思いは強い。

ユーリは聡い。

数度の会話でもそれがいかほどかは簡単に分かる。

だからこそ、何故彼らに組するのか理解が出来ない。

「……考えていても始まりませんね。ささっと脱出して本人たちから話を聞くしか……」

そう思つて身体を起こし、足枷に手を近づける。

枷を破壊し、2人を探し出そうと考えたエリカは、指の先から黒鱗を発現させようとする。鉄の鎖程度であれば黒鱗で造作もなく破壊することが出来る。

だが、いざ黒鱗を発現させようとした時、思わぬ事が起きた。

(力が入らない……っ!?)

発現に必要な力を籠めようとするが、まるで穴の開いた風船のように、入れても入れても抜けていってしまう。強引に外から力を抜き取られているような感覚だ。

「無駄な抵抗はしない方が身のためだぞ」

ドームの中に声が響く。

足音が近づき、エリカの前に男が現れる。コロシウムでエリカを連れ出した男だ。

「自己紹介がまだだったな。俺はヴィゴラス・アヴィート。シャド―を取り仕切つてる者だ。よろしくな、エリカ……、いやドラゴンの女王様？」

本名を知られていないのはエリカにとって不幸中の幸いと言えた。このような男に名前を呼ばれると、汚されるような気がしてならない。

エリカは何も言わず、ヴィゴラスの顔を睨み付ける。

「おいおい、怖い顔をしなさんな。俺たちはあんたを元に戻そうってんだからな」

「この姿にしたのもあなたたちでしょうが。覚悟してなさい、戻ったらなぶり殺しにしますよ」

「ほっ、怖いねえ」

反対側から別の男の声が聞こえてきた。

振り返るとヴィゴラスと同じような恰好をしたガラの悪い男が現れる。男はエリカを見下しながらヘラヘラと笑っている。

「なら今のうちに戦意も何もかも奪っておこうか？ このバウンダ様がその口を黙らせてやる」

大きな手でエリカの顔を掴むと強引に持ち上げる。あまりにも強い握力で顔を掴まれ、エリカの口から苦悶の声が漏れる。

「ふははっ、最上位種が何だ、こうなってしまうばただの小娘か」

「クランク、止める。傷物になっては我々にとって不利益だ」

「おおっと、そうだったな」

その場で手を放され、エリカは床に叩き落とされる。まともな受け身が取れずエリカは額を強く打ちつけてしまう。

「バウンダーならず者、その名の通りですね……」

「克蘭ク・バウンダーだ。言うておくが、舐めた口聞いてると舌をぶった切るからな？」

「エリカ、言うておくがこの男はカツとなると本当にやりかねん。大人しくしていることを強く勧めておく」

同じシャドーでもやはり1人ひとり考え方も何もかもが違うようだ。このヴィゴラスという男は冷静沈着、克蘭クという男は猪突猛進、2人でバランスを取り合っているのかもしれない。

「これから何をするつもりなんですか……」

「さつき言った通りだ。あんたをドラゴンに戻せるという事が実証されれば我々は世界を支配するだけの力を得ることが出来る」

「あたしが元の姿になって大人しくしていると思ってるんですか？」

本当にそう思っているのなら笑い草だ。

元の姿に戻ったとすれば、エリカを止める事はヒトには出来はしない。もはやこのドームの中ギリギリの大きさになるエリカを剣や魔法で食い止める術はない。

エリカの言葉に、ヴィゴラスはニヤリと笑みを浮かべる。

「誰があんたを元の姿にまで戻すか。そうなればこの国ごと滅ぼされかねん。だから、半分戻ってもらおう」

「なんで、すつて……？」

「半分でも成功は成功だ。あんたの精神はヒトでありドラゴンとなり、身体はヒトとドラゴン、2つの種族の物となり十中八九拒絶反応を起こすだろう。身体への負荷を考えるとその過程であんたは死ぬだろう。死んでくれればそんな憂いは無用となるわけだ」

「ま、簡単に言えばてめえがドラゴンに戻ろうとしている途中で魔法を止めりゃいいんだ。そうすりゃおめえは苦しみながらあの世行き、俺たちはドラゴンになれる保証を得る」

「っ……外道……」

確かにその方法なら後顧の憂いはないだろう。彼らにとって最もあつてはならない事は龍に戻ったエリカがその場で彼らに襲い掛かる事だ。別の横槍が入ったとしても、彼ら自身が龍になっていければ勝てる公算は大きい。

途中まで、という中途半端なもので保証が得られるかどうかはこの際脇に置いておくとして、そんな事をされてはさしものエリカもただでは済まない。

「ま、短い余生を楽しみな……、ってこれじゃ無理だな。かはははははっ」

その一挙一動に殺意を抱く。

「いつまでおしゃべりをしているのかな？」

高笑いしていたクランクの背後から聞き慣れた声が聞こえてくる。クランクは口を閉じてどこか忌々しそうな顔を一瞬したが、すぐに真剣な表情に戻って振り返った。

「ドクター、準備の方は？」

ヴィゴラスが立ちあがり、エリカ越しにドクター、クライムに問いかける。

「準備は出来ている。後は人員が揃い次第、始められる。君たちもそろそろ……」

「分かっている。クランク、行くぞ」

ヴィゴラスがクランクを連れてその場を離れていく。足音がドアを開ける音に混じり、ドアが閉じられるとドームに再び静寂が舞い戻ってくる。

窓のないドーム内ではわずかな松明の明かりが何とか視界を確保する手段で、目と鼻の先にいるはずのクライムの姿もはっきりとは見えない。

だが、2人きりになり、クライムがいつものような笑みを浮かべているのだけは分かる。今はその笑みすら殺意の対象にしかならないが。

「……何が目的なんですか」

「目的？ 彼らと同じ、では納得しませんか？」

笑みを浮かべた顔がエリカに近づけられる。その微笑みは相変わらずだが、その目は今まで見たことがないほどに感情が含まれていない。

今までは感情が読み取れない、というのが正しく、含まれていないと思った事はない。いかに目の前のクライムがエリカの知っているクライムと違うかを証明しているかのようだ。

「……納得できませんね。あの馬鹿な人達ほどクライムさんの頭が悪いとは思ってませんから」

エリカが皮肉も込めてそう言うと、クライムが一度意外そうな顔を見せてみた。

「まだ『さん』をつけてくれるのですね。てっきり名前すら呼んでもらえないかと思っていましたが」

「茶化さないでください。あなたの本当の目的は何なんですか？」

「……………」

だんまりを決め込むクライム。よほどの理由があると思えないが、エリカにはクライムに恨まれるような筋合いはないはずだ。

そもそもクライムと出会ったのは公文書室が初めて、それ以前、龍だった時も含めてクライムとの接点は思い浮かばない。

「……確かに、あなたには直接は関係がないかもしれませんが」

一度、小さなため息をつくときクライムは口を開いた。

「一つ、昔話をしてあげましょう。冥土の土産にでもしてください」
クライムはエリカから顔を離し、背筋を伸ばすとどこを見るでもなくドームの天井を見上げる。

「事の発端は20数年前まで遡ります。私がまだ暗殺機関にいた頃の事です。暗殺機関と言っても、やる事は多岐に渡り、むしろ情報収集などの任務が多かったと思います。とはいえ、そんな若い頃からそんな所に身を置いていればいろんな情報を得る事も出来ます」
若く見えるが、クライムはもしかしたらヴァルト並みの歳なのかもしれない。今から考えてみれば、隠居するなどと言うのだからそれ相応の歳であるのにはもっと早く気付くべきだった。

「時には命の危険すらあるのが当然の世界、そんな中でも私には唯一無二の仲間がいました。それが今のアクイラ騎士団長ヴァルトであり、吸血鬼バーバラであり、騎士団員だったウィル・ホーリネスだったのです」

「っ!!」

最後に出た名前にエリカはハッと顔を上げる。

「……ジーンさんのお父上」

「そう、まだあの頃はジーンも小さかった。何度か抱っこをしてあ

げたのを覚えてますよ。あちらは既に忘れてしまったでしょうけどね」

クライムは懐かしい思い出に浸るかのように苦笑する。とてもじゃないが、現在進行形で悪の権化をしている人とは思えない、穏やかな表情だ。

「私たち4人は、4人で1つのチームのようなものでした。私が情報を入手し、それを元に立案された作戦に3人が従事する。もちろん、大掛かりな作戦であれば他の騎士も動員されますが、私たちは特別だった」

クライムはゆっくりとエリカの周りを歩き出す。

「酒を飲み交わし、冗談を言い合い、時にはからかい合った。ジーンが生まれると知らされた時は、皆で祝福もしました。私は出産の場にも立ち会い、ジーンという名は私たち4人で考えたんです」

いわば名付け親ですね、とどこか嬉しそうにクライムは言葉を紡ぐ。

「そんなある日、私に任務の話が来ました。当時から危機感を抱いていたドラゴンに関する任務です。討伐対象はドラゴンを統べる王、つまりあなたの父親ですね。私はそのドラゴンの力を前もって調べ、役目を命ぜられたのです。当然ながら、ドラゴンの巣窟に行くまでも地獄、到着地も地獄、帰りの道中も地獄という無理難題でした」

徐々にクライムの顔から笑みが薄れていく。

その目は今までにない感情を芽生えさせている。

「正直、私は困惑しました。なにせ、ドラゴンの王など伝説以上神話以下みたいな存在でしたから。その実在すら証明した者はいません。ただ漠然と『居る』という事だけが独り歩きしていました。ですが、ドラゴンが独自の社会構造を持っている事ははっきりしていました。だからきつと、それを統べる者がいると。それにふさわしい姿かたちで、力を持っているドラゴンが王であろうという、今からしてみれば随分と希望的観測が混じった情報の元、私はあなたたちの王国へ向かったのです」

「……よく気づかれませんでしたね」

エリカはクライムの度胸と技術に感嘆した。

龍の王国に限らず、龍の生息範囲において気づかれずに入り込めるヒトがいるとは思いもなかった。龍は風の流れのわずかな変化や、地面を伝わるわずかな振動からでも侵入者の存在を察知することが出来る。少なくともエリカは当時そのような話題を聞いた覚えがないところを考えると、クライムは見事にやってのけていたという事なのだろう。

「ヒトの常識が当てはまるとは最初から思っていないませんでしたし、事実そうでした。ですが、木々の隙間から空を飛ぶ白いドラゴンを見た時、『ああ、あれこそが王に相応しい』と思ったのです。それからは白龍探しの日々でしたよ。寝る間も惜しんでドラゴンの巣窟を駆けまわり、ようやく見つけてその特徴、大きさ、性格などを事細やかに記録しましたが、肝心の戦闘能力に関してはどうにもなりませんでした」

「ドラゴンは、理由もなく戦う種族じゃありませんから」

エリカがどうだ参ったかという表情でクライムを見つめる。

クライムはただ苦笑するだけで表情を崩さない。

「確かに。ですが、おかげでお偉方は決断を迫られました。当時はまだ人間同士の争いの種も多く残っていました。獣人狩りもその1つです。だから、一刻も速く人類の敵を固定化しなかった。だから、情報も中途半端な状態でアクイラ騎士団はドラゴン討伐に打って出たのです。当然、ヴァルト、バーバラ、ウィルも参加していました。私は当然、情報不足からの作戦失敗を警告しました。ですがお偉方は耳を貸さなかった。頭では相手が最上位種だと理解できていても、その本当の恐ろしさをその目で見ている者など、それこそバーバラくらいしかいなかったのです。そのバーバラにしても、上官の命令とあらば出陣するのが騎士、文句ひとつ言わなかった」

「……それが20年前」

返ってくるのは肯定の小さな頷き。

「あとはエリカも知つての通り、あなたの父親の大勝です。アクイラ騎士団は完膚なきまでに叩きのめされたのです。だが、その中で一矢報いた人物がいた」

「ジーンさんのお父上、という事ですね」

あの戦いが凄惨だったのはエリカも知っている。大規模な戦略級魔法でエリカの父親、イクシオンがヒトを薙ぎ払っていく中、必死に仲間を守ろうとイクシオンに肉薄したヒトがいたのも聞いている。

そしてそれがジーンの父親であった事も、彼の持つ白鱗の大剣が教

えてくれている。

「ウィルはその戦いで受けた傷がもとで死にました。私は自責の念に取りつかれました。私がもっと正確に情報を集めていれば、もっと上官に強く中止を迫っていたら、とね。ですが、そんな事を思ってもウィルは帰ってくることはありません。私にとつて、『こんどこそ』が唯一自分を存在させ得る理由となったのです。もちろん、ヴァルトにもバーバラにもこの事は伝えていません。前線を退き、公文書室の司書になったのも、あそこなら何らかの方策が見つかるのではないかと思ったからです」

「……そして、見つけたのですね」

「……ええ。ヒトを他の生物へと変える魔法の発展版と言えば簡単そうに聞こえますが、あれはヒトをドラゴンにすることを目的にした魔法。これを逆用すればドラゴンをヒトに変える事すら出来る、私はそう考え、さっそく魔法の解析と逆用するための研究を始めました。結局10年以上の歳月がかかってしまいましたけどね」

もはや執念などという言葉では言い表せないほどのものだ。

「そしていざその魔法が完成したと思つた時、シャドーが私の前に姿を現したのです。『我々をドラゴンにする』と言つてね。当然拒否しましたよ、そんなバカげたことのために研究をしていたわけではなかったのですから。ですが、彼らは『ドラゴンになれる事を証明するために君の研究を生かしたい』と言つてきた。つまり、ドラゴンをヒトに変え、再びドラゴンに変えるという事です。彼らは既に私のやっている事も、目的も把握していたんですよ、忌々しい事に」

チラリと男たちが消えていった方に視線を向ける。まだ男たちがやってくるような気配はない。

「そして、その実験体を彼らと共に探しに再びドラゴンの巣窟へ向かいました。私に拒否権など無かったし、あつたとしても行使することはなかったでしょうね。そして、私は彼らをそれとなく白龍を見た場所へと誘導し、実験体としてあなたを見つけさせた」

もはや数カ月とは思えないほど過去の事のように思える。あの日、あの時、あの場にはシャドーと共にクライムもいたという事だ。

「私は歡喜しました。20年前の調査で娘、つまりあなたの存在は知っていましたから、漆黒のドラゴンが眠っているのを見た時は我をも忘れるほどでした。これでようやく、あの憎き白龍に目に物を見せてやる事が出来る、そう思った私は嬉々としてあなたをヒトにするために魔法をかけました。殺す気などありませんでした、どうせ元に戻るのだから、精々苦しむ姿が見たかったというだけです。その時はまだシャドーもあなたを殺す気などありませんでした。ドラゴンの報復が恐ろしかったのでしょうね」

クライムはエリカの横に蹲ると、エリカの服の袖を破く。そして露わになった腕に小さなナイフを突き立てる。一瞬エリカの神経が痛みを告げるが、すぐに痛みはなくなり、突き立てられた場所からわずかに血が出る。

クライムはその血を試験管に移すと栓をしてポケットにしまう。

「あなたの血が、彼らをドラゴンへと変える誘導役です。本当は、その場で採取する予定だったのですが、あまりにあなたの衰弱が激しく、おまけに日も上りきった時間帯、何時あなたの父親が帰って

くるか分からない状況ではそんな事すらしている時間はありませんでした。そこで私たちは一度撤退し、あなたの体力が回復するのを待つことにしました。シャドーも、数十年待っていた事が数日伸びようが問題ない、という意見でした。だが、頃合いを見計らって戻った時、既にあなたはいなかった」

思い立ってすぐに行動に移したエリカは十分に歩けるだけの体力が回復した時点でイクシオンと共に龍の王国を去っていた。おそらくクライムたちはそれと入れ違いに戻ってきたのだろう。

「驚きましたよ、アクイラ騎士団の入団式であなたが陛下に頭を垂れていたんですから。あの時は自分の目が信じられませんでした。シャドーにはアールドールの内通者としての私と、ドクターとしての私という2人の人物を装い、あなたの発見を遅らせました。むしろ、私はあなたがどれほどその身体になって苦しんでいるかを見て悦に浸ろうとしていたのかもしれないね。ですが」

そこでクライムは一度言葉を切った。

「あなたは想像以上に強かった。それは精神的な意味も含めてです。それどころか、自分が馬鹿に見えるくらい前を向いていた。私は過去を忘れられず20年もあなたに、いや正確にはあなたの背後にいる父親への復讐を誓っていたのに、あなたは数日前の出来事すら忘れたかのように穏やかだった。これでは、私は何のためにあなたをヒトにしたのか分からないではありませんか」

「……忘れてなんかいませんよ」

エリカは小さくそう呟く。

「ヒトの身体に苦しんで、こうなった運命を呪って、こうなってしまった自分を恨みました。誰が考えます？ ある日、自分が全く違う生き物の姿をしているなんて。あたしだって最初は気が狂っていったかもしれない」

顔を上げる。

目の前にはエリカの言葉を聞こうとこちらに顔を向けているクライムの姿がある。

「でもね、思ってたんです、『道が消えたわけじゃない。ただ、道の間違えただけだ』と。間違えただけなら、次の曲がり角で正しい道に戻れば良いだけの話、その曲がり角を見落とさないためにも、情報を集める必要がある、と」

「正しい、道に……」

クライムがエリカの言葉を反芻するかのように呟く。

「ヒトの世界には数々の文献があります。ヒトの長い時代の中で、無数の文献が書かれました。あたしたちドラゴンには出来事を書物に記すと言う習慣もないので、全て口伝えとなります。結果、その伝承も曖昧なものになってしまう。だから、あたしは『この世界』に来たんです」

自分が生きる「世界」とは違う場所、言ってみれば未知の世界、異世界といった感じだ。竜人族の里自体が人里離れていたのだから、本当のヒトの世界を知っているとは言い難い。

「……なぜです？ どうしてそれほどまでに前を向いていられるの

です？ なぜ絶望せずにいられるのですか？」

クライムは訴えるようにそう言う。もはや、どちらがどちらに語りかけているのかも分からない。エリカが自分自身を納得させるために言っているのかもしれない。

「私はあなたを絶望させるつもりだった。あなたの父親と共に。なのに、どうしてそんなに平然としていられるのですか？」

「……受け入れたからです。受け入れなければ何も始まりません、何も動き出しません。クライムさん、あなたはウイルさんの死を受け入れていない、だから何も始まっていないんですよ。あなたはただ20年前のあの日を生きている」

クライムが黙り込む。ただ、その目は確かに感情を宿している。その感情が復讐であろうと、自責の念であろうと関係はない。クライムは「今」を生きているのだから。

「……あたしを殺すことでクライムさんが新たな一步を踏み出せるならそれも良いでしょう。ついさっきまで恨まれる筋合いなんてないと思っただけ、ちゃんとした筋合いがあったんですから」

そう言うと、クライムがハツとなる。エリカの言葉は、クライムにとってすれば「自分を殺せ」と言っているも同然、到底信じる事などできなかつたのだろう。

「あたしたちはそれほど自分の生とか死に執着はしません。仲間の死には敏感ですが、それは殺された場合に限りません。数百年生きますからね、死に際に悪あがきするような事はしません。あなたたちヒトとは生きた桁が違っんです」

少し冗談めかしてエリカはそう言ってみせた。

「……何故か、妙に納得させられますね、あなたが言うつと。さすがにバーバラでもそこまでは言えないでしょう」

不意に、クライムの表情に笑みが戻る。

「やはり、私は間違っているのでしょうか？」

「それを決めるのはあなた自身であたしではありません。そして、決めた後どう行動するかも、あなた自身が決める事」

エリカはそう言うつと口を閉ざし、クライムの目をまっすぐと見る。

話を聞いてようやく理解できた。

彼は決して悪い人間ではない、と。一瞬でもシャドーの仲間と思つてしまった自分が情けなくさえなつてしまつた。

クライムの恨みは至極当然のものだ。大切な者を殺した相手を恨むのも当然、その相手の周囲の者にその矛先が向かうのも、ある意味当然と言える。

だから、エリカはクライムが憎しみを以てエリカを殺すのなら、それを受け入れようと思つた。

それがエリカにしかできない贖罪なのであれば、微笑みを以てそれを受け入れよう。

シャドーの目的は見過ごせないから殺されるわけにはいかないが、クライムの恨みを受け入れる事は出来る。それで彼の気が済むのなら。

だが、クランクはエリカの真っ直ぐな視線に小さくため息をついた。まるで自分を小馬鹿にしているような気がして癪だ。

「ふっ、ヴァルトに送った手紙が無駄になってしまいましたね」

「何を……」

クライムはそう言うとポケットから小さな鉄製の鍵を取り出した。そしてエリカの足に繋がれた枷の鍵穴に差し込むと素早く回す。

カチツという音と共に足枷が外れ、エリカはよろけつつも立ち上がる。

「良いんですか？ あなたの仇じゃないんですか？」

枷が接していた部分を撫でながらクライムに聞くと、微笑が返ってくる。

「どうでも良くなったとは言いません。むしろ私はまだあなたを憎んでいる。ですが、ここで殺したらそこで終わり、私には何も残りませんから、もうしばらく生きる目的を見つけるまでは死にきれません」

「それなら大丈夫ですよ？ 多分生きる目的はバーバラさんになるでしょうから」

「バーバラが？ どういう意味です」

エリカが振り返ってその続きを言おうとした時、背後から何かが覆いかぶさってきた。

「なっ！」

それがクライムである事に気が付くのにしばらくかかった。うつ伏せに倒れられたのもあるし、ドーム自体が薄暗い事もあった。

「クライムさん！！」

「まったく、ヴィゴラスの言う通りじゃねえか」

耳に入れるのも嫌な声が上がから降りかかり、見上げるとクランクが血の付いた剣を手に立っていた。その隣にはヴィゴラスが、そして2人の背後には10数人の男が立っている。ヴィゴラスは後ろ手に縛られたユーリを連れており、ユーリはクライムが刺された事で半狂乱になりかかっていた。

「決意を途中で投げ出すような奴を信用は出来ない。この女がずっと俺たちの部屋を見張っていたのにはこういう訳があったのか」

ヴィゴラスが感情のこもっていない声でクライムに言う。

だが、当のクライムは腹部を抑えながらエリカの上で苦悶の声を上げている。手の隙間から血が噴き出してエリカの服も血で染めていきつつあるのが分かる。

「クライムさん、しっかりしてくださいさっガッ!？」

クライムを抱き起そうとした時、エリカの身体に痛烈な痛みが迸った。即座に強力な電撃が頭から足の先まで流れた事は理解できたが、なす術など無かった。この場では避雷針の代わりに黒鱗を出すことも出来ない。

「計画には支障ない。後はドクターがいなくとも我々で出来る。貴様はお前の仇敵の娘が死に絶えるのを見るまで死ぬんじゃないぞ？」

「や、やめ、ろ……！」

息も絶え絶えの中、クライムは何とかその言葉だけ紡ぐが、もはや立ち上がる事も難しい状態だ。クライムは男2人に腕を掴まれ、エリカから引き離されると近くの壁のところまで連れていかれ、そこで床に落とされた。ユーリはその隣に拘束され、それを済ませると男たちはエリカの周りに並んだ。

「お前にはあいつと違って恨みも何もないが、我々の悲願のため、その糧となってもらおう」

「誰がっ……」

「お前の返事など関係ない。否応なくお前はドラゴンへと引き戻されるのだからな」

そう言ってヴィゴラスがエリカに正面を向けながら後ろに下がっていく。それと同時にシャドーの男たちがエリカを中心にして円を描く様にして距離を取っていく。

そして10メートルは離れたかという場所で立ち止まると、おもむ

るにエリカに向けて手をかざし始める。

「いよいよ、我々の悲願への道が開かれる」

誰が言ったかは分からない。

だがそれが合図になっていたのは確かだ。

ロレン・イブスム
「起動」

エリカを中心に、巨大な魔法陣が輝きだした。

第65話 話して初めて分かる事の方が多い(後書き)

クライムの目的、一話にして終った、のお知らせ。

ていうかいい人なのか悪い人なのかハモニカ自身分からなくなってきたw

さてさて、前書きに続いて、「主人公最強の予定」が予定のまま終わりそうな予感。

いや、ハモニカの中では全キャラ中一番強いし、小説でもそのように描いているつもりなんですけどね。他の主人公最強モノとは明らかにその程度が低いかもしれませんね。

そもそも主人公最強という文字はだいたい無双出来てこそその言葉、エリカが無双した記憶があんまりありません。

むしろ頑張って勝った！

みたいなもののほうが記憶に残っているようなww

結構負傷してますし、どうなんでしょうね？ こっちも取っ払います？

今さらこれ消したって正直読者数に影響ないような気がしますし・・・

だってもう70話近くやってるんですよ？ 固定読者になってるよ
うな気がしてなりません。

いいですよねえ？

エリカが最強だと思う方は感想で挙手してくださいww

・

・

・

・

逆に反応が怖いですね、ま、周りの意見に流される事幾候、ハモ二
力は今からでも流される気満々です。

では！

ご感想などお待ちしております。

追伸

途中でほざいたことには良心がある方だけ反応してくださいって構い
ません。

正直今さらエリカをどうこうできませんから、今後の執筆活動の参考にさせていただけたら、と。

皆様の中で最強とはいったい何なのか、お聞かせ願えたら幸いです。

第66話 エリカとイフォネシアと（前書き）

あゝ、終わりは見えているのに筆が進まない。

難しいなあ。

ではでは本編どうぞ。

第66話 エリカとイフォネアと

「手紙はいつたい誰からだったのですか？」

あの場にはいなかったが、後から話を聞いたヒナが馬車の中でヴァルトに訊ねてきた。

今、馬車に乗っているのはヴァルト、フィア、シルヴィア、ヒナ、セラの5人で、馬車の大きさはあと5人は乗れるだけのものを使っている。これは当然ジーンたちを拾うためだ。

ヴァルトは俯いていたが、ゆっくりと顔を上げるとポケットから先ほどクシャクシャにした手紙を取り出した。

「……クライムからだ」

「クライムさん？　なぜあの方がエオリアブルグに？」

当然の疑問だ。

少なくともこの場にいる者はクライムがエオリアブルグにいた理由を知らない。知っているのはヴァルトだけだ。

「エリカの件でバーバラに協力するために単身エオリアブルグに入国させていたんだ。だが、問題はそこではない。問題はクライムがエリカを狙うシャドーたちと協力関係にあったという事だ」

「「「なっ！！！！」「」」

驚きを隠せないのは当然だろう。

セラだけがクライムと直接の面識がないため、「身内が裏切った」という辺りまでの理解しか出来ていないだろうが、残りの3人は顔見知りだ。ヒナにしても、まだ片手で足りるほどしか顔を合わしていないが、面識はある。

「エリカの動向を逐一シャドーに流していたところにはある。そして、その目的はジーンの父親、ウィル・ホーリネスの敵討ちだ」

「確か、ジーンのお父さんはドラゴンと戦って……まさか!？」

フィアが声を上げ、ヴァルトはそれに小さく頷いた。

「ウィルを殺したのはエリカの父親、ドラゴンの王イクシオンだ。クライムは敵討ちとしてエリカを殺そうとしている」

「そんな、どうして!？」

「それこそ本人に聞いてくれ。今私たちに出来るのは一刻も速くクライムの凶行を止める事だ。ご親切に場所まで書いてあるんだ、これで間に合わなければ悔やんでも悔やみきれん事態になる」

ヴァルトが馬車の壁を叩き、御者にさらに速度を上げるよう指示をする。

フィアとシルヴィアは馬車から外を見て、視界にジーンたちがいないか必至に探す。とはいえ広い城下町、そう簡単に見つかるもので

はなく、むしろあちら側から見つけてもらう方がよっぽど楽に思える。

「一応、連絡を入れてはいるんだけど、届いているかは疑問なの……止めて!!」

セラもそれに協力しつつ、そう言おうとした時、突如大声を上げた。即座にヴァルトが馬車を止まらせると、セラは馬車から身を乗り出して手を振りだした。その視線の先には巨大な白い大剣が目立つジーンと、大きな図体が目印のジャック、太陽の下、苦悶の表情をしつつも必死にエリカの手がかりを探しているバーバラの3人がいた。

「ジーン!!」

ファイアが声を張り上げるとこちらに気が付いた3人が駆け足で近づいてくる。理由は後回しにして3人に馬車に乗るよう指示して飛び乗らせると、ヴァルトが慌ただしく馬車を再び走らせるよう指示を飛ばす。

そして、今度こそ目的地に向かうよう指示をする。

「何か進展があったのか？」

息を切らしつつもジーンが訊ねるのに対して、ヴァルトたちが難しい表情をしつつも首を縦に振る。

「最悪な形で進展してしまったがね」

「起動」ロレン・イプスムの言葉と同時に輝きだした魔法陣。複雑な文様が浮かび上がると円を描く様に広がっていき、丁度ヴィゴラスたちを頂点とするような図形を作り出す。

無数の光が交錯し、何が起こっているのか理解できずにエリカは周囲を見渡す。

「コンディネンティア
拘束」

「っ！！」

光の紋様が鎖となってエリカに巻きつく。

後ろ手に拘束され、足も再び拘束されたエリカはうつ伏せに倒れ込んでしまう。その上からさらに幾重にも鎖がエリカを雁字搦めにしていき、完全に動きを封じてしまう。地面から生えるようにしてエリカに巻き付いている鎖は一切の妥協なくエリカを拘束しているため、動かせる部位といえば、精々指先くらいのものだ。

「じ、このっ……!!」

何とか拘束から逃れようとするが、鎖はエリカが渾身の力を入れてもビクともしない。

鎖自身が強固であるのもあるが、エリカの精神的な面も大きい。目の前で改心してくれたクライムを剣で刺され、冷静さを喪失していたのかもしれない。

アナリシス
「解析」

エリカが悪戦苦闘している中、ヴィゴラスの口から次々と言葉が紡がれていく。

「ぐっ!?!」

身体の中に手を突っ込まれて、あれこれ弄られているかのような感覚に襲われる。

しかも苦痛を伴った。痛みが頭に移動すると、脳が割れんばかりの悲鳴を上げているのが分かった。あまりの痛みに口からは息しかもれず、痛みが去ると同時に全ての力が身体から抜けていってしまう。

意識すら朦朧となる。

今さらながら、人になる時に何故同じ事が起きなかったのか不思議に思ってしまうが、そんな事に意識を向けている余裕すらエリカにはなかった。

「やはり、行きと帰りの道のりは違うようだな。行きが下り道なら、今は辛い上り坂と言ったところか」

(そんな、生半可なモノじゃ……)

だが、そういう事なのだろう。

「苦しいか？ 我らの同胞はそれ以上の苦痛を味わい死んでいった。貴様の命によってその罪を償ってもらおう」

「安心しな、こいつらもすぐにあんたの後を追わせてやる。ついでにあの忌々しい騎士団の連中もな」

「っ!!」

その言葉にエリカは目を見開く。

これでは、何のために1人で逃げてきたのか分からなくなってしまっただけではないか。

ジーンたちに迷惑をかけないため？

結果として彼らを含んだそれ以上の人々に多大な影響を与えるのは目に見えている。そのために目の前の男たちは力を欲しているのだから。

「ふざけた事を、言わないで、くださいっ!!」

歯ぎしりしながら顔を上げると、鎖諸共に身体を起こそうとする。あれほどエリカに自由を与えまいと巻き付いていた鎖が軋む音を上

げる。

鎖の付け根部分がミシミシという音を上げ、床にヒビが入る。一番上に巻かれていた鎖が耐えられなくなって弾き飛び、エリカと床の間にわずかな隙間が生まれる。

だが

「調子づくなよ、化け物？」

クランクが小さく舌打ちをすると、エリカに向けて何かを投げた。そしてそれは寸分の狂いもなくエリカの右手の甲に突き刺さる。

「がつー！」

投げられたのはナイフだった。黒鱗を発現出来ないエリカの手の甲を貫通して床に刺さり、エリカを再び床に縛り付ける。

「あ……、ぐっ……」

「良い声を上げて苦しんでくれ。そろそろ飽きてきているんだ」

ヴィゴラスが感情のこもっていない声でそう言うが、エリカには聞こえていないも同然だった。

地面に縛り付けられ、手を刺され、解析という名の苦痛を味わわされているのだ。意識と共に仲間の事すらどこか遠くに飛んでいきそうになる。

「やはりヒトとは比較にならない力を持ち主だな。その鎖は魔力で作

られているから常人では身体を浮かす事も不可能のはずなんだがな」
感心されているのだろうか、この状況でそんな事を言われてもちっ
とも嬉しくない。むしろ嫌味にしか聞こえない。

「あんたをヒトの身体にしているのは以前拘束魔法と変化魔法を組
み合わせた複雑な封印のようなものが体内にあるからだ。それを全
て解除すればドラゴンの姿に戻れるわけだが……」

つまり、先ほどから「解析」などという言葉っているのは、その魔法
を解析しているという事を意味しているのだろう。当然身体の中で
脳が最も影響を受けている訳だから、苦痛も腕や足の比ではない。

「限定解除することも出来る。半身だけとかな」

エリカに話しているわけではないのかもしれない。

ヴィゴラスは自分が行うべき作業を口に出して確認しているだけか
もしれない。飽きている、とはそういう意味も含まれているのだろ
う。

「アノイコトミス
再構成」

解析された情報を元にヴィゴラスが魔法陣の紋様を徐々に変化させ
ていく。それが何を意味するのか分からないうちにエリカの身体に
異変が起こる。

「うあっ!?!」

足が動かない。

鎖に拘束されているから、という意味ではなく、まるで自分の制御下を離れてしまったかのように力が入らなくなる。

そして直後、エリカの痛覚が悲鳴を上げた。

「う、ああああああああつ！！！！！！！！！！」

痛い。

ただ一言、痛い。

痛みと時を同じくして足の方からメキヨツという嫌な音がしたところを考えると、何かしらの変化が足に起こっていると考えられるが、エリカはそんな思考すら吹き飛ばす痛みに悶え苦しんでいた。

肉が骨によって穿たれ、皮膚を貫いて何かが体外に出たのが分かる。

「オリオ・リリス
限定解除」

魔法陣が一際強く輝き、輝きがエリカに向かって流れていく。

中心に達した時、エリカの身体の痛覚はもはや麻痺しており、自分の身体に何が起こっているのか理解するのがやっと、痛みで悲鳴を上げることすらできなかった。

足が左右非対称になったのが分かる。

右足には5本の指の感覚があるのに、左足には懐かしい3本の指とその先の鋭い爪の感覚がある。本来の大きさからははるかに小さい

が、それは確かに龍の足へと変化しつつあった。

魔法のせいか、それとも身体が龍に戻りたがっているのか分からないが、足に黒鱗が発現している。本来黒鱗は出し入れするようなものではなく常時エリカを守っている鉄壁の盾であるのだが、自分の意志とは関係なく黒鱗が出ているとどこか違和感を覚える。

身体の急激な変化で服の裾は簡単に破けてしまう。

そして変化はエリカの視界でも起き始めた。

腕が急激に膨れ上がったかと思ったら、肉が弾けて一瞬ではあるが白い骨がエリカの視界にも入る。左腕はすぐに再構成されてこれまた懐かしい腕に戻っていく。

だが、エリカの制御を離れてしまったかのようにのたうち回り、腕の付け根の関節がねじ切れそうになる。

さらに、背中にも違和感が起きる。そう、丁度黒鱗を翼のように発現させた時と同じような感覚だが、それよりもはるかに事態は深刻だ。

もはやエリカの体内ではヒトの骨格から龍の骨格へと移行しようとしている。内臓を引っ掻き回され、強引に翼を動かす骨と肉が用意され、肩甲骨の下あたりからそれが突き出す。

皮膚を貫いた瞬間、鮮血が飛び散るが、すぐにそれすらも霞むほどの巨大な影が姿を現す。

「ちっ、ヴィゴラス、制御が甘いぞ」

クランクが舌打ちをする。

彼らの面前には巨大な影がある。エリカの身体から、その身体に不釣り合いなほど巨大な翼が生えていたのだ。それこそ、エリカが本来の姿の時その巨体を浮かび上がらせるために使うものだ。その先端は既に魔法陣の外へ出ている。

さらに、黒い蛇のようなものがその陰から姿を現す。思い切り振れば巨木すらなぎ倒す事の出来る長大な尾が魔法陣の上でのたうち回っている。

「この化け物め、魔力を逆流させてやがる！」

「おめえら、気張れよ！　ここでこいつを自由にしたら全てが水の泡だー！」

男たちが動揺していることに気が付いたクランクが大声を上げて叱咤激励する。

だが、ヴィゴラスとクランクとは丁度反対側、エリカの背後にいた男がのたうち回って暴れる尾の直撃を喰らって壁まで吹き飛ばされる。さらに翼の先端によってその隣にいた男が上半身と下半身とに分断され、血飛沫が飛ぶ。

エリカの身体は丁度右半身が龍に戻ったような姿になっている。背中からは角のようなものが鋭く突き出し、顔面の右半分はもはや黒鱗に覆い包まれている。左半身が一挙一動するたびに黒鱗が擦れてまるで鉄の鎧を装着しているかのような音を響かせる。

その左目はもはやヒトのそれではない。

苦痛からくるものなのか、エリカの瞳から一筋の涙が流れるが、それ以上の何かがエリカを支配しつつある。

「くそつ、これは想定外だ!!」

散々自慢していた鎖はあつて無きが如く宙を舞っている。黒鱗の翼が鎖を引き裂き、現在エリカをその場に押しとどめているのは足と腕に巻き付いた鎖だけだ。それ以外の鎖はことごとく霧散してしまつた。

魔法陣自体が持つ結界のようなものも、簡単に突き破られる。ヴィゴラスとクラルクの前で次々とシャドーの男たちが宙を舞い、吹き飛ばされ、蹂躪され、いとも簡単に命を散らしていく。

だがヴィゴラスたちにはそれすらも見ている暇はなかった。目の前で自分たちの思惑に反して全ての制御から解き放たれようとする化け物を押し込めようとするだけで精一杯なのだ。

(馬鹿なヒト)

そして、それを他人事のような目で見るエリカがそこにはいた。

他人事のように、というのはその言葉通りだったのかもしれない。

エリカの意識は存在していたが、エリカの身体を動かしているのはそれとは別の存在というのが正しいかもしれない。

安心して、エリカ。貴女を苦しめる全てをあたしが壊してあげる。

「余計なお世話です。さっさとあたしの身体を返さない、イフオネイア」

自分が多重人格だと思った事はない。

だが、自分の身体の中で怒りや悲しみが芽生えた時にそれにつけ込むかのようにやって来る影の存在には気が付いていた。

随分と長い事その存在を忘れていたかのように思われるが、それは彼女の素の姿、龍としての自分であった。衝動のままに、本能の赴くままに、殺し、喰らっていく事を良しとし、エリカ自身が自分の心の奥底に押し込めていた存在。

心の問題なのかもしれない。

ただの馬鹿な考えなのかもしれない。

だが、エリカにとって「彼女」はもう1人の自分だ。今までも幾度もエリカに語りかけていた。頭の半分が龍に戻ってようやくそのことが理解できたのかもしれない。

なぜ？ 彼らヒトは害悪、あたしたちにとって脅威でしかないのはあなたの今の現状を見ればわかるでしょう？

「全員が全員、そうじゃない事は随分と昔に言った気がします？」
自分と口論するとは、随分と器用で滑稽な真似をしているなど、自分でも苦笑が漏れてしまう。

あのヒトたちがあなたをそこまで人間びいきにしたのかしら？

「……否定はしませんが、もとよりあたしたちとヒトは歩み寄れる存在なんですよ」

その結果がこれなんじゃないのかしら、エリカ？

まったく、自分を相手にするというのは嫌気が指す。言っている事も、考える事も、エリカ自身が考えた事、誰よりも理解が出来るまうのだ。

逆に言えば、「彼女」もエリカが言っている事は理解できているのだろうが、不思議な事に「彼女」はエリカよりも口が達者だ。

「……そうかもしれません。ですが、だからといって好き勝手ヒト

を殺すことを肯定することにはなりませんよ」

そう言うと、「彼女」は黙り込む。

エリカにとって、これは自分がこの世界にいられるかという瀬戸際、万が一にも「彼女」の赴くままに暴走でもしてしまえば、それは全ての破滅を意味する。

もしそんな事になれば、被害はここ、エオリアブルグだけでは留まらないだろう。

なら、あたしはどうすればいいの？ あたしはあなたの怒りや悲しみ、憎しみの姿。あたしを本当に消したいと願っているとしたらあたしはここにはいないはずよ。それが出来ないという事は、あなた自身もそれを望んでいるのではなくて？

その言葉に、エリカは急に意識が遠のいていくのを感じた。

もはや自分の身体が何をしようとしているのかも分からなくなってくる。

安心して？ 全てを終わらせたら、あたしたちは1つに戻る。そしたらまたたくさん楽しい事をしましょう？

「奪う必要のない命を奪って、前を向けると思ってるんですか？」

あたしは平気。たとえあなたが耐えられなくても、その分はあたしが引き受ける。そのためにあたしはいる。

その瞬間、「エリカ」という意識はブラックアウトした。

「ここだ！」

馬車から見えてきた巨大な建造物。

町はずれにある廃屋の前に馬車がたどり着くと間髪入れずに馬車に乗っていた全員が飛び降りる。

そしてアレックスがジーンたちの足元をすり抜けるといち早く廃屋へと走っていく。

「ここは、昔の訓練場です！ 地下にも巨大な訓練場がありますし、大勢が隠れるのにはもってこい……、どうして思い出せなかった！」
セラが自分を責めるように唇を噛む。

「自責の念なんか浸ってる余裕はないですよ！ 地下から強大な

魔力が立ち上つて来ています。おそらく何らかの大規模魔法が展開されています！」

セラの背中を叩くと、素早く刀を抜く。それを合図にしたかのように次々と皆が自らの武器を構えて古びた訓練場の中へと駆けていく。

訓練場の建物内は一部屋根が落ちていて、やや傾いた日の光が上から差し込んでいる。ほとんど内部には何もなく、その代わりに巨大な何かを引きずったために出来る埃のない部分や、妙にきれいにされている場所などがある。

元が汚い分、そういう場所は否が応にも目立つ。明らかに何者かが飲み食いするために場所を作った形跡だ。

そして内部を搜索しているとアレックスを追っていたジーンが地下へと通じる階段を見つける。

「ここか！」

石造りの階段を三段飛ばしくらいで駆け下りていく。背後から階段を叩く反響音がするため、後続が階段に気が付いて追ってきている事をジーンは一瞬確認してアレックスを追う。

階段は螺旋を描いており、途中からもはや日光は届かなくなったが、日の光が届かなくなる辺りから階段の壁に火の灯った松明が姿を現す。

無人のはずの廃屋、また1つ可能性が確信に変わる。

もはや素人でも分かるほどの、濃密な魔力が階段の先から流れてき

ている。もし魔力の流れを可視化することが出来たなら、おそらくジーンの視界は埋め尽くされているだろう。

階段をどれだけ下ったかも分からない。

しばらくすると突然階段は姿を消し、両開きの古い木製扉が姿を現す。その前でアレックスが立ち止まっており、アレックスを飛び越えると同時にジーンは扉を蹴破り、内部へと突入する。

「エリカ！ いるか！？」

声が響く。

それだけでも、この地下訓練場がどれほどの広さを持っているか容易に想像がついた。

そして、返事を待つまでもなく、ジーンはエリカを発見できた。

巨大な魔法陣の中心で、左半身を真っ黒な鎧のような姿にして、背中から巨大な翼を、そして背後から長大な尾を伸ばした、何度も何度も言葉を交わしてきたエリカの変わり果てた姿を、見つけてしまった。

第66話 エリカとイフォネアと（後書き）

はい、何やらエリカがどこぞの遊○王の顔芸とか王様みたいな2重人格を発動しました。

さあ、ここから一人称が面倒な事になる……

ではでは。

ご感想などお待ちしております。

第67話 彼女の存在意義

信じられない光景、とはまさにこの事を言うのだろう。

ジーンの後に続いてドームに走り込んできた面子も、ジーンと同じように固まってしまった。その中でバーバラだけが、顔を歪ませながら舌打ちをした。

「遅かった……エリカ、まだ生きてるわね!？」

バーバラは声を張り上げて魔法陣の中心で立ちすくんでいるように見えるエリカに声をかける。

「っ！ あいつらか!！」

エリカの周りに立っている男を目をやると、問答無用でジャックは大剣を向ける。

魔法陣の周りには10人程度の男が立っているが、魔法陣の縁で胴体を分断された死体や、壁まで吹き飛ばされている死体がある。

そして、その壁沿いに視線をずらすと、2つの人影が目に入った。

「クライム！　すると隣のがユーリか!！」

ヴァルトが声を上げる。

薄暗い視界の中でも、クライムの周りが血の海になろうとしていることは分かる。すぐさまヴァルトとセラが走り出して2人の所へ向かう。

「……邪魔が入ったか」

そこに至り、シャドーの1人、ヴィゴラスがようやく口を開いた。視線をこそジーンたちに向けてはいるが、その意識はエリカに注がれているのは明白、ジーンたちにはほとんど興味ないといった様子だ。

「しばらく待つてる。こいつの処分が終わったら貴様らも同じところへ送ってやる」

「っ!! させるかよ!!」

その言葉に遂に我慢の糸が切れたジャックがヴィゴラス目掛けて走り出す。

「……仕方がない、全ての制御を俺には渡せ。あの愚か者を近づけな」

「「「御意」」」

シャドーの男たちが声を揃えて頷くと、魔法陣からスツと身を引き、剣を抜いてジャックの前に立ちはだかった。

「へっ、てめえらみたいなので俺を止められるとでも思ってたのか？」

「止めるのではない、時間稼ぎをするだけだ」

「ジャック、俺たちを置いて1人でおっぱじめるなよ」

不意に背後から声をかけられてジャックが背後を振り向くとそこにはジーンが立っていた。そしてその隣にはバーバラとフィア、ヒナもいる。

「……バーバラ、クライムは心配じゃないのか？」

「あいつはそう簡単には死なないわ。心配するだけ無駄よ。それよりも目の前で助けを求めるお姫様を助けましょう、ジーン？」

「当然だ。エリカは大切な仲間なんだからな。見殺しにしてたまるか」

「……………パフィオベディルム、殿」

今まさにシャドーとジーンたちが剣を交えようとした時、魔法陣の中心から声が響き、その場にいた全員がエリカに視線を向けた。

「馬鹿な、まだ意識があるというのか？」

ヴィゴラスが信じられないという表情をしている。彼としては、てっきり当の昔にエリカは意識を失ったものだと思っていたのだろう。それはシャドー全員に共通していたようで、ジーンたちの正面にいる男たちも少なからず動揺している。

「エリカ！ 大丈夫か！？」

ジーンが呼びかけると、エリカがゆっくりとジーンたちの方に顔を向けた。左半分を黒燐に覆われ、既にヒトのそれとは思えないほどの不気味さを醸し出しているが、右半分はまだジーンたちが見慣れたエリカの顔だった。

そのあまりに現実離れた姿にシャドーの男たちが一步退く。

エリカの左目は既にヒトのそれではなく、恐ろしい野獣のそれを思わせるほどで、右目がほとんど輝きを失っているのに対して爛々と輝いているように見える。

まるで、ヒトとしてのエリカが死んでいくかのように。

男たちが退いたのを好機と見たジーンは魔法陣に入ろうとする。

だが、それをバーバラに制されてしまう。

「何をするんだ」

「落ち着きなさい、ジーン」

いつにも増して、バーバラの表情が硬いのを見て、ジーンは渋々ながらそれに従った。

「お久しぶりでスね、パフィオベディルム殿。2000年ぶりと言つたところですか」

エリカはぎこちなく言葉を紡いでいく。それはまるで喋る事に慣れていないかのような口ぶりだ。

だが、それ以上にジーンたちが疑問符を浮かべたのはその内容だ。

「……あなたは誰かしら？ エリカじゃないのは確かなようだけれど？」

「なんですって、それはどういう事？」

バーバラの言葉に全員が詰め寄る。

だが、バーバラはエリカから視線をずらさない。

「さすがハパフィオベディルム殿、あたしの正体に気が付きましたか」

「エリカを出しなさい。私たちはエリカに用があるのよ」

「残念ながら、エリカは眠っています、深い、眠りにネ。起こさな

いでアゲてください。彼女にモウ、辛い思いをさせたくナイんでス」

「それはどういう意味かしら」

エリカが寂しげな表情をする。

正確には「エリカ」という個ではないのかもしれないが、バーバラたちがそれを知る術はなかった。

「あたシはエリカの影、辛かつタ時や、悲しかつタ時に彼女の心ヲ支える。彼女が表に出さなイ分、あたしが全てヲ受けとめていタ。ケド、もう限界……」

「限界？ 何が!？」

「エリカは疲れ切ツテしまツタ。だから、あたしはコノ身体の制御権を彼女カラ奪い、彼女の憂イを全て晴らす事にスル。エリカに係シタあらゆる者を、国ヲ、世界ヲ、破壊スル」

そう言うエリカの左目はとても楽しそうだ。

今、エリカは龍としてここにいるのだと、その場の誰もが直観で理解した。ヒトとしてのエリカは彼女の中で眠っているのだと。

「お喋りはいい加減止める。エリカ、あんたはここで大人しく、死ね！」

魔法陣の全ての制御を引き受けていたヴィゴラスが大声でそう言うのと、魔法陣の輝きが強くなる。そして床から巨大な雷がドームの天井へ向かって起き、その膨大な雷の奔流はエリカの身体を飲みこん

でしまう。

一瞬、エリカの姿すら霞んでしまい、巨大な翼の先端が僅かに見えるだけになってしまう。

「エリカ！」

誰が最初に叫んだかは分からないが、ジーンたちがほぼ同時にエリカの名を呼んだのは確かだ。

「……そんなものか」

雷が荒れ狂う轟音が響く中、酷く冷めた声が聞こえた。

刹那、エリカを飲みこんでいた雷が霧散し、何事もなかったかのようなエリカが姿を現す。

その姿を見てジーンたちは安堵よりも恐怖が勝った。

その目はもはやヴィゴラスをヒトとすら見ていない。ただのモノ、よくても獲物くらいにしか捉えていないように思える。そう、丁度エリカが団内選抜試合で見せた、あの時のような目だ。

「お前たちはあたしたちを誤解してるようだナ。この程度ノ魔法でどうに力なるとデモ？ その程度の能力でどうに力なるとデモ？ それこそヒトの慢心と言うモノ、上には上ガいる事ヲ知るガイイ」

口調からはもはやエリカだと分からなくなってきた。

（このままじゃ、エリカがエリカじゃなくなる！）

バーバラは本能的にそう感じた。

おそらく、「彼女」はエリカの影、全てが終わればエリカに主導権を返す気があるのだろう。話す内容からしてそういう事なのは窺い知る事が出来た。

だが、全てが終わった時、エリカはエリカでいられるだろうか。

自分に関わった全ての人、世界を自分の手で破壊したと理解して、正気を保っていられるのだろうか。

バーバラはエリカがたとえ龍とはいえ、1人の少女だという事を知っている。彼女の強い部分も弱い部分も知っているつもりだ。いかに身体が強くとも、心までそうとは限らない。

エリカが壊れる事だけは、友として、絶対に許すことは出来ない。

「ジーン、エリカを止めるわよ。何があっても、彼女をここから出してはダメ」

「そんな事は分かってる。ジャック、ヒナ、あいつらの相手を頼む」
エリカと話している間、ほとんど空気になっていたシャドーたちを睨み付けると、ようやく男たちも自分たちがやるべき事を思い出したようにジャックたちに剣を向ける。もはや彼らでさえ呆然とするほどの存在感がエリカの身体からあふれ出しているという事なのだろう。

「合点承知だ。おめえらもしっかり嬢ちゃんを連れ戻してこい」

「エリカにはまだたくさん教えたい事も、教えてもらいたい事もありますから、絶対に頼みますよ」

ヒナはそう言つとヴィゴラスの隣にいるクランクを見据える。

「ジャックさんはあの有象無象を頼みますね。私はあの男を」

「ほつ、小娘が言つじゃねえか。良いだろう、てめえの血を俺の剣に吸わせるや」

ヒナは感情を表情にあまり出していないが、純粹な怒りがこみ上げているのは隣にいるジャックにも分かる。

「ヒナ、無理はすんなよ？ いざとなつたら団長やセラ、俺たちに助けを求めろ」

「もちろん、そうなれば当然そうします、が」

その瞬間、ジャックの隣からヒナの姿が消える。

否、正確には消えたと錯覚するほどの速度で走つたのだ。コンマ数秒後にはヒナの姿はクランクの目の前にあり、その首目掛けて容赦なく刀を振ろうとしていた。

「な、なにいつ!？」

クランクが驚きながら剣でヒナの振るつた刀を弾き返すが、あまりのヒナの速さに動揺を隠せない様子だ。

「てめえ、人間じゃねえな？」

「その台詞は聞き飽きましたよ！」

ヒナはニヤリと笑いながらクランクへ突貫する。

ヒナは獣人の中でもとりわけ凶暴な人狼の娘、その身体能力は吸血鬼のバーバラとも引けを取らない。さらに、人狼に元から備わっている殺人衝動を自ら解放する事で殺すことを厭わないようにしている。ヒナの父親、ムラミツのように戻れなくなる危険性など、今のヒナの脳内には欠片もない。

「おいおい、俺が目立たないじゃないか。てめえらしっかり気張れよ！」

ヒナの動きに感化されたのか、武者震いをしたジャックは獰猛な笑みを浮かべてシャドーに斬りかかる。

もはや見慣れてしまった豪快な振りど、その間に入れられる小技でシャドーを次々となぎ倒していく。

「……エリカが大切二思うのも無理はない。こんな二も仲間思いなんですか。だからこそ、壊しガイがあるト言うモノ」

そこで初めてエリカは身体をジーンたちに向けた。身体を動かした拍子に尾が壁を抉り、ヴァルトたちの上に瓦礫を落とす。

そしてそのまま尾はヴィゴラスを直撃し、彼を壁まで飛ばして昏倒させる。死なずに済んだのはやはり経験の差というものなのだろうか。

正面から見たエリカは、あまりにも不気味だった。ヒトの部分と龍の部分の境界は徐々に体の右へと移行しており、エリカが完全な龍となるのも時間の問題と思われる。

さらに言えば、怪我をしているわけでもないのにエリカの身体からは血が流れ出している。傷口を黒鱗で塞ごうとしているようだが、よほど傷口が大きいのか血が止まる気配はない。エリカが龍に戻るのが早いか、出血多量で死ぬのが早いか、その2つの競争になりつつあるのは明白だ。

「ああ、この血？ 半分はヒト、半分はドラゴン、内臓が壊れちゃう。早くあたしヲ倒す事ネ」

「あなた、自分が言っている事が分かってるのかしら？ エリカが死ねばあなたも死ぬのよ？」

「ここデあなたたちを殺しタ後、ゆつくりこの魔法陣を使わせて貰ウ。そう、タイムリミットはあと数時間でしょうネ」

「なら、早々に決着をつけさせてもらうしかないようね」

バーバラはジーンに顔を向ける。

「俺の剣でないとエリカは貫けない。まったく、どうしてこんな大役が回って来るんだ……」

「愚痴ってないで、頼むわよ？ 私じゃ時間稼ぎくらいしか出来ないから」

「了解、エリカ、今引つ張り出してやるからさっさと起きろ!」

空気が変わったのはその時だろうか。

あまりに唐突に、全ての時間が止まったかのようにジーンたちを包む空気の質が変わった。それまでは刺々しい、ピリピリとした空気だったが、今は虚無だ。何も無い、動けば自分の存在すら虚無に飲みこまれてしまうかのような空気になっている。

「ジーン、父上の鱗力ら造られタ剣ヲ使う者、あなたさえいなければ、エリカはこんナ目に合わずに済んダ」

「どつという意味だ……」

「あなたがエリカを見つけたからエリカには失いたくないモノが増えてしまった。タッタ1人で生きていたなら、こんナ悲し

イ思いヲせずニ済んダ。あな夕のせいで、エリカは壊れヨうとして
いる」

エリカは左手に巨大な黒燐の刀を作り出す。手に持っているのでは
なく、手の甲から持っているように見える形で伸びている。その刀
をヒトの指のように5本作り出すと、指の動きに合わせて動かす。

「人はいつだって1人じゃ生きてられない。あんただってそうだろ
う、エリカがいなければ生きられない」

「あたし八生まれでもない。エリカという個が作り出し夕逃げ道、
虚像、結局、あたし八彼女にとつて便利ナ道具でシかない」

そして跳ぶ。

エリカ、いや彼女の中のもう1人の「彼女」、イフォネシアと言っ
べきなのかもしれない。イフォネシアはジーンの目の前に跳び込む
と左下から5本の刀で切り上げる。黒鱗と白鱗の大剣がぶつかりあ
っただけで火花を散らし、甲高い音を響かせる。

「エリカ、しっかりしてくれ！」

「あたしヲその名で呼ぶナ！ ヒトが付けタ名で、あたしヲ呼ぶナ
！！ あたシはイフォネシアという名がある！！！」

まるで痼癩を起こしたかのように喚き散らすイフォネシア。

だが、その間も強烈な連撃を繰り出してジーンに反撃の暇すら与え
ようとしない。ジーンも攻撃を防ぐのだけで精一杯、とてもじゃな
いが反撃に転じる事ができるような状況ではない。このままではじ

り貧になつてしまつ。

「私を忘れないでくれなにかしら？」

巨大な白鱗の大剣、さらにはそれを振り回すジーン、2つの陰に隠れた背後からバーバラが飛び出し、イフォネイアに斬りかかる。

イフォネイアは左手で刀を受け止めると、5本の刀をバーバラに向けて伸ばしてきた。黒鱗は使い手である彼女の意志に応じて形を変える、そういう所だけはまだエリカであつた頃が残っているようだ。バーバラは自らの剣に絡みついてくる5本の刀を弾き飛ばすとエリカの顔面に思い切り蹴りを入れる。もちろん、そんな事でイフォネイアが怯むはずもない。素早く別の黒鱗がバーバラの蹴りを正面から軋みすら上げずに受け止める。

「その程度デ……っ!!」

確かにイフォネイアに一切のダメージは入らなかつた。

だが、コンマ数秒動きが止まつた。ジーンがそれを見逃すはずがない。

黒鱗を顔面の寸前に展開していたイフォネイアが防御を解くと、それを見計らつたかのようにジーンの大鱗の大剣が迫つて来た。イフォネイアは済んでのところで大剣を受け流すと地面を蹴つてジーンと距離を取る。

それを見てジーンとバーバラは笑みを浮かべる。

「やっぱり……」

「……いくら手負いとはいえ、エリカと比べたらはるかに弱い」

負傷しているだけではない。おそらく彼女はエリカの記憶を元に戦っているのだろう。

だが、記憶を掘り起こしてそれを実践したところで、過去が今に勝つことは出来ない。たとえ直近の記憶であろうと、1秒前の記憶であろうと、今のジーンたちとは比較することは出来ない。

「……なぜ？ エリカの記憶からあなたたちの戦闘スタイルは理解しにくい。なのに、なぜ、凌がれる？」

「確かにエリカは俺たちよりずっと強かった。そこには常に守りたいものがあったからだ。今のお前には何もない。ただ破壊するだけの力が守るための力に勝ると思うなよ？」

「……小癩。無駄口を叩いてル暇があツたらかかってこい」

そう言うとバーバラが笑みを浮かべながらイフォネアの背後を指差した。

「私の時もそうだけど、あなた、注意力散漫よ？」

「っ！？」

バーバラに言われて何かに気が付いたイフォネアは即座にその場から横に飛び退く。直後、そこにジーンの大剣と同じくらいの大きさの大剣が振り下ろされる。そして轟音と共に床にめり込み、その

傍らに立つ影にイフォネイアは視線を向ける。

「ちったあ齒ごたえのある所を見せてくれよ、嬢ちゃん？ エリカに負けた俺としてはリベンジもかかってんだ」

「ジャックさん、今はエリカを助ける事に集中してくださいよ」

床から大剣を引き抜いて肩に担ぐジャックの表情は楽しげだ。だがその服には大量の返り血が付いている。隣のヒナは軽く刀の血を払いながらジャックの言葉に顔をしかめている。

「シャドーだか邪道だか知らねえが、俺の敵じゃあなかったな。所詮は一般兵Aつてとこだな」

「なんですか、それ」

「よく聞いてくれた。一般兵Aの力を1とすると、俺様超絶神兵様は1000くらい、まあ、負ける要素が見当たらねえな」

「……よく恥ずかしげもなくそういう事を言えますね」

ヒナが呆れたようにため息をついている。

まるでイフォネイアの事など気にしていないかのように、だ。

「何を勝手に……っ!？」

今度も背後から。

突如炎の球が背後からイフォネイアに向かって飛んできて、翼を直

撃する。人間大の大きさの火球の直撃で多少なりとも体勢がぶれるが、それだけ、ゆつくりと背後に顔を向けるとそこにはファイアとシルヴィアが立っている。

「あら、この程度じゃ焦げ目1つつかないの？ だとするとちよつと厄介ね。クライムとユーリさんがいるからあまり大きな魔法は使いたくないし……、シルヴィア、団長たちを盾で守れる？」

「いいわ。最大防御するから手加減はいらないわ」

「どいツもこいツも人の背後ヲ取るノが好きダな……」

イフォネイアが舌打ちすると、ファイアが笑顔になる。

「戦闘において不意打ち、奇襲、闇討ちは日常茶飯事、賞賛されど批難される筋合いはないわ。エリカの記憶を見ているなら、それくらい理解できるんじゃないかしら？」

「屁理屈をつ……」

これで、イフォネイアはジーンたちに囲まれることになった。

明らかに苛立っているのが分かる。表に出てきている彼女が安定しなければ、中にいるエリカが外に出てくる可能性もある。決定的な一撃をジーンしか打てない現状、エリカに戻ってくれることが一番安全確実だと言えるだろう。

だとすれば、今ジーンたちがやるべきは「彼女」を引き留める足止めであつて「彼女」を倒す事ではない。

「……なめるナよ、人間。あたしは、ドラゴンだっ！！」

「うおっ！？」

イフォネイアは足を地面に押し付けて姿勢を安定させると、思い切り尾を振ってジャックたちに襲い掛かる。横から薙いできた尾を飛び退いてジャックとヒナは回避すると、それを合図にエリカに向かって全員が攻撃を開始する。

「ドラゴンの相手は私たちの専門なのよ！」

シルヴィアが叫び床から巨大な氷柱が付き上げてくる。氷柱はイフォネイアの身体に接触すると接触した部位に凍り付いてイフォネイアの動きを制限する。そのほとんどが一瞬の隙しか作れないほどのものではあったが、その間にフィアが詠唱を終わらせ特大の火球をイフォネイアの頭上に作り出す。

火球はイフォネイアの上に落下し、強烈な熱風を辺りにまき散らす。シルヴィアが作り出した氷の盾がシルヴィアとフィアを、大剣を使ってジャックがヒナを、ジーンがバーバラを守る。屋内でいきなり巨大な爆発が起きれば、その内部は地獄と化しかねない。だが、イフォネイアを拘束しようとしていた氷柱が蒸発することで急激な温度の上昇はその一瞬に留まる。

だがあまりに強烈だったせいか、ドームの頂点辺りに穴が開き、外の景色が見えている。天井の瓦礫が真下にいたイフォネイアに降りかかるが、頭に当たっても怯むそぶりすら見せない。巨大な翼で爆発を凌ぎきり、ゆっくりと翼を広げると紅い眼が不気味に光るイフォネイアの姿がそこにはあった。

「相変わらず、嬢ちゃんは規格外だな……」

「褒めてる場合じゃないですよ！」

ヒナは隣で感心しているジャックを諫めながら居合の体勢になる。

「刀姫一刀流居合」

初めてエリカに見せた刀姫一刀流の技にして、対大型生物の切り札……」

「屠龍」

空気を切り裂き、強烈な斬撃が生み出されると真っ直ぐにイフォネイアに向かう。イフォネイアは左腕を前に突出し、その斬撃を正面から受け止めてみせる。

ギャリッ！！

2つの音が同時に起きた。1つは斬撃と黒鱗の左腕とが衝突した甲高い音、もう1つは地面にストッパーのように刺していた踵の黒鱗が床を抉る音だ。

屠龍の威力は想像を絶し、イフォネイアの半龍と化した身体を後方へと押し込んだ。

「……さすがはエリカが師と仰ぐだけノ事ハあるナ。だが、エリカに教えタのは間違イだったナ」

イフォネイアはニヤリと笑みを浮かべると左腕を振る。5本の刀を

持っているわけだから、それによって作り出される屠龍の飛ぶ斬撃は5つ、ヒナとジャックに向かって容赦なくその巨大な5つの斬撃が飛ぶ。

「くそっ！」

ジャックが素早くヒナの前に出て大剣で斬撃を全て受け止める。

だが、巨大な岩石すら切り刻む斬撃はジャックの大剣すら例外にはせず、大剣をバターののように切り刻んでしまう。斬撃は多少威力を減退させたとはいえ、ほぼそのままにジャックの身体に直撃し、5つの深い裂傷をつける。

「ぐはっ!？」

一部は内臓にまで届いたのか、直後ジャックが血を吐く。胸から腹にかけて鎧など無いかのように深く抉られ、ジャックは仰向けに倒れ込んでしまう。

「ジャックさん!！」

すぐさまヒナが駆け寄り意識を確かめる。

ジャックの傷は酷く、ヒナはジャックを担ぎ上げると駆け寄ってきたヴァルトと共にクライムが寝かされている壁際まで運んでいく。

「……くくく、捨て置いて戦えば良いものヲ。どうせ皆死ヌがナ」

「私たちは仲間を見殺しにはしないわ。もちろん、あなたもね」

一瞬、イフォネイアが意外そうな顔をする。

だが、それも一瞬、すぐにまたすべてに絶望したような悲しい表情をすると小さく言葉を紡いだ。

「あと、5人……」

第67話 彼女の存在意義（後書き）

珍しくエリカが出てこない回でした。まあ意識を失ってるようなので仕方ないですよね？

ていうかジャックさん！ あなた超絶神兵でしょう！？ なにぶっ倒れてるんですか！？

自分で書いていながらこんなことを言うのもなんなのですが、ジャックはやっぱり負けが一番似合わない人だなあ、と。

ま、そんな事はどうでもいいですよね。

あとはイフォネイアの台詞をエリカと区別するためにカタカナを使ったのですが、変換が大変でした。二度とやりたくないです。

それではそんなわけで、エリカから身体を奪い取ったイフォネイア、この後どうなっちゃうんでしょうか、ではまた次回。

ご感想などお待ちしております。

第68話 「あたし"たち"」は「あたし」に戻る(前書

うおおおおおおっ!!!

終わりが見えてきたああああっ!!!

待てばカイロはエジプトの首都ですね!!!

あ、待てば海路に日和あり? でしたっけ。

ではでは、どっぞ。

第68話 「あたし"たち"」は「あたし」に戻る

意識を失ってどれほど経ったのだろうか。

それすら分からなくなった頃、エリカは目を覚ました。

目を覚ましたと言っても身体は相変わらずイフォネイアが制御下に入れているから、あくまで覚醒しただけ、という事になる。

外の様子は相変わらず分かる。そしてエリカの前でぼんやりと虚空を見つめるイフォネイアを見つけると、エリカはゆっくりと彼女に歩み寄った。

「不思議、なぜあの人たちはそこまでして戦うの？ 逃げればあるいは助かるかもしれないのに」

「アクイラ騎士団は仲間を見捨てない。それに守りたいものがあるから、だと思う」

表に出ているイフォネイアが何かを言っている。表のイフォネイアも今隣にいるイフォネイアのように冷静だったら思うが、それも届かぬ願望だ。

「守りたいもの、エリカの事ね？」

「……かもね。なら、あたしも守りたいもののために戦わないとダメか……」

エリカがそう言うと、イフォネイアが険しい表情でエリカの方に向けてきた。それも当然だろう、イフォネイアからしてみればそれが意味するのはイフォネイアとエリカが戦うという事なのだから。

「精神が戦えば、肉体が崩壊するわよ？」

「だれがあなたと戦うって言った？ 第一、戦うって言ったって刀片手に肉體言語っていうだけじゃない。それに、あたしにとって、あなたも守りたいものに入ってるんだから」

「え……」

イフォネイアが呆けたような顔を見ると、エリカが何を今さら、といった目でイフォネイアを見つめる。

「あなたはあたしの影、ならあたしの生き写し、あなたの言う通り、あなたはもう1人のあたし。なら助けるのに理由はいらぬ、あたしは、あたしを助ける」

「……自分の闇を、闇から救おうというの？」

「その闇だつて、あたしが作り出してしまったものよ。他人との間に線引きをして、自分を守る事で逆に自分の心に闇を作ってしまった。イフォネイアという本来のあたしをエリカという仮面で隠してしまった。でも、あたしにとってイフォネイアもエリカも両方自分なら1つになりましたよ？」

そう言うとイフォネイアがくすりと笑った。ここに来て、初めて彼女の笑顔を見たような気がする。

「両方なんて、エリ力は欲張りね」

「今まで我慢したんだから、これくらい見逃しなさい。それに、これから一緒にいられる、そしたらあなたにも世界を見せる事が出来る。それでチャラよ」

なんだか、自分相手だと堅苦しい言葉がばかしくなり、敬語が取れている事に今さらながら気が付く。そもそもエリ力が他人に敬語を使うのは、他人と自分の間に線引きをするためであり、今となつては無用の長物に等しいものになってしまった。なにせ、敬語を使つてまで隠そうとした本当の自分が目の前にいるのだから。

「でも、今からどうやってあたしから主導権を取り返すの？ 今外イフォネイアでああなたの仲間と戦っているのはあたしの闇、つまりあなたの心の奥底に眠っていた闇のまた闇よ」

「はあ、我ながら面倒な人格を作ってしまったものね……」

小さくため息をつくときエリ力は頭を抱えた。

結局、目の前にいるイフォネイアは説得できた。少なくとももう敵対することはないと考えていいだろう。

問題は今ジーンたちと戦っている「彼女」だ。

今回の件で、全てに絶望した「if」のエリカと考えるべきだろう。強引な魔法のおかげでエリカの精神は割かれ、「彼女」が顕現してしまった、と言ったところか。

自分の精神をその特徴ごとに分割すれば、一番暗い部分となる悲しみや憎しみを司る自分。よりもよってその自分が外にいるのだ、これほど面倒な事はない。

では目の前にいるイフォネイアは何者か。外にいる自分と同質のものなのは確かだが、それにしても随分と聞き分けがいい。

「あなたは、結局誰なの？」

「あたし？ あたしはヒトとしてのあなたの闇。ジーンさんたちと出会い、希望を知った闇。だけど『彼女』は違う。あの子はドラゴンとしてのあなたの闇。ジーンさん達とも出会わず、光を知らない闇。それがどれだけ深い闇かはあなたにも分かるよね？」

当たり前だ。

自分のなのだから。

エリカは頷く。

ふと、自分の両手が何かを握っていることに気がつく。見ればいつの間にか姫黒と黒羽が握られていて、美しく光を反射させている。

「ここを出たら必要になるでしょう？ あたしたちの力が込められた刀、現実世界でも、大切にね」

ここは精神世界、今手に握っている刀も結局は虚像に過ぎない。今目の前にいる少女も、この世界でしか存在しないし、ここでしか存在させてはいけない。この真理のような法則が崩れれば、その瞬間「エリカ」という存在も虚像と化してしまう。

「止めて、^{イフオネイア}あたしを。^{エリカ}あたしので」

願うのは全ての終焉。

自分の闇に、自分という個に、この何ももたらさない不毛な戦いに、
そしてエリカの旅に、終止符を打つ時が近づいている。

そのために、エリカは

、

詠った。

「っ!!」

異変に一番最初に気が付いたのは誰だったか。

それは前触れなく起こった。

圧倒的な戦闘力とはまさにこの事を指すような無茶苦茶な戦い方をしていたイフォネイアが突然足を止めた。そもそも一歩足を踏み出すたびに血が床を赤く染めるような状態でジーン、ジャック、フィア、バーバラ、シルヴィア、ヒナを相手に互角以上の戦いをするという常人ならば到底考えられない事をしていたため、エリカの肉体が限界に達したのかとジーンたちが思ったのも当然のことだ。

だが、そうではなかった。

イフォネイアは刀のように伸ばした手で自分を傷つけないように頭を押さえている。

「馬鹿ナ、なぜ手ヲ貸ス!？」

イフォネイアが焦燥感に塗れた声を上げる。

明らかに動揺しているのが分かる。

そして不意に今までただ肩からぶら下がっているだけだった右腕がぎこちない腕で左腕を握り、自由に動かせないようにする。

「……………歌？」

耳を澄まして、それでも聞こえるか聞こえないかというギリギリのところではあったが、確かに歌がどこからともなく聞こえてくるのがその場にいた全員に分かった。

そして、その音色に聞き覚えがある事も。

「この歌、エリカが歌っていた……………」

「あの夜聞こえていた歌か……………」

ジーンたちはエリカが歌っていたという事実を知っていたわけではない。この場でそれを知っているのはバーバラくらいのものだ。

だが、それでも今この状況でこの歌を歌うとしたらエリカしかいない。

「エリカも戦っているのね。なら、私たちも休んでいる暇はないわ。皆、エリカの動きを止めるわよ。」

今しかない。

この機を逃せばまた暴走を再開させてしまうだろう。

エリカ自身の身体にも、バーバラたちの体力にも、限界は近い。ここでしくじる事は全ての失敗を意味する。

それが一番分かっているのはこの場にいるジーンたちだ。

バーバラの掛け声と同時にシルヴィアが動きを止めたイフォネイアの足元から加減無しで氷を作り出し、イフォネイアの膝下まで氷漬けにしてしまう。先ほどまでの彼女なら簡単に碎いて脱出できただろうが、右半身の反乱を起こされた今のイフォネイアはなす術もなく動きを封じられてしまう。

「手加減なしだ！ 思いっきり行くぞ、エリカ！」

ジーンが飛び出すとイフォネイアの肩を蹴り飛ばす。

「グッ!？」

足を固定されてしまっているイフォネイアは膝を曲げて床に倒れ込む。そこで終わらせずジーンはイフォネイアの巨大な翼の上に乗ると自らの大剣を突き刺して床にまで大剣を貫通させる。

「少しばかり、痛いのは我慢してくださいね！」

ヒナは先に一言謝った後、武器を無くしたジーンを追い払おうとする尾に刀を突き刺す。刺した瞬間イフォネイアが唸り声を上げるが、ジーンの大剣同様床まで貫いた刀によって反撃の方法を封じられてしまう。

するとイフォネイアは邪魔をする右手を振り払って翼の上にいるジ

ーンに左腕を向けると5本の刀のような黒燐をさらに伸ばす。

「はい、そこまで」

だが、モーションも大きく、その動きも直線的だったイフォネイアの攻撃はバーバラに容易く防がれる。並みの剣なら黒燐と擦れれば剣としての意味を失ってしまう所だが、バーバラの剣もまた黒燐で鍛えられている。5本の槍のように伸ばされた黒燐を弾き飛ばすとその全てを絡め取る様に剣に沿わせ、擦じり折ってしまう。折った瞬間イフォネイアが信じられないような表情をするが、バーバラ自身も折れるとは思っていなかった。

そう、無類の強度を持つ黒燐が折れたのだ。

それは彼女の身体が黒燐を100パーセント発現させることが困難になってきている事を意味している。

「ええと、ああ、簡単に使えるじゃない」

魔法陣を観察していたフィアは魔法陣の内容を解析するとそれを我がものように操り先ほどエリカを縛るのに使用されていた鎖でイフォネイアの身体を床に縛り付ける。

もはやイフォネイアは右腕以外の四肢を封じられ、身体を一切動かす事が出来なくなっている。

苦悶の声をイフォネイアが上げているのを聞きながらジーンたちはゆっくりと彼女に近づく。

抵抗できず、イフォネイアは憎悪の眼差しでもってジーンたちを迎

えるが、周囲から彼女を見る者にはその左目とは対照的に光を取り戻しつつある右目を見ていた。

「帰ってこい、エリカ」

ジーンが静かにそう言って右手を差し伸べる。それはもちろん、唯一拘束されていない彼女の右手を迎えるためだ。

ジーンが手を差し伸べた瞬間、イフォネイアの顔が歪み、左目が大きく見開かれる。

「なぜ、なぜ、なぜだ、エリカアアアアアア!!!」

イフォネイアは最期に憎悪を以てエリカの名を叫び、こと切れるように意識を失う。

ジーンたちはただ、エリカの帰りを待つしかなかった。

「随分と、やっつけてくれますね……」

苦笑いしか出ない。

いくら自分を止めるためとはいえ、随分と乱暴な止め方をしてくれたものだ、とエリカは呆れてしまう。

「まあ、あれくらいしないと止まらなかったとも思いますけど」「もう一人の自分がそんな事を言っている。」

それを一蹴しつつエリカは外に出るために歌を詠い続ける。

それが脱出のための正しい方法なのか保証はない。だが今のエリカにはそれしか出来ない。

外ではジーンたちが自分の帰りを待っているのが分かる。

「外に出ても、あたしたちはここに居続ける」

「……今度は置いて行かない」

エリカは歌を切って顔をもう一人の自分に向ける。その顔は笑顔だ。

「自分を受け入れる事を忘れてこんな目にあっただ、これからはずっと一緒」

「もともと1つだったのに、どこかの誰かさんのおかげでこんな事になったんだけどね」

「うぐっ……」

それを言われたら反論できない。

まさか自分に言い負かされる日が来るとは思いもしなかった。

「……はあ、また1つになれるよね？」

「それをするのがあなたの仕事。あの子はちょっと大変かもしれないけどね」

「言わないで。今から憂鬱になる」

暴走を起こした自らの感情を説得するなんて、聞いたことがない。当然ながら方法などを知っているはずもない。

だが、やるしかない。それが今自分がしなければならぬ事なのだから。

自分に何かを押し付けるのは止めよう。

全てをありのままの自分で受け止めよう。

「ふふ、あたしのこの姿はもう必要ないかな？」

笑いながらゆっくりとエリカに手を伸ばしてくる。

「その姿はね。あなたはいつもあたしを見守っていて。いつでもここで会えるんだから」

彼女の姿が淡い光に包まれ始める。

彼女の手優しく触れると、その光がゆっくりとエリカの身体に吸い込まれていき、彼女の姿が徐々にぼんやりとしていくのが分かる。

「ただいま、あたし」

「おかえり、あたし」

言い終わった時には、彼女の姿はもうなかった。

この空間にはエリカ1人しかない。

エリカは目を閉じてゆっくりと深呼吸を一度すると黒黒と黒羽を振りかざす。

「帰ろう、あたしの居場所に」

「エリカ!？」

「うっ……」

自分の体内時計が正常に働かないのがここまで不便だとは思わなかった。

精神世界での出来事が終わり、再び目を開くと薄暗い空間が目の前に広がっていた。

そして、こちらを見下ろしている複数の顔が視界に入る。どの顔も見覚えがあり、自然と一人ずつ目で追ってしまう。

「戻っ、た？」

「エリカよね！？ エリカでしょうね！？」

バーバラが肩をガシツと掴んで揺さぶってくる。

「バ、バーバラさん！ あたし身体動かせないんで揺らさないで！」

正確には動かせないようにされていると言った方がいいだろう。フィアが慌てて鎖を消滅させ、バーバラが肩から手を放す。

ようやく自分の身体に戻れたのは良いが、徐々に各部位の感覚が戻ってくると、痛みしかないのが辛い。翼を貫かれ、尾を貫かれ、身体が左右でまったく違う種族になっているのだ。身体が悲鳴を上げないはずがない。

胃の中から何かがかみ上げてくるのを感じ、慌てて顔を横に向けると同時に大量の血を吐き出す。

それを見てフィアが急いで治癒魔法をかけ始めるが、吐血は一向に

止まる気配を見せない。

「無駄、です。これは身体が、2つの種族がごっちゃになった状態に対して拒絶反応を、起こしているからしょう、から……ゲホッ」

「な、ならどうすれば……」

「あたしの感じでは、左半分が右半分に対して拒絶反応を、起こしています。なら、右半分も同じにすれば、あるいは」

絶え絶えになりながらもそれだけを伝えると何とか起き上がる。自分の身体の支配権が戻ってきているため、何とか邪魔にしかかっていない翼と尾をなるべく小さくして行動に支障が出ないようにする。

幾分軽くなったエリカはジーンの手を借りて立ち上がる。

「なら、このままもう戻った方がいいのかしら？」

バーバラが言った言葉に全員がハツとなる。

それはすなわち、エリカとの別れを意味しているのだから。龍の姿に戻れば、ここにいられるはずもない。

「……今はそれしかないでしょうね。クライムさんは生きてますか？」

「ああ、あつちで団長たちが様子を見ている」

ジャックが指差した方を見てエリカは安堵のため息をついた。

シルヴィアが彼らを守るために作り出していた氷壁は消えており、エリカの顔を見てあちらもひとまず安心したような表情をしている。エリカは肩を借りつつそこに歩み寄り、クライムの顔を見る。隣で先ほどイフォネアの攻撃を正面から受けたジャックが横たわっているが、命に別状がなさそうなのを見てホッとす。これでエリカが助かって仲間が死んでは意味がない。

「締まらない、ですよ。こんな体たらくでは」

「命あつてのものだね、ですよ。それよりもクライムさん、あたしを完全な姿に戻せます？」

「それはもちろん可能ですが……、良いのですか？ やろうと思えばヒトの身体に戻すことも不可能ではないですが」

クライムがそう言うとエリカは小さく首を横に振る。

「もう、自分でも分かります。この身体はもうドラゴンに戻ろうとしています。この左半身を見てもらえれば分かるでしょう？」

そう言うと全員が黙り込んでしまふ。

「……分かりました。ですが私一人では無理です。ファイア、ヒナ、セラ、協力を」

「………分かりました」「」

ヴィゴラスは目の前で起きていることがいまだに信じられなかった。

あれほど確実だと思っていた計画が、あれほど確信していた未来が、今日の前で脆く崩れ去るうとしているのが信じられなかった。

自分の身体も傷だらけ、骨が数本折れて内臓に突き刺さっているのが分かる。

（ありえない、あり得ないアリエナイあり得ないありえないアリエナイアリエナイあり得ない有り得ないあり得ないありえないあり得ない！！！）

幸いして奴らはこちらに一切の注意を払っていない。

ヴィゴラスはチラリと辺りを見渡す。

つい先ほどまで生きていた仲間たちの無残な死体が幾つも転がっている。その中には克蘭クのものもある。だが、今ヴィゴラスには彼らの姿はただのモノにしか見えていなかった。

こうなってしまった以上、ヴィゴラスに出来る事は少ない。

最小限の動きで魔法陣の状態を確認する。

拘束用の鎖は制御を離れてしまったようだが、他の部分は未だにヴィゴラスの支配下にある。

自分のポケットに先ほどクライムから拝借した血の入った試験管があるのを確認すると、ヴィゴラスはニヤリと笑った。

「……まだ、終わったわけじゃない」

まだ、俺の旅は終わってない。

それが、今のヴィゴラスを突き動かしていた。

第68話 「あたし"たち"」は「あたし」に戻る（後書

終わりが見えてきて何とかまるっと全てノーマルエンドで終わらせたいですね。

トゥルーエンドとかバッドエンドなんて想定していませんww

ノーマルエンドです。

大事な事なので2回言いました。

よくあるノーマルエンドです。

大事な事なので3回言いました。

ではでは、また次回。

第96話 エンジン>スラム (超豪華)

じせじせ ユン。

第69話 ドラゴンvsJ.T

「なっ、まだ生きていたのか！」

最初に気が付いたのはジャックだった。

振り返って魔法陣の中心を見ると、先ほどまで死んだとばかり思っていたヴィゴラスがフラフラとしながらも立っていた。

そしてその手にはエリカの血液が入った試験管。そして何かを呟いているのが遠目にも分かる。

「っ…！ ドラゴンになろうとしてるの!？」

「く、くくく、こんなポロポロの人間の身体のこちらから捨ててやる。そしてより強靱な身体を手にしてやる！」

ヴィゴラスの目はもはや狂気以外の何も映してはいなかった。自らの野望をいとも簡単に打ち砕かれ、仲間を失い、もはや正常な思考を彼に臨むことは出来ないだろう。

「ちいっ、こっちは4人手負いがいるのに!!」

ジーンが舌打ちする。

手負いとはもちろん、エリカ、ジャック、クライム、ユーリの事を指している。ジャックとユーリは意識を失っており、エリカとクラ

イムにしても1人で動けるほど軽い怪我の度合いではない。

「そこでゆっくり世界の支配者が変わるところを見ているがいい。もちろん、いの一発で殺してやるがな！」

ヴィゴラスが狂気に支配された高笑いをしながら試験管の栓を抜き、中身を一気に口の中へと流し込んでいく。

その瞬間、魔法陣がエリカの時同様眩く光り出す。

「くっ、シルヴィア！」

「ええ！」

遠距離からヴィゴラスを攻撃できるファイアとシルヴィアがそれぞれ火球と氷の槍を作り出すと魔法陣の真ん中で無防備に立っているヴィゴラス目掛けて投げつける。

だが、魔法陣を形成する魔力があまりにも大きかったために魔法陣に突入すると魔力と共に魔法陣に九州されてしまう。魔力で作りに出された魔法を魔力に還元するほどの濃密な魔力が魔法陣を覆い尽くしているため、もはやヒトが立ち入れるレベルではない。

「あそこに入ったら、普通の人間でも過剰放出を誘発させられてしまっわ！」

バーバラが叫ぶと全員が過去の出来事に意識を向ける。

あの場に立ち会っていないのはクライムとヒナ、セラだが、クライムの事だ、おそらくどこかから観測していただろう。

「……………妨害するのは、無理です。ですから、あの人がドラゴンになった後こそ、ドラゴンスレイヤーの出番です」

エリカが静かにそう呟く。

自分も一度はあの魔法陣の中心に据えられていたのだ。あの魔法陣がどのような性質を持っているのかは概要ではあるが把握している。非常に濃密な魔力のために遠距離からの魔法攻撃は不能、近接戦に持ちこもつと魔法陣に入れば過剰放出を起こして確実に死亡。

過剰放出への唯一の対抗策であろうエリカは重症とあって、今現在エリカたちに来る事は一切ない。

ヒナが斬撃ならば届くかと思い、屠龍を放つが霧散こそされなかったがヴィゴラスの直前で方向を強引に捻じ曲げられて直撃させることが出来ない。

「カカカ、分かる、分かるぞ。身体から力が溢れ出しているのが！」

ヴィゴラスの腕が、足が、顔が、胴体が、徐々に黒ずんでいく。そして不意に腕がボロリと肘の関節辺りから零れ落ち、魔法陣に飲みこまれる。だが、ヴィゴラスには既に痛覚すらないのか、それを見てもむしろ歓喜の笑い声をあげている。千切れて骨が露出した肘から黒々とした腕が伸び、ヒトのそれではない形に固まっていく。

服が破れてヴィゴラスの身体が露わになる。皮膚の下を骨が変形して蠢いているのが分かるほどだ。背中の皮膚を突き破って一對の翼が姿を現す。顔が徐々にヒトならぬ者へと変形していき、皮膚が徐

々に鱗に変わり始める。

「カカカ、……っ!？」

楽しそうに笑っていたヴィゴラスの半ば龍と化した顔が不意に凍りつく。

その間にも身体の変形は進み、徐々に身体が巨大化していく。もはや足、いや後ろ足だけでは立っていられなくなり、前足について自分の身体を支える。

「なんだ、これは。俺の意識が、俺が……っ!？」

「何が起こって……」

明らかに先ほどとは打って変わってヴィゴラスが焦っている。

それを見てエリカはしてやったりという表情をする。

「何が起こっているのか分かるのか、エリカ」

ヴァルトの問いにエリカは小さく頷く。

「ゲホツ、そもそも、ドラゴンとヒトは頭の造りが違うんです。急激な肉体の変化は当然脳にも影響を与えます。あたしの時も、随分とたくさん忘れました」

もしかしたら、それには「彼女たち」も入っていたのかもしれない。

エリカは苦痛に歪む表情で何とか笑みを浮かべてみせる。

「より強大な力を制御するにはより優秀な精神が必要です。……ヒトの精神がそれに耐えられるとは、思ってません」

「つまり、あいつは自我を失おうとしているのか？」

「そういう、事ですね。考えて行動されるより、よっぽど御しやすいです。……よっと」

エリカはそこまで言うと言貸してもらっていた肩から身体を放し、よろけながらも1人で立つ。踏ん張った瞬間に血が噴き出るが、黒鱗を皮膚に突き刺し内部で強引に止血してしまう。今さらこのポロポロの身体に未練を残している場合ではない。

「あたしも戦います。あと1回くらい、戦えます」

「無茶よ。私たちに任せなさい」

「そうですよ、エリカ殿」

後ろからセラに肩を掴まれるが、振りほどいてジーンとバーバラの間に入る。

「皆さんが戦っているのを見ている、と言う方がイヤです。接近戦は出来ませんが、この中途半端な身体のおかげで遠距離からも戦えますから、掩護します」

ドチャツという何かが床に落ちた音がして、そちらに目をやると血だまりの中に1頭の巨大な龍が佇んでいた。長大な尾で所構わず地面を叩き砕き、ボタボタと液体を口から垂れ流しながらエリカたち

「持たせます。あたしの名誉にかけて」

「……出し惜しみしてる場合じゃないわよね、少し寒くなるけど我慢して」

エリカの言葉に何か感じ取ったのか黙り込んでいたシルヴィアはそう言つと自らの氷の剣を變形させる。剣の刃が徐々に變形していき、いつぞやの試合で見せつけられた巨大な破城槌へと變形させる。氷で出来ているために強烈な冷気を周囲にまき散らしている。

「あたしに当てないでくださいよ？」

半ば冗談交じりにエリカはシルヴィアの巨大な氷の槌を見つめる。

「大丈夫、外そうにも外せないほどの大物が目の前にいるから」

「あいつもエリカみたいに硬い鱗を持っているのか？」

ジーンの言葉に全員が「あっ」という表情をする。

確かに、もしヴィゴラスだつたあの龍が黒鱗のような鱗を持っていたら、対抗できる武器はジーンの大剣しかない。先ほどはエリカの精神状態もあつてジャックの大剣やヒナの刀でも貫通したが、今度もそうとは限らない。

だが、その不安はエリカが解消する。

「あたしの血を飲んだからといって、あたしの力が手に入るわけはありません。ドラゴンですから鱗は固いでしょうが、十分撃破可能なはずです」

「なるほど、やはり個々のドラゴンで性質は違うのか。剣が通用するなら私も足手まといにはならず済みそうだな」

「同感です。シータス騎士団の名にかけて、無様な戦いは出来ません」

そう言うヴァルトとセラは目の前の巨大な龍を見上げる。外へと通じる通路は当然ながらこの巨体では通れない以上、ヴィゴラスが外へ出るためには天井に開いた穴から出るしかない。穴はその巨体をくぐらせるには若干小さいようだが、勢いをつけて突っ込めば強引に外へ出る事も可能だろう。

「ドラゴンとは皆初陣だ。訓練を思い出せ」

「ヴァルトこそ、ブランクが長かったんじゃない？」

バーバラがヴァルトにそんな事を言うが、その表情はヴァルトの参戦を喜んでいるようにしか見えない。

「お前に比べたら私はおじいちゃんかもしれないが、まだまだ若い者に負ける気はないから安心しろ」

ヴァルトもニヤリと笑みをバーバラに返す。

「それじゃ、行きましようか」

バーバラの言葉に全員が頷き、次の瞬間にはバーバラ、ジーン、ヴァルト、シルヴィア、ヒナ、セラが目の中の巨体目掛けて駆け出していた。

自我を失った龍と化したヴィゴラスには、もはや人間らしさの欠片も残っていないようだった。バーバラたちが自らに向かって剣を向け、走り出したのを見て一度大きく雄叫びを上げると、広いドームの中を動き始める。

動き自体はそれほど敏捷ではなく、簡単に背後に回り込む事も出来た。

だが、回り込んだ先にそれを待っていたかのように長大な尾が待ち構えていた。太く固い尾を鞭のようにしならせて回り込んできたバーバラを叩き潰そうとする。龍は背後を見ていないところを見ると、感覚だけでバーバラの位置を掴んでいるようだった。バーバラが飛び退いてその一撃を避けると、一瞬前までいた床に尾が叩き付けられて床が砕け散る。

「動きは鈍重だけれど、一発食らえばアウトね！」

苦笑いしながらバーバラは自らをつけ狙う尾の攻撃を避けつつ弱点になりそうな場所を探す。

何しろ身体が巨大だけに弱点を探すのも一苦労だ。しかも相手は非常に高い位置から見下ろしているため、背後はともかくとして非常に広い視野を持っている。何かしようにもほぼ確実に龍の視界に入ってしまう。その背後にしても、今バーバラが陥っているように牽制されて近づけない状況だ。

（自我を失ったのなら冷静に攻撃しないで突っ込むものでしょうに！）

内心で龍の冷静な戦い方に舌打ちしながらもバーバラは走り続ける。

「的が大きいのは幸いだけれど！」

そう言ったのはシルヴィアだ。

巨大な氷槌を振りかぶる様に操ると真正面にある龍の顔面目掛けて振る。距離があろうとそんなものはシルヴィアには関係ない。足りないのなら氷を継ぎ足してしまえばいい、という考え方がシルヴィアには出来る。エリカにもダメージを与えるほどの一撃、だが、今回はその比ではない大きさだ。おそらくあの槌の攻撃で耐えられる建造物はないのではないか、と思わせるほどだ。

その一撃を顔面に避ける事もなく龍は受ける。長い首が衝撃を吸収するために大きくしなるが、シルヴィアの攻撃はそれだけでは終わらない。

「凍れ！」

氷槌の直撃を受けた部位から龍の表面が凍り始める。一瞬龍が怯むようなそぶりを見せるが、一度大きく首を振るといとも簡単に氷が砕ける。

「くっ、厚みのない氷の段階で暴れられた動きを止められない！」

「やり続けなさい、シルヴィア！ エリカ、あなたたちに急所みたいなものはないの！？」

バーバラは龍を挟んで反対側にいるエリカにも聞こえるくらいの大声を上げる。

エリカは刀の一本を杖代わりに立っていたが、バーバラの言葉に龍のある一点を指差した。

「狙うなら、翼の付け根です！ あそこは鱗がないですから長い得物なら内臓まで届きます！」

「よし、俺が行く！」

ジーンがそれを聞いて勢いよく龍の懷に飛び込む。龍はそれに気が付いて前足の鋭い爪でジーンを切り裂こうとするが、その直前に顔面に炎の垂れ幕のようなものがまとわりついて龍から視界を奪う。炎の垂れ幕はセラが作り出しており、氷と違って振り払う事が出来ずに龍が何とか振りほどこうと首を振り続けるが、その間にジーンは前足を器用に上って龍の背中に乗る。

暴れる龍の背中は安定せず、ちよっと油断すれば吹き飛ばされそう

になるがジーンは必死にそれを堪えて翼の付け根へと進む。

それでも龍はジーンが自らの身体をよじ登った事に気が付いて身体を大きく震わせる。そして炎で視界を奪われながらも首を回すと背中を見せているジーンに向けて牙を剥く。

「させるか！」

「隙だらけよ！」

ヴァルトとバーバラがほぼ同時に叫び、ヴァルトはその巨大な前足の鱗の隙間に剣を突き刺し、バーバラは忌々しい尾をタイミングを合わせて受け流すと大きく振りかぶってその尾を斬る。

前足の鱗の隙間から血が吹き出し、尾も切断こそされなかったがそれは骨があったからと言った感じで、半ばまで切り裂かれて大量の血が流れ出す。

龍が大きく雄叫びを上げるが、それには耳も貸さずその間にジーンは翼の付け根の鱗が無い場所にたどり着く。

そして間髪入れずに大剣を逆手に持ちかえると龍に深々と突き刺す。その瞬間、前足や尾の比ではない量の血がさながら噴水のように吹き出す。

「よし……、うお!？」

龍にダメージを与える事が出来て一瞬気が抜けたのか、大暴れした龍に振り払われてジーンが床に落ちてくる。滞空時間が長く体勢を整えて着地すると、すぐ上に龍の巨大な足が迫っていることに気が

付く。

「ぬおおおっ！！！」

着地して止まっている暇もなく走り出しその振り下ろされた足を避けると一度距離を取って龍の状態を確認する。

「ダメージは入っているんだが、死ぬ心配が無いのはどうにか出来ないかしら……」

これだけ見ていると、龍は一方的に襲われているようにも見える。

だが、見た目的にはかなりの出血があり、それなりのダメージを受けている龍は「痛がって」「はいるのだが」「苦しんで」「はいないように見える。」

ようやく炎の幕を振りほどくとそこには怒りに満ちた一対の眼があった。

龍はそこで一度首をのけ反らせると口を開く。

「っ！！ あたしはできない事をつ。火を吹く気です！ シルヴィアさん、防御！！！」

エリカはそれが何の前兆であるか手に取る様に分かり、舌打ちしながらも叫ぶ。

ほぼ密室に近いこのドーム内で炎を吹かれればドーム内は焼き尽くされる。そうなってはいかに頑強な人間でも肺を焼かれて死んでしまふ。素早くシルヴィアに全員を守るよう伝え、シルヴィアも即応

して床から氷を噴出させると全員を包み込んで自分も守る。シルヴィアの氷は透過性が非常に高いため氷越しても外の様子は手に取る様に分かる。そのおかげで今まさに火を吹かんとする龍の姿も見える。

そして、龍は火を吹いた。

轟っという音が一番似合う炎の柱が口から床に向かって伸び、床にぶつかると同時に全範囲へと広がり氷に守られた全員を飲みこむ。瞬く間に氷が蒸発するためシルヴィアが次から次へと氷を補充して補強していくが、それすらも間に合わないくらいの勢いだ。

（くっ、この火力はまるで將軍ですね！！）

エリカはその劫火とも言えるほどの攻撃にどこか懐かしさすら感じてしまった。

思い出されるのはいつも自分について来てくれた龍。

（ですが、火力だけでは……！！）

そう、いくら火力が強くても見境なしにやっつけているシルヴィアの氷の盾は貫けない。範囲攻撃は万遍なくエリカたちを攻撃しているが、1人ずつ見れば耐えられないレベルではない。これが1人ずつ集中して攻撃されていたのなら各個撃破もあつたかもしれないが、幸いして目の前の龍にそこまで考えられる知性はないようだ。

徐々に氷が薄くなり熱が伝わってくるが、完全に溶けてしまう前に龍の方が音を上げ口を閉じる。

「今！」

口を閉じ、一瞬隙を見せた龍に対してエリカは叫び、自らの左手から5本の黒鱗を伸ばす。それぞれが独立して伸びていき、四肢と首を貫通して抜けないように先端を折り曲げる。

首を貫通して龍が雄叫びを上げるが、やはり決定打には届かない。龍が後退すればそれに引きずられてエリカも床をズルズルと進んでしまうが、踏ん張れない。あまりに力の差がありすぎるのだ。

だが、エリカの攻撃で龍が攻撃から防御に転じたのは明らかだった。敵が防御に転じたのなら、この機に攻撃しない手はない。ヒナがエリカが伸ばした黒鱗の1つ、喉へと伸びる黒鱗に飛び乗ると綱渡りのように走り喉元へと到達する。丁度顎の下で龍は妨害できず、身体を大きく揺さぶってヒナを黒鱗から落とそうとする。

「その程度で私を止められるとでも？」

ヒナは常人ならばほぼ確実に振り落されているであろう動きにも対応してみせた。人間離れた、人狼の生まれ持ったバランス感覚が成せる技なのだろうか。一度も姿勢がぶれることなくヒナは喉元に到達する。

そして黒鱗から飛び降りると同時に刀を振りかぶり、龍の喉を一気に下まで切り裂く。

鱗のおかげで肉を斬るだけにとどまったが、それでも遠くからでも分かるほど長い傷痕が龍の喉に刻まれた。

「まだまだ！」

だが、それでヒナの攻撃は終わらない。床に着地すると驚異的な脚力で今度は飛び上がって下から斬り上げる。さらに跳躍の頂点に達するとその場で重力に引かれつつも屠龍を放つ。

三度同じ場所に斬撃を受けた龍が強引に首を回して自由落下しているヒナを顔の横で吹き飛ばす。

「ヒナさん！」

どっちが無茶をやっているのか分からなくなってしまう。徹底的に喉を集中狙いしたヒナが壁に衝突する前にエリカは格納していた翼を広げてクツション代わりにする。勢いよくヒナが翼に衝突するとエリカの背中ではメキツという嫌な音を立てたが、そんな事はお構いなしに踏ん張ってヒナを受け止める。

既にエリカの身体は限界に近い。一挙一動でエリカの身体が悲鳴を上げているのが分かる。

（でも、まだ戦える！）

それでも、エリカの戦意は喪失されない。

まだ、戦いは終わっていないのだから。

第69話 ドラグーンvsJ.T（後書き）

はい、そんなこんなで最終決戦？ みたいな感じになっております。

そしてエリカの左手のイメージがどうしてもD灰の白髪の子になっ
てしまう…

いや、実際頭の中のイメージは完全に独立しているんですが、想像
してもらった時はあれが一番分かりやすいかもしれませんね。

ではでは、また次回。

ご感想などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4815u/>

Dragon's Journey <ドラゴنز・ジャーニー>

2011年11月16日18時08分発行